ＩＳＳＮ　０９１８－９９０４

横尾墳墓群 (中・近世墓) 発掘調査報告

研究紀要第18－2号

2009（平成21）年3月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、三重県教育委員会が日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した近畿自動車道関・伊勢線第８次区間（久居～勢和）建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査のうち、昭和60年度（現地調査：昭和60年7月1日～昭和61年2月27日）に実施した横尾墳墓群（所在地：松阪市伊勢寺町字横尾）の発掘調査に伴う出土品及び記録類を再整理し、その成果をまとめたものである。

2　現地調査は三重県教育委員会が主体となり、文化課主事の宮田勝功と田阪仁が担当した。報告書作成の各種作業には三重県埋蔵文化財センター職員があたり、執筆者名は文末に記した。

3　この報告書の作成にあたり、遺物洗浄・実測・トレース・写真撮影のほか、パソコンでの各種処理作業等、これまでにさまざまの室内整理作業には下記の方々のご協力を得た。（敬称略・五十音順）

足立純子、有川芳子、石橋秀美、伊藤裕偉、稲本賢治、井村浩子、江尻健、大川操、大西友子、奥山由美、小倉靖子、柿原清子、角正淳子、角谷泰弘、河北秀実、菊池淳子、楠純子、小坂宜広、小林佳代子、近藤豊美、須賀幸枝、鈴木美智子、孝久由希子、竹内英昭、竹田憲治、田中久生、谷久保美知代、田村陽一、中川明、中川章代、新田洋、野崎栄子、野田修久、浜崎佳代、平井治代、廣田洋子、堀さや子、松本春美、森貴子、山上由香、山崎恒哉、山本紀子、脇葉輝美。

4　当該遺跡の現地調査、遺物整理作業等に当り、多数の方々からご指導、ご助言をいただいた。主な方々のみ記して謝意を表することをご了解願いたい。（敬称略・五十音順）

赤羽一郎、井上喜久男、磯部克、伊藤久嗣、柴垣勇夫、白石太一郎、田中琢、藤沢典彦、藤沢良祐、水野正好、山折哲雄（研究会座長・当時）、（故）山村宏、吉井敏幸。

5　なお、人骨の鑑定を京都大学霊長類研究所教授（当時）の江原昭善先生に、また焼成土壙焦土の熱残留磁気測定を富山大学の広岡公夫先生に依頼し、今回はその調査結果を旧稿のままで付篇として収録させていただいたことをお断りしておきたい。

6　当該遺跡の調査概要は『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』『同概報Ⅲ』（1986年、1987年、三重県教育委員会編）の他、『歴史手帖』（14巻11号、1986年、名著出版）、及び『佛教藝術』（182号、1989年、毎日新聞社）等にも投稿したが、本書を以って最終報告とする。

7　本書で報告した発掘調査記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

8　本書で使用の遺構表示記号は下記のとおりとする。遺構実測図作成には日本道路公団の工事用杭を用い、調査担当者の測量に基づき国土座標を算出した。調査対象地域は第Ⅵ系に属す。方位の表示は座標北を用い、標高は上記工事用中心杭を基準とした。

なお、文中に用いた略記号等は下記のとおりである。

ＳＤ：溝（周溝）、　ＳＫ：土抗（壙）、　ＳＸ：出土人骨ないし納骨墓坑、　Ｐ：ピット

（川原石を用い方形または円形に囲む配石区画を一単位とする墓を、現地調査時にはＳＲ番号で表記したが、旧称を廃して１号墓、２号墓、のように表記した。また、一般的には「土抗」を用い、墓には原則「土壙」を用いた。）

目　次

調査日誌抄…… 1
Ⅰ．前言 …… 3
Ⅱ．遺跡の立地 …… 3
Ⅲ．基本的層序 …… 4
Ⅳ．遺構篇 …… 4
（一） 調査区の設定について …… 4
（二） 各地区の特徴 …… 4
（三） Ａ地区の遺構 …… 5
（四） Ｂ地区の遺構 ……36
（五） Ｃ地区の遺構 ……43

Ⅴ．遺物篇 ……46
（一） 石器 ……46
（二） 土器 ……47
（三） 金属製品 ……52
（四） 石製品・石塔類 ……53
（五） その他 ……57

Ⅵ．まとめ ……57
（一） 縄文人の痕跡 ……57
（二） 経塚の可能性 ……58
（三） 土坑群の出現と性格 ……58
（四） 火葬施設ＳＫ558と点火次第 ……60
（五） 配石区画墓の初現 ……62
（六） 配石区画墓の納骨形態 ……62
（七） 「土饅頭」と墳丘状特殊遺構 ……63
（八） 墓群と石塔の関係 ……64
（九） 横尾墳墓群の存続期間（推考） ……65

Ⅶ．文献資料篇 ……67
（一） 荒井勘之丞『寄墓日記』について ……67
（二） 女男坂と国分尼寺跡 ……68
（三） 複数村による「惣墓所」 ……69

Ⅸ．附篇（１） ……70
三重県・横尾墳墓群出土の火葬人骨について……70

Ⅹ．附篇（２） ……72
横尾墳墓群の考古地磁気測定……72

挿図目次

第１図　西南日本の過去2,000年間の考古地磁気永年変化と横尾墳墓群Ａ地区の考古地磁気測定結果 ……74
第２図　西南日本の過去2,000年間の考古地磁気永年変化と横尾墳墓群Ｂ地区の考古地磁気測定結果 ……74
第３図　横尾墳墓群遺跡位置図 ……77
第４図　遺跡地形図 ……78
第５図　調査前地形測量図（Ａ地区） ……79
第６図　調査前地形測量図（Ｂ地区） ……80
第７図　調査前地形測量図（Ｃ地区） ……81
第８図　Ａ地区上層遺構平面図区割り図 ……82
第９図　Ａ地区上層全体遺構平面図 ……83
第10図　Ａ地区上層部分遺構平面図 ……85
第11図　Ａ地区上層部分遺構平面図 ……86
第12図　Ａ地区上層部分遺構平面図 ……87
第13図　Ａ地区上層部分遺構平面図 ……88
第14図　Ａ地区上層部分遺構平面図 ……89
第15図　Ａ地区上層部分遺構平面図 ……90
第16図　Ａ地区上層部分遺構平面図 ……91
第17図　Ａ地区下層全体遺構平面図 ……92
第18図　Ａ地区下層遺構平面区割り図 ……93
第19図　Ａ地区下層部分遺構平面図 ……94
第20図　Ａ地区下層部分遺構平面図 ……95
第21図　Ａ地区下層部分遺構平面図 ……96
第22図　Ａ地区下層部分遺構平面図 ……97
第23図　Ｂ地区全体遺構平面区割り図 ……98
第24図　Ｂ地区全体遺構平面図 ……99
第25図　Ｂ地区部分遺構平面図 …… 101
第26図　Ｂ地区部分遺構平面図 …… 102
第27図　Ｂ地区部分遺構平面図 …… 103
第28図　Ｃ地区全体遺構平面図 …… 104
第29図　Ｃ地区全体遺構平面区割り図 …… 105
第30図　Ｃ地区部分遺構平面図 …… 106
第31図　Ｃ地区部分遺構平面図 …… 107
第32図　Ｃ地区部分遺構平面図 …… 108
第33図　Ｃ地区部分遺構平面図 …… 109
第34図　Ａ地区個別遺構実測図 …… 110
第35図　Ａ地区個別遺構実測図 …… 111
第36図　Ａ地区個別遺構実測図 …… 112
第37図　Ａ地区個別遺構実測図 …… 113
第38図　Ａ地区個別遺構実測図 …… 114
第39図　Ａ地区個別遺構実測図 …… 115
第40図　Ａ地区個別遺構実測図 …… 116
第41図　Ｂ地区墳丘墓土層断面図 …… 117
第42図　Ｂ・Ｃ地区個別遺構実測図 …… 118
第43図　石鏃ほか遺物実測図 …… 119
第44図　須恵器ほか遺物実測図 …… 120
第45図　三筋壺ほか遺物実測図 …… 121
第46図　山茶碗ほか遺物実測図 …… 122
第47図　和鏡ほか遺物実測図 …… 123
第48図　土師器鍋ほか遺物実測図 …… 124
第49図　土師器皿ほか遺物実測図 …… 125
第50図　刀子ほか遺物実測図 …… 126
第51図　鉄釘ほか遺物実測図 …… 127
第52図　古銭拓影ほか遺物実測図 …… 128
第53図　空風輪石塔実測図 …… 129
第54図　火・水輪石塔実測図 …… 130
第55図　地輪石塔実測図 …… 131
第56図　一石五輪塔ほか実測図 …… 132

＊第10～16、19～22、25～27、30～33図は縮尺1：100である。

挿表目次

第１表　各墓域ごとの人骨保存状況 …… 71
第２表　人骨保存状況
　（各墓域間における比較） …… 71
第３表　性・年令別分類表 …… 71
第４表　Ａ地区　ＳＫ570の磁化測定結果 …… 75
第５表　Ａ地区　ＳＫ501の磁化測定結果 …… 75
第６表　Ａ地区　ＳＫ567の磁化測定結果 …… 75
第７表　Ａ地区　ＳＫ568の磁化測定結果 …… 75
第８表　Ａ地区　ＳＫ558の磁化測定結果 …… 75
第９表　Ａ地区　ＳＫ581の磁化測定結果 …… 75
第10表　Ｂ地区　ＳＫ668の磁化測定結果 …… 75
第11表　Ｂ地区　ＳＫ608の磁化測定結果 …… 75
第12表　横尾墳墓群の考古地磁気測定結果 …… 75
第13表　Ａ地区検出　配石区画墓一覧表 …… 133
第14表　Ｂ地区検出　特殊遺構
　（墳丘状盛土遺構） …… 150
第15表　Ａ地区検出　土坑群一覧 …… 150
第16表　Ｂ地区　土坑群一覧 …… 155
第17表　Ｃ地区検出　土抗群一覧 …… 161
第18表　出土遺物観察表
　縄文時代の遺物 …… 165
第19表　出土遺物観察表
　古墳～室町時代の遺物 …… 165
第20表　出土刀子類観察表 …… 178
第21表　出土鉄釘観察表 …… 179
第22表　出土銭貨観察表 …… 180
第23表　石塔計測部位凡例 …… 185
第24表　Ａ地区組立式五輪塔一覧表 …… 186
第25表　Ａ地区三輪一石・
　二輪一石五輪塔計測値一覧 …… 204
第26表　Ａ地区一石五輪塔計測値一覧 …… 209
第27表　Ｂ地区石塔計測値一覧 …… 212

写真目次

第１図　Ａ地区・Ｂ地区の全体航空写真 …… 217
第２図　Ａ地区調査前全景（南から）、
　Ａ・Ｂ地区全景斜め写真 …… 218
第３図　Ａ地区上層遺構全景（南から）、
　Ａ地区北尾根テラス状墓域 …… 219
第４図　Ａ地区残存墓道の一部、
　山頂部182号墓付近、13号墓ほか 220
第５図　Ａ地区58号墓、220号墓、351号墓ほか
　各種配石区画墓など …… 221
第６図　Ａ地区406号墓、413号墓、423号墓、
　243号墓ほか …… 222
第７図　Ａ地区土壙SK531、火葬施設SK558、
　Ｂ地区墳丘Ａ・墳丘Ｂなど …… 223
第８図　Ｂ地区墳丘Ｃ、土坑群、
　Ｃ地区土坑SK788、SK828など …… 224
第９図　Ｂ・Ｃ地区出土縄文遺物、
　Ａ地区出土転用蔵骨器など …… 225
第10図　Ａ地区出土山茶碗、常滑産甕、
　土師器鍋、皿類など …… 226
第11図　Ａ地区出土土師器皿類、和鏡、
　常滑大甕、刀子など …… 227
第12図　古銭、人骨、石英、貝がら及び
　組立式五輪塔の空風輪各種 …… 228
第13図　組立式五輪塔の各種火輪 …… 229
第14図　組立式五輪塔の各種水輪 …… 230
第15図　組立式五輪塔の各種地輪 …… 231
第16図　三輪一石・二輪一石及び
　各種一石五輪塔 …… 232
第17図　宝篋印塔相輪部及び笠部、石仏、
　現地説明会風景ほか …… 233

調 査 日 誌 抄

昭和60年(1985年)

7月1日 (月) 晴　土工部門委託業者入札決定。現地打合せ。調査作業方法の協議、確認。地元自治会等挨拶（４日まで)。

4日 (木) 晴　現地ﾌﾟﾚﾊﾌﾞ事務所設置。

5日 (金) 晴　調査前遠景写真撮影。

8日 (月) 晴　安全作業等注意事項指示。伐開清掃開始。地形測量基本杭設置。

10日 (水) 一時雨　図面№5平板測量了。

13日 (土) 晴　図面№4平板測量了。

16日 (火) 晴　図面№1平板測量了。道路公団(名古屋)新任課長他４名視察。

18日 (木) 猛暑　図面№2平板測量了。地区杭設置(東西Ａ～Ｕ、南北５～60)。

19日 (金) 晴雷雨　図面№7平板測量了。

23日 (火) 晴　ﾛｰﾘﾝｸﾞﾀﾜｰ設置。図面№6平板測量了。

24日 (水) 晴　Ａ・Ｂ地区伐開清掃終了。両地区全景写真撮影。Ａ地区北斜面作業用足場設置。Ａ地区表土掘削、配石区画遺構検出開始。刀子、人骨等出土。

26日 (金) 晴　作業安全管理厳重注意。危険区域設定。五輪塔取上げ開始。

27日 (土) 晴　図面№8平板測量了。

29日 (月) 晴　Ａ地区Ｌ17で蔵骨器出土。

30日 (火) 猛暑　文化庁記念物課黒崎直氏ほか３名視察。

31日 (水) 晴　図面№9・10平板測量了。

8月2日 (金) 晴　図面№11平板測量了。

6日 (火) 雨　個別遺構平面図作成、写真撮影開始。文化課長他７名視察。

9日 (金) 一時雨　ＣＢＣテレビ映画社５名打合せ来訪。

19日 (月) 晴　図面№12平板測量了。

20日 (火) 晴　図面№13平板測量了。ＣＢＣテレビ映画社現場撮影。

8月21日 (水) 一時雨　Ａ地区25％配石区画遺構検出了。国立歴史民俗博物館白石太一郎氏ほか３名視察。

22日 (木) 晴　図面№14・15平板測量了。

23日 (金) 晴　Ａ地区Ｎ19で和鏡出土。

24日 (土) 晴　Ａ・Ｂ・Ｃ地区調査前地形測量全て終了。

27日 (火) 晴　Ａ地区で連日配石遺構、五輪塔、人骨等累々検出。毎日新聞記者取材。

29日 (木) 曇　抜根作業開始。

9月3日 (火) 晴　Ａ地区遺構検出。五輪塔採取続行。Ｂ地区にトレンチ調査入れる。

4日 (水) 晴　道路公団松阪事務所副所長視察。

5日 (木) 晴　Ａ地区Ｌ16で石垣、多数の五輪塔を検出。

10日 (火) 晴　Ｂ地区墳丘状遺構にｾｸｼｮﾝ設定。

11日 (水) 晴　ＮＨＫ取材。一志郡社会教育主事会見学。元興寺文化財研究所吉井敏幸氏、藤沢典彦氏視察。

12日 (木) 曇　道路公団名古屋支局課長他視察。Ｂ地区調査区域設定、重機導入抜根・表土掘削、遺構検出開始。航空撮影準備協議。

20日 (金) 晴　Ａ地区残土処分開始。

21日 (土) 曇　セスナ機による航空撮影。

26日 (木) 晴　Ｂ地区墳丘状遺構断面図作成開始。

27日 (金) 曇　田阪・宮田は静岡県磐田市一ノ谷中世墓群発掘調査現場を現地見学。

10月1日 (火) 晴　奈良大学教授水野正好氏視察。Ａ地区東側斜面にトレンチ。

2日 (水) 晴　Ｂ地区墳丘状遺構断面図終了。

8日 (火) 晴　Ａ地区航空測量用杭打ち。Ａ地区墳丘状遺構断割り、断面図作成開始。

10月14日 (月) 晴　奈良大学助手植野氏、県教育委員会総務課長・文化課長他視察。

15日 (火) 晴　京都府精華町教育委員会社会教育課長他４名視察。

18日 (金) 晴　橿原考古学研究所調査課長泉森皎氏視察。

21日 (月) 晴　毎日新聞記者取材。

22日 (火) 晴　毎日新聞記者取材。三重大学教授八賀晋氏他４名視察。Ｂ地区土壙断面図作成開始。

23日 (水) 晴　一宮市教育委員会岩野見司氏ほか３

名視察。

24日 (木) 晴　Ｂ地区土壙断面図終了。県内埋蔵文化財担当者ほか53名視察。

25日 (金) 晴　道路公団松阪事務所長他３名視察。Ｂ地区土壙ｾｸｼｮﾝ撤去。

29日 (火) 雨　対航空測量業者現地説明会。

11月１日 (金) 晴　三重大学名誉教授服部貞蔵氏ほか５名視察。

８日 (金) 晴　Ａ・Ｂ地区写真撮影。道路公団名古屋建設局次長ほか３名、県土木部長他視察。航測業者営業課長ほか現地下見。

９日 (土) 晴　Ａ・Ｂ地区写真撮影。

11日 (月) 晴　航測業者事前打合せ。航測用ﾀｰｹﾞｯﾄ設置。

12日 (火) 曇　Ａ・Ｂ地区清掃。写真撮影。

13日 (水) 晴　強風のため航測撮影不可、15日に延期。

14日 (木) 晴　Ａ・Ｂ地区写真撮影。

15日 (金) 晴､強風 航測撮影再度延期。

16日 (土) 曇　航測撮影敢行。午後発掘成果現地説明会開催、130名参加。

19日 (火) 晴　配石区画遺構の石撤去作業開始。

20日 (水) 晴　松阪市役所建設部長ほか２名視察。

25日 (月) 晴　Ａ地区下層遺構検出開始。

26日 (火) 晴　Ａ地区下層土壙個別図面作成及び遺物取上げ開始。

29日 (金) 晴　Ａ地区下層遺構写真撮影開始。Ｂ地区土壙図面補足作業。

12月３日 (火) 晴　Ｂ地区だめ押しトレンチ調査。

５日 (木) 晴　Ｂ地区墳丘状遺構断割り調査、Ｃ地区確認トレンチ調査開始。

12日 (木) 晴　Ｃ地区確認トレンチ調査終了。

18日 (水) 晴　Ｂ地区墳丘状遺構断面図作成、及び墳丘基底部調査終了。

19日 (木) 晴　Ａ地区下層遺構検出だめ押し作業開始。

25日 (水) 晴　Ａ・Ｂ地区写真撮影開始。

27日 (土) 晴　Ｃ地区土工部門委託業者決定。（年末年始休業）

昭和61年(1986年)

１月６日 (月) 晴　Ｃ地区土工部門委託業者現地打合せ。

７日 (火) 晴　Ａ・Ｂ地区調査後現況地形測量開始。

11日 (土) 晴　地形測量図面№１終了。

14日 (火) 晴　地形測量図面№２終了。

19日 (土) 晴　Ｃ地区表土除去開始。

20日 (月) 晴　地形測量図面№３終了。

21日 (火) 晴　地形測量図面№４終了。Ｃ地区遺構検出、縄文時代早期土器(押し型文)破片出土。

22日 (水) 曇雪　地形測量図面№５終了。

25日 (土) 晴　委託業者との最終打合せ。

２月６日 (木) 晴　Ｃ地区遺構検出、遺構掘削・埋土除去作業終了。

７日 (金) 晴　Ｃ地区清掃作業。

８日 (土) 晴　Ｃ地区写真撮影開始。

12日 (水) 晴　Ｃ地区地形測量用杭設定。

13日 (木) 晴　Ｃ地区調査後現況地形測量開始。

17日 (月) 晴　Ｃ地区地形測量終了。

18日 (火) 雪　Ｃ地区だめ押し調査。

21日 (金) 小雪　Ａ・Ｂ地区土工部門委託業務完了現地検査実施。

25日 (火) 晴　Ｃ地区写真撮影終了。

26日 (水) 晴　静岡県埋蔵文化財センター平野吾郎、佐野五十三氏現地視察。

27日 (木) 晴　Ｃ地区遺構レベル測量完了。

３月19日 (水) 晴　現場ﾌﾟﾚﾊﾌﾞ事務所撤去。現地調査終了。

３月30日 (日) 晴　静岡県磐田市で開催のシンポジウム「中世墳墓を考える」（同実行委員会主催）に参加・報告（田阪 仁）。

８月29日 (土)　国立歴史民俗博物館共同研究会「日本における基層信仰の研究」（座長 山折哲雄教授）で調査概要報告（田阪 仁）。

12月３日 (水) 晴　１年以上を経て悪条件ながら、熱残留磁気測定用ｻﾝﾌﾟﾘﾝｸﾞの採取・測定を富山大学広岡公夫教授に依頼した（新田 洋ほか現地同行）。

平成２年

11月28日 (水)　京都大学霊長類研究所の江原昭善教授による出土人骨の鑑定。（補助員 奥山由美）

Ⅰ．前言

既に、『近畿自動車道第８次区間（久居～勢和間）の発掘調査報告書』第１分冊（1989年３月）および第２分冊１・２（1990年３月）において、（１）調査に至る経緯、（２）調査及び整理方法、（３）調査体制等の具体的な詳述がある（1～6頁）。当該横尾墳墓群（中世墓群）の発掘調査もその一環に含まれており、（１）～（３）は他と変るところがない。紙幅の都合上、ここには重複を避け省略に従う。

Ⅱ．遺跡の立地

当該遺跡を取り巻く「位置と歴史的環境」も、既に上記第１分冊の１（13～19頁）、および第２分冊の１（7～10頁）と２（7～8頁）に、河瀬信幸、田村陽一、新田洋の三氏がそれぞれ過不足なく詳述している。これも両書に譲ることにして、ここでは横尾墳墓群の立地のみを簡略に記述する。

当該遺跡の所在地は松阪市伊勢寺町字横尾という。ＪＲ松阪駅から西南西方向へ直線距離にして約6.25㎞離れた山頂にある。松阪市丹生寺町で、国道166号線に沿った阪内川にかかる三郷橋を渡り、北西方向に走る県道丹生寺一志線（松阪第二環状線）で嬉野方面に向かう途中の左手山中にある。

三郷橋から約２㎞、松阪市岡山町（旧県道沿いの五輪峠の手前約520m付近）で、左手の山道に入って坂道を登る。なだらかな山道を進むこと約250m程で分岐点に達し、右折してクランク状の坂道を経て、尾根筋上の山道を約380m程登ると、標高119.7mの山頂に出た（近畿自動車道により消滅した）。ちょうど西側に聳える堀坂山（標高757m）の尾根筋の一つが、堀坂川の右岸で東方に向かって葉脈状に分岐しながら延びるが、その最先端部のひとつに位置する。概ね北緯34°33′26″、東経136°28′23″付近である。

伊勢富士と呼ばれる堀坂山と観音岳を開析してＶ字型の谷間をつくった堀坂川は、東流して平野部に開口し、扇状地を形成した。当該遺跡の北東側麓に位置する伊勢寺はその扇頂部に拓かれた集落である。川は集落を貫流して三渡川に合流し、伊勢湾に注ぐ。川の左岸には伊勢寺廃寺跡があり、奈良・平安時代から栄えた地域であった。当地域には物部神社や、三輪大神を勧請したと思われる大神神社なども近隣にあって(註1)、阿坂（アザカ）とも隣接する歴史的に重要な地域であった。当遺跡の西方約500mには伊勢寺城跡があり、『勢陽五鈴遺響』などは「小管備後守住ス又後ニ久瀬五郎左衛門尉住セリ」といい、中世城館には違いないが、北畠氏の配下にあった危急時の砦跡であろう。

従って、永禄12（1569）年の織田軍による南伊勢侵攻に際し、それを迎え撃った北畠具教が本拠を霧山城（津市美杉町多気）から松阪の大河内城に移したこともあり、至近距離にある伊勢寺城にもいち早く攻撃の手がのびたと想像できる。当山Ｂ・Ｃ地区に累々とあった火葬土坑は、そういう時代背景をも考慮してみておく必要がある（註2)。

山頂（Ａ地区）から東方伊勢湾への眺めは素晴らしく、眼下に伊勢平野を望み、晴天には知多半島、渥美半島や伊良子岬・神島までも眺望することができた。恐らく中世墓が造られた当時ならば、富士山をも遠望できたに違いない。当中世墓群は、当初からその見晴らしのよい山頂付近～東斜面を中心に造営された。そして、背後の堀坂山それ自体が、広く南勢地域の農耕民から信仰を集めた神名備山であったと思う。山頂には今も近世の石造経塚が建っている。この山の形は眺める場所により大きく異なるが、南勢櫛田方面から眺めたときが最も秀麗な円錐形に見え、しかも、春分の日の頃には観音岳との間に太陽が沈む（奈良の二上山をふと思わせた)。南勢地域の漁民たちが山見にも使った霊山である。当中世墓群の死者たちはそういう山の一支脈に葬られたのであった。

註1　式内社研究会編『式内社調査報告』第六巻、東海道1、1990年、伊勢国飯高郡647頁～656頁（小林裕八執筆)。勧請の時期は不明だが、三輪神の地方への分祀・勧請が「およそ六世紀から七世紀中葉ころまでに行われた現象」とする見解がある（前田晴人著『三輪山』学生社、2006年、第二章34頁参照)。

註2　安岡親毅著、倉田正邦校訂『勢陽五鈴遺響（4)』三重県郷土資料刊行会、1977年、120頁。平松令三監修『三重県の地名』平凡社、1983年、539頁。

Ⅲ. 基本的層序

Ａ地区とＢ・Ｃ地区とでは、遺構の検出状況も異なり、出土遺物にも差異があった。

Ａ地区では、表土直下に配石区画遺構が密集して検出され、それらを除去した後、場所によって約0.4～0.8m掘下げた下層で土坑群（火葬土坑・土壙墓）を検出した。基本的な層序は①表土：黒褐色腐植土、②包含層:淡黄褐色、③地山:淡橙褐色土で構成される。

Ｂ・Ｃ地区では、特殊な墳丘遺構を除けば、Ａ地区のような配石区画遺構は皆無で、概ね表土直下に近いところから累累とした火葬土坑群を検出した。基本的な層序は①表土：暗褐色腐蝕土、②包含層：暗黄褐色土、③地山：淡橙褐色土となるが、表土から地山（遺構検出）面までは浅く、平均的に約0.2m前後であった。

Ⅳ. 遺構篇

(一) 調査区の設定について

当該遺跡の範囲は、地形測量図（第５～７図）から判るように、標高120.0～109.0mにおよぶ山頂部から尾根筋部分のほぼ全域にわたる。今回の緊急調査対象地内だけに限定しても、当該遺跡の面積はおおよそ5,600㎡に及ぶ。遺跡の範囲は更に道路計画線区域外へも延びると推測できた。

現地には、現存の山道（幅員約２m）がなだらかなＳ字状に走る。雑木類、排出土・石類等の場外搬出に効率を上げる目的で動力機械を導入したため、山道の機能を最後まで温存して調査区から除外した。その山道を基準（境界線）に、発掘調査区を大きく３地区に分けた。北側からＡ地区、Ｂ地区、Ｃ地区と命名し（第8図）、調査計画の立案等にもこの区分を用いた。

(二) 各地区の特徴

【Ａ地区：配石区画墓と土坑】地表面は当初から多数の川原石と石塔類に覆われていた。川原石を用いた配石区画遺構（第９図・第13表）は、規模の大小はあるが、概ね0.25～0.35m大の川原石を用いて方形や円形状に区画したもので、これを墓の一単位として配石区画墓と呼称する。川原石と五輪塔類を除去した後に、下層（場所により地表から約0.3～0.8m下）で比較的規模の大きい土坑群を検出した。両者が重複して機能的に一体となる例はむしろ稀で、出土遺物の違いなどからも、下層で検出した大半の土坑群と上層の配石区画墓群とは、基本的に別個の遺構で、それ自体が当中世墓の変遷を物語る。中には、火葬土坑を伴い、かつ方形周溝を巡らした配石区画墓（方形周溝墓）もあり、その形態は単一ではない。

【Ａ地区：テラス状造り出し】北方向に分岐して延びる尾根筋の右側（東）斜面全体は、６段のテラス状に造り出されていた（写真第３図下）。崩落もあったが、各テラスの現存幅はおよそ２～６mあり、そこに配石区画墓を築いていた。

【Ｂ地区：墳丘状遺構】尾根筋に沿って累々と続く火葬土坑群と墳丘状の特殊な遺構がある。Ａ地区のような配石区画墓はなく、石塔類の出土も遙かに少ない。調査区北側（Ａ地区との境界）に偏して大型の墳丘状遺構が4基あった。うち２基は明らかに土坑群より後出であった。いずれも墳丘上に石列や階段状遺構を残し、462号墓（墳丘Ｂ）のように埋納施設を有する例もあった。Ｂ地区土坑群の平均的規模はＡ地区の土坑群に比して小ぶりで、焼土や炭化物、古銭や鉄釘等の伴出が顕著であった。

【Ｃ地区：縄文時代の遺物】引き続き尾根筋に沿ってＢ地区と同様の土坑群を連続的に検出した。唯一、Ｂ地区と異なる点は、墳丘状遺構はなく、石塔類の出土が皆無であったことと、縄文時代（早期以降）の遺物が少量ながら出土したことである（第43図・第18表）。

以上、基本的にＡ地区とＢ・Ｃ地区との相違は、遺構形態の面だけではなく、石塔類の多寡・有無にもある。大量の石塔類がＡ地区に集中し、Ｂ地区での出土が極めて少なかったのは、江戸時代後期の人為的な移転（註3）を考慮してもなお、両地区が果たした機能的特徴（性格の違い）の反映であろう。

註3　後掲の荒井勘之丞『寄墓日記』を参照されたい。

（三） Ａ地区の遺構

①：全体を、ａ）北尾根支群（第一～第六テラスから東側中央斜面）、ｂ）西部域、ｃ）山頂部と東尾根筋、ｄ）南・東域斜面、の４ブロックに分けて記述する（第13表）。②：形状的に異なる墳丘状遺構は区別し、③：想定される墓道についても言及したい。

はじめに検出した配石区画墓群を「上層検出遺構」とし、航空測量後にそれらを除去した後に、その下層で検出した土坑群を以て「下層検出遺構」とした。（「上部遺構」や「下部遺構」にすると、上下の遺構がすべて一対のものだと誤解される恐れがあり、また、「上部構造」「下部構造」という、本来は史的唯物論の概念で用いる学術用語を無節操に使用することを回避したからである）。

[上層検出遺構]

①　配石区画墓群（1 ～ 460号墓）

原位置を保たない、川原石や石塔類が立錐の余地なく散乱していた。現地では、石塔類を採上げる際に、一単位の墓と考えた配石区画墓に通し番号（ＳＲ）を付けたが、同時平行の分担作業であったため、重複や欠番を生じる結果をもたらした。可能な限りグリット順に遺構番号を新規に付けなおした（第13表・第９～ 16図）。

配石区画墓内から普遍的に人骨が出土したわけではない。人骨の出土しない墓は多数あった。墓と墓との間から出土する場合も多々あり、配石区画墓内でも、中央部からの出土は案外稀で、片隅に偏在することが比較的に多かったし、場所によっては石と石との間から出土する例もあって、その理由は分からない。配石区画墓の総数や墓域の全体規模の大きさに比して、蔵骨器の出土は少ない（当稿では「骨蔵器」の用語は用いず、「蔵骨器」に統一したことをお断りする）。

ａ）北尾根支群（１～ 108号墓）

調査区の最北端部に位置するグリッドＴ10・11からM19及びN19のグリッドに至る急峻な斜面に造り出された６段のテラスは、標高がおよそ108.0m付近から119.0m前後の範囲にあり、比高差は約11.0mに達する。

テラス状造り出し部分の第１段目は標高108.0 ～ 109.4m 前後、第２段目は標高109.4 ～ 110.6m 前後、第３段目は標高111.8～112.4m前後、第４段目は標高113.6～115.0m前後、第５段目は標高115.4～116.0m前後、第６段目は標高115.4～119.0m前後に、それぞれ位置する。また、各テラス間相互の比高差は、１段→２段；最大でも1.5m、２段→３段；約2.0m前後、３段→４段；約2.5m、４段→５段；約1.5m前後、５段→６段；約2.0 ～ 3.0m前後であった。

テラス幅の最も狭い所は２～３ｍと狭隘で、斜面や裾部には上段から崩落した多数の五輪塔のほか、川原石が集積・散乱していた。ここで確認し得た総墓数は108基を数える。

【第一テラス】（１～ 11号墓・第13表、第10図）

１号墓　平面形状は方形。長辺1.2×短辺1.0m。約0.3m大の川原石を用いる。最北端に位置し、区画内から地輪Ａ0753～4や火輪Ａ0456を採取。墓域は更に北方向に標高を下げつつ調査区外に延びる。その雑木林の中で墓と思しき墳丘１基を確認していたが、その後、何者かによって盗掘を受けたのが悔やまれる。

２号墓　１号墓の南西側に接する。３号墓西辺から約0.3m大の石が東西方向に4個並び、現状でのプランは台形。空風輪Ａ0242～3、空風火輪Ａ0793、火輪Ａ0440～3、水輪Ａ0548、地輪Ａ0671、一石五輪塔Ａ0946、相輪Ａ1042、宝篋印塔基礎部Ａ1048を採取（台座かも）。それが宝篋印塔の原位置を示すものかどうかは不明である。

３号墓　方形で、1.2×1.0mと推定できる。区画内からの出土遺物はない。

４号墓　方形と想定するも規模は不明。一石五輪塔の地輪部と思しき破片を採取した。

５号墓　方形。約0.3m大の川原石を全面に敷き詰めた状態。推定規模は1.2×1.1mで、出土遺物はない。

６号墓　完全な形を留めないが、約0.45m大の川原石を用い、ほぼ1.0×1.0mの方形と推定した。遺物はない。

７号墓　一部重複する９号墓より古く、規模は不明だが、方形プランと推定。南辺に偏して人骨ＳＸ146が出土したが、蔵骨器は伴わない。地面に直接埋めたか、有機質の容器であったために腐蝕してのこらなかったかである。当中世墓ではそういう例がたいへん多かった。

８号墓　やや小規模で0.7×0.6m。７号墓の区画

南西角に取付く形でできた後出の墓である。出土遺物はなし。

９号墓　やや円形に近いが、1.0×0.7m以上の方形。東側は崩落。７号墓の東辺を少し侵食する形で出来た後出の墓である。出土遺物はなかった。

10号墓　８号墓の南側約9mの所にあり長方形。1.5×1.1m。区画中央部に0.4m大の扁平な石がある。地輪Ａ0755を採取。土壙ＳＫ474（Ⅳ類）を伴う墓であった。

11号墓　10号墓に連続する方形墓、1.2×1.0m。空風輪Ａ0236を採取。下層で土壙ＳＫ475（Ⅳ類）を検出した。11号墓に伴う一体の遺構である。

【第二テラス】（12 ～ 28号墓、第13表・第10図）

12号墓　二重方形を呈する。外区画は2.1×1.7m、内区画は1.2×1.0mであった。火輪Ａ0427を採取し、埋土中から土師器小皿の破片（269 ～ 272）が出土した（第19表）。

13号墓　やや石が動いているが、本来2.0×1.5mの長方形墓とみる。３ヶ所で人骨ＳＸ82・ＳＸ83・ＳＸ84を検出した。ＳＸ82だけは14世紀前半代の土師器鍋（104）を蔵骨器にしていた。他は蔵骨器を持たない。埋土中から15世紀後葉～ 16世紀前葉頃の土師器小皿破片（273 ～ 275）が出土しており、当墓への納骨には少なくとも2時期を考慮する必要があると考える（第19表・遺構第34図・遺物実測第48図・写真第４・10図）。

14号墓　少なくとも東辺は完全に崩落し、正確な形状・規模は不明で、出土遺物もなかった。

15号墓　やや小さい方形で、0.9×0.8m。相輪Ａ1039と一石五輪塔Ａ0939を採取した。

16号墓　配石区画が遺らないので規模等は不明ながら、２ヶ所で人骨ＳＸ85・ＳＸ91が出土した。蔵骨器はない。

17号墓　東側の大半が崩落し原形を留めないが、一辺が1.2m内外の方形墓と推定。３ヶ所から人骨ＳＸ86・ＳＸ87・ＳＸ89が出土した。いずれにも蔵骨器はなかった。

18号墓　15号墓に隣接した0.7×0.7mの方形墓。区画内で、宝篋印塔笠部破片、水輪Ａ0542を採取した。

19号墓　0.2 ～ 0.3m程の川原石を敷詰めた径0.8mの円形墓。地輪Ａ0752を採取した。

20号墓　1.2×0.8mの長方形墓。２ヶ所から人骨ＳＸ88・ＳＸ148が出土。前者から13世紀後半代の土師器鍋破片（98）が出土した。区画内から空風輪Ａ207～8を採取した。

21号墓　1.4×1.4mの方形墓で、珍しく区画中央部から人骨ＳＸ90が出土したが蔵骨器はない。空風輪Ａ0211～2を採取した。当墓の南側1.5m地点からも人骨ＳＸ147と13世紀末～14世紀末葉頃の土師器小皿破片（116）が出土した。

22号墓　19号墓の東に隣接する1.4×0.9mの長方形墓。区画の南隅で人骨ＳＸ93を検出したが、蔵骨器はない。

23号墓　19号墓同様に0.25 ～ 0.3m大の川原石を敷きつめた、1.5×0.9mの長方形墓。出土遺物はない。

24号墓　2.0×1.0mの空閑地のほぼ中央部で人骨ＳＸ92を検出したが、蔵骨器はない。規模不明の長方形墓とした。

25号墓　24号墓に南接する小規模な長方形墓。ほぼ1.0×0.8mの規模と推定した。出土遺物はなかった。

26号墓　24号墓に東接した1.3×1.3mの方形墓。区画中央部付近に0.3m大の川原石を据える。遺物はなかった。

27号墓　26号墓に南接した1.3×1.2mの方形墓。

28号墓　25号墓に南接した1.3×1.3mの方形墓。

【第三テラス】（29 ～ 37号墓、第13表・第10図）

29号墓　当テラス最北に位置する。もとの形をのこさず正確な形状・規模は不明。空風輪Ａ0196 ～Ａ0200、水輪Ａ0539 ～Ａ0541を採取。石塔は崩落か人為的な集積の可能性もある。

30号墓　29号墓に東接。北東側が崩落。1.4×1.0mの長方形墓と推定。31号墓の北辺を共用した後出の墓である。

31号墓　本来2.0×1.6mの長方形墓と推定。南西隅で人骨ＳＸ94を検出するも、蔵骨器は確認できなかった。30号墓・32号墓より先行する墓。

32号墓　北西側の配石を欠くが径0.7mの円形墓。中心部に0.3m大の川原石を据える。31号墓の南辺区画の一部を共用して出来た後出の墓である。

33号墓　32号墓に南接する1.5×1.3mの長方形墓。区画の北辺側に偏して人骨ＳＸ178を検出したが、蔵骨器は残存しない。埋土から15世紀後葉～16世紀初

頭頃の土師器小皿破片（268）が出土している。空風輪Ａ0082 ～ 3、地輪Ａ0603 ～Ａ0607を採取した。

34号墓　32号墓の南西にあり、形状・規模は不明。33号墓との西接地点で人骨ＳＸ80を検出した。蔵骨器はない。水地輪Ａ0905、地輪Ａ0658を採取。埋土中から14世紀末～15世紀前葉頃の土師器小皿破片（239）が出土。恐らくはそれ以降の築造ではないかと類推する。

35号墓　33号墓に南接する1.1×1.0ｍの方形墓。

36号墓　東辺側の配石は遺らないが、35号墓に南接する1.8×1.0ｍの長方形墓。出土遺物はなかった。

37号墓　原形をよく留めた1.3×1.0ｍの長方形墓。空風輪Ａ0201 ～ 4、空風火輪Ａ0860、一石五輪塔Ａ0938を採取。上段テラスからの崩落も多い。埋土から15世紀後葉～16世紀前葉頃の土師器小皿破片（267）が出土。当墓はそれ以降の築造か。南側に同規模の墓がもう一基あったかも知れない。

【第四テラス】（38 ～ 46号墓、第13表・第10 ～ 11図）

38号墓　長径1.9×短径1.2ｍの楕円形状の墓。長方形の可能性もある。地輪Ａ0653を採取した。

39号墓　北東辺が崩落し遺らないが、復元した規模1.5×1.0ｍの長方形墓。当墓の周囲から空風輪Ａ0229 ～Ａ0230、空風火輪Ａ0792・Ａ0864、一石五輪塔Ａ0944・Ａ0961・Ａ0996を採取したが、人為的・無作為に集積された可能性が強い。

40号墓　38号墓の南西に接する、1.5×1.5ｍの方形墓。空風輪Ａ0191 ～Ａ0192・Ａ0255、火輪Ａ0425、一石五輪塔Ａ0993を採取した。

41号墓　40号墓に東接し、北東辺を39号墓の西辺と平行する形に取って、規模1.5×1.2ｍの長方形墓に復元した。出土遺物はない。

42号墓　41号墓の南東側２ｍのところにある。1.4×1.3ｍの方形墓と推定。出土遺物はない。

43号墓　42号墓の南東に接続。テラス縁辺部が崩落し原形を留めず。1.0×0.9ｍの方形墓と推定。空風火輪Ａ0863、水地輪Ａ0885、一石五輪塔Ａ0934・Ａ0943を採取した。

44号墓　東側の大半が崩落し原形を留めない。西辺は現状で1.0ｍあるので、規模はそれに近い方形墓と推定。西側隅の土中から人骨ＳＸ171を検出。蔵骨器はない。

45号墓　テラス縁辺部の北・東・南三方に崩落があり、原形を留めない。推定規模を1.5×1.3ｍと復元した。

46号墓　45号墓と同様、原形を留めない。2.0×1.2ｍの長方形墓と推定。空風輪Ａ0220、火輪Ａ0434、地輪Ａ0666 ～Ａ0668を採取。地輪Ａ0667とＡ0668の２基は南北方向に並び、それに西接して土師器皿細片（時期不明）が出土した。

【第五テラス】（47 ～ 61号墓、第13表・第11図）

47号墓　北東辺は遺らないが、2.0×1.0ｍの長方形墓と推定する。空風輪Ａ0216～Ａ0218を採取した。

48号墓　47号墓に南接する一辺1.0ｍの方形墓と推定。45号墓の区画西側の石列に西接して13世紀末頃～14世紀末葉頃の土師器皿（127）が出土した。出土した遺物の年代観の差異から、49号墓に先行すると推定した。

49号墓　48号墓に西接した1.0×0.8ｍの長方形墓。15世紀前葉～中葉頃の土師器小皿（237）が出土。48号墓より後出の墓と推定。15世紀後葉頃までには築造されたか。

50号墓　ほぼ1.1×1.0ｍの方形墓。火輪Ａ0432を採取した。

51号墓　50号墓の区画西辺を共用した一辺1.0ｍの方形墓。空風輪Ａ0219を採取。49号墓と接する区画の外で、人骨の一部が地面に突刺さった状態で出土。上段からの崩落かも知れない。

52号墓　50号墓・51号墓の南東に隣接した1.4×1.3ｍの方形墓。水輪Ａ0553、地輪Ａ0740を採取した。

53号墓　52号墓の東側に張出した1.3×1.2ｍの方形墓と推定。一石五輪塔Ａ1002、地輪Ａ0741 ～Ａ0742を採取。配石列の切合い（前後）関係からみて52号墓より後出の墓である。

54号墓　52号墓と55号墓の間隙を利用した後出の墓で、規模は0.9×0.6m。出土遺物はない。

55号墓　1.2×1.0ｍの方形墓と推定。出土遺物はない。

56号墓　55号墓の南側に隣接。1.2×1.0ｍの方形墓。空風火輪Ａ0791を採取。約0.15 ～ 0.2ｍ掘下げたところで土壙ＳＫ486（Ⅳ類）を検出したが何も出土せず、両者の関係も確定できなかった。

57号墓　56号墓の東側に隣接するが、崩落で原形

を留めない。西辺は1.0m。一石五輪塔Ａ1003・Ａ0962～Ａ0963などを採取した。

58号墓　56号墓との間に約0.3mの通路あり。1.2×1.1mの方形墓。中央部に0.15m内外の川原石４個を用いた小区画がある。それを、351号墓や411号墓にも見られる石囲いの納骨施設の類例と判断した。

59号墓　58号墓に東接する1.3×1.0mの長方形墓と推定。一石五輪塔Ａ0995を採取。山茶碗の小破片も出土した。

60号墓　58号墓の南東側で約50cmの通路を挟む、1.2×1.0mの方形墓。東半分は少し崩落している。下層土坑ＳＫ484（ⅡＡ類）とは別の遺構である。

61号墓　60号墓に南接する。崩落で原形は留めぬが、少なくとも1.2×0.8mの長方形墓と推定した。遺物はない。

【第六テラス】（62～83号墓、第13表・第11図）

62号墓　テラスの最北にあり、北接する斜面側は下段（第四テラス）の40号墓に向けて崩落する。方形又は長方形墓。南西辺は1.2mあり、西接する墓道側に並ぶ石列のため二重の区画にも見える。概ね中央部に近い位置から人骨ＳＸ95が出土したが、蔵骨器はない。空風輪Ａ0188～Ａ0189、火輪Ａ0422、水輪Ａ0536、空風（火）輪Ａ0857～Ａ0858を採取した。

63号墓　62号墓の東に隣接。北・東辺が崩落のため正確な規模は不明ながら、現状で1.8×1.5mの長方形墓と推定。

64号墓　63号墓に南接。1.8×1.6mの方形墓。

65号墓　2.5×1.4mの長方形墓。62号墓と同じ理由で区画の西辺だけ二重石列になる。区画配石の前後関係からみて、63号墓・64号墓・66号墓・67号墓に先行する墓と推定。区画中央部東寄りから人骨ＳＸ97が出土。蔵骨器は伴わない。空風輪Ａ0185～Ａ0187、地輪Ａ0737、一石五輪塔Ａ0935・Ａ1006（空風火輪のみ）、相輪Ａ1037を採取した。

66号墓　67号墓と同様の墓間通路部分に、65号墓の南辺石列に取付く形で増築された1.7×1.4mの長方形墓。後年69号墓の割り込みにより区画の東南部分に現状変更を受けた。空風輪Ａ0178を採取した。

67号墓　東側が崩落するが、64号墓と70号墓の間の通路を転用した1.4×0.9mの長方形墓。空輪Ａ0008（梵字入り）、空風輪Ａ0179～Ａ0180、地輪Ａ0645を採取した。

68号墓　西接する墓道側の配石が遺らず、南側に崩落もあり、全容は不明。1.5×1.5m前後の方形墓と推定。区画中央南寄りで人骨ＳＸ96が出土したが、蔵骨器はない。空風輪Ａ0173～Ａ0175、空風火輪Ａ0856、火輪Ａ0413、地輪Ａ0736を採取。地輪Ａ0736は区画配石に転用された可能性がある。

69号墓　66号墓・68号墓・70号墓の間の空隙を利用して造った後出の楕円形墓。長径1.0×短径0.6m。このため、先行する上記３ヶ墓の配石列には現状変更があった。出土遺物はない。

70号墓　東辺側崩落のため正確な規模は不明。西辺側は1.3mで、区画中央部に0.3m大の川原石を３個使い囲むような空間がある。58号墓、351号墓、411号墓にも見られる納骨用の施設と推定。土坑ＳＫ467（ⅡＢ類）と平面上は部分重複の関係にあるが、別遺構。因みにこの東側斜面で人骨ＳＸ267と土師器小碗の破片（85）が出土した（第19表・第47図）。

71号墓　70号墓に南接する1.5×1.0mの長方形墓。火輪Ａ0415を採取。当墓に近接して空風輪Ａ0181～Ａ0183、火輪Ａ0416も採取した。

72号墓　68号墓・71号墓間の通路を利用した後出の長方形墓。規模は1.5×0.7m。出土遺物はない。

73号墓　68号墓との間、南北幅約３m×東西幅約２mの規模で崩落があり、正確な形状・規模は不明。対面する120号墓・122号墓と同様に、墓道に沿う約1.0m四方の方形墓と推定。水地輪Ａ0882、地輪Ａ0735を採取。この地輪は明らかに区画用配石に転用されていた。東側斜面の下で人骨ＳＸ262と土師器小皿破片（266）を検出した。

74号墓　73号墓に南接する約1.1×1.0mの方形墓。一石五輪塔Ａ0970を採取した。

75号墓　西接する墓道側にやや張出した1.2m四方の方形墓。火輪Ａ0331を採取した。

76号墓　75号墓の東から南側にかけて約５m程度、比高差約0.6～1.0mの低いテラスが分岐する。当墓はその低いテラス上にある。区画の東辺が崩落するが、一辺1.0mの方形墓と推定。空輪Ａ0005、空風輪Ａ0061・Ａ0273、水輪Ａ0503、水地輪Ａ0874～Ａ0875、Ａ0893、地輪Ａ0584～Ａ0585、Ａ0612、一石五輪塔Ａ0920～Ａ0921を採取。上段からの崩落かど

うか、判別するのは困難だった。

77・78号墓　75号墓の南東側へ幅約0.6mの通路を隔てて77号墓・78号墓・80号墓が連接立地する。77号墓・78号墓は2.4×1.5mの長方形区画の中央部を仕切り、各々1.5×1.2m規模に二分される。区画の一部に0.7～0.8m大の川原石を使用する。前者で一石五輪塔A0919を、後者では空風（火）輪A0808～A0810、一石五輪塔A1004を採取した。

79号墓　77号墓・78号墓の西側で、0.3m幅の墓道を隔てる。1.4×1.3mの方形墓と推定。北尾根筋を登ってきた墓道は、この79号墓の北（手前）で左右に分岐する。

80号墓　1.4×1.3mの方形墓。人骨ＳＸ101、古銭（銭3）一枚、山茶碗小破片（52）が出土し、265号墓で出土の山茶碗の破片と接合した。12世紀中葉以降のものと推定。空風輪A0066・A0076、空風火輪A0811、火輪A0349、地輪A0595、一石五輪塔A0922・A0926・A0968・A0980、相輪A1025を採取。78号墓の南辺の石列を共用した後出の墓であろう。

81号墓　東側が大きく崩落するが、1.0m内外の方形墓と推定。下層土坑ＳＫ482（ⅡＢ類）と重複する（第35図）。

82・83号墓　79号墓の南東側で、両脇を墓道に挟まれた墓。前者は1.4×1.3mの、後者は1.1×0.9mの方形墓と推定。82号墓では想定区画の南辺際に偏して人骨ＳＸ79と古銭（銭６）が１枚出土した。埋土中から15世紀前葉頃のものかと思える、おろし皿破片（66）が出土した。82号墓はそれ以降の築造と推測される。83号墓から出土の遺物はない。

【東側中央斜面】（84～108号墓、第13表・第12図）

84・85号墓　第六テラスの80号墓から0.8～1.0m低く、第五テラスの60号墓より約0.8～1.0m高い所から更に南東方向に延びるテラスがある。そのテラスの西端で、東斜面では一番奥まった位置にある墓。前者は全容不明で、1.2×0.9m前後の長方形墓と推定。後者は1.2×1.1mの方形墓で、地輪A0744～5を採取した。0.4m大の扁平な川原石の直上にあった地輪A0745は原位置を保っていた可能性がある。当墓周辺からも、空風火輪A0771～2、火輪A0341～2、水輪A0492～3、地輪A0586～7、一石五輪塔A0923等を採取した。

86号墓　区画北辺を欠失するが84号墓に南接する1.2×1.1mの方形墓と推定。区画中央部から人骨ＳＸ81が出土し、地輪A0613・A0746のほか、宝篋印塔基礎部A1047を採取した。蔵骨器はない。

87号墓　86号墓に南接。1.5×1.2mの長方形墓。区画中央からやや北寄りで人骨ＳＸ168が出土し、空風輪A0063～4、A0274・A0276、空風（火）輪A0814、火輪A0336～7、水地輪A0876、地輪A0747、一石五輪塔A0976～7などを採取した。やはり蔵骨器はなかった。

88号墓　86号墓～87号墓の西側にあり、形状・規模は不明。完形品ではないが12世紀中葉～13世紀前葉頃の常滑産壺（39・第45図、写真第９図）と人骨ＳＸ76が出土し、その南側で古銭（銭５）「熙寧元寶」１枚が出土した。埋土中から14世紀後葉頃の天目茶碗破片（67）も出土し、196号墓から出土の同破片と接合した。当墓はそれ以降の築造と考える。また、ＳＸ76の近くで常滑産甕（74）も出土した。15世紀中葉～後半代に比定。当墓には２時期あるか、またはもう１つ別の墓があったかも知れない。火輪A0340、水輪A0487、相輪A1023～4、宝篋印塔（屋根）笠部A1045を採取した。

89号墓　88号墓に南接し、87号墓に西接する墓で規模・形状は不明。想定区画の南東隅に当たる所で地輪A0751を採取し、その直下から人骨ＳＸ153が出土した。当地輪は原位置を保つと推定。蔵骨器はない。納骨と石塔の関係を知る希少例で、372号墓にも類例がある。水輪A0489も採取した。

90号墓　89号墓に西接する1.3×1.1mの長方形墓。火輪A0348、一石五輪塔A0979を採取。先に79号墓の北で分岐した墓道は81号墓の西から南下し、この90号墓の西辺に沿いつつ、更に南西方向へと続いていく。

91号墓　87号墓に南接する1.6×0.9mの長方形墓。地輪A0748～9を採取。それらは区画用配石に転用された可能性がある。

92号墓　89号墓・90号墓に南接し、墓道に沿う2.0×1.4mの長方形墓。古銭（銭４）「天禧通寶」が１枚出土した。空風輪A0065、水輪A0490・A0496、地輪A0591・A0600、一石五輪塔A0925を採取した。同一地点に重なっていた水輪A0496と地輪A0600と

は、材質、法量・形態などからみて、セット関係を想定し得る希少な遺物である（第24表）。

93号墓　92号墓に南接。一辺1.5m四方の方形墓。２ヶ所から人骨ＳＸ72・ＳＸ102が出土した。前者には破片ながら14世紀末～15世紀初頭頃の伊勢型土師器鍋（105・第48図）と炭化物とを伴う。それ以降の築造と推定。後者には人骨以外の遺物は認められなかった。

94号墓　93号墓に南接。1.9×1.5mの長方形墓。区画北辺の外側に接して空風輪Ａ0073～5、火輪Ａ0347、水輪Ａ0495を採取した。

95・96号墓　94号墓に東接し南北に並ぶ。前者は1.5×1.3m、後者は1.4×1.0mの長方形墓。共に遺物はない。

97号墓　94号墓に南接。長径2.0×短径1.6mの楕円形ないし隅丸方形墓。100号墓との間を通る幅約0.5mの岐道は、更に東側の98号墓・99号墓へと通じる。

98・99号墓　前者を一辺1.2m四方の方形墓と推定、後者は1.5×1.2mの長方形墓。98号墓では区画北辺部に当たる配石の直上から人骨ＳＸ103が出土した。両墓は東中央斜面で標高が最も低い位置にあり、97号墓・100号墓との比高差約1.6m、山頂部にある182号墓との比高差は約4.0mである。採取した空風火輪Ａ0773と水地輪Ａ0877は一体の五輪塔になる（第25表）。経筒外容器筒身破片の一部（29）がこの埋土からも出土した（第19表・遺物第44図・写真第９図）。

100号墓　周溝ＳＤ874を伴う方形の配石区画墓で、区画の規模は1.8×1.7m。周溝・墳丘は東側崩落のため３方面のみが残存。ＳＤ874の溝幅は0.6～1.7mと不規則で、深さ約0.3m。周溝を含む全体規模は5.1m×3.0m以上になる。盛土のほぼ中央部下層で重複する土壙ＳＫ514（Ⅲ類）とは一体の遺構で、本来は方形周溝墓である（遺構第39図）。土壙ＳＫ514の底部から13～14世紀代の青磁碗（63）が１点出土した。当墓は横尾では比較的に古い段階の墓だと思う。周溝と土壙を伴う同形態の墓は、221号墓や243号墓にもある。

101号墓　100号墓の南角に接する、1.9×1.1mの長方形墓。刀子（鉄参考38）が出土した。墓道に沿い配列される94号墓・97号墓・100号墓・105号墓等とは区画の石列方位を違え、102号墓等と同様に違和感がある。埋土から出土した青磁碗破片（64）は、105号墓から出土の破片と同一個体であった。100号墓より後に築造の墓であると推測する。

102・103号墓　規模は各々1.1×1.0m、1.0×0.9mの方形墓。共に101号墓の長辺を共用して造られ、遺物はないが、101号墓より後に追加築造された墓であろう。

104号墓　1.1×0.9mの長方形墓。101号墓の南東角に取付く配石区画の状況から、101号墓より後出の墓と推定した。

105号墓　100号墓の南側1.5mの所にある1.8×1.5mの長方形墓。その南西辺に沿い100号墓方向からの通路があったが、後に101号墓の出現で部分閉鎖を受けたと推測する。101号墓と同じ青磁碗破片（64）の一部が出土した。

106号墓　104号墓と石列方向を揃えた1.1×1.0mの方形墓。105号墓の南角に取り付く。遺物はない。

107号墓　105号墓の東側1.0mの所にある1.9×1.5mの長方形墓。14世紀初頭～前葉頃の和鏡「蓬莱千鳥鏡」（76）が出土した（遺物第47図・写真第11図）。区画の北東辺外から13世紀中葉頃の山茶碗（55）や土師器小皿破片（参考15）も出土し、同北東付近では空風輪Ａ0079、水輪Ａ0498を採取した。

108号墓　107号墓の南辺に後から取付いた1.7×1.4m内外の長方形墓と推定した。出土遺物はなかった。

ｂ）西部域（109～181号墓、第13表・遺構第11・13図）

グリッドＯ10～Ｐ10から南のＩ16までの、面積的には最も狭い範囲である。109号墓から181号墓に至る73基が分布する。遺構数は最少で、一部は北から尾根筋を登って来る墓道沿いのエリアを含む。山頂付近の中央部分に平坦な空閑地（Ｌ15・M15）がある。西端部は急峻な谷に向かい崩落が特に著しかった。Ｉ14・15グリッドは一段低い平坦地が造り出され、川原石を敷き並べた区画がＬ字状に配置される。Ｊ15グリッドには大きな台状の石（1.2×1.0m）が据えられていた。現代の土葬墓地にもある棺台（埋葬前に、担ぎ手が棺を逆時計回りに３回まわしたあとその上に安置し、導師がひと回向する）にも似ているが、ここで見つかった石は表面に相当火を受けた痕跡が顕著で、かつてその石上で火葬が行われたこ

とは明白であった（土坑ＳＫ478及びまとめ参照）。

109号墓　最北端にあり、全面に0.1～0.2m大の川原石を敷詰め、中央部に箱状の空間を作る。納骨用の窪みである。石を敷き詰める類例に５号墓・19号墓・23号墓などがある。現状で一辺0.9m四方の方形墓（遺構第35図）。遺物はない。

110号墓　109号墓の東４mの所にある。111号墓の区画北辺に取付く後出の墓で、1.3×1.2mの方形墓である。水地輪Ａ0883、一石五輪塔Ａ0959を採取した。

111号墓　0.4～0.5m大の石を使う。110号墓に先行する一辺1.3mの方形墓。空風（火）輪Ａ0859、水地輪Ａ0889～Ａ0890・Ａ0911、一石五輪塔Ａ1012等を採取した。

112～116号墓　当該尾根筋を貫通する幹線墓道の西側に沿って並んだと思われる５墓の墓だが、殆ど原形をとどめず、形状・規模などは不明である。出土遺物もない。

117号墓　106号墓の角で西方向に分岐する幅0.6m内外の墓道があり、その一番奥の左手に位置する。1.4×1.3mの方形墓と推定。区画中央部に据わる0.4m大の平坦な石は、85号墓の場合と同様、直上に五輪塔を設置した可能性がある。

118号墓　117号墓の北東に接する1.1×1.0mの方形墓。近接の121号墓・124号墓とは0.2～0.3m幅の墓間通路で隔てられる。出土遺物はなかった。

119号墓　117号墓に東接する1.5×1.4mの方形墓。下層で検出の火葬土坑ＳＫ466は当墓とは別の遺構である。

120号墓　119号墓に東接し、区画配石は動いているが1.7×1.3mの長方形墓。区画のほぼ中央部にある0.3m大の川原石を挟み東西２ヶ所から人骨ＳＸ68とＳＸ98が出土した。蔵骨器はみられなかった。

121号墓　120号墓の南角に接し、1.5×1.3mの長方形墓で、やや楕円状にも見える。119号墓との間に幅0.2mの通路がある。空風輪Ａ0172、空風（火）輪Ａ0855を採取した。下層の火葬土坑ＳＫ466は当墓とは別の遺構である。

122号墓　120号墓に南接し、121号墓に東接する1.2×1.1mの方形墓。火輪Ａ0410、地輪Ａ0731～4を採取した。このうち３基の地輪Ａ0731～3は区画中央部でほぼ南北に一列に並ぶ。これらがもし原位置を保つものならば、墓道に沿う区画東辺側が当墓の正面になる可能性が高い。

123号墓　118号墓の西側にあり、北半分は崩落している。現状で1.0m内外の方形墓と推測する。遺物はなかった。

124号墓　分岐した通路を挟み、118号墓の南側にある。1.7×1.2mの長方形墓。125号墓の北角を侵食する形で築造された後出の墓。117号墓や120号墓などと同様に、区画中央部に平坦面を持つ0.4m大の川原石が据わる。人骨の出土はなかった。東接の空閑地で空風輪Ａ0168～71等を採取した。

125号墓　124号墓に先行する本来1.5×1.2mの長方形墓。区画中央部に平担面を持つ0.6m大の川原石が据わり、地輪Ａ0728～9を採取。区画東辺で東西に並ぶ４基の地輪Ａ0724～Ａ0727は区画用の配石に転用された可能性もある。

126号墓　125号墓の南西にある径1.2mの円形墓。西端部は崩落して残らない。遺物はなかった。

127号墓　126号墓の南東に接し、現状では0.8×0.6mと小規模な長方形墓である。遺物はなかった。

128号墓　126号墓・127号墓の南東にあり、1.4×1.3mの方形墓。区画の中央部で人骨ＳＸ41が出土。また、やや東に偏して0.3m大の川原石が３個集積され、その石の間からも人骨ＳＸ172が出土。いずれにも蔵骨器はない。類例は405号墓にも見られた。空風輪Ａ0086、火輪Ａ0407を採取した。

129号墓　128号墓に北接、1.8×1.6mの長方形墓。124～125号墓などのように、区画中央部に平坦面をもつ0.4m大の川原石が据わる。北に偏して人骨ＳＸ67が出土したが、蔵骨器はない。平面上は下層土坑ＳＫ472（ⅡＡ類）が重複するが、両遺構の関係は不明であった。

130号墓　129号墓に北接。一辺1.8m四方の方形墓と推定。中央部に0.3m大の平らな川原石が据わり、２ヶ所で人骨ＳＸ70・ＳＸ71が出土したが、蔵骨器はなかった。火輪Ａ0411～2・Ａ0454、地輪Ａ0730を採取した。埋土中から15世紀前葉頃の常滑産甕の小破片（73）や16世紀代の土師器小皿破片（263）が出土した。区画東隅の下層に一部分重複する土坑ＳＫ473（ⅡＡ類）があり、焼土や炭化物を検出した。

131号墓　129号墓に東接する1.8×1.5mの長方形

墓と推定復元。区画内で人骨ＳＸ66・ＳＸ69が対角線上に離れて出土。共に蔵骨器はみられない。水輪Ａ0504を採取した。下層で人骨ＳＸ254が出土し、14世紀後葉以降に比定される土師器小皿（216）を伴出したので、当該131号墓はそれよりも後代の築造でなければならない。

132号墓　131号墓に南接し、128号墓には東接する1.4×1.0ｍの長方形墓。区画の北隅から人骨ＳＸ99が出土。蔵骨器はない。区画の中央部に地輪Ａ0722～3が南北に並ぶ。下層で人骨ＳＸ252を検出し、その埋土から13世紀末～14世紀中葉頃の土師器小皿の小破片（152）が出土。当墓はそれより更に後代の築造と推定する。

133号墓　132号墓に南接して並列する、推定1.5×1.2ｍの長方形墓。想定区画の東隅に偏して人骨ＳＸ64が出土した。蔵骨器は認められなかった。

134号墓　132号墓に東接する推定1.3×1.2ｍの方形墓。想定区画の南西隅に偏して人骨ＳＸ65が出土した。蔵骨器はない。火輪Ａ0353、水輪Ａ0505を採取した。

135号墓　同じく133号墓に東接する一辺1.2ｍ四方の方形墓と推定。区画北隅に偏して人骨ＳＸ63が出土したが、やはり蔵骨器は見当らなかった。

136号墓　127号墓の南西側にある1.5×1.0ｍの長方形墓。空風（火）輪Ａ0853～4や地輪細片などを採取した。

137号墓　136号墓に南接する1.2×1.0ｍの長方形墓。一石五輪塔Ａ0933を採取した。

138号墓　137号墓に南接する。形状も規模も不明。一辺1.0ｍ以上の方形墓を想定。空風火輪Ａ0790、一石五輪塔Ａ0991・Ａ0951・Ａ0955の３点を採取した。Ａ0951は区画配石の一部を構成するが、137号墓での転用かも知れない。

139号墓　石列の残存状況から最大眼2.2×1.6ｍの長方形墓を想定するが、２区画（1.6×1.1ｍ×２）の可能性もある。埋土から15世紀前半代に比定しうる常滑産甕（72）の破片の一部が出土したので、それより後代の築造と判断した。

140号墓　139号墓から空閑地を挟み、1.5ｍ南にある一辺約1.2ｍ四方の方形墓と推定。区画中央部に据わる0.4ｍ大の川原石の下部から人骨ＳＸ57が出土。蔵骨器はない。地輪Ａ0716は配石の一部として転用された可能性もある。

141号墓　139号墓の東角に接する1.3×1.1ｍの長方形墓で、区画全面に0.2～0.3ｍ大の石を敷き並べるのは、109号墓等にも共通する。空風火輪Ａ0777、火輪Ａ0354、地輪Ａ0721を採取した。

142号墓　141号墓に南接・並列する1.3×1.1ｍの長方形墓。空風（水）輪Ａ0822～3、水輪Ａ0506、地輪Ａ0717～20を採取。４基の地輪は概ね原位置を保つ可能性もある。平面上は下層土坑ＳＫ470（ⅡＡ類）と重複するが、別の遺構である。

143号墓　140号墓・142号墓・144号墓に挟まれた一辺0.6ｍ四方の方形墓。墓間通路の一部を転用した後出の墓。下層で検出の土坑ＳＫ470は142号墓にも跨って重複し、当墓とは別の遺構である。

144号墓　外側1.3×1.1ｍの長方形墓の内側に0.6×0.5ｍの内部区画をもつ。人骨はない。二重区画になる例は他に12号墓や401号墓にもある。規模は違うが、納骨用の内郭施設の例は、58号墓、351号墓、411号墓などに見られる。

145号墓　幅約0.2ｍの通路を挟んで144号墓に東接する1.3×0.8ｍの長方形墓。相輪Ａ1036、一石五輪塔Ａ0950を採取。一石五輪塔は区画用配石への転用である。埋土中から、土師器小皿破片（255）、土師器鍋破片（110・参考14）が出土した。16世紀前半以降の築造と推測される。

146号墓　145号墓に先行した1.3×1.0ｍ規模の長方形墓と推測。区画南辺の石列は本来当墓のもので、後から145号墓が取付く。埋土から12世紀後葉～13世紀初頭頃の山皿（参考９）が出土した。それより後代の築造と推定する。

147・148号墓　前者は1.4×1.0ｍの長方形墓で、後者はそれに北隣する規模不明の墓。後者で空風輪Ａ0090を採取。

149号墓　140号墓に南接する1.5×1.3ｍの長方形墓。148号墓との間に幅0.3～0.4ｍの通路あり。風輪Ａ0013、一石五輪塔Ａ1009を採取。埋土から15世紀中葉～後葉頃の土師器小皿破片（169～170）が出土。それより後代の築造と推定。

150号墓　140号墓に西接する1.2×1.1ｍの方形墓と推定。平坦面を持つ0.5～0.6ｍ大の川原石が区画

中央部に据わるが、人骨はなかった。同様に平らな石を据える例は、10号墓、85号墓、117号墓、120号墓、124号墓・125号墓、129号墓、140号墓、173号墓、187号墓、204号墓等にもある。標準的な形態は、その石の直下に納骨をし、直上に五輪塔を据えたと考える。21号墓などはその石自体が失われた可能性がある。

151号墓　149号墓の区画南辺に取付く後出の墓で、その規模は1.1×0.6m、空風（火）輪A0824、火輪A0356を採取した。人骨などはなかった。

152号墓　147号墓の南東にある1.5×1.5mの方形墓。区画中央部から人骨ＳＸ156・157が隣接して出土。前者では13世紀後半代の土師器鍋破片（97）が、後者からは14世紀末～ 15世紀後葉頃の土師器小皿破片（168）が出土した。当墓の納骨には２時期を考慮すべきかも知れない。

153号墓　149号墓・151号墓・154号墓・155号墓に囲まれた空間を利用した0.7×0.5mの長方形墓。空風輪A0089を採取。埋土中から15世紀後葉～ 16世紀前半代の土師器小皿小破片（246 ～ 248）が出土。それ以降の築造と推定する。

154号墓　152号墓・157号墓の区画の一辺を共用した1.2×1.0mの長方形を呈する後出の墓。157号墓の区画北辺の石をややずらして造成する。埋土から15世紀後葉～ 16世紀末葉頃の土師器小皿破片（249）や16世紀中葉頃の土師器鍋小破片（111）が出土した。当墓は152号墓より新しく、16世紀後半代の築造ではないかと推測する。

155号墓　144号墓と154号墓の間にある0.8×0.8mの方形墓。空（風）輪A0300、地輪A0714、を採取。区画に東接して一石五輪塔A0958、火輪A0355も採取した。

156号墓　152号墓の南で、K15基準点に接する径0.8mの円形状の墓。157号墓に先行するとは思えない。

157号墓　先行する152号墓・160号墓・173号墓の一辺を共用した2.0×1.3mの長方形墓。後に154号墓の造成に際し、区画北辺に少し現状変更を受けた。地輪A0643を採取。埋土中に渥美産壺破片（49）を含み、配石の前後関係から、152号墓・160号墓・173号墓より後の築造と推定される。

158号墓　形状・規模は不明。157号墓の区画東辺外で人骨ＳＸ58が出土したので、別の区画墓とした。蔵骨器はない。地輪A0715を採取した。

159号墓　158号墓の北に残骸と思われる区画配石の一部を残す。想定区画内から空風輪A0165を採取した。埋土から14世紀末～ 15世紀前葉頃の土師器鍋破片（109）や12世紀後葉～ 13世紀前葉頃の経筒外容器筒身の破片（21）が出土。これを踏まえ、当墓は15世紀前半代以降の所産と推定する。

160号墓　157号墓の南東。1.6×1.2mの長方形墓。区画する石の配列構造から、157号墓・161号墓に先行し、173号墓よりは後出と推測。区画中央部から人骨ＳＸ60が出土したが、蔵骨器はない。埋土から14世紀前半代の土師器鍋（99）の口縁部小破片が出土。それより後の築造としか言えない。地輪A0641を採取した。

161号墓　160号墓の区画東辺の一部を共用する径1.0mの円形状墓。160号墓より後出の墓。砥石（78）が出土した。16世紀代のものではないかと推測する。

162号墓　161号墓の北東側に配石区画の一部を残す。現状は1.2m。形状・規模は不明。173号墓・160 ～ 162号墓はほぼ東西方向の墓道（幅0.4 ～ 0.5m）の北側に沿って並ぶ墓であったと思う。

163号墓　147号墓の南側。1.1×0.7mの長方形墓。空風輪A0091 ～ 2、地輪A0713を採取。地輪は原位置を保つ可能性がある。経筒外容器筒身破片（20）がこの埋土からも出土した。当墓の築造はそれより遡ることはない。

164号墓　163号墓の東南側に接する。規模・形状は不明。想定区画の中央部で地輪A0642を採取した。

165号墓　163号墓の南側で、径1.0mの円形状墓。埋土中から15世紀前半代の常滑産甕小破片（88・90）や13世紀後葉～ 14世紀代の片口鉢の破片（51）が出土。当墓は15世紀後半以降の築造かと推測する。

166号墓　165号墓の東側に1.2×1.1mの墓を想定。想定区画内で東西方向に並ぶ水地輪A0878、空（風）輪A0277、水輪A0507、相輪破片A1038などを採取した。

167号墓　166号墓に西接する1.0×0.8mの方形墓。空風輪A0166、火輪A0406、一石五輪塔A0932を採取した。

168号墓　167号墓の西辺に平行して接する。配石

区画は1.0m分だけ残るが、全体の規模・形状は不明である。

169号墓　167号墓の南にある径1.0mの円形墓。近接して空風輪A0093など３点の石塔を採取した。

170号墓　166号墓に南接する1.2m内外の方形墓と推定。想定区画の中央部で地輪A0712を採取した。

171号墓　K15基準点の南側に残る石列を以て方形墓があったと推測。規模等は不明で、遺物もない。

172号墓　170号墓の東側に残る石列と出土人骨ＳＸ61の存在から、1.7×0.9mの長方形墓を推定。空風火輪A0788を採取した。蔵骨器はない。

173号墓　172号墓の東側で、1.9×1.5mのやや大型の長方形墓。平坦面を持つ0.5～0.6m大の川原石が区画中央部に据わるが人骨はなかった。区画中央部に石を据える形態的類例は、10号墓、85号墓、117号墓、124・125号墓、129号墓、140号墓、150号墓、187号墓、204号墓などがある。火輪A0401等を採取した。

174号墓　1.3×1.3mの方形墓と推定。火輪A0359、水地輪A0888、地輪A0707を採取した。

175号墓　174号墓に西接。1.2×1.2mの方形墓。空風輪A0094、水輪A0508、地輪A0616、空風火輪A0779、水地輪A0887、一石五輪塔A0928を採取。上からの崩落もあろう。

176号墓　1.0×0.9mの方形墓。平坦面を持つ0.6m大の川原石を据え、全体が石敷きの状態で、石の面を揃えていた。空風輪A0095、火輪A0360、風火輪A0780、空風火輪A0781、（水）地輪A0899、相輪A1032などを周辺で採取した。

177号墓　176号墓に西接。1.1×0.9mの方形墓。近接して空風輪A0164、火輪A0403を採取した。

178号墓　177号墓に西接。1.0×0.9mの方形墓。空風火輪A0778、水地輪A0879や火輪A0358、地輪A0614を区画前方（南西側）付近で採取した。

179号墓　Ｌ字形の角に当たる1.1×0.9mの方形墓。原形をとどめる良好な火輪A0357を近くで採取した。

180号墓　179号墓に南接。1.0×0.9mの方形墓。近接して（水）地輪A0909を採取した。

181号墓　180号墓に南接。1.1×0.9mの方形墓。空（風）輪A0278・A0291、地輪破片A0640等を採取した。

ｃ）山頂部と東尾根筋（182～261号墓、第13表および遺構第13～16図）

最も標高の高い山頂部とそこから東方向へ続く尾根筋一帯の配石区画墓をまとめる。明確に境界線は引けないが、凡そグリッドＬ15からＰ27に及ぶ範囲で、形態や規模等の点で特異な墓の多いエリアであった。総数は80基を数える。

182号墓　調査前の標高は約120mと遺跡中で最も高位置にあった。配石区画の規模は、平面上3.5×3.2mの方形を呈す。北（西）側の約半分近くが後世の土取り等（註4）で壊されるが、南（東）面は５ないし６段の石垣が残り、区画内には約0.9mの高さに盛土が残る。区画中央部には0.3～0.4m大の川原石が径1.4mの円形状に中心部を囲むように並び、露出していた（第13図・36図）。この石囲いの中心部から人骨片ＳＸ59が出土。盛土内からは常滑産大甕の破片（86）や甕の破片（73・91）なども出土した。大甕は12世紀後半代に、甕は15世紀前葉頃に比定される。共に、接合可能な他の破片が複数ヶ所から出土しており、確証はないが、甕の大きさからみて本来は当墓に付随の遺物ではないかと考える。

南接する183号墓と併せると、全体規模で4.7×3.5mにもなる大区画は、石列の方向が周囲と異なる特異な存在。その区画東辺は184号墓の区画東辺と約35度の角度をなす。即ち当墓は、概ね等高線に沿って築造された先行墓を削閉してその上に造成されたと言える。その時期は上記の甕類が一つの推定基準にはなるが、生産地の編年観をそのまま墓などの築造年代に当てはめることは出来ず、伝世期間を考慮する必要がある。屋根があったかどうかは不明だが、機能としては所謂「納骨堂」のような施設を想定している。184号墓・185号墓・192号墓・194号墓等はその際に削閉された墓の残骸とみたい（第13図）。

盛土を除去する過程で、多数の川原石、古銭（銭11～14）や各種の陶器片等が出土した。周辺から出土の破片と接合の結果、経筒外容器筒身が少なくとも6個体分はあり、他に外容器の蓋、常滑産甕（69・87）、渥美産壺、白磁碗（参考12）、山茶碗（53・参考５）、片口鉢（45・51）などの破片もある。それ自体が当中世墓の長年月にわたる変遷を物語るととも

に、かつて経塚が営まれた時代のあったことを強く印象づけた。

盛土除去後に、1.6×1.0mのコの字状の石列と径0.6m、深さ0.56mのピットも検出したが、それらが経塚に伴う遺構か否かは明らかにし得なかった。当墓では空風（火）輪A0871、一石五輪塔A0975（火水地輪）、（水）地輪A1013、地輪A662～3、A0765等を採取した。

183号墓　182号墓に南接付随する長方形区画で、規模は3.5×1.5m。数段の石垣の下に多数の石塔類が積み置かれてあった。この区画自体は墓とは思えず、182号墓の附属施設の印象が強い。但し、区画東南辺際で人骨ＳＸ281が、また263号墓との境界に近い西辺際では古銭（銭1）「洪武通寶」一枚が出土した。蔵骨器はない。いずれも削閉前の先行墓に伴う遺物と推測する。埋土中より片口鉢破片（45）、経筒外容器筒身破片（20・23・29）が出土した。また、積み置かれた石塔は、空風輪A0256～7・A0302、火輪A0459～A0467、水輪A0556～A0564、地輪A0570～A0573・A0759～A0764・A0958、相輪A1041など、計33点あった（写真第４図）。

184号墓　182・183号墓の築造により削閉を受け、それに東接する形で直角三角形状に残る。本来の規模を1.8×1.2mに復元可能。182号墓で出土したもっとも新しい遺物（73・91）が15世紀前葉頃に比定されるので、当墓は少なくともそれ以前に遡ると推定する。区画東南端の２ヶ所から人骨ＳＸ３・ＳＸ７が出土した。共に蔵骨器はなく、後者からは判読不能な古銭（銭15）と山茶碗小破片が出土した。火輪A0458、地輪A0574・A0757を採取した。

185号墓　182・183号墓に削閉を受け、形状・規模は不明。人骨ＳＸ73及び土師器鍋破片（108）、経筒外容器筒身破片（23）が出土した。土師器鍋（108）は14世紀末～15世紀前葉頃に比定でき、当墓はそれ以降の築造と推測する。

186号墓　残存度が悪く、形状・規模等は判然としない。人骨ＳＸ２は出土したが蔵骨器はない。ＳＸ２で14世紀中葉～後葉頃の土師器小皿破片（151）が伴出し、また埋土中からは13世紀中葉代の山茶碗破片（参考３）が出土した。当墓は14世紀末頃以降に出現した可能性がある。空風輪A0025を採取し、近接地で相輪A1029なども採取した。

187号墓　185号墓に東接した1.4×1.1mの長方形墓。全面石敷きで、その間から土師器や常滑産甕の細片は出土したが、人骨はない。区画中央部に石（0.4m大）を据えるのは、173号墓や204号墓ほかいくつもの類例がある。

188号墓　形状・規模は不明だが、187号墓の区画北東辺を共用した小規模な後出墓と推定。刀子（鉄参考35）が１点だけ出土している。

189号墓　184号墓の北東にある。区画用配石の一部が欠失するが1.6×1.2mの長方形墓と復元。区画石列が平行する184号墓等とは同時期で、182号墓・183号墓に先行する墓の一つと推測する。（空）風（火）輪A0813のほか、宝篋印塔笠部破片も採取した。

190号墓　189号墓の東南側に接した1.6×1.2mの長方形墓。区画内をほぼ東西に石列が走り、189号墓との間は幅0.3m内外の通路に見える。その狭い通路のような空間から人骨ＳＸ74が出土した。蔵骨器はない。埋土中から12世紀中葉～後葉頃の山茶碗底部破片（参考２）が出土した。当墓は当然のことながら、それよりも後代の築造である。

191号墓　190号墓に東接。1.7×1.3mの長方形墓。区画中心部を外れた３ヶ所から人骨ＳＸ４・ＳＸ５・ＳＸ６が出土。蔵骨器はない。人骨ＳＸ６は下顎骨で、区画北東辺の配石中でやや墓道側にはみ出た状態の石の下から出土。それは、平坦面を内に向けた2個の石で上下から挟むような形で埋もれていた。通常の埋葬とするには疑問がある。

192号墓　194号墓に西接、182・183号の築造により削平を受けた。現状で1.2×0.9mの長方形墓に復元出来る。

193号墓　192号墓に東接する1.1×1.0mの方形墓。区画石の配列方向が近似するため、184号墓等と同様、182号墓・183号墓に先行した墓と推測。空風（火）輪A0806、地輪A0582を採取した。

194号墓　183号墓に削平され原形を留めず。現状で1.3×1.3mの方形墓と推定。区画北東端で人骨ＳＸ282が出土。その出土地点には0.6×0.5mの石囲みがあり、空閑地を転用した後代の墓の可能性を考慮すべきかもしれない。

195号墓　193号墓に東接した1.3×1.1mの方形墓。

中央部やや南寄りで人骨ＳＸ144が出土した。蔵骨器はない。空風輪Ａ0027 ～ 8・Ａ0266、火輪Ａ0315、水輪Ａ0474、地輪Ａ0756などを採取した。

196号墓　194号墓の東南で1.9×1.1ｍの長方形墓。区画西寄りの地点で人骨ＳＸ77が出土した。蔵骨器はない。埋土中から土師器小皿破片（181 ～ 5）、常滑産甕破片（91）、天目茶碗破片（68）が出土した。空輪Ａ0002、風輪Ａ0011、空風輪Ａ0031・Ａ0265・Ａ0296 ～ 7などを採取した。

197号墓　196号墓の東南に接した1.5×1.4ｍの方形墓。２ヶ所から人骨ＳＸ100・ＳＸ104が出土。196号墓に近いＳＸ104は、地面に穿たれた径0.25ｍ、深さ0.14ｍの穴から多量の人骨が出土した。かつては有機質のものに収めて納骨したものであろう。火輪Ａ0313、地輪Ａ0578を採取した。

198号墓　197号墓の北東で、1.5×1.2ｍの長方形墓。人骨小破片ＳＸ173や土師器細片が出土したが、混入の可能性が高い。地輪Ａ0579を採取した。

199号墓　198号墓に北接、1.3×1.2ｍの方形墓。土師器細片、陶器細片が埋土から出土するが器種・時期は不明。近接して相輪Ａ1026等宝篋印塔の部品破片などを採取した。下層土壙ＳＫ504（Ⅲ類）とは別の遺構である。

200号墓　正確な形状･規模の確定は難しいが、2.2×2.0ｍの方形墓を想定した。区画東辺側の縁辺部で人骨ＳＸ75を検出。蔵骨器はない。埋土中から、土師器皿小破片（113）や13世紀前葉代の山皿小破片（参考11）などが出土。当墓はそれ以降の築造と推定。隣接の188号墓より後出の可能性もある。

201号墓　東・南側斜面崩落のため形状・規模は不明だが、一辺1.7ｍ前後の方形墓を推定。埋土中から土師質円筒状容器の底部破片（30・31）や経筒外容器筒身破片（29）が出土した。空風輪Ａ0071 ～ 0072、火輪Ａ0346を採取した。

202号墓　198・199号墓の東南に接する2.7×1.5ｍの長方形墓。区画北東端で宝篋印塔屋根部破片Ａ1044、相輪Ａ1027 ～ 8など、宝篋印塔の部品ばかりを採取したのが特徴である。

203号墓　197号墓に東接、202号墓に西接する1.3×1.1ｍの方形墓。197・202号墓の区画配石の一辺を共用した後出の墓と推定。地輪Ａ0576 ～ 0577などを採取した。

204号墓　203号墓に更に東接した1.1×1.0ｍの方形墓。平坦面を持つ0.45ｍ大の石を残すが、そのすぐ北隅で人骨ＳＸ78が出土した。蔵骨器はない。採取した地輪Ａ0634 ～ 0635は当山では珍しく非砂岩系の石材であった。平坦面をもつ石を据えた類例は、173号墓や187号墓など多数ある。

205号墓　195号墓の東南側で、2.5×1.9ｍの長方形墓。石列方位の相違から、182・183号墓築造以前のものと思われる、区画長辺の石列が明瞭。水輪Ａ0555を採取した。

206号墓　205号墓の東南側で区画の配石列を揃える1.8×1.7ｍの方形墓。火輪Ａ0317、地輪Ａ0580・Ａ0674を採取。平面上は下層土坑ＳＫ510（ＩＢ類）と重複する。

207号墓　204号墓に東接し、206号墓に北接する1.7×1.3ｍの長方形墓。区画中央部から西寄りで人骨ＳＸ9及び刀子（鉄２）が出土。蔵骨器はない。水輪Ａ0554、地輪Ａ0575を採取した。

208号墓　202号墓の東南にある1.7×1.2ｍの長方形墓。３ヶ所から人骨ＳＸ1・ＳＸ174・ＳＸ175が出土した。北東端の人骨ＳＸ1には蔵骨器はない。南西側の人骨ＳＸ174は14世紀代の常滑産壺（46）に収まり、小刀（鉄12）が伴出した。中央の人骨ＳＸ175は14世紀中葉頃の常滑産三筋壺（47）に収まり､刀子（鉄1）が伴出した。一石五輪塔Ａ0989を採取した。当墓は上記常滑三筋壺を指標とし、14世紀中葉以降後半代に築造されたと推定する。

209号墓　208号墓の東にあり区画北辺を欠失するが、推定2.0×1.8ｍの方形墓。水輪Ａ0476・Ａ0528を採取した。

210号墓　209号墓に南接する一辺1.6ｍの方形墓。出土遺物はなかった。

211号墓　206号墓から幅0.2 ～ 0.3ｍの墓道（分岐した通路）を間に挟んで東南側にある、2.0×1.7ｍの長方形墓。出土遺物はない。区画の石列の方向が面を揃えて一致するので、205・206号墓とほぼ同時期に存在したと推測する。

212号墓　210号墓と211号墓の間には本来幅0.5ｍ前後の墓道（分岐した通路）が走るが、その空間を転用した後出墓である。人骨ＳＸ150が出土した。蔵

骨器はない。

213号墓　211号墓の東南に接する径1.5mの円形状墓。出土遺物はない。

214号墓　213号墓の北側にある。210号墓との間に幅0.5mの通路を挟む。規模1.3×1.2mの方形墓である。

215号墓　幅0.2～0.3mの通路を挟み214号墓の東に接する、1.1×1.0mの方形墓である。

216号墓　区画用配石の大半を失うが、通路を挟み215号墓の南側に接する1.6×1.3mの長方形墓である。

217号墓　215号墓の東南側0.5mの所にある、1.3×1.2mの方形墓。平面上は下層土壙ＳＫ525（Ⅲ類）がほぼ重複するが、別の遺構と考える。

218・219号墓　217号墓の東側２mの所にあり、共に大半の区画用配石を散逸するが、前者を1.0×0.8m、後者を一辺0.9m内外の、それぞれ方形墓と推定した。出土遺物はない。

220号墓　219号墓の南側３mの所にある。区画の配石に乱れや欠失部分がある。最大で2.7×2.5mの規模と推定。想定区画内に高さ約0.3mの墳丘状盛土が残る。区画の中心部を外れた北寄りに偏して人骨ＳＸ176が出土。骨は12世紀末～13世紀初頭の渥美産壺（40）を蔵骨器として納められ、13世紀前葉～中葉頃の山茶碗（56）を蓋にしていた。蔵骨器の周囲は炭化物と焼土の混在した土に覆われていた。盛土上から出土の土師器皿破片（136）は後代の混入と考える。13世紀後半代にその築造時期を求めることも可能ではないかと思う（遺構第35図参照）。

221号墓　220号墓の北側約４mの所にある。2.1×2.1mの方形墓だが、外側に周溝ＳＤ875～876がめぐる方形周溝墓。配石区画内に高さ0.26～0.34mの墳丘状盛土が残る。周溝の幅は0.6～0.85m、深さ0.3～0.4m、西側に幅が僅か0.1mほどの陸橋部を残す。周溝の東側は227号墓の周溝ＳＤ877に切られているため、221号墓は227号墓より古い（遺構第21図）。周溝ＳＤ876の埋土からロクロ土師器皿底部破片（36・37）が出土した。他に遺物がないため、当墓はそれ以降の築造と位置づけるしかない。盛土の下層で火葬土坑ＳＫ533（ＩＢ類）を検出し、刀子（鉄04）が出土した。火葬土坑をそのまま墳墓にしたものである。土坑と一体となった方形周溝墓の形態は100号墓や243号墓にもある。これは当中世墓群の初期段階における典型的な墳墓形態を示している。

222号墓　220号墓の東にあり、0.5～0.6m大の川原石を何個も使う堅牢な造りで、一辺1.8m四方の方形墓。空風輪Ａ0136を採取した。下層に火葬土坑ＳＫ546（ＩＡ類）が重複していた。人骨等の出土はない（遺構第14図）。

223号墓　222号墓の北側で、下層に土壙ＳＫ547（Ⅳ類）を伴う一辺1.2m内外の配石墓であったと推定。空風火輪Ａ0798は区画用配石の一部に転用された可能性がある。人骨等の出土はなかった。

224号墓　221号墓と223号墓の中間にも、一辺1.3m前後の方形墓を推定した。想定区画中央部に径約0.5mの小規模な土坑を検出したが、遺物等はなかった（遺構第12図）。

225号墓　222号墓の東側にある1.2×1.1mの方形墓。人骨等の遺物はない。区画南西隅の配石に転用された水地輪Ａ0892を採取。墓はこの石塔より新しい（遺構第16図）。

226号墓　225号墓の北東３mにある。区画北西側の配石は散逸したが、2.0×1.8mの方形墓を想定。区画に東接して刀子（鉄17）が出土したほか、水地輪Ａ0881も採取した。

227号墓　下記②墳丘状遺構で報告する。（28頁）

228号墓　222号墓から幅0.6mの通路を挟んだ南東側にある。1.7×1.6mの方形墓。南接の383号墓に先行する。空風（火）輪Ａ0841～2、火輪Ａ0375を採取した（遺構第14図）。

229号墓　228号墓と230号墓との墓間通路を転用した後出の墓で、規模は概ね1.7×0.9mである。人骨ＳＸ62と土師器小皿破片（222）が出土した。蔵骨器はない。土師器小皿（222）は14世紀末～15世紀前葉頃に比定した。当墓はそれ以降の所産と考える（遺構第14図）。

230号墓　0.5～0.6m大の石を使う堅牢な造りで、一辺1.8m四方の方形墓。区画の北西に偏して0.4m大の川原石が据わり、下から人骨ＳＸ52が出土した。蔵骨器はない。空風輪Ａ0135を採取。平面上は下層土壙ＳＫ555（Ⅲ類）が重複する。区画石列の共有関係から推して397号墓に先行する墓である（遺構第16図）。

231号墓　230号墓に東接する1.9×1.4mの長方形墓。区画西寄りで0.45m大の川原石の下から人骨ＳＸ

53が出土した。蔵骨器はない（遺構第16図）。

232・233号墓　230号墓から約0.3ｍの通路を挟み北側に続く小規模な２基の墓。前者は1.1×1.0ｍ、後者は一辺1.3ｍの方形墓。後者で空風火輪Ａ0785を採取した。いずれも人骨などは残っていなかった（遺構第16図）。

234号墓　230号墓・231号墓の東にある。2.0×1.9ｍの方形墓。区画内に高さ約0.36ｍの墳丘状盛土を残す。梵字入りの水輪Ａ0513を採取。これは238号墓で採取した空風輪Ａ0120とセット関係を想定出来る。人骨等はない。平面上、下層の火葬施設ＳＫ558（ＩＡ類）の約半分が重複するが、これは当墓とは別の遺構で、後に詳述する（34頁）。

235・236号墓　下記②墳丘状遺構で報告する（28～29頁）。

237号墓　236号墓の隣にあるが、形状・規模は不明で、半楕円形状の土坑と0.3～0.6ｍ大の川原石３個が検出された。

238号墓　234号墓の南隣にある1.5×1.4ｍの方形墓。239号墓に先行する墓。梵字入りの空風輪Ａ0120を採取。これは、234号墓の水輪Ａ0513とセット関係になる可能性が高い。

239号墓　238号墓と240号墓に挟まれた1.8×1.7ｍの方形墓。238・240号墓より後出の墓。中央部に0.6ｍ大の石が据わるが、遺物はなかった。

240号墓　239号墓に東接する。区画用の石に0.6～0.9ｍ大の石を使用した1.9×1.5ｍの堅牢な長方形墓。区画内に高さ0.4～0.42ｍの墳丘状盛土を残す。空風輪Ａ0121を採取。平面上、下層土坑ＳＫ568（ＩＡ類）が重複する。239号墓より先行するが、後述243号墓の周溝の一部が当墓の下に埋没しているので、それよりは新しい（遺構第16図及び第38図）。

241号墓　240号墓に取付く2.2×1.0ｍの長方形墓。243号墓より新しい。火輪Ａ0370、地輪Ａ0623を採取した。

242号墓　241号墓の東隣にある1.3×0.9ｍの長方形墓。遺物はない。やはり243号墓より新しい。

243号墓　地形測量時から高さ約0.5ｍの墳丘状の盛土が顕著だった。配石区画の規模は2.5×2.4ｍ。区画内部の盛土の下で、長径1.2ｍ、短径0.8ｍ、深さ0.2ｍ、四隅を突出させた、ムササビ形状の火葬土坑ＳＫ570（ＩＢ類）を検出した。対角線上の距離は1.8×1.7ｍ。土坑の掘形は焼土で赤く、埋土中には炭化物と少量の人骨ＳＸ177が混入していた。配石を除去し、周辺全体を0.04～0.3ｍ程掘削する過程で周溝ＳＤ879を検出。幅0.5～1.0ｍ余（底部幅0.4～0.6ｍ）、深さ0.25ｍ前後の溝が東・南・西側三方に巡り、北（谷）側に開く。火葬土坑ＳＫ570の三方に周溝を掘り、方形状に盛土しつつ配石区画を築造した後に、供養塔（卒塔婆か石塔かは不明）を建てたと推測される（個別遺構第38図）。主体部を示す土坑と墓域を示す周溝とを伴う点は、上記100号墓・221号墓にも類例があった。形態上は方形周溝墓と言うべく、規模や時期差などを無視すれば、類例は県内外にある（註5）。

244～246号墓　いずれも243号墓の区画東辺に接して造られた後出の墓。３者の規模・形状はそれぞれ1.3×1.3ｍの方形墓、長径1.1×短径0.6ｍの楕円形墓、1.9×1.6ｍの長方形墓とする。３者で最も新しい245号墓は両者の間に割込むように造られ、全面石敷きで、人骨ＳＸ169が出土したが、蔵骨器はない。244号墓で空風輪Ａ0029、水輪Ａ0475を、246号墓で空風輪Ａ122を採取した（遺構第16・38図）。

247号墓　248号墓に北接する。配石散逸で規模・形状は不明。現状では2.0×1.0ｍ分だけ復元可能。南側に偏して人骨ＳＸ128が出土し、空風（火）輪Ａ0840、火輪Ａ0369を採取した。蔵骨器はない。

248号墓　247号墓の南辺に接する一辺1.2ｍの方形墓。区画配石の配置状況から見て、247号墓に先行する墓だろう。遺物等はなかった。

249号墓　248号墓の東に続く。配石列が一部乱れるが、最大で3.2×1.8ｍの長方形墓。区画の南辺を共用する414・443号墓に先行する墓。土師器の高台付碗底部破片（80）、小皿破片（235）が出土した。

250号墓　幅約0.3ｍの墓間通路を隔て249号墓の東に並ぶ。3.0×1.8ｍの長方形墓。区画内に高さ0.4～0.44ｍの墳丘状盛土が残る。地輪Ａ0681を採取。下層土坑ＳＫ594（ⅡＡ類）が重複する。

251号墓　249号墓から4ｍ北方にある。1.2×1.2ｍの方形墓。下層土壙ＳＫ579（Ⅳ類）が概ね重複する。

252～256号墓　251号墓の南東側に散らばるように５基ある。本来は配石列の方向を揃えていたと推測され、250・257号墓等の規制を受け一定の墓域を構成した可能性もある。いずれも、一辺がおおむね

1.2～1.0m規模の方形墓である。遺物等はなかった。

257号墓　幅0.2～0.3mの墓間通路を隔て250号墓の東側にある。2.7×1.9mの長方形墓。区画内に高さ約0.3mの墳丘状盛土を残すのみ。遺物はない。

258号墓　257号墓との間に0.4～0.5m幅の通路を隔てた、一辺1.5mの方形墓。遺物はない。

259号墓　258号墓との間に0.4m幅の通路を隔てる。0.9m四方の方形墓。遺物はない。

260・261号墓　259号墓に続く方形の墓。前者は1.6×1.2m、後者は1.0×1.0mで、共に遺物はない。総じて、これら尾根筋上に展開した配石区画墓の石は比較的大きく、立派で、石列方位も似通っており、ほぼ同じ時期に並立存在した可能性があったかも知れない。

註4　荒井勘之丞『寄墓日記』に、「古墓の土を持来りて」と見ゆ。

註5　兵庫県教育委員会編『宝林寺北遺跡』(兵庫県文化協会、1987年）にも、中世墓としての方形周溝墓が報告されている。

d）南・東側斜面（262～460号墓、第13表および遺構第13図～第16図参照）

グリッド名Ｉ16～Ｊ16からＮ26～Ｏ26に及ぶエリアで、調査Ａ地区のおおむね西側から東方向に広がる南斜面（第９図）を扱う。墓数や検出遺構状況から見て、当中世墓群で一番の配石区画墓密集地帯である。本来は墓間通路と思しき空閑地からも人骨が出土する利用頻度の高い墓域もあった。

特にグリッド名Ｌ24～Ｍ24・25の地帯は、遺構が混ぜんとして不明瞭な点が多い。本来はあったはずの納骨場所に対する一定のルールが最早崩れたか、或いは墓の上に重ねて墓を造ったかとさえ思えるほど石の重複した（それは後世の現状変更の結果かも知れないが）特異な墓域もあった。

262号墓　162号墓と182号墓の間にある。形状・規模は不明だが、2.0×1.1mの長方形墓と推定。160号墓～162号墓の南東側を南北方向に走る通路に面していたと推測する。古銭（銭２）「永楽通寶」が１枚だけ出土した。

263号墓　262号墓に南接する1.5×1.4mの方形墓と推定。区画東隅から人骨ＳＸ55が出土。蔵骨器なし。南側（183号墓西端）で古銭（銭１）「洪武通寶」が１枚出土した。

264号墓　263号墓から幅0.4mの墓間通路を隔てた南西側にある。1.5×1.1mの長方形墓。区画中央のやや北よりから人骨ＳＸ56が出土。蔵骨器なし。埋土から14世紀後葉～15世紀初頭頃の常滑産甕の小破片（87）が出土（同個体の別の破片は182号墓からも出土)。当墓の築造時期はこの甕（87）より新しいと考える。

265号墓　264号墓に東接。配石に移動があり判然とせぬが、人骨ＳＸ145の出土を以て墓の存在を推定した。蔵骨器はない。埋土から12世紀中葉頃の山茶碗小破片（52）が出土したので、当墓はそれより後の築造である。同一個体の破片は80号墓からも出土した。

266号墓　192号墓の南西側に接したと思われ、出土した人骨ＳＸ10・ＳＸ142・ＳＸ143のうち、少なくともＳＸ10とＳＸ143は当墓のものと判断した。ＳＸ142とＳＸ143との中間で鉄釘（鉄52）が出土。ＳＸ142は267号墓に伴う可能性もある。いずれも蔵骨器はない。埋土中から土師質円筒状容器底部破片（30・31）、常滑産片口鉢破片（45）、経筒外容器筒身破片（29）が出土した。土師質円筒状容器底部破片（30・31）の同一個体で別の破片が201号墓から、常滑産片口鉢破片（45）の別破片が182・183号墓から、また経筒外容器筒身破片（29）の別破片が99号墓、182・183号墓、201号墓などからも出土している。相輪Ａ1017も採取した。当墓は14世紀代以降の築造と推定する。

267・268号墓　幅0.2m前後の墓間通路が北西から南東方向に僅かに残るため、その左右に対面する墓を想定。266号墓に南接する267号墓の規模は不明。先記の人骨ＳＸ142は当墓のものかも知れない。空（風）輪Ａ0299を採取した。268号墓は1.5×1.2mの長方形墓と推定。水地輪Ａ0903・相輪Ａ1018を採取した。

269～272号墓　268号墓の西側にほぼ東西方向に連なる。前２者は共に1.1×1.1mの方形墓。269号墓は270号墓の北西辺に取付いた後出墓。後２者は残存度が悪いが、271号墓は1.5×1.1mの長方形墓、272号は1.3×1.3mの方形墓で、ここでは地輪Ａ0639を採取した。これらの規模や区画配石の並ぶ方位は192・193号墓、195号墓などとよく似ている。

273号墓　271号墓の南西側に接する1.2×1.1mの方形墓。141号墓や187号墓などと同様に全面に石を敷詰める。区画中央南よりで14世紀前半代と思える土師器鍋（102）と人骨ＳＸ８及び刀子（鉄27）が出土。鍋の上に0.28m大の平坦な川原石（厚み0.11m）を蓋石として置き、蔵骨器に転用された鍋(102)は潰れていた（遺構第34図）。刀子(鉄27)は渦巻き状に曲げられていた。鍋に埋納するためコンパクトに変形したもので、副葬品における形骸化の姿を見る。蓋石の上に五輪塔を据えれば、典型的な中世墓の一形態となる。当墓の西側通路で火輪Ａ0323・Ａ0398を採取した。

274 ～ 278号墓　273号墓の南側にある。5基のうち276号墓を除く4基はいずれも径1.0 ～ 1.4mの円形墓、276号墓は1.3×1.1の方形墓であろう。275号墓では区画石の間から人骨ＳＸ151が出土、またその0.3m西側で刀子（鉄16）が出土した。円形状に一番よく石が遺っていたのは277号墓だが、遺物はなかった。

279 ～ 281号墓　277号墓の北側にある。279号墓は277号墓との間に幅0.2 ～ 0.3mの墓間通路を挟む一辺0.9m前後の方形墓で、区画北辺の石列を欠く。水輪Ａ0478などを採取した。280号墓はその東側の集石部分で、1.1×0.9mの長方形墓と推定。281号墓は更にその北の円形状墓で、径約1.1m。いずれも遺物はなく、築造時期は不明。両墓の間は狭い墓間通路の可能性がある。

282 ～ 284号墓　281号墓、283号墓、285号墓に挟まれたＬ字状の空間はもともと幅約0.4 ～ 0.5mの墓間通路であった。その空閑地の２ヶ所から人骨ＳＸ11とＳＸ162とが出土した。ＳＸ162から15世紀中葉頃の土師器羽釜破片（94）が、またＳＸ11からは16世紀代の土師器羽釜破片（93）がそれぞれ伴出。ともに墓間通路を転用した後出の墓と判断し、282号墓、284号墓とした。前者で空（風）輪Ａ0289、空風（火）輪Ａ0851、水輪Ａ0529を、後者では空（風）輪Ａ0272、水地輪Ａ0873、相輪Ａ1043を採取。両墓に先行する283号墓は1.5×1.1mの長方形墓で、遺物はない。下層土坑ＳＫ500（ⅡＢ類）の大半が重複するが、両者の関係は不明であった。

285号墓　284号墓に先行する2.1×1.9mの長方形墓で、一石五輪塔Ａ0990を採取した以外に遺物はなく、築造時期は不明。北東側の205号墓との間に幅0.5 ～ 0.7mの幹線墓道の一つを形成したであろう（写真第４図）。

286 ～ 290号墓　280号墓の南側にあり、283号墓の区画東辺の石列に方位を揃えていたと推定。最もよく遺る286号墓は1.2×1.1mの方形墓。287・288号墓はそれぞれ一辺が1.0mと0.9mの方形墓。後者で空風輪Ａ0033・Ａ0290を採取。289号墓は288号墓の区画の一部を共用した後出の墓と推定。290号墓は、向い側の291号墓に墓道を挟んで対面する位置にあった。火輪Ａ0453・地輪Ａ0638を採取した。以上５基からは人骨の出土はなかった。

291号墓　幅0.2m程の墓間通路を挟み、290号墓の東側にあった。形状・規模は不明だが、1.0m前後の方形墓。想定区画の南西に偏した２ヶ所から人骨ＳＸ12・ＳＸ13が出土した。後者の直上には蓋石として扁平な石が据えてあった。かつてはその直上に五輪塔を据えていた可能性が高い。

292・293号墓　幅約0.2mの通路を挟み、286号墓 ～ 290号墓と向い合う。前者292号墓は一部を欠失するが、径1.5mの円形状墓で全面石敷きである。埋土中にロクロ土師器皿底部破片（33）が混入していた。空風輪Ａ0034・Ａ0035を採取。後者293号墓は通路側と東側の区画石を一部残すだけだが、一辺が1.5m前後の方形墓と推定。空風輪Ａ0032、火輪Ａ0324を採取した。

294 ～ 297号墓　294号墓は293号墓に北接する一辺1.3mの方形墓。空風輪Ａ0158を採取。285号墓の東辺を利用して取付く後出の295号墓は2.4×1.8mの長方形墓。空風輪Ａ0057、空風（火）輪Ａ0805を採取。294号墓と297号墓に挟まれた空閑地を利用した後出の296号墓は1.5×0.9mの長方形墓と推定。（空）風輪Ａ0251を採取。279号墓は295号墓に南接するも区画石列を共用せずに造られた1.3×1.2mの方形墓。東側の墓間通路で空風輪Ａ0056、水輪Ａ479を採取。これら４基からも人骨等は出土しなかった。

298・299号墓　前者は297号墓の南側にあり、区画石を一部欠くが1.4×1.1mの長方形墓と推定。その東側の299号墓は一辺1.3mの方形墓。共に遺物はない。両墓の区画石列は294 ～ 297号墓等のそれと方位が異なり違和感がある。寧ろ317・318号墓～ 214・

215号墓などと近い方位を示し、等高線の変化によるか、ないしは墓地経営における勢力圏の違いなどを反映する可能性があるかも知れない。

300～306号墓　７基を一群の墓と見たい。幅0.2～0.3mの通路を挟み292号墓の東にある300号墓は、1.2×1.1mの方形墓。区画中央部から人骨ＳＸ161が出土し、火輪Ａ0396を採取した。蔵骨器はない。これに東接する301号墓は一辺0.1m前後の方形墓で、人骨はなく、空風輪Ａ0157を採取。南側配石区画の半分を欠失する302号墓は一辺1.0m程度の方形墓で、区画中央部に平坦面を持つ0.5m大の川原石が据わるが、人骨の出土はなかった。扁平な石が据わる類似例には、173号墓、187号墓、204号墓などがある。300号墓に隣接する303号墓は径1.1mの円形状墓であろう。やはり人骨はない。その東の304号墓は現状で一辺0.9m四方の方形墓、これも人骨はなく、地輪Ａ0581を採取。それに東接する305号墓は1.0×0.9mの方形墓。区画南辺際で人骨ＳＸ14が出土したが蔵骨器はない。最も東にある306号墓は、302号墓との境界が不明瞭だが、一辺1.1m前後の方形墓と推定。人骨はないが、空風輪Ａ0036、火輪Ａ0321のほか、５個体の地輪Ａ0700～Ａ0704を採取。このうち地輪Ａ0702～Ａ0704の３個体は区画用の配石（東辺）に転用された可能性が高い。

307号墓　295・297号墓との間に0.5～0.6m幅の墓道を挟み、211号墓との間にも墓道を造った長方形墓と推定。規模は2.1×1.4mと推定。遺物はなかった。

308号墓　307号墓に東接する0.9×0.6mの長方形墓。307号墓と310号墓との墓間通路を転用したと推定する。

309号墓　308号墓の北にあり、区画配石の一部を欠失するが、1.3×1.3mの方形墓とした。213号墓、313号墓との間に通路を形成する。出土遺物はない。

310号墓　309号墓の南東に接するが区画石を共用しない1.5×1.3mの方形墓。人骨はなく、水輪Ａ0480、（水）地輪Ａ0908を採取した。

311号墓　310号墓と312号墓に挟まれた空閑地に後から造られた、一辺1.1m程度の方形墓。墓間通路を画すＬ字状の列石までを含むと1.6×1.1mの長方形墓になる。空風輪Ａ0150を採取。302号墓ほかにもあったような平坦面をもつ0.4m大の石をここでは２個据える。人骨はなかった。

312号墓　315号墓の区画石の西辺に取付く形で後に造られた1.1×1.0mの方形墓。遺物はない。313号墓、316号墓との間にそれぞれ狭い通路を形成する。南側の墓間通路で空風輪Ａ0151、（水）地輪Ａ0900を採取した。

313号墓　311・312号墓の北側にあるも、区画石の共用関係はない。径1.8mの円形状墓と推測。区画配石の切り合い関係からみて、315号墓より後出の可能性が高い。

314号墓　区画石の残存状況から、315号墓の北辺を共用する2.0×1.0m以上の長方形墓があったと推定。遺物はない。

315号墓　312～314号墓に先行し、0.6～0.7m大の石を用いた1.9×1.8mの方形墓。下層に重複の土坑ＳＫ521（ＩＡ類）はやや特異な土坑で、底部全面が灰で覆われていた（第15表）。

316号墓　315号墓のやや南西側にある1.3×1.2mの方形墓。東接の331号墓とも区画石を共用せず、独立性をもつ。人骨はなく、空風（火）輪Ａ846～7、地輪Ａ0627を採取した。

317号墓　316号墓の西側約3mにあり、308号墓と318号墓とに挟まれている。310号墓の区画南西角部、318号墓の区画北辺を共用した一辺1.3m前後の方形墓と推定。人骨はなく、火輪Ａ0391だけを採取した。

318号墓　現状で2.4×1.1mの長方形墓。東西両短辺の際で人骨ＳＸ15とＳＸ16とが出土。共に蔵骨器はない。後者ＳＸ16は平坦面を持つ0.3m大の石の際に埋納される。類例には120号墓、129号墓、140号墓、204号墓、230号墓、319号墓、335号墓などがある。空風輪Ａ0155、火輪Ａ0319、地輪Ａ705を採取した。区画配石の切合い関係から、319号墓よりは後出で、317号墓や320号墓には先行した可能性が高い。

319号墓　長径2.0m、短径1.0mの長楕円形。区画石の切合い関係からみて、318・320号墓には先行すると推定。区画内の北西に偏して、平坦面を持つ0.3m大の石が据わり、その直下から人骨ＳＸ105が出土。蔵骨器はない。下層土壙ＳＫ519（Ⅲ類）が概ね重複するが、別の遺構である。

320号墓　318号墓の区画南辺を共用せずに南接する。復元して約1.3×1.2mの方形墓と推定。４ヶ所

から人骨ＳＸ38及びＳＸ106 ～ＳＸ108が出土。蔵骨器はない。いずれも区画縁辺部からの出土で、特にＳＸ108は318号墓の区画石との隙間から出土し、納骨のあり方に疑問がある。空（風）輪Ａ0267、空風輪Ａ0039、地輪Ａ0680を採取した。

321号墓　320号墓同様、これも318号墓の区画南辺を共用せずに南接する。復元して一辺1.3m四方の方形墓。人骨はなく、火輪Ａ0318を採取。先の320号墓と一体の長方形墓であった可能性もあるが、採らず。

322号墓　320号墓の区画南辺、327号墓の区画西辺をそれぞれ共用する、一辺1.0m前後の方形墓。区画中央部から人骨ＳＸ170が出土した。蔵骨器はない。

323 ～ 325号墓　321号墓の区画南辺を共用する324号墓と322号墓との間に323号墓を想定し、一辺1.0m内外の方形墓とした。地輪Ａ0699を採取。324号墓は一辺1.2m前後。火輪Ａ0395、水輪Ａ0524を採取。平面上、下層土壙ＳＫ515（Ⅲ類）と重複するが、別の遺構である。322・323号墓の南側に一辺1.3mの325号墓を想定。想定区画の北東隅で人骨ＳＸ29が出土。蔵骨器はない。一石五輪塔Ａ0931を採取した。

326号墓　316号墓の南隣にある1.2×1.1mの方形墓。どの墓とも区画の一辺を共用せず独立性を保つ。遺物はない。

327・328号墓　新旧関係の明白な墓。まず一辺1.8m四方の327号墓が出来、その区画内に一辺0.8m四方の小さな328号墓が後から出来た。前者327号墓に人骨は遺らないが、後者の区画中心部からは人骨ＳＸ28が出土。蔵骨器はない。前者で空（風）輪Ａ0270を、後者で空風輪Ａ0040、火輪Ａ0452、（水）地輪Ａ0886、一石五輪塔Ａ1000を採取。但し、火輪Ａ0452以下の３点は328号墓の造成時に他より集めて区画用の配石に転用したものであることが一目瞭然であった。後者の後代性を示す。

329・330号墓　幅0.2m足らずの墓間通路を隔て327号墓の南隣に２基が並ぶ。区画配石の半分以上を失い規模は不明だが、現状で前者329号墓は一辺が1.1m、後者は1.6mあった。前者では空風（火）輪Ａ0849、地輪Ａ0632 ～ 0633を採取した。共に人骨等の出土はなかった。

331 ～ 335号墓　Ｊ～Ｋ20地区内にこの５基が整然と一列に並ぶ。不定形な334号墓を除き他４基の規模はそれぞれ順に、1.5×1.2m、1.2×1.2m、1.2×1.2m、1.7×1.2mである。区画用配石の大きさ・並べ方・残存度からみて332号墓が他の４基に先行しただろう。217号墓や315号墓と区画用配石の配列方向が揃っており、墓の造成に何らかの規制が働いたことを予想させる。335号墓には区画南辺寄りに平坦面を持つ0.4m大の川原石が据わり、その直下から人骨ＳＸ25が出土した。蔵骨器はない。平らな川原石の据わる類例は318号墓・319号墓などのほか、比較的に多い。また、相輪Ａ1019も採取した。335号墓以外の4基には人骨はなかった。

336・337号墓　338号墓の南隣に鉤状の石列が残り、その短辺が２列残っていることから、335号墓の南隣にも336号墓があったと想定。336号墓の一辺は1.5m、337号墓の一辺を2.0mと推定。後者では２ヶカ所から人骨ＳＸ26・ＳＸ27が出土したが、蔵骨器はなかった。

338号墓　337号墓の北隣にあり、335号墓の区画東辺を共用する。1.6×1.0mの長方形墓。区画南西隅で人骨ＳＸ24が出土。蔵骨器はない。空風輪Ａ0051、相輪Ａ1020を採取。本来は315号墓方面から真っ直ぐ斜面を下って335号墓の所で左に曲がる墓間通路に当たっていたかも知れない。

339号墓　1.0×0.9mの方形墓。人骨の出土はなく、空風輪Ａ0050を採取した。

340号墓　315号墓方面へ通じる幅0.2m弱の通路を隔て339号墓の北に隣接する。区画石の一部が動いているが1.2×1.1mの方形墓。下層で人骨ＳＸ232と刀子（鉄20）を検出したが蔵骨器はない。これは当墓の埋葬人骨であろう。空風輪Ａ0041・Ａ0042・Ａ0141・Ａ0146を採取した。

341号墓　340号墓のすぐ北隣にある。0.8m大の石を含む配石区画の規模は1.2×1.2m。区画の南東に偏して２ヶ所から人骨ＳＸ17・ＳＸ152が出土。蔵骨器はない。空風輪Ａ0044 ～Ａ0045、地輪Ａ0626を採取した。

342・343号墓　幅0.2mの墓間通路を隔て、341号墓に北接する342号墓は、1.3×1.1mの方形墓で、343号墓の区画南西角を共用する。後者343号墓は一辺1.4mの方形墓で、区画配石の切合い関係から342号墓に先行したと推定。339号墓から342号墓までの

４基は、相互に配石区画の一辺を共用せずに築造され、通路を挟んだ反対側の331～335号墓とは対照的に独立形態を保つ。通路を挟み、同じ方向に並んでいても、築造背景は異なり、ここでは通路がひとつの「小墓域」を画する機能を有した可能性もあろう。

344号墓　343号墓と349号墓、353・352号墓とに挟まれた1.0×0.9mの方形墓。墓間通路であった空閑地を墓に転用したと推測する。上記の４ヶ墓より新しい墓である。

345～348号墓　通路を隔て、343号墓の北側に隣接して４基がかたまる。いずれも人骨はない。345号墓は343号墓とは区画石を共用せず独立存在し、1.5×1.3mの方形墓。346号墓は1.5×1.1m、347号墓は1.5×1.2mの長方形墓。両者は345号墓の区画北辺を共用したと推測する。最も原形を留める348号墓は1.4×1.3mの方形墓で、346号墓はこの区画西辺をも共用した。平面上は下層土壙ＳＫ532（Ⅲ類。個別遺構第40図）と概ね重複する。

349・350号墓　幅0.5mの墓間通路を隔て、348号墓の南に位置する349号墓は1.4×1.2mの方形墓で、下層土壙ＳＫ530（Ⅳ類）が概ね重複。この東に接する350号墓は1.6×1.3mの長方形墓。やはり下層土壙ＳＫ543（Ⅳ類）が重複するが、いずれも人骨等はなく、それぞれ別の遺構であろう。

351号墓　350号墓に南接する1.6×1.4mの長方形墓。区画中央部に扁平な５個の川原石を箱状に組み0.4×0.4mの空間を造る（個別遺構第34図、写真第５図）。類例は58号墓や411号墓にもあり、納骨施設と判断した。人骨の出土はない。

352号墓　351号墓に西接する1.4×1.1mの長方形墓。堅牢な349号墓の区画南辺を共用して造られた後出の墓。平面上、下層土壙ＳＫ529（Ⅳ類）と重複するが、別の遺構である。いずれも人骨等の出土はなかった。

353号墓　352号墓に西接する一辺1.2mの方形墓。人骨はない。該墓の区画南辺に沿い東西方向に走る幅0.2m内外の墓間通路は、342号墓から371号墓に（あるいは当初は382号墓にまで）至る約７～８m余の間を繋ぎ、小規模な墓域を画する機能を持ったと推測する。

354～357号墓　上記通路の南側に沿って東西に並ぶ4基の墓の規模は、それぞれ順に1.4×1.3m、0.8×0.8m、1.0×0.6m、1.5×1.2mである。いずれも人骨の出土はない。354号墓で火輪Ａ0390のほか、セット関係にある空風輪Ａ0254・火輪Ａ0451・水輪Ａ0552・地輪Ａ0698を採取。355号墓では火輪0385、地輪Ａ0697を採取した。半壊状態の空風火輪が区画用配石の一部に転用されていた。この点からも355・356号墓は354・357号墓に挟まれた墓間通路を転用した後出の墓と考えるのが妥当である。

358～360号墓　上述４基の墓の区画南辺を共用しつつ東西に並ぶ。これら３基の規模はそれぞれ、1.4×1.3m、1.3×0.9m、1.5×1.2mである。358号墓の区画東辺の石の際から人骨ＳＸ22が出土し、地輪Ａ0696を採取した。蔵骨器はない。360号墓では（空）風（火）輪Ａ0807、地輪Ａ0694を採取。両墓の間に挟まれた359号墓は、墓間通路（空閑地）を転用した後出の墓と推測する。遺物はなかった。

361～363号墓　359号墓に南接する361号墓は楕円形状を呈し、長径1.5m、短径0.6mである。墓間通路を転用した後出の墓と推定。区画東端部で人骨ＳＸ21が出土。蔵骨器はない。362・363号墓は共に配石区画の南半部を欠き、現存の一辺は各々1.5mと1.3mである。362号墓では２ヶ所から人骨ＳＸ23・ＳＸ48が出土し、空（風）輪Ａ0287を採取した。蔵骨器はない。後者では空風（火）輪Ａ0845を採取した。

364号墓　幅0.2mの通路を挟み363号墓の東側にある。一辺1.4m程の方形墓と推定。区画西端で、14世紀前半代の土師器鍋(103)を蔵骨器として人骨ＳＸ20と鉄釘（鉄53）等が出土した。鍋の直上に0.4m大の川原石を蓋にして据えてあった（個別遺構第37図）。

365号墓　364号墓の東隣にある。一辺1.5mの方形墓と推定。区画西隅に近い２ヶ所から人骨ＳＸ18・ＳＸ149が出土。蔵骨器はない。空輪Ａ0003、空風輪Ａ0053、火水地輪（一石五輪塔）Ａ0988などを採取した。

366号墓　367号墓の区画南辺に接する1.2×0.5mの長方形墓と推定。本来367・368号墓、372号墓の各区画南辺に沿って幅0.2m内外の東西通路があり、その一部を区切り、367号墓の南辺を共用する形で造られた後出墓である。人骨ＳＸ19が出土し、地輪Ａ

0695を採取した。蔵骨器はない。

367・368号墓　357号墓の東側に続く2基。前者は1.4×1.3mで出土遺物はなく、後者は1.5×1.3mの方形墓で、空風（火）輪A0844を採取した。いずれも平面上は下層土壙SK541（Ⅳ類）・SK542（Ⅲ類）がそれぞれに重複するが、共に一体の墓ではなく別遺構である。368号墓と372号墓に挟まれた隙間からも人骨SX165が出土。こういう所属不明の人骨が随所に出土するのが、A地区の南東斜面域の特徴でもあった。

369～371号墓　368号墓の北隣にある。369号墓と371号墓の２基は、先行してあった370号墓の区画石をそれぞれ共用して後から築造された。370号墓の区画には0.7m大の石も使われ、規模は1.6×1.4m。その区画南辺に半分ずつ取付く369・371号墓は、各々2.0×1.4m、1.4×1.1mの長方形墓。前者で空風（火）輪A0844を採取。平面上370号墓の下層には土壙SK545（Ⅲ類）が、369・371号墓には土壙SK544（Ⅳ類）が重複する。370号墓と371号墓の境界に接する通路内で人骨SX50が出土、蔵骨器はない。後代に墓間通路の片隅に納骨をした一例で、所属不明の人骨である。

372号墓　368号墓の東隣にあり、371号墓に南接する。一辺1.4mの方形墓。空輪A0142・A0271、空風輪A0142～3、火輪A0386、地輪A0691～2等を採取。地輪A0691は原位置を保ち、その直下で厚さ0.06mの扁平な石（0.26m大）を検出。更にその直下から人骨SX160が出土した（個別遺構第34図）。地輪直下に納骨された典型的な例で、類例は89号墓にもある。納骨穴は径0.16m、深さ0.06mで、有機質の容器に収骨し埋納したと推測。区画左半には0.4m大の扁平な石が２個据わり、その間からも人骨SX31が出土。埋土から土師器小皿小破片（192）が出土したが、蔵骨器はない。類例は318・319号墓、335号墓などにもある。当墓には平面上、下層土壙SK548（Ⅳ類）が重複するが、別の遺構である。

373～376号墓　幅0.2m前後の墓間通路を隔て372号墓の南側にある。365号墓に東接する373号墓は1.5×1.3mの方形墓。地輪A0679を採取。376号墓は残存する石を繋いで1.6×1.3mの長方形墓に復元。両墓間の通路を塞ぐ374・375号墓は、一辺が0.5m前後の方形墓。後者375号墓で採取した地輪A0693は区画用の配石に転用された可能性が高い。いずれも人骨等の出土はなかった。

377～382号墓　通路を挟み372号墓の南隣にある377号墓は、373号墓と区画の一辺を共用して東接する1.4×1.1mの長方形墓。その東南角に取付く378号墓は、現状で1.1×1.0mの方形墓。区画西端近くに平坦面を持つ0.35m大の石があり、意外にも人骨SX32はその石の直上から出土。通常の埋納とは思えず、無論蔵骨器はない。よく似た出土例は98号墓でも経験した。埋土から出土の土師器小皿破片（252～254）は、15世紀後葉から16世紀前半代にかかると思われ、378号墓はそれ以降の築造と推定。379号墓は一辺1.2m程度の方形墓と推定。火輪A0389を採取した。377号墓の区画東辺に取付く380号墓は372号墓の南東隣にあり、1.4×1.0mの長方形墓。更に北方向に並ぶ381・382号墓は、それぞれ1.2×1.1m、1.5×1.4mの方形墓。平面上は下層土坑SK549（ⅠB類）、SK551（Ⅲ類）がそれぞれ重複するが、別の遺構である。

383号墓　228号墓の区画南辺に取付く2.6×1.8mの長方形墓。区画西側の通路に近い配石際と228号墓に近い北東隅の２ヶ所から人骨SX49・SX51が出土。蔵骨器はない。人骨が区画隅から出土して、中心部からは何も出ない理由がよく解らない。南側の382・384号墓とは区画配石を共用せず独立し、397号墓が区画東辺に取付く状況から、造墓の新旧関係は、228号墓→383号墓→397号墓（382号墓・384号墓）の順であったことはほぼ確実である。

384～388号墓　382号墓に東接の384号墓は1.3×1.2mの方形墓。空風輪A0144、火輪A0387を採取。0.15m程度の細い通路を挟み384号墓の南側にある385号墓は1.2×0.8m、更に通路を挟み南側に隣接の386号墓は1.1×1.0mで、共に出土遺物はない。386号墓に南接する387号墓は1.5×1.3mで、区画中央部と北東隅の２ヶ所から人骨SX30・SX140が出土した。蔵骨器はない。388号墓の規模・形状等は不明だが、一辺1.0m前後の規模はあったと推測する。

389～398号墓　尾根筋上の230号墓から南側へ斜面を下って連なる10基。最南端の389・390号墓は区画南半の配石を欠失するが、共に1.3×1.2m前後の

方形墓。前者389号墓で火輪Ａ0382を採取。391号墓は1.4×1.2ｍの方形墓で、空風輪Ａ0134を採取。西側の386号墓との間に通路を挟み独立はするが、393・394号墓の区画石列に取付いて増設された新しい墓である。392号墓は1.2×1.0ｍの方形墓で、空風輪Ａ0133を採取。391・394号墓と区画石列を共用するが、東接の401号墓からは独立する。393号墓は395号墓の区画南辺に取付く1.4×1.3ｍの方形墓で、391号墓に先行する墓である。400号墓の区画配石西辺を利用した394号墓は1.7ｍ四方の方形墓である。395号墓は1.3×0.9ｍの長方形墓。393号墓に先行すると思われ、384号墓との間に幅0.3ｍの墓間通路が走る。空風輪Ａ0145、火輪Ａ0388、水輪Ａ0520を採取した。396号墓は1.6×0.9ｍの長方形墓。隣接395号墓も含め、本来は通路であったと推測。397号墓は1.8×1.6ｍの方形墓で、383号墓の東辺に取付く後出の墓。398号墓は1.5×1.2ｍの長方形墓で、399号墓の西辺区画に取付くと共に、397号墓の区画東辺を侵食した後出の墓である。埋土から土師器小皿小破片(256)が出土した。15世紀後葉～16世紀初頭頃より以降の築造と推定した。以上の10基ではいずれも人骨の出土はなかった。

399～401号墓　399号墓は1.7×1.5ｍの長方形墓だが、区画の南東隅がＬ字状に凹む形状は、先行する407号墓の区画北西角に規制を受けた結果である。人骨ＳＸ194が15世紀前半代の常滑産甕（70）を蔵骨器として出土、当墓はそれ以降の築造と考える。平面上は下層土坑ＳＫ568（ＩＡ類）が重複するが、別の遺構である。幅0.2～ 0.3ｍの通路を挟み407号墓に西接する400号墓は2.4×1.5ｍの長方形墓で、399号墓の区画南辺に取付いた後出の墓。区画東南端の2ヶ所から人骨ＳＸ35・ＳＸ123が出土。蔵骨器はない。空風輪Ａ0131、火輪Ａ0377、水輪Ａ0515～6を採取。当墓の区画に取付いた後出墓が394・396号墓になる。従って、区画配石の切合い関係から周囲の新旧関係を示すと、407号墓→399号墓→400号墓→394号墓→396号墓の順となる。幅0.3ｍの通路を挟み400号墓の南隣にある401号墓は二重の方形区画であった。内側1.0×0.9ｍ、外側1.6ｍ四方の方形墓。埋土から出土の土師器小皿破片（201）は、15世紀中葉～後葉頃に比定でき、当墓はそれ以降の築造であろう。火輪Ａ0381を採取。重複する下層土壙ＳＫ562（Ⅲ類）は別の遺構である。

402号墓　401号墓の南側2ｍの所にあり、その間を幅0.2ｍ程の通路で繋ぐ。一辺1.5ｍの方形墓。遺物はなかった。

403号墓　401号墓から下りてきて402号墓の北でＬ字に曲がる墓間通路を転用した長径1.4×短径0.8ｍの楕円形墓。402号墓より後出の墓。遺物はなかった。

404号墓　上記Ｌ字状通路の内側角にある。1.2×1.1ｍの方形墓。区画東南端隅で人骨ＳＸ134が出土。蔵骨器はない。北接する405号墓の区画南辺に取付くため、当墓の方が後出と判断した。

405号墓　1.9×1.2ｍの長方形墓。区画中心からやや東にずれて0.1～0.2ｍ大の川原石が数個円形状に集積され、その中心部から人骨ＳＸ121が出土。蔵骨器はない。同じタイプは128号墓や406号墓にある。空風輪Ａ0132を採取した。本例とはやや異なるが、数個の扁平な川原石を箱状（直方体状）に組み合わせた納骨施設を有する墓は58号墓、351号墓、411号墓などに類例がある。当墓は幅0.2～0.3ｍの墓間通路を隔てて401・406号墓からは一定の独立性を保つ一方、区画の南・東辺には404号墓、424・425号墓が配石を共用して取付く形に配置構成される。従って、当墓はこの小墓域の中心をなす可能性がある（写真第５図）。

406号墓　通路を挟み405号墓の北隣に位置し、400号墓と区画の一辺を共用する。1.9×1.3ｍの長方形墓。区画東側に偏して前記405号墓の場合と同じく0.1～0.3ｍ大の石の集積があり、人骨ＳＸ122が出土。蔵骨器はない。空風輪Ａ0130、火輪Ａ0380、空風（火）輪Ａ0869を採取。下層に火葬土坑ＳＫ567（ⅡＡ類）がほぼ重複。その火は北隣407号墓の南側石列を焼いていた。419号墓との間にある通路内の３ヶ所で人骨ＳＸ33・ＳＸ125・ＳＸ155の出土をみた。406・419号墓の築造より後代の納骨と考える。ＳＸ33に伴出の土師器小皿小片（257）は、16世紀前半代に比定できる。従って、406・419号墓の築造は当然16世紀後半より以前になる。

407・408号墓　前者は一辺1.2ｍの方形墓、後者は2.1×1.5ｍの長方形墓。相互に区画の一辺を共用する。前者で空風輪Ａ0129、火輪Ａ0379、地輪Ａ0689を採取。地輪は区画中心部に据わる。南に隣接

した406号墓の下層で検出の火葬土坑ＳＫ567より先行する墓である。後者では、区画の西北隅寄りで人骨ＳＸ126が出土し、その側で水輪Ａ0518、地輪Ａ0688を採取。蔵骨器はない。この埋土中から土師器鍋破片（107）が出土、14世紀末～15世紀初頭頃に比定される。408号墓はそれ以降の築造と考えた。外接する墓間通路の石の間からも人骨ＳＸ124が出土したが、理由が判らない。ある時期に、当中世墓群への納骨規制に変容が生じた可能性もある。

409号墓　239号墓と408号墓とに挟まれた空閑地（墓間通路）に、239・240号墓の区画石列の一部を巧みに利用して造られた1.5×0.8mの長方形墓。遺物はなかった。

410号墓　240・408号墓に挟まれた墓間通路に、411号墓の区画西角を侵食しつつ造られた後出の墓で、長径1.0m、短径0.8mの不整形を呈す。人骨ＳＸ127が出土した。蔵骨器はなかった。

411号墓　410号墓に一部侵食を受けたが、本来は一辺1.4mの方形墓。区画東端に0.3m大の川原石５個を箱状に組み合わせた納骨施設がある（58号墓や351号墓にも類例）。しかし人骨ＳＸ228はその箱状石組に北接した外側で出土。埋土中からは完形品に近い土師器皿（137）・小皿（224）が出土した。共に15世紀前葉～中葉頃のもので、当墓の築造もそれに比較的近いと推測する（写真第６図）。この他、区画南西端部でも人骨ＳＸ233が刀子（鉄09）などを伴って出土しており、同一区画内部に納骨が複数回行なわれたと解釈できる。蔵骨器はなく、空風輪Ａ0114・Ａ0116・Ａ0253を採取した。

412号墓　411・413号墓の境界で、墓間通路を転用。413号墓の区画北西角を侵食した径0.7m程の楕円形墓。人骨ＳＸ54が出土。蔵骨器はない。埋土中に土師器鍋破片（106）が混じる。それは14世紀末～15世紀初頭頃に比定可能かも知れない。当墓築造はそれ以前ではあり得ない。

413号墓　419号墓の区画北東角に取付く。外画1.5×1.2mの長方形墓。内側に更に0.9×0.9mの区画を持ち、その中央に約0.3m大の石が据わる。ほぼ中央部で地輪Ａ0687を採取したが、それは内側区画の西辺の一部を構成していた。外側区画の北西・南西端部の２ヶ所に分れて人骨ＳＸ36およびＳＸ37が出土。蔵骨器はない（写真第６図）。

414～418号墓　幅0.1～0.15mの通路を挟み413号墓の東から南側へ逆Ｌ字状にめぐる５基。最東端にある414号墓は1.5×0.8mの長方形墓。区画全体を石敷きに造るのは302号墓に継いで10例目。空風輪Ａ0118、地輪Ａ0678・Ａ0686を採取。隣接の415号墓は1.5×1.1mの長方形墓。区画中央の東寄から人骨ＳＸ43が出土し、空風輪Ａ0108、火輪Ａ0365を採取。南接する416号墓は1.3×1.2mの方形墓。これも区画全面が石敷きで、中央部と区画南西端の２ヶ所から人骨ＳＸ110・ＳＸ141が出土。後者では土師器小皿破片（223）が出土した。空風輪Ａ0103～Ａ0105、水輪Ａ0511、地輪Ａ0677を採取。東接する441号墓との間の通路内からも人骨ＳＸ44が出土。417号墓は一辺1.2mの方形墓。区画東南端寄りの３ヶ所から人骨ＳＸ42・ＳＸ111・ＳＸ112が出土。ＳＸ42からは完形品の土師器小皿(259)が出土。15世紀中葉～後葉頃に比定した。概ねそれに近い時期の築造と推定。火輪Ａ0366を採取した。417号墓より後出の418号墓は、419号墓との間の墓間通路を転用した0.9×0.5mの長方形墓で、区画南西端部で人骨ＳＸ40が出土し、空風（火）輪Ａ0838を採取した。なお、413号墓との間の区画石の間でも３ヶ所から人骨ＳＸ129・ＳＸ130・ＳＸ131が出土。とりわけこの一帯は納骨密集地帯の観が強い。上述の人骨にはどれにも蔵骨器はない。

419号墓　418号墓に西接、1.8×1.2mの長方形墓。区画中央部の2ヶ所から人骨ＳＸ45・ＳＸ46が出土。空風輪Ａ0113、火輪Ａ0368を採取した。火葬土坑ＳＫ577（ＩＡ類）が一部重複するが、別の遺構である。当墓は413・418・420号墓に先行する。408号墓との間の通路を転用したようで、２ヶ所から人骨ＳＸ124・ＳＸ154が出土。いずれにも蔵骨器はなかった。

420号墓　419号墓に南接する一辺1.4mの方形墓。３ヶ所に分散して人骨ＳＸ115・ＳＸ116・ＳＸ117が出土した。蔵骨器はなかった。

421・422号墓　前者は418号墓同様に、墓間通路を区切り墓に転用したもので、1.2×0.9mの長方形墓。人骨ＳＸ113が出土、蔵骨器はない。空（風）輪Ａ0286、空風（火）輪Ａ0839を採取。後者は1.1×0.8mの楕円に近い長方形墓。地輪Ａ0676を採取した。

423号墓　420・428号墓の墓間通路を区切って転用した後出の墓。規模は1.4×0.4mと狭く、0.2m内外の石を円形に組んだ､径0.2m余の納骨空間がある（写真第６図)。人骨は３ヶ所から出土したが、ＳＸ47だけがその丸い穴からで、他の人骨ＳＸ114・ＳＸ164は違う場所からの出土である。いずれも蔵骨器はない。空輪Ａ0007を採取した。

424・425号墓　共に405号墓の東側と東南側に取付く後出の墓。前者は1.7×0.8m、３ヶ所から人骨ＳＸ39・ＳＸ118・ＳＸ119が出土。ＳＸ118からは土師器小皿破片（208）が出土した。区画北辺の配石の間からも人骨ＳＸ34が出土したが、当墓への埋納骨かどうか不明。406号墓と419号墓との墓間通路からも人骨ＳＸ120の出土がある。425号墓は1.2×0.9m、区画中央に平坦面を持つ径0.4m大の石が据わるが、直下での人骨の検出はなかった（写真第６図)。本来はその上に五輪塔を設置したであろう。こういう石の据わる例は319号墓ほかに20数例を数える。空風輪Ａ0115～Ａ0117、地輪Ａ0622を採取。南側の区画外で人骨ＳＸ133が出土。上記いずれの場合にも蔵骨器はなかった。

426号墓　425号墓と430号墓との間の空閑地を転用した1.3×0.9mの長方形墓。425号墓に接する区画北寄りの配石上で前記人骨ＳＸ133を検出した。後代性を示す。

427・428号墓　前者は426号墓の東にある長径1.5m、短径1.2mの楕円形墓。後者は前者の北東に接続し、長径1.3m、短径1.1mの楕円形墓。共に遺物はなかった。

429号墓　428号墓の南にあり、2.2×1.4mの長方形墓と想定した。区画の南西端隅から人骨ＳＸ132が出土し、土師器小皿破片（212～215）も出土。火輪Ａ0446を採取した。土師器小皿は15世紀中葉～後葉頃に比定でき、当墓はそれ以降の築造かと推測する。

430号墓　426号墓の南にあり、現山道の開鑿により削閉を受けた。規模は1.9×1.4m以上と推定。区画のやや東側に偏して小石（0.05m内外）の集積があった（個別遺構第35図)。精査したが、どの石にも墨書経文はなかった。

431・432号墓　427号墓に南接する。前者は墓間通路を区切って1.5×0.8mの長方形墓とした。後者は現山道開鑿で削閉を受けたため規模は不明だが、1.6×0.7m以上と推定。共に遺物等はなかった。

433～439号墓　区画配石の状況から一群の墓域と想定する７基。433号墓は少なくとも３面を墓間通路に囲まれた一辺1.2mの方形墓。空（風）輪Ａ0284、空風（火）輪Ａ0837、相輪Ａ1034を採取。埋土中から瀬戸産灰釉花瓶破片（50）が出土。434号墓は433号墓の区画北辺に半円状に取付く後出の墓。長径0.8m、短径0.5m。435号墓は433号墓と436号墓との間の通路を区切り転用した0.9×0.6mの長方形墓。人骨ＳＸ136が出土、蔵骨器はなく、空風輪Ａ0836を採取。436号墓は1.3×1.2mの方形墓で、人骨ＳＸ135が出土。当墓の埋土からは土師器小皿破片（225～231）が出土した。436号墓の区画北辺を共用する437号墓は1.5×1.4mの方形墓で、埋土から土師器小皿破片（260）が出土。地輪Ａ0621などを採取。当墓と434号墓との間にある438号墓は径1.1mの円形墓で、火輪Ａ0364を採取。これに接しつつ437号墓の区画西端角に取付く439号墓は、一辺0.6mの方形墓で、人骨ＳＸ137が出土したが、蔵骨器はなかった。

440号墓　437号墓と441号墓との間の通路を仕切り、437号墓の区画北端角に瘤のように取付く。0.7×0.5mの方形墓。埋土から完形の土師器小皿（265）が出土した。16世紀前葉～後葉代に比定でき、ほぼその時期に築造の可能性が大きい。

441・442号墓　437号墓と443号墓に挟まれて並立し､1.2×1.1mの区画を２分する。前者は1.2×0.6m、後者は 1.1×0.5mである。遺物はない。なお、441号墓と415・416号墓との配石間の通路からも人骨ＳＸ44が出土。所属不明の人骨で、もちろん蔵骨器もなかった。

443号墓　先述249号墓の区画南辺を共用して取付く後出の443号墓は、2.0×1.2mの長方形墓。埋土を削りつつ下層遺構を検出する作業段階で、12世紀後半代の常滑産三筋壺（42）を蔵骨器とした人骨ＳＸ193が出土し､瓦器小碗（41）を蓋に転用していた（個別遺構第37図)。三筋壺、瓦器碗はともに、12世紀後半～12世紀末（ないし13世紀初頭）を中心とする時期に属する（遺物第45図・写真第９図)。通常、出土遺物の年代とそれが副葬された墓の築造との間にはタイムラグを考慮すべきで、口縁部を欠く三筋壺に

はそれなりの伝世期間があったはずである。また瓦器碗にしても、蔵骨器の蓋に転用されるまでには時間的経過を考慮する必要がある。日常雑器だから伝世しないと思うのは現代人の臆測に過ぎない。当墓の築造を13世紀前葉ないし前半代まで下げて今は考えておくが、墓の位置関係から見ると、それでも古すぎるという印象はあり、場合によっては13世紀後半から14世紀代にも下る可能性もある。

444・445号墓　前者は443号墓と445号墓との間の通路を区切り転用した後出の墓。規模0.6×0.4mの不整形。遺物はない。後者は、1.0×0.9mの方形墓で、空風（火）輪A0826、空風火輪A0782、水地輪A0880、地輪A0617～A0618、一石五輪塔A0952～0953、A0984、A1010、などを採取した。

446～449号墓　437号墓に東接する一群の墓。446号墓は、447号墓と449号墓との区画配石の交点を南角とした1.0×0.8mの方形墓と推定。空風輪A0096～0097を採取した。447号墓は0.4～0.5m大の石に囲まれた1.0×0.7mの長方形墓。埋土から土師器小皿破片(262)が出土した。地輪A0619を採取。本来は墓間通路だった可能性が高い。448号墓は現在の山道開鑿により削平を受けたが、1.7×0.9m以上の規模を想定。区画南西端から人骨ＳＸ138が出土し、土師器小皿破片(261)を伴出、15世紀後葉～16世紀初頭頃に比定しうる。空風（火）輪A0833～A0835、水輪A0510、一石五輪塔A0986を採取。この一石五輪塔は区画配石に転用された可能性がある。449号墓は448号墓の区画配石の一部を共用して北側に後から取付いた1.0×0.9mの方形墓。遺物はなかった。

450～455号墓　450号墓は、幅0.3mの通路を挟み449号墓の北にある1.4×1.2mの方形墓。区画南寄りから人骨ＳＸ139が出土。蔵骨器はない。空（風）輪A0301、空風火輪A0795～A0797、地輪A0683～A0684、一石五輪塔A0949等を区画配石に転用し、造墓時期の後代性を示す。北接する451号墓は、1.4×1.2mの方形墓で、（空）風火輪A0783、地輪A0620・A0682を採取。地輪A0682は区画配石に転用された可能性がある。250号墓の南側にある452号墓は1.3×0.7m。遺物はない。極めて残存度の悪い453～455号墓の想定規模は順に、0.8×0.5m以上、1.5×1.2m、1.2×0.6m以上とした。453号墓では火輪A0361を、454号墓では空風輪A0099・A0280・A0281、空風火輪A0827・A0784・A0828、水輪A0509、一石五輪塔A0929・A0985・A1011などを採取した。455号墓の地輪A0685は区画配石の一部に転用されていた。

456～458号墓　257号墓の南側の一群。456号墓は1.0×0.9m、457号墓は0.7×0.6m、458号墓は1.0×1.0m。いずれも人骨はなく、456号墓で空風輪A0101～A0102・A0282、空風火輪A0830～A0832などを採取。一部は区画配石に転用されていた。また、458号墓では阿弥陀仏浮彫石A1049を１点採取した（遺物第52図・写真第17図）。

459・460号墓　257号墓の区画南辺に取付く459号墓は1.3×1.1mと推定される。460号墓は1.4×1.1mの長方形墓と推定。約0.26mの盛土状の高まりを認め得る。出土人骨はなく、空風輪A0248・A0298、火輪A0447～A0448、水輪A0550、一石五輪塔A0999ほかを採取した。

②　墳丘（無配石・盛土のみ）状遺構

227号墓　226号墓の北隣にある長径約2.5m、短径約2.0mの楕円形状墳丘墓。高さ約0.4mの盛土が残る。盛土の周囲に幅0.8～1.0m、深さ0.3～0.45mの周溝ＳＤ877が巡る。遺物はなく、時期は不明。この周溝は、221号墓の周囲に掘られた周溝ＳＤ875～876を切っており、221号墓より新しい。

235号墓　226号墓の南、234号墓の東隣にある。径約2.0m余を測る円形状の墳丘墓である。高さ約0.36mの盛土が残る。12世紀後半代の渥美産壺（43）を蔵骨器とした人骨ＳＸ205が、刀子（鉄参考36）を副葬品として出土した。約0.25m大の扁平な石（厚さ約0.1m）を蓋にしていた。他に地輪A0675を採取。本墓の築造時期は、渥美産壺（43）を指標にしてそれ以降になるが、早ければ12世紀末以降～13世紀前半代以降と想定しておきたい。

236号墓　235号墓の東にある。長径約3.5m、短径約2.5mの楕円形状墳丘墓。高さ0.3mの盛土が残る。幅0.5～1.2m、深さ0.35～0.65mの周溝ＳＤ878が巡る。周溝内から15世紀中葉～後葉頃と思しき土師器小皿の破片（238）が出土しているので、溝の埋没はそれ以降のことかと思う。この周溝ＳＤ878は、前記227号墓の周溝ＳＤ877を更に切っているため、新

旧関係は221号墓→227号墓→236号墓の順に新しくなる。主体部からの出土遺物がなく、221号墓の築造時期も決定しがたく、新旧関係しか判らない。

③ 推定幹線墓道

Ａ地区の460基に及ぶ墓群が最初から存在したわけではないが、最終的にその墓域へ至る墓道には、三方面からのアプローチが考えられる。１）調査区西側からの道、２）調査区北側尾根筋からの道、３）調査区東側Ｂ～Ｃ地区方面からの道、である。

１）と３）は現在の山道と一部重複する。前者は現・伊勢寺町を通る県道合ヶ野松阪線の横滝方面から平林池を経て来る山道で、調査区Ｉ14地点、即ち181号墓～ 179号墓の西側に至るが、現状では進入後の経路が不明瞭だった。後者の３）は、県道丹生寺一志線の五輪峠や岡山町、西野町方面から調査区東側の尾根筋を登って来る現道と重なり、Ｂ地区の461号墓（墳丘Ａ）、463号墓（墳丘Ｃ）の側を通ってＡ地区の257・258号墓～ 459・460号墓辺りへ至る（途中で伊勢寺町方面からＣ地区東側に達する山道が接続している）。２）は伊勢寺町井関地区から向側池の裾を登ってきて、調査区Ｓ～Ｔ10地点、１・２号墓、12号墓の北側に至る道である。就中、２）及び３）の利用頻度は高かったであろうと考える。

以下に、２）の経路でＡ地区へ進入した後の、主要な幹線墓道を辿っておきたい（遺構第10図～ 16図）。

左手に１・２号墓を見ながら、幅0.7m内外の溝状に掘り窪んだ斜面を登ること約30mで、両側に二重の石列が残る地点に至る。右手に120・122号墓、左手に73 ～ 75号墓が並ぶ。この間の比高差は約7.5m（途中、右側尾根上墓地や左側の各テラスへと通じる墓道が分岐する）。前方正面に見える79号墓の手前が大きな分岐点になる。

その分岐点で道を右手に取り、131号墓との間を抜けると平坦な空間に出る。正面にやや小高い182号墓（先に「納骨堂」と推定）があり、一つはやや南西に折れて162・262号墓の間を通り174 ～ 181号墓等の墓域へ至る。これは主に西部域斜面、山頂部及び南・西側斜面の墓域へ至る幹線墓道と考える。

79号墓手前の分岐点で、今度は道を左手に取り77・78号墓との間を抜け、81号墓の南でややクランクした後、左手に伊勢湾を望みながら、90 ～ 97号墓が並ぶ南側に沿って進むと、217号墓のある尾根筋上に出る。これが、主に東部斜面、中央尾根筋から南・東斜面の墓域等へ至る幹線墓道であろう。217号墓の手前で右折して、210号墓と214号墓に挟まれた墓間通路をＬ字にとって西行すれば、182・183号墓（推定納骨堂）へも容易に行けた。斜面に築造の墓地は等高線に平行に造られるため、217号墓のある中央尾根筋上から南斜面の墓域へは幾つかに分岐する墓道が比較的整然と残っていた。分岐したのちの箇々の墓間通路については、必要に応じ本文中に述べてきたのでここでは省略に従う。

墓道とは言え、全てが一定の幅員・形態で構成される訳ではない。墓を区画する配石列の上を歩いても行けるからである。実際、かつて伊賀上野市長田の西蓮寺（天台宗真盛派）境内の墓地で実見した所では、斜面の密集した墓域になると、川原石で区画された墓相互の間に隙間はなく、人一人がやっと通れるほどの、幅0.2m前後の石列がそのまま通路として機能していた（その後実施された同寺墓地改葬・整備事業以降の状況は未見である）。西蓮寺墓所（註6）とは時代は異なるが、今回の遺構検出結果を見れば、同様の状況は横尾墳墓群にも、とりわけ南・東斜面の配石区画墓が密集する地帯にもあったのであり、それを前提に遺構編でその都度言及した。

なお、Ａ地区で火葬も埋葬もした時期はともかく、後のＢ～Ｃ地区の存在・機能を考えると、少なくとも上記２）と３）のルートは併存して使用されたと考えるべきであろう。その場合には、３）は主に遺体火葬時の、１）や２）は主として墓参時に使用されるルートとして機能した時代があったのではないだろうか。

註6　上野市遺跡調査会、上野市教育委員会編『西蓮寺墓所発掘調査報告』1993年。

[下層検出遺構]

④ 土坑（土壙）群（第15表・遺構第17 ～ 22図）

当中世墓で検出した土坑数は、Ａ地区で135基、Ｂ地区で168基、Ｃ地区で106基、計409基に上る。因みに遺構規模の平均値は、全体では長径1.05m、短径0.76m、深さ0.27mだが、Ａ地区の土坑の平均値は長径 1.19m、短径0.83m、深さ0.26mに対し、Ｂ地

区の場合は長径 0.94m、短径0.70m、深さ0.23m、またC地区では長径 1.01m、短径0.73m、深さ0.32mであった。

平均規模でみると、A地区土坑群の平面形は他に比してやや大きく、B地区ではやや小さい傾向にある。深さにおいてはC地区の土坑群がやや卓越している。C地区では縄文時代の遺物が出土しているので、何らかの関連を考慮すべきかも知れないが、縄文時代の土坑として明確に認識できるものはなかった。なお、P12地区のSK465を北端とするA地区の土坑群にあっても、L24～P24ライン以南で密集して検出したのは小規模なものが多く、形態的にもB地区土坑群との連続性を認め得る。葬送儀礼の何らかの変容がそういう違いに反映されていると思う。

注：以下土坑（壙）群の報告文中に並記する三つの数値は、それぞれの法量、即ち長径・短径・深さを順に表す。

SK465～467 隅丸長方形に近いSK465は1.2m、0.9m、0.17mで、遺物はなく、時期も不明である。SK466は1.6m、0.6m、0.15mの長楕円形。掘形の肩や壁面に沿って強い火を受け赤く焼け締った土が帯状（以下焼土帯と略称する）に遺る。埋土に多量の炭化物が混在し、少量の人骨SX179が出土した。火葬土坑と考える。SK467は1.1m、1.1m、0.2mの隅丸方形。埋土中に焼土と炭化物が混在し、底部から土師器小皿（160～162）が3枚出土した。その皿は14世紀後半から15世紀初頭までのものであろう。ほぼその時期に当該土坑で火葬した後に、そこをそのまま墓として造成した火葬墓の可能性もあるのではないかと想像した。

SK468～473 基準杭K15の東側4mの所にあるSK468は1.0m、0.8m、0.13m。切合い関係からSK480より古い。平面上145号墓と155号墓との境目に当たる。SK469は0.5m、0.4m、0.16mと小さく、炭化物を含む埋土中から人骨SX182が出土。SK470は1.8m、1.3m、0.1mで、西斜面の側を開く不整形楕円。3ヶ所から人骨（SX196～198）が出土。すぐ北隣のSK471は2.2m、1.3m、0.18mで、掘形に焼土帯が遺る。埋土に炭化物が混じり、底部には火を受けて焼けた0.3～0.4m大の川原石が2個あった。人骨は遺らず、火葬土坑の可能性が高い。SK472は1.4m、0.8m、0.15mで、埋土中に焼土と多量の炭化物を含み、人骨SX264が出土した。大半が129号墓と重複する。SK473は0.6m、0.4m、0.14mと小さく、焼土と炭化物だけを検出した。時期不明の火葬土坑と考えた。

SK474～475 共に、北尾根支群第一テラスの10号墓・11号墓の直下にそれぞれ重複し、両区画墓と一体となる土壙で、前者は0.95m、0.6m、0.17m、後者は1.0m、0.6m、0.16mの楕円形。出土遺物はなく、時期は不明である。

SK476～479 西部域ブロックの南西端で、一段低い平坦地に174号墓以下の8基がL字状に並ぶ（第13図）。SK476は175・176号墓と一部重複しつつ、8基の墓群に囲まれる位置にあり、2.8m、1.6m、0.21mの二等辺三角形状を呈す。埋土中から焼土・炭化物・人骨片SX183を検出。底部中央に0.4×0.2m大の川原石が1個遺る。規模からみても土壙墓とは考えがたく、ここで何度か荼毘に付した可能性が高い。埋土中から15世紀後半代の常滑産甕のN字口縁破片（75）が出土した。当該土坑はそれ以降の火葬土坑であろう。174～181号墓の被葬者の何人かはここで火葬された可能性もある。SK477は斜面に穿たれている。1.5m、1.0m、0.25mで遺物はなく、時期不明。SK478は1.7m、1.3m、0.05～0.1mの土坑。中に、長辺1.0m、短辺0.6m、高さ0.6m大の石が2個、平坦面を揃えて据えてある（高熱によりひび割れて2個になった可能性が高い）。土坑というより厳密にはその石を据えるための掘形である。石は相当に火を受けて焼けており、立面には煤も付着していた。この石の上に棺桶（又は有機質のもので包んだ亡骸）を安置し可燃物で覆い荼毘に付した火葬施設である。埋土からは多量の炭化物に混じり、焼土や人骨片SX109、釘2本（鉄46・47）が出土した。当初からの機能であったかどうか確証はないが、石は繰返し使われる「火葬用の棺台」になったであろう。東隣のSK479は1.4m、0.85m、0.44mで、概ね173号墓と重複し、埋土中に焼土と炭化物が混入するのみで、時期は不明だが、173号墓造成以前の火葬土坑である。

SK480～481 SK480は1.1m、0.8m、0.23mで、埋土中に炭化物が混じる以外は何もなかった。切合い関係からSK468やSK481より新しい。平面上145

号墓とは重複するが、別の遺構である。ＳＫ481は1.4ｍ、1.3ｍ、0.2ｍで、埋土中に炭化物が少量混じるものの、焼土・焼石等は検出されず、古銭（銭10「嘉祐元寶」か？）と刀子（鉄14）が出土。これを副葬品とした土壙墓であろう。

ＳＫ482～483　斜面崩落で平面馬蹄形にしか遺らぬが、切合い関係からＳＫ496より後出の土坑ＳＫ482は1.6ｍ、1.2ｍ、0.18ｍで、埋土には炭化物が混入し、土師器小破片（皿か？）が出土した。土壙墓と推測（個別遺構第35図）。ＳＫ483は1.75ｍ、1.0ｍ、0.35ｍで、出土遺物はない。

ＳＫ484～486　北尾根支群の第五テラスにある土坑で、ＳＫ484は0.5ｍ、0.5ｍ、0.2ｍ、ＳＫ485は0.7ｍ、0.5ｍ、0.17ｍ、いずれも埋土中に焼土・炭化物の混入があり人骨片（ＳＸ184・ＳＸ185）が出土した。ＳＫ486は東側が崩落して遺らぬが、規模は1.4ｍ、1.25ｍ、0.21ｍで、出土遺物はなく、平面上は概ね56号墓と重複する。

ＳＫ487～493　ＳＫ487は2.2ｍ、1.0ｍ、0.41ｍで、掘形に焼土帯の遺る長楕円形の土坑。埋土中に焼土や炭化物、火を受けた川原石などが混在し、人骨片ＳＸ234のほか、土師器皿（130）や小皿（171～178）が計９枚出土した。火葬土坑をそのまま墓にした火葬墓と考える。完形の小皿（171～173）には15世紀中葉前後の時期を与えうる。ＳＫ488～490は前述182号墓の盛土除去後の検出による。ＳＫ488は0.6ｍ、0.45ｍ、0.31ｍ、ＳＫ489は0.8ｍ、0.7ｍ、0.48ｍ、ＳＫ490は0.5ｍ、0.4ｍ、0.42ｍと平面形は小さいものの比較的深い。いずれも出土遺物はなく、時期は不明。経塚との関連性も考慮すべきかも知れない。ＳＫ489は182号墓の中心部にあたる。ＳＫ491は1.1ｍ、1.0ｍ、0.21ｍの不整形で、地輪Ａ0766が出土した。ＳＫ492は1.5ｍ、0.7ｍ、0.25ｍの不整形で人骨ＳＸ246が出土したが、時期は不明。ＳＫ493は1.1ｍ、0.6ｍ、0.15ｍの不整形で、人骨ＳＸ247及び刀子（鉄参考42）が出土した点からみて、時期不明の土壙墓としたい。

ＳＫ494～496　平面上191号墓と重複するＳＫ494は0.9ｍ、0.55ｍ、0.33ｍで、埋土中に炭化物を含み、人骨ＳＸ219と14世紀中葉～後葉ころの完形の土師器皿（122）が出土した。少なくとも14世紀後半代頃に築造の土壙墓と推測する。ＳＫ495は1.0ｍ、0.9ｍ、0.59ｍで、埋土中から山茶碗破片（12世紀中～後葉）やロクロ土師器皿破片（38）が出土しており、12世紀後半以降に築造の土壙墓と推測。ＳＫ496は1.5ｍ、0.8ｍ、0.52ｍで先述ＳＫ482より古く、出土遺物はない（個別遺構第35図）。

ＳＫ497～499　南斜面のＳＫ497は1.0ｍ、0.9ｍ、0.23ｍ。底部で0.15～0.25ｍ大の石に囲まれて土師器片（器種不明）と鉄釘２本（鉄48・49）及び燧金（ひうちがね）（鉄22）が出土。土壙墓とした（個別遺構第40図）。ＳＫ498は1.05ｍ、1.05ｍ、0.16ｍで、平面形状は隅丸三角形の土坑。底部に0.2～0.3ｍ大の川原石が間隔を置いて２個据わり、15世紀中葉～後葉ころの完形の土師器小皿（165）が出土した。ほぼその時期に近い土壙墓である。ＳＫ499は1.3ｍ、1.1ｍ、0.5ｍ。底部から土師器片（皿？）と刀子（鉄８）が１本出土した。時期不明の土壙墓と考えた。

ＳＫ500　2.0ｍ、1.5ｍ、0.75ｍの土坑。埋土中に焼土・炭化物が少量混じり、13世紀前葉～中葉の山茶碗破片（54）が出土したので、それ以降の火葬土坑と推測。火を受けた0.2ｍ大の川原石が掘形底部西辺に沿って一列に四個並ぶ。人骨ＳＸ186も出土。平面上は、おおむね283号墓と重複するものの、別個の遺構である。

ＳＫ501～504　ＳＫ501は、1.45ｍ、1.3ｍ、0.32ｍで、厚い焼土帯を遺す火葬土坑である。多量の炭化物と共に人骨ＳＸ187と和鏡小破片が出土した。和鏡は熔解・屈曲している。熱残留磁化測定結果では950年±150年と出ているが、出土遺物からは時期は決めがたい。南隣のＳＫ502は0.85ｍ、0.65ｍ、0.08ｍと小規模で、埋土中から炭化物に混じり人骨片ＳＸ188が出土した。ＳＫ503は0.9ｍ、0.5ｍ、0.12ｍの不整形楕円で、埋土中から14世紀末～15世紀前葉の土師器小皿の破片（186）が出土した。それより後に築造された土壙墓であろう。ＳＫ504は1.55ｍ、1.1ｍ、0.34ｍの隅丸長方形で、埋土から14世紀中葉～後葉の土師器皿の破片（119）が出土したので、それ以降の造墓だろうが、重複する上層の199号墓と上下一体の遺構になる可能性もある。

ＳＫ505～507　ＳＫ505は1.0ｍ、0.8ｍ、0.27ｍで東南辺掘形に焼土帯が遺る。切合い関係からＳＫ

506より古い。埋土中に炭化物を含み、人骨ＳＸ294、土師器小碗（84）、刀子（鉄05）１点が出土した。小椀（15世紀後半代）とほぼ同時期相当の火葬墓であろう。ＳＫ506は1.2m、1.1m、0.24mで、掘形に焼土帯が遺る。切合い関係からＳＫ505より新しく、埋土中に炭化物を含むと共に、0.5mの間隔を置き底部２ヶ所から人骨ＳＸ159・ＳＸ295が出土したが、火葬土坑が重複した可能性もある。前者ＳＸ159には刀子（鉄３・鉄11）が２本副葬されていた。上層にほぼ重複する292号墓と一体の遺構になる可能性もある。ＳＫ507は1.2m、0.85m、0.73mの土坑。埋土中に炭化物が混じり、人骨ＳＸ189と完形の土師器小皿（166）が出土した。この小皿（15世紀前葉～中葉代）とほぼ同時期の土壙墓であろう。

ＳＫ508～510　平面上307号墓と重複するＳＫ508は1.0m、0.8m、0.15m、またＳＫ509は1.2m、1.05m、0.17mで、共に出土遺物はない。206号墓と重複のＳＫ510は1.65m、1.5m、0.11mで、掘形に厚い焼土帯が遺る。埋土中から多量の炭化物に混じり人骨片ＳＸ191も出土した。底部に焼けた0.2m大の石が一個のこり、刀子（鉄13）が出土した。206号墓は火葬土坑ＳＫ510の直上に造られたのではないかと推測できる。時期は決めがたいが、ＳＫ487・ＳＫ501と等間隔に並ぶのは偶然ではないかも知れない。

ＳＫ511～513　207号墓の下層遺構であるＳＫ511は0.45m、0.4m、0.15mと小規模で、人骨片ＳＸ167と刀子（鉄24・鉄参考32）が２本伴出した。207号墓の埋納遺物である。ＳＫ512は1.3m、0.5m、0.21mで、多量の炭化物に混じって人骨片ＳＸ192が出土し、ＳＫ513は0.5m、0.5m、0.16mで出土遺物はなく、共に時期不明の土壙墓とするしかない。

ＳＫ514　100号墓に伴う下層遺構で、東側の斜面が崩落したため三方しか遺らないが、現状で2.3～2.6m×1.2m以上になる墳丘の中心部下層にある方形土坑である。その規模は1.72m、0.7m、0.56mで、三方に溝ＳＤ874が残る。見晴らしのよい場所に築かれた方形周溝墓である。当該土壙の底部から13～14世紀代の完形の青磁碗（63）が１点出土した。この墓は、遅くとも14世紀後半以降には出現した可能性がある（個別遺構第39図・遺物第46図）。

ＳＫ515～519　ＳＫ515は1.05m、0.75m、0.3mで、13世紀末～14世紀末葉頃の土師器皿と小皿の破片（117・150）が出土した。少なくともそれ以降に築造の土壙墓である。ＳＫ516は2.0m、1.15m、0.3mで、出土遺物はない。ＳＫ517は1.3m、1.1m、0.17m。埋土中に焼土・炭化物が顕著で、人骨片ＳＸ207が出土したが、築造時期の手がかりを欠く火葬墓。ＳＫ518は0.7m、0.5m、0.17mと小規模で、出土遺物のない時期不明の土壙墓である。ＳＫ519は1.35m、1.1m、0.39mで、底部から刀子（鉄６）が出土した。これも時期不明の土壙墓とするしかない。

ＳＫ520～521　ＳＫ520は1.0m、0.8m、0.23mで、底部北東側から刀子（鉄07）が出土した時期不明の土壙墓。当該土壙墓から南側へ約0.4mの地点で７世紀末～８世紀初頭の小型の須恵器甕（17）と７世紀末～８世紀前半頃の須恵器杯蓋（14）が出土した。前者（17）には人骨ＳＸ158が充満していた。平面上、甕の出土位置は311号墓と316号墓との境界に据わる0.4m大の石のほぼ直下に当たる。ＳＫ521は1.6m、1.3m、0.11mで、掘形に厚い焼土帯が遺り、埋土中に焼土・炭化物を含む。底部全面は敷詰めたような灰に覆われていた。灰には筵織目が明瞭に遺り、あたかも一枚の筵が灰と化してそのまま埋もれたかのような状況であった。灰を除去すると、２ヶ所から人骨ＳＸ190及びＳＸ286が出土した。あるいは、葬儀に際して棺桶はなく、亡骸を筵に包んで現地に運び、荼毘に付したあと、最後にその筵を焼き捨てて墓にしたかとも推測できる。時期は不明ながら、印象的な火葬墓であった。

ＳＫ522～526　ＳＫ522は1.1m、0.8m、0.26mで遺物はない。216号墓とほぼ重複している。ＳＫ523は1.15m、0.9m、0.08mで、位置的には217号墓と313・314号墓との間の通路直下に当たっている。ＳＫ524は1.4m、1.2m、0.17mで、刀子（鉄10）が一点出土した。同じく刀子（鉄参考37）が出土したＳＫ525は1.3m、0.9m、0.23mで、共に時期不明の土壙墓である。ＳＫ526は1.0m、0.8m、0.3mで、出土遺物はなく、これも時期不明の土壙墓と考えるしかない。

ＳＫ527～528　ＳＫ527は1.0m、0.65m、0.2mで、切合い関係からＳＫ528より古い。埋土中から７世紀末～８世紀前半の須恵器杯蓋の破片（15）と８世紀

前葉～中葉頃の須恵器杯蓋破片（16）が、底部からは刀子（鉄19）が出土した。時期不明の土壙墓。前者の蓋破片（15）はＢ地区ＳＫ613出土の破片と接合できた。ＳＫ613で火葬した遺骨をＳＫ527に葬った、というのも可能性の一つか。ＳＫ528は1.25m、1.2m、0.26mで、掘形の肩から壁面にかけて固く焼き締った焼土が帯状に巡る。埋土中に炭化物を含み、底部から人骨ＳＸ195と火を受けて焼けた0.3m大の石が出土した。明らかに火葬土坑で、埋土中から出土の土師器小皿破片（167）は15世紀前葉～中葉のものゆえ、それ以降の火葬土坑と推定する。

ＳＫ529～532　ＳＫ529は1.1m、1.0m、0.21mで、掘形の切合い関係からＳＫ530より新しい。ＳＫ529より古いＳＫ530は1.4m、0.95m、0.34mで、平面上は概ね349号墓と重複する。共に遺物はなく、時期不明の土壙墓とする。ＳＫ531は1.1m、0.95m、0.38mで、埋土中に炭化物を含み、土師器皿（131）等６枚が出土した。皿は14世紀末～15世紀前葉頃のもので、ほぼその時期の火葬墓と想定した。ＳＫ532は1.35m、1.0m、0.3mで、13世紀中葉～後半頃の完形の山茶碗（58）が出土した。従って13世紀後半以降（遅くとも13世紀末～14世紀初頭頃）の土壙墓であろう。平面上ほぼ重複するが、一応348号墓とは別の遺構としておく。

ＳＫ533　221号墓と一体の遺構。1.8m、1.55m、0.29mで掘形に焼土帯が巡る。埋土中に炭化物が混じり、人骨ＳＸ199と刀子（鉄04）が1本出土した。当該土壙は南側に狭い陸橋部を持つ幅0.6～0.8m、深さ0.3～0.4mの周溝ＳＤ875～ＳＤ876を伴う方形周溝墓である。両周溝は隣接する227号墓の周溝ＳＤ877に切られており、それより古い。周溝を含む全体の規模は約3.5×3.4mと推定できる。荼毘に付した火葬土坑ＳＫ533を中心に、周溝・盛土・配石区画によって一単位の墓を築造した。周溝埋土からロクロ土師器皿破片（36・37、11～12世紀代）が出土。造墓は当然それ以降になるが、伊勢湾を眺望する見晴らしのよいこの位置には、当山でも比較的早い段階に中世墓が出現したであろう。

ＳＫ534～536　Ｊ21地区にある3基。ＳＫ534は1.05m、0.7m、0.08mと浅いが、掘形に焼土帯を持ち、底部から人骨ＳＸ287が出土した。火葬土坑と考える。ＳＫ535は0.8m、0.65m、0.21mで、鉄釘片（鉄50・51）の出土はあるが、焼土や炭化物などは一切なく、火葬土坑か否か不明。埋土中から15世紀中葉頃の土師器皿破片（128～129）が出土。それ以降に築造の土壙墓としたい。ＳＫ536は0.75m、0.55m、0.22mで、出土遺物が一切なく、時期不明の土壙墓としておく。

ＳＫ537～542　ＳＫ537は掘形に焼土帯を遺す不整形火葬土坑で、1.35m、0.68m、0.17mである。人骨片ＳＸ163が出土。ＳＫ538の平面形はＳＫ537に類似し、1.2m、0.6m、0.16m。掘形に焼土帯を遺し、埋土中からは炭化物と人骨片ＳＸ166が出土。火葬土坑の可能性が高い。ＳＫ539も掘形に焼土帯を遺す火葬土坑で、1.2m、0.95m、0.44m。埋土中に炭化物が混じり、人骨片ＳＸ200が出土した。底部に0.3m大の焼石が２個並ぶ。切合い関係からＳＫ540より新しい。ＳＫ539より古いＳＫ540は1.3m、0.8m、0.42mで、焼土帯や炭化物等は一切ない。埋土中に15世紀後葉～16世紀初頭頃の土師器小皿小破片（251）が混じっており、それ以降に築造の土壙墓と推測。ＳＫ541は1.2m、0.7m、0.34m、ＳＫ542は1.5m、0.85m、0.35mで、後者の底部からは刀子２本（鉄26・鉄参考41）が出土するが、共に時期不明の土壙墓とするしかない。切合い関係から前者ＳＫ541の方が新しい。

ＳＫ543～547　ＳＫ543は1.1m、1.0m、0.23m、ＳＫ544は1.59m、0.9m、0.34m。いずれも遺物等はなく、時期不明の土壙墓。ＳＫ545は1.2m、0.65m、0.5mで、14世紀末～15世紀前葉ころの土師器皿の破片（132～134）が複数出土した。概ねその時期に近い土壙墓と推定。ＳＫ546は0.6m、0.5m、0.08mとやや小規模だが、掘形に焼土帯が遺り、埋土中に多量の炭化物を含む。人骨片ＳＸ201も出土し、底部には0.1m×0.08m大の川原石が１個遺る。火葬土坑である。ＳＫ547は1.25m、0.9m、0.25mで、遺物等はなく、時期不明の土壙墓としておく。

ＳＫ548～552　ＳＫ548は1.0m、0.7m、0.5mで、遺物はなく、時期不明。ＳＫ549は1.35m、1.3m、0.35mで、焼土帯や多量の炭化物のほか、人骨片ＳＸ202も出土したので火葬土坑である。ただ、15世紀前葉～中葉ころの土師器小皿（193～196）４枚の出土もあ

り、火葬後その直上に造墓した可能性がある。ＳＫ550は1.6m、1.2m、0.23mで、埋土中に焼土・炭化物が混じる。人骨ＳＸ220が出土したので火葬墓かと推定。ＳＫ551は1.4m、1.0m、0.5mで、底部に0.2～0.4m大の川原石が5個遺っていたが、火葬した形跡はない。13世紀末～14世紀前葉の土師器皿の破片（121）が埋土に混入しており、それ以降の土壙墓と考える。ＳＫ552は0.85m、0.8m、0.53mで、底部から刀子（鉄40・鉄参考39）が２本出土した、時期不明の土壙墓であろう。

ＳＫ553～557　ＳＫ553は0.95m、0.6m、0.4mで、遺物はない。ＳＫ554は1.0m、0.85m、0.3mで、掘形に焼土帯が遺り、埋土中に多量の炭化物を含む。人骨ＳＸ180と刀子（鉄15）が１点、14世紀中葉～後葉ころの土師器小皿破片（218～221）４個体分出土した。火葬土坑をそのまま墓にした火葬墓と推定。14世紀末までに築造された可能性もある。平坦面を持つ0.8×0.5m大の石が近接して据わる。亡骸を一時安置した石かも知れない。ＳＫ555は1.2m、0.85m、0.32mで、火葬の形跡はない。13世紀末～14世紀前葉頃の土師器皿の破片（123～124）が２個体分出土したので、それ以降に築造の土壙墓である。ＳＫ556は1.6m、1.0m、0.2mで、掘形は火を受けて焼土化する。埋土中に炭化物と僅かに焼土が混じり、13世紀後半代の土師器鍋破片（96）も出土した。それ以降に築造の火葬土坑である。ＳＫ557は1.3m、1.05m、0.21mで、人骨ＳＸ245と14世紀中葉～後葉ころの土師器小皿の破片（153）が出土した。それ以降に築造の土壙墓であろう。

ＳＫ558　当遺跡中で最大級の本格的な火葬施設。2.8m、1.5m、0.55mで、通気孔や溝を穿つ（個別遺構第39図）。掘形は火を受けて赤く焼き固まり、埋土中に炭化物や人骨片ＳＸ203が混在した。一定期間を火葬施設として機能したもので、平面形状はＢ地区のＳＫ606もこれに類似する。長岡京跡や奈良県谷畑遺跡などに類例が知られ（註7）、前者で考察された『吉事略儀』（註8）の火葬次第を彷彿とさせる。葬送儀礼に精通した墓聖の存在も予想される遺構。因みに、熱残留磁化測量結果では、1230年±70年という数値を得ている。初期段階の火葬専用土坑と予想され、収骨後は例えばＳＫ514やＫ533などの比較的早期の墓に葬った可能性がある。

ＳＫ559　1.4m、1.0m、0.18mで馬蹄形に東側を開く。掘形に焼土帯を持ち、埋土中に炭化物を含むも人骨等はない。直上に237号墓を想定したが、周溝ＳＤ878の内側にあるので、236号墓に伴う火葬土坑と想定する余地もある。

ＳＫ560～567　ＳＫ560は1.25m、0.85m、0.24mで、掘形に焼土帯が遺り、埋土中に焼石と炭化物が混入するため火葬土坑とした。底部に0.3m、0.2m、0.11mの小穴がある。ＳＫ561は0.85m、0.5m、0.3mで、14世紀後葉～15世紀前葉頃の土師器小皿（197～199）３枚が完形のまま出土した。ほぼ同時期に近い土壙墓と考える。ＳＫ562は0.9m、0.65m、0.27mで、埋土から14世紀末～15世紀中葉頃の土師器皿破片（135）、小皿の破片（200）が出土。それ以降の時期に築造の土壙墓である。15世紀中葉～後葉ころの土師器小皿（209～211）が完形品で３枚出土したＳＫ563は0.9m、0.7m、0.26mで、その小皿とほぼ同時期の土壙墓と推定。ＳＫ564は0.4m、0.4m、0.06mと小規模だが、掘形に焼土帯が遺る火葬土坑で、埋土に炭化物を含む。ＳＫ565は0.5m、0.5m、0.17mで、遺物なし。ＳＫ566は1.3m、1.1m、0.31mで、掘形の東半分に焼土帯が遺り、埋土中に焼石も混じる。底部から鉄釘（鉄54）が出土。恐らくは木製の棺を焼いた時期不明の火葬土坑である。ＳＫ567は1.4m、1.25m、0.32mで、全面が真っ赤に焼けていた。火は407号墓の南側区画石列にも及んでいた。埋土中に焼土・炭化物・人骨片ＳＸ204が混入。熱残留磁化測定結果によるならば、13世紀後半～14世紀後半ころの火葬土坑になる。407号墓はそれより古い。

ＳＫ568　1.9m、1.6m、0.21mで、掘形の東半分に焼土帯が遺る。底面は広範囲に藁灰（敷き詰めて焼いた感じ）に覆われ、火葬土坑であったことは明らか。底部に藁灰を検出したのは先述のＳＫ521と似ている（写真第７図）。熱残留磁化測定結果では、1240±50年と比較的に古い。当該土坑の上層で概ね重複する399号墓からは15世紀後半代の常滑産甕（70）が人骨ＳＸ194を伴って出土しており、単純に比較すれば、両者は別の遺構であろう。

ＳＫ569～570　ＳＫ569は1.15m、1.0m、0.2mで、埋土中に多量の炭化物と少量の焼土が混じる、時期

不明の火葬土坑だが、243号墓の周溝ＳＤ879の掘形切っているので、それよりは新しい（遺構第22図）。掘形に焼土帯が遺るＳＫ570は243号墓の主体部にあたる。1.0m、0.6m、0.25mの四隅に突出形通気孔を持つ方形の火葬土坑で、僅かに人骨片ＳＸ177が出土した。熱残留磁化測定の結果は、1140±70年（11世紀後葉～13世紀前葉）と古いが、計測者は数十年から百年後へずれる可能性も指摘している（附篇２参照）。周溝ＳＤ879を巡らせ、盛土と配石区画をして243号墓を築いた。土坑内と周溝から14世紀中葉～後半代と思える土師器小皿の破片（154～157）が出土。暫定的に14世紀代の火葬墓としておく。ＳＫ569がＳＫ570（243号墓）の周溝を切るため、ＳＫ570（243号墓）の方がＳＫ569より古いことは、すでに述べた。

ＳＫ571～579　狭い範囲に密集し、かつ掘形に焼土帯を遺す土坑が多い。ＳＫ571は0.9m、0.8m、0.32mで、焼土帯・焼石が遺り、人骨片ＳＸ208が出土した火葬土坑。ＳＫ572は1.2m、0.5m、0.21mで掘形に焼土帯を遺し、人骨片ＳＸ209と14世紀末～15世紀中葉頃の土師器小皿（202～207）６枚分がほぼ完存状態で出土した。概ねその時期の火葬土坑をそのまま墓にした火葬墓である。ＳＫ573は1.0m、0.7m、0.17mで、これも掘形に焼土帯が遺る。埋土中に焼石・炭化物が混じり、人骨片ＳＸ210が出土。火葬土坑を墓としたもの。ＳＫ575は1.2m、0.6m、0.38mで、焼土帯・焼石が遺り、人骨片ＳＸ212が出土した。ＳＫ576は0.85m、0.6m、0.13mで、埋土中に焼土・焼石が混入し、人骨片ＳＸ213が出土した。焼土帯は遺らないが埋土構成遺物から火葬土坑とした。ＳＫ577は1.2m、0.55m、0.33mで、掘形に焼土帯が遺り、埋土中から炭化物・人骨片ＳＸ292が出土した。ＳＫ574・578・579からは焼土帯や焼石・炭化物等を検出せず。ＳＫ574は1.25m、0.55m、0.4mで、底部から0.3m大の川原石が１個出土したのみ。422号墓と434号墓の境目下層に当たるＳＫ578は0.9m、0.75m、0.39mで、人骨片ＳＸ240だけが出土。東端に離れたＳＫ579は0.75m、0.4m、0.18m。いずれも出土遺物がなく、時期不明の土壙墓である。

ＳＫ580～585　ＳＫ580は0.85m、0.45m、0.18mで人骨片ＳＸ214のみが出土。掘形に焼土帯が遺るＳＫ581・582・584は火葬土坑である。それぞれ順に、1.1m、0.7m、0.2mの楕円形、0.9m、0.7m、0.23mの隅丸方形、1.0m、0.6m、0.18の隅丸長方形を呈す。ＳＫ581からは焼石・人骨片ＳＸ206が、ＳＫ582・584からは焼石・炭化物・人骨片ＳＸ211・ＳＸ224が出土した。切合い関係から、ＳＫ581はＳＫ582より新しい。ＳＫ583は0.8m、0.7m、0.18mで、埋土中から焼土・焼石・炭化物と人骨片ＳＸ225が出土。遺物の内容から火葬土坑と考える。埋土中から14世紀前半代の山茶碗底部破片（参考６）と14世紀末葉～15世紀中葉頃の土師器皿破片（138）が出土したので、15世紀中葉以降には築造されたと推定。焼石が出土したＳＫ585は1.4m、0.75m、0.29mで、埋土中から15世紀中葉～後葉頃の土師器小皿の破片（232）が出土したので、それ以降に築造の火葬墓と考える。切合い関係から、ＳＫ581はＳＫ582より新しく、ＳＫ582はＳＫ581・584よりも古い。ＳＫ583はＳＫ584よりも古い。

ＳＫ586～592　ＳＫ592以外は全て掘形に焼土帯を持ち、かつ相互に切合った結果、溝状に連結した状態になった。ＳＫ586は1.7m、0.4m、0.17mで埋土中に焼石・炭化物を含み、人骨片ＳＸ241が出土。ＳＫ588より新しい。ＳＫ587は0.9m、0.5m、0.2mで埋土中に炭化物・人骨片を含む。ＳＫ588より古い。ＳＫ588は1.4m（推定）、0.4m、0.2mで、炭化物のほか人骨片ＳＸ242が出土。ＳＫ586より古く、ＳＫ587・589より新しい。ＳＫ589は0.8m、0.5m、0.2mと推定。焼石・炭化物のほか人骨片ＳＸ223が出土。ＳＫ590より古い火葬土坑である。ＳＫ590は0.8m、0.5m（推定）、0.2mで、焼石のほか人骨片ＳＸ222が出土。ＳＫ589・591より新しい。ＳＫ591は1.0m、0.5m、0.2mで、焼石・炭化物のほか人骨片ＳＸ221が出土。ＳＫ590より古い。ＳＫ592は1.0m、0.55m、0.41mで、埋土中から焼土・炭化物のほか14世紀末～15世紀前葉頃の完形の土師器小皿（236）が出土した。それとほぼ同時期の火葬墓ではないかと考える。

ＳＫ593　1.7m、0.75m、0.53mで、北半側の掘形に焼土帯が遺り、焼石や炭化物が出土、南半側は一段と深く掘下げた底部の周囲に石が並び、13世紀末～14世紀前葉の頃の土師器皿の破片（125）と人骨片ＳＸ215が出土した。本来機能の異なる２つの土坑が１つになったものか。南半側の構造は経塚を彷

佛とさせる石があった（個別遺構第40図）。

ＳＫ594～595　250号墓と重複のＳＫ594は0.65m、0.5m、0.16mで、人骨片ＳＸ229だけが出土した。ＳＫ595は0.95m、0.55m、0.2mで、炭化物のほか人骨ＳＸ243が出土した。共に時期不明の火葬墓としておく。

ＳＫ596～599　ＳＫ596とＳＫ599には掘形に焼土帯が遺る。前者は0.75m、0.3m、0.15mで遺物はなく火葬土坑である。後者ＳＫ599は0.6m、0.6m、0.31mで、焼石と人骨片ＳＸ231のほか、13世紀末～14世紀初頭ころの土師器皿の破片（126）や14世紀中葉～後葉の土師器小皿の破片（158・159）が出土。14世紀後半以降の火葬土坑とする。ＳＫ597及びＳＫ598には掘形に焼土帯はないが、共に埋土中に焼土塊を含み、ＳＫ597からは人骨片ＳＸ230が、ＳＫ598からは焼石・炭化物が出土した。火葬墓であったかと思う。総じてＳＫ571からＳＫ599に至る土坑群には、Ａ地区にあっては規模や形状、焼土帯の有無などの点でやや異質なタイプが多かった。形状・機能的にはむしろＢ地区の土坑群に連なる同質のものと認識する。いわばＢ地区型土坑群の初期段階のものはここから始まったと考える（第22図）。

註7　（財）長岡京市埋蔵文化財センター編『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集、1985年。白石太一郎、田坂正昭「榛原町萩原・谷畑中世墓の調査」（『青陵』№24、橿原考古学研究所、1974年所収）、森郁夫「日本各地の墳墓　近畿」（『新版仏教考古学講座　第7巻墳墓』雄山閣、1982年所収）。

註8　続群書類従完成会『群書類従』第29集雑部、1982年。

（四）　Ｂ地区の遺構

Ａ地区との境界線とした山道に近いＢ地区北西端部には、調査前の地形測量段階から大小４ヶ所に盛土状の微高地部分があると目視できた。後にそれらを墳丘Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄと命名（通称）したが、改めてＡ地区の遺構番号に続けて通番号を付す。より残存度の良い461号墓（墳丘Ａ）・462号墓（墳丘Ｂ）は当遺跡中では特異な遺構である。ただＢ地区には土坑群が優越的で、それはＣ地区へも連続する。Ａ地区に普遍的だった配石区画墓もここでは皆無で、検出した土坑の大半が比較的小規模（平均規模94×70×23㎝）な火葬土坑である点は、火葬（土壙）墓を含むＡ地区の土坑群（平均規模119×83×26㎝）とは対照的であった。時期差や社会的背景の差異を反映した結果ではないかと予想している。

⑤　墳丘状遺構（第14表・第25・41図）

461号墓（墳丘Ａ）　上記山道に南接し、４ヶ所の墳丘状遺構では最北端に位置する。平面形状は隅丸方形で、墳丘部の規模は約4.0×4.0m、高さ約0.8m。裾部に幅約0.3～0.6m、深さ約0.15～0.3mの周溝ＳＤ880が巡るが、東側中央部に幅約1.2mの陸橋部を残す。この陸橋部から墳丘部への斜面には川原石を用いた階段（幅0.8m、４段と推定）があった。周溝から空風輪Ｂ1061が１点、西側の周溝底部からは宝篋印塔の相輪部Ｂ1140が１点出土した。墳丘中央部には断面形で幅0.62～0.74m、深さ0.22mの土坑状の窪みが遺る。本来ここには例えば大甕などが埋納されていた可能性もある（個別遺構第41図・写真第７図）。また、時期差はあるが、形態的類例に、長岡京跡右京第130次ＳＸ13002、出雲崎百塚遺跡１号塚、妻波古墓、尾窪中世墓群第58Ａ号、京都大学理学部遺跡ＢＥ29区ＳＸ１などがある(註9)。本例を「貴所」と呼ぶ「火葬塚」に比定し得るかどうか解らないが、遠く都の宗教文化の影響が当地にも及んでいた可能性はあろう。

462号墓（墳丘Ｂ）　墳丘Ａの東隣にあり、平面形状は隅丸方形である。墳丘部の規模は7.1×5.5m、高さ0.9m。裾部で北・東・西の三方に幅約0.44～1.7m、深さ0.2～0.52mの周溝ＳＤ881が巡り、谷側（南側）に開く。墳頂部には、中心をややずれて土坑ＳＫ610があり、15世紀後半～16世紀初頭頃の常滑産大甕（92）が底部を欠いた状態で埋納されていた。内部からは空（風）輪Ｂ1054、地輪Ｂ1069と古銭（銭23）「熙寧元寶」１枚が出土した。人骨はなかった。墳丘の南側縁辺部には石列が約４m分残存していた。本来は方形状に石列があったかも知れない。また、周溝内北西隅部には石塔類を集積したところがあった。大甕（92）が例えば50年あまりも伝世すれば、16世紀後半ころの築造と考えることもできる。461～462号墓はＡ地区の182～183号墓と並び、当中世墓群における何らかの画期を示す特殊な施設であったと、想像する。

463号墓（墳丘Ｃ）　残存度は良くないが、平面形状は4.8×3.6ｍの隅丸方形である。墳丘状盛土の北側縁辺部に、東西方向に石列が長さ約2.8ｍにわたり残存する。盛土の高さは現状で約0.3ｍに過ぎず、出土遺物もない。盛土除去後に下層からＢ地区に普遍的な土坑４基（ＳＫ605～ＳＫ608）を検出した。この墳丘状盛土は、それら土坑の廃絶後に出来たより新しい築成だが、性格や機能は不明である。

464号墓（墳丘Ｄ）　現在の山道により約半分ほどが削平を受ける。平面形状は4.0×3.0ｍの隅丸方形として認識できる。墳丘西端部に約1.5ｍ分だけ石列が残っていた。上記463号墓（墳丘Ｃ）の場合と同様、墳丘直下で６基の土坑を検出した。従って、463号墓（墳丘Ｃ）、464号墓（墳丘Ｄ）は、それら土坑群より後に新たに築造されたものである。それに引き替え、下層に土坑のなかった461号墓（墳丘Ａ）、462号墓（墳丘Ｂ）は、463～464号墓（墳丘Ｃ・Ｄ）より古く、周囲の土坑群よりも先に存在した可能性がある。周囲の土坑群は墳丘Ａ・Ｂを避けて分布するし、ＳＫ611・619・623などは位置的にも明らかに墳丘Ｂより後代性を示している。

註9　（財）長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集、1985年。新潟県教育委員会『国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書　出雲崎百塚』1984年、鳥取県東伯郡大栄町教育委員会・奈良大学文学部考古学研究室『妻波古墓』1985年、熊本県教育委員会『尾窪―熊本県下益城郡城南町尾窪中世墓群の調査―』1973年、京都大学埋蔵文化財センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』1978年。

⑥　土坑群（第16表,遺構第23～27図）

Ｂ地区の土坑群は、標高おおよそ115.2～111.2ｍ、南北間距離にして凡そ60ｍの間の南向き斜面において検出した。

前記Ａ地区と同様、並記する3つの数値は、各土坑の法量即ち長径・短径・深さを表すものとし、また、掘形の肩や壁面に沿って強い火を受け、赤く焼け締った土が帯状に遺るのを焼土帯と略称する。

ＳＫ600　461号墓（墳丘Ａ）から西へ９ｍ離れた所にある。1.0m、0.65m、0.22ｍで、掘形に焼土帯が遺り、埋土中から焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ216が出土。火葬土坑である。近接して、経筒外容器筒身破片（20）の一部、土師器鍋小破片（95）のほか、（空）風火輪Ｂ1076なども出土した。筒身破片（20）は182号墓などで出土した破片と接合した。

ＳＫ601～604　道路際で検出のＳＫ601は0.88m、（0.8m）、0.16ｍで、埋土中に焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ217を含む。ＳＫ602は（1.0m）、0.94m、0.27ｍで埋土中に焼土・炭化物を含む。ＳＫ603は0.5m、0.36m、0.2ｍとやや小規模だが、埋土に焼土・炭化物を含み、人骨細片ＳＸ218、15世紀中葉ころの土師器皿の破片（139）が出土した。その南側0.8ｍの地点で空風火輪Ｂ1073・Ｂ1083を採取した。ＳＫ604は0.92m、0.52m、0.18ｍで、埋土中に焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ226を含む。以上４基はいずれも時期不明の火葬土坑で、荼毘に付した後はＡ地区に埋葬したはずである。

ＳＫ605～608　４基は共に463号墓（墳丘Ｃ）の下層で検出したので、463号墓に先行する土坑。ＳＫ605は1.0m、0.7m、0.2ｍで、埋土中に焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ227を含み、火を受けて焼けた土師器皿（140）が伴出した。皿（140）は14世紀末～15世紀前葉頃に比定される。皿は必ずしも納骨時の副葬品とは限らない。ＳＫ606は1.9m、0.85m、0.21ｍで、形態的にＡ地区の火葬施設ＳＫ558と同じである。掘形に焼土帯が遺り、焼石や多量の炭化物に混じり人骨細片ＳＸ235のほか、相輪Ｂ1138や空風（火）輪Ｂ1085が出土した。Ａ地区が墓で徐々に密集して火葬場所に不足したため、ＳＫ558の代替施設として新たに造成されたものであろう（61頁）。ＳＫ607は1.0m、0.75m、0.24ｍで、掘形に焼土帯がのこり、埋土中に炭化物と人骨細片ＳＸ236が混入していた。ＳＫ608は0.9m、0.8m、0.33ｍで、やはり掘形に焼土帯が遺り、焼石、炭化物、人骨細片ＳＸ237が出土。熱残留磁化測定ではＡ．Ｄ．1370年＋60年、－370年との結果を得ている。これを一案として15世紀前半代の火葬土坑とすれば、463号墓（墳丘Ｃ）の築成は少なくともそれ以前に遡ることはあり得ない。

ＳＫ609　462号墓（墳丘Ｂ）から南側へ４ｍ離れた斜面にあり、0.8m、0.6m、0.4ｍで、遺物は皆無だった。

ＳＫ610　既述のように462号墓（墳丘Ｂ）の墳頂部にある土坑で、0.96m、0.88m、0.45m。常滑産大甕

(92) が底部を欠失した状態で埋納され、内部から古銭（銭23)、空（風）輪Ｂ1054・地輪Ｂ1069が出土した。近接地点でも古銭（銭22）を採取した。当該土坑は上記の甕を埋納する掘形である。被葬者一人の墓というより、182号墓のように納骨堂のような施設を考えた方が妥当ではないか、織田軍の南伊勢侵攻と関わりを持つのではないかとも思う。

ＳＫ611　462号墓（墳丘Ｂ）の周溝斜面で検出の土坑で、0.8m、0.7m、0.31m。内部に0.3～0.4m大の川原石が２個埋まっていたが、遺物は皆無である。462号墓より新しい。

ＳＫ612　0.35m、0.34m、0.20mと小規模。土坑内に空風輪を欠いた一石五輪塔Ｂ1127が直立し、直下に根石があった。火葬土坑とは思えない。土坑周囲には空風（火）輪Ｂ1097～1099、（空風）火輪Ｂ1100等が集積してあった。

ＳＫ613～618　６基の土坑が二列縦隊に並び、そのうち４基（ＳＫ615～618）を464号墓（墳丘Ｄ）の盛土直下で検出。ＳＫ613は0.75m、0.4m、0.22mで炭化物・人骨細片ＳＸ238、須恵器杯蓋破片（15）が、ＳＫ614は1.0m、0.65m、0.23mで焼石、炭化物、人骨細片ＳＸ239がそれぞれ出土した。ＳＫ615は1.0m、0.55m、0.35mで掘形に焼土帯が遺り、焼石、炭化物、人骨細片ＳＸ244が出土した。ＳＫ616は0.9m、0.6m、0.12mで、掘形に焼土帯が遺り、焼石や炭化物はあるが人骨片はない。ＳＫ617は0.8m、0.75m、0.3mで、掘形に焼土帯が遺り、焼石と人骨細片ＳＸ248が出土。ＳＫ618は0.75m、0.55m、0.29mで埋土中から焼土、焼石、炭化物に混じり人骨細片ＳＸ249が出土した。少なくともＳＫ615～618の４基は464号墓（墳丘Ｄ）に先行する火葬土坑である。

ＳＫ619～626　462号墓（墳丘Ｂ）の南脇にあるＳＫ619は0.7m、0.6m、0.18mで、16世紀前半代の土師器皿（144）小皿（276～278）破片と宝篋印塔屋根部Ｂ1144が出土した。火葬墓の可能性も排除できない。ＳＫ620～622の３基はそれぞれ0.6m・0.4m・0.23m；0.6m・0.38m・0.2m；0.7m・0.7m・0.16mで、ＳＫ622はやや歪な形である。共に出土遺物はない。462号墓（墳丘Ｂ）の周溝掘形上端から斜面にかかるＳＫ623は0.45m、0.4m、0.41mと小規模だが、埋土中から土師器細片と古銭（銭208・2098）「□宋元寶」他２枚が出土した。銭貨は熔解付着しており、火葬土坑の可能性が高い。六文銭の類であろう。ＳＫ624は0.6m、0.6m、0.38mで、埋土中より熔解付着のため判読不能の古銭（銭210～212）３枚と常滑産大甕口縁部破片（92）などが出土したが、その破片が462号墓（墳丘Ｂ）の土坑ＳＫ610に埋納の常滑産大甕口縁の一部分であるのは興味深い。後代性を示す火葬土坑である。ＳＫ625は0.7m、0.6m、0.32mで、掘形内部から水地輪Ｂ1106、一石五輪塔の地輪部Ｂ1121及び火水地輪部Ｂ1122～1124等の石塔類のみが出土し、異質な土坑という印象を持った。ＳＫ626は0.9m、0.75m、0.5mで、埋土から炭化物と白磁碗小破片（参考13）が出土した。

ＳＫ627～632　ＳＫ627は1.13m、0.64m、0.23mで、焼石と炭化物のみ出土。ＳＫ628は1.35m、0.6m、0.22mで、焼土と炭化物に混じり人骨細片ＳＸ250が出土した。ＳＫ629は0.74m、0.72m、0.19m、またＳＫ630は0.93m、0.57m、0.24mで、共に焼土、炭化物に混じり人骨ＳＸ251、ＳＸ253がそれぞれ出土。ＳＫ631は0.73m、0.67m、0.22m、ＳＫ632は1.1m、0.75m、0.2mで、いずれも焼土、焼石、炭化物のほか、人骨細片ＳＸ255、ＳＸ256がそれぞれ出土した。前者の場合は底部に0.3m大の川原石が２個あった（個別遺構第42図)。火葬時の通気用かと想像する。後者は464号墓（墳丘Ｄ）に先行する火葬土坑である。

ＳＫ633～636　ＳＫ633とＳＫ634は共に人骨細片ＳＸ257、ＳＸ258のみが出土した。前者は0.9m、0.23m、0.25mで掘形に焼土帯が遺る火葬土坑である。後者は0.9m、0.7m、0.25mで464号墓（墳丘Ｄ）に先行する。ＳＫ635とＳＫ636からは炭化物と人骨細片ＳＸ259、ＳＸ260が出土した。前者は1.0m、0.4m、0.23m、後者は1.1m、0.45m、0.21mである。

ＳＫ637～640　ＳＫ637は0.7m、0.4m、0.1mで遺物はない。ＳＫ638は1.15m、0.5m、0.15mで、埋土中に焼土と炭化物の混入があった。ＳＫ639、ＳＫ640は共に焼土、炭化物のほか人骨細片ＳＸ261、ＳＸ263がそれぞれ出土し、前者は1.0m、0.75m、0.25mで掘形に焼土帯が残る。後者は1.16m、1.05m、0.3mであった。共に時期不明の火葬土坑である。

ＳＫ641～643　ＳＫ641とＳＫ643に焼土はなく、

焼石、炭化物及び人骨細片（ＳＸ265、ＳＸ266）がそれぞれ出土。前者は1.02m、0.64m、0.25ｍで、16世紀代の完形の土師器小碗（83）が出土（遺物第47図）。ほぼ同時期の火葬土坑と想定。この小碗を供献具として、火葬に際し何らかの回向・儀礼があったと推測する。後者ＳＫ643は0.76m、0.56m、0.22ｍである。ＳＫ642は0.73m、0.77m、0.3ｍで、人骨はなく焼土、焼石、炭化物が出土。時期不明の火葬土坑である。

ＳＫ644～647　ＳＫ644は0.8m、0.72m、0.33ｍで、掘形に焼土帯を遺し、炭化物だけが出土した火葬土坑。ＳＫ645は0.84m、0.75m、0.25ｍで、埋土中から焼土、炭化物、人骨細片ＳＸ268が出土した。ＳＫ646は0.9m、0.55m、0.25ｍで、掘形に焼土帯を遺し、焼石、人骨細片ＳＸ269が出土した。共に火葬土坑であろう。ＳＫ647は1.1m、0.6m、0.24ｍで、遺物は皆無のため、性格は不明である。

ＳＫ648～654　ＳＫ648は0.76m、0.56m、0.25ｍ、ＳＫ654は0.85m、0.66m、0.2ｍで、共に炭化物と人骨細片（ＳＸ270、ＳＸ274）だけの出土である。ＳＫ649は0.74m、0.64m、0.24ｍで掘形に焼土帯を遺し、埋土中から炭化物・人骨細片ＳＸ271のほかロクロ土師器皿の小破片(34)の出土を見た。ＳＫ650・651、ＳＫ653の埋土には焼土・焼石・炭化物が混入する。平面三角形状のＳＫ650は0.7m、0.5m、0.13ｍ、それより後出のＳＫ651は1.0m、0.6m、0.25ｍで、この両土坑からは僅かに人骨細片（ＳＸ272、ＳＸ273）も見られた。ＳＫ653は0.8m、0.63m、0.3ｍで骨片はない。ＳＫ652は0.9m、0.73m、0.27ｍで焼石と多量の炭化物が出土した（個別遺構第42図）。いずれも時期不明の火葬土坑である。ＳＫ654は0.85ｍ、0.66m、0.2ｍで少量の炭化物と骨片ＳＸ274だけが出土。火葬墓の可能性もあるかも知れない。

ＳＫ655～659　ＳＫ655、ＳＫ656からは共に焼土・炭化物・人骨細片（ＳＸ275、ＳＸ276）が出土。前者は0.8m、0.64m、0.3ｍで掘形に焼土帯を遺し、底部から鉄釘（参88）も１本出土した。後者は0.8m、0.65m、0.25ｍである。ＳＫ657は1.15m、0.95m、0.28ｍで焼土・炭化物のみが出土。掘形に焼土帯の遺るＳＫ658は0.9m、0.66m、0.3ｍで炭化物・人骨細片ＳＸ277が出土した。ＳＫ659は0.83m、0.7m、0.26ｍで埋土中に焼土・焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ278が混在した。いずれも時期不明の火葬土坑としたい。

ＳＫ660～664　ＳＫ660は0.85m、0.78m、0.26m、焼土・焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ279が出土。ＳＫ661は0.98m、0.78m、0.28ｍで、焼土と多量の炭化物に混じり僅かな人骨細片ＳＸ280が出土した（個別遺構第42図）。ＳＫ662は1.42m、0.8m、0.22ｍで、焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ283のほか古銭（銭61～63）「景徳元寶」など３枚が出土した。ＳＫ663は0.64m、0.58m、0.17ｍで焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ284が出土。ＳＫ664は0.9m、0.7m、0.3ｍで焼土・炭化物だけが出土した。全て火葬土坑と考えて間違いない。

ＳＫ665～668　やや南端に離れたＳＫ665は1.0m、0.7m、0.25ｍで何も遺物を認めず。ＳＫ666は1.0m、0.88m、0.3ｍで掘形に焼土帯を遺し、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ285の他に鉄釘（鉄56）が１本出土した。明らかに火葬土坑である。埋土中に炭化物しかなかったＳＫ667は0.7m、0.68m、0.27ｍである。ＳＫ668は0.95m、0.78m、0.25ｍで、掘形に焼土帯を持ち、炭化物と人骨細片ＳＸ288が出土した（個別遺構第42図）。火葬土坑である。熱残留磁化測定の結果はＡＤ1210年±140年とやや幅がある。

ＳＫ669～675　ＳＫ669・670・671の３基は相互に重複する。その切合い関係からＳＫ669が最も古く、ＳＫ671が最も新しい。ＳＫ669は1.0ｍ（推定）、0.76m、0.2ｍで、焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ289が出土、ＳＫ670は0.84m、0.8ｍ（推定）、0.1ｍで炭化物のみを検出。ＳＫ671は1.22m、1.02m、0.17ｍで掘形に焼土帯を遺し、底部全面が赤く焼け固まり、炭化物と人骨細片ＳＸ290が出土した。ＳＫ672は0.6ｍ（推定）、0.6m、0.19ｍで炭化物のみが出土、切合い関係からＳＫ673より古い。ＳＫ673は2.4m、1.4m、0.25ｍと大型で、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ291のほか鉄釘（鉄78）も１本出土した。ＳＫ674は0.95m、0.6m、0.2ｍで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ293が出土。ＳＫ675は0.9m、0.6m、0.2ｍで、焼土・焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ296が出土した。これらはいずれも火葬土坑である。

ＳＫ676～680　ＳＫ676は1.12m、0.95m、0.3ｍで、焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ297が出土。底部

に間隔を置いて向い合う石は火葬する棺底部への通気用と推測。ＳＫ677は1.18m、0.76m、0.29mで掘形に焼土帯を遺し、炭化物・人骨細片ＳＸ298が出土。向い合う石が底部に遺る。ＳＫ678は0.9m、0.85m、0.2mで、底部中央に0.38m、0.35m、0.1mの穴を穿つ。穴の掘形に火を受けた0.1m大の石５個、0.23m大の石１個が遺る。炭化物・人骨細片ＳＸ299が出土した。ＳＫ679は0.55m、0.48m、0.2mと小規模。掘形や底部には火を受けた石（0.2～0.32m大）が５個遺る。併せて炭化物も出土。ＳＫ680は0.8m、0.72m、0.25mで、焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ300が出土。底部に0.15～0.3m大の石が５個遺るが、火を受けた痕跡は不明瞭であった。

ＳＫ681～686　ＳＫ681は1.0m、0.5m、0.25mで炭化物・人骨細片ＳＸ301及び古銭２枚（銭199・200）「咸平元寶」及び「永楽通寶」が出土した。ＳＫ682は0.84m、0.75m、0.20mで、炭化物・人骨細片ＳＸ302と共に古銭（銭55～59）「皇宋通寶」ほか５枚、及び鉄釘３本（鉄69・70・参89）が出土した（個別遺構第42図）。東側0.3～0.4m地点でも古銭17枚（銭24～銭40）が遺構外出土した。ＳＫ683は0.8m、0.6m、0.2mで炭化物・人骨細片ＳＸ303及び鉄釘（参考91）１本が出土した。ＳＫ684は0.8m、0.78m、0.11mで炭化物・人骨細片ＳＸ304が出土。ＳＫ685は0.9m、0.8m、0.2mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ305が出土。底部に４個の石（0.1～0.2m大）が一列に並ぶ。ＳＫ686は0.64m、0.54m、0.28mで炭化物・人骨細片ＳＸ306が出土した。全て火葬土坑と考えている。

ＳＫ687～691　ＳＫ687は0.46m、0.44m、0.15mと小規模で、炭化物のみが出土した。ＳＫ688は0.76m、0.75m、0.25mで焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ307が出土し、底部には６個の石（0.1～0.15m大）が遺る。ＳＫ689・690は切合い関係から前者が古く後者が新しい。前者は0.74m、0.7m（推定）、0.28mで、底部に径0.15m程のピットがある。炭化物だけが出土。後者は1.15m、0.65m、0.25mで、掘形に焼土帯が遺り、底部全面も赤く焼け締った状態で、炭化物・人骨細片ＳＸ308が出土した。ＳＫ691は0.8m、0.65m、0.28mで、炭化物・人骨細片ＳＸ309が出土し、底部に石が２個（0.1～0.15m大）遺る。これらも全て火葬土坑であろう。

ＳＫ692～702　これら11基の土坑からは全て炭化物と人骨細片（ＳＸ310～ＳＸ320）が出土し、ＳＫ694・697では炭化物が特に著しかった。焼土を検出し得たのはＳＫ692だけだが、ＳＫ693・697・699・701の４基からは焼石が出土した。鉄釘（鉄71・参考90）はＳＫ693とＳＫ694で出土した。前者は1.1m、0.95m、0.25m、後者は1.1m、1.0m、0.15mで、底部及び掘形付近に石（0.15～0.2m大）が６個遺る。また、古銭（銭213～216）「皇宋通寶？」ほか４枚が出土したＳＫ699は0.8m（推定）、0.72m、0.2mで、切合い関係からＳＫ698より新しい。同じく切合い関係にある土坑ＳＫ700・701の場合、前者は後者よりも新しい。共に底部に0.2m大の石が間隔を置いて据わる。底部に石（0.25～0.3m大）を据えるのは他にＳＫ692・696・702等である。いずれも時期不明の火葬土坑とする。

ＳＫ703～708　これら６基からも全て炭化物と人骨細片（ＳＸ321～326）が出土した。ＳＫ704とＳＫ705では、切合い関係から前者の方が新しい。その規模は0.85m、0.65m、0.18mで、古銭（銭197～198）「元豊通寶」ほか２枚が出土。後者は1.2m、0.85m、0.35mとやや大きい。同じくＳＫ706とＳＫ707の場合、前者は後者より新しく、その規模は0.77m、0.87m、0.18mで、焼石のほか、古銭（銭107～118）「天聖元寶」など12枚が出土した（個別遺構第42図）。後者は0.88m（推定）、0.86m、0.3mで、古銭（銭119～125）「開元通寶」ほか７枚と鉄釘（鉄57～68）・燧金（ひうちがね）（鉄30）が出土した。ＳＫ708は1.05m、1.0m、0.25mで、底部に遺る石（約0.2m大）は火を受け焼けていた。これら火葬土坑には複数回の使用も考慮すべきで、中には鉄釘を用いた棺に収められた亡骸もあったことが判る。

ＳＫ709～715　この７基からも全て炭化物・人骨細片（ＳＸ327～333）が出土した。ＳＫ709以外の６基は相互に重複し合い、切合い関係にある。ＳＫ710はＳＫ711とＳＫ713を切り、ＳＫ712はＳＫ711を切るもＳＫ714に切られる。ＳＫ714はＳＫ712・713・715の３基を切る。ＳＫ713はＳＫ710・714に切られるもＳＫ711を切る。従って、６基の間では、ＳＫ710・714が新しく、ＳＫ711・715が古いが、双方と

もそれぞれの新旧関係は不明。炭化物の多いＳＫ710は0.76m、0.62m、0.15mで、底部には石（0.35m大）も遺り、鉄釘（鉄73）１本が出土した。同じく底部から鉄釘（鉄72）が出土したＳＫ714は1.06m、0.66m、0.18mで、やはり底部に石（0.2m大）が遺る。ＳＫ709・712・715からは焼石が出土した。いずれも火葬土坑である。

ＳＫ716～718　ＳＫ716は1.05m、0.85m、0.15mで焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ334が出土し、底部に0.25m大の川原石が２個据わる。ＳＫ717は抜根で東側掘形が一部崩れたが、0.7m、0.65m、0.18mで、埋土中から焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ335が出土した。ＳＫ718は1.1m、0.65m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ336のほか、底部から鉄釘（鉄79）が１本出土した。すべて火葬土坑である。

ＳＫ719～721　ＳＫ719は1.0m、0.9m、0.32mで埋土中から焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ337が出土した。底部に川原石（0.1～0.2m大）が４個遺り、径0.4mの小穴を穿つ。ＳＫ720は0.95m、0.8m、0.3mで、焼石・炭化物の他、鉄釘（鉄74～77）が４本出土した。底部に川原石（0.3m大）が３個据わる（個別遺構第42図）。ＳＫ721は0.9m、0.5m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ338が出土、底部に川原石（0.2m大）が２個遺る。いずれも時期不明の火葬土坑である。

ＳＫ722～724　ＳＫ722・723は重複し、切合い関係から前者は後者より古く、その規模は1.1m、0.7m、0.15mで、焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ339が出土した。後者は1.1m、1.0m、0.15mで、焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ340と古銭（銭53・54）「洪武通寶」ほか２枚が出土。底部に0.2m大の石が遺る。ＳＫ724は1.2m、0.63m、0.35mで、焼石・多量の炭化物・人骨細片ＳＸ341が出土し、底部に遺る３個の石（0.1m大）に火を受けた痕跡があった。共に火葬土坑である。

ＳＫ725～730　相互の切合い関係で見ると、ＳＫ725はＳＫ726より新しく、ＳＫ726はＳＫ725・727より古い。ＳＫ727はＳＫ726・729より新しく、ＳＫ729はＳＫ727より古い。ＳＫ730はＳＫ728より新しい（ＳＫ727とＳＫ728の切合いはない）。６基のうち新しい方に属すＳＫ725は0.9m、0.76m、0.26mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ342のほか、判読不能の古銭（銭127～132）６枚が出土した。ＳＫ727は1.0m、0.46m、0.2mで、掘形に焼土帯を遺し、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ343及び古銭（銭48～51）「皇宋通寶」ほか４枚が出土した。ＳＫ730は0.94m、0.5m、0.23mで、炭化物・人骨細片ＳＸ346が出土し、底部に２個の石（0.2m大）が据わる。古い方に属すＳＫ726からは炭化物だけが出土した。ＳＫ728・729は共に炭化物・人骨細片（ＳＸ344・345）が出土し、前者には焼石も認められた。

ＳＫ731・732　切合い関係から前者は後者より新しく、その規模は0.92m、0.58m、0.2mで、焼土・焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ347のほか古銭（銭52）「永楽通寶」が１枚出土した。底部に石（0.15～0.25m大）が２個遺る。後者ＳＫ732からは炭化物と人骨細片ＳＸ348だけが出土した。

ＳＫ733～735　切合い関係からＳＫ733はＳＫ734より新しい。前者の規模は1.24m、0.8m、0.23mで、炭化物と多量の人骨細片ＳＸ349及び、古銭（銭41～47）「開通元寶（開元通寶）」他７枚が出土した。後者は0.96m、0.66m、0.17mで、炭化物と人骨細片ＳＸ350が出土。両土坑の底部には大小の石（0.1～0.3m大）が計18個不規則に散在した。やや北に離れたＳＫ735は1.24m、0.84m、0.14mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ351が出土。底部に２個の石（0.3～0.35m大）が間隔を置いて据わる。いずれも火葬土坑と考える。

ＳＫ736～738　ＳＫ736は1.05m、0.85m、0.2mで、炭化物と古銭（銭60）「皇宋通寶」が１枚出土。底部壁際の３ヶ所に長径0.2m内外の半円形小穴を穿つ。通気孔か。ＳＫ737は外側が1.3m、1.1m、0.5mで、内側に0.85m×0.55m大の土坑が二重にある（個別遺構第42図）。焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ352及び古銭（銭68～73）「景徳元寶」ほか６枚が出土した。ＳＫ738は0.85m、0.65m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ353が出土、底部に３個の石（0.15～0.2m大）が遺る。共に火葬土坑である。

ＳＫ739・740　切合い関係から、前者は後者より新しく、その規模は1.18m、0.8m、0.2m。後者は0.9m（推定）、0.68m、0.1m。共に炭化物・人骨細片（ＳＸ354・355）がそれぞれ出土した。火葬土坑とし

ておく。

ＳＫ741～744　重複するＳＫ741とＳＫ742とは切合い関係から前者が後者より古く、その規模は0.7m、0.6m（推定）、0.23mで、焼石・炭化物が出土。後者ＳＫ742は0.98m、0.66m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ356及び古銭（銭105～106）「永楽通寶」ほか２枚が出土。ＳＫ743とＳＫ744の場合は、前者が後者を切るため新しく、その規模はそれぞれ1.32m、0.98m、0.32mと1.8m（推定）、1.1m、0.2mである。前者ＳＫ743からは焼石・多量の炭化物・人骨細片ＳＸ357及び古銭（銭133～151）「開元通寶」ほか19枚が出土し、併せて土師器皿・小皿（143・279）の破片が出土した。それが15世紀後葉～16世紀初頭頃に比定できるので、それ以降の火葬土坑と推定。後者ＳＫ744からも焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ358及び古銭（銭160～184）「祥符元寶」他25枚と鉄釘（鉄80）１本が出土した。ＳＫ744はＳＫ751（後述）にも切られるため、それよりも古い火葬土坑である。

ＳＫ745～747　ＳＫ745は1.02m、0.72m、0.2mで焼石・多量の炭化物・人骨細片ＳＸ359が出土した。抜根により西側掘形が大きく崩れたＳＫ746は0.82m、0.66m（推定）、0.18mで、多量の炭化物・人骨細片ＳＸ360が出土した。切合い関係からＳＫ747より新しい。ＳＫ747は1.04m、0.74m（推定）、0.2mで、焼土・多量の炭化物・人骨細片ＳＸ361及び古銭（銭185～189）「天禧通寶」ほか５枚が出土した。掘形の一部をＳＫ748が切るため、それより古い火葬土坑である。

ＳＫ748～751　この４基も相互に重複し切合う。ＳＫ748は1.2m、0.76m、0.23mで、底部に幅0.2m余、長さ0.7m、深さ0.1m余の溝を穿つ。焼土・多量の炭化物・人骨細片ＳＸ362及び古銭（銭190～191）「永楽通寶」ほか２枚、土師器小皿破片（280）が出土。それを16世紀前半代に比定した。切合い関係からＳＫ749より古く、ＳＫ747・750より新しい。ＳＫ749は1.45m、1.1m、0.3mで、内側に更に0.9m、0.7m、0.4mの穴がある（個別遺構第42図）。焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ363及び古銭（銭86～103）「元豊通寶」ほか18枚、16世紀前半代の土師器小皿小破片（281）も出土。ＳＫ748より新しい。ＳＫ750は1.1m、0.72m、0.15mで、焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ364が出土した。ＳＫ748やＳＫ751より古い。ＳＫ751は1.06m、0.78m、0.2mで、焼石・多量の炭化物・人骨細片ＳＸ365及び古銭（銭152～159）「淳化元寶」ほか９枚が出土。底部に５個の石（0.15～0.2m大）を方形状に配置する。ＳＫ744やＳＫ750より新しい。一定範囲内に複数の火葬土坑が重複して穿たれた事実は、葬送儀礼における地域社会の規制（村の掟）など、何らかの事情を反映しているかも知れない。

ＳＫ752～756　ＳＫ752は0.84m、0.76m、0.16mで古銭（銭207）「永楽通寶」が１枚だけ出土した。ＳＫ753は0.88m、0.86m、0.22mで、焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ366が出土した。底部東側に大小７個の石（0.1～0.4m大）が集積。ＳＫ754は1.02m、0.82m、0.2mで、焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ367が出土した。底部中央に１個と掘形の下端に沿って10個の石（0.06～0.22m大）が円形状に遺っていた。棺の形状に合わせた通気用の措置か。ＳＫ755とＳＫ756とは重複し、後者は前者を切るゆえ新しい。前者の規模は1.0m、0.84m、0.19mで、炭化物・人骨細片ＳＸ368及び古銭（銭196）「永楽通寶」が１枚出土。後者ＳＫ756は1.0m、0.78m、0.15mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ369が出土した。底部に２個の石（0.2～0.3m大）が向合って遺る。いずれも火葬土坑である。

ＳＫ757～760　ＳＫ757は三重穴で、外側は0.88m、0.86m、0.2m、その中に0.72m、0.6m、0.1mの穴があり、更にその中に0.38m、0.32m、0.1mの小穴を穿つ。炭化物のみが出土し、小穴掘形付近に２個の石（0.15～0.2m大）が遺る。ＳＫ758は1.46m、0.72m、0.25mで、炭化物・人骨細片ＳＸ370が出土した。ＳＫ759は樹木抜根で掘形は大きく崩れたが1.3m（推定）、0.8m、0.23mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ371が出土した。ＳＫ760はやや小規模で0.6m、0.54m、0.15m、焼土・炭化物だけが出土した。

ＳＫ761～767　ＳＫ761は0.96m、0.6m、0.18mで、炭化物・人骨細片ＳＸ372が出土。ＳＫ762は0.6m、0.5m、0.15mと小規模で、炭化物・人骨細片ＳＸ373及び古銭（銭64～67）「永楽通寶」ほか４枚が出土。ＳＫ763とＳＫ764は切合い関係から前者が古く、後者が新しい。前者は0.8m（推定）、0.76

m、0.2mで、炭化物及び古銭（銭201 ～ 206）「永楽通寶」ほか６枚が出土。後者は0.8m（推定）、0.8m、0.2mで、焼石・多量の炭化物・人骨細片ＳＸ374が出土。底部に３個の石（0.1 ～ 0.15m大）が遺る。調査区壁際で検出のＳＫ765は1.25m、0.7m、0.2mで焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ375が出土した。ＳＫ766は1.0m、0.95m、0.25mで、焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ376及び古銭（銭74 ～ 85）「洪武通寶」ほか12枚、鉄釘（参考92）１本が出土。これを六文銭の倍数とすると、二度使われた火葬土坑かも知れない。底部に２個の石（0.2 ～ 0.3m大）が向合って遺る。ＳＫ767は1.3m、0.95m、0.16mで、内部に更に0.5m、0.4m、0.13mの小穴を穿つ。炭化物・人骨細片ＳＸ377の他に、15世紀中葉～後葉に比定した土師器皿破片（141 ～ 142）・小皿破片（244）、及び鉄釘（鉄81 ～ 87）が出土した。15世紀後半以降の火葬土坑と推測する。

（五）Ｃ地区の遺構

⑦　土坑群（第17表、遺構第28図～第33図）

Ｃ地区の土坑群は全部で106基ある。標高111.2 ～ 107.6mの間の南東向き斜面に分布するが、より標高の高い尾根筋側に偏在しつつ、南北距離にして約84mにわたる広範囲で検出した。基本的に火葬土坑が主体だが、遺物として縄文早期の深鉢破片や石鏃等が出土したのはＣ地区だけの特徴で、あるいは中世の火葬土坑ばかりではない可能性もあった。ただ、現地調査では、明確に縄文時代の遺構として特定できるものはなかった。当初、遺構の有無や拡がりを探るため、調査区壁際に幅約0.6mのトレンチを入れたため、その痕跡を残す。

前記Ａ・Ｂ地区と同様、文中に並記する三つの数値は、各土坑の法量即ち長径・短径・深さを表す。

ＳＫ768 ～ 773　ＳＫ768は0.6m、0.6m、0.17mで、出土遺物を認めず。炭化物のみが出土したＳＫ769とＳＫ770の規模は、前者は1.2m、0.5m、0.25mだが、後者は0.45m、0.4m、0.38mと小規模な土坑。ＳＫ771は1.15m、0.8m、0.15mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ378が出土した。ＳＫ770に近接のＳＫ772は0.75m、0.65m、0.45mで、炭化物・人骨細片ＳＸ379が出土した。ＳＫ773は0.9m、0.65m、0.2mで、内部に更に0.4m、0.35m、0.07mの小穴を穿つ。焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ380が出土した。ＳＫ769 ～ 772の周囲0.2 ～ 1.5mの範囲にサヌカイト剥片（８点）の出土があった。

ＳＫ774 ～ 778　やや南西端に離れてあるＳＫ774の規模は0.75m、0.6m、0.45mで、遺物はない。底部に0.2×0.16m大の川原石が１個遺る。埋土中に炭化物のみを検出したＳＫ775とＳＫ776は、前者が0.6m、0.4m、0.37m、後者は0.6m、0.5m、0.3mであった。ＳＫ777は0.75m、0.6m、0.4mで、炭化物・人骨細片ＳＸ381が出土。ＳＫ778は1.0m、0.8m、0.47mで、炭化物・人骨細片ＳＸ382及び土師器小皿破片（245）、石鏃（5）が出土した。ＳＫ775 ～ 778の周辺（0.3 ～ 2.0mの範囲）でもサヌカイト剥片（５点）の出土があった。

ＳＫ779 ～ 785　ＳＫ779は1.05m、0.8m、0.58mで、炭化物・人骨細片ＳＸ383が出土。掘形に北接してサヌカイト剥片（１点）も出土した。ＳＫ780は1.8m、1.0m、0.47mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ384が出土した他、縄文土器細片の混入もあった。切合い関係からＳＫ784より古い。ＳＫ781は0.85m、0.8m、0.42mで、炭化物のみ検出。ＳＫ782は0.5m、0.5m、0.15mと小規模で、炭化物・人骨細片ＳＸ385が出土し、切合い関係からＳＫ783より古い。ＳＫ783は1.2m、1.1m、0.5mで、焼石・炭化物・やや多い人骨細片ＳＸ386及び古銭（銭237 ～ 238）「永楽通寶」ほか２枚と鉄釘（参考99）１本、更にサヌカイト剥片（１点）の混入がみられた。切合い関係からＳＫ785より古く、ＳＫ782より新しい。同じくサヌカイト剥片が混入していたＳＫ784は0.8m、0.65m、0.4mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ387及び古銭（銭247）「熙寧元寶？」１枚が出土。切合い関係からＳＫ780より新しい。ＳＫ785は1.5m、1.1m、0.5mで、焼石・多量の炭化物・人骨細片ＳＸ388が出土。切合い関係からＳＫ783より新しい火葬土坑である。

ＳＫ786 ～ 795　やや小規模なＳＫ786とＳＫ787は、前者が0.65m、0.6m、0.33m、後者は0.6m、0.45m、0.1mである。焼石・炭化物・人骨細片（ＳＸ389 ～ 390）の出土は両者に共通し、後者では焼土の混入もあった。重複するＳＫ788とＳＫ789は、前者が1.75m、1.0m、0.18m、後者は0.85m、0.65m、0.28mで、切合い関係から後者ＳＫ789の方が新しい。前

者からは焼土・焼石・多量の炭化物・人骨細片ＳＸ391、及び15世紀後葉～16世紀初頭頃の土師器小皿破片（283）が出土し、後者でも焼石・多量の炭化物・人骨細片ＳＸ392が出土した。ＳＫ790は0.9m、0.5m、0.45mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ393、及び判読不能の古銭（銭257～260）４枚が出土した。ＳＫ791は1.4m、0.8m、0.37mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ394、及び古銭（銭245～246）「永楽通寶」２枚が出土した。「く」字状に湾曲する土坑ＳＫ792は1.45m、0.5m、0.3mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ395が出土。切合い関係からＳＫ793より古い。ＳＫ793は1.1m（推定）、0.5m、0.25mで、炭化物・人骨細片ＳＸ396が出土。ＳＫ794より古くＳＫ792より新しい。ＳＫ794は1.35m、0.8m、0.3mで、多量の炭化物と人骨細片ＳＸ397、及びサヌカイト剥片が混入すると共に、底部には0.2m大の川原石があった。ＳＫ793より新しい。ＳＫ795は0.85m、0.6m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ398が出土した。全て火葬土坑である。

ＳＫ796～799　Ｃ地区土坑群の中で唯一掘形に焼土帯を遺すＳＫ796は、1.1m、0.9m、0.35mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ399の他、埋土中にサヌカイト剥片も混入していた。当該土坑の西側0.5～2.0mの範囲内でもサヌカイト剥片が５点出土した。ＳＫ797は0.7m、0.65m、0.4mで、炭化物・人骨細片ＳＸ400が出土。重複するＳＫ798とＳＫ799は、切合い関係から前者ＳＫ798が古くＳＫ799が新しい。前者は0.9m、0.8m、0.45mで、炭化物・人骨細片ＳＸ401が出土。後者は0.9m、0.85m、0.47mで、焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ402が出土した。

ＳＫ800～803　ＳＫ800は1.65m、1.2m、0.4mで、少量の焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ403が出土し、底部に0.3～0.4m大の川原石が２個遺る。ＳＫ801～803の掘形を切るため、その３基より新しい。ＳＫ800より古い３基はそれぞれ、ＳＫ801が0.75m（推定）、0.65m、0.42m、ＳＫ802が0.85m（推定）、0.75m、0.3m、ＳＫ803が0.8m（推定）、0.75m、0.27mで、共に炭化物・人骨細片（ＳＸ404～406）が出土した。ＳＫ803の掘形は次のＳＫ804にも切られるため、それよりも古い。

ＳＫ804～807　ＳＫ804は1.6m、1.0m、0.48mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ407及び古銭（銭224～228）「皇宋通寶」ほか５枚と土師器小破片が出土した。切合い関係からＳＫ803・805・806より新しい。ＳＫ804に先行するＳＫ805・806は、前者が1.0m（推定）、0.75m、0.3mで、炭化物・人骨細片ＳＸ408を、後者は1.2m（推定）、0.6m、0.25mで、少量の焼土・炭化物・人骨細片ＳＸ409を、それぞれ埋土中に包含していた。ＳＫ806より新しいＳＫ807は1.0m、0.7m、0.3mで、多量の炭化物・人骨細片ＳＸ410及び古銭（銭229～236）「天聖元寶」ほか８枚が出土した。

ＳＫ808～810　調査区東壁際で検出のＳＫ808は1.05m、0.8m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ411及び判読不能の古銭（銭239～244）６枚が出土。同じく壁際のＳＫ809は0.9m（推定）、0.75m、0.25mで、焼石・多量の炭化物・人骨細片ＳＸ412及び土師器破片が出土。ＳＫ810は0.8m、0.5m、0.3mで、炭化物・人骨細片ＳＸ413が出土した。

ＳＫ811～815　ＳＫ811は1.1m、0.7m、0.23mで、埋土中から焼土・焼石・炭化物が出土したが、人骨は確認できなかった。ＳＫ812は0.9m、0.85m、0.25mで、焼土・人骨細片ＳＸ414が出土した。ＳＫ813・814は重複による切合い関係から、前者が後者より新しい。前者ＳＫ813は0.7m、0.55m、0.33mで、炭化物のみが出土した。後者ＳＫ814は1.2m、0.85m、0.42mで、炭化物・人骨細片ＳＸ415が出土した。ＳＫ815は0.8m、0.85m、0.4mで、炭化物のみが出土した。これら火葬土坑の周囲からもサヌカイト剥片（９点）を採取した。

ＳＫ816～821　ＳＫ816はＳＫ806・807に切られており、それらよりも古い。規模は1.2m（推定）、0.65m、0.32mで、炭化物・人骨細片ＳＸ416が出土した。ＳＫ817は1.2m、0.75m、0.45mで、焼土・焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ417が出土した。ＳＫ818は1.15m、1.1m、0.3mで、炭化物・人骨細片ＳＸ418及び古銭（銭269～281）「天聖元寶」ほか13枚が出土。ＳＫ819～821の３基相互の切合い関係からみてＳＫ819が最も古く、ＳＫ821が最も新しい。ＳＫ819は1.0m、0.75m（推定）、0.45mで、炭化物・人骨細片ＳＸ419が出土。ＳＫ820は1.6m（推定）、1.0m（推定）、0.33mで、多量の炭化物と人骨片ＳＸ420が出土。ＳＫ821は1.0m（推定）、0.6m（推定）、0.45mで、

多量の炭化物・人骨細片ＳＸ421が出土した。

ＳＫ822～826　5基は相互に重複し、複雑な切合い関係にある。ＳＫ822は1.5m（推定）、1.1m（推定）、0.5mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ422が出土し、ＳＫ823・824より古い。ＳＫ823は1.1m、0.8m、0.38mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ423及びサヌカイト剥片が出土。ＳＫ822より新しい。ＳＫ824は1.4m（推定）、0.8m（推定）、0.4mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ424が出土。ＳＫ822・826より新しく、ＳＫ825より古い。ＳＫ825は1.65m（推定）、0.9m、0.43mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ425及びサヌカイト剥片が出土した。ＳＫ824より新しい。ＳＫ826は1.3m（推定）、0.85m（推定）、0.22mで、炭化物・人骨細片ＳＸ426及び古銭（銭286～291）「景祐元寶」ほか６枚が出土した。底部壁際に0.3m大の川原石が１個遺る。ＳＫ824～825・ＳＫ829よりも古い火葬土坑である。

ＳＫ827～830　ＳＫ827は1.0m、0.75m、0.32mで焼石・炭化物が出土した。ＳＫ828は0.8m、0.7m、0.3mで、焼石・炭化物及び土師器皿破片（145～147）と土師器小皿破片（282）が出土した。これら皿類を15世紀後葉～16世紀初頭に比定した。ＳＫ829は前記ＳＫ826より新しく、0.8m、0.8m、0.25mで、焼石・炭化物・多量の人骨片ＳＸ427及び判読不明の古銭（銭261）１枚、土師器細片が出土。ここの焼石は、赤く焼けた0.43m大のもので、底部壁際に遺っていた。ＳＫ830は1.0m、0.7m、0.38mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ428及び土師器細片が出土した。

ＳＫ831～835　この5基も調査区壁際で相互に重複し切り合う。ＳＫ831は1.4m、0.9m、0.3mで、焼石・多量の炭化物と人骨細片ＳＸ429及び古銭（銭248～253）「祥符元寶」ほか６枚、土師器細片、鉄釘（鉄98）１本が出土した。ＳＫ832やＳＫ833より新しい。ＳＫ832は1.4m（推定）、0.5m、0.18mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ430が出土。ＳＫ831より旧く、ＳＫ833より新しい。ＳＫ833は1.3m（推定）、0.7m（推定）、0.3mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ431及び古銭（銭284～285）「至和通寶」ほか２枚と鉄釘（参考100）１本が出土。ＳＫ831やＳＫ832より古く、ＳＫ834よりは新しい。ＳＫ834は0.9m（推定）、0.8m（推定）、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ432及び古銭（銭267）「元豊通寶」１枚が出土した。ＳＫ833より古くＳＫ835より新しい。ＳＫ835は1.6m（推定）、0.9m（推定）、0.17mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ433及び古銭（銭263～266）「開通元寶（開元通寶）」ほか４枚、土師器皿（148～149）２枚と刀子（鉄25）１本等が出土した。ＳＫ834よりも古い。

ＳＫ836～840　ＳＫ836は0.6m、0.6m、0.3mで、炭化物・人骨細片ＳＸ434が出土。ＳＫ837は1.4m、1.05m、0.23mで、焼石・人骨細片ＳＸ435が出土。ＳＫ838は0.8m（推定）、0.5m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ436が出土、ＳＫ839よりも古い。ＳＫ839は0.6m、0.5m、0.3mで、焼土・焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ437が出土、ＳＫ838やＳＫ840よりも新しい。ＳＫ840は0.9m（推定）、0.45m、0.28mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ438が出土し、ＳＫ839よりも古い。

ＳＫ841～847　ＳＫ841は0.85m、0.6m、0.3mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ439が出土。ＳＫ842は0.9m、0.75m、0.4mで、炭化物・人骨細片ＳＸ440が出土。調査区壁際で検出のＳＫ843は0.85m（推定）、0.55m（推定）、0.27mで、焼石・多量の炭化物と人骨細片ＳＸ441とが出土した。ＳＫ844は1.2m、0.8m、0.32mで、焼石・炭化物・人骨片ＳＸ442が出土。重複するＳＫ845・846は、切り合い関係から前者が後者より新しい。前者ＳＫ845は0.8m（推定）、0.6m（推定）、0.2mで、焼土・炭化物及び土師器細片が出土。後者ＳＫ846は0.9m（推定）、0.6m（推定）、0.23mで、焼土・焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ443及び土師器細片が出土した。ＳＫ847は0.7m、0.5m、0.37mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ444が出土した。

ＳＫ848～851　ＳＫ848は1.0m、0.9m、0.2mで、焼土・焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ445が出土。ＳＫ849は1.1m（推定）、0.8m（推定）、0.23mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ446及び土師器小皿（284～285）2枚が出土。ＳＫ850より古い。ＳＫ850は1.3m（推定）、0.9m（推定）、0.32mで、焼石・炭化物・多量の人骨細片ＳＸ447が出土。埋土直上でサヌカイト製石鏃（３）１点も採取した。ＳＫ849やＳＫ851より新しい。ＳＫ851は1.0m（推定）、0.65m（推定）、0.25mで、炭化物・人骨細片ＳＸ448が出土した。

ＳＫ852～857　ＳＫ852は1.9m、1.6m、0.25mとやや大型で、焼石・多量の炭化物・人骨細片ＳＸ449が出土。ＳＫ853は0.8m、0.65m、0.2mで、炭化物と人骨細片ＳＸ450及び古銭（銭255～256）２枚が出土した。ＳＫ855より新しい。ＳＫ854は1.0m、0.6m、0.23mで、焼石・多量の炭化物・人骨細片ＳＸ451及び鉄釘（鉄93～97）５本が出土。ＳＫ855は1.15m、0.75m、0.25mで、炭化物・人骨細片ＳＸ452が出土。ＳＫ853より古い。調査区壁際で検出のＳＫ856は1.0m（推定）、0.6m（推定）、0.33mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ453及びロクロ土師器底部破片（32）と土師器小皿破片（164）が出土。またＳＫ857は1.6m（推定）、1.2m（推定）、0.2mで、焼石・炭化物・多量の人骨細片ＳＸ454及び鉄釘（参考101）１本とサヌカイト剥片も出土した。

ＳＫ858～861　ＳＫ858は0.65m、0.55m、0.17mと小規模で、炭化物・人骨細片ＳＸ455が出土した。ＳＫ859は1.45m（推定）、1.0m（推定）、0.3mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ456が出土。ＳＫ860は1.2m、1.0m（推定）、0.37mで、炭化物・人骨細片ＳＸ457及びサヌカイト剥片４点も出土した。ＳＫ861は1.2m、0.9m（推定）、0.45mで、焼土・焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ458が出土した。

ＳＫ862～864　ＳＫ862は1.55m（推定）、1.2m（推定）、0.5mで、炭化物・人骨細片ＳＸ459の他に、縄文土器深鉢破片（11）も出土した。ＳＫ863は1.1m、1.0m、0.38mで、炭化物・人骨細片ＳＸ460が出土した。ＳＫ864は1.4m（推定）、1.0（推定）、0.32mで、埋土中に炭化物のみが混在した。

ＳＫ865～869　ＳＫ865は0.8m、0.75m、0.35mで、焼土・焼石・多量の炭化物・人骨細片ＳＸ461が出土。ＳＫ866は1.2m、0.85m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ462が出土。ＳＫ867は1.2m、0.9m、0.15mで、多量の炭化物及び人骨細片ＳＸ463が出土した。底部の約3分の2を岩盤が占める。ＳＫ868は1.0m、0.8m、0.18mで、炭化物・人骨細片ＳＸ464が出土。掘形の肩に0.4m大の石が1個据わる。壁際のＳＫ869は0.85m（推定）、0.75m、0.42mで、炭化物・人骨細片ＳＸ465が出土した。

ＳＫ870～873　ＳＫ870は1.3m、0.95m、0.2mで、焼土・焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ466が出土した。当地区最南端の遺構ＳＫ871は1.3m、0.9m、0.23mで、焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ467が出土した。掘形の一部に0.8m大の石が据わるＳＫ872は1.2m、1.05m、0.25mで、埋土中から焼石・炭化物・人骨細片ＳＸ468が出土。その石がどういう機能や性格を持ったかは不明である。最後に、ＳＫ873は0.7m、0.7m、0.22mで、底部に0.4m大の石が据わり、埋土中に焼土・炭化物が混在していた。　（田阪　仁）

Ⅴ．遺物篇

（一）石器

①石鏃・剥片（第18表、第43図・写真第９図）

57点ある。器種の内訳は、石鏃５点・石鏃未製品１点・二次加工痕有剥片１点、使用痕有剥片１点・剥片（砕片含む）48点・石核素材（分割礫）１点となる。石材の内訳をみるとサヌカイト40点・チャート４点・泥岩３点・片岩１点である。

石鏃（１～６）　（１）～（４）は凹基無茎鏃である。（１）・（２）はともに側縁が直線となるもので、長幅比が１に近い正三角形状を呈す。（３）は側縁が内に膨らむもので、やや長身である。（４）は側縁が先端部付近で屈曲するいわゆる「五角形鏃」である。時期的には縄文時代後期に多くみられるが、１点のみであり時期確定には至らない。（５）は平基無茎鏃で、左下半部を欠損している。右側縁が内に膨らむことから、左側縁も同様か直線状となろう。（６）は三角形状に加工を施すことから未製品とした。（１）～（６）はすべてサヌカイト製。

二次加工痕有剥片（７）　山形に打面調整を行った痕跡がみられる風化度の強い横長剥片（サヌカイト）を素材とする。この横長剥片はその特徴から旧石器時代にさかのぼる可能性が高く、縁辺に残る不規則な加工も同時期のものである。新たな加工は腹面縁辺中央よりに施し、一見すると新しいキズのような色調を呈すが、風化度は石鏃（４）に近い程度のものである。このような、時代あるいは時期を相当に隔てた石器を素材として用いるサヌカイト搬入例は、縄文時代後期後半の松阪市天白遺跡にみられ、今後、時期的・数量的なあり方の検討が必要であろう。

剥片　図示はないが、剥離痕のあり方からおそらく両極打法により剥離されたものがある。灰色チャー

トを用いる。

その他、136.8ｇのチャート製石核素材（分割礫）や95.2ｇの泥岩製剥片がみられるが、大部分は石器素材とはなり得ない小型剥片である。　（久保 勝正）

②磨石・敲石（第18表、第43図・写真第９図）

磨石・敲石（10・11）　（10）は円礫の半分余りを欠く。表面側とした中央部には敲打痕の一部が残り、反対側にも磨り面が形成されて平坦になっている。（11）はやや扁平な円礫の上下両端と表面中央部に敲打痕が残り、手ごろなハンマーとして使用されたものと考えられる。この２点以外にも明かに遺跡内に搬入された円礫で、単なる自然石として片づけられないようなものが認められる。　（奥　義次）

（二） 土器

③縄文土器（第18表、第43図・写真第９図）

深鉢（８）　早期後葉に属す、高山寺式土器の口縁部に近い深鉢片。断面形は体上部で屈曲し、口縁部に向けて、かなり外反する。表面には一辺ほぼ１cmほどの平坦な菱形文が斜格子状に密接施文されている。内面には太い斜行沈線がやや間隔をおいて施される。沈線間の断面形はなだらかなカマボコ状となる。繊維の含有はわずかに認められる程度で、目立たない。器厚は1.2 ～ 1.5cm。高山寺式土器の中では新しいタイプに属する。

深鉢（９）　上記深鉢（８）と同一固体かどうかは不明であるが、同型式の底部に近い破片。器面がかなり傷み、文様は不明。断面形からすると、丸底に近い尖底と考えられる。これ以外にも破片が20数点見られるが、いずれも器面がひどく傷んでおり、施文の有無が判断出来ないものばかりである。（奥義次）

④須恵器（第19表、第44図）

杯蓋（12・13）　いずれも破片で、Ａ地区Ｎ14 ～ 16内の数ヶ所に散乱、埋没していたので、遺構に伴うものではない。前者は復元口径約12.1cm、同器高約5.5cm、後者は復元口径約14.0cm、同器高約5.1cmである。共に暗灰色を呈し、ロクロ水挽き後、天井部外面にロクロヘラ削りを施す。ＭＴ15号窯型式併行期（６世紀前半代）のものと判断した。Ａ地区から南東へ約200ｍ余離れた南西斜面に築造の４基の古墳は、どれも７世紀前葉以降に位置づけられる（註10）ため、他の古墳等の遺物が持ち込まれた可能性が高い。

杯蓋（14）　紐付き天井部分の小破片だが、上記甕（17）に伴出した。淡灰白色で、ロクロ水挽き後、天井部外面をロクロヘラ削りし、紐を貼付ける。７世紀末以降８世紀前半代頃までには収まると考える。

杯蓋（15・16）　いずれもＡ地区出土の破片で、前者は土坑ＳＫ527とＳＫ613からそれぞれ破片が出土し、口径は約16.4cm、器高約3.9cmと復元され、後者は土壙ＳＫ527（Ⅲ類）からの出土である。調整技法は前掲杯蓋（14）と同様。時期的には前者（15）は７世紀末以降８世紀前半代までに収まるが、後者（16）はツマミ部分の形状から、やや遅れて８世紀前葉～中葉頃に比定しておく。

甕（17）　Ａ地区土坑ＳＫ520に隣接のＳＸ158からの出土で、ほぼ完形品。口径10.8 cm、器高18.0cm、底部径 6.8cmで、淡青灰色の器壁はロクロ水挽きの後に、体部下半をロクロヘラ削りで調整される。猿投窯岩崎41期併行期（７世紀末～８世紀初頭）とした。内部には人骨が充満していた。但し、この１点を以て、当山における墳墓の初現とするには、特に否定的材料はないが、それでもなお躊躇を感じる。

註10 『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第二分冊二、1990年所収「横尾古墳群」192頁。

⑤土師器（第19表、遺物第44 ～ 49図）

ロクロ土師器（第19表、遺物第44図）

皿（32 ～ 38）　底部破片が７点ある。いずれもＡ地区内の配石区画墓や周溝、あるいは土坑など中世墓に関する遺構の埋土中に混入した破片で、明確な遺構に伴う遺物ではない。復元底部径は殆ど約3.2cmから4.5cmの範囲に収まるが、１点だけ7.0cmというのもある。12世紀代の所産と考える。これらは、中世墓以前の経塚等も考慮すべき遺物と考える。

土師器皿・小皿（第19表、遺物第49図）

破片を含め、個体数として最も多いのは土師器皿類である。皿と小皿との区分は、口径10cmを一応の目安とした。完形品のなかで山茶碗と共伴の皿・小皿類は皆無のため、既出編年案等を参照しつつ、細分化は避け大きく包括的に①期13世紀末頃～ 14世紀末葉、②期14世紀末頃～ 15世紀後葉、③期15世紀後葉～ 16世紀末葉、の３期に仮分類してみた（註11）。

皿類（112 ～ 149）

やや古相を帯びる皿が４点（112 ～ 115）だけある。全てＡ地区出土の破片で遺りが悪く、調整技法も口縁部横ナデ程度しか判らない。（112・113）は復元口径約14.0cm、概ね12世紀後半代と考える。（114）は底部が未調整で、復元口径は約16.0cm、器高約2.5cmであった。12世紀後半代かと思う。（115）は復元口径が18.6cm、器高は約2.3cmである。11世紀末～ 12世紀前葉頃の所産かと推定する。いずれも中世墓関係の遺物と決めつけるのにはいささか躊躇する。

①期の皿（116 ～ 127）は、口径約11.0 ～ 13.0cm（平均約11.9cm）、器高約1.2 ～ 3.0cm（平均約2.4cm）、比較的に口縁部は肥厚しつつ、やや直立に近く内湾する傾向にある。

②期の皿（128 ～ 142）は、口径約9.8 ～ 13.6cm（平均約11.6cm）、器高約1.9 ～ 2.8cm（平均約2.4cm）、口縁部がやや肥厚するものから徐々に薄手に変化すると共に、口縁部が外に開きつつ下半部でＳ字状に屈曲する形状へと近づく。

③期の皿（143 ～ 149）は、口径約11.0 ～ 13.0cm（平均約11.7cm）、器高約1.3 ～ 2.8cm（平均約2.1cm）である。ほぼ三つのタイプがある。（143・144・148・149）は、②期の（141）の系統を引くタイプで、全体的に一層薄手で口縁部は外に開き、上記のＳ字状屈曲が普遍的になる。（145・146）は、器高が2.0cm未満、薄手で口縁部は緩やかに内湾し、歪みがみられるタイプ。（147）は、器高が2.0cmより大きく、薄手でやや内湾気味に外へ開く。②期の（142）と同じ系統になる。

小皿類（150 ～ 285、参考15 ～ 20）

①期の小皿（150 ～ 164）は、口径約6.0 ～ 10.0cm（平均約8.0cm）、器高約1.0 ～ 2.2cm（平均約1.3cm）であるが、構成要素は一様ではない。口縁部が肥厚するのはほぼ共通するものの、口径が8.0 ～ 9.0cm前後、器高2.0cm前後で、口縁部が内湾しながら真っ直ぐ上に立ち上がるタイプ（150）、口径は10.0cm前後、器高は1.5cm以下または2.0cm以下で、口縁部がやや開きつつ緩やかに立ち上がるタイプ（155・156）、口径が9.0 cm前後または7.0 ～ 8.0cm、器高1.5cm以下の一般的な小皿タイプ（152・154）（157 ～ 159）、などいくつかのタイプが共存する。それらは概ね③期まで継続的に現れるようである。

②期の小皿（165 ～ 245）は、口径約6.0 ～ 10.5cm（平均約7.8cm）、器高約0.8 ～ 2.8cm（平均約1.3cm）。数量的にこの時期の小皿が多数を占めた。（134・244）などは①期の（150）のタイプに相応する。例えば、436号墓出土の小皿で言うと、（225・226）などは①期の（152・154）のタイプ、（229 ～ 231）は同じく（157 ～ 159）の系統である。この期の小皿は、全体に器壁は薄手に向い、器形に扁平化が進み、歪みや内外面に煤煙の痕跡が比較的多くみられる。

③期の小皿（246 ～ 285）は、口径約6.0 ～ 9.0cm（平均約7.7cm）、器高約0.6 ～ 2.0cm（平均約1.2cm）。ＳＫ828出土の（282）は、②期の（244）と同じタイプ、また（145・146）は①期の（155）と同じ系統に属す。（147）は①期（156）や②期（142）と同じタイプである。この時期に普遍的な小皿は、（255 ～ 263）のように一層扁平化が進んで、板状に近い形状を呈するまでになっている。

土師器碗・小碗（第19表、遺物第47図）

土師器碗（80・81）は、口縁部に向かうほど器壁が厚く、底部が貼付けた高台よりも下にややはみ出すような、なんとなく無骨な作りである。出土当時には類例がなかった。

土師器小碗（83 ～ 85）としたのは、口径が約10cm内外、器高は５cm以内のもので、高台の有無もある。当初は杯か鉢かと迷ったが、名称は小碗に統一した。土坑に伴って出土した（83）と（84）は完形品で、遺構の時期決定に重要。前者を16世紀代、後者を15世紀後半代に比定した。

土師器羽釜・鍋（第19表、遺物第47 ～ 48図）

２点の羽釜（93・94）は、共に墓の配石区画内（284・282号墓）から人骨（ＳＸ11・162）に伴って出土した。かつては蔵骨器に転用された遺物に違いないが、ここではいずれも口縁部の小破片で、埋土への混入遺物と判断した。前者（93）は16世紀代、後者（94）は15世紀中葉頃のもの。両配石区画墓の造営はそれより遡らない。

次に、伊勢型鍋（95 ～ 111・参考14）は18個体あった。既出編年案（註12）を参照すると、（95）は12世紀中葉頃、（96 ～ 98）は13世紀後半代、（99 ～ 104）は14世紀前半代、（105 ～ 109）は14世紀末葉～ 15世

紀前葉、(110 ～ 111・参考14) は15世紀後葉～ 16世紀中葉代、にそれぞれ比定しうる。いずれも蔵骨器への転用遺物に違いないが、完形品はほとんどなく、ほぼ全容が判るのは３点 (97・98・104) である。

註11　美杉村教育委員会編『北畠氏館跡9－多気北畠氏遺跡第26次調査北畠氏館跡総括編－』2005年などを参照。竹田憲治、伊藤裕偉氏らの助言も参考にした。責任は田阪が負う。

註12　新田洋「平安時代～中世における煮炊用具－「伊勢型」鍋に関する若干の覚書－」(『三重考古学研究』１、三重考古学談話会、1985年)、及び伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Mie history』vol. 1、三重歴史文化研究会、1990年) など。

⑥陶器類 (第19表、遺物第44 ～ 47図)

経筒外容器 (第19表、遺物第44図)

Ａ地区から５個体分の**筒身** (18・19・20・21・23・27・29) の破片が出土し、Ｂ地区からも**口縁部破片** (22) が１点出土した。この口縁部 (22) の形状は上記筒身の口縁部とは別物で、併せて６個体分があったと判断した。筒身上半部 (18) と下半部 (19) は共に破片で、前者の復元口径は約16.5cm、後者の復元底部径は約11.2cmである。両者の胎土・色調・成形技法などの比較から、あるいは本来同一個体かとも考えるたが、口径に対して底部径がやや小さく、器壁の厚みもややバランスを欠く。下半部 (19) の口縁部には上半部 (23) の方が相応しいかも知れない。

唯一、Ｂ地区の土坑ＳＫ624の埋土中に混入していた上半部 (22) は、復元口径約14.8cmで、口縁端部は蓋受け部の立ち上がりを持っている。

上半部 (20) と下半部 (21) もそれぞれ破片で、前者の復元口径は約16.6cm、後者の復元底部径は13.0cmである。いずれも内面に粘土紐の結合痕跡が認められ、胎土や成形技法などの類似から、本来は同一個体であった可能性が高い。以上４個体はいずれも12世紀後葉～ 13世紀初頭、遅くとも13世紀前葉までには収まるであろう。

筒身と蓋とのセット関係が類推できるのが２組ある。蓋 (26) と筒身 (27)、蓋 (28) と筒身 (29) である。これらは特に182号墓の盛土内を中心に出土した。

蓋 (26) は山茶碗の底部外面に紐を貼付けており、復元口径約15.2cm、器高約7.3cm、底部径約6.2cm、12世紀末葉～ 13世紀前半代に位置づけた。**筒身** (27) は復元口径約13.2cm、器高約22.8cm、底部径約13.0cmである。暗灰白色で、内面に横ナデと指圧痕が遺り、口縁部～体部を横ナデ、下部には縦位のナデも認められる。12世紀後葉～ 13世紀初頭ごろのものと位置づけておきたい。

蓋 (28) は紐付きの天井部のみの破片で、残存度は悪い。**筒身** (29) は、復元口径約13.7cm、器高約27.1cm、底部径約14.1cm、成形技法は前述の筒身 (27) とほぼ同様で、外面に黒褐色に変色した自然釉が見られる。この両者も12世紀後葉～ 13世紀初頭ないし13世紀前半代とみておきたい。

総じて経筒外容器に関する破片は、概ねＡ地区のＫ14 ～Ｌ16 ～Ｎ18区の、特に182号墓を中心とした一定のエリア内に散乱・埋没していた。遺構として断定は出来ないが、かつてＡ地区の山頂付近には中世墓に先行して経塚が営まれたと想定することもできる。そしてその外容器自体が蔵骨器に転用された可能性も、少ないとは言え排除はできない。

壺・甕類 (第19表、遺物第45 ～ 47図)

壺 (39 ～ 40、42 ～ 44、46 ～ 49)

常滑産壺 (39) は東中央斜面の88号墓の蔵骨器として出土。既に口縁部を欠失していた。復元口径約9.5cm、器高約22.5cmで、頸部から肩部にヘラ描き沈線が２条平行して走る。12世紀中葉以降13世紀前葉までに収まると考える。同墓埋土中からは天目茶碗の破片 (67) が伴出したので、蔵骨器としての使用は時代を下げて考える必要がある。

渥美産壺 (40) は220号墓から出土のほぼ完形品。口径約11.8cm、器高約23.9cm、肩部に逆Ｌ字状の窯印 (ヘラ記号) が描かれ、体部に１ヶ所穿孔がある。12世紀末～ 13世紀初頭頃に比定したが、13世紀前葉～中葉頃の山茶碗 (56) を蓋にして人骨ＳＸ176を埋納した。少なくとも半世紀前後、あるいはそれ以上の伝世期間の後に蔵骨器に転用されたと考える。

常滑産三筋壺 (42) は、443号墓から出土し、口縁部を欠失する。現状での器高は約24.1cmである。肩部から自然釉が垂れ流れている。12世紀後半代～に比定した。人骨ＳＸ193が充満し、蓋にしていた**瓦器の小碗** (41) は12世紀末葉から13世紀前葉頃まで

には収まると考える。三筋壺の口縁部が欠けること、瓦器小碗の器壁に摩耗痕があることなどを考慮すると、両者が組合わせで転用されるには、もう少し時間が下る可能性がある。日常雑器は伝世しないというのは恐らく、一部現代人の思い込みに過ぎないのではないか。443号墓の築造は13世紀以前にはあり得ないと考える。

同じく（44）は、M14～O15地区内の複数ヶ所から出土した破片を接合し、口径約10.9cmと復元。12世紀代と考える。蔵骨器に転用された後、削平され散逸したものであろう。

渥美産壺（43）は墳丘状盛土の235号墓出土で、ほぼ完形品。口径約11.0cm、器高約27.0cmで、内部は人骨ＳＸ205が充満し、扁平な川原石を蓋にしていた（個別遺構第37図）。12世紀後半代に比定する。

常滑産壺（46・47）は共に208号墓で出土（個別遺構第34図）。前者（46）は口縁部を欠き、現状で器高は約20.0cm。14世紀代のものという。器壁表面に凍結などによる剥離痕があるとの指摘を受けた。内部は人骨ＳＸ174が充満、小刀（鉄12）が副葬されていた。後者（47）はほぼ完形品。口径9.8cm、器高22.4cm、肩部にヘラ描き沈線が２条平行に走り、傘状の窯印がある。底部にひび割れがあり、壺としては二級品との教示を受けた。14世紀中葉頃に比定。内部は人骨ＳＸ175で充満、刀子（鉄01）を副葬した。両者の掘形は、その切合い関係から前者壺46（ＳＸ174）の方が新しい。

瀬戸産広口壺（48）は複数ヶ所から出土の破片を接合し復元した。口径約10.4cm、器高約25.0cm、剣先（蓮弁）、菊花（径2.8cm印花文）、蕨手文様を施した器壁に黒色の鉄釉がかかる。14世紀初頭頃に位置づけた。

以上、各種壺類の出土状況から勘案すると、13～14世紀代頃に蔵骨器として転用された壺で、削平によって破損し、散逸したものがあることが判る。当中世墓の初現問題とともに、その変遷過程をも類推させる遺物であろう。

片口鉢ほか（45・50・51）　片口の鉢のうち（45）は常滑産である。複数ヶ所から出土の破片を接合した。復元口径約19.4cm、器高8.3cmで、やや歪みがあり、底部内面に自然釉がかかり、外面には砂粒圧痕が残る。14世紀後半代に比定。同じく片口鉢（51）も複数ヶ所出土の破片を接合。復元口径約30.0cm、器高約10.7cm、13世紀後葉～14世紀代に比定。

瀬戸産灰釉花瓶（50）は433号墓の埋土から出土の脚部破片である。14世紀後半頃に比定した。

甕類（69～75、87～91、86・92）

常滑産甕（69）は、想定納骨堂の182号墓盛土内から出土した。復元口径約16.3cm、器高約23.0cm、Ｎ字口縁で肩部には菊花文のスタンプ痕跡がある。14世紀後葉頃に比定した。

常滑産甕（70）は399号墓から出土。Ｎ字口縁がやや退化しつつあり、肩部に直線的なヘラ描きの窯印がある。口径19.2cm、器高16.4cmで、内部には人骨ＳＸ194が充満。15世紀前葉～後半代に比定した。

常滑産甕（71・72・73）　いずれも完形品はなく、しかも複数ヶ所から出土の破片を接合した。蔵骨器に転用されていたものが、削平を受けて破損・散逸したものだろう。（71）は復元口径約15.4cm、15世紀後半～16世紀初頭頃のもの、（72）は辛うじてＮ字口縁の形を保ち、復元口径約20.2cmで、15世紀前半代のもの、（73）は復元口径約16.4cm、器高は約18.0～18.3cm、15世紀前葉頃のものと、それぞれ比定した。

常滑産甕（74）は同じく壺（39）の出土した88号墓で出土した破片を接合復元した。口径16.4cm、器高16.1cm、Ｎ字口縁がかなり退化し帯状に近い。15世紀中葉～後半代とした。88号墓の範囲は不明瞭で、時期の異なる墓が隣接した可能性がある。

常滑産甕（75）は、ＳＫ476の埋土中から出土した、Ｎ字口縁部の小破片である。口径は約16.5cmと復元できる。15世紀後半代に比定した。

常滑産甕（87）は、182号墓（推定納骨堂）の盛土を含む複数ヶ所から出土の破片を接合。明瞭なＮ字口縁部で、復元口径約31.4cmとやや大きい。14世紀後葉～15世紀初頭に比定した。

常滑産甕（88・90）は、165号墓の埋土から出た小破片である。復元口径は前者が約29.4cm、後者は約28.0cm、15世紀前半代の典型的なＮ字口縁である。両者は同一個体になる可能性があるかも知れない。

常滑産甕（89）は、Ｎ15地区斜面で出土の小破片。Ｎ字口縁で、復元口径は約22.0cmであった。15世紀前葉に比定。

常滑産甕（91）は、（87）と同様182号墓の盛土を含む複数ヶ所から出土した破片である。復元口径は約32.0cmあり、15世紀前半代に属する典型的なＮ字口縁部を備えている。

常滑産大甕（86・92）は、共に口径が50cmを超える大型の甕である。前者（86）は182号墓を含む複数ヶ所から出土の破片を接合し、完形復元した。口径約57.2cm、器高約73.2cm。口頸が萎縮するタイプで、器壁は比較的に薄手、体部外面には帯状の押印文を５段に分けて施文する。12世紀後半代（第４四半期頃）に属すると考える（遺物第51図・写真第11図）。後者（92）はＢ地区の462号墓（墳丘Ｂ）の主体部に相応するＳＫ610出土の大甕。典型的なＮ字帯状口縁部をもち、肩部～体部に「大日」のスタンプ印を施す。体部に径20 ～ 25cmの円形に打ち欠き跡あり、底部は欠失していた。15世紀後半～ 16世紀初頭に比定した。462号墓（墳丘Ｂ）は当中世墓群の発展過程における、一つの画期をなす墳丘墓ないしは納骨堂の可能性があり、甕（92）はそれを裏付ける貴重な遺物。

山皿・山茶碗（第19表、遺物第46図）

山皿（参考９～ 11）

３点ある。図示はしなかったが、参考（９）は146号墓の埋土から、参考（10）は131号墓の埋土から、また参考（11）は200号墓ＳＸ75の埋土から出土。参考（９）は破片を接合し完形に復元し、口径約8.0cm、器高約 2.0cm、底部径約 4.2cmである。12世紀後葉～ 13世紀初頭に比定した。参考（10）と参考（11）は、共に小破片で混入遺物である。前者を13世紀中葉、後者を13世紀前葉に位置づけた。なお、後者は土師器皿小破片（113）とも同時出土である。

山茶碗（52 ～ 59・参考1 ～ 8）

全16点のうち、完形もしくは完形復元できたのは３点（55・56・58）ある。他はすべて破片で、単一の遺構から出土したのは８点（53・54・56・58・参考２、参考５～７）だけである。

（55）は和鏡（76）の出土した107号墓の区画東辺に沿う形で外接して出土した。明確な遺構に伴う遺物ではい。口径約14.4cm、器高約5.2cm、底部径約6.8cmあり、貼付け高台は約半分剥離し、籾殻圧痕も多かった。13世紀中葉頃に比定した。和鏡が14世紀前半頃のものゆえ、遺物自体の時期は符合しない。

（56）は220号墓ＳＸ176出土で、口径約13.7cm、器高約5.4cm、底部径約5.6cmを測る。13世紀前葉～中葉に比定した。人骨ＳＸ176を埋納した渥美産壺（40）の蓋に転用されていた。両遺物の時期差が即ち壺の伝世期間になるが、山茶碗にもそれを見込むと、伝世期間は更に長くなる。出土遺物で造墓時期を推定できる数少ない例である。

（58）は土壙墓ＳＫ532から出土の完形品。口径14.8cm、器高5.5cm、底部径5.2cm。潰れた高台に籾殻圧痕が顕著であった。13世紀中葉～後葉に比定した。土壙から出土した唯一の山茶碗で、副葬品と考える。Ａ地区の土壙墓の初現を考える上で貴重な遺物であった。

（53・54）はいずれも破片で、反転して復元すると、前者は口径約15.4cm、器高約5.7cm、底部径約6.3cm、後者は同じく13.9cm、5.1cm、5.1cmとなる。それぞれ182号墓の埋土と火葬土坑ＳＫ500の埋土からの出土。前者を12世紀中葉～後葉に、後者を13世紀前葉～中葉に比定した。

その他は遺構に伴わない破片ばかりなので第７表に譲り略すが、古くは12世紀中葉代のものから、14世紀前半代に至るまで見られ、時期幅は他の遺物と大きくは変らない。

おろし皿（65・66）（第19表、遺物第46図）

いずれも破片で、後者は82号墓埋土からの出土。復元口径は、前者が約18.0cm、器高は約3.0cm、後者の方は口径約18.0cm、器高は約4.0cmである。共に15世紀前葉頃に位置づけた。

天目茶碗（67・68）（第19表、遺物第46図）

両破片とも単一遺構からの出土ではなく、複数ヶ所で出土の破片を接合。前者の口径は辛うじて約11.8cmと復元できた。共に14世紀後葉頃に比定した。

⑦磁器類（第19表、遺物第44・46図）

白磁合子（24・25）

いずれも蓋はなく身だけの破片で、前者は表土採取、後者は194号墓ＳＸ282の埋土に混入して出土した。前者の復元口径は約8.2cm、器高は約2.0cm、底部径は約8.2cmある。後者の復元口径は約9.2cm、器高は約2.0cm、底部径は約8.8cmである。蓋の受け部が立上がる。12世紀代と考えた。先の経筒外容器の存在と併せて、当中世墓群に先行する経塚遺構を予

想させる遺物であろう。

青磁碗（60 ～ 64）

５点のうち、(63) 以外は、かなり小さな破片ばかりで、しかも明確な遺構に伴う遺物ではない。全て13世紀末～ 14世紀代のものと考える。完形品の (63) は100号墓に伴う土坑ＳＫ514の底部から出土した副葬品で、文様はなく無地である。口径17.0cm、器高6.9cm、底部径6.3cmであった。当中世墓では比較的に早く営まれた方形周溝墓の遺物である。

（三） 金属製品（第19 ～ 22表、遺物第47、50 ～ 52図）

①和鏡（76）

107号墓から出土した完形品である。径11.3cm、厚み0.2cm、縁厚0.7cmを測る。本来の鋳上がりは良好だったと思えるが、腐蝕が進み、表面がやや浮上がって剥離の危険性が高い。蓬莱山に千鳥が二羽舞っている図柄で俗に蓬莱鏡と呼ばれるもの。鎌倉時代末期（14世紀前半）頃に比定できるという。和鏡はこれ以外にも小破片が１点あったが、火葬時に熔解して著しく変形していて実測も出来なかった。

②銭貨（第22表、遺物第52図）

Ａ～Ｃ地区で出土した恐らく六文銭と考えられる銭貨は、総計291枚ある。内訳はＡ地区15枚、Ｂ地区で208枚、Ｃ地区は68枚である。銭貨名を判読し難いものが併せて87枚、約30％を占める。火葬時の熔解による付着や土中での腐食等による。判読し得る204枚（全体の約70％）のうち､最多は明銭の「永楽通寶」100枚（約34％）で、次いで「熙寧元寶」17枚・「元豊通寶」12枚・「皇宋通寶」11枚（以上13.8％）など北宋銭が目立った。因みに北宋銭は23種90枚、これは判読可能な銭貨中の約44％に、また明銭は３種106枚で、同じくその52％にそれぞれ相当する。これは、出土した銭貨の初鋳年代がほぼ15世紀初頭頃までに収まることを示しており、当該中世墓の最盛期がそれ以降にあることを物語るのではないかと、推測せしめる。なお、なかには模鋳銭ではないかと訝しく思えるものに､例えば銭225「元符通寶」や銭238「永楽通寶」などがあるが、鑑定能力をもたず即断できない。

同一の土坑から12枚（Ｂ地区土坑ＳＫ706・766)、13枚（Ｃ地区土坑ＳＫ818)、18枚（Ｂ地区土坑ＳＫ749)、25枚（Ｂ地区土坑ＳＫ744）など、多数の枚数が検出される例があった。反対に６枚未満の例もある。これらを単に被葬者の経済力の差とみなすばかりではなく、同一土坑で複数回の火葬があったとみるか、あるいは同業による「結縁」勧請の有無なども含め、様々に想定をしておくべきであろう。

276枚の銭貨がＢ・Ｃ地区の土坑群からの出土で、これは全体の94.9％を占める。六文銭としての銭貨が基本的に納骨時には使用されないとすれば、両地区の土坑群は火葬土坑が主流で、Ａ地区は、ある時期を境に、その後に収骨を埋葬する墓地としてのみ機能したものと推測できる。ただ、Ａ地区下層にも明らかな火葬土坑が少なくとも46基（ＳＫ481を含まず）はあり、従ってそこからは銭貨が出土してもおかしくはないが、案に相違して皆無であった。即ち、死者を荼毘に付す行為において用いる六文銭には、(77)のような土製模造銭のほかに紙製模造銭が用いられたかも知れないし、あるいは六文銭を用いない時期もあったのではないか、と思う。

③刀子類（第20表、遺物第50図）

出土した刀子は破片も含めると計37点ある。その内36点（97％強）はＡ地区に集中しており、Ｂ地区からの出土は皆無だった。大抵は人骨を伴う配石墓など（12点33％強）や下層の土壙墓（21点58％強）に埋葬された副葬品で、Ａ地区の性格を物語るとともに、Ｂ・Ｃ地区（１点2.74％）の土坑群の大半が基本的には荼毘に付す、いわゆる火葬土坑としての機能をもつものであったことを強く示唆している。ただ、Ａ地区でもすべての墓から出土した訳ではない。埋土中での腐蝕消滅を考慮してもなお、被葬者の経済力等には、当然ながらばらつきがあったものと推測せざるを得ない。

一般的に、刀子の目安は全長が30cm以下であると聞く。ほぼ完存の状態で出土した10点（鉄01・05・07 ～ 09・11・13・17・19・27）の平均全長は29.81cmであった。中には、鉄24 ～ 26のように、刃部の幅も狭く、やや小振りの製品も数点みられる。被葬者に起因する結果かも知れない。

木質の鞘部が断片的に残存している例も数点あり、鞘に収めた枕刀が本来の姿であろう。また錆膨れや欠失などにより、はっきりしない個体（鉄10・18・

20・25・26）もあるが、基本的にはどれも棟区と刃区をもつ拵えになっていた。茎の尻近くに大刀のような忍孔は見られないが、区部に近く目釘孔がある。これも、錆や腐蝕で確認できない個体もあった（鉄07・08・17・19）。273号墓出土の鉄27は、蔵骨器の中に渦巻き状に曲げて押込まれていたもので、もはや鞘などは放棄され、副葬品としてはかなり形骸化していた実情もうかがえる。鉄01・12や鉄03・11などのように、一箇所から２本出土した例もあるが、明確な理由は判らない。

④鉄釘類（第21表、遺物第51図）

鉄釘は完形品、破片を問わず、参考資料としたものを含めて表では計56点と勘定した。但し、頭部を欠失したものが20点あるので、実際の釘の数は更に少ない。いずれも荼毘に付す際に使用された木棺に打付けられていたと考える。Ｂ地区の土坑群から38点（67.9％）、Ｃ地区の土坑群からは９点（16.1％）、計47点（83.9％）とＢ・Ｃ地区の土坑群からの出土が圧倒的な割合を示している。この事実は、そこが基本的に火葬エリアとして機能したことを推測させる。ただ、腐蝕等で遺らなかったことを考慮しても、土坑数（409）に比べると、釘の出土した土坑は併せて25箇所（6.1％）に過ぎない。従って、荼毘に付される亡骸がすべて木棺に収められたとは考えられない。樽桶の類ならばもとより釘はないし、戸板で運ばれたり、筵や茣蓙などで覆われたままの亡骸もなお一般的であったと、想像する。

因みに、Ｂ地区ＳＫ707で12点、ＳＫ767で７点、Ｃ地区ＳＫ854でも５点など、２点以上出土した土坑は８箇所あるが、他の17箇所では１点のみの出土であった。

釘の完形品は少ないが、鉄72・84～87などはほぼ完形品に近く、その全長の平均値は7.7㎝強である。図上復元した鉄47や鉄66・67なども参考にすると、全長はおおむね5.0㎝前後から8.0㎝前後と長短があり一定ではない。当時まだ丸釘はなく、断面形は方形ないし長方形で、平均すると0.47㎝×0.35㎝となる。釘の頭はやや扁平に成形されている。釘の先端が「く」の字に曲がったものが３点（鉄51・55・80）ある。いずれも木棺の蓋を打付ける際に生じたものであろう。

⑤鎌、及び燧金（第20表、遺物第50図）

はっきり鎌と判るのは鉄28と鉄参考45だけである。腐蝕してしまい完形品はない。かつて奈良県の忍辱山にある墓地で、明らかに土葬墓の形状をもつ墓の覆土の上に、数本の竹を一端で放射状に束ねた上で、土中の亡骸を取り囲むように円錐形状に立て、束ねた竹の円錐頂部から魔よけとしての鎌を吊り下げた民俗事例を実見したことがある。果たして、当中世墓の時代にもそういう習俗があったかどうか、遺物の出土状況から推測することは難しい。

その他、鉄21・鉄22・鉄23・鉄30・鉄31などは、鎌でも刀子でもなく、前２者（鉄21～22）や後２者（鉄30～31）は、他遺跡の類例から推して、燧金と考えるのが妥当ではないかとの教示を得た。例えば、鎌倉の長勝寺遺跡は「成立期の民衆墓」（大三輪龍彦氏）としての土壙墓群の存在で著名だが、そこでは３点の燧金や22個の石英などが出土している（註13）。横尾墳墓群Ａ地区でも石英は多数出土しており、この鉄21・鉄22および鉄30・鉄31も、県内外の類例と形状などが似通っているので、本来は長勝寺遺跡などで見られたような燧金であったのではないか、と考える。

なお、鉄23は片面に何かを引っかけるように造られているが、今のところ見当がつかない。また、鉄29は針金にしては太く、硬質で、ちょうど「バンセン」の類に似たような印象が出土当初から拭えずにいる。あるいは中世墓の遺物には相応しくないのかも知れない。

註13　長勝寺遺跡発掘調査団編『長勝寺遺跡－中世鎌倉の民衆生活を探る－』かまくら春秋社、一九七八年。なお、県内の類似例については、同僚の文化財技師大川操氏のご教示を得た。

（四）石製品・石塔類（第23～27表、第51～56図）

①石製品（第19表、遺物第47図）

砥石（78）

粘板岩製の砥石（78）は161号墓から出土した。破片で、長辺5.8㎝以上、短辺3.2㎝、厚さ0.4～0.8㎝。横断する形で幅0.4～0.8㎝、深さ0.4㎝の磨り込み痕がある。暫定的だが、16世紀代のものではないか、とした。

硯（82）

おおむね完形で、粘板岩製である。東斜面の埋土下層で出土。上からの崩落かと推定。頭幅8.3cm、尻幅8.7cm、長さ12.0cm、厚さ1.6～1.85cm、ごく僅かに台形状（14世紀的な特徴）の名残を留める。水野和雄氏の研究成果に依拠すれば、側面傾斜A型、裏面平坦C式、内面はほぼ長方形（I）の特徴をもつ。14世紀末ないし15世紀初頭～前葉頃に比定しておきたい。

②石塔類（第23～27表、第51～56図）

石塔の中心は五輪塔である。現地で取上げた石塔は破片も含め1,107点（A地区1,014点、B地区93点）にのぼる。A地区での出土が圧倒的に多い。殆どは砂岩系の石材を使用している。長年風雨に曝された上に、恐らくは大小の現状変更、就中地元民による文化七年の大規模な現状変更（後掲Ⅶ. 文献資料扁『寄墓日記』参照）によって、当該墓地に今以上に残存していたと思われる中世的な墓地景観や遺構は相当の破壊を受けたと推測する。もはや原位置を保つ五輪塔は皆無に等しい状態であった。破損して計測不可能な石塔の残骸も多数あるため、別表一覧からはそれらを省いた。大きくは、下記のとおり三種類の類型に分類が可能で、それぞれ法量を計測した各部位の名称（a、b、cなど）は、別掲の第23表（凡例）を参照されたい。

I類（組立て式五輪塔）

空風輪＋火輪＋水輪＋地輪を組合わせるタイプをI類とした。空輪A0006と風輪A0014とはそれぞれが一石で造られている当墓では希有な例で、I類には含めなかった。

このタイプの各部を合わせると、A地区で766点、B地区で22点出土した。内訳は下記のとおりである。

A地区（第24表、遺物第53～55図）

（1）空風輪：総数300点を数え、うち244点は概ね間違いない。残り56点は、破損した空輪または風輪の破片が13点、風輪部を欠損する空輪が43点からなる。それらは本来が空風輪なのか、空風火輪の一部か、一石五輪塔の一部か、或いは相輪宝珠に相当するのかが判然としないので除くが、暫定的にI類総数には入れている。

石材の面で注意すべきは、A0018が花崗閃緑岩製、A0245は凝灰角礫岩製である。これは当墓では珍しく、近畿方面からの搬入もあったかと推測される。

244点の計測全高（凡例部位a）平均値は17.9cmである。このうち、全高が20cmを超えるものは34点（14%）あり、その中でさらに30cm以上のものが2点（A0222・A0227）ある。逆に最小のは10.6cm（A0122）、これは火輪A0373とセット関係にある。また、A0254のように火輪（A0451）・水輪（A0552）・地輪（A0698）と1セットであることが判明した希有の例もあるが、散乱状態での出土のため、通常セット関係までは把握できなかった。

多くの場合、火輪とのジョイント（枘）部分（石塔凡例中のj枘部径・k枘長を指す）をもち、全体の71%を占める。また、梵字を刻した例は2点（A0033、A0120）しかない。

（2）火輪：総数167点。花崗岩製が1点（A0357）だけあった。計測全高（凡例部位a）平均値は11.2cmである。全高が15cm以上のものは7点、軒部上端径（凡例部位j）が20cm以上のものは16点ある。この中に先の7点のうちの4点が含まれる。つまり比較的に全高も軒部上端径も共に大きいのはA0338、A0369、A0390、A0463の4点で、とりわけA0338とA463は大型製品である。A0390は笠部に反りがなく特異な形状をしている。全長が10cm以下のものは52点あり、これは全体の31%を占める。空風輪A0122とセット関係にあったA0373も小型でこの中に含まれる。

空風輪と同様、大半にジョイント部分（枘）が造られている。全体の81%強に当たる136点の笠上部に枘穴が穿たれる。風輪底部の枘部と接続する仕組みである。枘穴のないものは31点（18.5%）に過ぎない。梵字が刻まれたものはA0325の1点だけだった。

（3）水輪：総数は96点。計測全高（凡例部位a）平均値は13.2cmである。全高が15cm以上のものは11点、20cmを超えるのは2点（A0499、A0513）のみ。また、計測最大径（凡例部位e）の平均値は18.3cmであった。そのうちで20cmを超えるのは16点あり、先の2点も当然含まれる。前者は29.3cm、後者は 30.3cmでともに16点中の最大級に属している。A0488とA0513には梵字が刻まれている。

計測不可能な6点を除く90点について最大径の位

置を調べた結果を参考までに記しておく。最大径の位置が全高の中心より上位にあるものは51点（56％強）、ほぼ中心部にあるのは18点（20％）、下位のものは21点（23％強）であった。

（４）地輪：総数201点。計測全高（凡例部位ｂ）平均値は12.8cm、同横幅（凡例部位ａ）平均値は18.5cmである。全高が15cm以上のものは34点（16.9％）あるが、20cmを超えるのは僅かに１点（A0739）にすぎない。また、横幅が20cmを超えるのは22点（11％）で、その半数の11点は25cm以上あった。最大はA0592の32.1cm、A0595の30.4（以上）cmである。ただしこの２点の全高は11 ～ 14cmと比較的薄いのが特徴である。

石材に片麻岩製（A 0575・A 0634）と空風輪にもあった凝灰角礫岩製（A 0635）のものが若干混じっている。

唯一梵字が刻まれていたのはA0583の大型品で、出土状況から判断して恐らく原位置を保っていたと考えられるものが２点（A0691・A0751）あることが特筆される。また、配石区画墓の配石に転用されていたものが11点あった。

Ｂ地区（第27表）

（１）空風輪：総数は11点。敢えて計測全高の平均値を示せば23.4cmである。うち４点に枘部があり、枘部径6.7cm、枘長4.8cmがその平均値であった。B1017は462号墓（墳丘Ｂ）の土坑ＳK610に収められた大甕内部から地輪（B1032）と一緒に出土した。

（２）火輪：総数は２点。１点は上部を欠失しているので全高の平均値はとれない。他の１点の全高は11.4cmで、これはＡ地区火輪の全高平均値11.2cmと変らない法量である。２点とも枘・枘穴を持たないタイプである。

（３）水輪：総数は３点。計測不可の１点を除く平均値は、全高が16.0 cm、最大径 21.0cm。最大径の位置（凡例部位ｂ）は９cmになり、全高の中心部よりやや上位にあった。

（４）地輪：総数は６点。欠損著しく計測暫定数値しか得られないため、可能な２点にかぎると、計測横幅平均値は17.6cmであった。

Ⅱ類（三輪一石＋二輪一石五輪塔）

空風火輪を一石で造り、水地輪をまた一石で造って両者を組合わせるタイプをⅡ類とした。

Ａ地区（第25表、遺物第56図）

（１）空風火輪：総数は105点を数えるが、うち73点は空・火輪部または火輪部を欠損ないし欠失しているため、一石五輪塔との区別がつけにくく、従って確実なものは32点になる。

測定全高平均値は29.5cmで、30cm以上あるのは12点（約38％）あり、全高値最大のものはA0776（36.6cm）、A0768（33cm）、A0785（32.4cm）などがある。最小はおおよそその半分に近く、A0784・A0780・A0793などは括弧つきだが15cm代であった。

このタイプに特徴的なことは、空輪部先端の突起（凡例ｓ・ｔ）部分が異様に大きいということである。その平均値は６cmを超すが、完形品ではない場合にも、その痕跡をてがかりにして類別判定要素として生かせるかも知れない。

火輪底部にジョイント部（枘または枘穴）を持たない個体が19点（59.4％）、もつのは11点（34.4％）あり、枘（凸）部タイプは５点、枘穴（凹）部タイプが６点という内訳であった。A0773はA0877（水地輪）と同じ場所で伴出したので当初はセット関係を想定したが、ジョイント部の不整合によりその関係は成立しにくいように思う。

A0795からA0798までの４点はいずれも配石墓（223号墓・450号墓）の区画石として転用された状態で出土した。従って両墓はその空風火輪よりは後代のものということになる。なお、A0848の石材は流紋岩質溶結凝灰岩という当墓域では珍しい石材であった。

（２）水地輪：総数40点のうち、水輪部を欠損または欠失するのが18点ある。これは一石五輪塔の可能性もあるため、これも確実なものは22点となる。

計測全高（凡例部位ａ）の平均値は25.9cmで、最大クラスはA0879（30.7cm）、A0877（29.2cm）A0885（28.3cm）などである。ジョイント部の有無が判るのは13点に過ぎず、ないのは３点、あるのは10点（枘部３点、枘穴部７点）であった。

地輪底部に抉り穴（凡例部位ｎ・ｏ）をもつ個体が18点（82％）あり、その計測平均値はそれぞれ、

13.7cm、2.1cmであった。安定性を図るための工夫と考えるが、もしそれが納骨に利用されることがあるとすれば、よほど儀礼が簡略化され、納骨と五輪塔の設置が同時であることが前提になる。なお、A0886とA0892の２点は、配石区画墓の配石に転用されていたものである。

Ｂ地区（第27表）

（３）空風火輪：30点（９点） 21点は火輪部を欠失しており、場合によっては一石五輪塔になる可能性もあるため、平均値の算出には除外している。確実な９点の計測全高平均値も、８点は空輪先端部が欠損して数値の確定ができないため、計算できない。火輪部に柄（３点）または柄穴（１点）をもつのは４点で、他の５点にはそれがない。また、このタイプに特徴的な空輪先端部（凡例部位ｓ・ｔ）の大きさも、５cm以上のものばかりと類推可能である。

（４）水地輪：８点 計測全高平均値は26.8cmで、概ねＡ地区の同タイプの平均値に近い。他の部位に関しても双方に大差はない。水輪上部の柄および柄穴の有無は、不明の２点を除くと、有りが５点、なしが１点である。５点のうち３点が柄、２点が柄穴である。地輪底部の抉りも７点で確認できる。

Ⅲ類（一石五輪塔）

空風火水地輪のすべを一石で造るタイプ、いわゆる一石五輪塔をⅢ類とした。Ａ地区で102点、Ｂ地区で27点、計129点出土し、Ｃ地区での出土はなかった。

Ａ地区（第26表、遺物第56図）

102点のうち、全高（凡例部位ａ）測定値が確定できる完形品はきわめて少なく僅かに７点しかない。多くは空輪の先端部や地輪部などが欠損し、厳密に確定数値が示せないので一覧表では括弧書きになっている。ともあれ、全高の測定平均値は47.4cmあり、この平均値を上回るのは括弧書きの個体を含めても７点しかない。大型クラスはA0950（59.6cm）、A0947（55.8cm）、A0926（54.6cm）などである。大抵は45～50cmの中型タイプと35～40cmの小型タイプに収まるだろう。

次に、地輪部の全長（凡例部位ｆ）だが、この測定平均値は11.8cmであった。この平均値を上回るのは37点あり、A0971（18.4cm）、A0937（17.0cm）、A0926（16.6cm）、A0914・A0989（共に16.0cm）などが最長の部類である。逆に最短の部類にはA0965（6.7cm）、A0927（7.6cm）、A0996（8.0cm）などがある。文字を刻したものはない。

地輪底部に抉り穴（凡例部位ｓ・ｔ）をもうけるのは39点確認した。計測平均値はそれぞれ10.6cm、1.5cmと浅い目である。この空間に納骨をしたとの見方もあるが、例えば89号墓での検出例などから類推して、その可能性はまずない。既述のとおり、むしろ地面に建てる場合の安定性が考慮されているからである。

気になったのは、全体を縦方向に半截して、やや厚目の板状になった個体がまま見受けられたことで、A1000のように区画用配石として転用されていたものもある。一体、五輪塔が他に転用されるまでにどれほどの時間的経過を要するのかは判らないが、一部の墓は近世初頭まで存続したのではないかと思わせる使用例であった。

Ｂ地区（第27表）

総数は27点ある。全個体に何らかの欠失部分があり、正確な全高測定値を得られたものはない。ただ不十分ながらでも完形品に近いB1075、B1076、B1082、B1095、B1097の未確定測定全高平均値を出すと、43.3cmになる。これは前記Ａ地区の場合に近い数値であり、当然のことながら、このタイプも両者の間に大きな差異は認められない。

③宝篋印塔（第25表・27表、遺物第52図）

完全な姿で残ったものはなく、相輪部と笠（屋根）部のほか、僅かに１点だが基礎部の出土がある。相輪だけならば、宝塔や多宝塔などの一部でもありうるが、屋根（笠）部の出土があったので、一括して宝篋印塔として報告する。

相輪はＡ地区で30点、Ｂ地区では３点、計33点が出土した。完形品はなく、宝珠や九輪、あるいは上下の受花や露盤（伏鉢）・枘部などが何らかの形で損壊欠失している個体ばかりである。いま33点の計測全高平均値を求めると39.7cmである。同じく九輪高平均値は14.2cm、宝珠の最大径平均値は9.9cm、上受花最大径平均値は11.3cm、下受花最大径の平均値は12.1cm、そして露盤（伏鉢）部の最大径平均値は11.4cmであった。B1103は461号墓（墳丘Ａ）の周溝底部から出土した唯一の遺物で、当墓周溝の消長を

知る貴重な資料である。

屋根（笠）部は、Ａ地区で３点、Ｂ地区で４点、計７点が出土した。計測全高平均値は23.0cm、隅飾り高の平均値は12.5cm、隅飾り先端間の幅平均値は28.9cm、軒下幅の平均値は25.9cmである。隅飾りはやや外に開き気味の個体が主流であった。相輪の数に比して極端に少なく、基礎部も１点しか出土していないのは、相当の散逸があった証拠である。

④石仏（第25表、遺物第52図）

阿弥陀仏を浮彫りしたものが出土した。全高は19.6cm、底部幅は5.2cmである。

（五）その他

①人骨

全ての遺構から出土したわけではないが、蔵骨器を含め、Ａ地区の配石区画墓の遺構検出等に伴って出土したのは206件、Ａ地区下層の土坑群からの出土は146件、Ｂ地区土坑群からの出土は134件、Ｃ地区土坑群からは71件、計557件である（第１表参照）。ただし、出土状況は千差万別で、少量の破片の場合も、蔵骨器に充満している場合も、等しく１件として採り上げている。

別掲鑑定結果にもあるように、全て火葬人骨である。詳細はその鑑定報告に譲るが、Ａ地区の配石墓では複数箇所から、しかも必ずしも区画中央部からという訳ではなく、左右に偏した箇所や、極端な場合には区画外周に近い箇所からの出土もままあった。また、とりわけ南・東斜面の400 ～ 450号墓にかけてのエリアでは、配石墓の一区画が判然としないほど川原石で覆われていたが、それらを除去する過程でも、石と石の間から人骨が出土した例もあった。一石五輪塔が配石区画に転用されていた事実から類推するのだが、一部近世に及ぶものがもしあるとすれば、終末期の状況は既存の墓の一郭を借りて埋納するだけの霊場と化していたのかも知れない。

②石英

Ａ地区に限って出土した。平均すると、５～６cm大に打ち欠いた石英が、配石遺構のなかに遺る地輪の底部付近や、多くのばあい区画のほぼ中央部付近とか、人骨の固まって出土する箇所などで、数個単位で検出されることが顕著であった。

前述の燧金（ひうちがね）の一件を考え合わせると、火打ち石としての役割は火を見るよりも明らかである。ただ、中には10cm前後の大きさのものから約２～３cm程度のものまであり一定しない。当該中世墓の全期間を通じて、通常の火打ち石として常に使用したかどうかは疑問もある。あるいは実際に「火打ち」作法が行われた時代もあったが、それが徐々に形骸化されるにおよんで、ただ慣例的に石英を置いておくだけの習俗に変容して連綿と続いていたのか、明確な判断はできない。因みに、この石英は当山に近い「雲母谷（うんぼだに）」と呼ばれる場所で容易に採取できると、地元住民の方から聞いた（雲母は勿論、成分の上で石英と同質の鉱物である。これはあくまで憶測に過ぎないが、もしかしたら、この「雲母谷」という地名は、かつては「隠亡谷（おんぼだに）」（註14）と俗称されていた語から転訛した可能性もあるのではないか、と今は想う）。　　（田阪　仁）

註14　佐藤和彦編『中世史用語事典』新人物往来社、1991年、P72を参照した。

Ⅵ．まとめ

（一）縄文人の痕跡

当遺跡で最古の遺物は縄文時代早期後葉までさかのぼる。今からおおよそ7,000年あまりも昔のものである。深鉢と呼ばれる土器の破片が２点と、そのほか明確に時期は特定できなかったが、やはり縄文時代の石鏃が数点。これは当時の人々が使った矢じりである。いずれもＣ地区からの出土であった。横尾の山には数千年も昔の人々の生活の痕跡がのこされていたわけである。

石鏃（矢じり）は、サヌカイトという名称の語源にもなった四国は香川県（さぬき）や、齋王大来皇女の哀歌でも有名な奈良県は二上山など、産出地の限定される原石から作られた。Ｃ地区には、石鏃製作のためにその石を打ち欠いた時にできる剥片、つまり欠片が50点あまり散らばっていた。参考までに、その欠片の出土地点を遺構平面図第30 ～ 32図に黒い小三角印で示しておいた。標高111.2 ～ 110.4mのなだらかな南向き斜面に比較的集中して散布していたことが判る。一定期間、人々がそこに留まって生活をしたことは明らかである。少し東側の尾根筋（調査区外）には、あるいは住居跡などがまだあるのか

も知れない。

いずれにしても、サヌカイト原石の流通経路を含め、今後多気～松阪～一志地域の縄文時代遺跡を考える上での、貴重な材料を提供した。これが古墳群（註15）や中世墓群の裏面に隠れた横尾墳墓群のもう一つの顔である。

註15　三重県埋蔵文化財センター「横尾古墳群」（『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第2分冊2、1990年。

（二） 経塚の可能性

第19表にまとめたように、出土遺物には経筒外容器の筒身や白磁の合子などがあった。先の縄文土器や６～８世紀代の須恵器は別として、当墳墓群では比較的古い段階に属する遺物と考えている。少なくとも、外容器は６個体分あった。いずれも複数の箇所から出土した破片を接合した結果であり、完形のまま出土したのでも、遺構に伴って出土したのでもない。

経典を納めた筒形の容器を経筒というが、それは多くの場合、金銅製や銅製である。更にその経筒を納めたものが外容器である。これは陶器製や土製が多い。本例の場合は、後に蔵骨器に転用されたのかも知れないが、ともかく経筒外容器が６個体もあったという事実から、当山には中世墓以前にまず経塚が営まれた可能性が極めて高い、と考えている。

三重県内にある経塚は約70遺跡を数えるが、なかでも伊勢の朝熊山経塚は特に有名である。そこから出土した在銘の経筒や外容器には、保元元（1156）年から文治２（1186）年までの実年代が記されており、「12世紀後半の30年間を中心に造営されたことは明らかである」（註16）とされる。今回確認した上記外容器には銘文はないが、朝熊経塚や蓮台寺滝ノ口経塚などの年代よりも古く遡るものではなく、おおむね12世紀後葉から13世紀初頭に該当し、遅くとも13世紀前葉までの範疇には収まるものである。そしてこれが、当遺跡における中世墓の初現とどう関わるのかは、必ずしも明確ではない。「墓地全体の供養のためのもの」（註17）との解釈もあるが、それなら6個体もの外容器は多すぎはしないか、との疑問も少し生じる。なかには、個人的な信仰に発した経塚も当然あったのではないだろうか。

ただ、残念ながら、明確な遺構として確認することは出来なかった。Ａ地区の山頂部にあった182号墓の下層で検出したピット（個別遺構第36図）の性格が不明だったこと、同じＡ地区の下層で検出した土坑ＳＫ593（個別遺構第40図）の石で取り囲むような特殊な構造が朝熊山経塚の第１型式によく似ていたことなどは、もしかしたら、経塚遺構のなごりを物語るものであったのかも知れない。

註16　稲垣晋也「三重県伊勢市朝熊山経塚発掘ノート―経塚の構造と造営次第―」（『ＭＵＳＥＵＭ』東京国立博物館美術誌10月号、№451、1988年）。関連して、伊勢市教育委員会『蓮台寺滝ノ口経塚群』1998年も参照。

註17　藤沢典彦「経塚」（『日本考古学事典』三省堂、2002年、202 ～ 204頁）

（三） 土坑群の出現と性格

検出した土坑は合計409基（内訳Ａ地区135基・Ｂ地区168基・Ｃ地区106基）である。地区毎の法量の平均値と傾向は本文中に述べたので繰り返さないが、いま各土坑の出土遺物の内容別に、該当する土坑数と割合を以下に纏めてみた。

横尾の出土人骨はすべて火葬骨だとの鑑定結果を得ているので、人骨出土の土坑は火葬するための土坑（火葬土坑）か、または火葬骨を葬る土壙（火葬墓）と考える。それらが併せて282基、全体の69％を占める。残り31％（127基）には人骨がなかった。すでに人骨が腐蝕して消滅したか、仮に人骨がなくても、焼土や焼石、炭化物、あるいは六文銭や副葬品などの伴出遺物によって、火葬土坑か火葬墓かの判断基準のために、土坑一覧表（第15 ～ 17表）に類型名を記した。

	Ａ地区		Ｂ地区		Ｃ地区	
焼土	59	(43.7%)	63	(37.5%)	17	(16.0%)
(焼土帯)	42	(31.1%)	20	(11.9%)	1	(0.9%)
焼石	25	(18.5%)	61	(36.3%)	56	(52.8%)
炭化物	55	(40.7%)	149	(88.7%)	102	(96.2%)
灰	2	(1.5%)	0	(0.0%)	0	(0.0%)
人骨	62	(45.9%)	129	(76.8%)	91	(85.8%)
銭貨	1	(0.7%)	29	(17.3%)	16	(15.1%)
鉄釘	4	(3.0%)	16	(9.5%)	5	(4.7%)
土器類	38	(28.1%)	14	(8.3%)	24	(22.6%)
刀子	16	(11.9%)	0	(0.0%)	1	(0.9%)

※　整数の数値は出土した土坑（壙）の数を表しているが、相互に重複してカウントされる。

この表でみる限り、茶毘に付す火葬土坑はすべての地区にあったことになる。ただＡ地区の場合、人骨出土の土坑の割合が他地区に比してかなり低いのは、収骨したあと火葬墓として葬られたが、時間と共に腐蝕・消滅したことを物語っている。それは六文銭に相当する銭貨や鉄釘の出土が極端に少ないこと、また逆に副葬品としての供献土器や刀子が多いことからも類推される。

次に、これら土坑をそれぞれの出土遺物の状況に応じて、仮にⅠ類からⅣ類の4形態（6形式）に分類してみた。

Ⅰ類土坑：強い火を受けて掘形（焼土帯）や底部などが赤く焼きしめられ､埋土中に､焼土塊･焼石・炭化物・灰・人骨などを全部または一部分含むもの。かつ中世墓関係の土器・金属製品などの遺物を一切含まないもの（Ａ）と、その土器・金属製品のうちのどれかを含むもの（Ｂ）に細分。

Ⅱ類土坑：Ⅰ類のような焼土帯はないが、埋土中に、焼土塊・焼石・炭化物・灰・人骨などを全部または一部分含む。かつ中世墓関係の土器・金属製品などの遺物を一切含まないもの（Ａ）と、その土器・金属製品のうちのどれかを含むもの（Ｂ）に細分。

Ⅲ類土坑：Ⅰ・Ⅱ類のような焼土・焼石・炭化物・灰・人骨は一切ないが、中世墓関係の土器や金属製品の一部だけが出土するもの。

Ⅳ類土坑：Ⅰ～Ⅲ類のような遺物が一切何もないもの。

これによって地区ごとの土坑数を下記のようにまとめた。

	Ａ地区	Ｂ地区	Ｃ地区
Ⅰ Ａ類土坑	28基	16基	1基
Ⅰ Ｂ類土坑	14基	4基	0基
Ⅱ Ａ類土坑	21基	95基	81基
Ⅱ Ｂ類土坑	17基	38基	22基
Ⅲ類土坑	24基	5基	0基
Ⅳ類土坑	31基	10基	2基

※　土坑一覧表の備考欄にこの分類表記を記している。

Ⅰ類は、火葬用に使われた土坑。Ⅰ Ｂ類はその際の副葬品または鉄釘が遺っている状態のもの。合わせて63基ある。うち42基（66.7%）がＡ地区にあり、配石区画墓に覆われる以前には、Ａ地区で茶毘に付し、Ａ地区に葬ったことを示していた。実際、Ｂ・Ｃ地区に比べて蔵骨器のほか副葬土器や刀子が圧倒的に多いのも、その事実を裏付けている。ただ、ＳＫ505～506やＳＫ510のように、明らかに火葬土坑でありながら、さして火を受けたとも思えない刀子がほぼ完存状態で出土したことから、火葬土坑をそのまま火葬墓にした例もあったと推測した。例えばＡ地区には243号墓（出土遺物から14世紀後半代を念頭に置いている）のように、火葬土坑ＳＫ570をそのまま、あたかも火葬塚のように盛土して墓にした例が現実にあるからで、常に火葬の場と埋葬の場とを分けて考える必要は必ずしもなく、土坑機能の重層性も排除はできなかった。

次に、評価の難しいのはⅡ類で、Ⅱ Ａ類は多くの場合、火葬後に埋め戻したと推察され、Ⅰ類と同じ火葬土坑と考えた。これがＢ・Ｃ地区に圧倒的に多いのは、両地区の性格を端的に表現していた。但し、同じⅡ Ａ類でも人骨だけが出土している場合は、収骨後の残余か、副葬品のない火葬墓とも見なしうる。例えばＳＫ470やＳＫ492などである。Ⅱ Ｂ類は、出土遺物のパターンが多様で、最も判断が難しい。通常は焼土や焼石まで火葬骨と一緒に葬ることはないと考えるので、例えばＳＫ476の場合、人骨は収骨後の残余、土器破片は混入として、火葬土坑とみなした。ＳＫ478のように、鉄釘が出土して火葬土坑であることが明白な場合にも人骨は残っていたからである。しかしＳＫ481の場合には、炭化物と銭貨および刀子が出土しており、人骨は消滅したと考えて火葬墓と見なした。通常銭貨は火葬時に六文銭として納めたと予想するが、それが１点しかなく、混入の可能性もある。まして刀子は副葬品であってみれば、これを火葬土坑と見なしていいかどうか速断できない。消滅しにくい焼土・焼石を全く欠いていたからである。つまり、Ⅱ Ｂ類はその内容によって火葬土坑か火葬墓かを逐一判断する必要があった。その結果は完璧ではない可能性がある。

Ⅲ類土坑はＳＫ514やＳＫ527、ＳＫ532などに見られるように、火葬骨が消滅して、副葬品だけが遺ったと解釈できる場合には、火葬墓とみなした（この場合、上層の配石区画墓と明らかに独立して存在すれば、形態上は土壙墓である）。但し、Ｂ地区のＳＫ623～624のように、熔解付着した古銭が出ている場

合は、火葬土坑とした。

Ⅳ類土坑は、手がかりになる遺物が一切ないので不明とせざるを得なかった。ただ、本来埋葬されていた火葬骨が消滅してしまったと考えれば、副葬品のない火葬墓と見なし得る。この場合も、配石区画墓との重複関係がなければ、形態上は土壙墓であったと考えた。ただし、全部で72基あるⅢ類・Ⅳ類土坑で、比較的に規模の大きい、例えばＳＫ519・524とかＳＫ496・516などは、土葬による土壙墓の可能性も排除はできず、火葬墓に先行するものがあったかも知れない。

大阪泉南郡の成合寺遺跡のように（註18）、出土遺物からほぼ14世紀後半代に限定され、焼土坑と素掘りの土壙との機能分化が想定される土坑群とはやや違う印象があった。全体として、Ａ地区は火葬土坑と火葬墓（土壙墓）が混在し、Ａ地区が墓地専用になるにつれて、火葬土坑が徐々にＢ・Ｃ地区へと移行・増大していったと推測できる。但しその際、Ｂ・Ｃ地区の土坑には数量の割に重複するものが少なく、畢竟その分布範囲が広範囲にわたるのは、一度死人を焼いた場所を忌避したのでなければ、例えば自然災害や流行病の蔓延とか、あるいは織田軍の南伊勢侵攻（1569年）などで多数の遺体を一度に処理する必要に迫られたとか、そういう非常事態もあったからではないか、と想像した。

次に、Ａ地区での初現はいつだろうか。手がかりとなる土器類を伴出した土坑が28％しかなく、しかも完形品が出土した土坑はわずか12基（8.9％）しかない。厳密な意味では、土坑の初現時期を捉えるのは困難であった。いま、12基の中で比較的古い完形土器が出土したのは、ＳＫ467、ＳＫ514、ＳＫ532、次いでＳＫ494、ＳＫ561、ＳＫ572、ＳＫ592、ＳＫ599くらいである。就中、ＳＫ532は13世紀中葉～後葉の山茶碗（58）以外に出土遺物がなく、早ければ13世紀後半頃には出現した可能性がある（伝世期間を考慮せず）。

この他、Ａ地区で熱残留磁化測定試料を採取したのは６基（ＳＫ501、558、567、568、570、581）ある。最も古いのはＳＫ501で920年±150年、最も新しいのはＳＫ567で1300年±50年と出ている。これによれば、遅くとも11世紀後半から13世紀中葉ころの間には火葬土坑の出現はあったことになる。ただ、例えばＳＫ570の場合、1140±70年で遅くとも13世紀前葉になるが、出土した土師器皿（破片）は14世紀中葉～後葉頃のものだった。測定者の報告にも断りがあるように（Ⅹ.附篇２）、この場合にはなお100年ほどの誤差も見積もっておく必要はあるのかも知れない。

以上、かれこれ勘案すると、早ければ12世紀末期以降13世紀代には、Ａ地区において埋葬ないし火葬の始まった蓋然性は高いのではないかと考える。

註18　大阪府教育委員会、（財）大阪文化財センター編『成合寺―近畿自動車道和歌山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』1985年

（四）火葬施設ＳＫ558と点火次第

ＩＡ類に属する火葬土坑ＳＫ558は、縦2.8m、横1.5m、深さ0.55mを測り、個別遺構第39図及び写真第７図に見るように、同じく火葬土坑と言っても、群を抜いた規模と精巧な構造に作られている。赤く焼き固まった土の様子から、何度も使用された火葬施設と判断した。南北方向に穿たれた「溝状の通気孔」は他県の事例にも見られるが、左右６ヶ所にあるややオーバーハング気味の半球状の空洞壁面は特に火をうけており、Ａ地区内でも特異な形態で、Ｂ・Ｃ地区に一般的な火葬土坑との差異は歴然としている。第1にその規模からみても、おそらく座棺ではなく寝棺用であったことは間違いない。火葬施設として注目される類例は、例えば安城市加美遺跡、奈良県石光山遺跡、長野県青木沢遺跡、京都府長岡京跡（ＳＸ13001）などにもあるが、横尾のＳＫ558はそれらに比しても決して引けを取るものではない。

「天皇および女院等の御葬儀の次第書」（註19）とされる『吉事次第』や『吉事略儀』は、前者が「12世紀終わりごろの」、また後者は「室町時代初期ごろの」、それぞれ成立と推定されている（註20）。いま後者を参考にしながら述べる。

「棺の寸法は人に随りて皆替わるべ」きものではあるが、先例は「長六尺三寸。廣一尺八寸。高一尺六寸。」と見える。ただでさえ鄙の地の横尾にあって、高貴な人物と同等の棺が使われたり、同じ葬送の作法が実修されたとは到底考えられないが、寸法だけを単純に比較すると、その棺ならＳＫ558には十分納まる

サイズである。北を枕に棺は置かれた。「貴所」とも呼ばれる火葬場は、大覚寺文書の「摂津尼崎墓所掟」(1532年)にいう「火屋」(註21)に当るだろう。静岡県磐田市の一の谷中世墓群では側壁に柱穴をもつ233号墓火葬跡(註22)が知られているが、横尾の場合には柱穴はなく屋根があったかどうかまでは判らなかった。

「まず、四角に各々薪一筋にして之を差すに、人々蓋を挙ぐ。始めに艮より差して乾におよぶ。次に棺内の四面にも薪松などを差し廻る。始めの方はなし。前駈の上臈、続松の火を以て。御所にて燃し移したる火なり。艮(北東)より始め乾(北西)におよぶ。次第に之を付く。北方には渡さず。」とみえる。これは、いよいよ荼毘に付すにあたり、点火の作法を述べたもの。鬼門である艮から始めて時計回りで乾に至るまで順次点火するが、枕のある北方に火を廻すのは避けたようだ。横尾における火葬施設ＳＫ558それ自体の形状は、まさにこの都風の作法をある程度知る導師なり三昧聖のような人物が深く関わったことを示しているのではないだろうか。土坑ＳＫ558へ北枕にして納棺後、導師回向のうちに、南北の溝を除いて、東西両脇に３ヶ所ずつ計６ヶ所に薪松などを差し掛け、艮より点火したと推定したい。その６ヶ所の掘形は特に火を受けており、同時に通気孔としての機能も果たしたのである。

また、「鋤を採り土を覆ひ。その後に墓を築く。石の卒塔婆を立て。釘貫を立て廻らし。松を植え。四面に溝を掘る。」と。これはあたかも『「餓鬼草紙」』に描かれた墓の風景を思わせるが、横尾にもある方形周溝墓(例えば、100号墓、243号墓、461号墓など)の存在はこの「四面に溝を掘る」という造墓の手法が地方にも普及したためであろう。

ＳＫ558の熱残留磁化測定の結果は1230年±70年という幅を持つものであったが、Ａ地区では比較的初期段階に機能した火葬施設であった可能性を指摘しておきたい。Ｂ地区の火葬土坑ＳＫ606はＳＫ558のコピー版で、Ａ地区の墓域が拡がり徐々にスペースがなくなるにつれて、新たに掘削されたものだろう。形は既に崩れてきている。恐らく作法も一層形骸化が進んだことだろうと想像する(第25図遺構平面図)。

なお、これ以外に火葬施設として特筆すべきは、土坑ＳＫ478でも述べた「火葬用の棺台石」の存在がある。長辺1.0m、短辺0.6m、高さ0.6m大の石が2個、平坦面を揃えて据えてあった。強い火を受けていた。本来は長辺1.2m、短辺1.0m、高さ0.6m大の平らな台状石だった可能性が高い。15世紀の中頃(文安三年)に観勝寺の僧行誉が編集した『壒嚢鈔(あいのうしょう)』「土葬ノ事」には、「・・凡そ葬法ニ四種アリ。諸経要集ニ云フ。葬法ニ四アリ。一ニハ水漂。二ニハ火焚。三ニハ土埋。四ニハ施林ト云云。五分律ニ云フ。若シ火ニ焼ク時ハ。石上ニ安在シテ。草土ニ得セズ。虫ヲ傷ツクルコトヲ恐ルル故ニ。・・・」(註23)と見える。この「もし火に焼く時は、石上に安在して」とある一文を彷彿とさせる台状石であったと改めて思う。この台状石と先述のＳＫ558との先後関係は判らないが、両者はＡ地区やＢ～Ｃ地区で規模の小さい単一の火葬土坑が一般化する以前に、Ａ地区で繰り返し機能した火葬施設であったことは間違いない。この台状石を据えた土坑ＳＫ478の掘形内部から鉄釘の出土もあるところを見ると、ここに木棺を安置し、念仏回向をした後に荼毘に付して、収骨後は別の所に納骨して墳墓を築いた例があったのである(鉄釘の出土例は少ないので、釘を使った木棺の使用は横尾では少数派に属すかも知れない)。

＊　火屋：ほや。火葬場の異称をいう。
＊　上臈：ここでは修行年数をつんだ高僧のこと。
＊　続松：松明(たいまつ)のこと。
＊　釘貫：柱を立て並べて横に貫を通した簡略な柵のこと。

註19　続群書類従完成会編『群書解題』第八、雑部、1982年、202～204頁。
註20　前掲『群書解題』203頁。
註21　笠松宏至ほか校注『中世政治社会思想』下、196頁(日本思想大系22、岩波書店、1981年)。
註22　磐田市教育委員会編『一の谷中世墓群遺跡』1993年、本文編82頁、写真図版編図版73、参照。
註23　正宗敦夫編纂校訂『壒嚢鈔』巻第九、338頁、2006年、現代思潮新社、復刻日本古典全集(オンデマンド版)。なお本書には、「荼毘処を禅家には延寿堂と云い、自余の人は無常堂と云う」とも見えている。『諸経要集』20巻、唐の道世編、成立年不詳。仏教事典の一種で『善悪業報論』とも。五分律は南朝宋の仏陀什・竺道生等訳『弥沙塞部和醯五分律』30巻のこと、南伝律蔵に最も近いという。

（五） 配石区画墓の初現

土坑の初現問題と同じように、配石区画墓の初現を確定するのも容易ではない。あくまで調査担当者の実感として言えば、Ａ地区の山頂付近から標高の高い東尾根筋、伊勢湾を眺望する北・東側斜面には、比較的に大きな石を用いた堅牢な区画にかつて盛土があったと思われる墓が多かったこと、周溝を伴う立派な墓が偏在していたことなどから、それらが他のエリアの墓より古いのではないかということである。

その意を強くした理由のひとつは、406号墓の下層で検出したＳＫ567であった。この土坑の掘形には所謂「焼土帯」はなかったものの、土坑全体が真っ赤に焼けていた。本文中にも記したように、見逃せないのは北側に隣接した407号墓の南側石列も一緒に火を受けて焼けていたことである。つまり、407号墓のすぐ下（南側）で火葬をしたのは明白であった。Ａ地区の細部はともかくも、全体的に見た時には、配石区画墓は標高の高い所、即ち斜面の上方から下方に向かって徐々に増築されていく傾向にあったと確信したのである。

全部ではないが同じようなことは、配石区画の切り合い関係、つまり石列配置の先後関係からもそれと見て取れる場合があった。例えば369号墓や371号墓は370号墓の南辺石列をそれぞれ一部共用して後から取付いたことは平面図からも判る（第14図遺構平面図）。同様にして、383号墓は228号墓の南辺を区画の一部に使っている。空間に余裕がある間は東西（左右）方向に増築が可能でも、隙間がなくなれば、斜面ゆえにより低い方（南側）へと増築するしかなかった。そして、数基で一つの小墓域（ブロック）を構成することもあったと考える（それが一家族ないしは親族の墓であったかどうかは、不明とせざるをえない）。

443号墓も尾根筋にある立派な墓249号墓の区画南辺に取付いた墓である（従って249号墓の方が先行する墓）。その443号墓からは既述のとおり、人骨（ＳＸ193）を満たした転用蔵骨器である常滑産三筋壺（42）が瓦器小碗（41）を蓋にして出土した。三筋壺（42）は12世紀後半代に、瓦器小碗（41）を12世紀末葉～13世紀前葉頃に比定した（小碗とはいうものの、14世紀代に下る可能性もありはしないのか、いささかの逡巡もある）。転用されるには一定の時間的経過（伝世期間）が必要である。443号墓の出現を早ければ13世紀前葉ないし前半代頃と推定した。

今、Ａ地区の配石区画墓460基のうちで、破片も含め何らかの形で人骨以外の遺物が出土したのは85基、実に18.5％に過ぎない。このうち、完形もしくはほぼ完形の土器を埋納していたのは12基（14.1％）、全体ではたった2.6％に過ぎない。しかしこの数字には、例えば348号墓のように、重複する土坑ＳＫ532から完形の山茶碗（13世紀中葉～後葉）が出土したような例は含まれない。仮に両遺構が一体のものであれば、348号墓には13世紀後半代（～14世紀）の年代を与えることも可能かも知れない。

数少ない完形の土器から見た場合には、235号墓の渥美産壺（43）が12世紀後半代、220号墓の渥美産壺（40）が12世紀末～13世紀初頭頃、山茶碗（50）が13世紀前葉～中葉頃、100号墓の青磁碗（63）13～14世紀代、などとなって比較的古い部類に属する。ただ、182号墓など20数ヶ所で出土の破片から接合復元した常滑産大甕（86）が通常の墳墓に用いられたか否かは兎も角も、それが12世紀の第４四半期のものであることなどを勘案すれば、伝世期間も考慮しつつ、早ければ12世紀末以降13世紀代のうちには一部の配石区画墓の初現もあったと見てよいのではないかと推測している。

（六） 配石区画墓の納骨形態

Ａ地区に460基を数える配石区画墓のうち、遺物が何一つなかったのは178基（38.7％）、石塔は採取したが人骨も、土器片も金属製品も一切なかったのは123基（26.6％）ある。両方を合わせると301基（65.4％）にのぼる。これらは墓の形態はとるが、殆ど手がかりがない（石塔は動いている）。

人骨が出土したのは122基（26.5％）で、そのうち25基（20.5％）は２ヶ所から、８基（6.6％）は３ヶ所から人骨が出土し、４ヶ所から出土したのも１基（0.8％）だけあった。つまり122基中34基（27.9％）は人骨が複数ヶ所から出土している。また、人骨は出土しなかったが、土器や金属器などの副葬品ないし破片が出土したのは37基（8.1％）あった。つまり159基（34.6％）については地下に被葬者に関する何らかの遺物情報を残すものである。そこから、納骨の形態にはおおよそ４タイプを抽出できるように思う。

横尾ではきちんと①蔵骨器に納まって人骨が出土したのは88号墓、208号墓、220号墓、235号墓、273号墓、364号墓、399号墓、443号墓の僅か８基（6.6%、全体では1.7%）に過ぎない。この８基には重複する下層土坑はない。

次に、②区画のほぼ中央部に、比較的に扁平な石や任意の川原石を用いて箱状（直方体）に組合わせて納骨空間を形作るタイプがある。58号墓、70号墓、109号墓、128号、351号墓、405号墓、406号墓、411号墓、423号墓などがそれに該当する（個別遺構第34図）。これらにもぴったり重複する下層土坑はなかった。

次に、③おおむね40cm内外の大きさの川原石を、平坦面を上にして据えるタイプがある。10号墓、26号墓、32号墓、85号墓、117号墓、120号墓、124号墓、125号墓、129号墓、130号墓、140号墓、150号墓、173号墓、204号墓、230号墓、231号墓、302号墓、311号墓、318号墓、319号墓、335号墓、372号墓、378号墓、425号墓などである。全てではないが、その直下または傍から人骨が出土した。人骨は土中に直接または有機質の入れ物に入れて埋納されたであろう。石は墓標を兼ねたか、もしくは石塔を据える台になった可能性もある。

更に、確認した例は少なかったが、④地輪の直下から人骨の出土したケースで、89号墓や372号墓などに見られた。例えば372号墓の場合、原位置を保つ地輪（A0691）の直下に厚さ0.06mの扁平な石（0.26m大）を蓋にして人骨（ＳＸ160）が出土した（個別遺構第34図）。地輪直下に納骨された典型的な例と言える。その他人骨だけの出土が84例あるが、うち区画内のほぼ中央部ないし中央部付近での出土は18例を数えた。そういう出土人骨の直上にも、本来は④の例のように地輪（即ち五輪塔）が据わっていた可能性がある。

配石区画墓の隅や縁辺部付近で、もしくは区画墓と区画墓との隙間や通路などで検出された人骨は、実際にはどういう意味をもつものか、明確ではない。Ａ地区が配石区画墓で飽和状態になった後も、納骨する場所はＡ地区でなければならぬとする旧来の意識や慣例だけが存続し、墓制が大きく崩れるなかで、空いたところに適宜納骨（もしくは分骨）だけをするというような風習が生まれたかも知れない、と想像した。

（七）「土饅頭」と墳丘状特殊遺構

かつて、墳墓をさして「土饅頭」（註24）と呼んだのはおそらく、覆土する際に土を半球状に盛り上げたからではないかと考える。横尾のＡ地区では、227号墓、235号墓、236号墓などのように、石で区画をすることなく、盛土だけの例（227号墓と236号墓には周溝がある）があり、文字通り土饅頭に相応しい形状に見えた。出土した壺の伝世期間が確定出来ないため、235号墓の築造は12世紀後半代以降としか言えないが、227号墓や236号墓もふくめ、これらは比較的早い段階に属する墳墓のひとつであった可能性が高いと思う。

土饅頭の今ひとつの典型は、100号墓、182号墓、220号墓、221号墓、243号墓などであろう。このうち、100号墓、221号墓、243号墓はいずれも土坑を伴う方形周溝墓（註25）で、おそらく周溝の土を覆土として中央（土坑上部）に盛上げたことは間違いなく、配石区画は土止めの役割も果たした。盛土の周囲に「釘貫を立てめぐら」せば、上述のとおり「餓鬼草紙」にみる墳墓の姿を彷彿とさせる。182号墓や220号墓には周溝はなかったが、墳丘状の盛土があったことは断面図から看取される。前者はある時期に「納骨堂」として機能したと考えるが、その時期は明瞭ではなく、出土遺物の一番新しい時期に合わせると15世紀後葉と推測される。後者も、蔵骨器の伝世期間が判らないので推測に過ぎないが、出土した土師器皿の破片から推して14世紀末～15世紀中葉以降の築造としておく。全ての配石区画墓が土饅頭のように盛土されたのではなく、ある時期を過ぎると、区画内は比較的平坦に築造されたことは、個別遺構断面図からも判る。

さて、墳丘状特殊遺構としてここに注目すべきはＢ地区の461号墓（墳丘Ａ）～464号墓（墳丘Ｄ）の４基である。これらは上記土饅頭とはやや趣が異なる。前２者には明確な墳丘と周溝がのこっていたが（方形周溝墓）、後２者の場合は周溝もなく、盛土も極めて低く、下層で検出した複数の火葬土坑の存在から、それらより後で築かれたことがわかるだけだった。前２者のうち、461号墓（墳丘Ａ）は陸橋部から墳丘斜面に石の階段が設けられ、墳丘中央部に土坑

状の窪みのあったことが断面観察で判明している（第41図土層断面図）。もしそこに大甕が埋納されていたならば、ある時期に「納骨堂」であった可能性を見いだすこともできる。当初､伝世した常滑産大甕（86）が本来はここに使われたのではないかとも考えたほどだが、証拠がない。いずれにせよ、前述京大理学部遺跡の火葬塚（ＳＸ１）や兵庫県龍野市宝林寺北遺跡の方形周溝墓（中世）、あるいは静岡県磐田市の一の谷中世墓群にみられたような主体部と周溝をもつ塚墓（註26）などよりは、むしろ新潟県出雲崎百塚の1号塚に見られる形状に最も近いものがある。下層で出土の土師器小皿破片（241）を仮に15世紀前半代と比定したので、それ以前に遡るのは難しいが、次の462号墓（墳丘Ｂ）よりは古い築造と考えている。

462号墓（墳丘Ｂ）は最大の規模で、谷側を除く三方に周溝を巡らせ、墳丘上中央部の土坑ＳＫ610に常滑産大甕（92）を据えるもので、この大甕（92）は15世紀後半～ 16世紀初頭に比定できる。従ってそれ以降に、例えば16世紀後半代に大規模な納骨堂として築造されたと考えることは許されよう。横尾中世墓群での造墓活動は長年月にわたるため、いくつかのエポックがあったと考えられるが、おそらくＡ地区にいよいよ造墓スペースがなくなって来た時期に築造されたこの納骨堂は、その一つの劃期を示すものであったと考えている。或いはそれが、例えば織田軍による攻撃後の出来事だとしてもなんら不思議ではないように思う。

註24　註23前掲『壒嚢鈔』巻第七、243頁参照（天文元年に「釈氏某比丘」の手になった『塵添壒嚢鈔』では巻十に同文がある。）

註25　石川県の劒崎（けんざき）遺跡では14世紀末～ 15世紀前半の周溝をもつ中世墓が著名で､報告書には全国的な類例（14遺跡15例）の分類表が示されている。新たな類例を追加することになった。石川県立埋蔵文化財センター『劒崎遺跡』一九八六年。

註26　註22前掲書、本文編124頁、写真図版編図版114参照。

（八） 墓群と石塔の関係

出土・採取した五輪塔は部品（破片）をふくめ約1100点（計測や実測にたえないものは除外）あった。内訳は、空輪・風輪が15、空風輪298、火輪169、水輪99、地輪207、空風火輪135、水地輪48、一石五輪塔129である。荒井勘之丞が『寄墓日記』に「其石塔誠に古代の作と相見えけれ共、文字の類少しもなく稀に梵字あり」と記すとおり、年号の判る文字には全く恵まれなかった。１）組立式の五輪塔と２）一石五輪塔とに分けて述べる。

１）松阪市矢津町にある現在の養徳寺境内に安置されていた五輪塔のなかに、「永正（二？）年」銘と「永禄十年」銘の地輪があり（註27)、前者の法量は22.4cm×19.2cm、後者の方は21.6cm×17.6cmであった。後者は永禄十二（1569）年の織田軍による大河内城攻め直前の銘である。これを一つの目安としてかれこれ勘案しつつ、第55図の地輪実測図で見たとき、大まかになるが、図の下３列（Ａ0591からＡ0763）を概ね16世紀代に､上２列目から８列目（Ａ0597からＡ0761）を概ね15世紀後半代を中心に比定することが可能ならば、最上段の一列目（Ａ0592からＡ0723）は15世紀前半代から一部は14世紀代にも遡り得るのではないか、と考える。

２）一石五輪塔については当初、16世紀末ごろには終息するという認識でいた。しかし近年、当センター職員の竹田憲治氏が、主として南勢地域を中心に五輪塔の実地調査を精力的に進めておられ（調査成果はいずれ公表されると聞く)､「奈良・大阪方面での編年観をそのまま当地域に当てはめるのはいささか実態にはそぐわない」との見解を筆者に示された。横尾の一石五輪塔は、①宝珠の先端部が肥大化し、②水輪部の胴回りに張りがなくなり直線化する、③地輪部が徐々に長くなっていく傾向も顕著である。同氏が調査された例えば､三雲町観音寺（享禄元年銘）や松阪市常教寺（永禄８年銘)、同じく森町本の田仲寺（元亀４年銘）などに残る８基ほどの一石五輪塔に近似するものは、第56図実測図で言えば、Ａ0920、Ａ0945、Ａ0913、Ａ0964ぐらいしかない。今これらを16世紀中葉～後半頃に比定し、同56図下から３列目のＡ0927、Ａ0929、Ａ0922の3基を16世紀後半～末頃に比定しておく。それ以外の諸例は、水輪部が張りを失い直線化するとともに、地輪部の縦の長さが伸びる傾向にあるもので、南勢地域では例えば松阪市浄眼寺墓地（慶長18年～ 19年銘）の例にならえば、17世紀代にも入り得るかも知れないとの結論に達した。従って、横尾では秀吉の天下になった以降にも

何らかの形で供養塔としての一石五輪塔は造立されたものと推定したい。

以上のような推定が可能ならば、「横尾中・近世墓群」としなければならないが、横尾中世墓の初現を早ければ13世紀代とみているので、ほぼ200年前後の期間、横尾には石造五輪塔のない時代があったのである。木製の卒塔婆は立っていたかも知れないが、当初から石造五輪塔が林立したと考えるのは現実的ではない。地下に埋納された12世紀～14世紀代の蔵骨器関係の遺物に伝世期間を想定してもなお、その殆どの墓には石造五輪塔は伴わないのが普通であった、と考える。

註27　三重県教育委員会編『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』1986年3月、31頁。大河内城の西隣にあった峯谷遺跡（伝養徳寺跡）の調査前に境内を訪ねた折、既にその五輪塔はそこにあり、拓本をとったものである。

（九） 横尾墳墓群の存続期間（推考）

【初現時期について】具体的な遺構や所在場所の特定はできなかったが、Ａ地区には、おおよそ12世紀後葉から13世紀初頭頃（遅くとも13世紀前葉まで）には、経塚が営まれた。そしてそれは、当山における中世墳墓の初現とほぼ時期を同じくしていた。土坑群の内容を４形態（６形式）に分けて検討した結果、12世紀末期以降遅くとも13世紀代のうちには、少例ながらＡ地区において埋葬（土壙墓）ないし火葬（火葬墓）の始まったことは、ほぼ間違いないと考える。しかも、遅くとも13世紀前半代以降には方形周溝墓を含む配石区画墓の初現も一部あったのではないか、というのがここまでの包括的な結論である。遺物の伝世期間を考慮すれば、墓は13世紀後半代以降（14世紀にかけて）に初現があったとするのが、より確実なところである。尾根筋上にあるＳＫ532などは初期段階（13世紀後半以降）の土壙墓であったと推定でき、時期的にはそれからさほど下らず、220号墓や235号墓などの初期段階の配石区画墓も出現したのではないか、と考えている。

【土坑と配石区画墓の関係】Ａ地区上層で確認した墓数は460基（第13表）、下層で検出の土坑（壙）は135基（第15表）あった。135基の土坑のうち、平面上、上層の配石区画墓と重複もしくはほぼ重複するのは50基（37％）である。この中には81号墓とＳＫ482（第35図）、100号墓とＳＫ514（第39図）、221号墓とＳＫ533（第21図）、243号墓とＳＫ570（第38図）のように、両者が一体の遺構であることが明確な場合と、399号墓とＳＫ568などのように別遺構であることが明瞭な場合とがある。従って平面上重複関係にあるからと言っても両者を直ちに一体の遺構とすることはできない。重複しない土坑は85基（63％）もあり、規模も様々に違えば、いくつかに跨って重複する事が多い。もし、配石区画墓を土坑とセットで築造するなら、こういうちぐはぐなことは起こらないだろう。これは、両者が同時に重複して築造されたというより、狭い範囲で偶然にそういう位置取りになったもので、真に重複する遺構は限定的であった。

なお、Ａ地区の土坑だけを通覧した場合、遺物が何一つ出土しないⅣ類土坑が31基（23％）もある。手がかりは何もないが、ＳＫ488やＳＫ490、ＳＫ536などのように小規模なものに比べると、例えばＳＫ465、ＳＫ496、ＳＫ509、ＳＫ516、ＳＫ544などは、火葬骨を納めるだけにしてはいかにも規模が大きすぎる。これらの中には古い段階の土壙墓（土葬骨は消滅か）も一部混在したかも知れない、と想像される。

【墓域の発展と劃期】横尾で出土した人骨はすべて火葬骨であった。死者たちは当初、Ａ地区において荼毘に付され、その遺骨もＡ地区に葬られた。今、直接火葬に関係したⅠ類・Ⅱ類土坑をみると、Ｂ・Ｃ地区の土坑に比べてどれも規模が大きいか、または特殊な形状をしている。ただ、南東エリアに集中するＳＫ571からＳＫ599に至る土坑群（火葬土坑が中心）は、その規模や形状などからみてそれまでＡ地区に一般的であった土坑とは趣を異にし、むしろＢ地区に普遍的な土坑の始まりと位置づけた。そしてその出土遺物から判断して、その始まり（即ち、Ｂ地区型土坑への移行）はおおよそ15世紀中葉以降～後半代にあった。Ａ地区では徐々に墓数が増大したため、その頃を境にして、火葬する場所が不足して従来のような埋葬の場所にも事欠く状況が進行しつつあったか、当地の村落共同体における葬制自体にも大きな変化があったであろう。その象徴が山頂部の「納骨堂」に比定した182号墓・183号墓の出現

ではなかったか、と考える。

初期段階に属する墳墓はＡ地区の見晴らしのよい東斜面を中心に形成された。その代表的墳墓は、100号墓、220号墓、221号墓、235号墓、243号墓、あるいは227号墓、236号墓などである。中でも100号墓・221号墓・243号墓はそれぞれ土坑を伴い、ほぼ同じ方向に周溝をめぐらし、かつ等間隔に一直線上に並ぶ（第17図）。上から順に古いと思うが、13世紀末以降14世紀末ころまでには収まる方形周溝墓である。221号墓の周溝の一部を切って227号墓が、更にその周溝を切って236号墓が出現するが、それがいつ頃かは基準遺物が皆無で判断できない。ただ、236号墓の周溝ＳＤ878の埋土に混入の土師器小皿破片（238）からみて、その溝は15世紀中葉～後葉以降に埋没し始めたと想定され、両周溝墓がそれ以前の築造であることは動かない。以下、極めて大まかに墓域の発展過程を追うことにする（必ずしもこの順番に出来たという意味ではなく、あくまでも中心的造墓活動の推移傾向という程度に理解してもらいたい）。

13世紀後半以降14世紀末ないし15世紀初頭ころまでには、山頂の182号墓・183号墓に先立つ墳墓が、山頂から東斜面を中心に形成されたと思う。

北尾根筋の第二テラスにある13号墓の土師器鍋（104）の評価は難しいが、仮にその伝世期間を20～30年としたなら、おおむね14世紀後半代以降には、この６段に造成されたテラスにまで墓域は拡がっていたものと考える。15～16世紀代に入ってもこのテラス上に墓の築造は続いたであろう。

14世紀～15世紀前半代を中心に、北から西部域一帯に造墓があり、また平行して14世紀後半以降15世紀代には、南側斜面にも徐々に墓域は拡大していったと考える。15世紀前葉～中葉頃にかけては、372号墓を中心とした斜面一帯に営まれる墓があり、Ｂ地区に一番近い南東側斜面には主として15世紀後半以降16世紀初頭にかけての墓が多くなっている。

16世紀代にも引続き、尾根から南半の斜面を中心に造墓は続けられたが、やがて新たに一区画分の墓を築造する場所が不足するようになると、古い墓と墓との隙間や、通路などを区切って墓とする例が山頂部、西部域をはじめ、特に南側斜面から南東斜面にかけての広い範囲に顕著に現われる。区画の縁辺部や配石列の隙間など複数ヶ所から人骨の出土する例も、南側斜面から南東斜面にかけての墓域に多かった。これには、先述した自然災害や流行病の蔓延、あるいは織田軍との戦闘による一時的な大量の死者の処理などの事情が、Ａ地区の墓域を逼迫させた背景にあると想定しておきたい。

常滑産大甕（92）を埋納していたＢ地区の462号墓（墳丘Ｂ）は、おそらくＡ地区が飽和状態になった後に築かれた新たな「納骨堂」であって、甕の伝世期間は不明だが、それは16世紀後半代であったと思う。ともかくそれが横尾中世墓のもう一つの劃期であった、と考える。

【終焉】南勢地域の寺院や墓地などに現存する一石五輪塔の実地調査の成果を導入して、横尾墳墓群の一石五輪塔には一部17世紀代にも入るものがある、との教示を得たことは、上述のとおりである。現地調査段階でも気になったことは、配石区画墓の石列の一部に組み込まれた石塔が20点以上あり、145号墓や450号墓などのように、明らかに一石五輪塔が転用されているのをどう理解すればいいか、ということであった。一般民衆の信仰心や宗教意識を想像した場合に、他の墓に立っていた五輪塔を区画石に転用するには、廃絶後も一定の期間の経過を必要としたのではないか、と考えた。すなわち、戦国時代末期に使われた一石五輪塔が転用されるには、近世初頭まで待たねばならなかったのではないか、と。

Ａ地区には墓と墓との間の僅かな隙間に人骨を埋葬している例が散見され、長大な遺跡（Ａ～Ｃ地区）にあって、時代を経ても「納骨はあの山頂でなければならぬ」という強い観念だけが引継がれたのである。それは墓地として既に飽和状態に達した後のことでもあって、戦国時代末期以後にも納骨埋葬なり、病没者や織田軍との戦闘で犠牲になった人々への供養塔の造立などによって、命脈を保つことはあったと推測する。あるいは、堀坂山への神南備山信仰をもつ南勢地域の農民たちが、納骨に訪れる霊山としても存続することがあったのかも知れないと想像して、はなはだ粗略に過ぎるが、当該横尾墳墓群の調査報告文を閉じたいと思う。　　（田阪　仁）

Ⅶ. 文献資料篇

(一) 荒井勘之丞『寄墓日記』について

旧・伊勢寺村の庄屋であった荒井勘之丞が文化12年（1815年）に著した『伊勢寺記』の中に『寄墓日記』という文章が収められている。当該中世墓に直接関係する重要な記録なので、以下に抄出して掲げておきたい。

【本文抄出】

「ここに南勢伊勢寺の里に国分尼寺の旧跡あり。是往昔―年号等知らざる也―この隣郷五十四ヶ村の惣墓所と申し伝う。

この地石塔数多くありて、草木欝として日をもらさず。人家遠く実に寂莫として物凄き処なり。（略）

斯の如きの塔其数をしらず、林間に埋れ田辺の草根に隠れて、耕人等さわれば忽にたたりありてなやむ。又その石塔を持来り砥にいたす人多し。其中には忽にたたりありてなやむ則ち、其塔を立て念仏回向等すれば、そのなやみ即座に去る事里人の能く知る処なり。時に文化午の春予もこの地に登臨して見るに、石塔数所に半ば埋れ、或いは雪霜に朽ちて其形を失い、或いは畜類の糞にけがれ或いは田中に沈み、さまざまにして其あわれなる事こころも言も及ばず。予おもうに、此中には誰が祖先の墓、誰が前世の碑のあるべきもしれがたしと有信の人に談るに、村老も予が言に随喜して往古より捨て置きたる事を羨む。

これに依て、予両三の人を催し貴僧を侍て此林中に入り、回向を乞て共に念仏して帰る道すがらこのあわれなる事を談れば、貴僧も涙を垂て予に告ていわく、五輪は則ち仏の五体のかかる尊き物を雍相になすはよろしからず。且又まよいの霊魂は虫と変じて、五穀の類をあらす物なりと。

然るに依て、林間に破壊したる石塔を同じ山の内七、八丁東女男坂の道の辺に集め、墓を移して自今往来の人々に念仏の回向を受れば、霊魂成仏して五穀豊熟すべしと存ず。是然るべしと。貴僧に対して問に、貴僧のいわく、仏説の中にも一尺の塔を建れば一国の主に生るるとあれば可なり。拙僧も又経供養結縁すべしと。

これに依て忽ち山主に地面を乞い受け貴僧を請招し地祭して僧意にまかせ、古墓の土を持来りてこの新地に埋み石を寄て壇を作りければ、村中の老若耕作の休を以て我も我もと馳来りて一日に五輪一百、或は弐百三百とよせ移す。時なる哉ときなるかな、雪中の枯木に春の花の開くが如く是迄足下にふみし塔も、今は頭上に頂礼して日々に香華を供養する。人其数をしらず、又は砥石にいたせし塔もさんげして持返す。彼是半ばにして一千五百程を移す。是皆願主の功にあらず、仏法不思議のなす処か老若ともに石塔を荷い小径を往来するに、皆々大念仏にしてうたの声なし。小童も共に念仏して小石をはこぶ。たとえちん銭を得させたりとも、斯の如くなる事はあるべからず。予考うるに老若共に是皆有縁の石塔なり。又何某のいわく、この中の勝れたる石塔は平人の塔にはあらず。高僧又は官位の人の塔なるべし、と云々。考見るに往昔国分寺は大伽藍にて坊舎二十院なり。又北畠家繁栄にして、此辺の阿坂・大河内塔に家臣多しと聞き伝うなれば、右等の石塔にもあるべけんや。其石塔誠に古代の作と相見えけれ共、文字の類少しもなく稀に梵字あり。

（略）

○　竜泉寺　浄土宗鎮西派　往還之南にあり。
　号国分尼山本尊阿弥陀如来御長　作知れず。

そもそも当山は、往昔国分寺の一山にて能照坊と申ある其旧跡に小庵一宇のみありし処、何れの頃か横滝寺中興開山三誉上人の弟子の僧、其旧跡を再興し諸殿閣を造建し給う。本尊は則ち国分尼寺の本尊をここに移し奉るなり。依て国分尼山竜泉寺と号す。其国分尼寺は今は旧跡ばかり残れり。

○　国分尼寺旧跡　地蔵堂より七、八丁南の山にあり。

往昔国分寺の坊舎にて、尼寺十箇寺の其一也。今廃寺と成りて旧地ばかりなり。此辺に墓の跡数カ所あり。塚の形多く五輪の石塔など林間に転び或いは埋れて其数かぞえがたし。近年其石塔を、ここより五、六丁東女男坂と云う処にて見る可し。

○　女男坂　伊勢寺村より西野村へ越る道にあり。
　此処は嫁入りの往来をいむなり。坂は南と北と分かちありて谷間に細き流あり、涙水などと云々。

○　寄墓　女男坂にあり　板行絵図弘める。

古代の石塔凡そ四千余あり、近年此処に移す。元是より五、六丁ばかり西の林中国分尼寺の旧地にあ

り、来由は巻のすえにて見る可し。

（以上、近藤豊美氏の読み下し文によった。）

(二) 女男坂と国分尼寺跡

旧県道丹生寺一志線を南下（岡山町で県道59号松阪第二環状線に合流して国道166号線に至る）すると、横滝口交差点（四辻）から約900m前後、岡山町へ入る手前の向側池あたりがちょうど峠になっており、道路脇を数m左へ入ったところに五輪塔の埋もれた場所がある。そのため、いつの頃からかここを称して五輪峠と言っている（第３図参照）。

上掲『寄墓日記』に見える「女男坂」とは、まさにこの五輪峠に同定して間違いはない。現在、そこには火葬場があり、周囲に多数の五輪塔類が半ば埋もれた状態になっている。それを指して勘之丞は「寄墓」と呼んでいる。本文にはその石塔類を同地から西方５～６丁（約600m前後）にあったという「国分尼寺の旧地」より移したものであったことが判る。ここで、①「国分尼寺の旧地」とある、国分尼寺とは何か、②そしてそれはどこに当るのか、が問題になろう。先ずは②から見ることにする。

「林間に破壊したる石塔」のあった場所とそこから移し運ばれて形成された「寄墓」のある「女男坂」とは、東西に約600m前後（本文では約800m前後の計算になる）の距離を隔てる位置関係にあった。今、「女男坂」に同定した五輪峠を基点に地図上で当該「横尾墳墓群」の位置との関係を見ると、五輪峠に埋もれた五輪塔類は、間違いなくこの文化午歳（即ち1810年）の春に、伊勢寺村中の老若男女が、（今回「横尾墳墓群」と命名した）「林中」から「移し寄せた」ものにほかならない。そうすると、「林間に破壊したる石塔」のあった場所、即ちわれわれが調査した「横尾墳墓群」の場所或いはその付近を勘之丞は「国分尼寺旧跡」と認識していたということになる。

言うまでもなく、伊勢国の国分寺、国分尼寺は鈴鹿郡にあった。近年その一部が発掘調査され、調査成果も公表されている。しかし、「往昔国分寺は大伽藍にて坊舎二十院なり。云々」という書き方と前後のコンテキストをみれば、国分寺・国分尼寺がかつてこの伊勢寺村に在ったというのが、当村の庄屋勘之丞の歴史的認識だったのである。

当時、彼が伊勢国分寺と認識していたのは、伊勢寺廃寺のことである（因みに現在伊勢寺廃寺跡に立てられた案内板にも伊勢国分寺跡であるとの記述があり、勘之丞らの説を地元では長く伝承してきている）。これまでの部分的な発掘調査等によれば、この伊勢寺廃寺からは奈良時代後期に属する軒丸瓦のほか、蓬莱山を模した鬼面瓦、墨書土器などが出土している。ところで早く、当該廃寺の成立背景に言及したのは、御巫石部清直であった。その「太神宮寺排斥考」（『神宮神事考證』後篇所収）に言う。

「今モ飯高郡ノ西際ニ伊勢寺村アリ。一古刹ヲ存シテ国分寺ト称ス。土俗ハコレヲ伊勢国ノ国分寺ナリト謂ヘレト、謬傳ナルコト三国地志ニ辨スルカ如シ。（略）丈六ノ佛像アリテ、伊勢寺ノ號アルヲ見レハ、是ソ太神宮寺遷建ノ遺蹟ナラムト往テ検スルニ、正シキ徴證ハナケレト、聖武帝勅賜ノ法華経アリ、庭砌ニ古瓦ノ缺散逸ス。（略）サレハ土俗大神宮ヲ伊勢ト尊稱スレハ、伊勢寺ハ即チ太神宮寺トイフ意ナリ。諸国ノ国分寺ニ准セラレシ寺ナルヲ以テ、後世直ニ国分寺ト稱シ來レルニコソ。是則チ太神宮寺排斥ノ遺跡ト決定シテ差ナカルヘキニヤト思惟セラルカシ。」と。

これはすなわち、『続日本紀』（以下同じ）天平神護二年七月丙子条に、「使ヲ遣ハシ丈六ノ佛像ヲ伊勢大神宮寺ニ造ラシム。」と見える伊勢大神宮寺が、祟りをなすとして後に「飯高郡度（廣）瀬山房」に移転され（寶亀三年八月甲寅条）、更に寶亀十一（780）年二月丙申条では、「神祇官言ス。伊勢ノ大神宮寺。先ニ祟リ有ルカ為メニ他處ニ遷シ建ツ。シカルニ今神郡ニ近クシテ。ソノ祟リ未タ止マズ。飯野郡ヲ除クノ外便地ニ移シ造ラントテヘリ。之ヲ許ス。」ということで、今度は神郡外への移転を余儀なくされた。つまり、勘之丞らが伊勢国分寺と認識した現在の伊勢寺廃寺こそは、この時に移転した大神宮寺の跡だと御巫翁は言うのである。

寶亀十一年、最終的に神郡外へ移転した大神宮寺の跡を現在の伊勢寺廃寺に比定することは、既に別稿でも触れたことがあり、追認する論考もある（註28）。大神宮＝伊勢であり、伊勢寺という地名もここに大神宮寺が置かれていたことを反映しているのであろう。

閑話休題。大神宮寺を国分寺と認識していた勘之

丞は、セット関係にあるべき国分尼寺の所在地を当該横尾墳墓群のある山中に求めたのではないかと思う。

今回の発掘調査範囲で見るかぎり、寺院の建造物を想定・推測せしめる遺構は勿論検出していない。多数の石塔類が散乱した墓場の付近にかつての国分尼寺を想定するには何か根拠があったのだろうが、いかなる記録・伝承に基づいていたのか、今となっては知る術がない。

註28　伊藤久嗣「斎宮周辺部の古代寺院」『斎宮歴史博物館研究紀要』1、斎宮歴史博物館、1992年。

（三） 複数村による「惣墓所」

当該墓群が文化年間当時において「隣郷五十四ヶ村の惣墓所」と伝承されていたことは、注目しておかねばならない。「郷墓」（惣墓）が比較的よくのこっている奈良盆地においてさえ、例えば極楽寺墓地（御所市）では、それを形成している墓郷の数は二十二で、これが最大クラスである（註29）という。それゆえ、当初は五×四、二十ヵ村の謂ではないかと想像したが、原文に「五十四」とある由、横尾の場合は格段に大規模な郷墓（惣墓）であったということになるが、果たして伊勢寺地区周辺だけでそれほどの「惣墓所」が成立しうるのかどうか、いまも疑問に思っている。それほど多数の隣郷村によって営まれた「惣墓所」であるとの伝承自体を否定するつもりはないが、ではその具体的な実相となると、明確に描き出すことは難しい。ただ、ここにいう「村」を近現代の社会的通念で捉えることは勿論できない（註30）。例えば平均的に「一村10家見当」と想定して、その対象範囲を櫛田川周辺の南勢地域一円にまで拡げ、堀坂山への神南備信仰圏のなかのこととして考えるべき性格のものではないか、とも想像している。（田阪　仁）

註29　野崎清孝「奈良盆地における歴史的地域に関する一問題」『人文地理』第二五巻第一号、1973年

註30　永原慶二「阿蘇社領湯浦郷―阿蘇社領湯浦郷の「村」について―」（『中世成立期の社会と思想』105頁以下参照、吉川弘文館、1991年）。

IX. 附篇（1）

三重県・横尾墳墓群出土の火葬人骨について

京都大学霊長類研究所　江原昭善

三重県教育委員会が昭和60年7月から昭和61年3月にかけて、近畿自動車道伊勢線延長工事建設に関連して横尾墳墓群（松阪市伊勢寺町字横尾の山中）の発掘調査を行なった。その際、多数の中世火葬人骨が出土した。

[出土状況]

報告書によると、上記の遺跡は４基の古墳（Ｅ・Ｆ区。７世紀前葉～中葉の築造と推定）と中世墓群とからなる。さらに中世墓群については、12世紀後半から13世紀前半の間に造営が始まり、16世紀末頃まで続いたらしい。その分布はＡ～Ｄ区だけに限られず、Ｃ～Ｄ区の南東調査区外にも広がっていることも確認されている。今回、Ａ～Ｃ区（5,600㎡）から出土した人骨について、その同定結果を報告する。

この中世墓群は、大きく配石区画墓・墳丘墓・土壙に分けることができ、とくに土壙群では火葬施設として利用された痕跡が濃厚で、調査担当者（宮田・田阪）によれば「当中世墓が基本的に火葬であったことを物語っている」という。

たしかに出土人骨はすべて火葬に付されており、その総数は同定によれば557個体であるが、実際には多少の変動はあるかもしれない。それというのも、人骨はすべて砕片化しており、形態特徴に基づく個体識別は不可能で、ひとまとまりが１個体分だとする以外にすべがない。さらに、出土状態からみても、「墓の一単位を明確にし得ぬほどに石が重複散乱し、骨の出土状況からみても、墓のうえに墓をつくったとしかいいようのない墓域さえあった」（上記担当者）し、近世の記録（荒井勘之丞「伊勢寺記」のなかの「寄墓日記」、文化12年）によると、災害供養のため墓域の一部が移動のため攪乱されたことも明白である。これらのことから、散逸や混入がなかったとはいえないからである。

当資料は、考古学的には価値の高いものではあるが、出土人骨の形態特徴を基にして論ずるという観点からすれば、上記のような不利な条件に加えて、すべて焼骨であり、さらに人為的に破砕された痕跡もあり、悲観的である。一般に焼骨は収縮や変形をともない、時代的・地域的特徴や形態特徴を読み取ることは不可能で、性別や年齢別もつけにくいからである。

[人骨保存状況]

保存状況の目安として、各1個体分とみられる人骨について、その残存量を基にして、

比較的多くの骨片を含むもの…… a

少量のもの…… b

ごく少量のもの…… c

に分類してみた。すでに述べたように、当資料はすべて焼骨であり、かつ砕片化していることから骨質の保存状況は無視してよいからである。

その結果、Ａ区上層・Ａ区下層・Ｂ区・Ｃ区を通じて総数557個体が認められた。Ａ区上層からの出土数がもっとも多く、206体、36.98パーセント、次いでＡ区下層が146体26.21パーセント、Ｂ区は134体、24.06パーセント、Ｃ区はもっとも少なく71体、12.75パーセントである（第１表）。

人骨保存（残存）状況は、Ａ区上層およびＢ区およびＣ区ではｃが多いが、Ａ区下層では逆にｂが多く、その分だけｃが少ない。前３者は後者に比べて攪乱をより大きく受けたのであろう。

それによれば、Ａ区下層は他に比べて、ｂが多いことが目立つ。Ａ区上層は人骨の消失が他区よりも著しいことがわかる。

[性別・年齢別分類]

性別・年齢別の分類を試みたのが、第３表である。

性決定は悲観的ではあるが、眉上弓Arcus superciliarisや眼窩上弓 Arcus supraorbitalis、外後頭隆起Protuberantia occipitalis externaやオトガイ隆起 Protuberantia mentalisの一部が残存していることがある。その場合には、かなり正確に性決定が可能であった。上腕骨遠位端の形状も、この部類に含まれる。しかし長管骨片の筋付着部たとえば大腿骨粗線 Crista femorisにみられる発達の程度などからは、あまり正確に判定することはできなかった。したがって、これらに基づいた性判定も試みて、一応数字はあげてあるが、信頼度は低い。いずれに

せよ、この種の資料では、性の判定はあまり大きな意味をもつとは思われない。

年齢については、この資料が土葬骨であれば、平均死亡年齢が算出出来て興味のあるところだが、細分は困難であるゆえ、成人以前と以後に分類した。しかしながら成人以前といっても、幼・少年期のものは火葬に付した場合、骨が残存することはむつかしいのが実情である。したがって成人以前とはいっても、Juvenile後期のものに限られた。性の判定が不可能なものでは、当然のことながら年齢の決定も出来ないものが多く、各区を通じて484個体中、179個体（37.0パーセント）がこれに該当する。

中世では幼児死亡率が著しく高率だったといわれるが、おそらく本資料数に倍する幼児死亡があったに違いない。しかし残念なことに本資料ではそれを明らかにすることが出来なかった。

[今後の問題]

出土した人骨はすべて、完全な部分がないほどに破砕され、しかも大半が散逸・消失している。それが攪乱によるものとすれば、攪乱を受けていないと思われるＡ区下層出土の人骨についてみても、たしかに散逸・消失の程度はやや少ないが（第１表～３表参照）、全体として大差があるとはいえない。

一般に、火葬骨を蔵骨器に収納する場合、その焼骨は人為的に破砕される。その際、たとえば蔵骨器が木製や植物性の籠のようなものであれば、残らないことが多い。あるいは、火葬後に蔵骨器に収納すると否とにかかわらず、破砕する習わしだけが残った可能性もある。実際にそのようなことがあったのだろうか。「土に返す」という信仰から、現代でもそのようにしている、関西の都市郊外のある墓地を筆者は経験している。したがって土俗的・民俗学的に検討してみる必要があろう。

人骨調査中に、偶然１個の長管骨破片に鼠害らしきものがあるのを見つけた。これがもし鼠の齧痕ならば、土葬した後に焼かれたと考えられる。その理由として、火葬以前の古い土葬人骨の一部が、後世の火葬時に混じり込んだ二次的なものかもしれない。しかし、後日、改めてくわしく調べた結果、鼠害とは断定するまでにはいたらなかった。筆者は、愛知県下で、ほぼ同時期の多くの遺跡で出土した土葬人骨に鼠害例が多い事実に見慣れ過ぎていたためかもしれない。将来、同じような事例があったときのために、記録に留めておきたい。

約400年にわたり営まれた横尾墳墓群のその時期は、中世から近世にむかう動乱期でもあった。その横尾墳墓群の背景には、近世の記録（上掲。荒井勘之丞「伊勢寺記」のなかの「寄墓日記」、文化12年）の伝承にもあるように、「往昔隣郷五十四ヶ村の惣墓所」だったのだろう。いずれも比較的平穏で安定した家族主義的村落だったすがたがしのばれる。

偶然残存した下顎骨前内面片にオトガイ舌骨筋の付着部の結節Spina musculi genioglossiがみられ、その形状もよく似ている。この特徴は中世人骨では比較的頻度の低いものであるが、３個体で発見されている。かれらは同族のものであったかもしれない。

それにしても、伊勢湾・知多湾・渥美湾とそれに接する内陸部一帯を俯瞰するとき、火葬や土葬の習俗、つまり宗教的・文化的に異なる文化圏がかなり複雑に入り組んでいたことがうかがわれ、その分布を明らかにしていくことは、宗教学的にはもちろん、民俗学的にも興味のあるところである。それぞれの事例報告もかなりの量に達しているはずゆえ、改めてこのような観点からの分布を吟味することも、ある程度可能であろう。

	a		b		c		計	
	n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)
Ａ区上層	3	(1.46)	89	(43.20)	114	(55.34)	206	(36.98)
Ａ区下層	1	(0.68)	135	(92.47)	10	(6.85)	146	(26.21)
Ｂ区	0	(0.00)	55	(41.04)	79	(58.96)	134	(24.06)
Ｃ区	0	(0.00)	28	(39.44)	43	(60.56)	71	(12.75)
計	4	(0.72)	307	(55.12)	246	(44.17)	557	

第１表　各墓域ごとの人骨保存状況

	a		b		c		計	
	n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)
Ａ区上層	3	(75.00)	89	(29.00)	114	(46.34)	206	(36.98)
Ａ区下層	1	(25.00)	135	(43.97)	10	(4.07)	146	(26.21)
Ｂ区	0	(0.00)	55	(17.92)	79	(32.11)	134	(24.06)
Ｃ区	0	(0.00)	28	(9.12)	43	(17.48)	71	(12.75)
計	4		307		246		557	

第２表　人骨保存状況（各墓域間における比較）

	性不明			推定♂	推定♀	♂	♀	
	未成人	成人	年齢不明	成人	成人	成人	成人	計
Ａ区上層	0	111	69	6	6	13	1	206
Ａ区下層	5	82	25	15	7	10	2	145
Ｂ区	1	77	46	2	2	1	1	134
Ｃ区	1	28	39	2	1	0	0	71
計	7	298	179	25	16	24	4	556

第３表　性・年令別分類表

X．附篇（２）

横尾墳墓群の考古地磁気測定

富山大学理学部地球科学教室

広岡公夫
吉村勝之
森定　尚

はじめに

地磁気の方向は場所によって違っており、しかも、その方向をゆっくりと変えているので、同一地点でも時代によって地磁気の方向は違っている。この地磁気のゆっくりとした時間的変化を地磁気永年変化と呼んでいる。日本で地磁気の偏角・伏角を直接観測した最も古い記録は、1883年のものであり、世界でも、ロンドンの1580年頃の記録まで遡れるだけである。高々400年余りしか記録がない。

一方、土にはFe_2O_3（磁鉄鉱）やFe_3O_4（赤鉄鉱）などの鉄酸化物が１～３％程度含まれている。これらは磁気テープの材料と同じ仲間で、磁石になる（磁化をもつ）ことができる磁性鉱物である。磁性鉱物を高温にまで加熱すると、それぞれの鉱物に固有の或温度以上では磁性（磁石になる性質）を失う。この温度をキューリー点という。磁鉄鉱のキューリー点は578℃、赤鉄鉱は670℃である。磁場が作用している場所で、キューリー点以上の高温で磁性を失った状態から磁性鉱物を冷却すると、キューリー点の温度に達した瞬間に、再び磁性が蘇り、作用している磁場の方向に磁化を獲得する。この磁化を熱残留磁化という。遺跡に残る窯跡や炉跡、焼土坑などの焼土は、かつて、昔の人が火を焚き高温に熱した後、地球磁場中で冷えているので、当時の地球磁場の方向の熱残留磁化を持っており、昔の地磁気を記録している磁気テープなのである。過去の地磁気の化石あるともいえる。

時代のよく分かったこのような焼土の熱残留磁化を測定すると、観測記録がなかった古い時代の地磁気の方向を知ることができる。西南日本各地の遺跡の焼土の熱残留磁化を測定した結果、過去2000年間について、地磁気永年変化の様子が相当詳しく分かってきた（Hirooka, 1971；広岡、1977）。考古遺跡の焼土の熱残留磁化の測定から明らかになった、歴史・考古時代の地磁気変動を考古地磁気永年変化という。

遺跡焼土の熱残留磁化方向を西南日本の過去2000年間の考古磁気永年変化と照合して、永年変化曲線のどの年代の部分に近い磁化方向であるかを調べると、その焼土が焼かれた年代を決めることができる。これが考古地磁気法である。

測定試料の採取

地球磁場の方向の永年変化は、過去2000年間に最大でも約30°しか変らない小さなものなので、最初に焼土を試料として採取するときの焼土の向きが、遺構の中でどのようになっていたかを知る方位測定の精度が、年代推定の精度を左右する。したがって、できるだけ高精度の定方位試料を採取する事が望ましい。しかし、１個の試料に何時間も要するようでは実用にならない。高精度で短時間で試料採取ができなければならない。

現在、私たちの研究室で用いている試料採取法は、次のような手順で行なわれている。

１）よく焼けた部分を選び、動かないように注意しながら、こぶし大の焼土の周りに深さ数cmの溝を掘り、試料とする焼土を削りだす。

２）削りだした焼土に石膏をかけて固め、表面に石膏の平面を作る。

３）石膏平面の最大傾斜線の方位と傾斜角を測定し、方位を示すマークを平面上に記入する。このときの方位測定の精度が年代に大きく響くので、できるだけ精密に測らなければならない。方位の測定には考古地磁気試料の採取用に特別に設計された改造クリノメータを用いている。

４）石膏で固めた焼土試料を遺構から切り離す。

５）切り離した試料の裏面を石膏で覆い、紙に包んで研究室に持ち帰る。このような試料を１つの遺構から十数個採取する。熱残留磁化を測定する磁力計は、34ｍｍ×34ｍｍ×34ｍｍの立方体の試料を測るように設計されているので、方位の測定を行なった平面を基準にして、その大きさの立方体に、ダイヤモンド・カッターで切断、整形する。もちろん、切断面は測定中にくずれないように薄い石膏で覆い補強しておく。

今回の横尾墳墓群では、Ａ地区６箇所、Ｂ地区２箇所の土坑から試料を得た。採取試料の総数は84個

にのぼる。各遺構の採取試料個数および試料番号は次の通りである。

Ａ地区

ＳＫ570　：11個（試料番号Ｃ１　11～21）

ＳＫ501　：10個（試料番号Ｃ１　1～10）

ＳＫ567　：10個（試料番号Ｃ１　71～80）

ＳＫ568　：11個（試料番号Ｃ１　41～51）

ＳＫ558　：10個（試料番号Ｃ１　31～40）

ＳＫ581　：11個（試料番号Ｃ１　81～91）

Ｂ地区

ＳＫ664　：10個（試料番号Ｃ１　101～110）

ＳＫ608　：11個（試料番号Ｃ１　111～121）

熱残留磁化の測定

測定試料の残留磁化は夏原技研製リング・コア型スピナー磁力計（ＳMM85型）を用いて測定した。残留磁化測定の結果得られた個々の試料の偏角、伏角、磁化強度は、第４～11表に示されている。磁化ベクトルを水平面に投影した水平分力が真北からずれている角度を偏角といい、東にずれるのを正にとる。伏角は磁化ベクトルが水平面からどれくらい下に傾いているかを示す角度である。過去2000年間に、偏角は－18°（西偏）から＋15°（東偏）の間で変化し、伏角は35°から60°の間で変っている。表中に＊印のついている試料は、磁化方向が同じサンプルから得られた残りの測定試料と磁化方向が大きく異なっているために、次に述べる平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したものであることを示す。Ａ地区の土坑ＳＫ501の結果を見ると、統計計算の時に除外したサンプルが多いことが分かる。また、磁化強度は、通常のよく焼けた陶磁器の窯跡の場合は10^{-3}emu/gのオーダーであるのに対して、２桁弱い。

各遺構毎に、フッシャーの統計法（Fisher,1953）を用いて、平均偏角、平均伏角、95％レベルの信頼角（α_{95}）、精度変数（Ｋ）を計算し、考古地磁気データとする。今回の測定で得られた横尾墳墓群の考古地磁気データは、第12表にまとめられている。

考古地磁気年代は、各遺構の平均偏角、平均伏角およびα_{95}を、考古地磁気永年変化の標準曲線に記入し、その図から求める。この時、用いた標準曲線が過去の地磁気の永年変化を忠実に表わしているという前提に立っているので、もし、本当の地磁気の変動がこの標準曲線と違っていたら、その違いの分だけ年代がずれることになる。13世紀から17世紀に関してはその可能性があり、数十年から百年程度推定年代が古すぎるのではないかという指摘がなされている。これは、この時代の年代の確かなデータが少ないことに起因していて、今後に残された問題である。したがって、今回得られた年代値も数十年から百年後へずれることが有り得る。

第１、２図に考古地磁気永年変化曲線と今回の測定結果が示してある。

考古地磁気推定年代

用いた考古地磁気永年変化曲線が正しいという仮定に立って、第１、２図から各土坑の考古地磁気年代を推定すると次のようになる。

Ａ地区

ＳＫ570　：A.D.700±100年

（又はA.D.1140±70年）

ＳＫ501　：A.D.920±150年

ＳＫ567　：A.D.1300＋50年

－100年

ＳＫ568　：A.D.1240±50年

ＳＫ558　：A.D.1230±70年

ＳＫ581　：A.D.1150±80年

Ｂ地区

ＳＫ668　：A.D.1210±140年

ＳＫ608　：A.D.1370＋60年

－370年

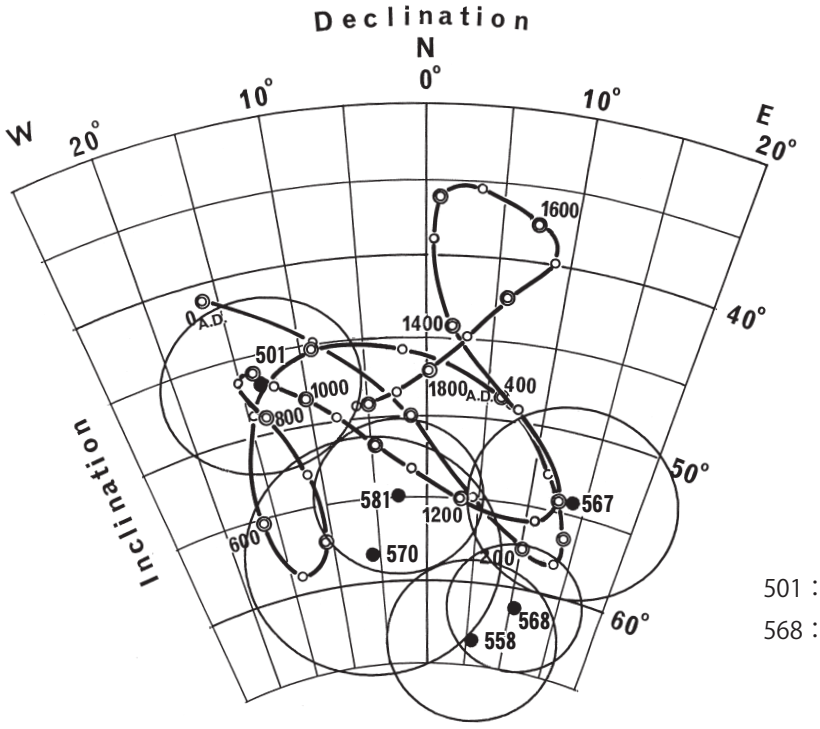
磁化方向のばらつきが非常に大きかったので、推定年代の幅が大きくなった。また、SK501では、偏角が大きく西偏し、伏角が浅いので、考古地磁気学的には10世紀の年代になる。

引用文献

Fisher, R. A. (1953) Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, vol. 217, 295-305.

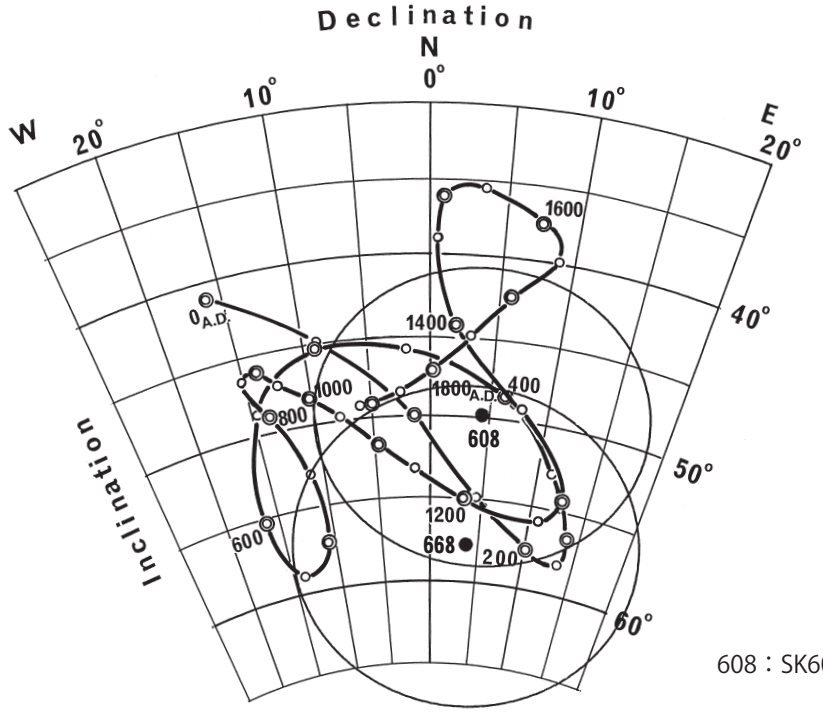
Hirooka, K. (1971) Archaeomagneticstudy for the past 2,000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., vol. 38, 167-207.

広岡公夫（1977）考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、vol.15,200-203.



501：SK501　　558：SK558　　567：SK567
568：SK568　　570：SK570　　581：SK581

第 1 図　西南日本の過去 2,000 年間の考古地磁気永年変化と横尾墳墓群Ａ地区の考古地磁気測定結果



608：SK608　　668：SK668

第 2 図　西南日本の過去 2,000 年間の考古地磁気永年変化と横尾墳墓群Ｂ地区の考古地磁気測定結果

試料番号		偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10^{-5} emu/g)
C1	11	-19.9	67.6	1.74
	12	0.2	74.0	1.53
	13	-8.9	48.4	1.20
	14	-6.8	54.0	7.90
	15	-10.6	40.1	0.488
	16	-14.5	56.1	1.63
	17	-16.0	51.8	1.16
	18	-1.5	58.6	0.224
	＊19	-70.5	73.8	0.667
	20	28.3	62.6	0.953
	21	5.4	64.6	1.06

＊印は統計計算の際に除外したもの

第４表　Ａ地区　ＳＫ 570 の磁化測定結果

試料番号		偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10^{-5} emu/g)
C1	＊1	-35.4	35.6	1.39
	＊2	-21.4	28.7	1.80
	3	-8.3	50.8	12.50
	4	-19.6	43.2	1.61
	5	-13.1	46.3	4.08
	6	-18.5	43.6	1.59
	7	-19.3	44.5	5.10
	8	1.1	52.0	78.20
	＊9	-38.3	28.3	4.19
	＊10	144.2	24.7	4.17

＊印は統計計算の際に除外したもの

第５表　Ａ地区　ＳＫ 501 の磁化測定結果

試料番号		偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10^{-5} emu/g)
C1	71	1.2	56.5	9.97
	72	-4.1	53.9	11.90
	73	-5.8	55.1	9.41
	74	19.3	39.4	8.63
	75	14.6	48.3	14.40
	76	16.1	48.6	4.11
	77	16.9	59.4	8.04
	78	26.2	57.3	3.57
	79	31.6	58.5	5.18
	80	25.9	59.3	5.84

第６表　Ａ地区　ＳＫ 567 の磁化測定結果

試料番号		偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10^{-5} emu/g)
C1	41	12.9	51.1	2.49
	42	4.9	61.9	7.30
	43	18.4	55.5	7.76
	44	13.3	64.7	5.45
	45	-2.8	65.7	3.65
	46	10.5	61.3	6.86
	47	-2.2	59.7	4.95
	48	13.9	72.6	2.55
	49	6.5	58.9	1.61
	50	15.4	62.3	4.20
	51	21.5	57.4	6.41

第７表　Ａ地区　ＳＫ 568 の磁化測定結果

試料番号		偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10^{-5} emu/g)
C1	31	10.7	56.1	96.5
	32	-4.5	60.3	3.75
	33	28.6	60.8	0.728
	34	15.6	62.1	4.82
	35	7.4	67.4	4.14
	36	-5.4	70.2	3.9
	37	-20.4	73.9	6.41
	38	0.2	60.5	3.87
	39	-1.5	61.0	15.6
	40	12.9	57.6	95.1

第８表　Ａ地区　ＳＫ 558 の磁化測定結果

試料番号		偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10^{-5} emu/g)
C1	81	10.8	49.3	17.8
	82	16.9	52.0	7.84
	＊83	31.5	75.4	3.32
	84	2.2	48.9	2.69
	85	-9.5	56.9	4.79
	86	-16.1	54.8	1.42
	87	-14.3	53.6	2.13
	88	-7.1	58.1	5.18
	89	-7.8	60.3	5.23
	90	9.1	57.1	6.11
	91	-14.4	52.7	2.64

第９表　Ａ地区　ＳＫ 581 の磁化測定結果

試料番号		偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10^{-5} emu/g)
C1	101	27.2	53.6	3.30
	102	8.4	58.1	6.68
	103	-10.8	41.7	5.13
	104	0.5	56.5	5.87
	105	-8.4	65.3	10.3
	106	-21.1	68.1	9.23
	107	27.4	33.7	2.38
	108	-32.7	57.1	5.39
	109	2.6	59.0	21.9
	110	33.7	67.3	7.40

第 10 表　Ｂ地区　ＳＫ 668 の磁化測定結果

試料番号		偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10^{-5} emu/g)
C1	111	1.5	42.5	4.00
	112	1.4	45.7	31.40
	113	7.9	47.1	7.86
	114	-15.2	38.5	3.57
	115	9.8	45.2	3.90
	116	14.9	47.0	3.60
	117	-30.8	38.1	5.97
	118	24.5	56.6	11.90
	＊119	-166.8	-4.0	2.33
	120	24.7	67.1	4.46
	121	29.2	56.8	6.35

＊印は統計計算の際に除外したもの

第 11 表　Ｂ地区　ＳＫ 608 の磁化測定結果

遺構名	N	D (°E)	I (°)	α_{95} (°)	K	平均磁化強度 (×10^{-5} emu/g)
Ａ地区ＳＫ570	10	-5.7	58.4	7.24	45.4	1.79
ＳＫ501	6	-13.4	47.0	5.50	149.1	17.2
ＳＫ567	10	14.1	54.2	5.88	68.2	8.11
ＳＫ568	11	10.5	61.2	3.84	141.5	4.84
ＳＫ558	10	5.9	63.5	4.83	100.7	23.5
ＳＫ581	10	-2.7	54.9	4.74	104.4	5.60
Ｂ地区ＳＫ665	10	3.8	57.8	9.75	25.4	7.76
ＳＫ608	10	4.4	49.8	9.26	28.1	8.30

第 12 表　横尾墳墓群の考古地磁気測定結果

【発掘調査担当者からのお詫び】

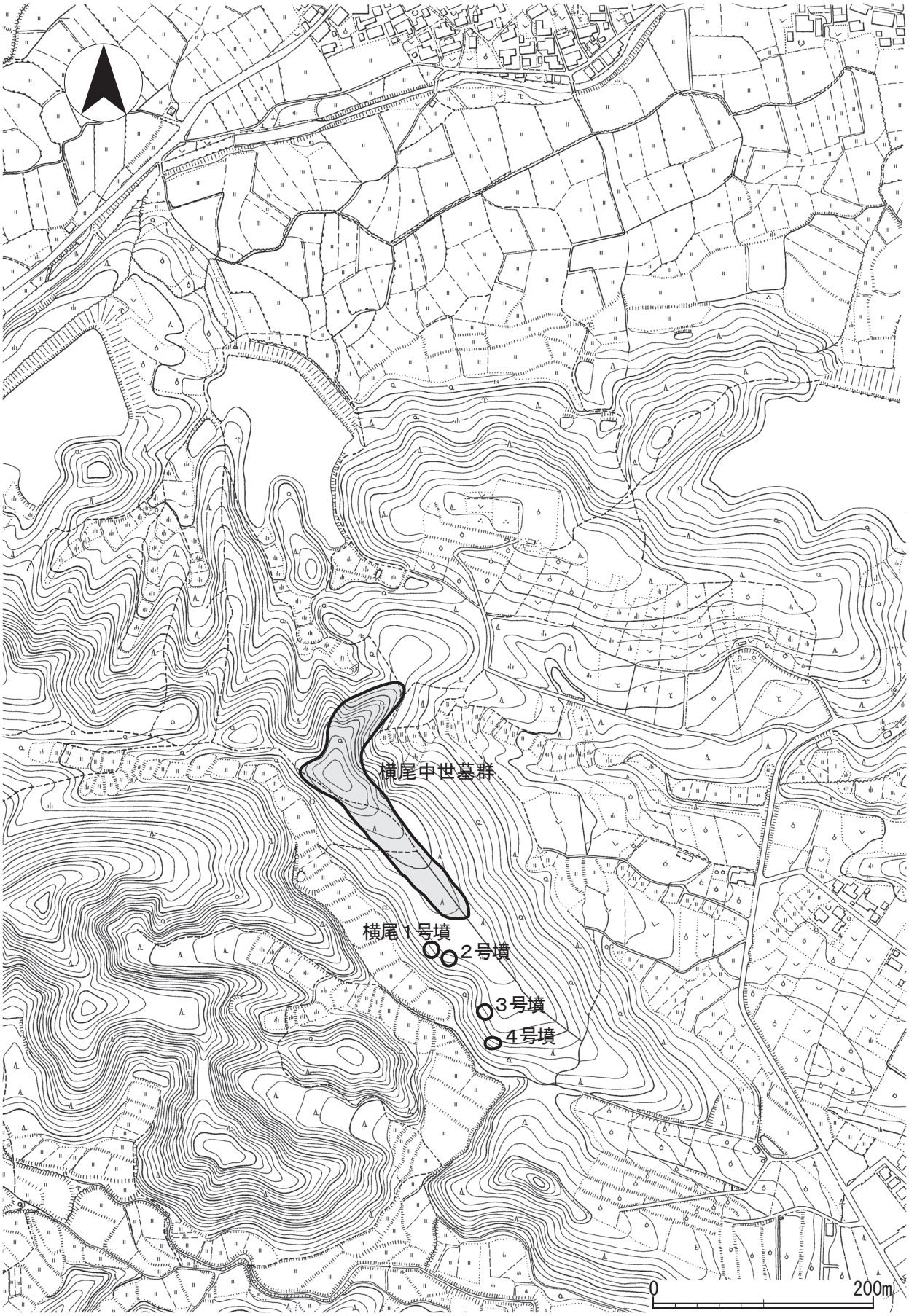
附編（１） 出土人骨の鑑定については、京都大学霊長類研究所の江原昭善教授（当時）に依頼をし、お手数を煩わせたことを記して感謝申し上げる。旧稿をそのまま掲載させて戴いたこと、報告本文中にその成果を十分生かし切れなかったことをお断り致して、お詫び申し上げたい。

附篇（２） 熱残留磁化測定に先立つ試料採取は、現地発掘調査中に実施できず、現地調査終了後、さらに一年近く放置した場所での試料採取であった。従って、厳密には必ずしも良好な試料ではないことをわれわれ関係者も十分に承知の上で、敢えて富山大学の広岡公夫教授に依頼したものである。そのことをここに併記して感謝申し上げたい。なお、遺構番号だけは今回新たな報告書番号に換えさせていただいた。即ち、

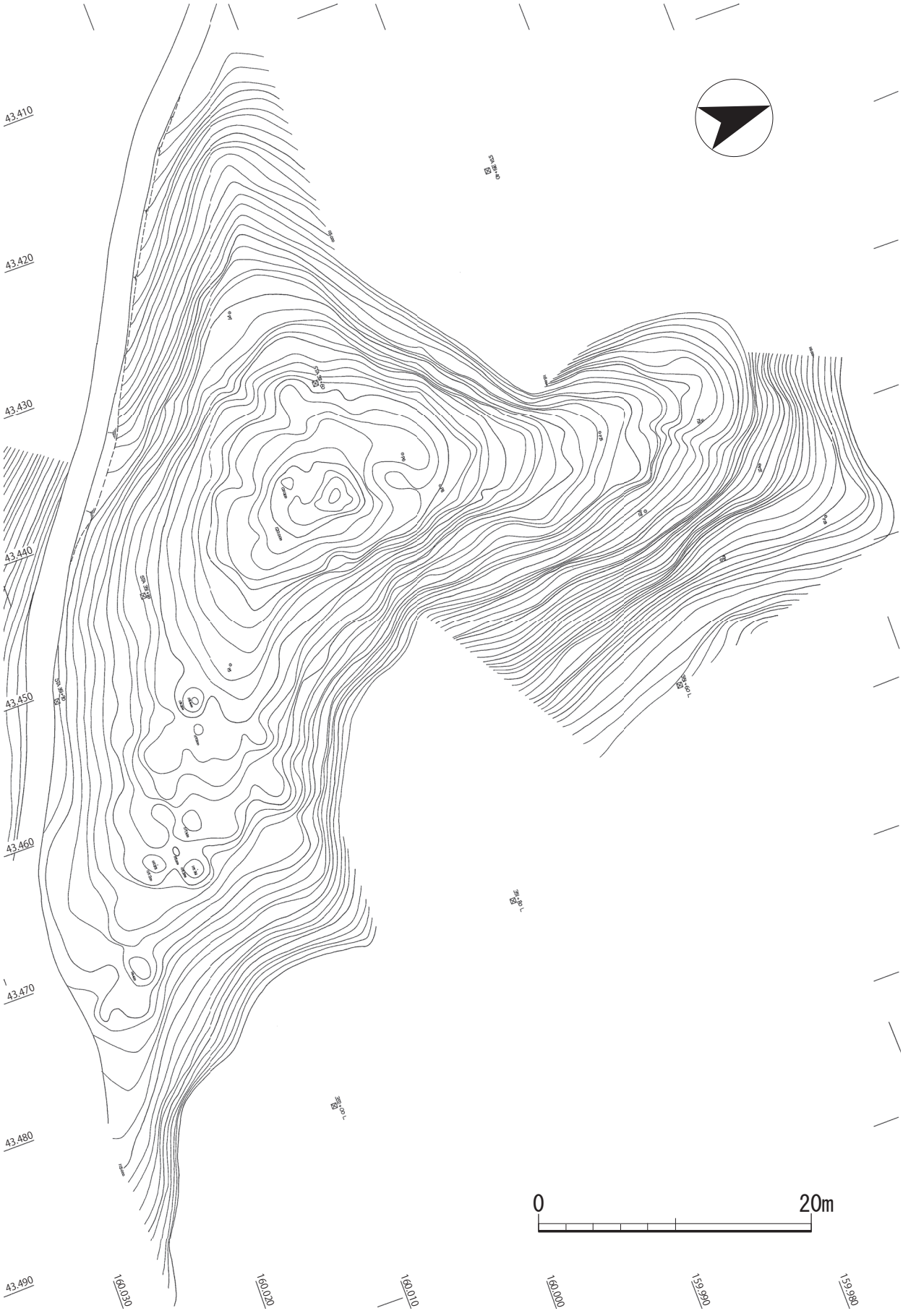
ＳＫ2→ＳＫ570、ＳＫ10→ＳＫ501、ＳＫ30→ＳＫ567、ＳＫ35→ＳＫ568、ＳＫ36→ＳＫ558、ＳＫ45→ＳＫ581、ＳＫ33→ＳＫ668、ＳＫ141→ＳＫ608　である。

（田阪・宮田）

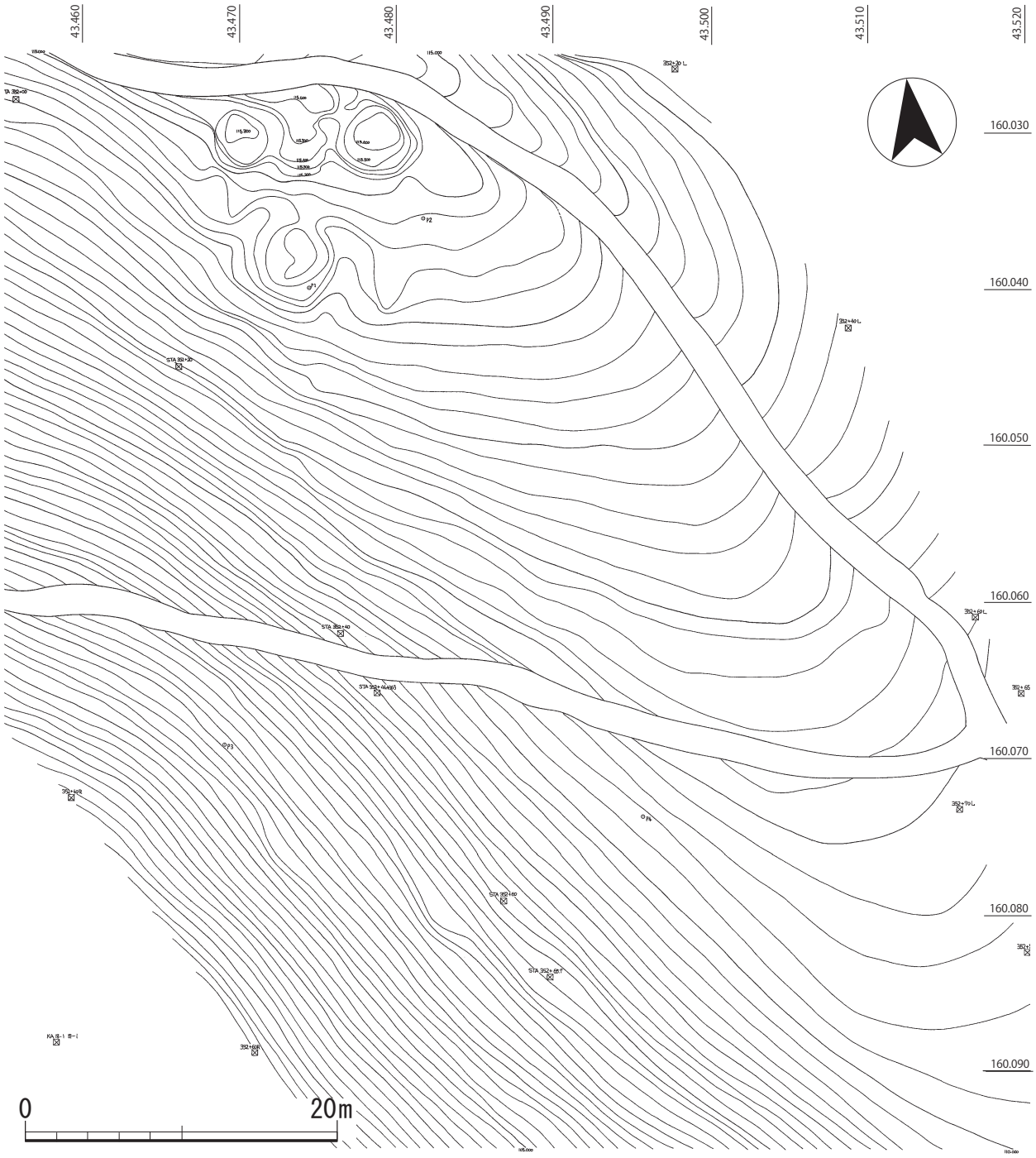
第３図　横尾墳墓群遺跡位置図（１：2,5000）



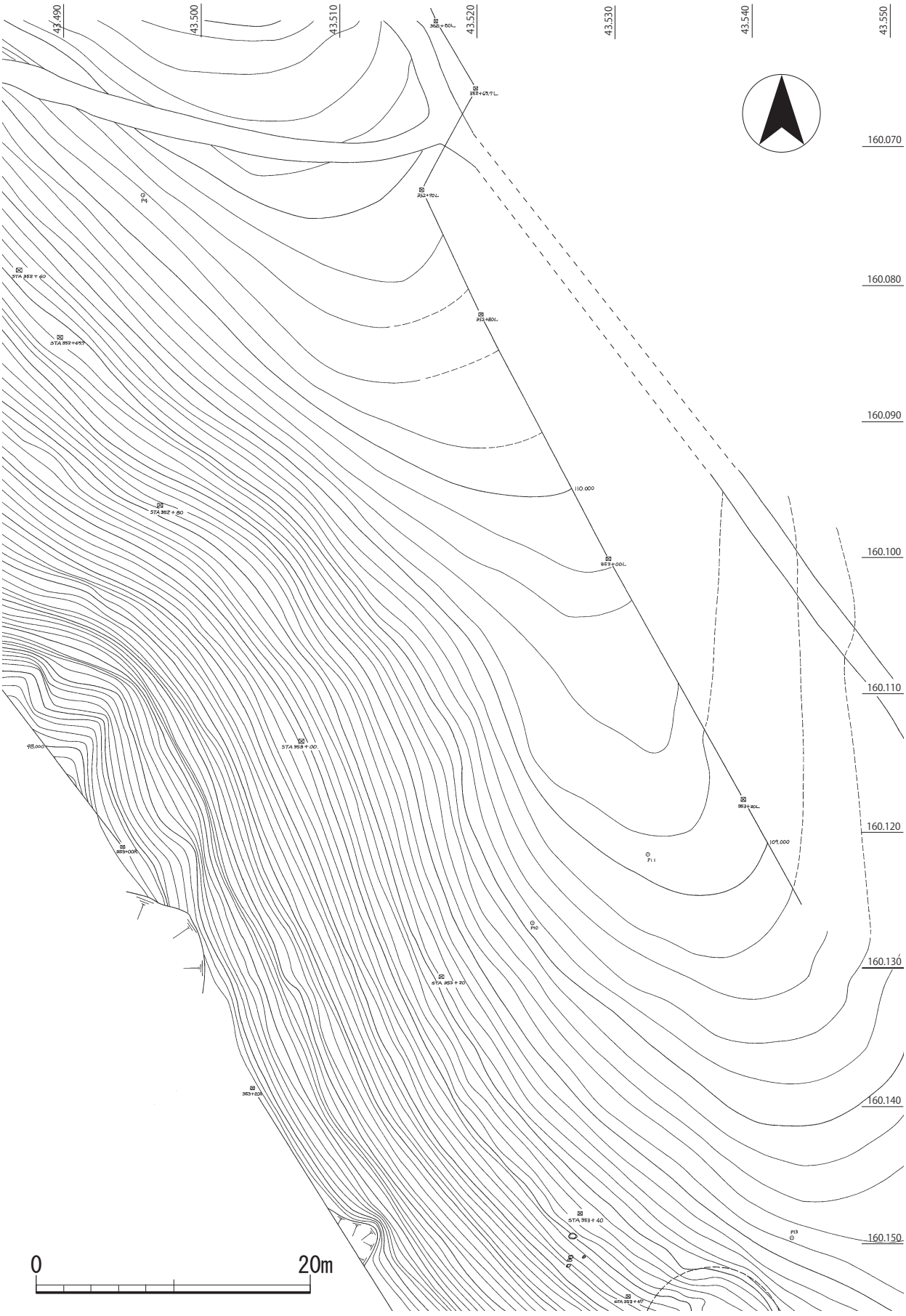
第４図　遺跡地形図（１：5,000）



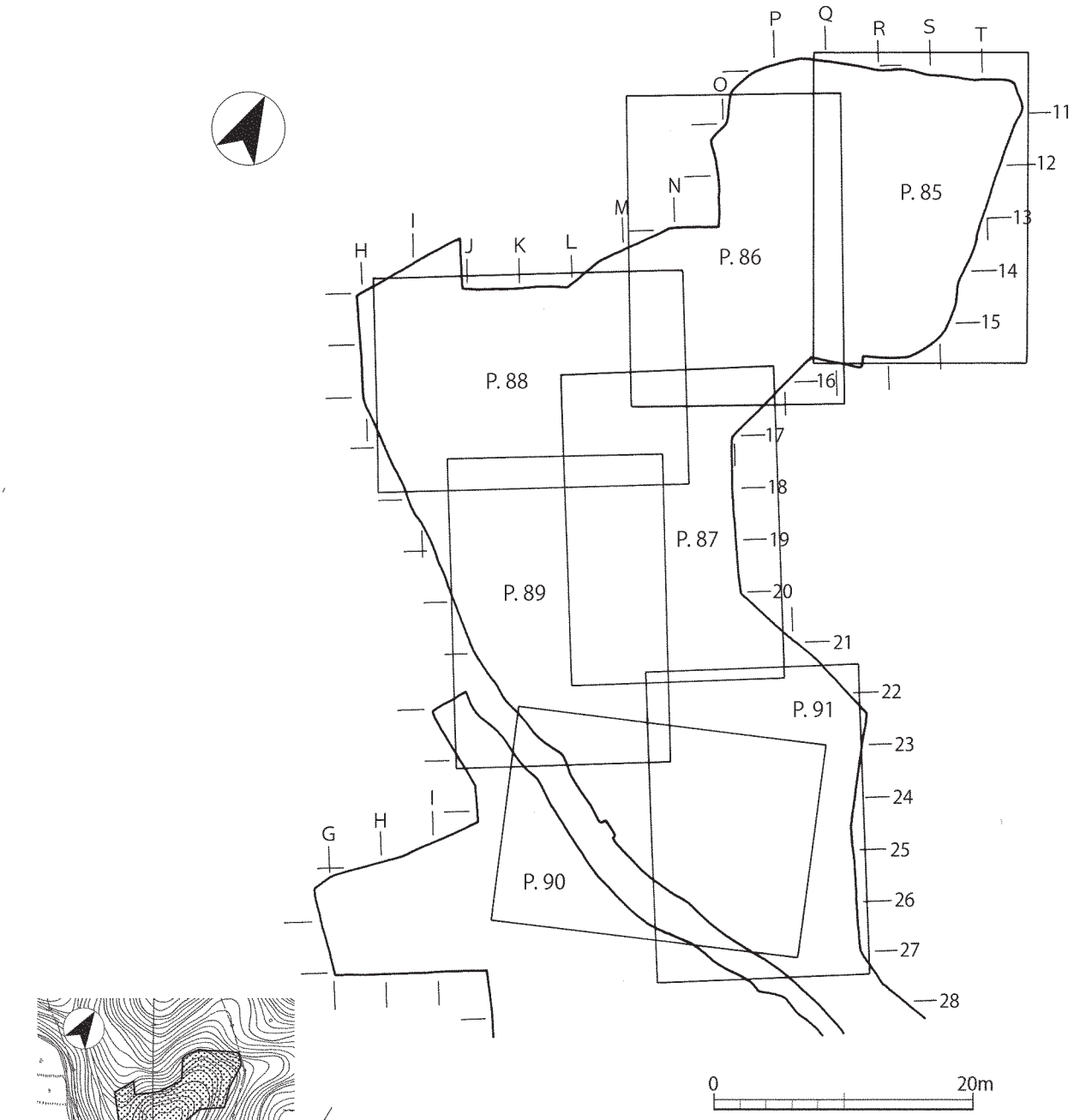
第 5 図　調査前地形測量図（A 地区）

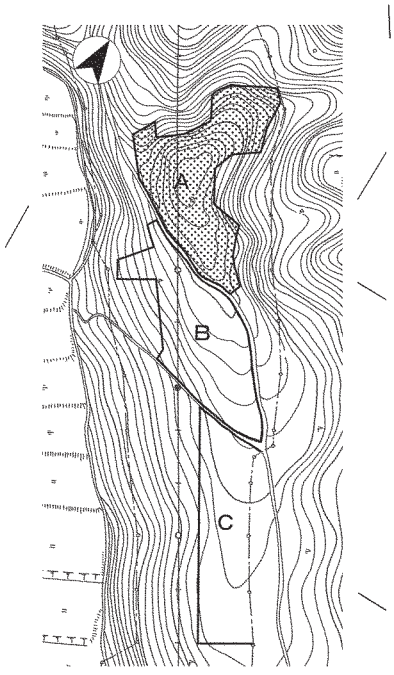


第６図　調査前地形測量図（Ｂ地区）



第７図　調査前地形測量図（Ｃ地区）

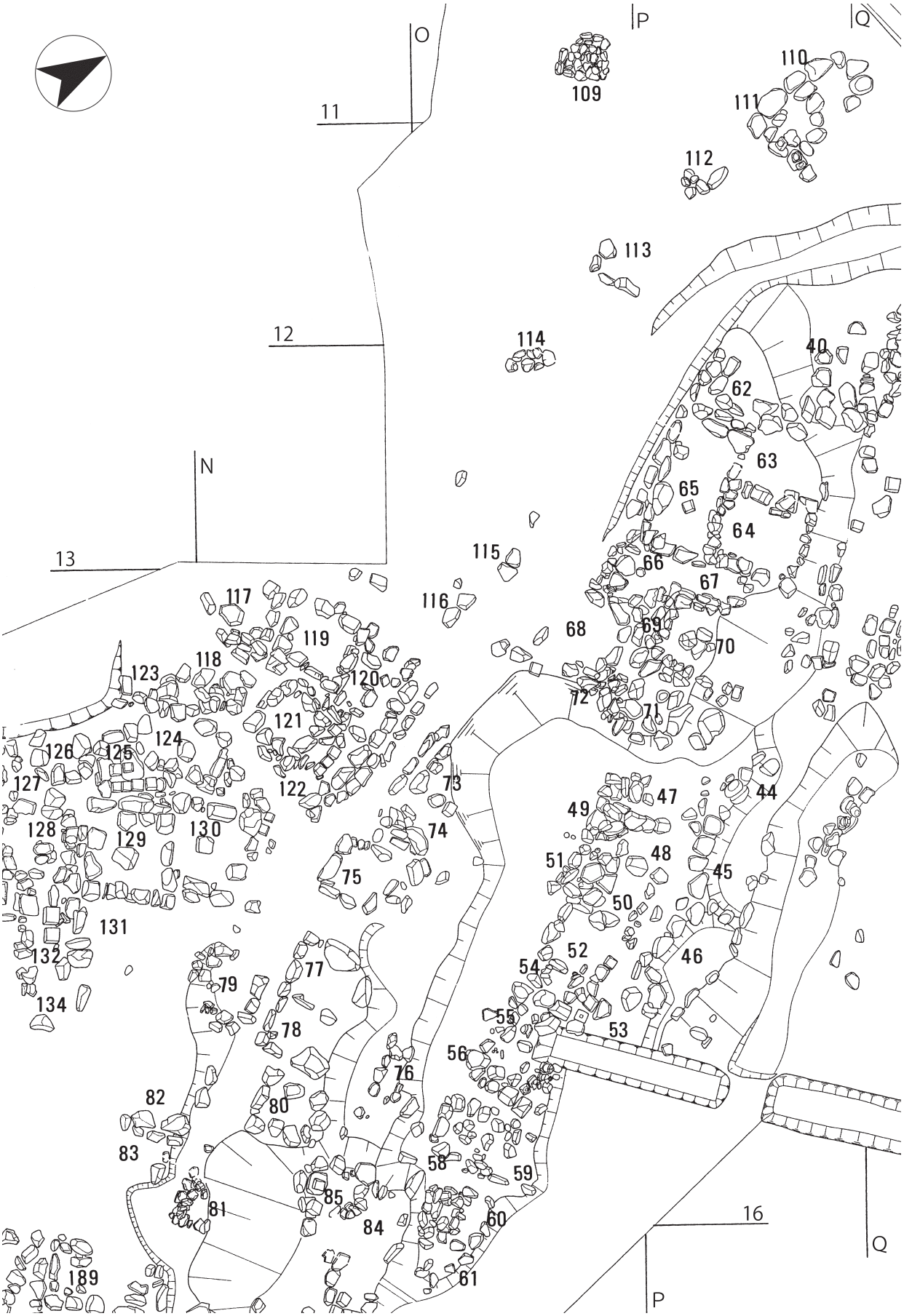




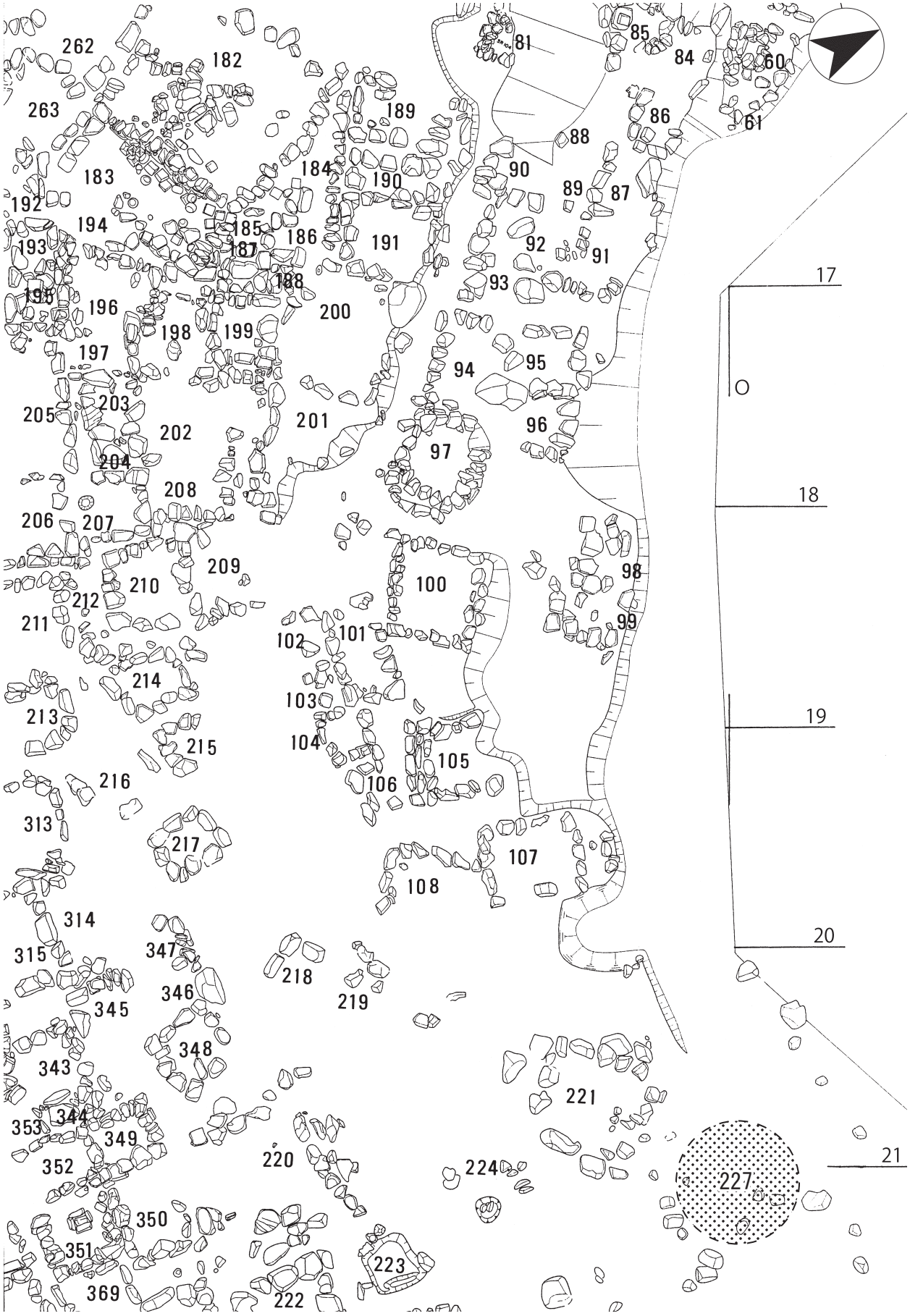
第８図　Ａ地区上層遺構平面図区割り図

第９図　Ａ地区上層全体遺構平面図　（1：200）

第 10 図　A 地区上層部分遺構平面図

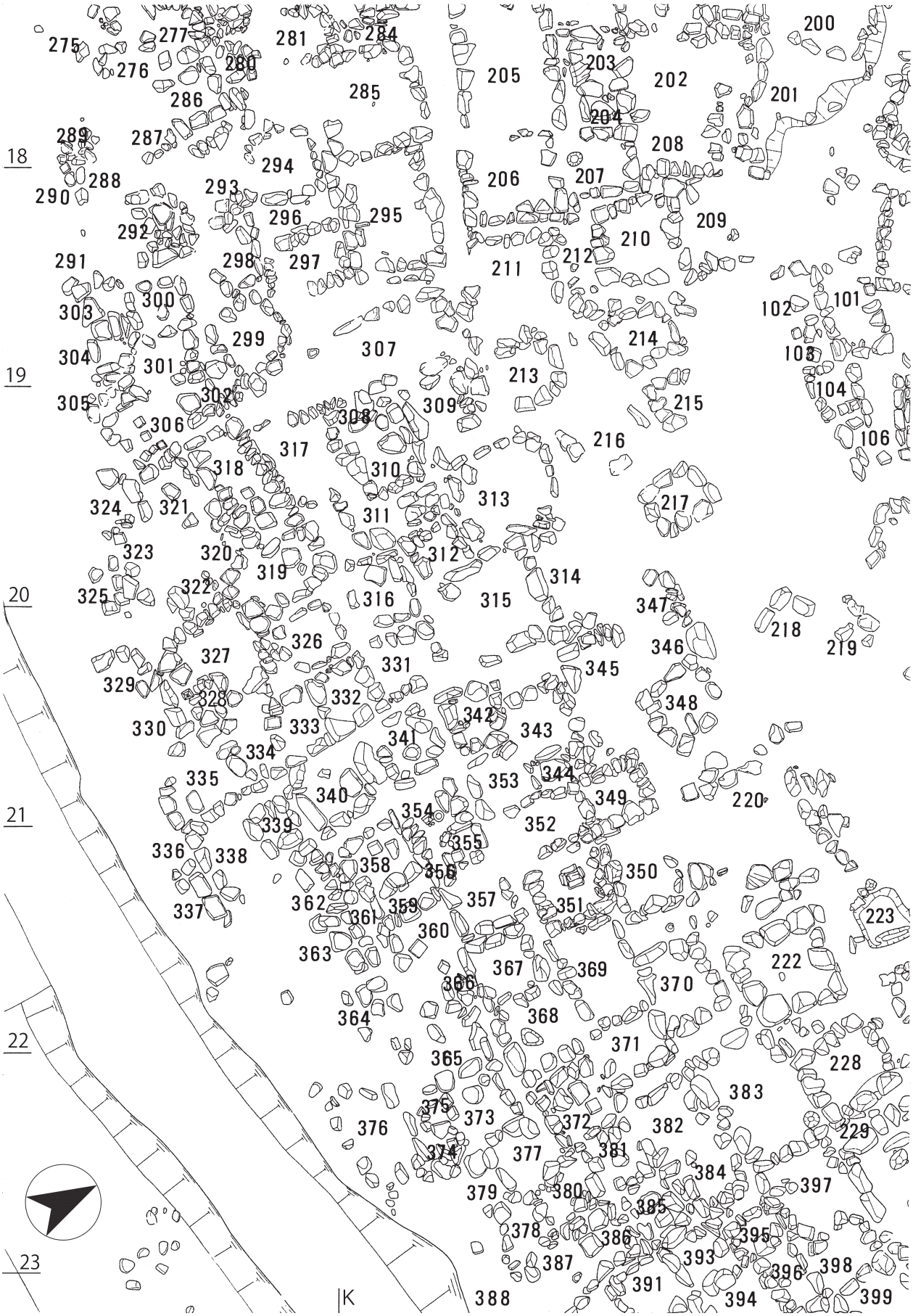


第 11 図　A 地区上層部分遺構平面図

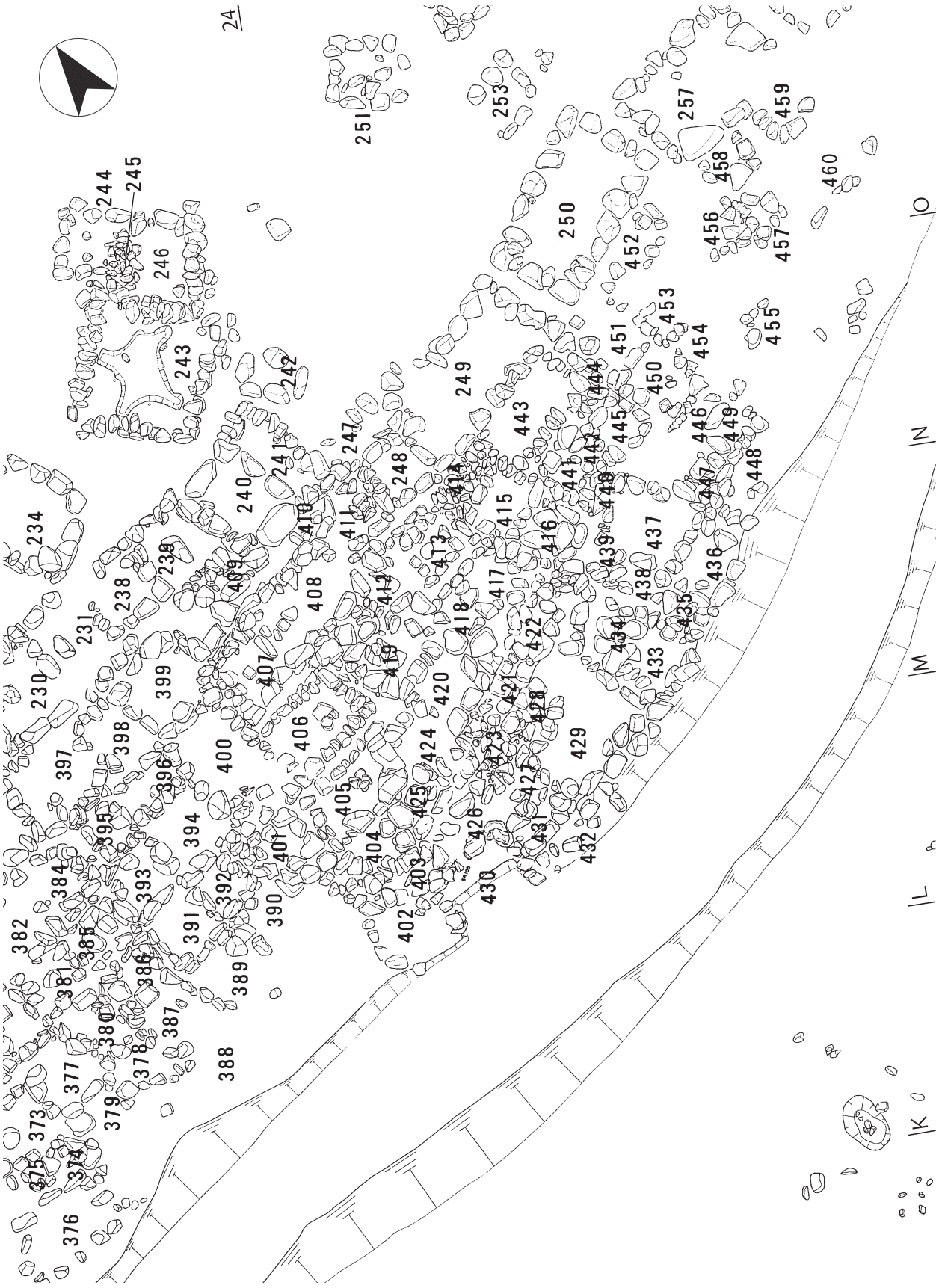


第 12 図　A 地区上層部分遺構平面図

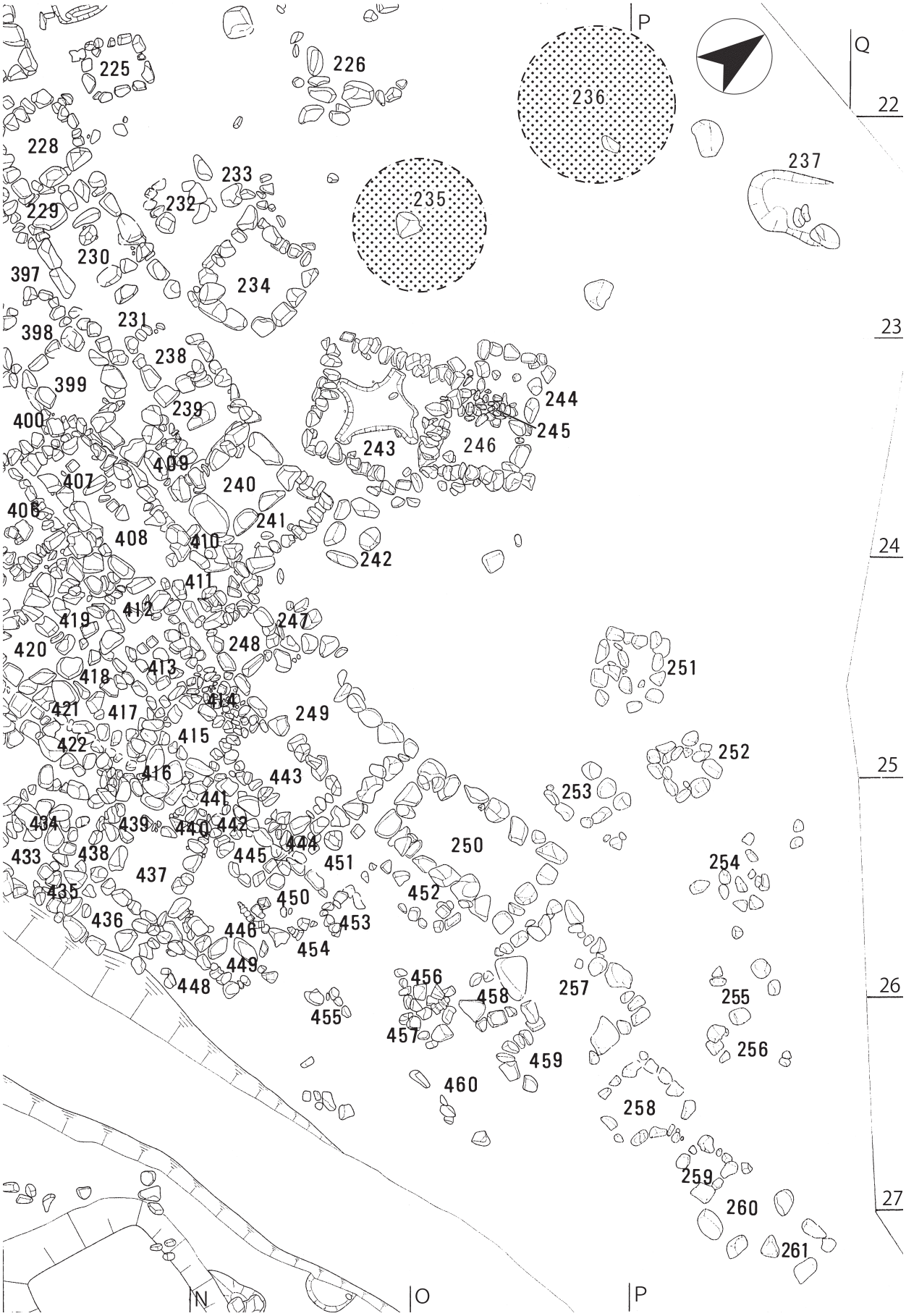
第 13 図　A 地区上層部分遺構平面図



第 14 図　A 地区上層部分遺構平面図

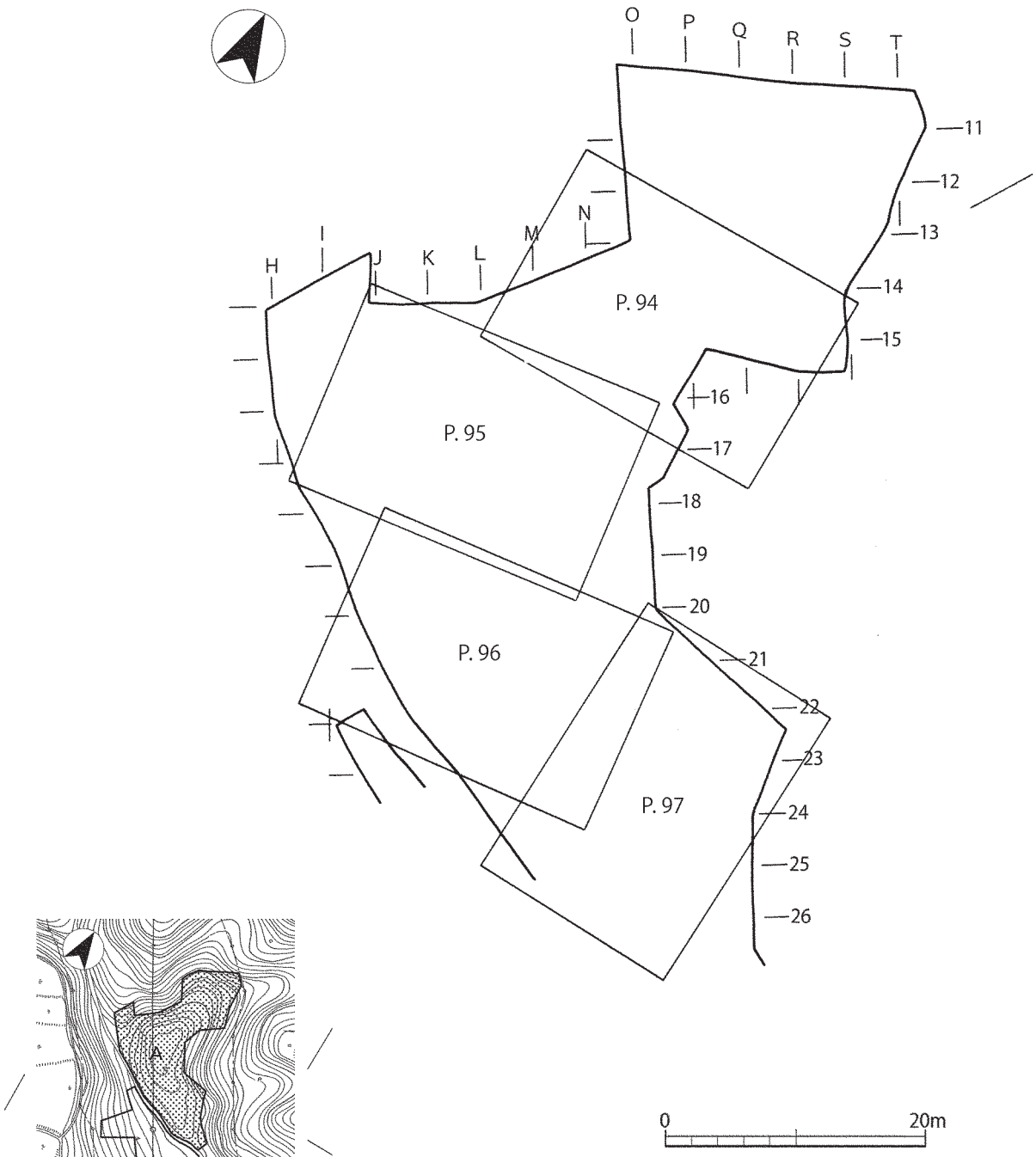


第 15 図　A 地区上層部分遺構平面図



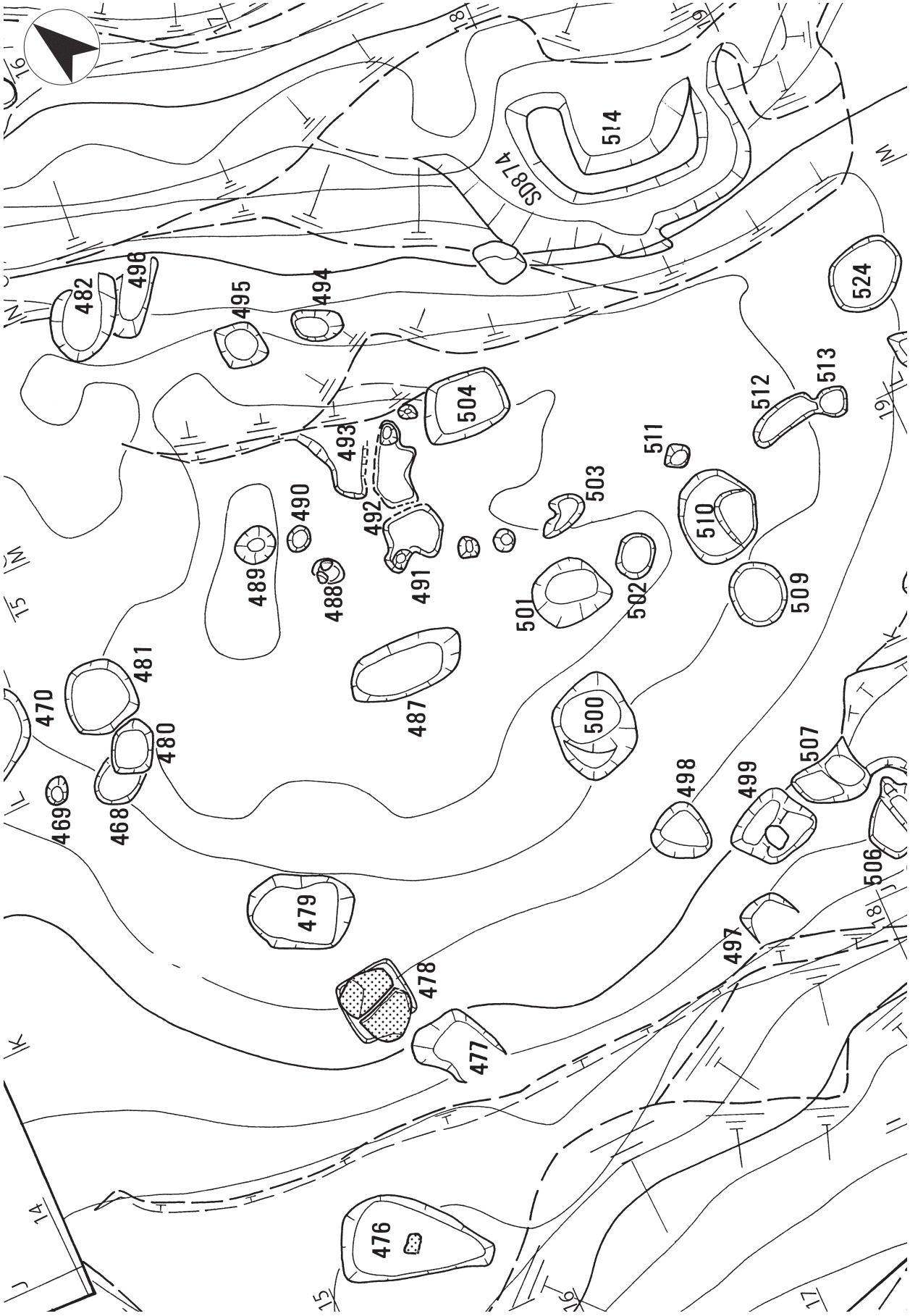
第 16 図　A 地区上層部分遺構平面図

第 17 図　A 地区下層全体遺構平面図

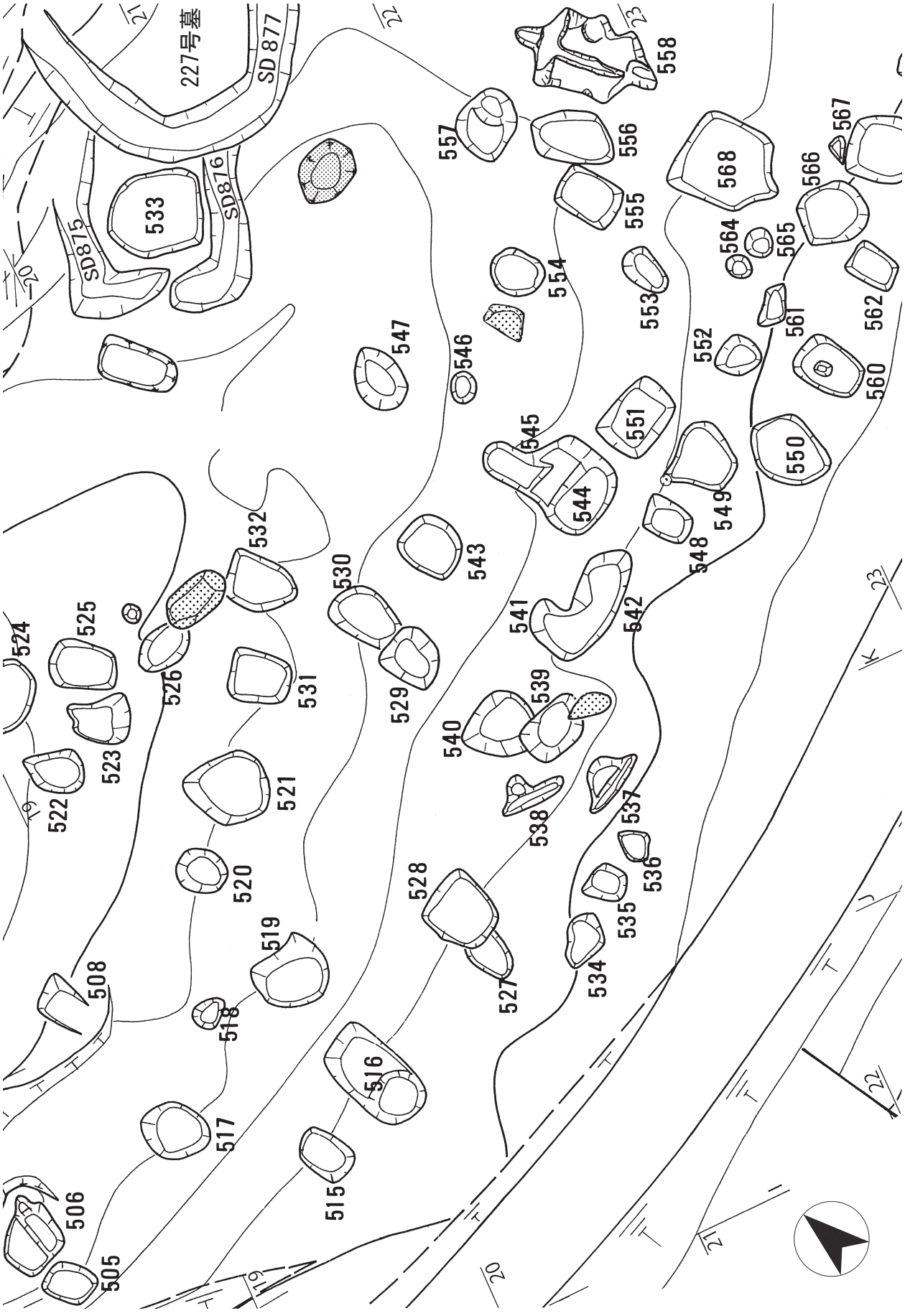


第 18 図　A 地区下層遺構平面区割り図

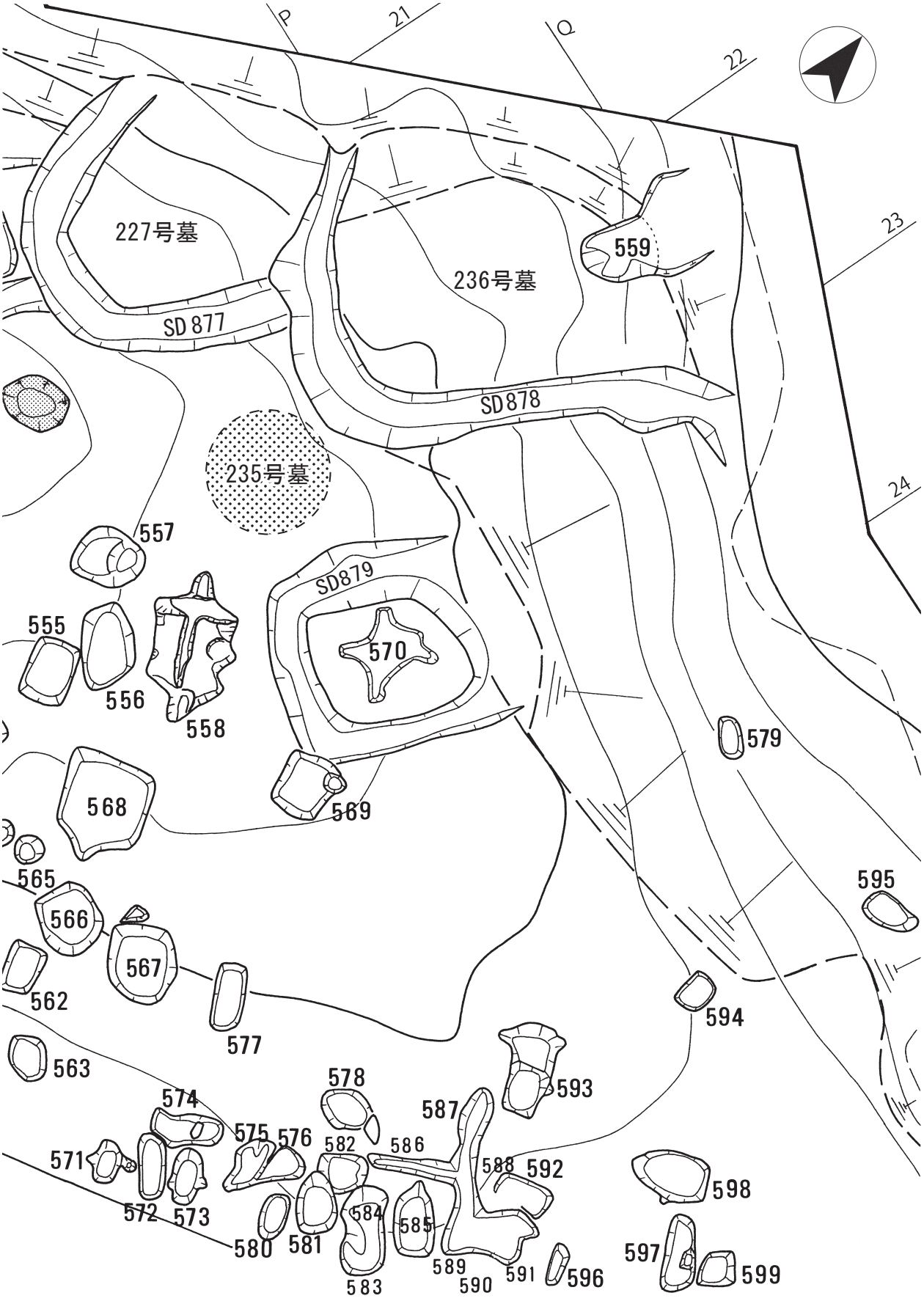
第 19 図　A 地区下層部分遺構平面図



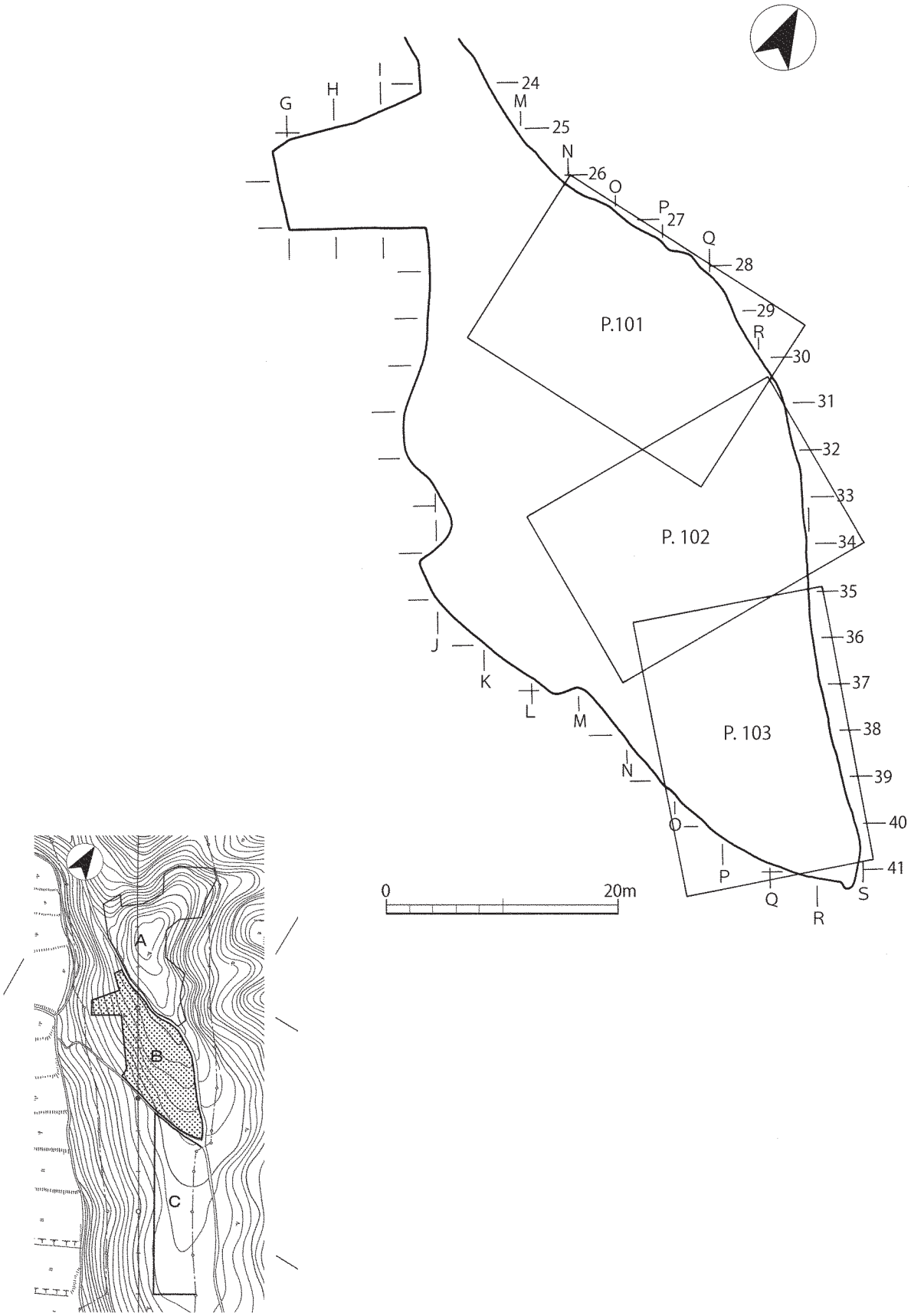
第 20 図　A 地区下層部分遺構平面図



第 21 図　A 地区下層部分遺構平面図

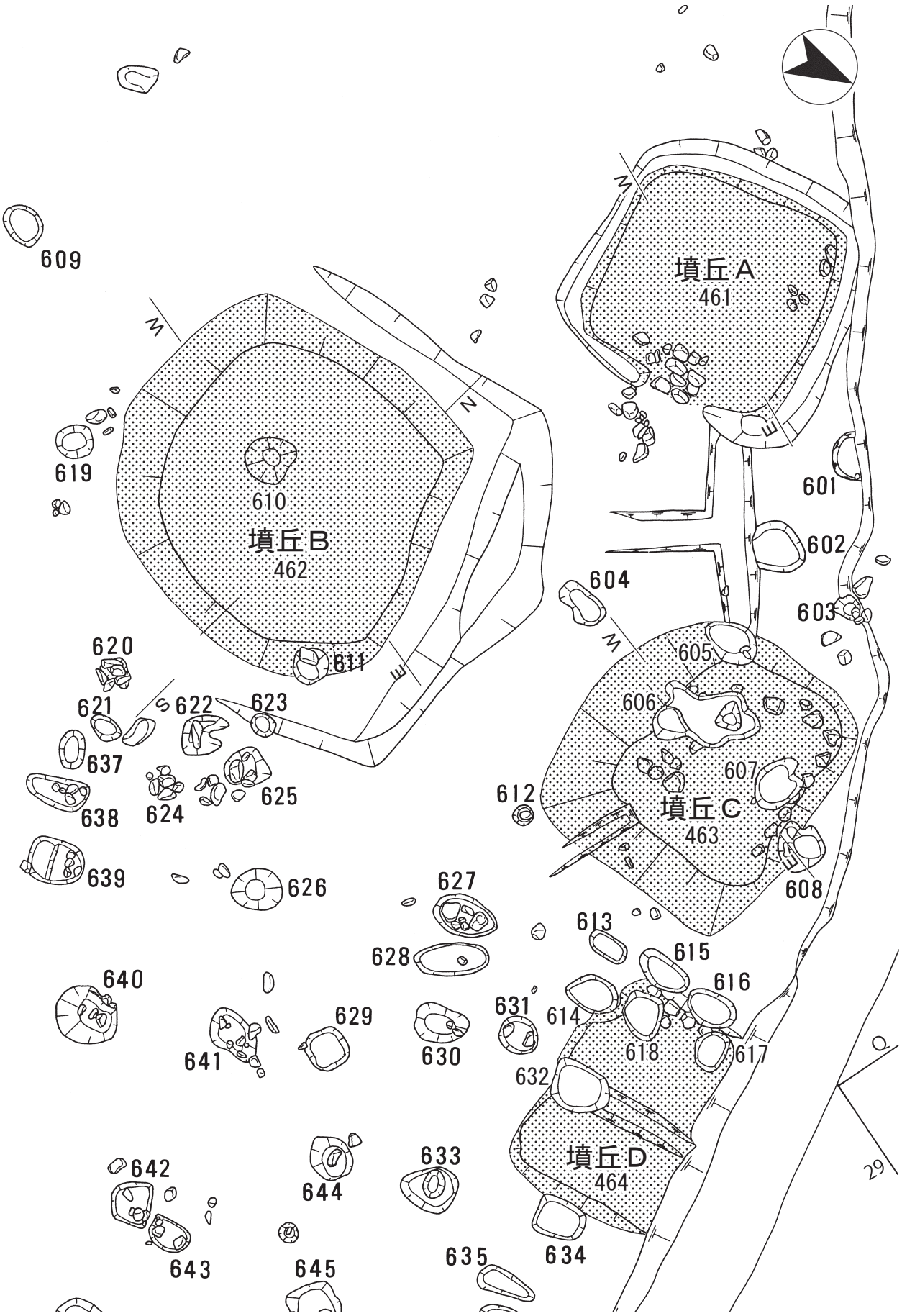


第 22 図　A 地区下層部分遺構平面図

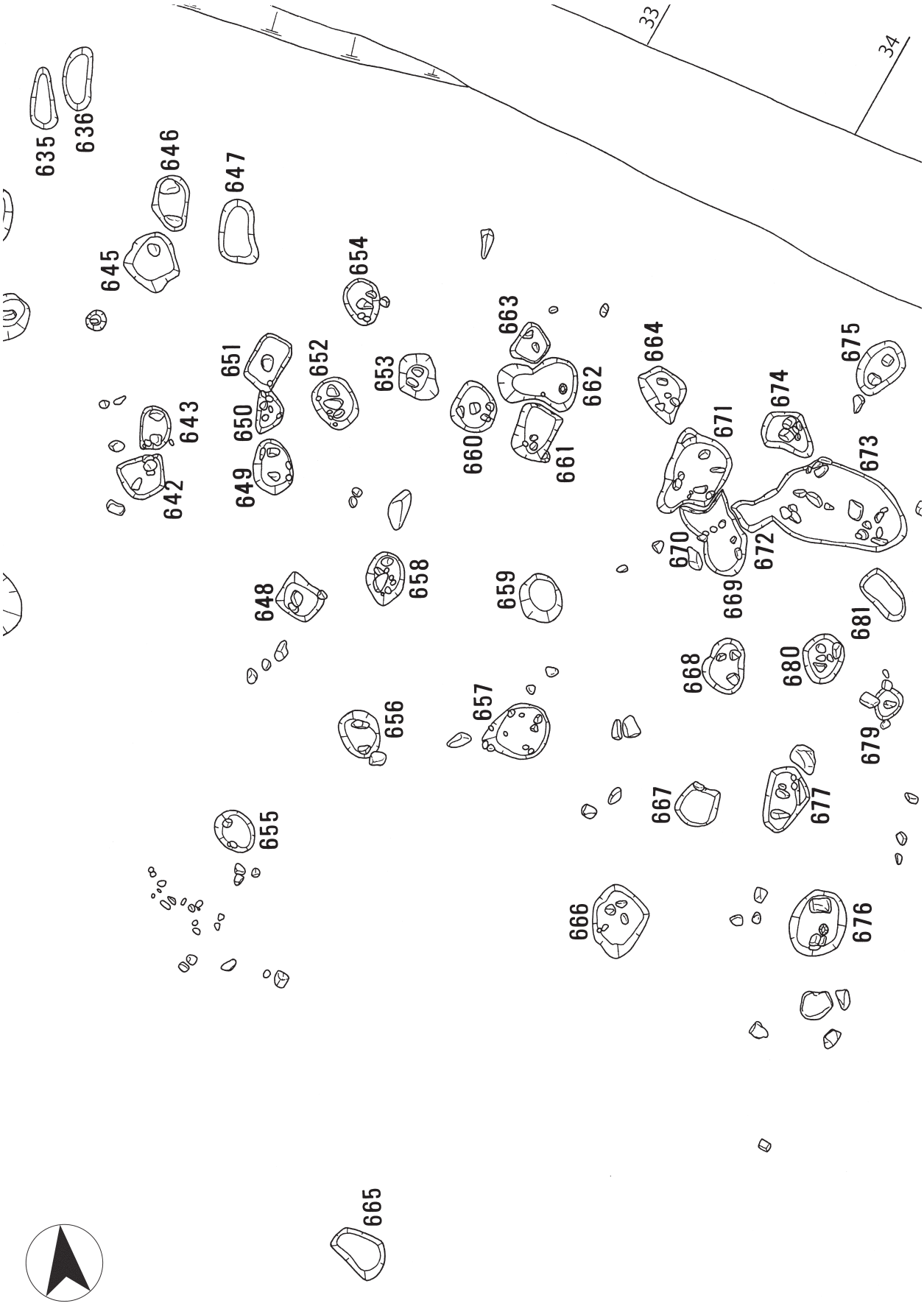


第 23 図　Ｂ地区全体遺構平面区割り図

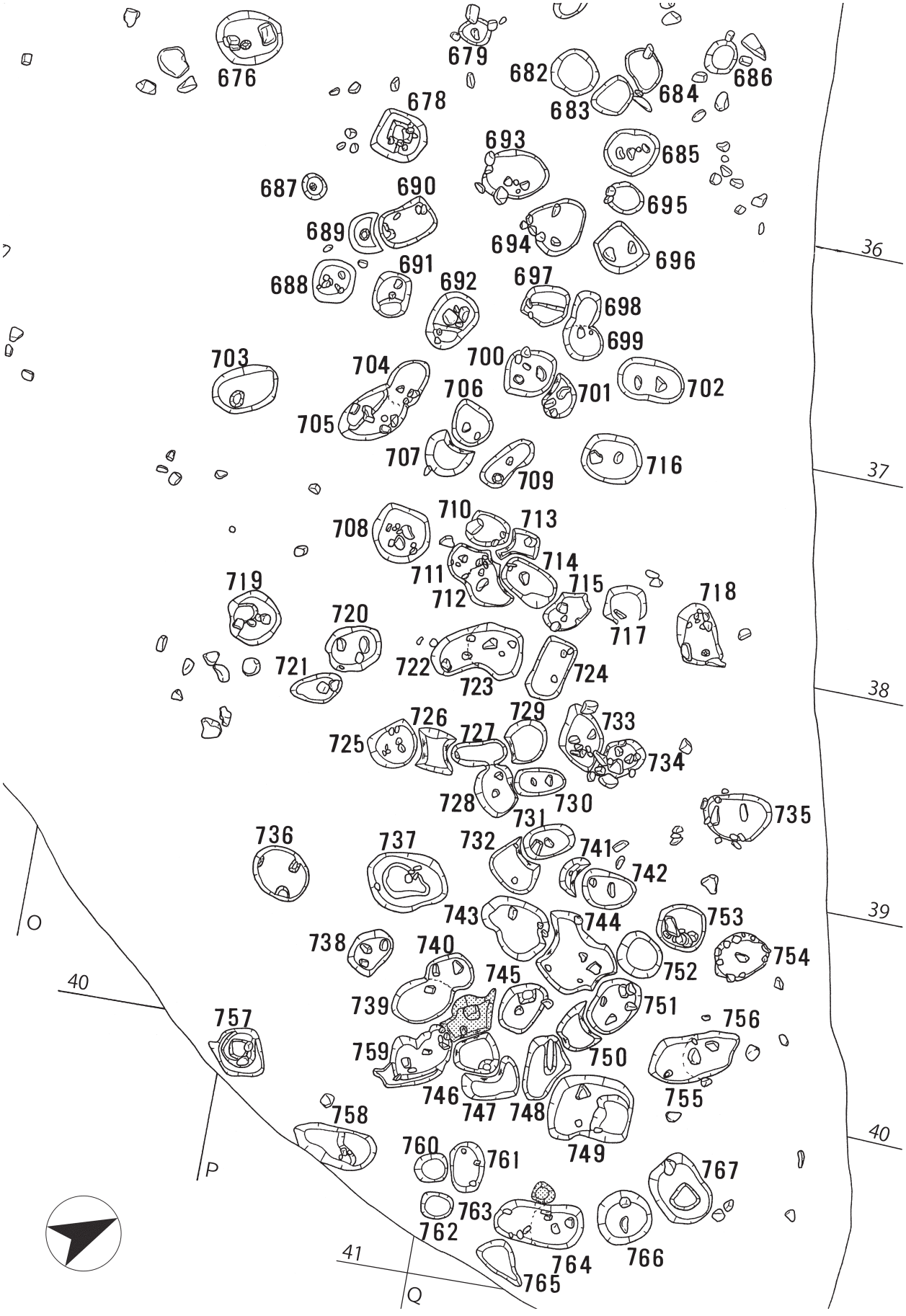
第 24 図　Ｂ地区全体遺構平面図（1：200）



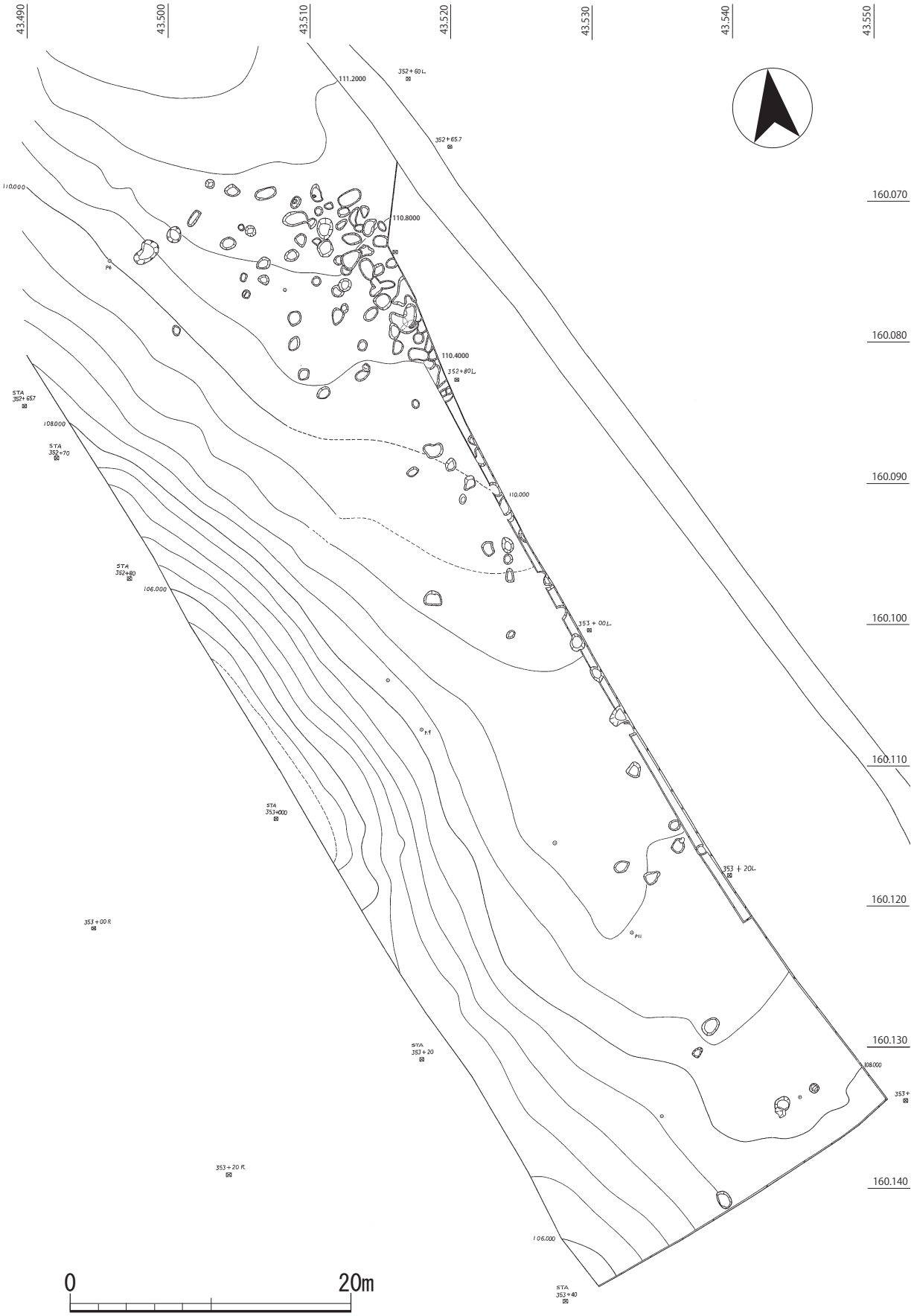
第 25 図　B 地区部分遺構平面図



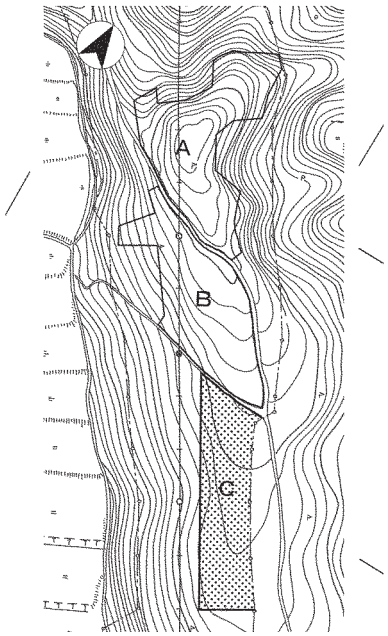
第 26 図　B 地区部分遺構平面図

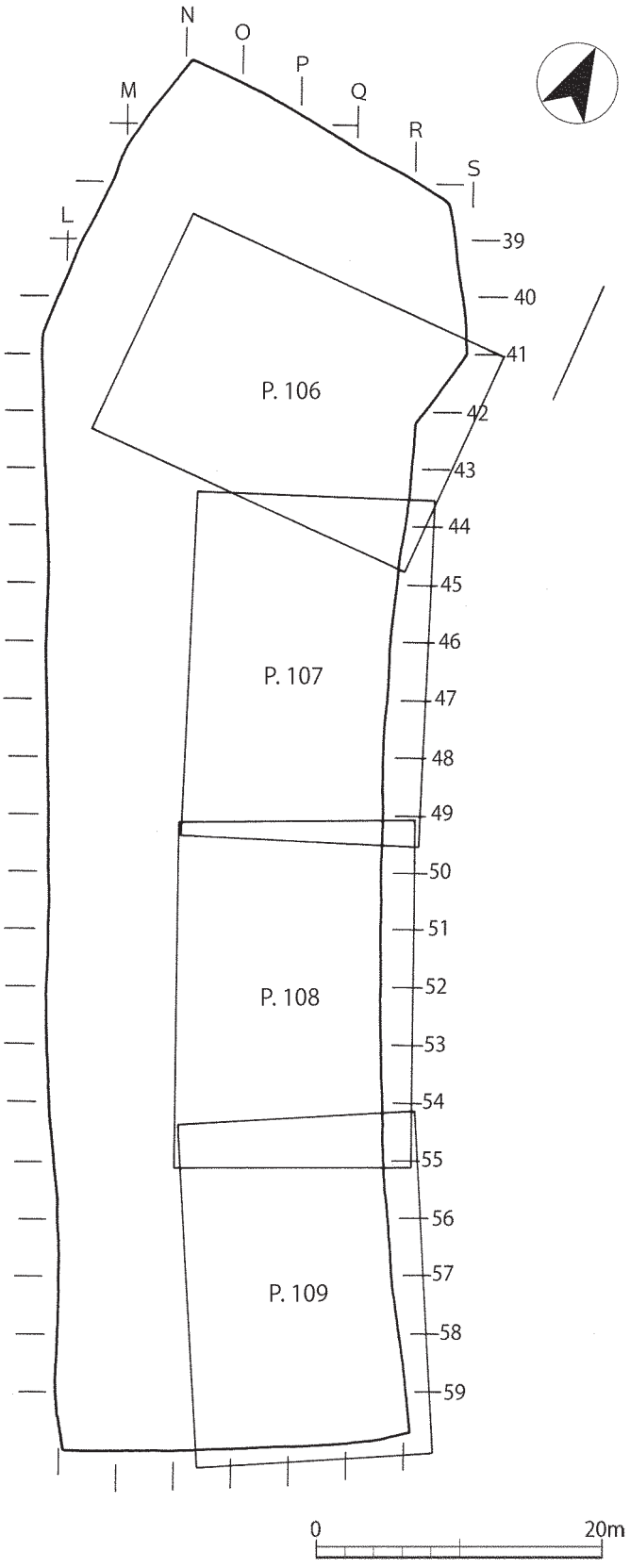


第 27 図　B 地区部分遺構平面図

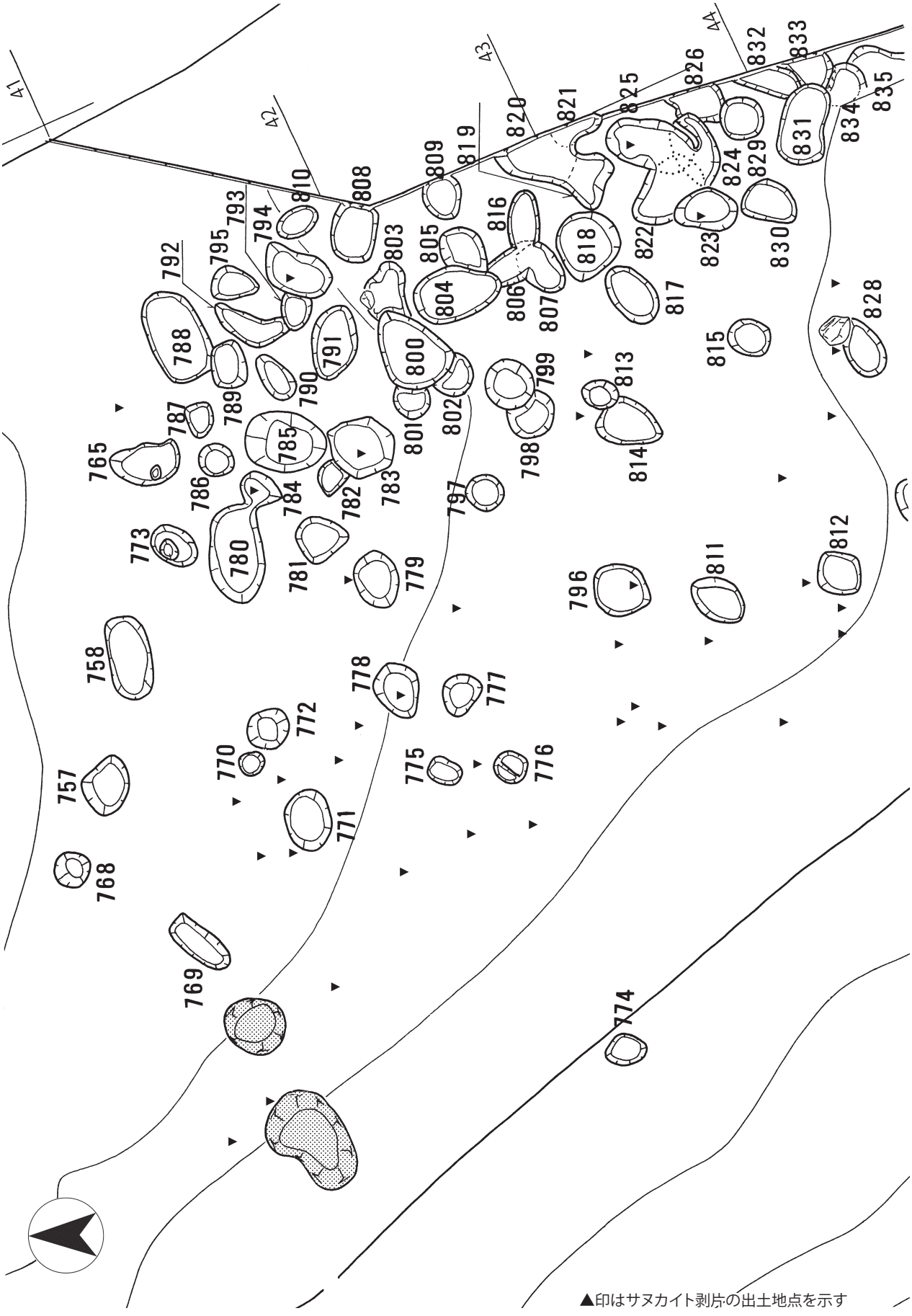


第 28 図　C 地区全体遺構平面図（1：400）

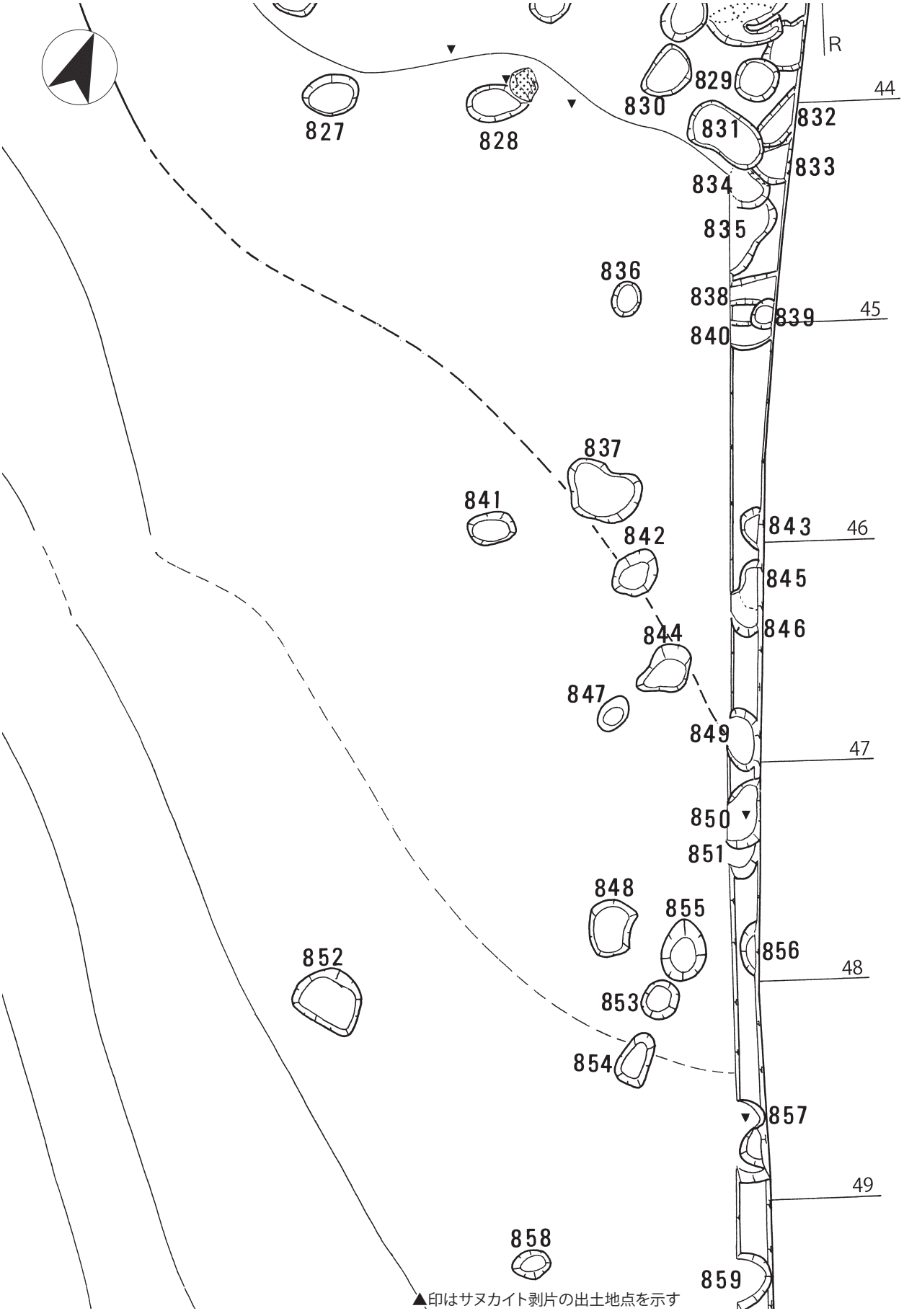




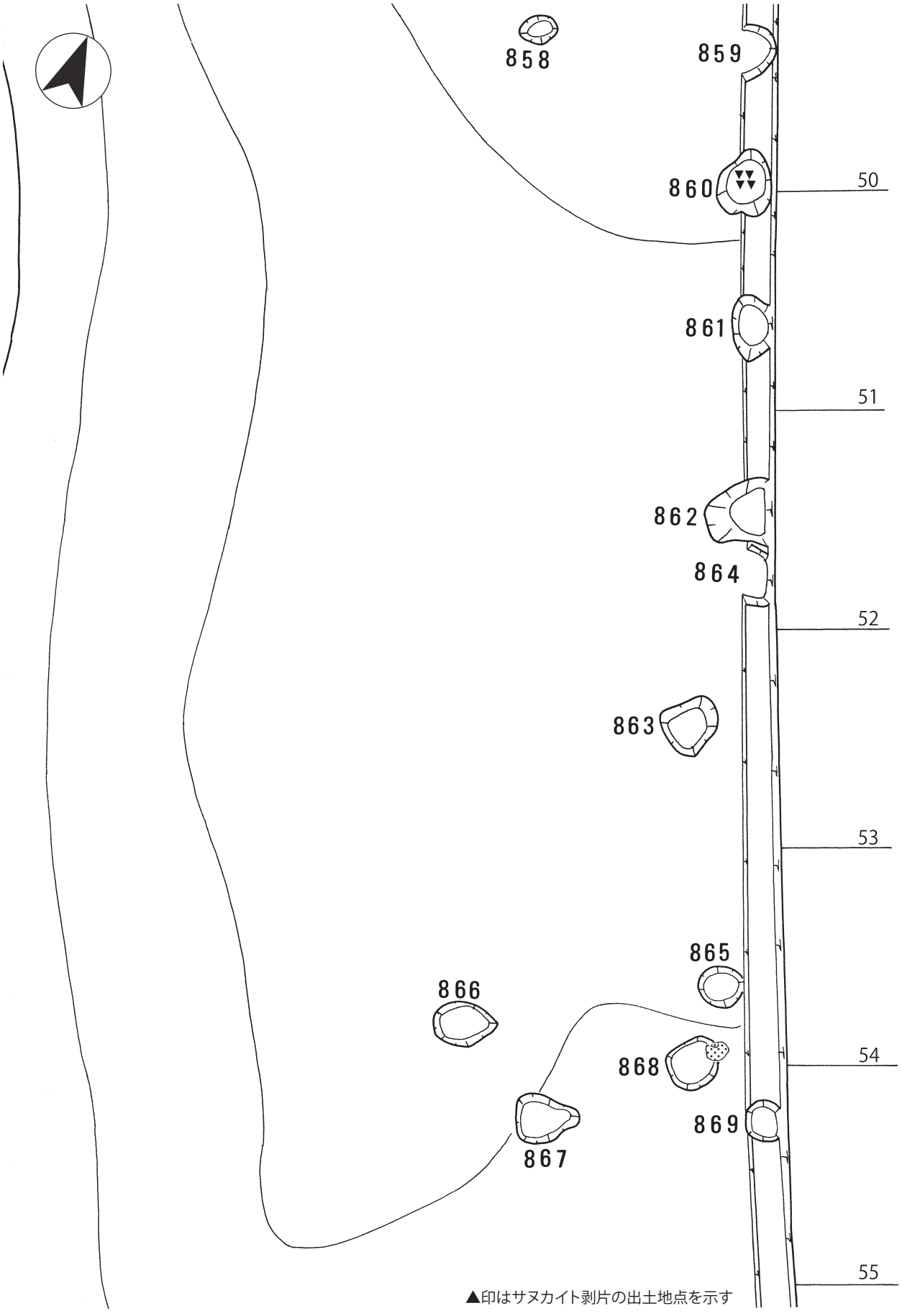
第 29 図　C 地区全体遺構平面区割り図



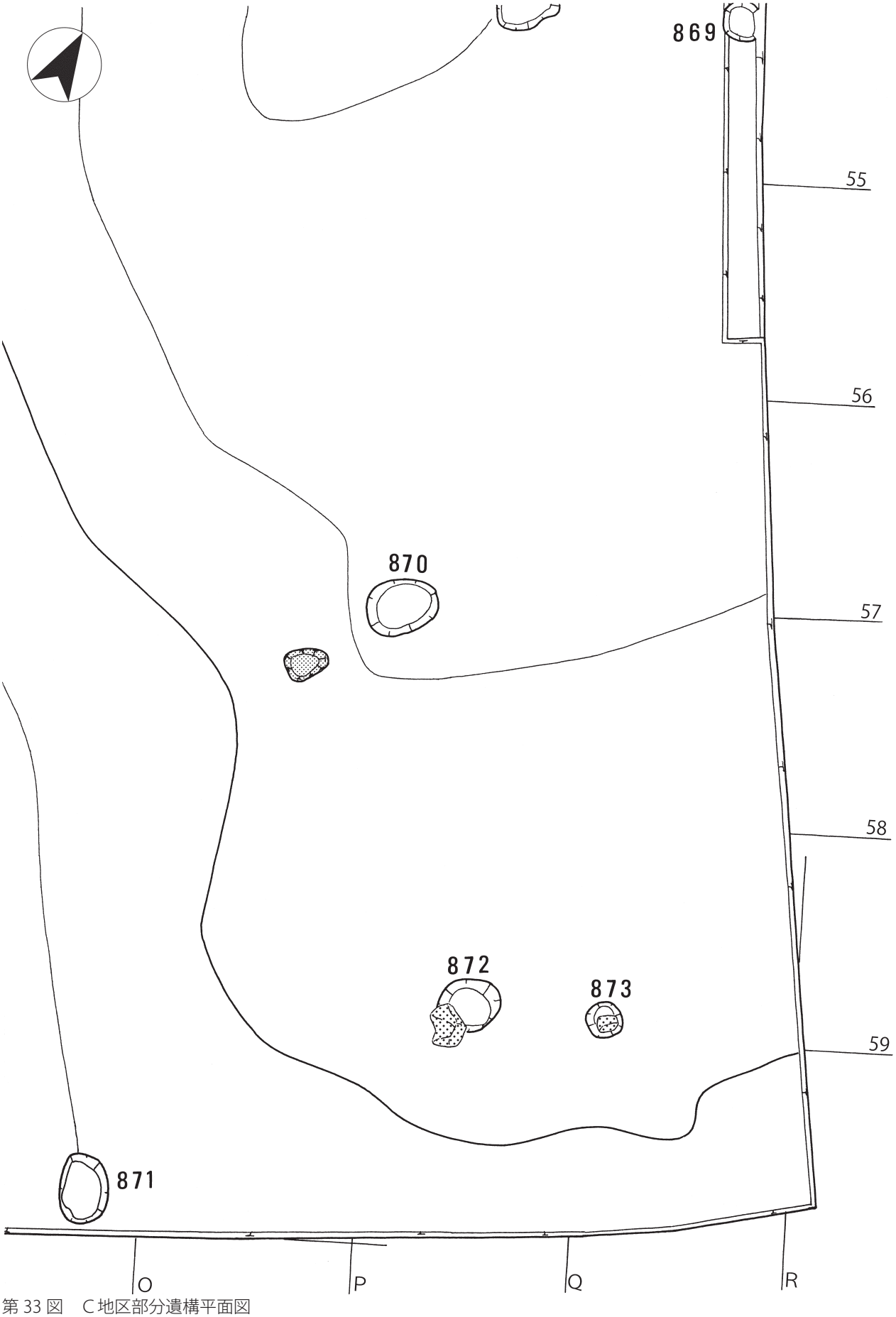
第 30 図　C 地区部分遺構平面図



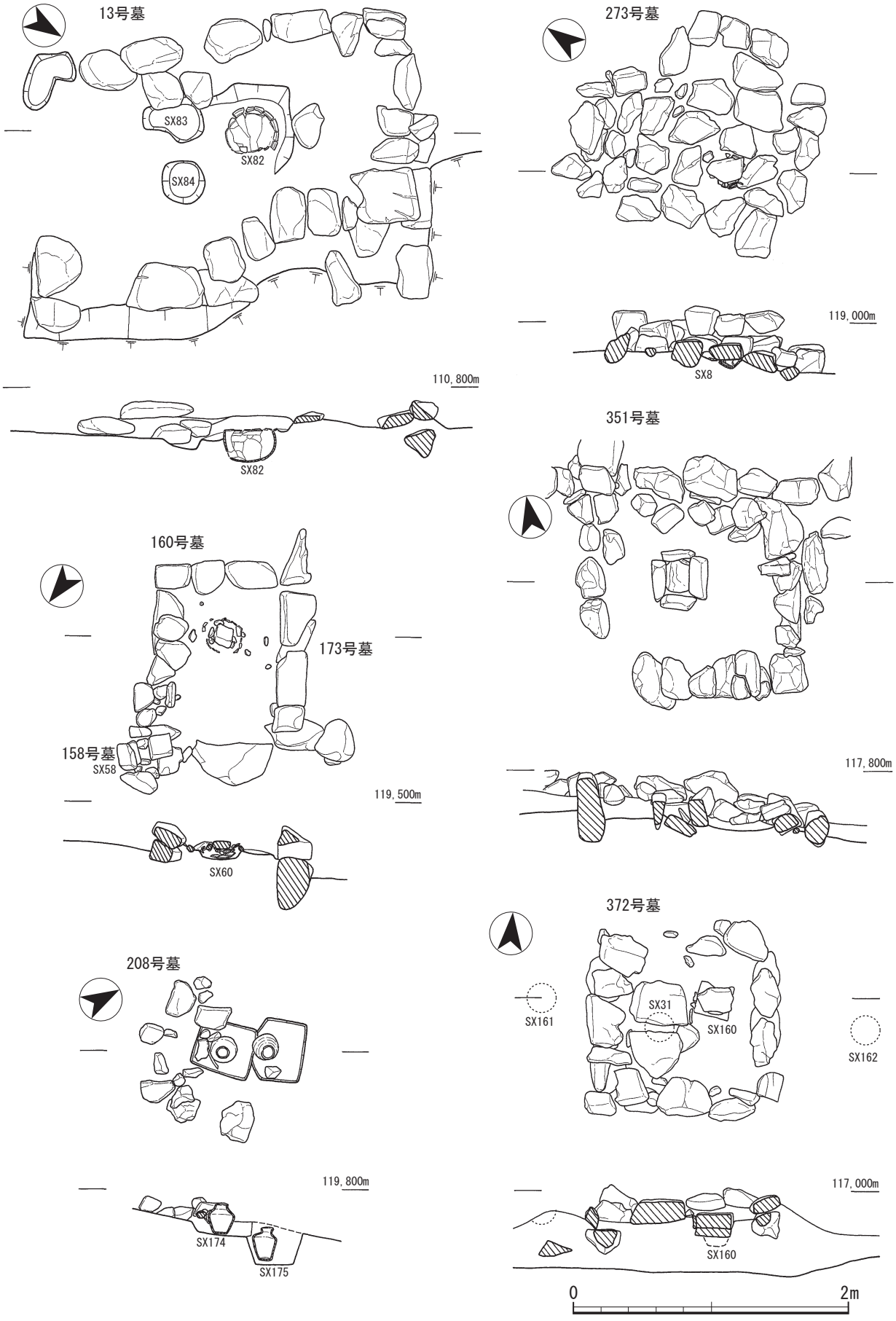
第 31 図　C 地区部分遺構平面図



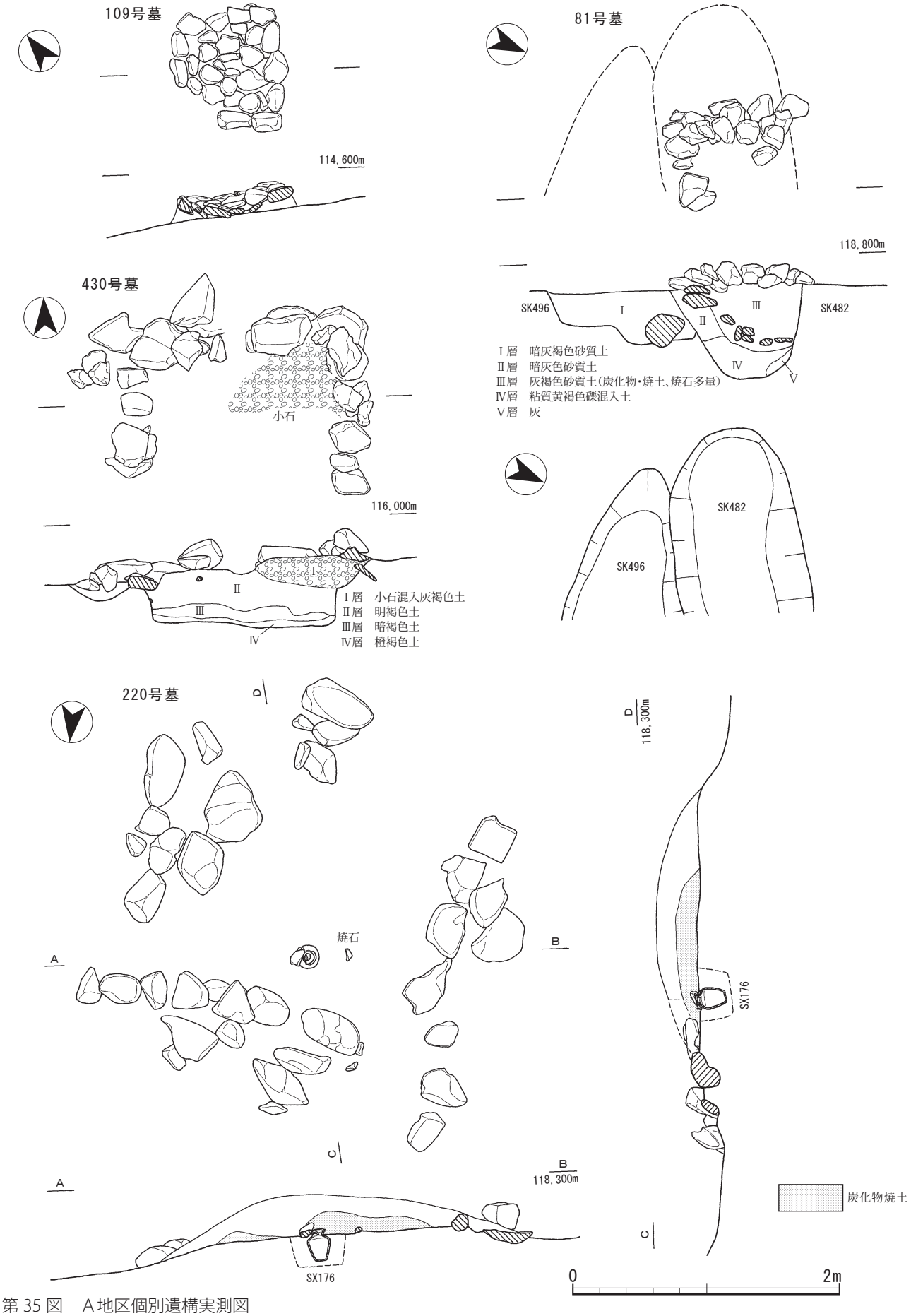
第 32 図　C 地区部分遺構平面図



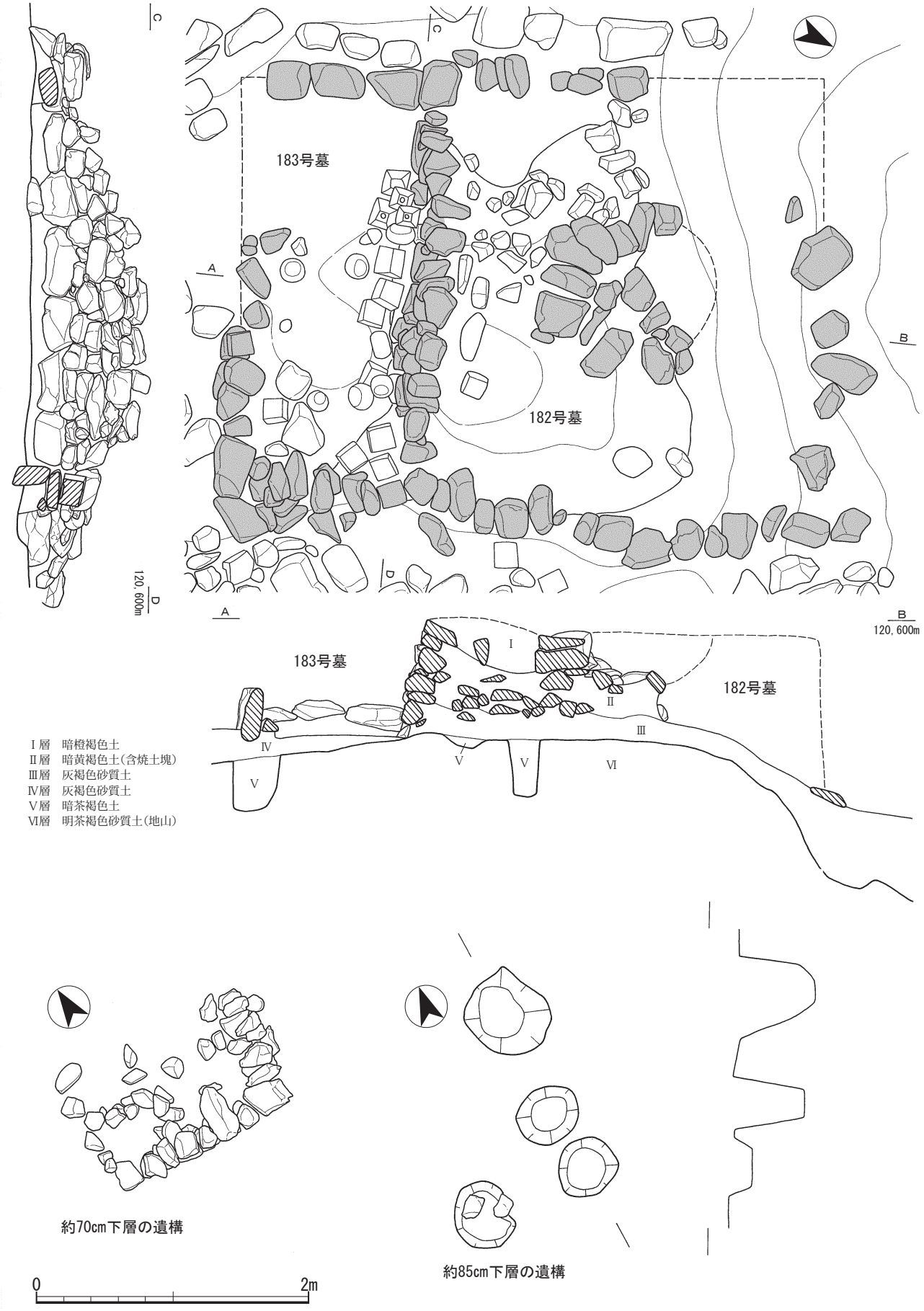
第 33 図　C 地区部分遺構平面図



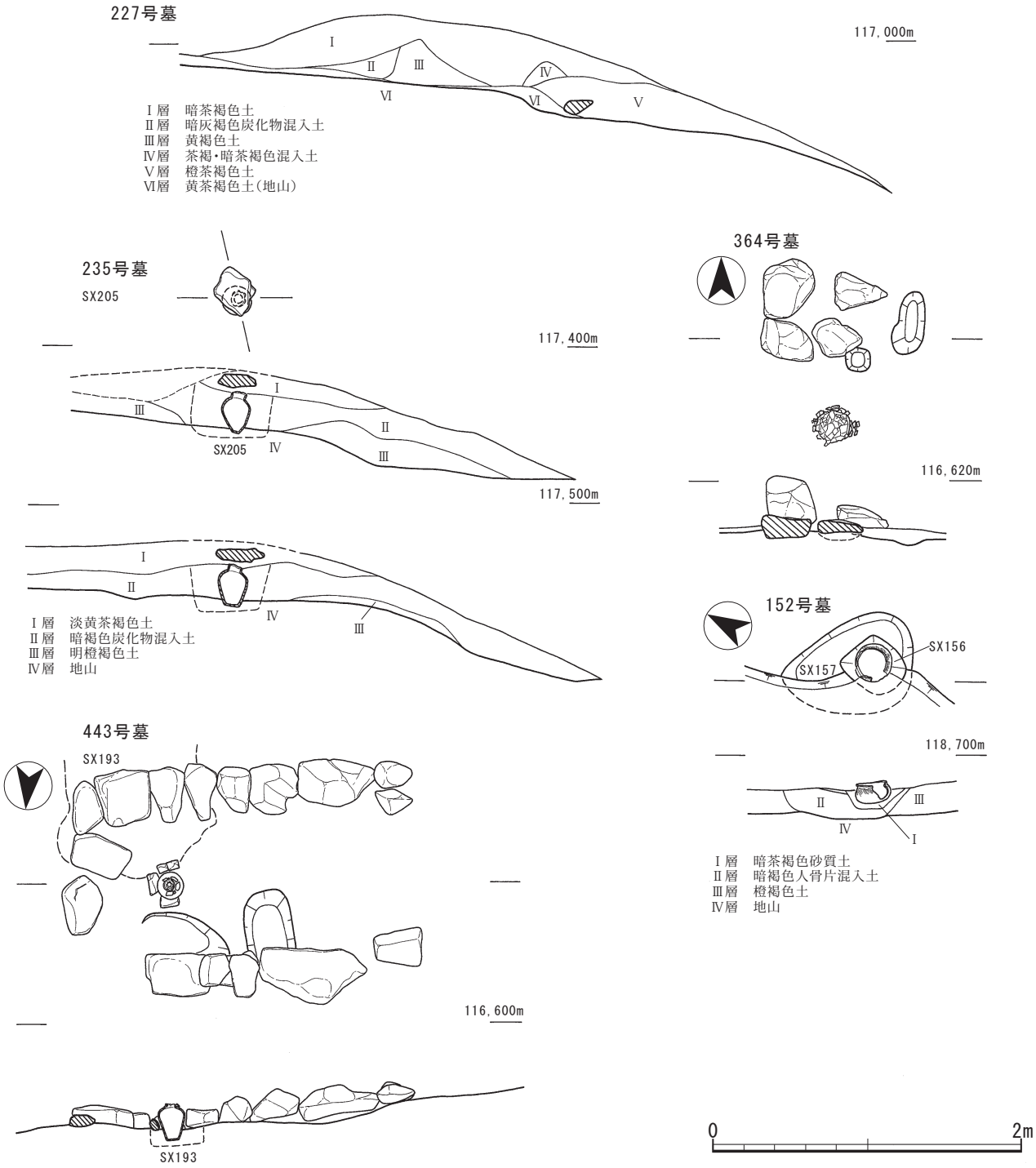
第 34 図　A 地区個別遺構実測図



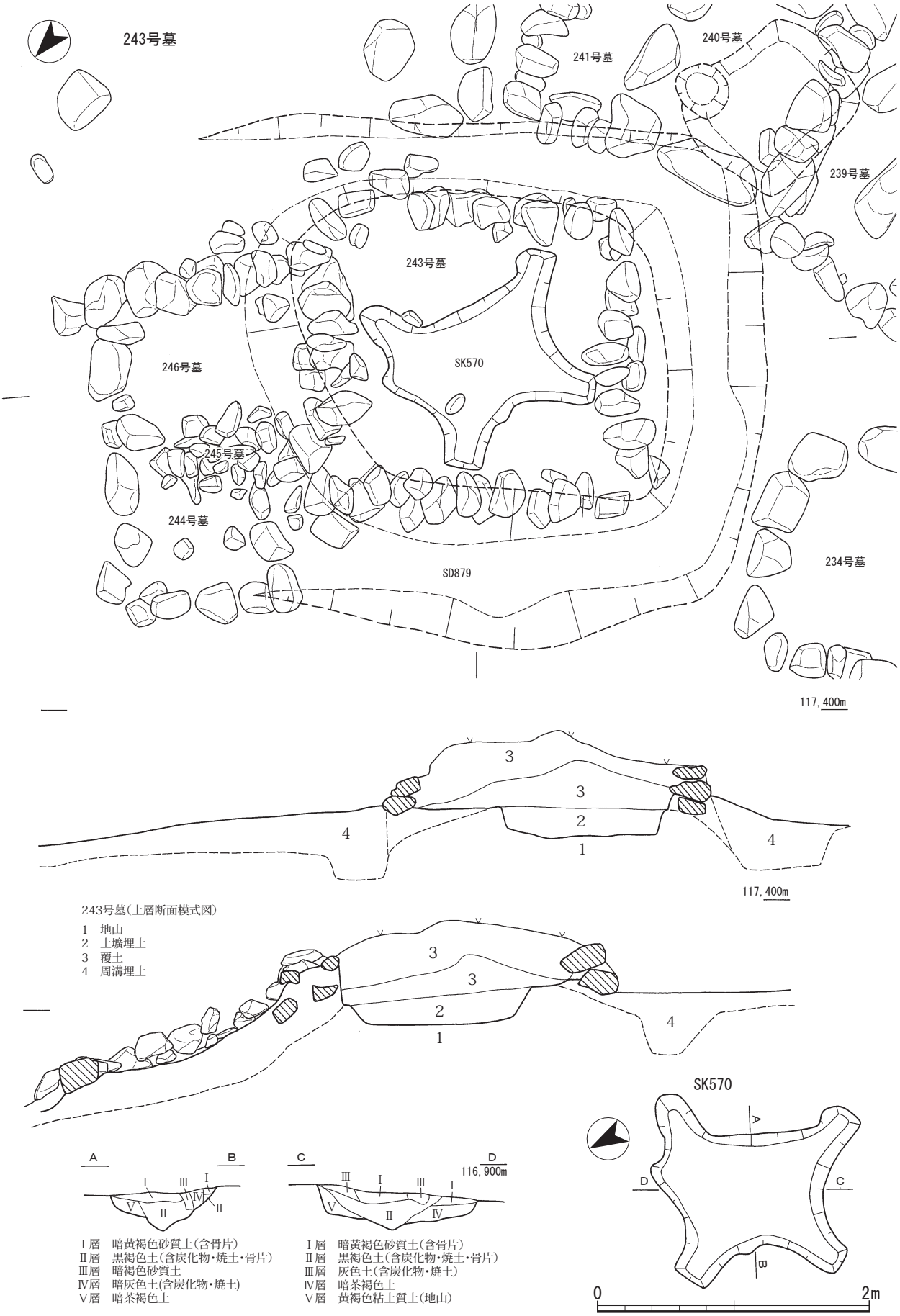
第 35 図　A 地区個別遺構実測図



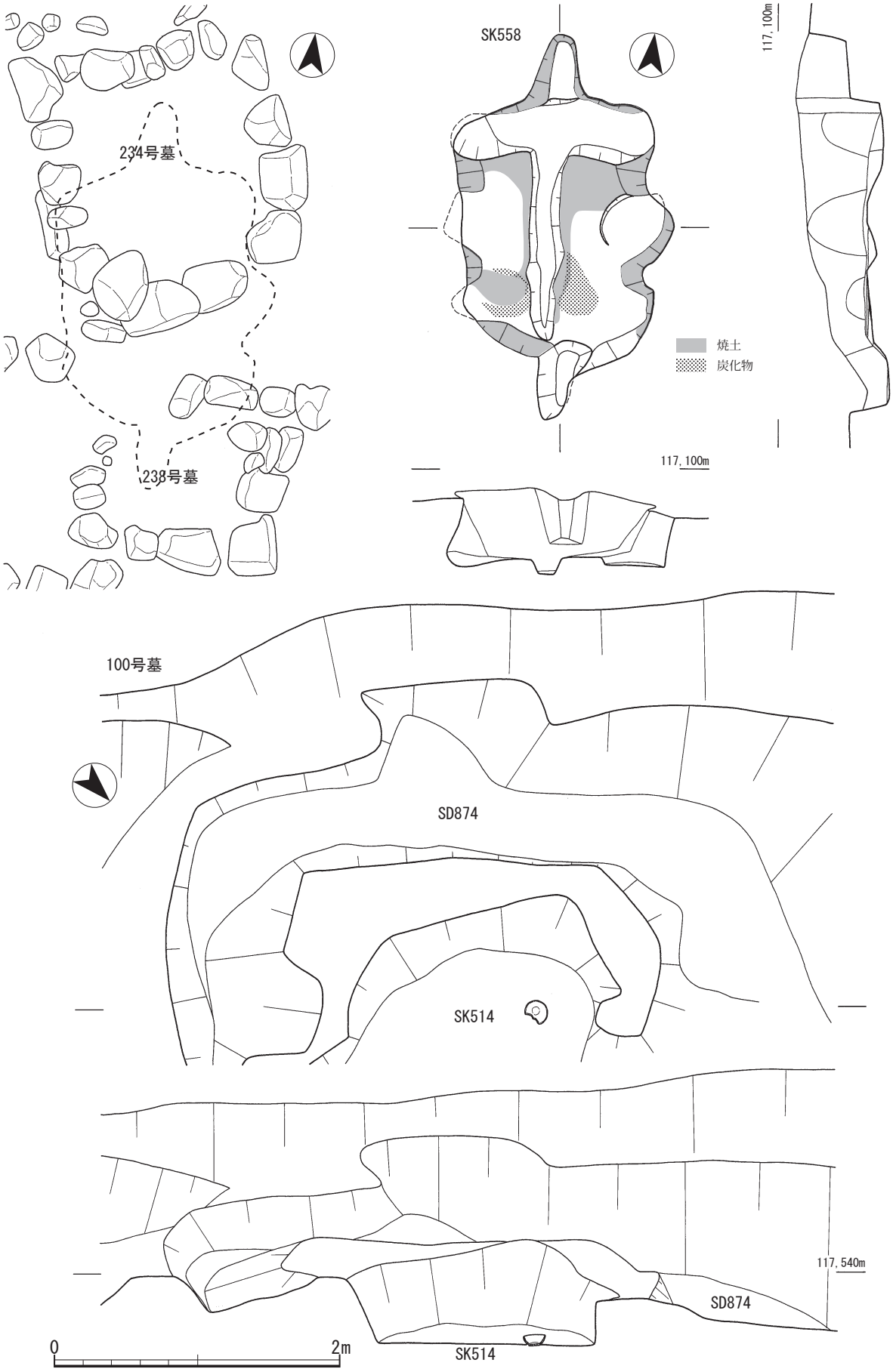
第 36 図　A 地区個別遺構実測図



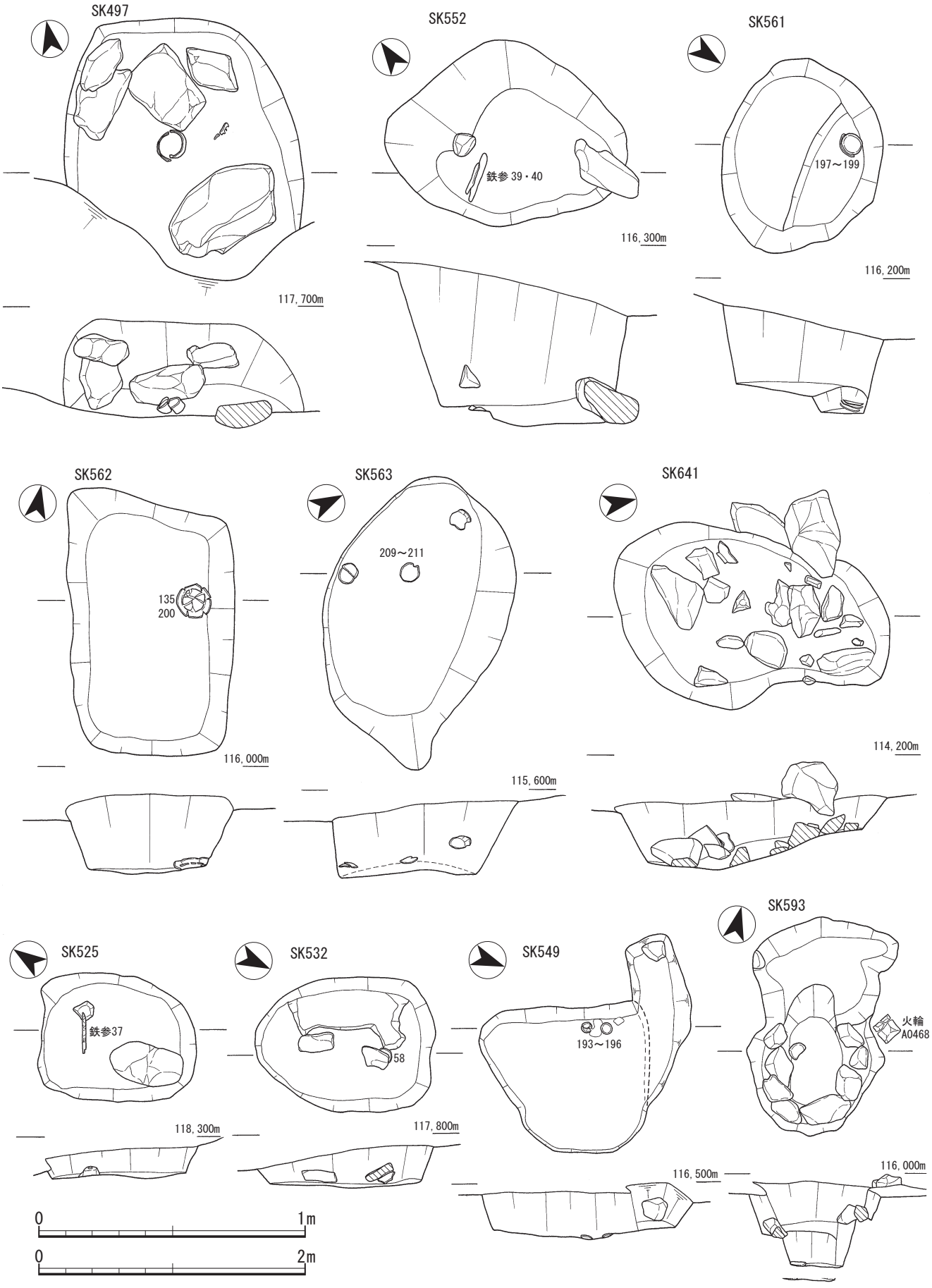
第 37 図　A 地区個別遺構実測図



第 38 図　A 地区個別遺構実測図

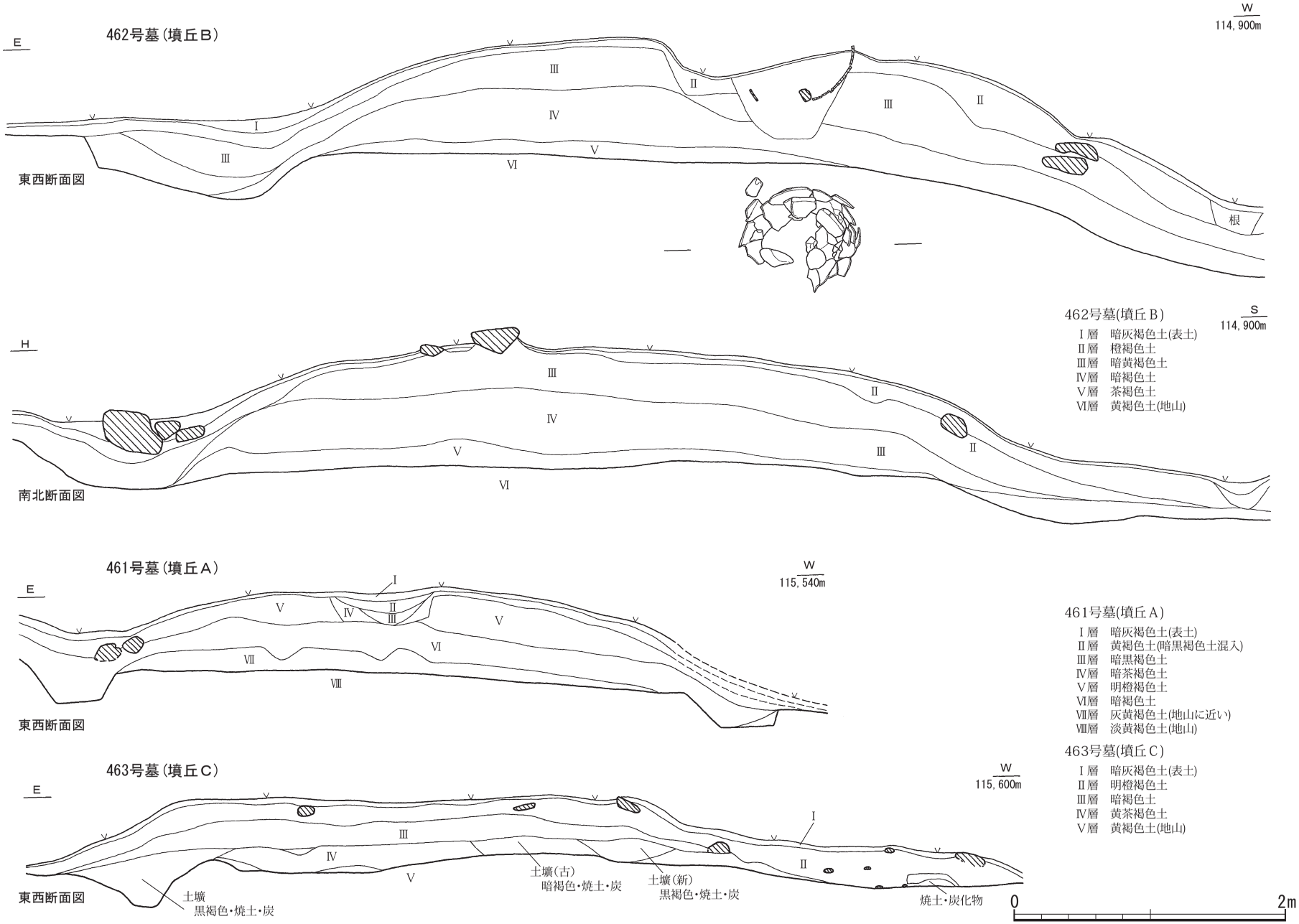


第 39 図　A 地区個別遺構実測図

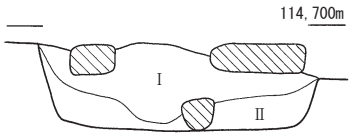


第 40 図　A 地区個別遺構実測図

第41図　B地区墳丘墓土層断面図

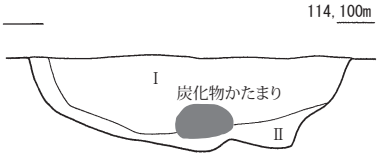


SK631



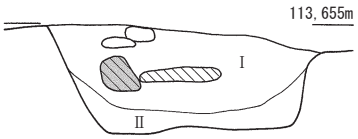
Ⅰ層　暗茶褐色砂質土(含骨片・炭化物)
Ⅱ層　暗褐色粘質土

SK645



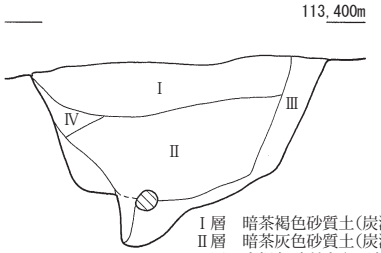
Ⅰ層　暗茶褐色砂質土(含骨片・炭化物)
Ⅱ層　暗褐色粘質土

SK652



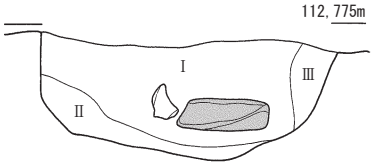
Ⅰ層　暗灰色砂質土(含骨片・炭化物)
Ⅱ層　暗褐色粘質土(やや硬い)

SK661



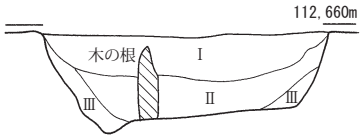
Ⅰ層　暗茶褐色砂質土(炭混入)
Ⅱ層　暗茶灰色砂質土(炭混入)
Ⅲ層　赤褐色砂質土(固く焼ける)
Ⅳ層　Ⅱ層の土に褐色土混じる

SK668



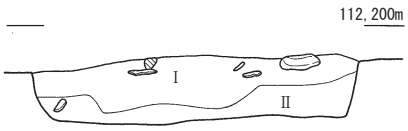
Ⅰ層　暗茶褐色砂質土(含骨片・炭化物)
Ⅱ層　暗褐色砂質土
Ⅲ層　褐色砂質土(焼土層)

SK682



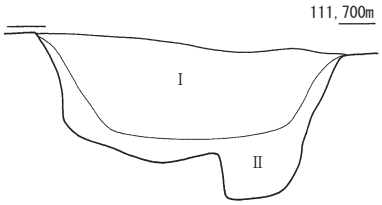
Ⅰ層　暗灰色砂質土(含骨片・炭化物)
Ⅱ層　暗褐色粘質土
Ⅲ層　固い褐色土

SK706



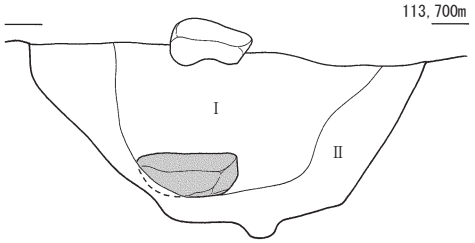
Ⅰ層　暗灰色砂質土(含骨片・木炭・焼石)
Ⅱ層　暗黄褐色粘質土

SK720



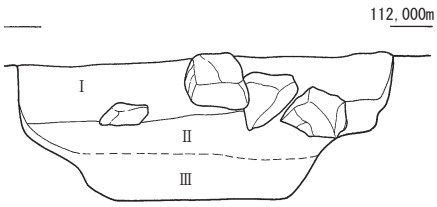
Ⅰ層　茶褐色砂質土(含骨片・炭化物・鉄釘)
Ⅱ層　暗褐色粘質土

SK640



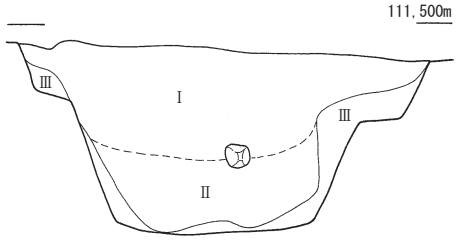
Ⅰ層　暗茶褐色砂質土(含炭化物)
Ⅱ層　赤褐色砂質土(固い焼土)

SK708



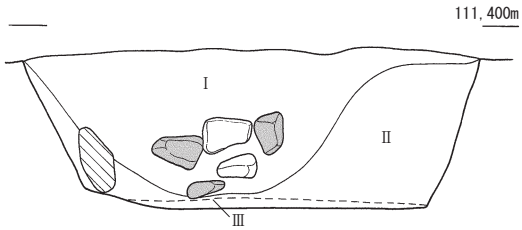
Ⅰ層　黄褐色砂質土(含骨片・炭化物)
Ⅱ層　暗黄褐色粘質土(含骨片・炭化物)
Ⅲ層　褐色砂質土(やや固い・骨片)

SK737



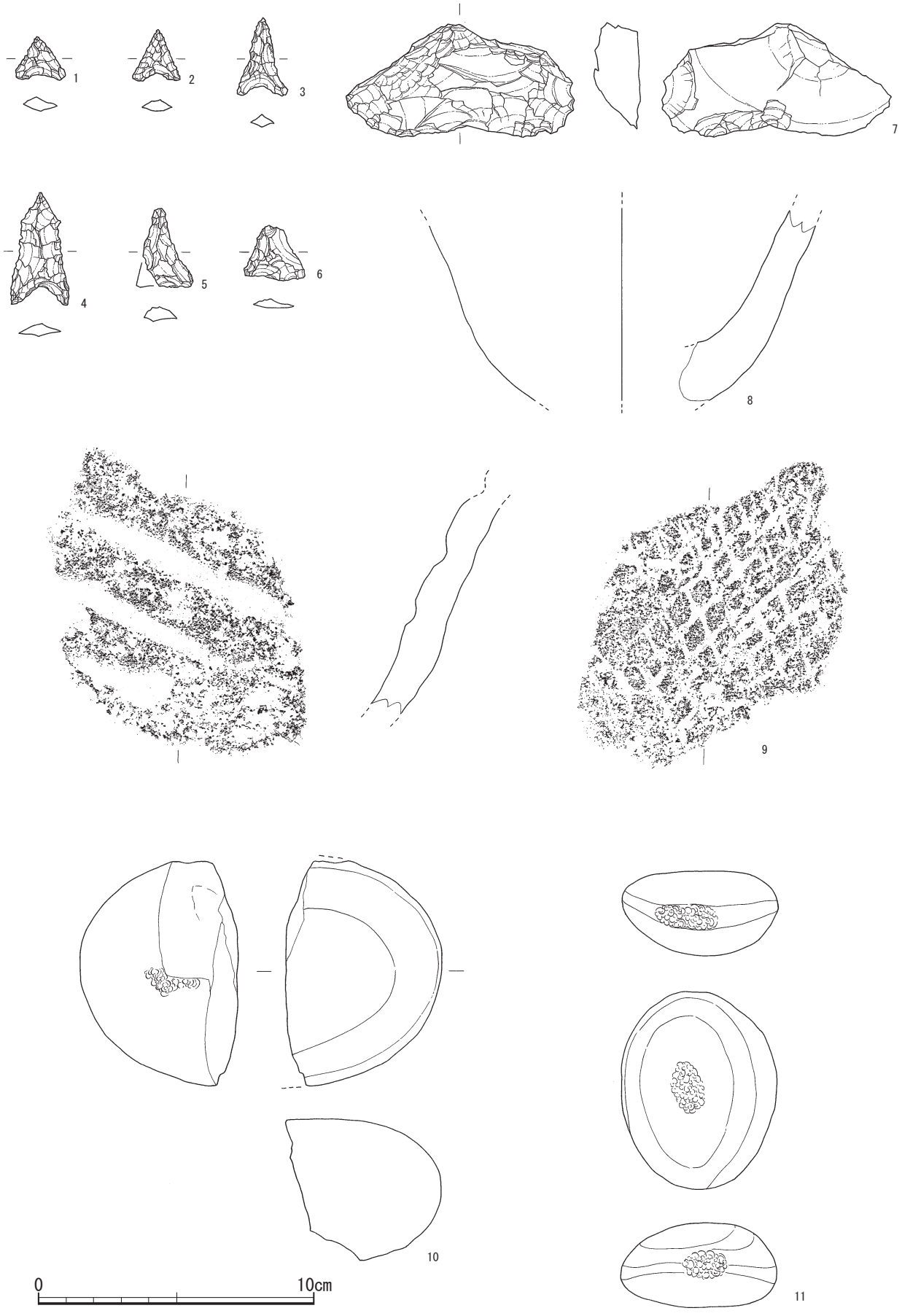
Ⅰ層　茶褐色砂質土(含骨片・炭化物)
Ⅱ層　茶褐色粘質土
Ⅲ層　暗褐色砂質土

SK749

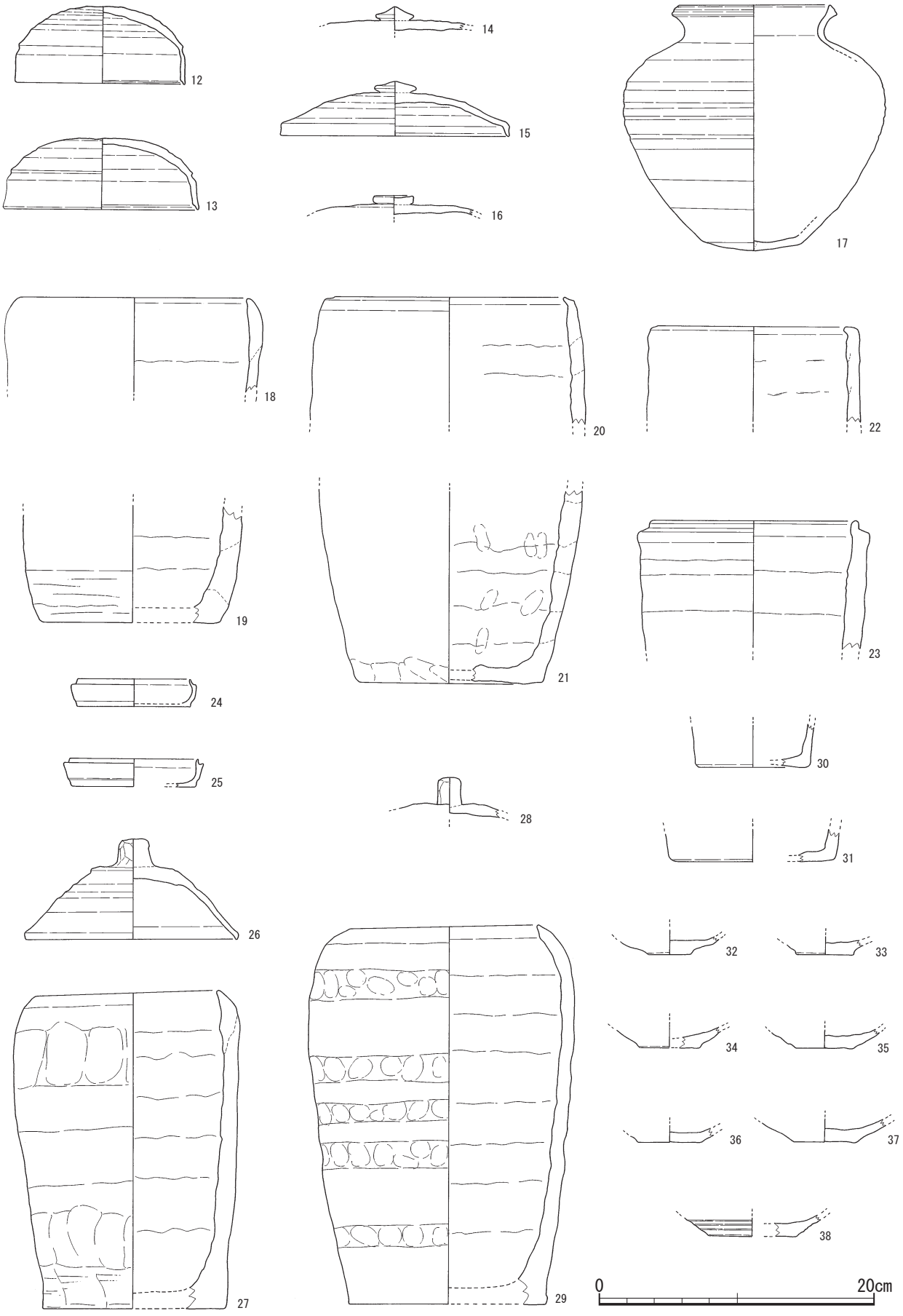


Ⅰ層　茶褐色砂質土(含骨片・炭化物)
Ⅱ層　黄褐色砂質土
Ⅲ層　暗褐色粘質土

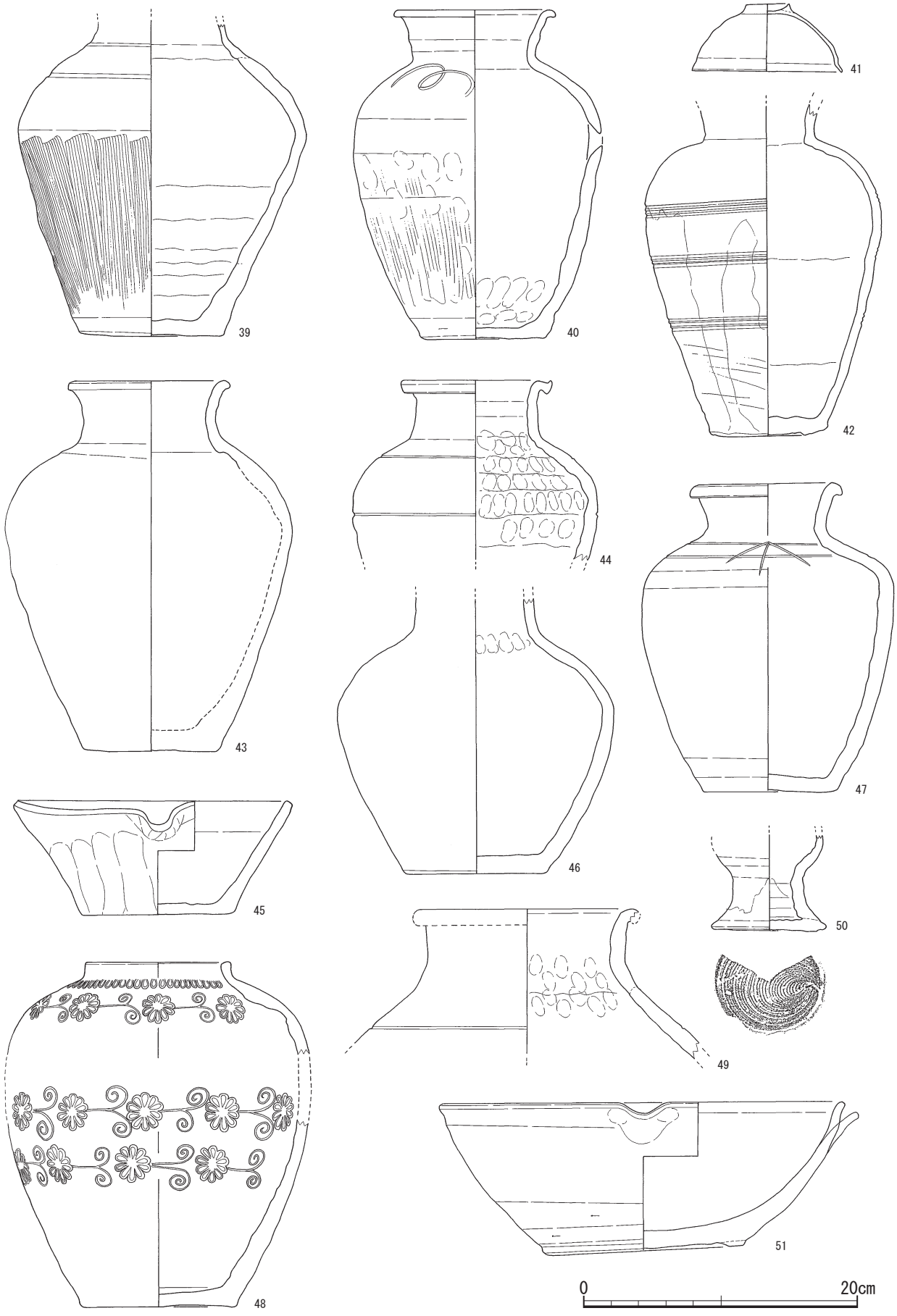
第 42 図　B・C 地区個別遺構実測図



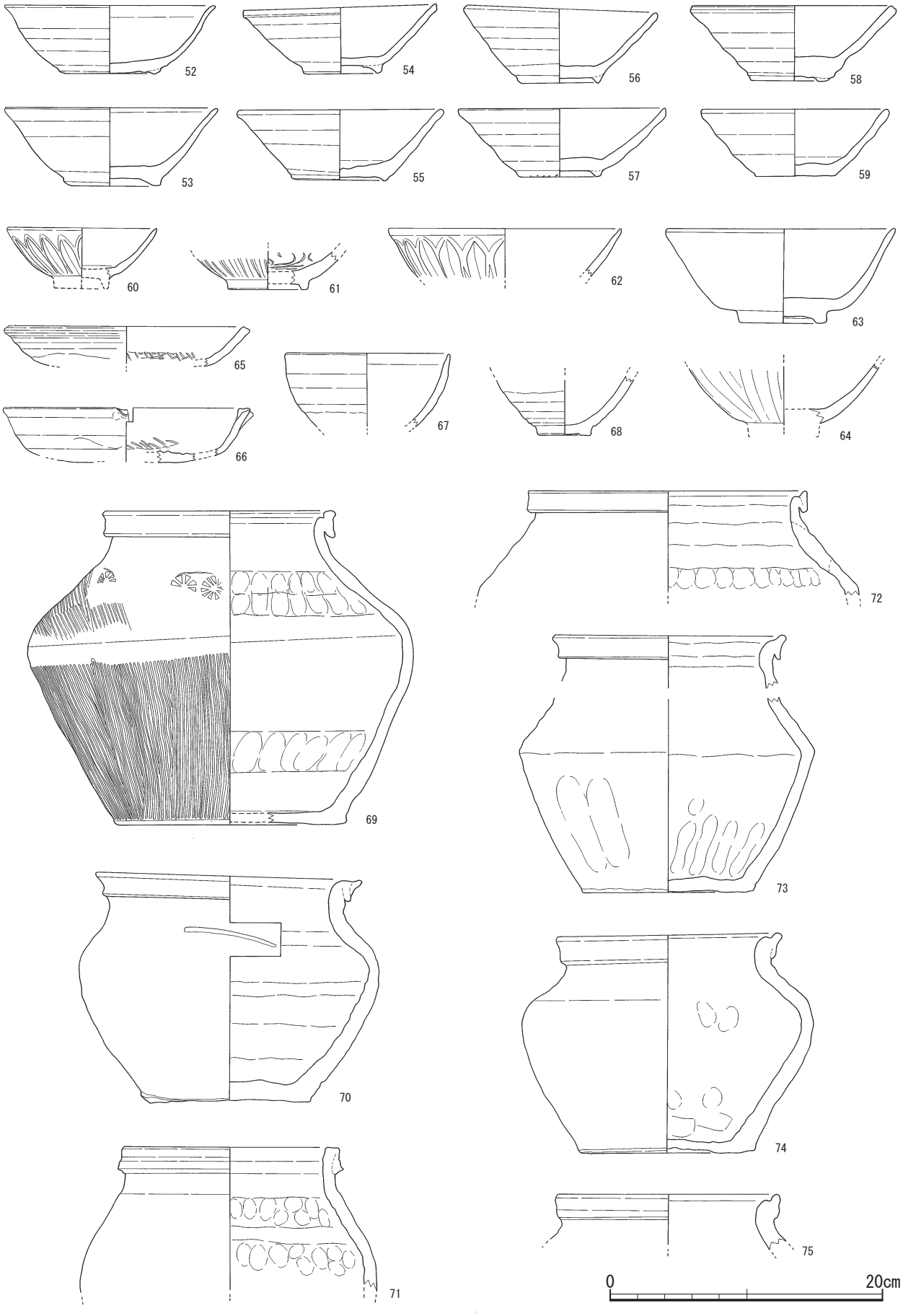
第 43 図　石鏃ほか遺物実測図（１：２）



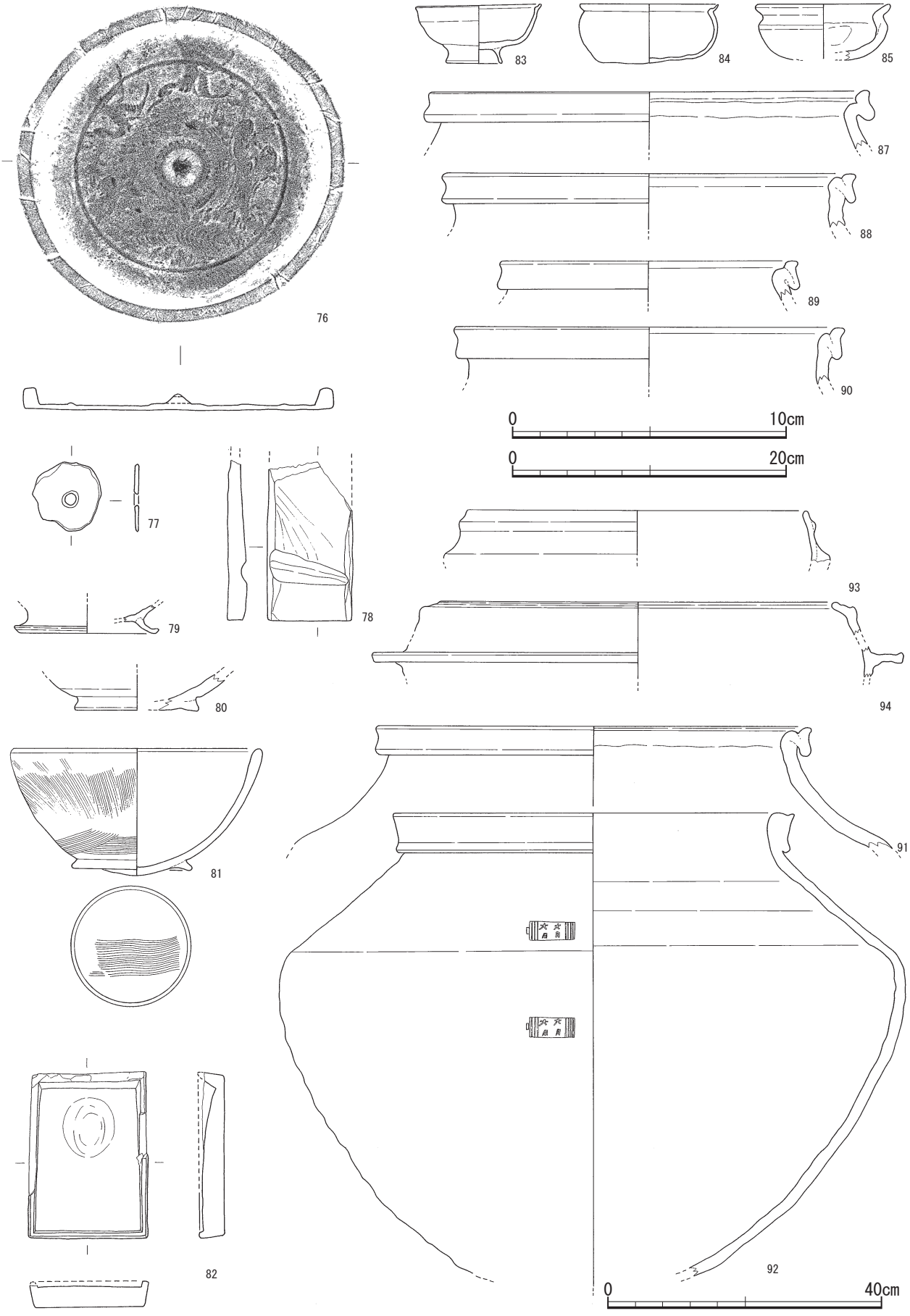
第 44 図　須恵器ほか遺物実測図（１：４）



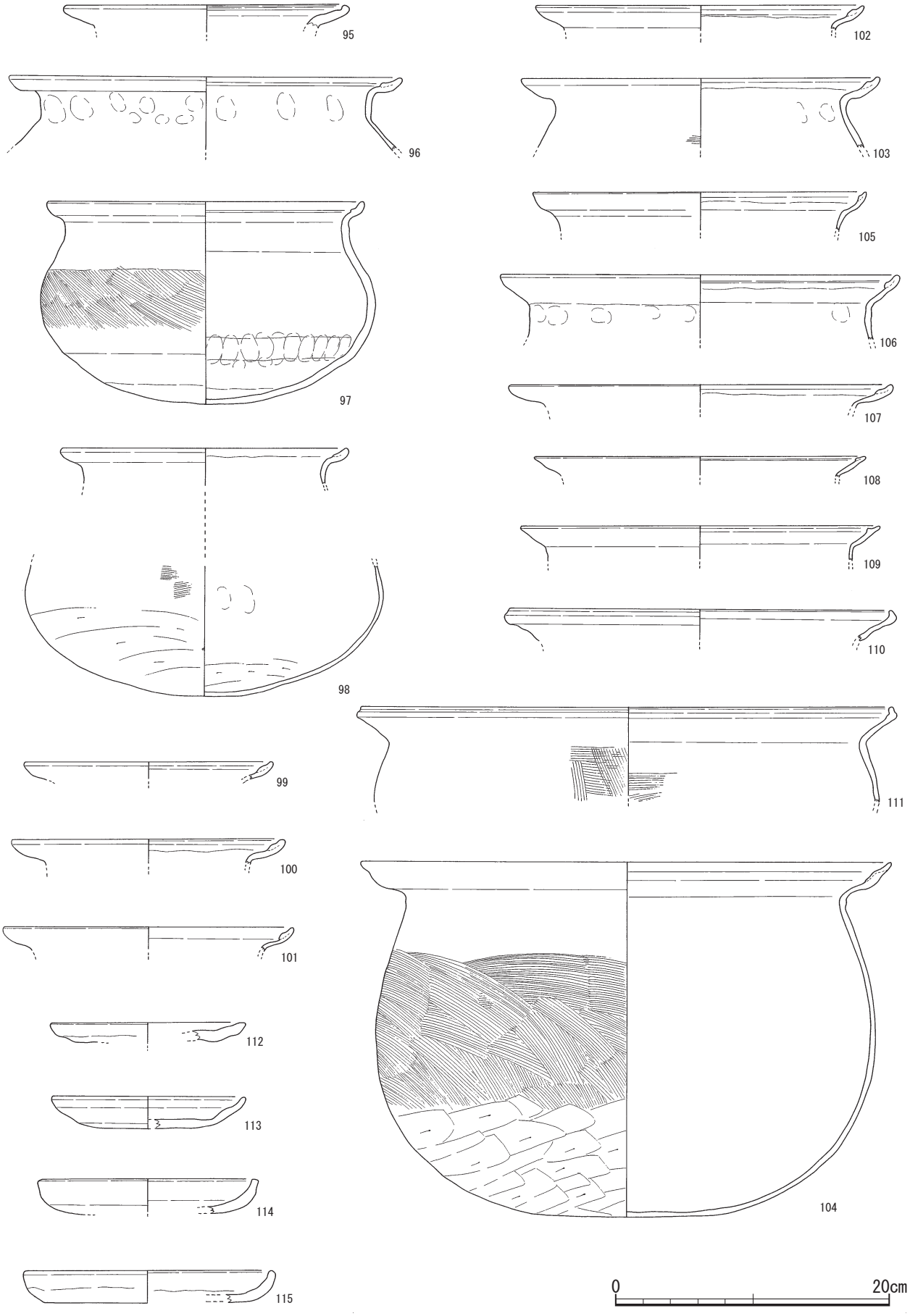
第 45 図　三筋壺ほか遺物実測図（1：4）



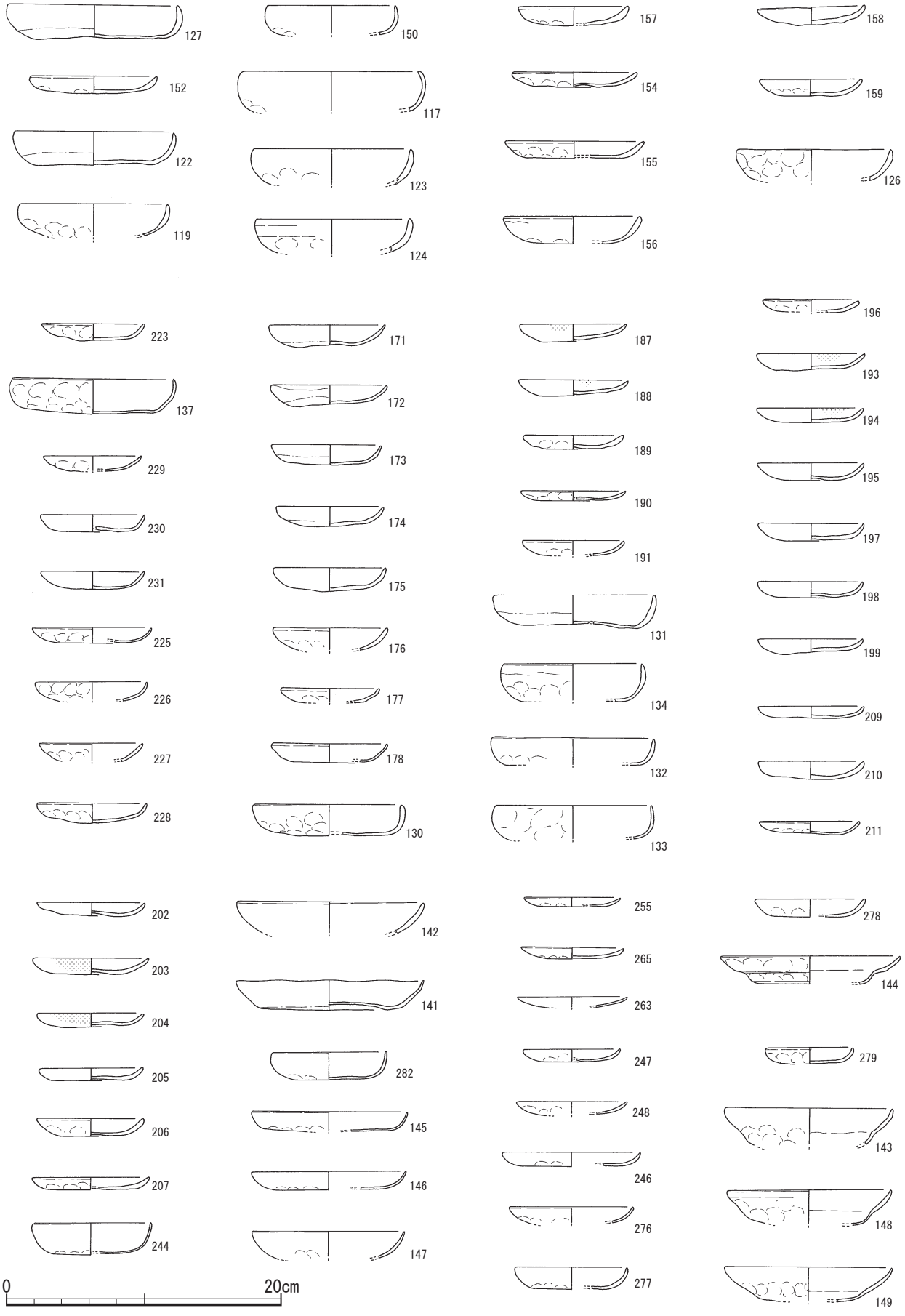
第 46 図　山茶碗ほか遺物実測図（１：４）



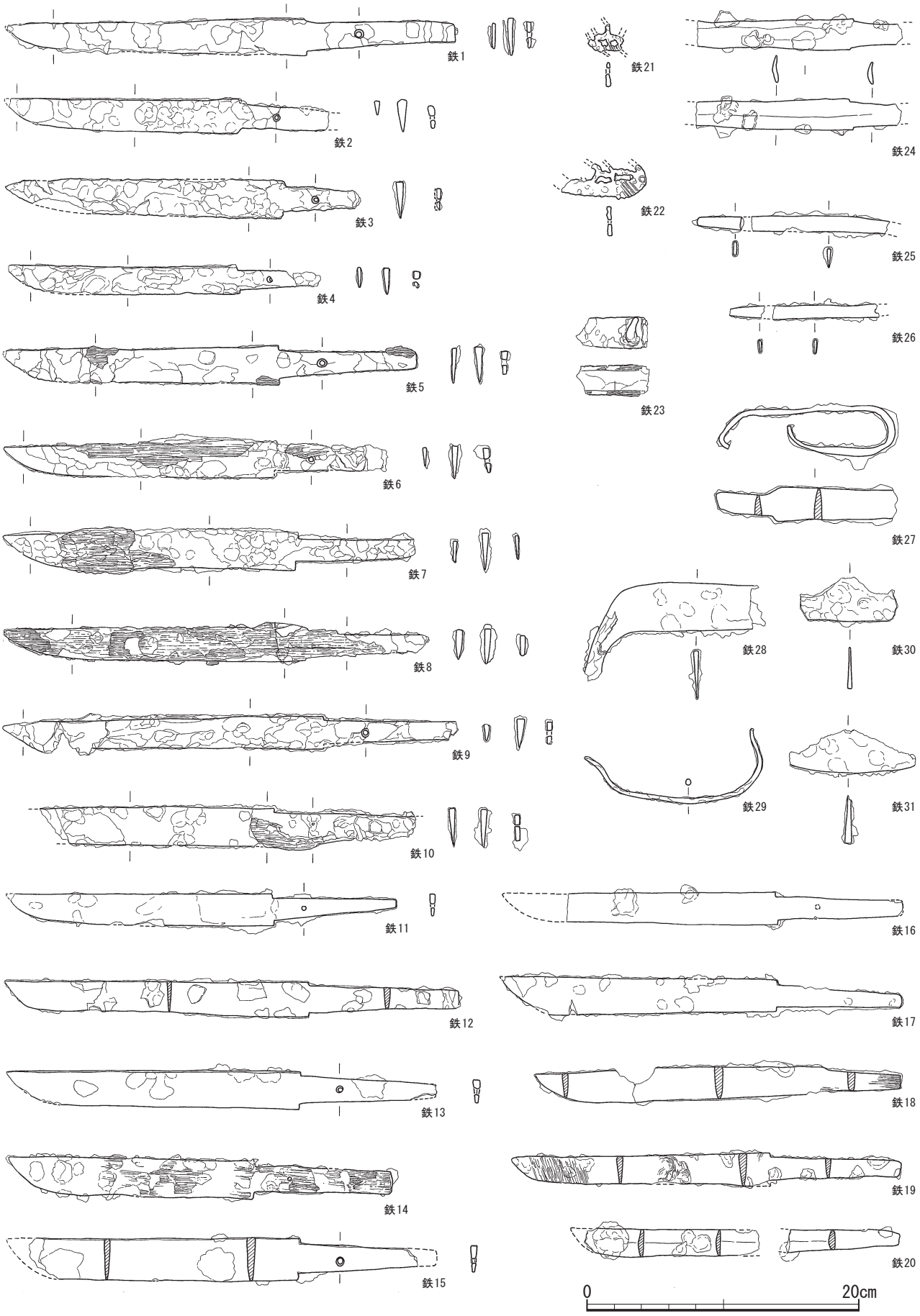
第 47 図　和鏡ほか遺物実測図（76 ～ 78 は 1 ： 2、79 ～ 85・87 ～ 91・93 ～ 94 は 1 ： 4、92 は 1 ： 8）



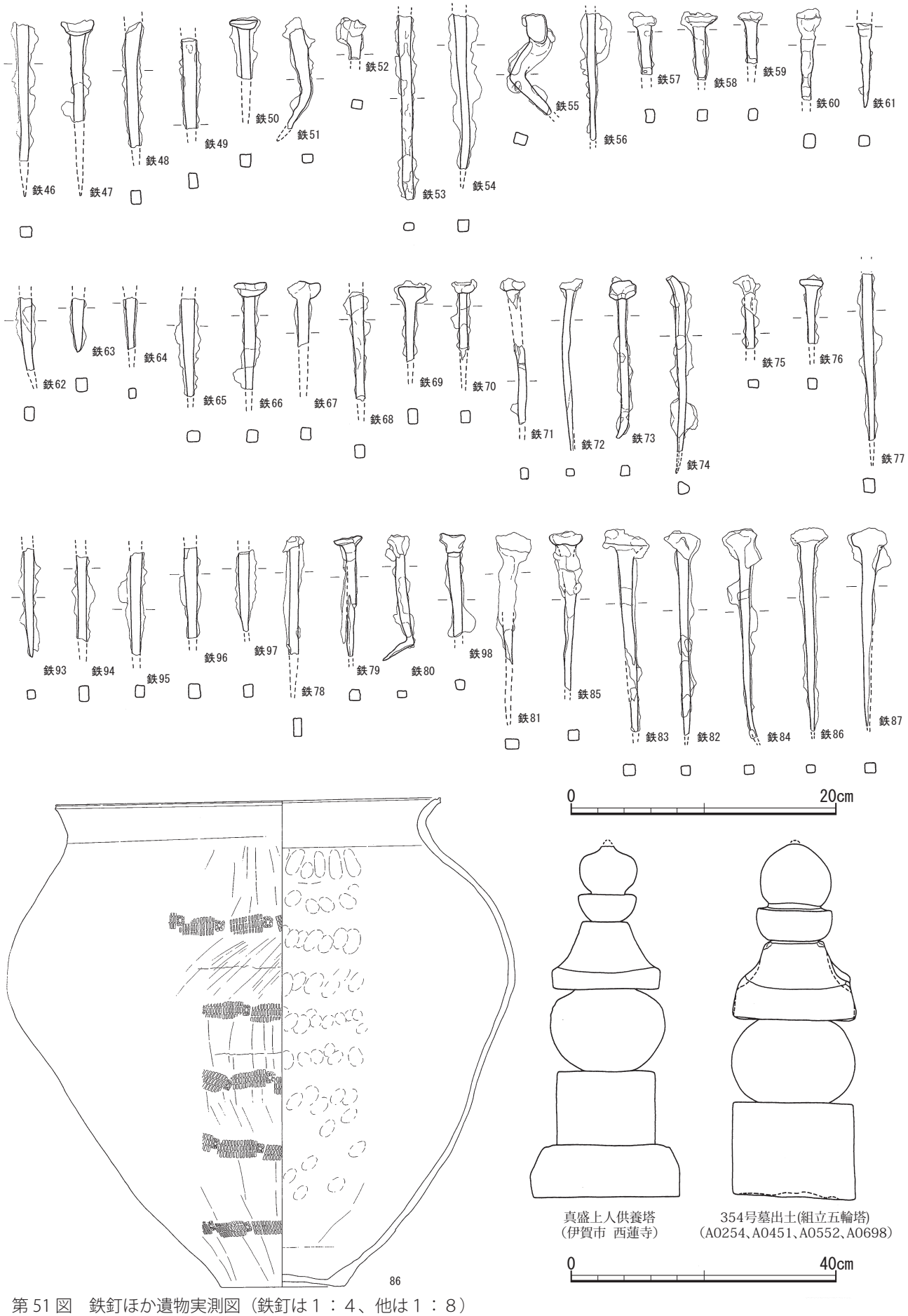
第 48 図　土師器鍋ほか遺物実測図（1 ： 4）



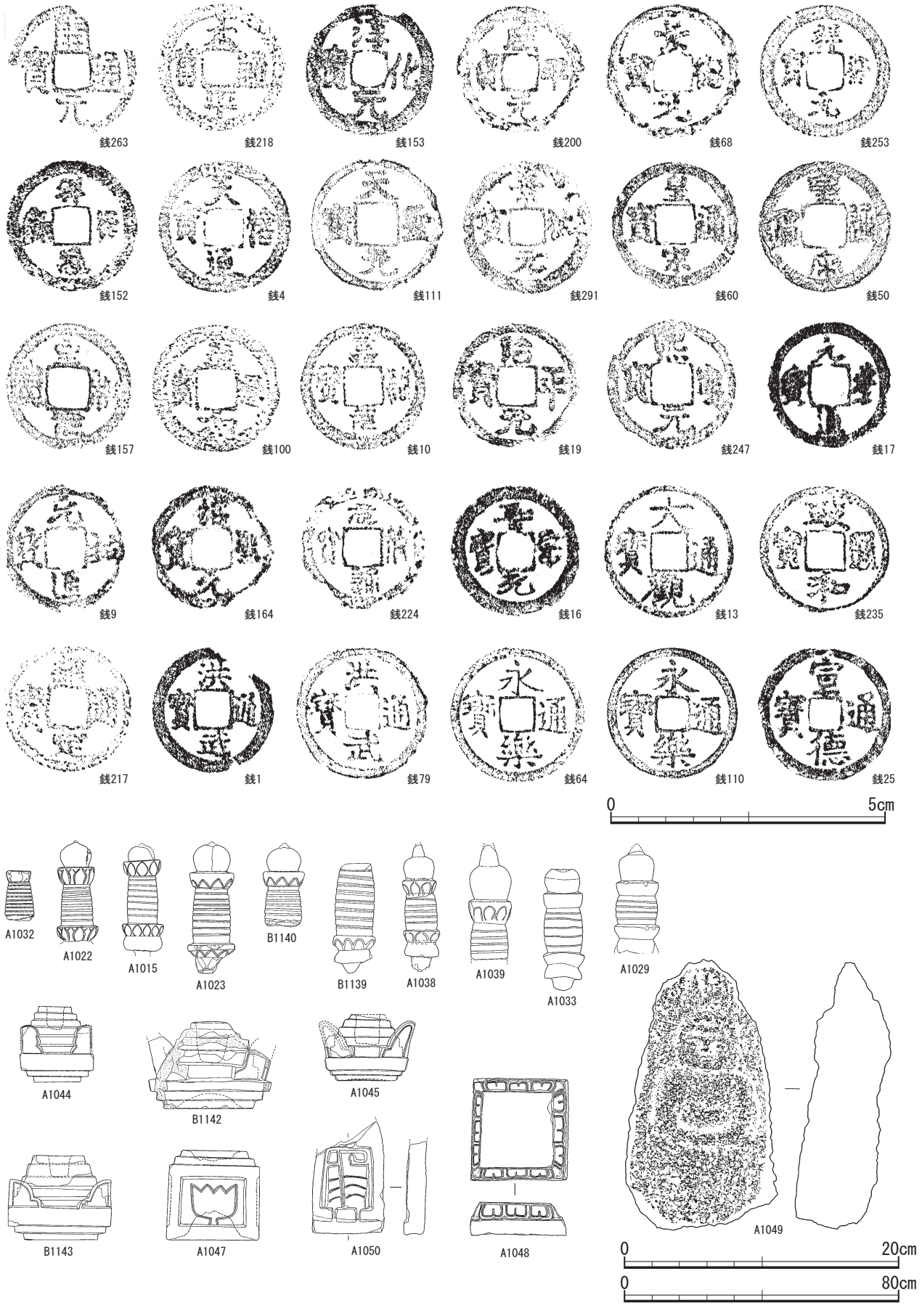
第 49 図　土師器皿ほか遺物実測図（１：４）



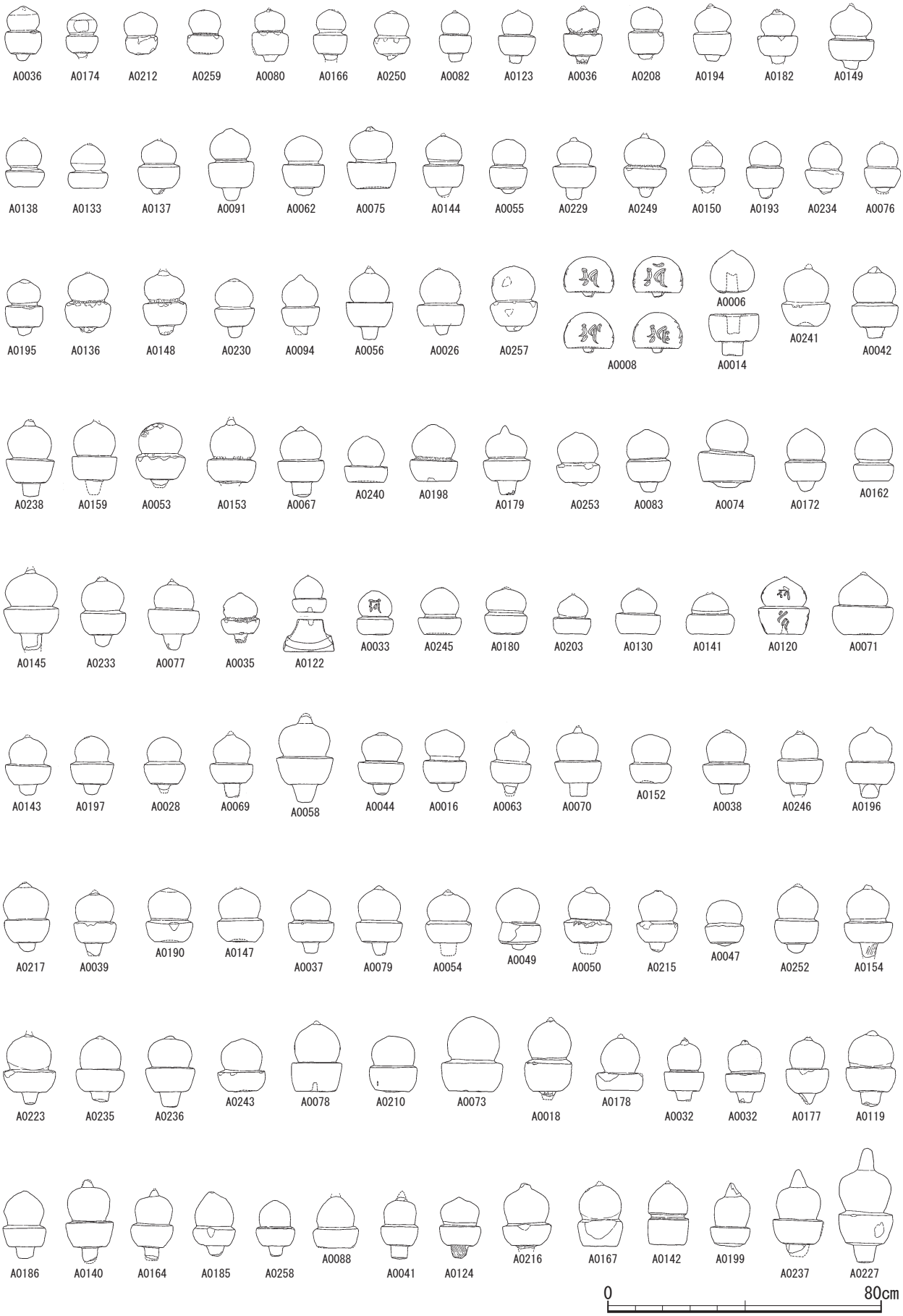
第 50 図　刀子ほか遺物実測図（１：４）



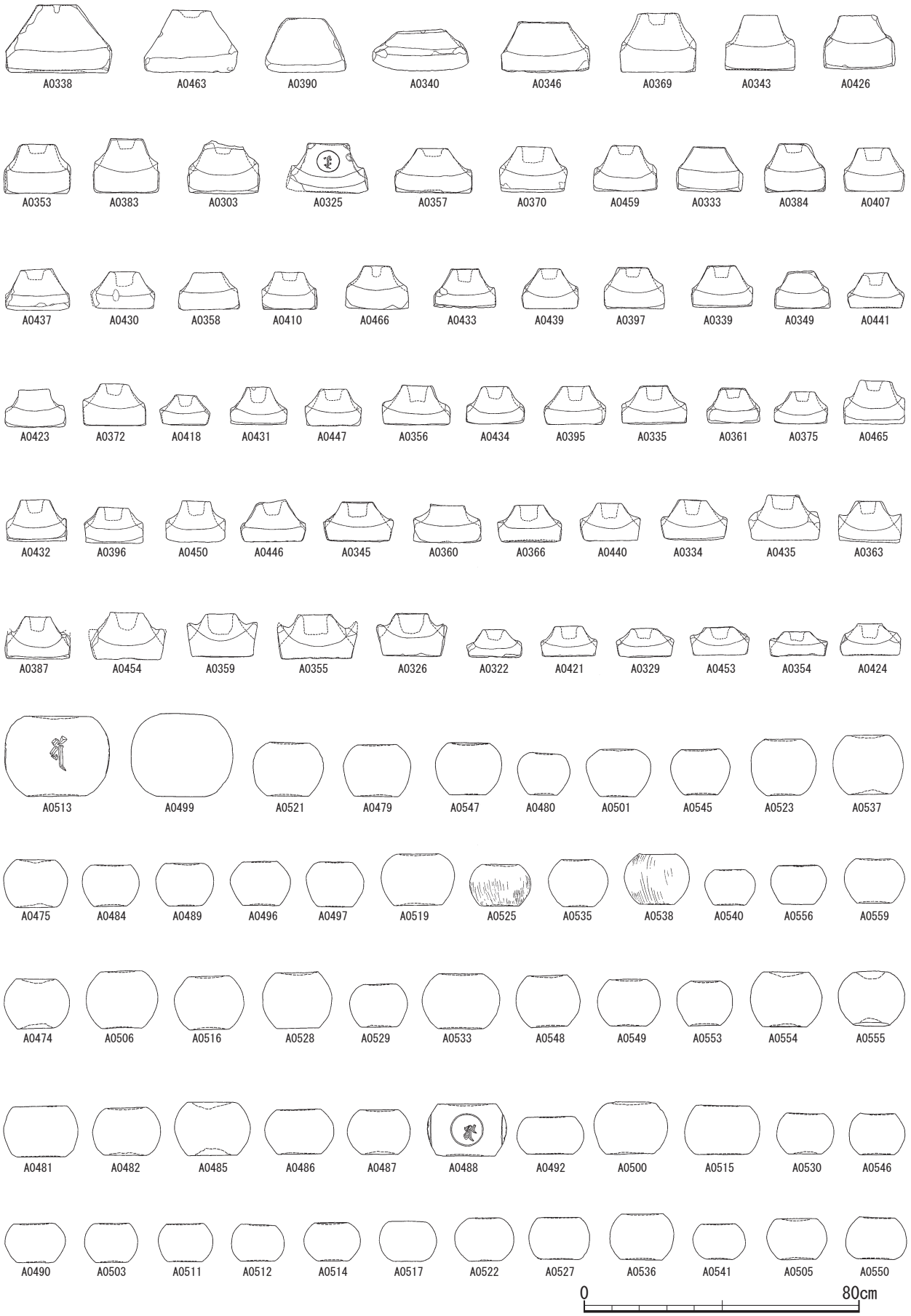
第 51 図　鉄釘ほか遺物実測図（鉄釘は１：４、他は１：８）



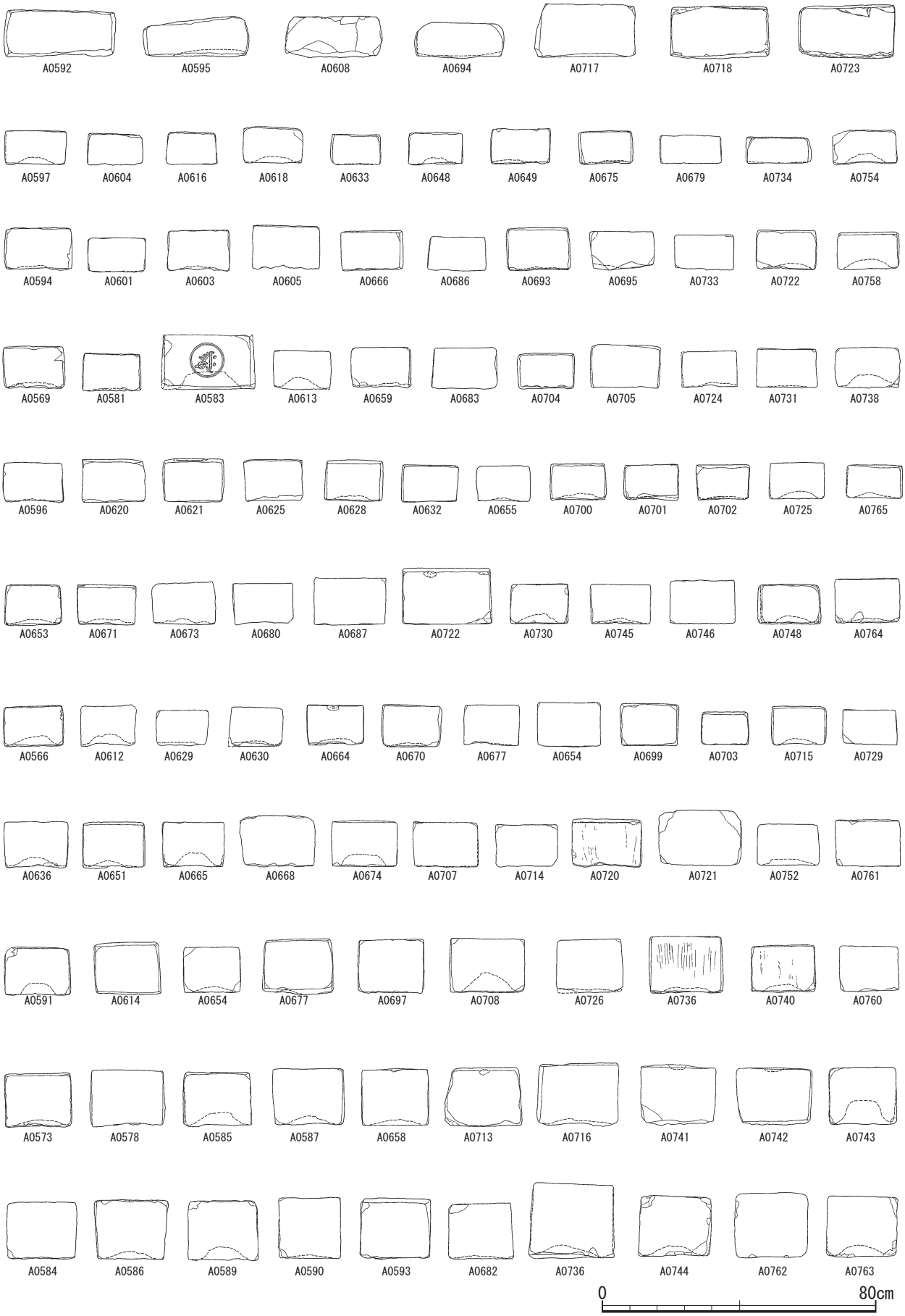
第 52 図　古銭拓影ほか遺物実測図（銭貨は 1 ： 1、石仏は 1 ： 4、他は 1 ：16）



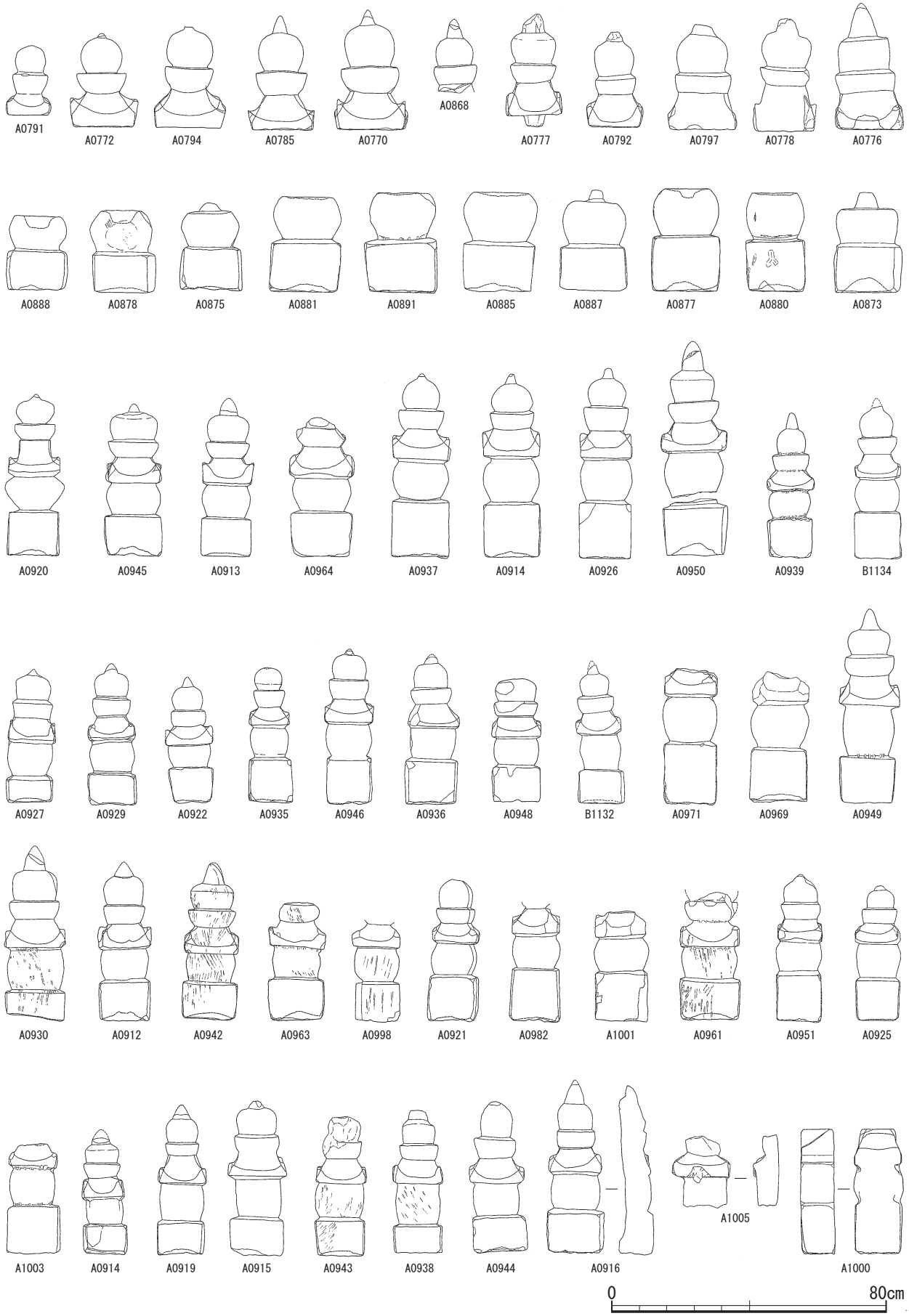
第 53 図　空風輪石塔実測図（1 ：16）



第 54 図　火・水輪石塔実測図（1：16）



第 55 図　地輪石塔実測図（1：16）



第 56 図　一石五輪塔ほか実測図（1 ：16）

北尾根支群第一テラス：1 ～ 11号墓（第10図）　本文５～６頁

報告号墓	旧称 SR№	小地区名	遺構平面形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔類№ (遺構内採取)	出土人骨 SX№	伴出土器 蔵骨器ほか	金属品 (含古銭)	備考 (図版№・重複土壙など)
1	467	T10	方形	1.2×1.0	火輪A0456 地輪A0753 地輪A0754	—	—	—	—
2	欠番 468	T10 ～ 11	（方形）	（1.5×—）	空風輪A0242 空風輪A0243 （空）風火輪A0793 火輪A0440 火輪A0441 ～ 0443 水輪A0548 地輪A0671 一石五輪塔A0946 相輪A1042 宝篋印塔基礎部A1048	—	—	—	当墓本来の平面形状不詳。A1048は宝篋印塔の台座かも知れない。
3	欠番	T10 ～ 11	方形	（1.2×1.0）	—	—	—	—	—
4	欠番	T11	不明	—×—	—	—	—	—	一石五輪塔の一部かと思える地輪の破片を採取した。
5	469	T11	方形	（1.2×1.1）	—	—	—	—	0.3m大の河原石を敷詰めた状態。
6	470	S～T11	方形	（1.0×1.0）	—	—	—	—	—
7	471	S～T11	不明	—×—	—	SX146	—	—	蔵骨器は確認できず。9号墓より古。
8	472	T12	不明	(0.7×0.6)	—	—	—	—	—
9	欠番	T11	方形か	（1.0×0.7以上）	—	—	—	—	7号墓より新。
10	477	R14	長方形	1.5×1.1	地輪A0755	—	—	—	平面上は下層にSK474が重複。
11	478	R～S14	方形	1.2×1.0	空風輪A0236	—	—	—	平面上は下層にSK475が重複。

北尾根支群第二テラス：12 ～ 28号墓（第10図）　本文６頁

報告号墓	旧称 SR№	小地区名	遺構平面形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔類№ (遺構内採取)	出土人骨 SX№	伴出土器 蔵骨器ほか	金属品 (含古銭)	備考 (図版№・重複土壙など)
12	93	S10 ～ 11	二重方形	内1.2×1.0 外2.1×1.7	火輪A0427	—	土師器小皿破片 （269 ～ 272）	—	埋土混入の土師器小皿（破片）は15ｃ後葉～16ｃ初頭頃の遺物に比定。12号墓はそれ以降の築造と推定。
13	85	S11	長方形か	2.0×1.5	—	SX82 SX83 SX84	土師器鍋（104） 土師器小皿破片 （273 ～ 275）	—	SX82出土の鍋（104）は14ｃ前半代に比定。当墓埋土中から出土の土師器小皿（273 ～ 275）は15ｃ後葉～ 16ｃ前葉頃に比定。SX83 ～ 84はそれ以降の追葬か。（第34図）
14	473	S11	不明	—×—	—	—	—	—	
15	479	S11	方形	0.9×0.8	一石五輪塔A0939 相輪A1039	—	—	—	
16	欠番	S11	不明	—×—	—	SX85 SX91	—	—	蔵骨器は確認できず。
17	521	S11 ～ 12	方形か	—×—	—	SX86 SX87 SX89	—	—	蔵骨器は確認できず。
18	480	R～S11	方形か	0.7×0.7	水輪A0542	—	—	—	宝篋印塔笠部かと思しき断片の出土するも計測は不可能。
19	481	R12	円形か	径0.8	地輪A0752	—	—	—	0.2 ～ 0.3m大の川原石を敷詰める。
20	520	S11	長方形	1.2×0.8	空風輪A0207 空風輪A0208	SX88 SX148	SX88から 土師器鍋破片（98）	—	土師器鍋（98）は13ｃ後半代に相当。SX148に蔵骨器は伴わず。
21	86	S12	方形	1.4×1.4	空風輪A0211 空風輪A0212	SX90	—	—	21号墓南側1.5m地点で人骨SX147を検出、土師器小皿破片（116）出土。小皿は13ｃ末～ 14ｃ末葉頃と推定。
22	87	R～S12	長方形	1.4×0.9	—	SX93	—	—	蔵骨器は確認できなかった。
23	88	S12	長方形	1.5×0.9	—	—	—	—	全面に石（0.25 ～ 0.3m大）敷きの様相。
24	欠番	R12	不明	—×—	—	SX92			蔵骨器は確認できなかった。
25	欠番	R12 ～ 13	不明	1.0×0.8	—	—	—	—	
26	474	S12	方形	1.3×1.3	—	—	—	—	区画中央に0.3m大の川原石を据える。
27	476	R～S13	方形	1.3×1.2	—	—	—	—	
28	475	R13	方形	1.3×1.3	—	—	—	—	

北尾根第三テラス：29号墓～ 37号墓（第10図）　本文６～７頁

報告号墓	旧称 SR№	小地区名	遺構平面形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔類№ (遺構内採取)	出土人骨 SX№	伴出土器 蔵骨器ほか	金属品 (含古銭)	備考 (図版№・重複土壙など)
29	欠番	R11	不明	不明	空風輪A0196 空風輪A0197 ～ A0200 水輪A0539 ～ 0540 水輪A0541	—	—	—	配石区画遺構の確認できず。石塔類は上からの転落か、後世に人為的に局所に集積の可能性もある。
30	欠番	R11	長方形か	（1.4×1.0）	—	—	—	—	崩落した可能性が大きい。31号墓より後出。
31	89	R11	長方形か	2.0×1.6	—	SX94			区画配石の優先順序からみて、30号墓や32号墓より先行築造と判断する。
32	64	R11	円形か	（径0.7）	—	—	—	—	区画中央に0.3m大の川原石を据える。31号墓より後出の墓。

第 13 表　A 地区検出　配石区画墓群一覧表（1 ～ 460 号墓、第 8 ～ 16 図参照。）

報告号墓	旧称ＳＲNo.	小地区名	遺構平面形状	規模(m)長辺×短辺	出土石塔類No.(遺構内採取)	出土人骨ＳＸNo.	伴出土器蔵骨器ほか	金属品(含古銭)	備考(図版No.・重複土壙など)
33	81	R12	長方形	1.5×1.3	空風輪Ａ0082～Ａ0083 地輪Ａ0603～0607	ＳＸ178	土師器小皿破片（268）	—	土師器小皿（268）は15ｃ後葉～16ｃ初頭の遺物。当墓はそれ以降の築造と推定。（人骨ＳＸ178は旧ＳＸ93で、22号墓のＳＸ93と重複のため変更。以下ＳＸ名称変更はこの同一番号重複等による混乱是正のための措置である。）
34	欠番	R11～12	不明	不明	（水）地輪Ａ0905 地輪Ａ0658	ＳＸ80	土師器小皿破片（239）	—	土師器小皿（239）は14ｃ末～15ｃ前葉に比定。当墓はそれ以降の築造と推定。
35	90	R12	方形か	1.0×1.1	—	—	—	—	
36	91	R12	長方形か	1.8×1.0	—	—	—	—	
37	92	Q12～13	方形	1.3×1.0	空風輪Ａ0201～Ａ0204 空風（火）輪Ａ0860 一石五輪塔Ａ0938	—	土師器小皿（267）破片	—	土師器小皿（267）は15ｃ後葉～16ｃ前葉に比定。当墓はそれ以降の築造と推定。

北尾根第四テラス：38号墓～46号墓まで（第10～11図）　本文７頁

報告号墓	旧称ＳＲNo.	小地区名	遺構平面形状	規模(m)長辺×短辺	出土石塔類No.(遺構内採取)	出土人骨ＳＸNo.	伴出土器蔵骨器ほか	金属品(含古銭)	備考(図版No.・重複土壙など)
38	94	Q11～12	楕円	長径1.9 短径1.2	地輪Ａ0653	—	—	—	
39	95	Q12	長方形	1.5×1.0	（備考欄参照）	—	—	—	周辺で、空風輪Ａ0229、一石五輪塔Ａ0944、火水地輪（一石五輪塔）Ａ0996、一石五輪塔Ａ0961、空風火輪Ａ0792、空風輪Ａ0230、空風（火）輪Ａ0864などを採取。
40	欠番	P～Q12	方形	1.5×1.5	（空）風輪Ａ0191 空風輪Ａ0192 空風輪Ａ0255 火輪Ａ0425 一石五輪塔Ａ0993	—	—	—	
41	欠番	Q12	長方形か	（1.5×1.2）	—	—	—	—	
42	96	Q13	方形か	（1.4×1.3）	—	—	—	—	
43	466	P～Q13	方形か	（1.0×0.9）	空風（火）輪Ａ0863 水地輪Ａ0885 一石五輪塔Ａ0934 一石五輪塔Ａ0943	—	—	—	
44	463	P13～14	方形か	1.0×—	—	ＳＸ171	—	—	Ｐ14の東斜面石の間からも骨片が少量出土。
45	464	P14	長方形か	（1.5×1.3）	—	—	—	—	斜面崩落か。
46	465	P14	長方形か	（2.0×1.2）	空風輪Ａ0220 火輪Ａ0434 地輪Ａ0666～Ａ0668	—	—	—	南北に2基並ぶ地輪（Ａ0667～Ａ0668）に西接して土師器皿細片も出土した。

北尾根第五テラス：47号墓～61号墓まで（第11図）　本文７～８頁

報告号墓	旧称ＳＲNo.	小地区名	遺構平面形状	規模(m)長辺×短辺	出土石塔類No.(遺構内採取)	出土人骨ＳＸNo.	伴出土器蔵骨器ほか	金属品(含古銭)	備考(図版No.・重複土壙など)
47	欠番	O13～P14	長方形か	（2.0×1.0）	空風輪Ａ0216～0218	—	—	—	
48	429	O～P14	方形か	（1.0×1.0）	—	—	土師器皿（127）	—	土師器皿（127）は接合し完形復元、13ｃ末頃～14ｃ末葉に比定。該墓は15ｃ初頭までには出現した可能性が高く、49号墓よりも先行すると考えられる。
49	430	O14	方形か	1.0×0.8	—	—	土師器小皿（237）	—	48号墓より後出と推定。土師器皿（237）は接合して完形復元可能で、15ｃ前葉～中葉ころに比定。15ｃ後葉までには築造と推定。
50	431	O14	方形か	（1.1×1.0）	火輪Ａ0432	—	—	—	
51	432	O14	方形	1.0×1.0	空風輪Ａ0219	（備考欄を参照）	—	—	49号墓との堺目外（区画外）で太い骨片が土中に突き刺さった状態で出土。配石遺構の痕跡なく、火葬骨にしては硬い感じがした。
52	433	O14	方形	1.4×1.3	水輪Ａ0553 地輪Ａ0740	—	—	—	
53	欠番	O14	方形か	（1.3×1.2）	地輪Ａ0741～0742 火水地輪（一石五輪塔）Ａ1002	—	—	—	52号墓より後出の墓。
54	434	O14～15	長方形	0.9×0.6	—	—	—	—	
55	435	O14～15	方形か	（1.2×1.0）	—	—	—	—	
56	436	O15	方形	（1.2×1.0）	空風火輪Ａ0791	—	—	—	平面上は、下層でＳＫ486とほぼ重複。
57	欠番	O15	不明	（1.0×—）	火水地輪（一石五輪塔）Ａ1003 風火水地輪（一石五輪塔）Ａ0962～Ａ0963	—	—	—	斜面で崩落している。
58	437	O15	方形	1.2×1.1	—	—	—	—	中央部に石囲いの小区画、納骨施設か。351号墓や411号墓にも類似の例あり。
59	501	O15	長方形か	1.3×1.0	火水輪＋地輪（一石五輪塔）Ａ0995	—	山茶碗小破片	—	斜面で一部崩落。
60	438	O15	方形	1.2×1.0	—	—	—	—	下層でＳＫ484の一部と重複するも別遺構。
61	欠番	O16	不明	（1.2×0.8）	—	—	—	—	斜面で崩落している。

第 13 表　Ａ地区検出　配石区画墓群一覧表（1～460 号墓、第 8～16 図参照。）

北尾根第六テラス：62号墓～83号墓まで（第11図）　本文８～９頁

報告号墓	旧称ＳＲ№	小地区名	遺構平面形状	規模(m)長辺×短辺	出土石塔類№(遺構内採取)	出土人骨ＳＸ№	伴出土器蔵骨器ほか	金属品(含古銭)	備考（図版№・重複土壙など）
62	97	Ｐ12	方形	（1.2×―）	空風輪Ａ0188～Ａ0189 空風（火）輪Ａ0857～Ａ0858 火輪Ａ0422 水輪Ａ0536	ＳＸ95	―	―	二重の配石区画の可能性も。
63	98	Ｐ12	方形か	（1.8×1.5）	―	―	―	―	
64	99	Ｐ12～13	方形	1.8×1.6	―	―	―	―	土坑ＳＫ465が64～65号墓と一部重複。
65	77	Ｐ12	長方形	2.5×1.4	空風輪Ａ0185～Ａ0187 空風火輪（一石五輪塔）Ａ1006 地輪Ａ0737 一石五輪塔Ａ0935 相輪Ａ1037	ＳＸ97	―	―	土坑ＳＫ465と一部重複（64号墓とも）。空風火輪Ａ1006は、一石五輪塔の水地輪部が欠失してた状態。
66	80	Ｏ12～Ｐ13	方形	1.7×1.4	空風輪Ａ0178	―	―	―	
67	欠番	Ｐ12～13	長方形か	1.4×0.9	空輪Ａ0008 空風輪Ａ0179～Ａ0180 地輪Ａ0645	―	―	―	空輪Ａ0008は梵字入り。連結用の突起部（ジョイント）がある。法量計測値等一覧表参照。
68	79	Ｏ13	方形か	（1.5×1.5）	空風輪Ａ0173～Ａ0174 空風輪Ａ0175 （空）風（火）輪Ａ0856 火輪Ａ0413 地輪Ａ0736	ＳＸ96	―	―	地輪Ａ0736は、区画配石に転用された可能性が大きい。
69	欠番	Ｐ13	楕円形	長径1.0 短径0.6	―	―	―	―	66・68・70号墓より後出。平面上、70号墓にかけて下層で土坑ＳＫ467が一部重複するが別遺構。
70	100	Ｐ13	方形か	（1.3×―）	―	―	―	―	中央部に0.3m大の川原石三個で囲む納骨施設がある。58号墓、351号墓、411号墓と同じ。平面上下層で土坑ＳＫ467が一部重複するが別の遺構。東側斜面でＳＸ267を検出し、土師器小碗破片（85）も出土した。
71	101	Ｏ～Ｐ13	長方形か	1.5×1.0	火輪Ａ0415	―	―	―	空風輪Ａ0181、火輪Ａ0416の他、空風輪Ａ0182～Ａ0183などが当該区画に近接して出土。
72	500	Ｏ13	長方形	1.5×0.7	―	―	―	―	68・71号墓よりも後出か。
73	78	Ｏ13～14	方形か	（1.0×1.0）	水地輪Ａ0882 地輪Ａ0735	―	―	―	地輪Ａ0735は区画用の配石として転用。東側斜面下で人骨ＳＸ262を検出す（15ｃ後葉～16ｃ前葉の土師器小皿破片266も伴出）。
74	欠番	Ｎ～Ｏ14	方形か	（1.1×1.0）	火水地輪（一石五輪塔）Ａ0970	―	―	―	
75	27	Ｎ14	方形	1.2×1.2	火輪Ａ0331	―	―	―	
76	440	Ｎ15	方形か	1.0×―	空輪Ａ0005 空風輪Ａ0061 空（風）輪Ａ0273 水輪Ａ0503 水地輪Ａ0874～Ａ0875 水地輪Ａ0893 地輪Ａ0584～Ａ0585 地輪Ａ0612 一石五輪塔Ａ0920～Ａ0921	―	―	―	当墓区画に近接して、空風火輪Ａ0775、 火水地輪（一石五輪塔）Ａ0983なども出土。
77	24	Ｎ14	方形	1.5×1.2	一石五輪塔Ａ0919	―	―	―	
78	23	Ｎ14～15	方形	1.5×1.2	空風（火）輪Ａ0808～Ａ0810 風火水輪（一石五輪塔）Ａ1004	―	―	―	平面上は、概ね下層のＳＫ483と重複。
79	25	Ｎ14	方形	1.4×1.3	―	―	―	―	
80	22	Ｎ15	方形	1.4×1.3	空風輪Ａ0066 空風輪Ａ0076 空風（火）輪Ａ0811 火輪Ａ0349 地輪Ａ0595 一石五輪塔Ａ0922 一石五輪塔Ａ0926 火水地輪（一石五輪塔）Ａ0968 火水地輪（一石五輪塔）Ａ0980 相輪Ａ1025	ＳＸ101	山茶碗小破片（52）	古銭（銭3）「□□通寶」？	当墓周辺には石塔類が特に多く散乱。同じ山茶碗（52）の破片は265号墓からも出土、接合し復元。12世紀中葉～の遺物であろう。銭（3）の二文字は判読不能。当墓西側から天目茶碗破片（68）が出土、14ｃ後葉のものか。
81	104	Ｍ～Ｎ15	方形か	1.0×―	―	―	―	―	平面上は、下層でＳＫ482と重複。（第35図）
82	48	Ｍ15	方形か	（1.4×1.3）	―	ＳＸ79	片口おろし皿破片（66）	古銭（銭6）「開□通寶」？	おろし皿（66）は15ｃ前葉頃に比定。当墓はそれ以降の築造と推測。銭（6）は「開慶通寶」よりも「開元通寶(開通元寶)」の可能性が高い。当墓東斜面から14ｃ前半代の山茶碗破片（59）も出土。
83	欠番	Ｍ15	方形か	（1.1×0.9）	―	―	―	―	

第 13 表　Ａ地区検出　配石区画墓群一覧表（１～460 号墓、第 8 ～ 16 図参照。）

東側中央斜面：84号墓～ 108号墓まで。（第12図）　本文９～ 10頁

報告号墓	旧称ＳＲ№	小地区名	遺構平面形状	規模(m)長辺×短辺	出土石塔類№（遺構内採取）	出土人骨ＳＸ№	伴出土器蔵骨器ほか	金属品（含古銭）	備考（図版№・重複土壙など）
84	441	Ｎ15	長方形か	（1.2×0.9）	—	—	—	—	一石五輪塔Ａ0923、地輪Ａ0586 ～ 0587、地輪Ａ0588 ～Ａ0589など多数の石塔が当墓周囲からも出土。
85	442	Ｎ15	方形	1.2×1.1	地輪Ａ0744 地輪Ａ0745	—	—	—	当墓に近接する東斜面から火輪Ａ0341 ～Ａ0342、水輪Ａ0492 ～Ａ0493、空風火輪Ａ0771 ～Ａ0772なども出土。
86	83	Ｎ16	方形	1.2×1.1	地輪Ａ0613 地輪Ａ0746 宝篋印塔基礎部（塔身）Ａ1047	ＳＸ81	—	—	
87	84	Ｎ16	長方形	1.5×1.2	空風輪Ａ0063 ～Ａ0064 空風輪Ａ0274 空（風）輪Ａ0276 空風（火）輪Ａ0814 火輪Ａ0336 ～Ａ0337 水地輪Ａ0876 地輪Ａ0747 火水地輪（一石五輪塔）Ａ0976 火水地輪（一石五輪塔）Ａ0977	ＳＸ168（旧称ＳＸ82）	—	—	当墓の周囲からは相輪Ａ1022、火水地輪（一石五輪塔）Ａ0969、火輪Ａ0330（ａ）（ｂ）、水輪Ａ0483、（水）地輪Ａ0895、水輪Ａ0484なども出土した。人骨ＳＸ168は旧ＳＸ82のこと、13号墓下層のＳＸ82と名称が重複したため変更した。
88	欠番	Ｎ16	不明	—×—	火輪Ａ0340 水輪Ａ0487 相輪Ａ1023 相輪Ａ1024 宝篋印塔屋根（笠）部Ａ1045	ＳＸ76	常滑産壺（39） 天目茶碗破片（67）	古銭（銭5）「熙寧元寶」	人骨ＳＸ76は小片。常滑産壺（39）は完形品に非ず（12ｃ中葉～ 13ｃ前葉？）。14ｃ後葉頃の天目茶碗（67）の同一破片が196号墓からも出土し、接合可能。当墓はそれ以降の築造か。ＳＸ76近辺で甕（74）も。銭5「熙寧元寶」はＳＸ76の南側で出土。当墓の周囲から一石五輪塔Ａ0914、空風（火）輪Ａ0815、火輪Ａ0338 ～ 0339のほか、地輪Ａ0583およびＡ0590等も出土。
89	欠番	Ｎ16	不明	—×—	水輪Ａ0489 地輪Ａ0751	ＳＸ153	—	—	人骨ＳＸ153は地輪Ａ0751の直下で検出。当該地輪は元位置を保持すると解釈した。蔵骨器はなし。人骨は有機質の容器に収めて埋納したと推定。
90	443	Ｍ～Ｎ16	方形か	1.3×1.1	火輪Ａ0348 一石五輪塔Ａ0979	—	—	—	
91	444	Ｎ16	長方形か	1.6×0.9	地輪Ａ0748 地輪Ａ0749	—	—	—	この両地輪は当墓区画の配石として転用された可能性が高い。
92	47	Ｍ～Ｎ16	長方形	2.0×1.4	空風輪Ａ0065 水輪Ａ0490 水輪Ａ0496 地輪Ａ0591 地輪Ａ0600 一石五輪塔Ａ0925	—	—	古銭（銭4）「天禧通寶」	水輪Ａ0496と地輪Ａ0600は同一地点からの出土。セット関係を推測させる。当墓東側の下方に隣接して古銭（銭8）「景定元寶？」が出土した（第10表参照）。
93	欠番	Ｍ16 ～Ｎ17	方形か	1.5×1.5	—	ＳＸ72 ＳＸ102	ＳＸ72から土師器鍋破片（105）	—	土師器鍋（105）は14ｃ末～ 15ｃ初頭に比定。当墓はそれ以降の築造と推定。人骨ＳＸ72は小片で、炭化物も混入出土。
94	50	Ｍ17	長方形	1.9×1.5	—	—	—	—	当墓に北接して、水輪Ａ0495、火輪Ａ0347、空風輪Ａ0073 ～Ａ0075などを採取した。
95	445	Ｎ17	方形	1.5×1.3	—	—	—	—	
96	82	Ｎ17	方形	1.4×1.0	—	—	—	—	
97	447	Ｍ17	楕円	長径2.0 短径1.6	—	—	—	—	
98	446	Ｎ18	方形か	（1.2×1.2）	—	ＳＸ103	—	—	当墓の西側と南側に隣接して、空風輪Ａ0068及びＡ0069、火輪Ａ0344、水輪Ａ0494、地輪Ａ0597等を採取。上から崩落した可能性大。
99	49	Ｎ18	方形	1.5×1.2	空風火輪Ａ0773 水地輪Ａ0877 （両方を組合わせて一石五輪塔になる）	—	経筒外容器筒身破片（29）	—	筒身（29）は複数地点から出土した破片の一つで、相互に接合。12ｃ後葉～ 13ｃ前葉に比定。空風火輪Ａ0773・水地輪Ａ0877は併せて一石五輪塔になる。当墓の西側と南側に隣接して空風（火）輪Ａ0818 ～ 0819、火輪Ａ0345、地輪Ａ0598およびＡ0599、相輪Ａ1016等を採取（上から崩落した可能性がある）。
100	52	Ｍ18	方形（土壙ＳＫ514と周溝ＳＤ874を伴う方形周溝墓）	1.8×1.7	—	—	青磁碗（63）（完形品）	—	当墓は土壙ＳＫ514と周溝ＳＤ874（幅0.6m～ 1.7m、深さ約0.3m）を伴うが、東側斜面崩落のため、南北西三方のみ残存。周溝を含む全体規模は5.1m×3.0m以上。土坑ＳＫ514底部から13ｃ～ 14ｃ代の青磁碗（63）出土。西側1m地点から人骨ＳＸ181、水輪Ａ0565出土。ＳＸ181で14ｃ末頃～ 15ｃ後葉頃の土師器小皿破片（217）が出土。ＳＸ181は旧ＳＸ182の名称を変更したもの。（第39図）
101	55	Ｍ18	長方形	1.9×1.1	—	—	青磁碗破片（64）	刀子（鉄参考38）	青磁碗（64）は13 ～ 14ｃ代。同一個体の破片は105号墓からも出土。100号墓より後出か。
102	515	Ｍ18	方形	1.1×1.0	—	—	—	—	区画配石の前後関係からみて101号墓より後出。
103	欠番	Ｍ18	方形	1.0×0.9	—	—	—	—	区画配石の前後関係からみて101号墓より後出。
104	448	Ｍ18 ～ 19	方形	1.1×0.9	—	—	—	—	区画配石の前後関係からみて101号墓より後出。
105	53	Ｍ18 ～ 19	方形	1.8×1.5	—	—	青磁碗破片（64）	—	青磁碗（64）の同一個体破片は101号墓からも出土した。両墓はほぼ同時期に前後して築造された可能性もある。

第 13 表　Ａ地区検出　配石区画墓群一覧表（１～ 460 号墓、第 8 ～ 16 図参照。）

報告号墓	旧称ＳＲ№	小地区名	遺構平面形状	規模(m)長辺×短辺	出土石塔類№(遺構内採取)	出土人骨ＳＸ№	伴出土器蔵骨器ほか	金属品(含古銭)	備考(図版№・重複土壙など)
106	欠番	M19	方形	1.1×1.0	—	—	—	—	—
107	54	M～N19	方形	1.9×1.5	—	—	—	和鏡（76）	和鏡(76）は鎌倉時代末頃の蓬莱千鳥鏡。北東付近から、空風輪Ａ0079、水輪Ａ0498が出土。区画に東接して、13ｃ中葉頃の山茶碗（55）、15ｃ中葉～後葉頃の土師器小皿破片（参考15）が出土。
108	450	M19	長方形か	(1.7×1.4)	—	—	—	—	—

西部域：109号墓～ 181号墓まで。（第11・13図）　本文11 ～ 14頁

報告号墓	旧称ＳＲ№	小地区名	遺構平面形状	規模(m)長辺×短辺	出土石塔類№(遺構内採取)	出土人骨ＳＸ№	伴出土器蔵骨器ほか	金属品(含古銭)	備考(図版№・重複土壙など)
109	422	O10	方形か	(0.9×0.9)	—	—	—	—	全面石（0.1 ～ 0.2m大）敷き。（第33図）
110	424	P10	方形	(1.3×1.2)	水地輪Ａ0883 一石五輪塔Ａ0959	—	—	—	区画配石列の切合い関係から見て、111号墓より後出の墓（111号墓の北辺を共有する形でコの字形に取付くことから判断）。
111	423	P10 ～ 11	方形	1.3×1.3	空風（火）輪Ａ0859 水地輪Ａ0889及びＡ0890 （水）地輪Ａ0911 火水輪（一石五輪塔）Ａ1012	—	—	—	110号墓より先行する墓。
112	425	P11	方形か	(1.5×1.3)	—	—	—	—	
113	426	O～P11	方形か	(1.3×—)	—	—	—	—	
114	427	O12	不明	(0.9×—)	—	—	—	—	
115	欠番	O12	方形か	(1.6×1.5)	—	—	—	—	
116	欠番	N12～O13	方形か	(1.6×1.5)	—	—	—	—	
117	420	N13	方形か	1.4×1.3	—	—	—	—	区画中央部に0.4m大の平坦な石あり。類例は10号墓や85号墓などにもあり。
118	419	N13	方形か	1.1× 1.0	—	—	—	—	
119	34	N13	方形	1.5×1.4	—	—	—	—	平面上は、土坑ＳＫ466が一部下層で重複。（121号墓とも重複する）
120	33	N13	長方形か	1.7×1.3	—	ＳＸ68 ＳＸ98	—	—	蔵骨器はない。
121	29	N13	楕円か	径1.3 ～ 1.5	空風輪Ａ0172 空風（火）輪Ａ0855	—	—	—	平面上は、土坑ＳＫ466が一部下層で重複。（119号墓も）
122	421	N13	方形	1.2×1.1	火輪Ａ0410 地輪Ａ0731 ～Ａ0734	—	—	—	地輪Ａ0731からＡ0733の3個体は一列に並ぶ。
123	418	M13	方形か	1.0×—	—	—	—	—	
124	30	N13	方形	1.7×1.2	—	—	ロクロ土師器皿底部破片（35）	—	区画配石列の切合い関係から、125号墓より後出墓と判断。当墓に東接して、空風輪Ａ0168 ～Ａ0171、火輪Ａ0409などが出土。埋土に混入のロクロ土師器皿底部破片（35）は11ｃ代以降のもの。
125	31	M13	方形	(1.5×1.2)	地輪Ａ0724 ～Ａ0729（6個体）	—	—	—	124号墓より先行する。地輪のうち、4個体（Ａ0724 ～Ａ0727）は区画配石として転用された可能性大。 2個体（Ａ0728 ～Ａ0729）はほぼ元位置を保つと推定した。
126	416	M13	円形	径1.2	—	—	—	—	
127	415	M13	不明	(0.8×0.6)	—	—	—	—	
128	32	M14	方形	1.4×1.3	空風輪Ａ0086 火輪Ａ0407	ＳＸ41 ＳＸ172	—	—	蔵骨器はない。
129	21	M14	方形	1.8×1.6	—	ＳＸ67	—	—	蔵骨器はない。平面上は、下層で土坑ＳＫ472の大半が重複。
130	26	N14	方形	1.8×1.8	火輪Ａ0411 ～Ａ0412 火輪Ａ0454 地輪Ａ0730	ＳＸ70 ＳＸ71	土師器小皿破片（263） 常滑産甕破片（73）	—	土師器小皿（263）は16ｃ前葉～後葉のもの。破片が複数地点から出土の常滑産甕（73）は15ｃ前葉～に比定。当墓南東隅下層で一部重複する土坑ＳＫ473から、焼土、炭化物などを検出した。
131	51	M14	方形	(1.8×1.5)	水輪Ａ0504	ＳＸ66 ＳＸ69	山皿小破片（参考10）	—	蔵骨器なし。山皿（参考１０）は13ｃ中葉～に比定。下層で人骨ＳＸ254を検出し、14ｃ後葉～頃の土師器小皿（216）も出土。当墓はそれより後代の築造と推定。
132	417	M14	長方形	1.4×1.0	地輪Ａ0722 ～Ａ0723	ＳＸ99	—	—	下層で人骨ＳＸ252を検出。その埋土より13ｃ末～ 14ｃ中葉頃の土師器小皿小破片（152）出土。当墓はそれより後代の築造と推定。
133	欠番	M14	方形か	(1.5×1.2)	—	ＳＸ64	—	—	蔵骨器はない。
134	15	M14	方形か	(1.3×1.2)	火輪Ａ0353 水輪Ａ0505	ＳＸ65	—	—	蔵骨器はない。
135	66	M14	方形か	(1.2×1.2)	—	ＳＸ63	—	—	蔵骨器はない。
136	414	L13	長方形か	(1.5×1.0)	空風（火）輪Ａ0853 ～Ａ0854	—	—	—	他に地輪の一部と思しき破片3点も出土するが、計測不可能。
137	413	L13 ～ 14	方形か	(1.2×1.0)	一石五輪塔Ａ0933	—	—	—	

第 13 表　Ａ地区検出　配石区画墓群一覧表（1 ～ 460 号墓、第 8 ～ 16 図参照。）

報告 号墓	旧称 ＳＲNo.	小地区名	遺構平面 形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔類No. (遺構内採取)	出土人骨 ＳＸNo.	伴出土器 蔵骨器ほか	金属品 (含古銭)	備考 (図版No.・重複土壙など)
138	412	Ｌ13～14	不明	(1.0×—)	空風火輪Ａ0790 火水輪＋地輪 (一石五輪塔) Ａ0991 一石五輪塔Ａ0955 一石五輪塔Ａ0951	—	—	—	一石五輪塔Ａ0951は区画用の配石として転用された可能性が高い。
139	102	Ｌ14	方形か	(2.2×1.6)	—	—	常滑産甕破片 (72)	—	二区画分の可能性も。その場合は (1.1×1.6) ×2区画と想定。下層でＳＫ471の一部が重複する。甕 (72) は15ｃ前半代の遺物で、複数地点から破片が出土し、接合復元。当墓はそれより後に築造されたと推定。
140	欠番	Ｋ～Ｌ14	方形か	(1.2×1.0)	地輪Ａ0716	ＳＸ57	—	—	区画中央部に0.4m大の石が据わり、その直下で人骨ＳＸ57が出土。蔵骨器はない。地輪Ａ0716は区画配石に転用された可能性も。
141	411	Ｌ14	長方形	1.3×1.1	空風火輪Ａ777 火輪Ａ0354 地輪Ａ0721	—	—	—	全面石 (0.2～0.3m大) 敷きか。
142	欠番	Ｌ14	長方形	1.3×1.1	空風 (水) 輪 Ａ0822～Ａ0823 水輪Ａ0506 地輪Ａ0717～Ａ0720	—	—	—	地輪Ａ0717～Ａ0720は元位置を保つと推定。平面上143号墓とに跨り土坑ＳＫ470が重複。
143	410	Ｌ14	方形	0.6×0.6	—	—	—	—	142号墓と144号墓とに挟まれた墓間通路を利用した後代の墓。平面上は、142号墓とに跨り下層にＳＫ470が重複。
144	407	Ｋ～Ｌ14	二重方形	内0.6×0.5 外1.3×1.1	—	—	—	—	二重方形区画の類例に12号墓や401号墓がある。石で囲んだ内郭部を納骨施設と推定すれば、58号墓、351号墓、411号墓に類例を見る。平面上は下層で土坑ＳＫ469の一部が重複。
145	4	Ｋ～Ｌ15	長方形か	(1.3×0.8)	一石五輪塔Ａ0950 相輪破片Ａ1036	—	土師器小皿破片 (255) 土師器鍋破片 (110及び参考14)	—	一石五輪塔Ａ0950は、区画配石に転用か。平面上下層に土坑ＳＫ480が重複。土師器小皿 (255) は16ｃ前葉～後葉。鍋 (110) は16ｃ前半代、鍋 (参考14) は15ｃ後葉～16ｃ初頭に比定。当墓は16ｃ前半～後半の築造と推定。
146	欠番	Ｌ15	方形か	(1.3×1.0)	—	—	山皿 (参考9)	—	接合して完形復元した山皿 (参考9) は12ｃ後葉～13ｃ初頭頃に比定。当墓はそれ以降の築造と推定。145号墓より先行。平面上は下層で土坑ＳＫ481と重複。
147	12	Ｋ14	長方形	1.4×1.0	—	—	—	—	
148	欠番	Ｋ14	不明	—×—	空風輪Ａ0090	—	—	—	
149	5	Ｋ14	長方形	1.5×1.3	風輪Ａ0013 火水輪 (一石五輪塔) Ａ1009	—	土師器小皿破片 (169～170)	—	土師器小皿 (169～170) は15ｃ中葉～後葉に比定。当墓はそれ以降に築造と推定。
150	欠番	Ｋ～Ｌ14	方形か	(1.2×1.1)	—	—	—	—	人骨はなかったが、区画中央部に0.5～0.6m大の川原石が据わる。形態的類例には、10号墓、85号墓、117号墓、120号墓、124～5号墓、129号墓、140号墓等がある。
151	10	Ｋ14	長方形	1.1×0.6	空風 (火) 輪Ａ0824 火輪Ａ0356	—	—	—	149号墓より後出 (149号墓の一辺に取付く)。
152	13	Ｋ14	方形	1.5×1.5	—	ＳＸ156 ＳＸ157	ＳＸ156から 土師器鍋破片 (97)、 ＳＸ157から 土師器小皿破片 (168)	—	土師器鍋破片 (97) は13ｃ後半代。土師器小皿 (168) は14ｃ末頃～15ｃ後葉に比定。当墓は概ね15ｃ代の所産かと推測。153号墓より後出で、154号墓に先行する墓であろう。(ＳＸ156・157の検出状況　第37図)
153	6	Ｋ14	長方形	(0.7×0.5)	空風輪Ａ0089	—	土師器小皿小破片 (246～248)	—	土師器小皿 (246～248) は15ｃ後葉～16ｃ前半代に比定。当墓はそれ以降の築造と推定。152号墓より先行する墓。
154	405	Ｋ14～15	長方形か	1.2×1.0	—	—	土師器小皿破片 (249)、 土師器鍋小破片 (111)	—	土師器小皿 (249) は15ｃ後葉～16ｃ末葉に比定。土師器鍋 (111) は複数地点から出土した破片の一つで、16ｃ中葉頃に比定。当墓は152号墓より後出で16ｃ後半代の築造と推定。
155	406	Ｋ14	方形	0.8×0.8	空 (風) 輪Ａ0300 火輪Ａ0355 地輪Ａ0714 風火水地輪 (一石五輪塔) Ａ0958	—	—	—	火輪Ａ0355、一石五輪塔Ａ0958は、当墓区画に南接して出土。
156	403	Ｋ15	円形	径0.8	—	—	—	—	157号墓より後出。
157	11	Ｋ14～15	長方形	2.0×1.3	地輪Ａ0643	—	渥美産壺破片 (49)	—	壺 (49) は複数地点から出土の破片の一つで12ｃ代か。区画配石の前後関係から、少なくとも152号墓・160号墓・173号墓より後の築造と推定。
158	欠番	Ｋ15	不明	不明	地輪Ａ0715	ＳＸ58	—	—	蔵骨器なし。160号墓の区画北隅に出来た後出墓。地輪の直下に人骨ＳＸ58を検出。(第34図)
159	3	Ｋ～Ｌ15	方形か	(0.9×—)	空風輪Ａ0165	—	土師器鍋破片 (109) 経筒外容器筒身 破片 (21)	—	土師器鍋破片 (109) は14ｃ末～15ｃ前葉。筒身 (21) は12ｃ後葉～13ｃ前葉に比定。当墓は15ｃ前半代以降の所産かと推定。
160	7	Ｋ15	方形	1.6×1.2	地輪Ａ0641	ＳＸ60	土師器鍋 小破片 (99)	—	蔵骨器なし。157・161号墓より先行。173号墓より新しい。土師器鍋 (99) 口縁部小破片は14ｃ前半代に比定。それより後代の築造と推定。(第32図)
161	8	Ｋ15	円形か	径1.0	—	—	砥石 (78)	—	160号墓より後出。砥石 (78) は16ｃ代か？

第13表　Ａ地区検出　配石区画墓群一覧表 (1～460号墓、第8～16図参照。)

報告号墓	旧称 SR№	小地区名	遺構平面形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔類№ (遺構内採取)	出土人骨 SX№	伴出土器 蔵骨器ほか	金属品 (含古銭)	備考 (図版№・重複土壙など)
162	欠番	K15	方形か	(1.2×—)	—	—	—	—	
163	17	J～K14	方形	1.1×0.7	空風輪A0091～A0092 地輪A0713	—	経筒外容器 筒身破片（20）	—	筒身（20）は複数地点から出土した破片の一つで、12c後葉～13c前葉。当墓はそれより後代の築造と推測。地輪A0713はほぼ原位置を保つと推定。当墓に近接して空風輪A0167も採取。
164	欠番	J14	不明	不明	地輪A0642	—	—	—	区画の配石遺構は残存せず。
165	14	J14	円形か	径1.0	—	—	常滑産甕小破片（88及び90）、 片口鉢破片（51）	—	常滑甕（88・90）は15c前半代、片口鉢（51）は複数地点から出土した破片の一つで、13c後葉～14c代に比定。当墓は15c前半以降に築造と推定。
166	欠番	J14	方形か	(1.2×1.1)	空（風）輪A0277 水輪A0507 水地輪A0878 相輪A1038	—	—	—	
167	18	J14	方形	(1.0×0.8)	空風輪A0166 火輪A0406 一石五輪塔A0932	—	—	—	
168	欠番	J14	方形か	(1.0×—)	—	—	—	—	
169	409	J14	円形	径1.0	—	—	—	—	当墓に近接して空風輪A0093・空風火輪A0778・水地輪A0879を採取。
170	499	J14～15	方形	(1.2×—)	地輪A0712	—	—	—	
171	404	J14～15	方形か	—×—	—	—	—	—	
172	493	J15	長方形か	(1.7×0.9)	空風火輪A0788	SX61	—	—	蔵骨器なし。当墓に近接して（水）地輪A0910・火輪A0402・水輪A0532・空風輪A0161・空風輪A0162などを採取。
173	欠番	J～K15	方形	1.9×1.5	火輪A0401	—	—	—	区画中央部に平坦面をもつ0.5～0.6m大の川原石を据える。類例に10号墓、85号墓、117号墓、124～125号墓、129号墓、140号墓、150号墓などがある。160号墓より先行か。平面上は下層にSK479が概ね重複。宝篋印塔破片・空風輪破片も採取したが計測は不可。
174	494	I15	方形か	(1.3×1.3)	火輪A0359 水地輪A0888 地輪A0707	—	—	—	通常の墓かどうか不詳（現代なら、六地蔵のような石像仏などが並んでいた可能性はないか）。
175	495	I15	方形か	1.2×1.2	空風輪A0094 空風火輪A0779 水輪A0508 水地輪A0887 地輪A0616 一石五輪塔A0928	—	—	—	通常の墓かどうか不詳。石塔類は斜面上部からの崩落もあるか。下層土坑SK476の一部が重複。（176号墓とも重複）
176	LX1	I15	方形か	1.0×0.9	—	—	—	—	通常の墓かどうか。風火輪A0780・火輪A0360・空風輪A0095・（水）地輪A0899・空風火輪A0781・相輪A1032が近接して出土（崩落か）。平面上は下層でSK476の一部が重複（175号墓とも）。
177	LX2	I14～15	方形か	1.1×0.9	—	—	—	—	通常の墓かどうか不詳。空風輪A0164が近接して出土。前方で火輪A0403を採取。
178	LX3	I14	方形か	1.0×0.9	—	—	—	—	通常の墓かどうか不詳。空風火輪A0778・水地輪A0879が近接して出土、上からの崩落か。当墓の前方で地輪A0614・火輪A0358などを採取。
179	LX4	I14	方形か	1.1×0.9	—	—	—	—	通常の墓かどうか不詳。火輪（形状良）A0357が当墓に近接して出土。
180	LX5	I14	方形か	(1.0×0.9)	—	—	—	—	通常の墓かどうか不詳。（水）地輪A0909が当墓に近接して出土。
181	LX6	I14	方形か	1.1×0.9	空（風）輪A0278 空（風）輪A0291 地輪A0640	—	—	—	通常の墓かどうか不詳。

山頂部～東尾根筋：182号墓～261号墓まで。（第13～16図）　本文14～19頁

報告号墓	旧称 SR№	小地区名	遺構平面形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔類№ (遺構内採取)	出土人骨 SX№	伴出土器 蔵骨器ほか	金属品 (含古銭)	備考 (図版№・重複土壙など)
182	35	L15～16	方形	3.5×3.2	空風（火）輪A0871 地輪A0662 地輪A0663 地輪A0765 火水地輪（一石五輪塔）A0975 水地輪（一石五輪塔）A1013	SX59	常滑産甕破片（69・73・87・91） 常滑産大甕破片（86） 山茶碗破片（53・参考5） 土師器皿破片（115）及び 小皿破片（179・180） 片口鉢破片（45・51） 白磁碗破片（参考12） 経筒外容器筒身破片（20・23・27・29）及び外容器蓋（26・28）	古銭（銭11～銭14）「大観通寶」4枚	A地区最大の配石区画墓。区画内盛土の過半を土取り等で欠失し、削平さる。中央部に埋納の大甕全体を川原石で囲む径1.4mの円形施設が残存。納骨堂と推定。石列方位の相違から184号墓などを削平後に築造と判断。破片が複数ヶ所に散乱していた大甕（86）は12c後半第四四半期頃のもの。甕（69）は14c後葉、（73・91）は15c前葉頃、（87）は14c後葉～15c初頭、山茶碗（53）は12c中葉～後葉、（参考5）は13c前葉頃、土師器皿（115）は11c末～12c前葉、小皿（179・180）は14c末頃～15c後葉、鉢（45）は14c後半代に、（51）は13c後葉～14c代、白磁碗（参考12）は14c末頃～15c後葉、筒身（20・27・29）は12c後葉～13c前葉、蓋（26・28）は12c後葉～13c前葉ころに、それぞれ比定。182号墓は甕（73・91）より後の築造と推定。当墓の変遷を物語る遺構。（第36図）

第13表　A地区検出　配石区画墓群一覧表（1～460号墓、第8～16図参照。）

報告 号墓	旧称 ＳＲ№	小地区名	遺構平面 形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔類№ (遺構内採取)	出土人骨 ＳＸ№	伴出土器 蔵骨器ほか	金属品 (含古銭)	備考 (図版№・重複土壙など)
183	45	Ｌ16	長方形	3.5×1.5	空風輪Ａ0256 ～Ａ0257 空（風）輪Ａ0302 火輪Ａ0459 ～Ａ0467 水輪Ａ0556 ～Ａ0564 地輪Ａ0570 ～Ａ0573 地輪Ａ0759 ～Ａ0764 地輪Ａ0958 相輪Ａ1041	ＳＸ281	片口鉢破片（45）、 経筒外容器筒身 破片（20・23・29）	古銭（銭1） 「洪武通寶」	地輪等が多数集中。182号墓の付属施設か。地輪Ａ0570・Ａ0573は区画石として転用か。空風輪Ａ0213・Ａ0295、宝篋印塔屋根部破片（計測不可）などが区画北西部に近接して出土。古銭（銭１）「洪武通寶」は263号墓との境界に近い区画西端で出土。片口鉢（45）は14ｃ後半代で常滑産か。 筒身（20・23・29）は12ｃ後葉～ 13ｃ前葉頃。 平面上182号墓との境目で下層土坑ＳＫ488が、土坑ＳＫ491の一部（194・196号墓にも跨る）やＳＫ492の一部もそれぞれ重複する。いずれも別遺構。182号墓が納骨堂（推定）として築造され機能して以来、多数の石塔類が当該空間に集められた可能性がある。（第36図）
184	25	Ｍ16	方形か	1.8×1.2	火輪Ａ0458 地輪Ａ0574 地輪Ａ0757	ＳＸ3 ＳＸ7	山茶碗小破片	ＳＸ7から 古銭（銭15）	重複する掘形の切合い関係のように、区画配石の石列が斜めに交差する事から、182・183号墓等の新設により削平された先行墓と判断。宝篋印塔屋根部隅飾り破片も採取。
185	36	Ｌ16	方形か	(1.0×1.0)	—	ＳＸ73	土師器鍋破片（108） 経筒外容器筒身 破片（23）	—	182 ～ 183号墓等の新設により削平された先行墓と判断。平面上は下層で土坑ＳＫ493の一部が重複。鍋（108）は14ｃ末～ 15ｃ前葉、筒身（23）は12ｃ後葉～ 13ｃ前葉に比定。当墓は少なくとも15ｃ前葉以前に出現していた可能性があると推定。
186	37	Ｍ16	方形か	不詳	空風輪Ａ0025	ＳＸ2	ＳＸ2から 土師器小皿 小破片（151） 埋土中から 山茶碗破片 （参考3）	—	182号墓や183号墓等の新設で削平された先行墓と推定。土師器小皿（151）は14ｃ中葉～後葉頃、山茶碗（参考3）は複数地点から出土した破片の一つで、13ｃ中葉代と推定。当墓は14ｃ末頃までには出現していたか。宝篋印塔の相輪Ａ1029ほか破片も近接地で採取した。蔵骨器はない。
187	449	Ｌ16	方形	1.4×1.1	—	—	—	—	区画中央に石（0.3 ～ 0.5m大）を据える。141号墓などと同じ全面石敷き。平面上は183号墓に跨り土坑ＳＫ492の一部が重複するが、別遺構。
188	欠番	Ｍ16	不詳	不詳	—	—	—	刀子 （鉄参考35）	187号墓との関係は不明。
189	38	Ｍ16	長方形	1.6×1.2	（空）風（火）輪 Ａ0813	—	—	—	182・183号墓より先行する墓と推定。宝篋印塔屋根部（笠部）破片も採取したが、計測不可。
190	39	Ｍ16	方形	1.6×1.2	—	ＳＸ74	山茶碗底部破片 （参考2）	—	人骨ＳＸ74は後に通路を墓に転用して埋納したものと推定。蔵骨器はない。下層でＳＫ495と重複。山茶碗は12ｃ中葉～後葉。当墓はそれより後出。
191	40	Ｍ16	方形	1.7×1.3	—	ＳＸ4 ＳＸ5 ＳＸ6	—	—	182・183号墓より先行する墓と推定。平面上は、下層の土壙ＳＫ494（人骨ＳＸ219を含む）と重複。ＳＸ6からは下顎骨の一部が出土（底石あり）。蔵骨器はなし。
192	欠番	Ｋ16	方形	(1.2×0.9)	—	—	—	—	182・183号墓より先行する墓と推定。平面上は、下層で土壙ＳＫ487の一部と重複。
193	欠番	Ｋ16	方形	(1.1×1.0)	空風（火）輪Ａ0806 地輪Ａ0582	—	—	—	182・183号墓より先行する墓と推定。下層で土坑ＳＫ487の一部と重複。
194	欠番	Ｌ16	不詳	(1.3×1.3)	—	ＳＸ282	—	—	蔵骨器はない。平面上は、下層に土坑ＳＫ491の一部が重複（183・196号墓にも跨る）。
195	462	Ｋ16 ～ 17	方形	1.3×1.1	空風輪Ａ0027 ～Ａ0028 空（風）輪Ａ0266 火輪Ａ0315 水輪Ａ0474 地輪Ａ0756	ＳＸ144	—	—	蔵骨器はない。下層の土坑ＳＫ501は平面上、当墓と205号墓とに跨って重複するが、別の遺構。
196	44	Ｌ16	長方形か	(1.9×1.1)	空輪Ａ0002 空輪破片Ａ0004 風輪Ａ0011 空風輪Ａ0031 空（風）輪Ａ0265 空（風）輪Ａ0296 ～Ａ0297	ＳＸ77	土師器小皿 破片（181 ～ 185）、 常滑産甕破片（91）、 天目茶碗破片（68）	—	平面上は、下層にＳＫ491の一部が重複（183号墓や194号墓にも跨る）。土師器小皿（181 ～ 185）は、15ｃ中葉～後葉に比定、甕（91）破片は複数地点から出土したうちの一点で、15ｃ前葉～頃に、天目茶碗（68）は14ｃ後葉代に比定。当墓は15ｃ中～後葉以降に築造と推定。
197	欠番	Ｌ17	方形	1.5×1.4	火輪Ａ0313 地輪Ａ0578	ＳＸ100 ＳＸ104	—	—	人骨ＳＸ104は径25 ～ 30㎝、深さ14㎝の納骨穴で多量に出土。有機質のものに納骨したか？ 196号墓とは別と判断した。
198	452	Ｌ17	方形	1.5×1.2	地輪Ａ0579	ＳＸ173	土師器細片 （時期不明）	—	蔵骨器なし。空風火輪Ａ0774や（水）地輪Ａ0896などを近接地で採取した。
199	42	Ｌ17	方形	1.3×1.2	—	—	土師器破片 陶器（甕？）破片 （共に時期不明）	—	近接地で、相輪Ａ1026のほか宝篋印塔関係の小破片などを採取。平面上は、下層で土坑ＳＫ504と重複する。
200	41	Ｍ16 ～ 17	方形か	(2.2×2.0)	—	ＳＸ75	土師器皿小破片 （113） 山皿小破片（参考11） 及び 陶器底部小破片	—	土師器皿（113）は12ｃ後半代～ 13ｃ前葉、山皿（参考11）は13ｃ前葉～に比定。当墓はそれ以降の築造と推定。188号墓より後出の墓か。
201	43	Ｍ17 ～ 18	方形か	(1.7×—)	空風輪Ａ0071 ～ Ａ0072 火輪Ａ0346	—	土師質円筒状容器 の底部破片（30～31） 経筒外容器筒身 破片（29）	—	東・南側斜面で崩落。円筒状容器（30・31）は266号墓でも出土した、12ｃ末～ 13ｃ初頭頃か。伊勢市蓮台寺滝ノ口経塚にも類似品がある。筒身（29）は12ｃ後葉～ 13ｃ前半代に比定。それ以降に築造としか言えない。

第 13 表　Ａ地区検出　配石区画墓群一覧表（1 ～ 460 号墓、第 8 ～ 16 図参照。）

報告号墓	旧称ＳＲ№	小地区名	遺構平面形状	規模(m)長辺×短辺	出土石塔類№(遺構内採取)	出土人骨ＳＸ№	伴出土器蔵骨器ほか	金属品(含古銭)	備考(図版№・重複土壙など)
202	欠番	Ｌ17	長方形か	(2.7×1.5)	相輪Ａ1027～Ａ1028 宝篋印塔屋根部破片Ａ1044	—	—	—	区画東端から宝篋印塔関係部品を4点採取したのが唯一の特徴。
203	453	Ｌ17	方形	1.3×1.1	地輪Ａ0576～Ａ0577	—	—	—	平面上は、下層でＳＫ503と重複。
204	454	Ｌ17	方形	1.1×1.0	地輪Ａ0634～Ａ0635	ＳＸ78	—	—	平坦面をもつ0.45m大の川原石を据える。類例は173号墓や187号墓などに見られる。蔵骨器はない。地輪の石材は非砂岩系で珍しい。
205	460	Ｋ17	長方形	2.5×1.9	水輪Ａ0555	—	—	—	184・195・206号墓などと共に、182・183号墓築造以前の区画配石列方位を顕著に残す。下層の土坑ＳＫ501は平面上は当墓と195号墓とに跨って重複（ＳＫ502とも重複する）。
206	461	Ｋ17～18	方形	1.8×1.7	火輪Ａ0317 地輪Ａ0580 地輪Ａ0674	—	—	—	平面上は下層土坑ＳＫ510と重複。295号墓との間の通路下層でＳＫ509が重複。
207	455	Ｌ17～18	長方形	1.7×1.3	水輪Ａ0554 地輪Ａ0575	ＳＸ9	—	刀子（鉄2）	蔵骨器なし。刀子類観察表を参照。平面上は、下層土坑ＳＫ511と重複。
208	46	Ｌ17	長方形か	1.7×1.2	一石五輪塔Ａ0989	ＳＸ1 ＳＸ174 ＳＸ175	常滑産壺 ＳＸ174で（46） ＳＸ175で（47）	刀子（鉄1）及び小刀（鉄12）	人骨ＳＸ１には蔵骨器なし。壺（46）は14ｃ代に比定、小刀（鉄12）を伴出、壺（47）は14ｃ中葉頃に比定、刀子（鉄1）が伴出。区画規模は2.3×1.2の可能性も。埋土中から経筒外容器筒身破片（29）も出土。14ｃ中葉以降に築造の墓と推定。（第34図）
209	欠番	Ｌ18	方形	(2.0×1.8)	水輪Ａ0476 水輪Ａ0528	—	—	—	
210	456	Ｌ18	方形	1.6×1.6	—	—	—	—	
211	530	Ｋ18	長方形か	(2.0×1.7)	—	—	—	—	
212	516	Ｌ18	不明	(0.9×—)	—	ＳＸ150	—	—	ＳＸ150は墓間通路へ埋納した。蔵骨器はない。平面上は下層土坑ＳＫ512と一部重複。
213	367	Ｋ18	円形か	径1.5	—	—	—	—	
214	457	Ｌ18	方形	1.3×1.2	—	—	—	—	
215	458	Ｌ18～19	方形	(1.1×1.0)	—	—	—	—	平面上は、下層のＳＫ524の一部が重複。
216	欠番	Ｌ19	方形か	(1.6×1.3)	—	—	—	—	平面上は、下層ＳＫ522と概ね重複。
217	459	Ｌ19	方形	1.3×1.2	—	—	—	—	平面上は、下層ＳＫ525と概ね重複。当墓と313号墓及び314号墓との間の通路直下で土坑ＳＫ523が重複。
218	451	Ｍ20	方形か	(1.0×0.8)	—	—	—	—	
219	欠番	Ｍ19～20	方形か	(0.9×—)	—	—	—	—	
220	59	Ｌ20～Ｍ21	長方形	(2.7×2.0)	—	ＳＸ176	渥美産壺（40） 山茶碗（56）	—	約0.3mの墳丘状盛土あり。渥美産壺（40）は12ｃ末～13ｃ初頭に比定、13ｃ前葉～中葉頃の山茶碗（56）を蓋にして埋納、墓はそれ以降の築造。区画内から出土の土師器皿小破片（136）は後代の混入遺物。（第35図）
221	67	Ｎ16	方形（付周溝ＳＤ875～ＳＤ876）	2.1×2.1	—	—	ロクロ土師器皿底部破片（36～37）	土壙ＳＫ533から 刀子（鉄4）1点	221号墓検出段階では土壙や周溝の存在は判らなかった。下層土壙ＳＫ533及び周溝ＳＤ875～876と一体の方形周溝墓。配石区画内に約0.26～0.34mの墳丘状盛土残存。周溝は幅0.6m～0.85m、深さ0.3～0.4mで、その埋土中から出土したロクロ土師器皿底部破片（36・37）は11から12ｃ代に比定。少なくとも当墓はそれ以降の所産。
222	63	Ｌ～Ｍ21	方形	1.8×1.8	空風輪Ａ0136	—	—	—	平面上は、下層に土坑ＳＫ546が重複。223号墓との間の下層にＳＫ547が重複。水輪Ａ0519・火輪Ａ0383～Ａ0384・地輪Ａ0625などを隣接地で採取した。
223	61	Ｍ21	不詳	不詳	空風火輪Ａ0798	—	—	—	空風火輪Ａ0798は区画配石として転用か。222号墓との間で下層土坑ＳＫ547が重複。
224	欠番	Ｍ21	方形か	不詳	—	—	—	—	推定区画中央部にＳＫ882（径約0.5m）のみ残存。遺物はなし。
225	62	Ｍ21～22	方形	1.2×1.1	水地輪Ａ0892	—	—	—	水地輪Ａ0892は北西隅の区画配石として転用されていた。
226	511	Ｎ21	方形か	(2.0×1.8)	—	—	—	—	水地輪Ａ0881を隣接地で採取。刀子（鉄17）が東接して出土。
227	68	Ｏ21	楕円形（配石区画はなく付周溝）	長径約2.5m 短径約2.0m	—	—	—	—	約0.4mの墳丘状盛土遺構。三方に周溝ＳＤ877がめぐる。溝幅約0.8m～1.0m、深さ約0.3m～0.45m。遺物なし。周溝の切合い関係から、221号墓より新しく236号墓より古い。（第37図）
228	65	Ｍ21～22	方形	1.7×1.6	空風（火）輪Ａ0841～Ａ0842 火輪Ａ0375	—	—	—	383号墓より先行する墓。近接地で空風輪Ａ0125や地輪Ａ0624を採取。平面上は下層の土坑ＳＫ554と重複。
229	欠番	Ｍ22	長方形	(1.7×0.9)	—	ＳＸ62	土師器小皿破片（222）	—	228号墓と230号墓との間（墓道）を利用した墓、従って両墓より後出の転用墓。ＳＸ62出土の土師器小皿（222）は14ｃ末～15ｃ前葉に比定。墓はそれ以降の築造と推定。
230	56	Ｍ22	方形	1.8×1.8	空風輪Ａ0135	ＳＸ52	—	—	397号墓より先行する墓。平面上は下層の土坑ＳＫ555と重複。231・232号墓にも跨ってＳＫ556の一部も重複。

第 13 表　Ａ地区検出　配石区画墓群一覧表（1～460 号墓、第 8～16 図参照。）

報告号墓	旧称ＳＲNo.	小地区名	遺構平面形状	規模(m)長辺×短辺	出土石塔類No.(遺構内採取)	出土人骨ＳＸNo.	伴出土器蔵骨器ほか	金属品(含古銭)	備考(図版No.・重複土壙など)
231	513	M22	長方形か	(1.9×1.4)	—	ＳＸ53	—	—	234号墓との間で空風輪Ａ0123～Ａ0124や水輪Ａ0514などを採取。平面上は230号墓・232号墓に跨って下層土坑ＳＫ556の一部が重複。
232	欠番	M～N22	方形	1.1×1.0	—	—	—	—	平面上は、230・231号墓にも跨って下層の土坑ＳＫ556が重複。233号墓にかけては下層ＳＫ557も重複している。
233	512	N22	方形	(1.3×1.3)	空風火輪Ａ0785	—	—	—	平面上は、232号墓にかけて下層ＳＫ557が重複。
234	71	N22	方形	2.0×1.9	水輪（梵字）Ａ0513	—	—	—	平面上は、火葬施設ＳＫ558の約半分が重複。梵字入り水輪Ａ0513は238号墓出土の梵字入り空風輪Ａ0120とセット関係になる。
235	70	N～O22	円形	径約2.5m	地輪Ａ0675	ＳＸ205	渥美産壺（43）	小刀（鉄参考36）	高さ約0.36mの墳丘状盛土。渥美産壺（43）は12ｃ後半代に比定、0.25m大（厚さ0.1m）の扁平な石を蓋に。小刀（鉄参考36）は副葬品。墓は12ｃ後半代以降に築造と推定。（第37図）
236	69	O～P22	楕円形（付周溝ＳＤ878）	長径約3.5m短径約2.5m	—	—	土師器小皿破片（238）	—	高さ約0.3mの墳丘状盛土遺構。周溝ＳＤ878は幅0.5m～1.2m、深さ0.3m～0.65m。周溝内出土の土師器小皿（238）は15ｃ中葉～後葉に比定。周溝はそれ以降に埋没したと推定。当墓はそれ以前の築造であろう。
237	欠番	P22	不詳	不詳	—	—	—	—	半円状土壙あり。平面上は、下層の土坑ＳＫ559が重複。
238	514	M22～23	方形	1.5×1.4	空風輪（梵字入り）Ａ0120	—	—	—	239号墓より先行する。空風輪Ａ0120は234号墓出土の水輪Ａ0513とセット関係になる可能性がある。平面上は下層土坑ＳＫ558の一部分が重複。
239	58	M～N23	方形	1.8×1.7	—	—	—	—	238号墓及び240号墓より後出の墓。火水地輪（一石五輪塔）Ａ0987を近接地で採取した。
240	72	N23	長方形	1.9×1.5	空風輪Ａ0121	—	—	—	盛土約0.4～0.42m。平面上は下層土壙ＳＫ568が重複。239号墓より先行し、243号墓より後出の墓。
241	欠番	N23	長方形	2.2×1.0	火輪Ａ0370 地輪Ａ0623	—	—	—	240号墓より後出。
242	484	N23	方形	(1.3×0.9)	—	—	—	—	
243	73	N～O23	方形（付周溝ＳＤ879）	2.5×2.4	—	ＳＸ177（ＳＫ570の内）	—	—	約0.5mの墳丘状盛土が残存。火葬土坑ＳＫ570の直上に築いた墓。三辺に周溝ＳＤ879が巡る。溝幅約0.5m～1.0m、深さ0.25mを測る。形状的には小規模な方形周溝墓。240号墓より先行する墓。蔵骨器なし。（第38図）
244	482	O23	方形	1.3×1.3	空風輪Ａ0029 水輪Ａ0475	—	—	—	243号墓より後出。火輪Ａ0374を近接地で採取。
245	欠番	O23	楕円形	1.1×0.6	—	ＳＸ169	—	—	244号墓・246号墓より後出か。親縁関係ありと推定。人骨ＳＸ169は旧ＳＸ147を名称変更した。蔵骨器はなし。
246	483	O23	方形	1.9×1.6	空風輪Ａ122	—	—	—	243号墓より後出の墓。
247	欠番	N24	長方形か	(2.0×1.0)	空風（火）輪Ａ0840 火輪Ａ0369	ＳＸ128	—	—	蔵骨器なし。空風輪Ａ0119を近接して採取した。
248	336	N24	方形	1.2×1.2	—	—	—	—	
249	74	N24	長方形	3.2×1.8	—	—	土師器高台付椀底部破片（80）、土師器小皿破片（235）	—	414号墓・443号墓より先行する墓。土師器椀（80）は15ｃ後半～16ｃ初頭頃か。土師器小皿（235）は14ｃ末～15ｃ後葉に比定。墓は15ｃ後葉以降に築造と推定。
250	75	N～O25	長方形	3.0×1.8	地輪Ａ0681	—	—	—	盛土高約0.4～0.44m。平面上は下層に土坑ＳＫ594が重複する。
251	508	O～P24	方形	1.2×1.2	—	—	—	—	平面上は、下層にＳＫ579がおおむね重複。
252	507	P24	方形	1.0×1.0	—	—	—	—	
253	509	O24～25	方形	(1.2×1.1)	—	—	—	—	
254	506	P25	円形か	(径1.1)	—	—	—	—	平面上、257号墓との中間部の下層で土坑ＳＫ595が重複する。
255	505	P25～26	方形か	(1.1×1.1)	—	—	—	—	
256	欠番	P26	方形か	(1.0×—)	—	—	—	—	
257	106	O25	長方形	2.7×1.9	—	—	—	—	残存する盛土高約0.3m。平面上、254号墓との中間部の下層で土坑ＳＫ595が重複。
258	108	O26	方形	1.5×1.5	—	—	—	—	
259	503	P26	方形	0.9×0.9	—	—	—	—	
260	109	P26	方形か	(1.6×1.2)	—	—	—	—	
261	504	P26～27	方形か	(1.0×1.0)	—	—	—	—	

南・東側斜面：262号墓～460号墓まで（第13～16図）　本文19～28頁

報告号墓	旧称ＳＲNo.	小地区名	遺構平面形状	規模(m)長辺×短辺	出土石塔類No.(遺構内採取)	出土人骨ＳＸNo.	伴出土器蔵骨器ほか	金属品(含古銭)	備考(図版No.・重複土壙など)
262	欠番	L15	長方形か	(2.0×1.1)	—	—	—	古銭（銭2）「永楽通寶」1枚	銭貨観察表（銭２）参照。

第13表　Ａ地区検出　配石区画墓群一覧表（1～460号墓、第8～16図参照。）

報告号墓	旧称ＳＲ№	小地区名	遺構平面形状	規模(m)長辺×短辺	出土石塔類№(遺構内採取)	出土人骨ＳＸ№	伴出土器蔵骨器ほか	金属品(含古銭)	備考(図版№・重複土壙など)
263	1	K15～16	方形か	(1.5×1.4)	—	ＳＸ55	—	—	蔵骨器なし。当墓の南西側隣接地で風火水輪（一石五輪塔）A1007・水地輪A0884を採取。人骨ＳＸ55の南側（183号墓西端）で古銭（銭１）「洪武通寶」が出土。平面上は下層土坑ＳＫ487の一部と重複。
264	402	K16	長方形か	1.5×1.1	—	ＳＸ56	常滑産甕小破片(87)	—	蔵骨器なし。甕（87）は14ｃ後葉～15ｃ初頭頃に比定、当墓はそれより以降の築造と推定。同個体の別の破片は182号墓からも出土。
265	2	K16	不詳	不詳	—	ＳＸ145	山茶碗小破片(52)	—	蔵骨器なし。人骨ＳＸ145は264号墓の南東外に接して検出、本来は墓間通路の可能性も。山茶碗（52）は12ｃ中葉頃に比定、同個体の別の破片は80号墓からも出土。
266	9	K～L16	不詳	不詳	相輪A1017	ＳＸ10 ＳＸ142 ＳＸ143	土師質円筒状容器の底部破片（30）及び（31）、常滑産片口鉢破片(45) 経筒外容器筒身破片（29）	鉄釘(鉄52)	蔵骨器なし。（30）（31）の同一個体の破片は201号墓からも出土、12ｃ末～13ｃ初頭頃に比定（伊勢蓮台寺滝ノ口経塚でも類似遺物あり）。鉢（45）の破片は182号墓・183号墓からも出土、14ｃ代に比定。筒身（29）の破片は99・182・183・201号墓からも出土、12ｃ後葉～13前半代に比定。当墓は14ｃ代以降の築造と推定。
267	欠番	K16	不詳	不詳	空（風）輪A0299	（ＳＸ142）	—	—	266号墓のＳＸ142は当墓の可能性もある。
268	欠番	J～K16	方形か	(1.5×1.2)	(水）地輪A0903 相輪A1018	—	—	—	
269	401	J16	方形	1.1×1.1	—	—	—	—	270号墓より後出の墓。当墓の西側近接地で火輪A0400や（水）地輪A0902を採取した。
270	400	J16	方形	1.1×1.1	—	—	—	—	269号墓より先行する墓。
271	398	J16～17	長方形か	(1.5×1.1)	—	—	—	—	
272	欠番	J16	方形か	(1.3×1.3)	地輪A0639	—	—	—	270号墓より後出の墓。
273	399	J16	方形	1.2×1.1	—	ＳＸ8	土師器鍋破片（102）	ＳＸ8から刀子(鉄27)	西側通路で火輪A0323・火輪A0398を採取。鍋（102）は扁平な石（0.28m大、厚さ0.11m）を蓋にしていた、14ｃ前半代に比定。当墓はそれ以降の築造と推定。（第34図）
274	498	I16～17	円形か	(径1.1)	—	—	—	—	当墓の西側で一石五輪塔A0913を採取。
275	497	I～J17	円形か	(径1.0)	水輪A0530	ＳＸ151	—	ＳＸ151の北西0.3mで刀子1本(鉄16)	人骨ＳＸ151は旧ＳＸ10の名称を変更。刀子類観察表参照。
276	392	I～J17	方形	(1.3×1.1)	—	—	—	—	277号墓より後出の可能性。平面上は下層の土坑ＳＫ497とほぼ重複する。
277	393	J17	円形	径1.4	—	—	—	—	276号墓より先行する可能性。近接地で空風輪A0055を採取。
278	欠番	J17	円形か	(径1.0)	—	—	—	—	—
279	欠番	J17	方形か	(0.9×—)	空・風輪小破片 水輪A0478	—	—	—	平面上は、下層でＳＫ498の一部が重複（280号墓とも）。
280	394	J17	長方形か	(1.1×0.9)	—	—	—	—	集石残存。平面上は、下層でＳＫ498の一部と重複（279号墓とも）。
281	397	J17	円形か	(径1.1)	—	—	—	—	—
282	16	J～K17	(長方形)	(—×0.45)	空（風）輪A0289 空風（火）輪A0851 水輪A0529	ＳＸ162	土師器羽釜破片(94)	—	本来281号墓と283号墓との間の通路であった空間を転用か。平面上は下層でＳＫ500の一部が重複。土師器羽釜（94）は15ｃ中葉頃に比定。当墓はそれ以降の築造と推定。人骨ＳＸ162は旧ＳＸ12の名称を変更した。
283	396	K16～17	長方形	1.5×1.1	—	—	—	—	平面上は下層にＳＫ500の大半が重複。近接地で地輪A0636、地輪A0637・空風（火）輪A0850などを採取。
284	20	K17	(長方形)	(—×0.45)	空（風）輪A0272 水地輪A0873 相輪A1043	ＳＸ11	土師器羽釜破片(93)	—	本来は283号墓と285号墓との間の通路であった空間を転用か。土師器羽釜（93）は16ｃ代に比定。当墓はそれ以降に築造と推定。
285	395	J～K17	長方形	2.1×1.9	一石五輪塔A0990	—	—	—	295号墓に先行する墓。東側墓道で空風火輪A0767や空風輪A0054を採取した。
286	390	J18	方形	1.2×1.1	—	—	—	—	平面上は、下層のＳＫ499と概ね重複。
287	欠番	J17	方形か	(1.0×1.0)	—	—	—	—	
288	欠番	I17～18	方形か	(0.9×0.9)	空風輪A0033 空（風）輪A0290	—	—	—	
289	欠番	I17	不詳	不詳	—	—	—	—	
290	391	I17～18	方形か	不詳	火輪A0453 地輪A0638	—	—	—	
291	欠番	I18	不詳	不詳	—	ＳＸ12 ＳＸ13	—	—	人骨ＳＸ13の直上には扁平な石が据えてあった。更にその直上に曾ては五輪塔が設置されていた可能性がある。
292	112	J18	円形か	(径1.5)	空風輪A0034 空風輪A0035	—	ロクロ土師器皿底部破片（33）	—	本来は全面石敷きか。ロクロ土師器皿（33）は埋土混入遺物で11ｃ代に比定。平面上は、下層土坑ＳＫ506は当墓とほぼ重複する。
293	373	J17～18	方形か	(1.5×—)	空風輪A0032 火輪A0324	—	—	—	平面上は下層で土坑ＳＫ507がほぼ重複する。
294	370	J17～18	方形か	(1.3×1.3)	空風輪A0158	—	—	—	296号墓より先行する墓。

第13表　A地区検出　配石区画墓群一覧表（1～460号墓、第8～16図参照。）

報告号墓	旧称 SR No.	小地区名	遺構平面形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔類No. (遺構内採取)	出土人骨 SX No.	伴出土器 蔵骨器ほか	金属品 (含古銭)	備考 (図版No.・重複土壙など)
295	369	K17～18	長方形	2.4×1.8	空風輪A0057 空風（火）輪A0805	—	—	—	285号墓より後出の墓。当墓と206号墓との間の通路部分の下層でSK509が重複。
296	371	J18	長方形	(1.5×0.9)	（空）風輪A0251	—	—	—	本来は墓道であった空間を利用した墓か。294号墓・295号墓より後出の墓。
297	372	J～K18	方形	(1.3×1.2)	—	—	—	—	296号墓に先行し、295号墓より後出の墓。南東側の墓道で水輪A0479・空風輪A0056を採取。
298	374	J18	長方形	1.4×1.1	—	—	—	—	
299	375	J18	方形	1.3×1.3	—	—	—	—	
300	376	J18	方形	1.2×1.1	火輪A0396	SX161	—	—	蔵骨器なし。東側墓道で水輪A0525・水輪A0526を採取。旧SX11が284号墓SX11と名称重複したのでSX161に変更した。
301	377	J18	方形か	(1.0×—)	空風輪A0157	—	—	—	
302	378	J18～19	方形か	(1.0×—)	—	—	—	—	区画中央部に平坦面をもつ0.5m大の石が据わる、人骨なし。173号墓、187号墓、204号墓などに類例。平面上は、大略下層土坑SK517と重複する。
303	379	I～J18	円形か	（径1.1）	—	—	—	—	
304	欠番	I～J18	方形か	(0.9×0.9)	地輪A0581	—	—	—	
305	380	I18～J19	方形か	(1.0×0.9)	—	SX14	—	—	蔵骨器なし。
306	381	J19	方形か	(1.1×—)	空風輪A0036 火輪A0321 地輪A0700～0704	—	—	—	五個体の地輪が集中。（地輪A0702～A0704は区画配石に転用された可能性もある。）
307	529	K18	長方形	(2.1×1.4)	—	—	—	—	平面上は下層で土坑SK508と重複。
308	365	K18～19	方形	(0.9×0.6)	—	—	—	—	当墓は、墓道を転用して築造したと判断。
309	366	K18～19	方形	1.3×1.3	—	—	—	—	
310	362	K19	方形	1.5×1.3	水輪A0480 （水）地輪A0908	—	—	—	
311	364	K19	長方形	1.6×1.1 (1.1×1.1)	空風輪A0150	—	—	—	平坦面をもつ0.4m大の石が2個据わるも人骨の出土なし。310号墓・312号墓より後出の墓。下層土坑SK520が当墓と312号墓とに跨って重複。
312	111	K19	方形	1.1×1.0	—	—	—	—	315号墓より後出の墓。空風輪A0151・（水）地輪A0900を南西側に隣接する墓道で採取。平面上は、当墓と311号墓に跨り下層土坑SK520が重複。
313	368	K19	円形か	径1.8	—	—	—	—	315号墓より後出の墓か。空風輪A0149を西側隣接地で採取。平面上、314号墓・217号墓との間の通路直下に土坑SK523が重複。
314	欠番	K～L19	長方形か	(2.0×—)	—	—	—	—	本来は墓道であったか。平面上は217号墓・313号墓との間の通路直下に土坑SK523が重複。
315	311	K19～20	方形	1.9×1.8	—	—	—	—	平面上は下層で土坑SK521と重複。空風輪A0049を隣接地で採取。
316	383	K19～20	方形	1.3×1.2	空風（火）輪A0846 空風（火）輪A0847 地輪A0627	—	—	—	空風輪A0147・空風輪0148・水輪A0521を近接地で採取。
317	363	J19	方形か	1.3内外	火輪A0391	—	—	—	地輪A0628を近接地で採取。墓道利用か。平面上は下層で土坑SK518の一部分が重複。
318	361	J19	長方形	2.4×1.1	空風輪A0155 火輪A0319 地輪A0705	SX15 SX16	—	—	蔵骨器なし。人骨SX16は平坦面をもつ0.3m大の石の下から出土。319号墓より後出か。320号墓に先行する墓。東接地で地輪A0631～火輪A0394などを採取した。
319	382	J19	長楕円形	2.0×1.0	—	SX105	—	—	蔵骨器なし。径1.1mの円形の可能性も。人骨SX105は平坦面をもつ0.3m大の石の下から出土。水輪A0522を近接地で採取。平面上は下層で土坑SK519が概ね重複。
320	217	J19	方形	1.3×1.2	空（風）輪A0267 空風輪A0039 地輪A0680	SX38 SX106 SX107 SX108	—	—	蔵骨器なし。318号墓との間で空風輪A0156を採取。318号墓に西接して321号墓と一体の墓であった可能性も。
321	欠番	J19	方形	1.3×1.3	火輪A0318	—	—	—	320号墓と一体で長方形の墓になる可能性もある。
322	欠番	J19	方形か	(1.0×—)	—	SX170	—	—	蔵骨器なし。人骨SX170は旧SX148を名称変更した。平面上は当墓と325号墓とに跨って下層で土坑SK516が重複する。
323		J19	方形か	(1.0×1.0)	地輪A0699	—	—	—	
324	欠番	I～J19	方形か	(1.2×—)	火輪A0395 水輪A0524	—	—	—	平面上、下層土坑SK515と重複する。SK515出土の土師器皿破片は13c末～14c前葉頃に比定（土坑一覧表参照）。
325	387	I～J19	方形か	(1.3×1.3)	一石五輪塔A0931	SX29	—	—	平面上は当墓と322号墓とに跨り下層で土坑SK516が重複。
326	384	J20	方形	1.2×1.1	—	—	—	—	
327	385	J20	方形	1.8×1.8	空（風）輪A0270	—	—	—	328号墓より先行する墓。
328	386	J20	方形	0.8×0.8	空風輪A0040 火輪A0452 （水）地輪A0886 一石五輪塔A1000	SX28	—	—	蔵骨器なし。327号墓より後出の墓。左記A0452～A1000の石塔は当該328号墓を造る際、明らかに他から集めて区画用配石として転用したもの。当墓の後代性を示す。

第13表　A地区検出　配石区画墓群一覧表（1～460号墓、第8～16図参照。）

報告号墓	旧称ＳＲ№	小地区名	遺構平面形状	規模(m)長辺×短辺	出土石塔類№(遺構内採取)	出土人骨ＳＸ№	伴出土器蔵骨器ほか	金属品(含古銭)	備考(図版№・重複土壙など)
329	388	Ⅰ～Ｊ20	方形	(1.1×—)	空風（火）輪Ａ0849 地輪Ａ0632 地輪Ａ0633	—	—	—	
330	389	Ｊ20	方形か	(1.6×—)	—	—	—	—	当墓の西側で一石五輪塔Ａ0954を採取。
331	301	Ｋ20	方形	1.5×1.2	—	—	—	—	332号墓より後出の墓か。
332	302	Ｊ～Ｋ20	方形	1.2×1.2	—	—	—	—	331・333号墓より先行する墓か。
333	303	Ｊ20	方形	(1.2×1.2)	—	—	—	—	332号墓より後出の墓か。平面上は334号墓・340号墓に跨り下層で土坑ＳＫ528が重複。
334	304	Ｊ20	不詳	不詳	—	—	—	—	平面上は333号墓・340号墓に跨り下層で土坑ＳＫ528が重複する。
335	305	Ｊ20	長方形か	1.7×1.2	相輪Ａ1019	ＳＸ25	—	—	人骨ＳＸ25は平坦面をもつ0.4m大の石の直下から出土、蔵骨器はなし。平面上は下層で土坑ＳＫ527の一部が重複する。
336	欠番	Ｊ20～21	方形か	(1.5×—)	—	—	—	—	
337	537	Ｊ21	長方形か	(2.0×—)	—	ＳＸ26 ＳＸ27	—	—	蔵骨器なし。
338	306	Ｊ20～21	長方形か	(1.6×1.0)	空風輪Ａ0051 相輪Ａ1020	ＳＸ24	—	—	蔵骨器なし。平面上は下層で土坑ＳＫ534と概ね重複する。
339	307	Ｊ20～21	方形	1.0×0.9	空風輪Ａ0050	—	—	—	
340	308	Ｊ～Ｋ20	方形	1.2×1.1	空風輪Ａ0041 空風輪Ａ0042 空風輪Ａ0141 空風輪Ａ0146	(下層でＳＸ232を検出)	—	刀子（鉄20）	蔵骨器なし。下層検出の人骨ＳＸ232（刀子鉄20伴出）は当墓に伴う可能性あり。平面上は333号墓・334号墓に跨り下層土坑ＳＫ528も重複する。
341	309	Ｋ20	方形	1.2×1.2	空風輪Ａ0044 空風輪Ａ0045 地輪Ａ0626	ＳＸ17 ＳＸ152	—	—	蔵骨器なし。空風輪Ａ0043・Ａ0046～Ａ0048・火輪Ａ0322を近接四周で採取した。
342	310	Ｋ20	方形	1.3×1.1	—	—	—	—	343号墓より後出の墓。
343	491	Ｋ～Ｌ20	方形	1.4×1.4	—	—	—	—	344号墓より先行する墓。
344	欠番	Ｋ～Ｌ20	方形	1.0×0.9	—	—	—	—	343・349号墓より後出の墓。
345	489	Ｌ20	方形	(1.5×1.3)	—	—	—	—	平面上は下層の土坑ＳＫ531と概ね重複する。ＳＫ531から土師器皿・小皿6枚出土、14ｃ末～15ｃ前葉頃に比定（土坑一覧表参照）。
346	490	Ｌ19～20	長方形か	(1.5×1.1)	—	—	—	—	平面上は下層でＳＫ526の一部が重複する。
347	欠番	Ｌ20	長方形か	(1.5×1.2)	—	—	—	—	348号墓より後出の墓。
348	488	Ｌ20	方形	1.4×1.3	—	—	—	—	平面上下層で概ねＳＫ532と重複、土坑から山茶碗（58）のみ出土。
349	487	Ｌ20	方形	1.4×1.2	—	—	—	—	平面上下層で土坑ＳＫ530と概ね重複。343号墓・350号墓・352号墓などに先行する墓。
350	486	Ｌ20～21	長方形	1.6×1.3	—	—	—	—	平面上は下層でＳＫ543と重複。
351	201	Ｋ～Ｌ21	方形	1.6×1.4	—	—	—	—	区画中央部に直方体の形状に川原石で囲まれた0.4×0.4mの施設あり、納骨用施設と推定（58号墓や411号墓にも類例あり）。（第34図）
352	528	Ｋ～Ｌ20	長方形	1.4×1.1	—	—	—	—	349号墓より後出の墓。平面上は下層の土坑ＳＫ529と概ね重複。
353	321	Ｋ20	方形	1.2×1.2	—	—	—	—	
354	314	Ｋ20	方形	1.4×1.3	火輪Ａ0390 空風輪Ａ0254 火輪Ａ0451 水輪Ａ0552 地輪Ａ0698 （五輪セット揃い）	—	—	—	355・356号墓より先行する墓か。遺物実測図第51図参照。
355	315	Ｋ20～21	方形	0.8×0.8	火輪Ａ0385 地輪Ａ0697	—	—	—	354号墓・357号墓より後出の墓。空風火輪が区画石の一部に転用されていた。平面上、356号墓に跨って下層で土坑ＳＫ540が重複している。
356	317	Ｋ21	長方形か	1.0×0.6	—	—	—	—	354号墓・357号墓より後出の墓。平面上、355号墓に跨って下層で土坑ＳＫ540が重複。
357	316	Ｋ21	方形	1.5×1.2	—	—	—	—	360号墓より先行する墓。
358	313	Ｋ20～21	方形	1.4×1.3	地輪Ａ0696	ＳＸ22	—	—	359号墓より先行する墓。平面上は下層の土坑ＳＫ538と概ね重複。
359	318小	Ｋ21	長方形	1.3×0.9	—	—	—	—	358号墓・360号墓より後出の墓。平面上、360号墓に跨って下層で土坑ＳＫ539が重複。
360	319	Ｋ21	方形	(1.5×1.2)	（空）風（火）輪Ａ0807 地輪Ａ0694	—	—	—	平面上、359号墓に跨って下層で土坑ＳＫ539が重複する。
361	欠番	Ｋ21	楕円形	1.5～0.6	—	ＳＸ21	—	—	蔵骨器なし。墓道転用のため、358号墓・360号墓・362号墓～363号墓より後出の墓と推定。近接地で空風輪Ａ0138を採取。平面上は下層の土坑ＳＫ537と概ね重複する。
362	312	Ｊ21	方形	(1.5×—)	空（風）輪Ａ0287	ＳＸ23 ＳＸ48	—	—	蔵骨器なし。空風輪Ａ0139～Ａ0140を近接地で採取。平面上は、下層の土坑ＳＫ535と概ね重複。また、土坑ＳＫ536の一部も当墓と重複。
363	320	Ｊ～Ｋ21	方形	(1.3×—)	空風（火）輪Ａ0845	—	—	—	平面上362号墓に跨って下層の土坑ＳＫ536が重複。

第 13 表　Ａ地区検出　配石区画墓群一覧表（1～460 号墓、第 8～16 図参照。）

報告号墓	旧称 SR No.	小地区名	遺構平面形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔類No. (遺構内採取)	出土人骨 SX No.	伴出土器 蔵骨器ほか	金属品 (含古銭)	備考 (図版No.・重複土壙など)
364	211	K21	方形か	(1.4×—)	—	SX20	土師器鍋（103）	SX20から鉄釘（鉄53）	土師器鍋（103）は14c前半代に比定。当墓はそれ以降の築造か。土師器鍋（103）は0.4×0.4m大の川原石を蓋に。金属片（鉄29）も出土。（第37図）
365	492	K21～22	方形	(1.5×1.5)	空輪A0003 空風輪A0053 火水地輪（一石五輪塔）A0988	SX18 SX149	—	—	368号墓との間の墓間通道で空風輪A0052を採取した。蔵骨器なし。
366	欠番	K21	長方形	(1.2×0.5)	地輪A0695	SX19	—	—	墓道転用墓。365号墓・367号墓等より後出の墓。蔵骨器なし。
367	318大	K21	方形	1.4×1.3	—	—	—	—	平面上は、下層でSK541が重複する。
368	203	K21～L22	方形	1.5×1.3	空風輪A0252	—	—	—	372号墓との間で人骨SX165を検出（下記再掲）。平面上は、下層で土坑SK542が重複する。
369	202	L21	長方形	2.0×1.4	空風（火）輪A0844	—	—	—	370号墓より後出。平面上、371号墓に跨って下層で土坑SK544が重複。
370	485	L21	方形	1.6×1.4	—	—	—	—	369号墓・371号墓に先行する墓。外接して人骨SX50を検出（371号墓との境）。北側墓道に接して空風輪A0137を採取。平面上は、下層で土坑SK545が重複している。
371	322	L21～22	方形	1.4×1.1	—	—	—	—	370号墓より後出の墓。平面上、369号墓とに跨って下層で土坑SK544が重複。
372	204	K～L22	方形	1.4×1.4	空輪A0271 空輪A0142 （空）風輪A0142 空風輪A0143 火輪A0386 地輪A0691 地輪A0692	SX31 SX160	SX31埋土から土師器小皿小破片（192）	—	地輪A0691は原位置保持の可能性大。直下に扁平な石を蓋にし、人骨SX160が出土。類例は89号墓にも。区画内に平坦面をもつ0.4m大の石2個あり、間から人骨SX31出土。類例に318～319号墓、335号墓など。368号墓との間でも人骨SX165を検出。土師器小皿（192）は14c末～15c前葉に比定。空輪A0142と（空）風輪A0142は合わせて一体。（第34図）
373	205	K22	方形	1.5×1.3	地輪A0679	—	—	—	377号墓より後出の墓。
374	欠番	K22	方形	0.6×0.5	—	—	—	—	373号墓より後出の墓。
375	欠番	K22	方形か	(0.5×0.5)	地輪A0693	—	—	—	373号墓より後出の墓。地輪A0693は区画配石に転用の可能性もある。
376	210	K22	長方形か	(1.6×1.3)	—	—	—	—	
377	206	K22	方形	1.4×1.1	—	—	—	—	373号墓より先行する墓。
378	207	K22	方形か	(1.1×1.0)	—	SX32	土師器小皿破片（252～254）	—	人骨SX32は石の上で検出した。埋土から出土の土師器小皿（252～254）は15c後葉～16c前半代に比定。当墓はそれ以降に築造と推定。
379	279	K22	方形か	(1.2×—)	火輪A0389	—	—	—	
380	496	K～L22	長方形か	1.4×1.0	—	—	—	—	
381	110	L22	方形	1.2×1.1	—	—	—	—	平面上は、下層でSK549と重複。
382	323	L22	方形か	(1.5×1.4)	—	—	—	—	平面上は、下層でSK551が重複。
383	64	L～M22	長方形	2.6×1.8	—	SX49 SX51	—	—	228号墓より後出で、397号墓に先行する墓。蔵骨器なし。
384	324	L22	方形	1.3×1.2	空風輪A0144 火輪A0387	—	—	—	
385	325	L22	長方形	1.2×0.8	—	—	—	—	
386	欠番	L22	方形	1.1×1.0	—	—	—	—	平面上387号墓にも跨って下層土坑SK550が重複。
387	209	K22～L23	方形	1.5×1.3	—	SX30 SX140	—	—	平面上386号墓にも跨って下層土坑SK550が重複。蔵骨器はなし。
388	208	K23	不詳	不詳	—	—	—	—	
389	526	L23	方形か	(1.3×1.2)	火輪A0382	—	—	—	平面上391号墓にも跨って下層土坑SK560が重複。
390	502	L23	方形か	(1.3)×1.1	—	—	—	—	
391	327	L22～23	方形	1.4×1.2	空風輪A0134	—	—	—	平面上389号墓とに跨って下層土坑SK560が重複。
392	328	L23	方形	1.2×1.0	空風輪A0133	—	—	—	
393	224	L22	方形	1.4×1.3	—	—	—	—	平面上394号墓にかけて下層土坑SK561が重複。
394	329	L23	方形	1.7×1.7	—	—	—	—	400号墓より後出の墓。平面上393号墓にかけて下層土坑SK565が重複。
395	225	L23	長方形	1.3×0.9	空風輪A0145 火輪A0388 水輪A0520	—	—	—	397号墓より後出の墓。
396	360	L22～M23	長方形	1.6×0.9	—	—	—	—	400号墓より後出の墓。本来は墓道であったか。平面上は下層土坑SK564が概ね重複。
397	326	L～M22	方形	1.8×1.6	—	—	—	—	230号墓・383号墓より後出で、395号墓に先行する墓。平面上下層土坑SK553と重複。
398	57	M22～23	長方形	1.5×1.2	—	—	土師器小皿小破片（256）	—	399号墓より後出の墓。埋土から出土の土師器小皿（256）は15c後葉～16c初頭頃に比定。当墓はそれ以降に築造と推定。
399	76	M23	方形	1.7×1.5	—	SX194	常滑産甕（70）	—	407号墓より後出で、400号墓に先行する墓。400号墓との境で火輪A0378を採取した。甕（70）にはヘラ記号あり、人骨SX194充満す、15c前半代に比定。当墓はそれ以降の築造と推測。平面上下層土坑SK568と重複する。

第13表　A地区検出　配石区画墓群一覧表（1～460号墓、第8～16図参照。）

報告号墓	旧称ＳＲ№	小地区名	遺構平面形状	規模(m)長辺×短辺	出土石塔類№(遺構内採取)	出土人骨ＳＸ№	伴出土器蔵骨器ほか	金属品(含古銭)	備考(図版№・重複土壙など)
400	330	Ｌ～Ｍ23	長方形	2.4×1.5	空風輪Ａ0131 火輪Ａ0377 水輪Ａ0515 水輪Ａ0516	ＳＸ35 ＳＸ123	―	―	399号墓より後出で、394号墓・396号墓に先行する墓。平面上は下層土坑ＳＫ566の一部が重複するが別遺構。ＳＸ123は旧ＳＸ36を名称変更。蔵骨器はなし。
401	215	Ｌ23	二重方形	内1.0×0.9 外1.6×1.6	火輪Ａ0381	―	土師器小皿破片（201）	―	埋土から出土の小皿（201）は15ｃ中葉～後葉頃に比定。それ以降に築造と推定。平面上下層土坑ＳＫ562が概ね重複する。
402	522	Ｌ23～24	方形か	1.5×1.5	―	―	―	―	平面上403号墓・404号墓にも跨り下層土坑ＳＫ563が重複。
403	欠番	Ｌ24	楕円形	長径1.4× 短径0.8	―	―	―	―	平面上402号墓・404号墓に跨り下層土坑ＳＫ563が重複。402号墓より新しい。
404	332	Ｌ23～24	方形	1.2×1.1	―	ＳＸ134	―	―	平面上402号墓・403号墓にも跨り下層土坑ＳＫ563が重複。405号墓より新しい。
405	214	Ｌ23～Ｍ24	長方形	1.9×1.2	空風輪Ａ0132	ＳＸ121	―	―	納骨施設に似た集石あり、類例は128号墓に。58号墓・351号墓・411号墓なども参考に。平面上406号墓にかけて下層土坑ＳＫ567が重複。
406	213	Ｍ23	長方形	1.9×1.3	空風輪Ａ0130 空風（火）輪Ａ0869 火輪Ａ0380	ＳＸ122	―	―	ＳＸ122は石集積で納骨空間。火葬土坑ＳＫ567がほぼ重複。一体の可能性あり。419号墓との墓間通路で人骨ＳＸ33・ＳＸ125及びＳＸ155を検出し、空輪Ａ0015を採取。ＳＸ33出土の土師器小皿破片（257）を16ｃ前半代に比定。当墓は当然それ以前の築造。
407	525	Ｍ23	方形	1.2×1.2	空風輪Ａ0129 火輪Ａ0379 地輪Ａ0689	―	―	―	区画南側の石列は火葬土坑ＳＫ567の火を受けて赤く焼けていた。この事実から、406号墓に先行する墓。近接地で火水地輪Ａ0987・空風輪Ａ0127を採取。
408	212	Ｍ23	長方形	2.1×1.5	水輪Ａ0518 地輪Ａ0688	ＳＸ126	土師器鍋 破片（107）	―	土師器鍋（107）は14ｃ末～15ｃ初頭頃に比定、当墓はそれ以降の築造と推定。419号墓との間の外接通路で人骨ＳＸ124も検出。
409	欠番	Ｍ23	長方形	1.5×0.8	―	―	―	―	240号墓より後出の墓
410	欠番	Ｎ23	不整形	（1.0×0.8）	―	ＳＸ127	―	―	240号墓・408号墓・411号墓より後出で、411号墓の一隅を侵食する形で造営された墓。元は墓道であった場所。当墓の後代性を示す。
411	335	Ｍ23～24	方形	1.4×1.4	空風輪Ａ0114 空風輪Ａ0116 空風輪Ａ0253	ＳＸ228 ＳＸ233	土師器皿（137） 土師器小皿（224）	ＳＸ233から刀子（鉄9）と金属製品（鉄23）	410号墓に先行する墓。区画の中央東南端部に石を組合せた箱状（0.3m）の納骨用施設（類例は58号墓や351号墓にも）。区画西端の人骨ＳＸ233に共伴して刀子（鉄9）ほか2点出土。ＳＸ228は納骨施設の直ぐ北接地点に位置する。土師器皿（137）、小皿（224）は概ね完形品に近く、15ｃ前葉～中葉頃に比定。当墓築造もその頃か。
412	226	Ｍ24	不整形	（0.7×0.7）	―	ＳＸ54	土師器鍋破片（106）	―	408号墓・411号墓・413号墓の間の空間を利用した墓。本来は墓道と推定。鍋（106）は14ｃ末～15ｃ初頭頃に比定、当墓はそれ以降の築造と推定。
413	337	Ｍ24	方形 二重区画	1.5×1.2 0.9×0.9	地輪Ａ0687	ＳＸ36 ＳＸ37	―	―	419号墓より後出。417号墓・418号墓との間の墓道で、空風輪Ａ0109・火輪Ａ0367・水輪Ａ0512・風輪Ａ0014・空輪Ａ0006・空風輪Ａ0112等を採取した。
414	347	Ｎ24	長方形	1.5×0.8	空風輪Ａ0118 地輪Ａ0678 地輪Ａ0686	―	―	―	全面石（0.1～0.2m大）敷き。415号墓と一体の墓になる可能性も。本来は248～249号墓に沿う墓道であった可能性が高い。
415	220	Ｍ～Ｎ24	長方形	1.5×1.1	空風輪Ａ0108 火輪Ａ0365	ＳＸ43	―	―	414号墓と一体になる可能性もあり。空風輪Ａ0107を近接地で採取した。
416	346	Ｍ24～25	方形	1.3×1.2	空風輪Ａ0103～Ａ0105 水輪Ａ0511 地輪Ａ0677	ＳＸ110 ＳＸ141	ＳＸ141から 土師器小皿破片（223）	―	隣接する415号墓と441号墓とに挟まれた空間でも別途人骨ＳＸ44を検出した。土師器小皿（223）は14ｃ末葉～15ｃ前葉に比定。この破片を以て当墓をそれ以降の築造と推定。
417	218	Ｍ24	（円形？）	1.2×1.2	火輪Ａ0366	ＳＸ42 ＳＸ111 ＳＸ112	ＳＸ42から 土師器小皿完形品（259）	―	418号墓に先行する墓。土師器小皿（259）は15ｃ中葉～後葉頃に比定。当墓はその頃の築造か。413号墓との間（墓道）でも別途三箇所で人骨ＳＸ129～ＳＸ131を検出。共に通路を転用した後出墓で、ＳＸ130からは15ｃ後葉～16ｃ前葉頃の土師器小皿破片（258）、ＳＸ131から14ｃ前半代の山茶碗破片（参考7）出土。それよりは遡らない。
418	338	Ｍ24	方形	0.9×0.5	空風（火）輪Ａ0838	ＳＸ40	―	―	417・419号墓より後出。通路を墓に転用。
419	216	Ｍ24	長方形	1.8×1.2	空風輪Ａ0113 火輪Ａ0368	ＳＸ45 ＳＸ46	―	―	413号墓・418号墓・420号墓に先行の墓。人骨ＳＸ124及びＳＸ154は408号墓との間の通路で検出。後出墓の可能性大。平面上420号墓にかけて下層土坑ＳＫ577が重複。
420	331	Ｍ24	方形	1.4×1.4	―	ＳＸ115 ＳＸ116 ＳＸ117	―	―	419号墓より後出。平面上は419号墓にかけて下層土坑ＳＫ577が重複。近接地で空風輪Ａ0110～Ａ0111を採取。
421	340	Ｍ24	長方形	1.2×0.9	空（風）輪Ａ0286 空風（火）輪Ａ0839	ＳＸ113	―	―	墓道を転用した可能性もある。
422	339	Ｍ24	長方形	1.1×0.8	地輪Ａ0676	―	―	―	421号墓に先行。平面上434号墓との境目で下層土坑ＳＫ578が重複。
423	334	Ｌ～Ｍ24	長方形	1.4×0.4	空輪Ａ0007	ＳＸ47 ＳＸ164 ＳＸ114	―	―	人骨ＳＸ47は円形の穴に納骨。墓道を転用した墓。420・424・428号墓より後出。平面上427～428号墓に跨り土坑ＳＫ574が重複。人骨ＳＸ164は旧ＳＸ48を名称変更した。

第13表　Ａ地区検出　配石区画墓群一覧表（1～460号墓、第8～16図参照。）

報告号墓	旧称 SR№	小地区名	遺構平面形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔類№ (遺構内採取)	出土人骨 SX№	伴出土器 蔵骨器ほか	金属品 (含古銭)	備考 (図版№・重複土壙など)
424	223	L～M24	長方形か	(1.7×0.8)	—	SX39 SX118 SX119	SX118から 土師器小皿破片 (208)	—	405号墓・420号墓より後出の墓。人骨SX34を区画石の間で検出、当墓への埋納か否かは不明。406号墓と419号墓との間の墓道でも人骨SX120を検出。土師器小皿（208）は15c前葉～中葉頃に比定。当墓はそれ以降の築造と推定。
425	333	L24	長方形	1.2×0.9	空風輪A0115～ A0117 地輪A0622	—	—	—	区画中央部に平坦面をもつ0.4m大の石が据わる。類例は302号墓ほかにも。南西側区画外で人骨SX133を検出。424号墓との間で火輪の破砕片も採取。
426	欠番	L24	長方形	(1.3×09)	—	(SX133)	—	—	人骨SX133は区画配石の石の上で検出。それ自体後代性を示し、当墓との関連性は不明。
427	欠番	L24	楕円形	長径1.5 短径1.2	—	—	—	—	平面上は431号墓にも跨り下層土坑SK572が重複、また429号墓・431号墓にも跨って下層土坑SK573も重複。更に423号墓・428号墓にも跨って下層土坑SK574が重複するが、いずれも当墓に先行する別の遺構。
428	341	L～M24	楕円形	1.3×1.1	—	—	—	—	平面上423号墓・427号墓にも跨り下層土坑SK574が重複。かつ429号墓にも跨り下層土坑SK575も重複、共に当墓とは別の遺構。
429	342	L24～M25	長方形	2.2×1.4	火輪A0446	SX132	SX132から 土師器小皿の破片 (212～215)	—	平面上は下層土坑SK580が、また土坑SK576の大半が重複。427号墓・431号墓に跨り土坑SK573が、428号墓にかけては土坑SK575が、それぞれ部分的に重複。土師器小皿（212～215）は15c中葉～後葉頃に比定。当墓はそれ以降に築造か。
430	105	L24	方形	1.9×（1.4）	—	—	—	—	区画内に小石敷き（礫石経は無し）。後世、山道開鑿で削平さる。平面上は下層土坑SK571が概ね重複。（第35図）
431	524	L24	長方形	1.5×0.8	—	—	—	—	平面上は427号墓にも跨り下層土坑SK572が重複。427号墓・429号墓に跨り下層土坑SK573も重複。
432	523	L24	方形	0.7以上×—	—	—	—	—	後世、山道開鑿で削平さる。
433	343	M25	方形	1.2×1.2	空（風）輪A0284 空風（火）輪A0837 相輪A1034	—	瀬戸産灰釉花瓶の 破片（50）	—	平面上は当墓及び434号墓と429号墓との境目で下層土坑SK581が重複。435号墓に跨り土坑SK583も重複。更に434号墓・438号墓に跨っては土坑SK584も重複。花瓶（50）は14c後半代～に比定、当墓はそれ以降の築造と推定。
434	344	M25	不整形	長径0.8 短径0.5	—	—	—	—	433号墓より後出。通路を転用か。平面上422号墓との境目下層に土坑SK578が、また433号墓・429号墓との境界下層に土坑SK581が、434号墓～通路にかけての下層に土坑SK582が、433号墓・438号墓とに跨り土坑SK584が、それぞれ重複。
435	345	M25	方形	0.9×0.6	空風輪A0836	SX136	—	—	433号墓と436号墓との間の墓道を転用。433号墓・436号墓より後出。平面上433号墓に跨り下層土坑SK583が、また436号墓・438号墓とに跨って下層土坑SK585が、それぞれ重複する。
436	222	M25	方形	1.3×1.2	—	SX135	埋土から 土師器小皿の破片 (225～231)	—	平面上は下層土坑SK589が概ね重複し、435号墓・438号墓に跨って土坑SK585も重複。7個体分の土師器小皿（225～231）は15c中葉～後葉頃に比定。当墓はそれ以降に築造と推定。
437	221	M25	方形	1.5×1.4	空（風）輪A0283 地輪A0621	—	土師器小皿破片 (260)	—	平面上は下層土坑SK588が概ね重複。438号墓・439号墓とに跨る位置に下層土坑SK586も重複。土師器小皿（260）は15c末～16c前葉頃に比定。当墓はそれ以降に築造と推定。
438	103	M25	円形	径1.1	火輪A0364	—	—	—	437号墓より後出。墓道を転用。平面上433号墓・434号墓に跨って下層土坑SK584が、435号墓・436号墓に跨って下層土坑SK585が、437号墓・439号墓に跨り下層土坑SK586が、それぞれ重複。
439	欠番	M25	方形	0.6×0.6	—	SX137	—	—	437号墓より後出。墓道を転用。平面上437号墓・438号墓に跨って下層土坑SK586が重複。
440	欠番	M～N25	方形	0.7×0.5	—	—	土師器小皿（265） 完形品	—	437号墓より後出。墓道を転用。平面上441号墓・442号墓に跨り下層土坑SK587が重複す。土師器小皿（265）は16c前葉～後葉に比定。当墓はほぼその時期の築造と推定。
441	351	N25	長方形	1.2×0.6	—	—	—	—	415～416号墓との間で人骨SX44(前出)を検出。平面上440号墓・442号墓に跨り下層土坑SK587が重複。
442	349	N24～M25	長方形	1.1×0.5	—	—	—	—	本来は441号墓と併せて一つの墓か。平面上440～441号墓に跨り下層土坑SK587が重複。
443	348	N24～M25	長方形	2.0×1.2	—	SX193	常滑産三筋壺（42） 瓦器小碗（41）	—	三筋壺（蔵骨器）の蓋に瓦器碗を転用。(41)は12c末～13c前葉頃に、(42)は12c後半代に比定。249号墓より後出墓。当墓は早ければ13c前葉～中葉頃までには築造か。（第37図）
444	350	N25	不整形	(0.6×0.4)	—	—	—	—	443号墓と445号墓の間の墓道を転用か。平面上445号墓に跨り下層土坑SK593が重複。

第13表　A地区検出　配石区画墓群一覧表（1～460号墓、第8～16図参照。）

報告 号墓	旧称 ＳＲ№	小地区名	遺構平面 形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔類№ (遺構内採取)	出土人骨 ＳＸ№	伴出土器 蔵骨器ほか	金属品 (含古銭)	備考 (図版№・重複土壙など)
445	353	N25	方形	1.0×0.9	空風（火）輪Ａ0826 空風火輪Ａ0782 水地輪Ａ0880 地輪Ａ0617～Ａ0618 空風火水輪（一石五輪塔）Ａ0952～Ａ0953 火水輪（一石五輪塔）Ａ1010 火水地輪（一石五輪塔）Ａ0984	―	―	―	平面上444号墓に跨り下層土坑ＳＫ593が重複。
446	352	N25	方形か	(1.0×0.8)	空風輪Ａ0096～Ａ0097	―	―	―	相輪Ａ1033を近接地で採取。平面上447号墓に跨り下層土坑ＳＫ592と重複。
447	354	M～N25	長方形	(1.0×0.7)	地輪Ａ0619	―	埋土から 土師器小皿 破片（262）	―	446号墓と448号墓との間の墓道転用。平面上448号墓に跨り下層土坑ＳＫ590が、446号墓に跨り土坑ＳＫ592が重複。土師器小皿（262）は15ｃ後葉～16ｃ初頭頃に比定。当墓はそれ以降の築造と推定。
448	219	M～N25	長方形か	1.7×（0.9以上）削平による。	空風（火）輪Ａ0833～Ａ0835 水輪Ａ0510 火水地輪（一石五輪塔）Ａ0986	ＳＸ138	ＳＸ138から 土師器小皿 破片（261）	―	山道開鑿のため約半分削平さる。平面上は下層土坑ＳＫ591と概ね重複。447号墓にかけて土坑ＳＫ590やＳＫ596の一部分も重複。土師器小皿（261）は15ｃ後葉～16ｃ初頭頃に比定。当墓はそれ以降に築造と推定。一石五輪塔Ａ0986は区画用の配石に転用された可能性がある。
449	355	N25	方形	1.0×0.8	―	―	―	―	空風輪Ａ0098を近接地で採取した。
450	356	N25	方形	1.4×1.2	空（風）輪Ａ0301 空風火輪Ａ0795～Ａ0797 地輪Ａ0683～Ａ0684 一石五輪塔Ａ0949	ＳＸ139	―	―	左記石塔は全て区画石に転用されていた。当該450号墓築造の時期的な後代性を示す。
451	357	N25	方形	1.4×1.2	(空）風火輪Ａ0783 地輪Ａ0620 地輪Ａ0682	―	―	―	地輪Ａ0682は区画石に転用された可能性がある。
452	359	N～O25	長方形	1.3×0.7	―	―	―	―	250号墓より後出。近接地で空風輪Ａ0100を採取した。
453	358	N25	長方形か	(0.8×0.5以上)	火輪Ａ0361	―	―	―	
454	欠番	N25	方形か	(1.5×1.2)	空風輪Ａ0099 空（風）輪Ａ0280 空（風）輪Ａ0281 空風（火）輪Ａ0827 (空）風火輪Ａ0784 空風（火）輪Ａ0828 水輪Ａ0509 一石五輪塔Ａ0929 火水地輪（一石五輪塔）Ａ0985 火水輪（一石五輪塔）Ａ1011	―	―	―	平面上455号墓に跨り下層土坑ＳＫ598が重複。
455	欠番	N26	方形か	(1.2×0.6)	地輪Ａ0685	―	―	―	区画配石に地輪Ａ0685を転用。平面上454号墓に跨り下層土坑ＳＫ598が重複。
456	欠番	N25～26	方形か	(1.0×0.9)	空風輪Ａ0101～Ａ0102 空（風）輪Ａ0282 空風（火）輪Ａ0830～Ａ0832	―	―	―	区画配石に五輪塔石を転用。
457	欠番	O26	不整形	(0.7×0.6)	―	―	―	―	
458	欠番	O25	方形か	(1.0×1.0)	阿弥陀佛浮彫石Ａ1049	―	―	―	257号墓より後出する墓。
459	欠番	O26	方形か	(1.3×1.1)	―	―	―	―	257号墓より後出する墓。
460	107	O26	長方形か	(1.4×1.1)	空風輪Ａ0248 空（風）輪Ａ0298 火輪Ａ0447～Ａ0448 水輪Ａ0550 火水地輪（一石五輪塔）Ａ0999	―	―	―	盛土26㎝。近接地で火輪Ａ0362～Ａ0363も採取。

	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔類№ (遺構内採取)	出土人骨 ＳＸ№	伴出土器 蔵骨器ほか	金属品 (含古銭)	備考
配石区画墓平均的規模	1.5×1.2	211ヶ墓	166箇所	78ヶ墓	25ヶ墓	規模の平均値は（ ）内の数字を除外して計算し、小数点第二位を四捨五入した。石塔・土器などの遺物は、個数ではなくそれが出土した墓の数を、人骨は区画内で出土した箇所総数を表す。 結果的に遺物が一切検出されなかった区画は175基にのぼる（全体の38%）。

第13表　Ａ地区検出　配石区画墓群一覧表（1～460号墓、第8～16図参照。）

報告番号	旧称	地区	形状	規模（cm）	附属施設	出土遺物			備考欄
						石塔	土器	金属製品	
461	墳丘Ａ	M26・27 ～N27	隅丸方形	墳丘部 400×400㎝、 高さ80㎝。 周溝部ＳＤ880 幅30～60㎝、 深さ15～30㎝。	周溝・陸橋・ 石積階段 (4段分あり)	周溝から 空風輪Ｂ 1061、周溝 底部から相 輪Ｂ1140	墳丘下層か ら土師器 小皿破片 （241）	無し	墳丘＋周溝の規模：約450㎝前後。墳丘中央部に、断面で幅約62～74㎝、深さ22㎝の土坑状の窪み確認。遺構ならば大甕埋納の可能性も。 小皿（241）は15ｃ前葉～中葉頃に比定。当該施設築造はそれ以降と推定。（第25図・第41図）
462	墳丘Ｂ	Ｌ28・29・30 ～ N28・29・30	（隅丸方形）	墳丘部 約550×710㎝、 高さ90㎝。 周溝部ＳＤ881 幅約44～170㎝、 深さ20～52㎝。	土坑・周溝・ 墳丘上には 石列（4m） が残存した	ＳＫ610大 甕内から空 （風）輪Ｂ 1054、地輪 Ｂ1069（落 込み遺物）	常滑大甕 （92）および 土師器小皿 （242）	古銭２枚 （銭22～23） 「熙寧元寶」 （篆書体）	谷側を除く三方に周溝。墳丘部ＳＫ610に大甕（92）を埋納。15ｃ後半～16初頭に比定。墳丘盛土内出土の小皿（242）は15ｃ前葉～中葉頃に比定。なお、墳丘裾部からは15ｃ中葉～後葉代の土師器小皿(243)が出土。銭貨観察表参照。（第25図・第41図）
463	墳丘ｃ	N28～ O28・29	（隅丸方形）	480×360㎝	Ｌ字状の石 列が約2.6m ＋1.5m分 残存した	無し	無し	無し	墳丘下から先行する土坑を複数検出。（第25図・第41図）
464	墳丘Ｄ	Ｐ29～30	（隅丸方形）	400×300㎝	石列（1.5m）	無し	無し	無し	墳丘下から先行する土坑を複数検出。

第 14 表　Ｂ地区検出　特殊遺構（墳丘状盛土遺構）（第 25・第 41 図及び写真第 7 ～ 8 図参照）

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深（cm）	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
465	欠番	Ｐ12	隅丸長方形	120・90・17	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。暗茶褐色土。平面上は64号墓と65号墓とに跨り重複。（重複関係はあくまで平面上の事であり、必ずしも一体の遺構を意味しない）
466	16	Ｎ13	長楕円形	160・60・15	◎	－	◎	－	○	－	－	－	ⅠＡ類。暗茶褐色土（黒褐色混り）。堀形に沿い固く焼しまった焼土が帯状に残る（以下全地区でこれを焼土帯と表記）。119・121号墓に跨り重複。人骨ＳＸ179。
467	27	Ｐ13	隅丸方形 に近い	110・110・ 20	○	－	○	－	－	－	土師器小皿 （160～162）	－	ⅡＢ類。暗茶褐色土。69・70号墓とに重複。土師器皿（160）は完形品で、①期13ｃ末頃～14ｃ末葉に比定した。
468	12	Ｋ14	楕円形	100・80・13	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。茶褐色土。ＳＫ480より旧い。145号墓と155号墓の境目に当たる。
469	17	Ｌ14	楕円形	50・40・16	－	－	○	－	○	－	－	－	ⅡＡ類。暗灰茶褐色土。144号墓と一部分重複。人骨ＳＸ182。
470	欠番	Ｌ14	不整形楕円	（180・130・10）	－	－	－	－	◎	－	－	－	ⅡＡ類。暗褐色土。人骨は3ヶ所（ＳＸ196～198）から出土。142号墓と143号墓とに跨り重複。
471	67	Ｌ14	隅丸長方形 に近い	220・130・18	◎	○	○	－	－	－	－	－	ⅠＡ類。暗褐色土。堀形に焼土帯。底部に0.3～0.4m大の焼石二個。139号墓と一部重複。
472	15	Ｍ14	隅丸長方形 に近い	140・80・15	○	－	◎	－	○	－	－	－	ⅡＡ類。暗茶褐色土。大半が129号墓と重複。人骨片ＳＸ264。
473	63	Ｎ14	楕円形	60・40・14	○	－	○	－	－	－	－	－	ⅡＡ類。暗黄褐色土。130号墓と一部重複。時期不明の火葬土坑。
474	112	Ｓ14	楕円形	95・60・17	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。暗茶褐色土。10号墓に伴う土坑。
475	113	Ｓ14	楕円形	100・60・16	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。暗茶褐色土。11号墓に伴う土坑。
476	76	Ｉ15	二等辺 三角形状	280・160・21	○	－	◎	－	○	－	常滑産甕 破片（75）	－	ⅡＢ類。暗茶褐色土。底部中央に0.4m×0.2mの石1個遺る。175・176号墓と一部重複。甕（75）Ｎ字口縁小破片（15ｃ後半～）より以降の火葬土坑。人骨ＳＸ183。
477	欠番	Ｊ15	隅丸方形	（150・100・25）	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。暗茶褐色土。時期不明火葬墓か。
478	19	Ｊ～Ｋ15	隅丸長方形	170・130・ 5	○	◎	○	－	○	－	－	ＳＸ109から 釘2本（鉄46 ・鉄47）	ⅡＢ類。黒茶褐色土。土坑内一杯に火を受けた台状大石（1.0m×0.6m×0.6mを2個）を据える。ある時期に火葬施設として使用。人骨ＳＸ109。172号墓より後出と判断。
479	11	Ｊ～Ｋ15	方形に近 い楕円形	140・85・44	○	－	○	－	－	－	－	－	ⅡＡ類。暗茶褐色土。平面上概ね173号墓と重複。
480	13	Ｌ15	隅丸方形	110・80・23	－	－	○	－	－	－	－	－	ⅡＡ類。暗茶褐色土。ＳＫ468・481より新。平面上145号墓と重複。
481	14	Ｌ15	隅丸方形 に近い	140・130・20	－	－	○	－	－	銭10 「嘉祐元寶」？	－	刀子1本 （鉄14）	ⅡＢ類。暗茶褐色土。ＳＫ480より古。平面上146号墓と重複。銭貨観察表（銭10）及び刀子類観察表（鉄14）参照。
482	68	Ｍ15	馬蹄形	160・120・18	－	－	○	－	－	－	土師器破片	－	ⅡＢ類。暗茶褐色土。ＳＫ496より新。平面上81号墓と重複（個別遺構第35図）。
483	欠番	Ｎ15	（隅丸長 方形）	（175・100・35）	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。暗茶褐色土。概ね78号墓と重複。
484	64	Ｏ15	円形	55・50・20	○	－	○	－	○	－	－	－	ⅡＡ類。暗褐色土。人骨ＳＸ184。平面上60号墓と一部重複。
485	65	Ｏ15	楕円形	70・50・17	○	－	○	－	○	－	－	－	ⅡＡ類。暗褐色土。人骨ＳＸ185。
486	欠番	Ｏ15	隅丸方形	（140・125・21）	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。暗茶褐色土。平面上ほぼ56号墓と重複。

第 15 表　Ａ地区検出　土坑群一覧　ＳＫ 465 ～ＳＫ 599・第 17 図～ 22 図。

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
487	72	K16	長方形に近い楕円	220・100・41	◎	○	○	−	○	−	土師器皿(130)、同小皿(171～178)、計9枚	−	ⅠB類。暗茶褐色土。掘形に焼土帯。人骨SX234。192～193号墓の一部、263号墓の一部と重複。完形の小皿は15c中葉頃のものか。
488	114	L16	楕円形	60・45・31	−	−	−	−	−	−	−	−	Ⅳ類。暗茶褐色土。底部に0.2m大の川原石2個。182号墓と183号墓の境目に相当。
489	115	L16	隅丸方形	80・70・48	−	−	−	−	−	−	−	−	Ⅳ類。暗茶褐色土。182号墓の中心部に当たる位置に重複。
490	116	L16	楕円形	50・40・42	−	−	−	−	−	−	−	−	Ⅳ類。暗茶褐色土。182号墓と重複。
491	119	L16	不整形	110・100・21	−	−	−	−	−	−	−	−	Ⅳ類。暗茶褐色土。地輪A0766出土。183号墓・194号墓・196号墓に跨り重複。近接して人骨片SX216～218を検出。
492	118	L16	不整形	150・70・25	−	−	−	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。人骨片SX246。183号墓・187号墓に跨り重複。
493	117	L16	不整形	110・60・15	−	−	−	−	○	−	−	燧金(鉄21)、刀子(鉄参考42)	ⅡB類。暗茶褐色土。人骨片SX247。182号墓と185号墓にかけ重複。
494	60	M16	略楕円形	90・55・33	−	−	○	−	○	−	土師器皿(122)、土師器小碗の破片	−	ⅡB類。暗茶褐色土。人骨SX219(第1表191号墓参照)。完形の土師器皿(122)は14c中葉～末頃のものと推定。
495	61	M16	略隅丸方形	100・90・59	−	−	−	−	−	−	ロクロ土師器皿底部破片(38)	−	Ⅲ類。暗茶褐色土。ロクロ土師器皿は11～12c代。190号墓と重複。190号墓下層から12c中葉～後葉の山茶碗底部破片出土。
496	62	M16	隅丸長方形に近い	150・80・52	−	−	−	−	−	−	−	−	Ⅳ類。暗茶褐色土。SK482より古(個別遺構第35図)。
497	5	J17	(隅丸方形)	100・90・23	−	−	−	−	−	−	土師器細片	鉄釘2本(鉄48～49)及び燧金(鉄22)	Ⅲ類。暗黄褐色土。ほぼ276号墓と重複。(個別遺構第40図)
498	7	J17	隅丸三角形	105・105・16	−	−	−	−	−	−	土師器小皿(165)	−	Ⅲ類。暗黄褐色土。279・280号墓と一部重複。小皿(概ね完形)は15c中葉～後葉に比定。
499	85	J17	略隅丸方形	130・110・50	−	−	−	−	−	−	土師器細片	刀子1本(鉄8)	Ⅲ類。暗黄褐色土。大略286号墓と重複。
500	18	K17	四辺形	200・150・75	○	○	○	−	○	−	山茶碗(54)	−	ⅡB類。暗茶褐色土。掘形西辺底部に火を受けた石(0.2m大)が一列に4個並ぶ。大半は283号墓と、一部が282号墓と重複。山茶碗(54)は13c前葉～中葉ころに比定。人骨SX186。
501	10	K17	隅丸方形に近い	145・130・32	◎	−	◎	−	○	−	−	和鏡小破片(熔解した状態)	ⅠB類。黒褐色土。堀形に焼土帯。人骨SX187。195号墓と205号墓に跨り重複。熔解した和鏡破片歪み大、時期不明。熱残留磁化測定試料採取遺構。附篇(2)参照(920年±150年) この結果は、いささか古すぎる感がある。
502	53	K17	楕円形	85・65・8	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。人骨SX470(A地区N16SX188と重複したので名称を変更)。平面上は205号墓と重複。
503	Pit 1	L17	不整形楕円	90・50・12	−	−	−	−	−	−	土師器小皿(186)	−	Ⅲ類。暗褐色土。203号墓と重複。小皿(186)は破片で、14c末～15c前葉に比定。
504	120	L17	隅丸長方形に近い	155・110・34	−	−	−	−	−	−	土師器皿小破片(114・119)	−	Ⅲ類。黒茶褐色土。199号墓と重複関係。土師器皿は異なる時期の破片混入あり。(114)は12c中葉～後葉、(119)は14c中葉～後葉頃か。
505	6	J16	略方形	100・80・27	◎	−	○	−	○	−	土師器小碗(84)	刀子1本(鉄05)	ⅠB類。暗褐色土。堀形に一部焼土帯。切合い関係からSK506より古。人骨片SX294。小椀は15c後半代か。小碗も刀子もほぼ完存。
506	3	J18	方形状(不整形)	120・110・24	◎	−	○	−	○	−		刀子2本(鉄3・鉄11)	ⅠB類。暗褐色土。掘形に焼土帯。人骨片2箇所出土(SX159・SX295)。前者に刀子2本副葬。土坑SK505より新。ほぼ292号墓と重複。
507	101	J18	方形に近い不整形	120・85・73	−	−	○	−	○	−	土師器小皿(166)	−	ⅡB類。暗茶褐色土。土師器皿(166・完形)は15c前葉～中葉に比定。火葬墓。人骨SX189。平面上は大略293号墓と重複。
508	欠番	K18	(隅丸長方形)	(100・80・15)	−	−	−	−	−	−	−	−	Ⅳ類。暗茶褐色土。平面上は307号墓と重複。
509	107	K18	略円形	120・105・17	−	−	−	−	−	−	−	−	Ⅳ類。暗茶褐色土。206号墓と295号墓の間の通路下層に位置する墓坑。
510	9	K18	円形に近い	165・150・11	◎	○	◎	−	○	−	−	刀子1本(鉄13)	ⅠB類。黄褐色砂質土。堀形に厚い焼土帯。底部に焼石一個。刀子はほぼ完存。人骨SX191。平面上は206号墓と重複。
511	欠番(SX167)	L17～18	隅丸方形	45・40・15	−	−	−	−	○	−	−	刀子2点(鉄24・鉄参考32)	ⅡB類。人骨出土のため当初SX167としたが、土坑に変更。刀子片を2点伴出。207号墓と重複(一体の可能性もあるか?)。
512	8	L18	長楕円形	130・50・21	−	−	◎	−	○	−	−	−	ⅡA類。黒褐色土。人骨SX192。平面上212号墓と一部重複するも別遺構。
513	欠番	L18	隅丸方形	50・50・16	−	−	−	−	−	−	−	−	Ⅳ類。黒茶褐色土。

第15表　A地区検出　土坑群一覧　SK 465～SK 599・第17図～22図。

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
514	26	M18	隅丸方形（付属周溝ＳＤ874）	172・(70)・ 56	－	－	－	－	－	－	青磁碗（63）完形	－	Ⅲ類。100号墓（1.8m×1.7m）と一体の遺構。東側崩落損壊。墳丘部2.3m ～ 2.6m×1.2m以上;周構ＳＤ874(幅0.6m ～ 1.7m、深さ約0.3m）を含む全体規模は5.1m×3.0m以上の方形周溝墓。（第39図） 底部から青磁碗（13 ～ 14ｃ元代）が出土したが、造墓時期はそれより下るか。
515	82	J 19	方形に近い	105・75・30	－	－	－	－	－	－	土師器皿（117）及び小皿（150）破片	－	Ⅲ類。茶褐色土。324号墓と重複。土師器小皿（150）は13ｃ末～ 14ｃ末頃に比定、土坑墓はそれ以降に築造と推測。
516	83	J 19 ～ 20	長方形	200・115・30	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。茶褐色土。底部に川原石３個。平面上は322号墓～ 325号墓に跨り重複。
517	6	J 19	楕円形	130・110・17	◎		◎	－	○	－	－	－	ⅠＡ類。黒褐色土。堀形に厚い焼土帯。人骨片ＳＸ207。平面上は略302号墓と重複。
518	79	J 19	楕円形	70・50・17	－	－	－	－	－	－	土師器細片	－	Ⅲ類。暗褐色土。317号墓と一部分が重複。
519	80	J 19	略楕円形	135・110・39	－	－	－	－	－	－	－	刀子1点（鉄6）	Ⅲ類。暗褐色土。平面上はほぼ319号墓と重複。時期不明の土坑（火葬）墓。
520	81	K 19	円形に近い	100・80・23	－	－	－	－	－	－	－	刀子1本（鉄7）	Ⅲ類。暗褐色土。311・312号墓と重複。時期不明の墓坑。当該土坑の西側40㎝地点で人骨（ＳＸ158）の充満した須恵器甕（17）が出土。
521	29	K 20	隅丸方形に近い	160・130・11	◎	－	○	◎	○	－	－	－	ⅠＡ類。ほぼ315号墓と重複。堀形に厚い焼土帯。底部全面を灰（莚織目明瞭）が覆う。２ヶ所から人骨片（ＳＸ190およびＳＸ286）出土。
522	102	L 19	隅丸方形状楕円	110・80・26	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。暗茶褐色土。ほぼ216号墓と重複。
523	122	L 19	不整形	115・90・8	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。暗茶褐色土。217号墓と313・314号墓との間の通路直下に相当する墓坑。
524	97	L 19	略楕円形	140・120・17	－	－	－	－	－	－	－	刀子1点（鉄10）	Ⅲ類。暗茶褐色土。平面上は215号墓と一部重複。時期不明の墓坑。
525	96	L 19	隅丸方形	130・90・23	－	－	－	－	－	－	－	刀子1点（鉄参考37）	Ⅲ類。暗茶褐色土。ほぼ217号墓と重複、時期不明の墓坑。（個別遺構第40図）
526	121	L 19	楕円形	100・80・30	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。暗茶褐色土。347号墓と一部重複。
527	78	J 20	楕円形	100・65・20	－	－	－	－	－	－	須恵器杯蓋（15・16）破片	刀子1本（鉄19）	Ⅲ類。暗褐色土。ＳＫ528より古。335号墓と一部重複、時期不明の墓坑。須恵器杯蓋はＢ区ＳＫ613出土の破片と接合、2時期（7ｃ末～ 8ｃ前半代、8ｃ前葉～中葉）のものあり。刀子はほぼ完存状態。
528	20	J 20	略方形	125・120・26	◎	○	○	－	○	－	土師器小皿（167）破片	－	ⅠＢ類。暗茶褐色土。堀形に焼土帯。火に焼けた長方形の石（0.3m）一個。ＳＫ527よりも新。333号墓・334号墓・340号墓に跨り重複。小皿（15ｃ前葉～中葉）の時期より以降に火葬土坑として機能したと推測。人骨ＳＸ195。
529	127	K 20	隅丸方形	110・100・21	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。暗茶褐色土。ＳＫ530より新。ほぼ352号墓と重複。時期不明の墓坑。
530	74	L 20	長楕円形	140・95・34	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。暗茶褐色土。平面上ほぼ349号墓と重複。土坑ＳＫ529より古。時期不明の墓坑。
531	69	L 20	略隅丸方形	110・95・38	－	－	○	－	－	－	土師器皿（131）・小皿（187 ～ 191）	－	ⅡＢ類。暗褐色土。平面上ほぼ345号墓と重複。土師器皿・小皿計6枚、14ｃ末～ 15ｃ前葉に比定、ほぼ同時期ころの墓坑と推測。
532	95	L 20	隅丸方形に近い台形	135・100・30	－	－	－	－	－	－	山茶碗（58）	－	Ⅲ類。暗茶褐色土。平面上348号墓と重複。山茶碗は13ｃ中葉～後葉に比定。横尾では初期段階に属す墓坑。（個別遺構第40図）
533	19	N 20	略隅丸方形（付属周溝ＳＤ875 ～ ＳＤ876）	180・155・29	◎	－	○	－	○	－	ロクロ土師器皿（36・37）底部小破片	刀子1点（鉄04）	ⅠＢ類。掘形に焼土帯。周溝ＳＤ875 ～ 876附属、221号墓と一体の方形周溝墓。周溝幅は0.6m ～ 0.8m、隣接227号墓の周溝ＳＤ788より古。周溝を含む全体規模は3.5m×3.4mと推定。形態的類例ＳＫ514、ＳＫ570等参照。ロクロ土師器皿（11ｃ～ 12ｃ代）は小破片、混入遺物。刀子は副葬品。人骨ＳＸ199。
534	84	J 21	不整形	105・70・8	◎	－	－	－	○	－	－	－	ⅠＡ類。暗褐色土。堀形に焼土帯。人骨片ＳＸ287。平面上はほぼ338号墓と重複。
535	77	J 21	略方形	80・65・21	－	－	－	－	－	－	土師器皿（128・129）破片	鉄釘（鉄50 ～鉄51）	Ⅲ類。暗茶褐色土。平面上ほぼ362号墓と重複。皿（15ｃ中葉頃）の時期以降に築造の墓坑か。
536	123	J 21	略方形	75・55・22	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。暗茶褐色土。平面上362 ～ 363号墓と重複。時期不明の墓坑。
537	23	K 21	不整半円形	135・68・17	◎	－	－	－	○	－	－	－	ⅠＡ類。暗茶褐色土。堀形に焼土帯。人骨片ＳＸ163。平面上概ね361号墓と重複。
538	21	K 21	不整形	120・60・16	◎	－	◎	－	◎	－	－	－	ⅠＡ類。暗茶褐色土。堀形に焼土帯。人骨片ＳＸ166。平面上ほぼ358号墓と重複。
539	22	K 21	方形に近い楕円形	120・95・44	◎	○	○	－	○	－	－	－	ⅠＡ類。暗茶褐色土。堀形に焼土帯。底部に焼けた川原石（0.3m大）２個。ＳＫ540より新しい火葬土坑。平面上359 ～ 360号墓と重複。人骨ＳＸ200。

第 15 表　Ａ地区検出　土坑群一覧　ＳＫ 465 ～ＳＫ 599・第 17 図～ 22 図。

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
540	100	K21	略方形	130・80・42	−	−	−	−	−	−	土師器小皿（251）小破片	−	Ⅲ類。暗茶褐色土。切合い関係からＳＫ539より古。355～356号墓と重複。小皿（15ｃ後葉～16ｃ初頭）の時期以降に築造の土壙墓か。
541	98	K21	隅丸長方形	120・70・34	−	−	−	−	−	−	−	−	Ⅳ類。暗茶褐色土。平面上367号墓と重複。土坑ＳＫ542より新。時期不明の墓坑。
542	99	K21	隅丸長方形	150・85・35	−	−	−	−	−	−	−	刀子2点（鉄26・鉄参考41）	Ⅲ類。暗茶褐色土。平面上368号墓と重複。土坑ＳＫ541より古。時期不明の土壙墓。
543	75	L21	略隅丸方形	110・100・23	−	−	−	−	−	−	−	−	Ⅳ類。暗茶褐色土。平面上350号墓と重複。時期不明の土壙墓。
544	103	L21	隅丸方形に近い楕円形	159・90・34	−	−	−	−	−	−	−	−	Ⅳ類。暗茶褐色土。平面上369号墓及び371号墓と重複。時期不明の土壙墓。
545	104	L21	長楕円形	120・65・50	−	−	−	−	−	−	土師器皿（132～134）破片	−	Ⅲ類。暗茶褐色土。370号墓と重複。土師器皿（14ｃ末～15ｃ前葉）に近いかそれ以降の土壙墓と推定。
546	25	M21	楕円形	60・50・8	◎	−	◎	−	○	−	−	−	ⅠA類。暗茶褐色土。人骨ＳＸ201。平面上222号墓と重複。堀形に焼土帯。底部に川原石（0.1m×0.08m大）あり。
547	125	M21	楕円形	125・90・25	−	−	−	−	−	−	−	−	Ⅳ類。暗茶褐色土。222号墓と223号墓との中間下層に位置。時期不明の土壙墓。
548	105	L22	隅丸方形	100・70・50	−	−	−	−	−	−	−	−	Ⅳ類。暗褐色土。平面上概ね372号墓と重複。時期不明の土壙墓。
549	34	L22	不整楕円形	135・130・35	◎	−	◎	−	○	−	土師器小皿（193～196）4枚	−	ⅠB類。暗茶褐色土。堀形に焼土帯。平面上381号墓と重複。火葬土坑をそのまま墓坑にしたかと推定。皿（完形）は15ｃ前葉～中葉頃に比定。その頃の築造か。人骨ＳＸ202。（遺構第40図）
550	28	L22	隅丸方形に近い楕円形	160・120・23	○	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。人骨片ＳＸ220。火葬土坑。平面上386号墓と387号墓とに跨り重複。
551	90	L22	隅丸長方形	140・100・50	−	−	−	−	−	−	土師器皿（121）小破片	−	Ⅲ類。暗褐色土。平面上382号墓と重複。底部に川原石（0.2～0.4m大）５個。土師器皿（13ｃ末～14ｃ前葉）の時期以降の土壙墓と推定。
552	94	L22	隅丸方形に近い楕円形	85・80・53	−	−	−	−	−	−	−	刀子2点（鉄参考39・40）	Ⅲ類。暗黄褐色土。概ね393号墓と重複。時期不明の土壙墓。（個別遺構第40図）
553	89	M22	楕円形	95・60・40	−	−	−	−	−	−	−	−	Ⅳ類。暗黄褐色土。平面上397号墓と重複。時期不明の土壙墓。
554	24	M22	楕円形に近い	100・85・30	◎	−	◎	−	◎	−	土師器小皿（218～221）小破片	刀子1点（鉄15）	ⅠB類。暗茶褐色土。堀形に焼土帯。火葬土坑を火葬墓にした可能性。土師器小皿（14ｃ中葉～後葉）の時期以降に築造と推測。平面上228号墓と重複。人骨片ＳＸ180。掘形に近接する平坦面をもつ石（0.8m×0.5m大）は、特定の機能を持った可能性もあるか。
555	88	M22	隅丸長方形	120・85・32	−	−	−	−	−	−	土師器皿（123・124）破片	−	Ⅲ類。暗黄褐色土。平面上230号墓と重複。土師器皿（13ｃ末～14ｃ前葉）の時期以降に築造の土壙墓と推定。
556	73	M22	隅丸長方形に近い	160・100・20	○	−	○	−	−	−	土師器鍋（96）破片	−	ⅡB類。暗褐色土。平面上232号墓～230・231号墓にわたり重複。土師器鍋（13ｃ後半代）の時期以降に機能した火葬土坑と推測。
557	86	N22	略隅丸方形	130・105・21	−	−	−	−	○	−	土師器小皿（153）破片	−	ⅡB類。暗黄褐色土。人骨片ＳＸ245。平面上は232～233号墓と重複。土師器皿（14ｃ中葉～後葉頃）の時期以降の土壙墓と推定。
558	36	N22	亀形（ムササビ形状）	280・150・55	◎	−	○	−	○	−	−	−	ⅠA類。暗褐色土。堀形に焼土帯。234号墓～238号墓の下層。通気孔・溝を穿つ本格的火葬施設。Ｂ地区ＳＫ606も同じ。人骨ＳＸ203。熱残留磁化測定試料採取遺構。附篇（2）参照（1230年±70年）。（個別遺構第39図）
559	1	P22	不整形	140・100・18	◎	−	○	−	−	−	−	−	ⅠA類。暗褐色土。掘形に焼土帯。火葬土坑。平面上237号墓と重複。
560	41	L23	隅丸長方形	125・85・24	◎	○	○	−	−	−	−	−	ⅠA類。暗黄褐色土。掘形に焼土帯。底部に小穴（0.3m×0.2m、深さ0.11m）。平面上は389号墓と391号墓に跨り重複。
561	93	L23	隅丸長方形に近い	85・50・30	−	−	−	−	−	−	土師器小皿（197～199）完形品3枚	−	Ⅲ類。暗黄褐色土。393～394号墓にかけて重複。副葬品完形の土師器皿3枚の時期（14ｃ後葉～15ｃ前葉）に築造の墓坑か。（個別遺構第40図）
562	91	L23	長方形	90・65・27	−	−	−	−	−	−	土師器皿（135）・小皿（200）破片	−	Ⅲ類。暗黄褐色土。平面上はほぼ401号墓と重複。土師器皿及び小皿（14ｃ末葉～15ｃ中葉）より以降に築造の土壙墓か。（第40図）
563	92	L24	不整楕円形	90・70・26	−	−	−	−	−	−	土師器小皿3枚（209～211）概ね完形品	−	Ⅲ類。暗黄褐色土。平面上は402～404号墓にかけて重複。土師器皿3枚（15ｃ中葉～後葉）とほぼ同時期の土壙墓と類推。（第40図）
564	32	M23	略円形	40・40・6	◎	−	○	−	−	−	−	−	ⅠA類。暗黄褐色土。掘形に焼土帯。平面上ほぼ396号墓に重複。

第15表　A地区検出　土坑群一覧　ＳＫ465～ＳＫ599・第17図～22図。

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
565	124	M23	円形	50・50・17	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。暗黄褐色土。394号墓と396号墓との境目下層に位置する。時期不明の土壙墓。
566	33	M23	円形を帯びた隅丸方形	130・110・31	◎	○	－	－	－	－	－	鉄釘１本（鉄54）	ⅠB類。暗黄褐色土。堀形に焼土帯。釘の出土から明らかに火葬土坑。時期は不明。
567	30	M23	隅丸方形に近い	140・125・32	○	－	○	－	○	－	－	－	ⅠA類。暗黄褐色土。焼土帯はないが、全面が真っ赤に焼けていた。火は北接する407号墓の南辺区画石にも及んでいた。概ね405号墓と重複。人骨ＳＸ204。熱残留磁化測定試料採取遺構。附篇（2）（1300年±50年）
568	35	M23	隅丸方形	190・160・21	◎	－	－	◎	○	－	－	－	ⅠA類。暗茶褐色土。人骨片ＳＸ194を納めた常滑産甕（15ｃ前半代）は上層399号墓の蔵骨器。堀形に焼土帯。底面広範囲に灰。当該火葬土坑（熱残留磁化測定試料採取遺構）は399号墓とは別遺構。附篇（2）参照（1240±50年）。
569	37	N23	隅丸方形	115・100・20	○	－	◎	－	－	－	－	－	ⅡA類。黒灰色土。平面上240号墓と重複。時期不明の火葬土坑。
570	2	N23	四隅突出型方形（付属の周溝ＳＤ879）	100・60・25	◎	－	○	－	○	－	土師器小皿（154～157）小破片	－	ⅠB類。暗黄褐色土。堀形に焼土帯。四隅突出型通気孔。周溝ＳＤ879を持つ方形周溝墓243号墓に伴う土坑（人骨出土ＳＸ177）。土師器皿は14ｃ中葉～後葉。土坑ＳＫ502より古。100号墓ＳＫ514、221号墓ＳＫ533に類例。熱残留磁化測定試料採取遺構。附篇（2）参照（1140±70年）。（個別遺構第38図）
571	52	L24	不整楕円形	90・80・32	◎	○	－	－	○	－	－	－	ⅠA類。暗黄褐色土。堀形に焼土帯。人骨片ＳＸ208。平面上は大略430号墓と重複。
572	39	L24	長楕円形	120・50・21	◎	－	－	－	○	－	土師器小皿6枚（202～207）ほぼ完存状態	－	ⅠB類。暗黄褐色土。堀形に焼土帯。人骨片ＳＸ209。土師器小皿（14ｃ末～15ｃ中葉）に近い時期に火葬土坑を墓坑にしたと推定。平面上427・431号墓に跨り重複。
573	38	L24	長楕円形に近い	100・70・17	◎	○	○	－	○	－	－	－	ⅠA類。暗茶褐色土。堀形に焼土帯。人骨片ＳＸ210。平面上427・429・431号墓に重複。
574	108	L24	不整長方形	125・55・40	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。暗黄褐色土。底部に0.3m大の川原石。平面上423・427・428号墓と重複。時期不明の土壙墓。
575	43	M24	不整形（隅丸方形崩れ）	120・60・38	◎	○	－	－	○	－	－	－	ⅠA類。暗黄褐色土。堀形に焼土帯。人骨片ＳＸ212。平面上428・429号墓と重複。
576	44	M24	半楕円形	85・60・13	○	○	－	－	○	－	－	－	ⅡA類。暗黄褐色土。人骨片ＳＸ213。大半が429号墓と重複するも別遺構。
577	31	M24	隅丸長方形	120・55・33	◎	－	○	－	○	－	－	－	ⅠA類。暗黄褐色土。堀形に焼土帯。平面上は419～420号墓と重複。人骨片ＳＸ292。
578	109	M24	楕円形	90・75・39	－	－	－	－	○	－	－	－	ⅡA類。暗黄褐色土。422号墓と434号墓との境目下層に当たる。人骨片ＳＸ240。
579	111	O24	長楕円形	75・40・18	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。暗黄褐色土。平面上はほぼ251号墓と重複。時期不明の土壙墓。
580	40	M25	長楕円形	85・45・18	－	－	－	－	○	－	－	－	ⅡA類。暗黄褐色土。人骨片ＳＸ214。平面上は429号墓と重複。
581	45	M25	隅丸方形に近い楕円形	110・70・20	◎	○	－	－	○	－	－	－	ⅠA類。暗褐色土。堀形に焼土帯。人骨ＳＸ206。ＳＫ582より新。433・434号墓～429号墓の境目下層に位置。熱残留磁化測定試料採取遺構。附篇（2）参照（1150±80年）。
582	42	M25	隅丸方形に近い	90・70・23	◎	○	○	－	○	－	－	－	ⅠA類。暗黄褐色土。堀形に焼土帯。土坑ＳＫ581・ＳＫ584より古。平面上434号墓～通路の下層に位置する。人骨ＳＸ211。
583	55	M25	隅丸方形に近い	80・(70)・18	○	○	○	－	○	－	土師器皿（138）破片、山茶碗（参考6）底部の小破片	－	ⅡB類。暗褐色土。人骨片ＳＸ225。ＳＫ584より古い。平面上433・435号墓と重複。土師器皿（14ｃ末～15ｃ中葉）、山茶碗（14ｃ前半代）より以降の火葬土坑と推測。
584	59	M25	隅丸長方形	(100・60・18)	◎	○	○	－	○	－	－	－	ⅠA類。暗褐色土。堀形に焼土帯。人骨片ＳＸ224。ＳＫ583より新。平面上433・434・438号墓と重複。
585	57	M25	隅丸長方形	140・75・29	－	○	－	－	－	－	土師器小皿（232）破片	－	ⅡB類。暗褐色土。平面上435・436・438号墓と重複。土師器小皿（15ｃ中葉～後葉）より以降に築造の火葬土坑かと推定。
586	47	M25	溝状楕円形	170・40・17	◎	○	○	－	○	－	－	－	ⅠA類。暗褐色土。堀形に焼土帯。人骨片ＳＸ241。ＳＫ588より新。平面上437・438・439号墓と重複。時期不明の火葬土坑。
587	71	N25	溝状楕円形	90・50・20	◎	－	○	－	○	－	－	－	ⅠA類。暗褐色土。堀形に焼土帯。ＳＫ588より古い。平面上440・441・442号墓と重複。人骨片ＳＸ469。時期不明の火葬土坑。
588	56	M25	隅丸長方形	(140・40・20)	◎	－	○	－	○	－	－	－	ⅠA類。暗褐色土。堀形に焼土帯。人骨片ＳＸ242。土坑ＳＫ586より古、ＳＫ587・589より新。平面上ほぼ437号墓と重複。

第15表　A地区検出　土坑群一覧　ＳＫ465～ＳＫ599・第17図～22図。

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
589	54	M25	(隅丸方形)	(80・50・20)	◎	○	○	−	○	−	−	−	ⅠA類。暗褐色土。掘形に焼土帯。人骨片ＳＸ223。土坑ＳＫ590より古。平面上ほぼ436号墓と重複。
590	51	M25	略楕円形	80・(50)・20	◎	○	−	−	○	−	−	−	ⅠA類。暗褐色土。掘形に焼土帯。人骨片ＳＸ222。ＳＫ589・ＳＫ591より新。平面上は447・448号墓と重複。
591	46	M25	不整形	100・50・20	◎	○	○	−	○	−	−	−	ⅠA類。暗褐色土。掘形に焼土帯。人骨片ＳＸ221。ＳＫ590より古。平面上ほぼ448号墓と重複。
592	70	N25	隅丸長方形	100・55・41	○	−	○	−	−	−	土師器小皿(236) 完存	−	ⅡB類。暗褐色土。平面上446・447号墓と重複。土師器皿（14ｃ末～15ｃ前葉）とほぼ同時期頃に築造の火葬墓かと推定。
593	66	N25	略隅丸長方形	170・75・53	◎	○	○	−	○	−	土師器皿(125) 破片	−	ⅠB類。暗褐色土。掘形の北半に焼土帯。平面上444・445号墓と重複。土師器皿（13ｃ末～14ｃ前葉）より以降に築造の火葬土坑と推測。人骨ＳＸ215。南半の石積み土坑は経塚遺構の残骸かも？火輪Ａ1062が近接出土。(第40図)
594	58	O25	隅丸方形	65・50・16	−	−	−	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。250号墓と重複。人骨片ＳＸ229。
595	110	P25	不整楕円形	95・55・20	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。人骨片ＳＸ243。254号墓と257号墓との中間下層に相当する位置。
596	126	N26	長楕円形	75・30・15	◎	−	−	−	−	−	−	−	ⅠA類。暗茶褐色土。堀形に焼土帯。448号墓と一部分が重複。時期不明の火葬土坑。
597	49	N26	長楕円形	135・55・23	○	−	−	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。人骨片ＳＸ230。
598	48	N26	隅丸方形に近い楕円形	140・95・26	○	○	○	−	−	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。454・455号墓と重複。
599	50	N26	隅丸方形	60・60・31	◎	○	−	−	○	−	土師器皿(126) 破片・土師器小皿(158・159)	−	ⅠB類。暗茶褐色土。堀形に焼土帯。人骨片ＳＸ231。土師器皿破片（13ｃ末～14ｃ初頭）は混入遺物。完存の土師器小皿（14ｃ中葉～後葉）の時期に築造の火葬墓かも。

		規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
Ａ地区土坑総計135基	土坑平均規模	119.3・82.7・26.4	59	25	55	2	62	1基	38基	21基	平均値は（ ）内の推定数値を除外し算出した。 遺物関係はそれが出土した土坑の総数。 掘形に焼土帯を持つもの：41基（30.4%） 遺物等が一切ない不明土坑：32基（24%）

第15表　Ａ地区検出　土坑群一覧　ＳＫ465～ＳＫ599・第17図～22図。

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
600	140	K25	不整楕円形	100・65・22	◎	○	○	−	○	−	−	−	ⅠＡ類。暗茶褐色土。堀形の肩～壁面に焼土が帯状に残る（以下焼土帯と表記）。外北側から経筒外容器筒身破片（20）が、南側で土師器鍋小破片（95）などが出土、近接して石塔類（空）風火輪(Ｂ1076）などを採取。人骨ＳＸ216。
601	138	N27	(略円形)	88・(80)・16	○	−	○	−	○	−	−	−	ⅡＡ類。暗褐色土。人骨ＳＸ217。時期不明の火葬土坑。
602	137	N27	(むすび形)	(100)・94・27	○	−	○	−	−	−	−	−	ⅡＡ類。明黒褐色土。時期不明火葬土坑。
603	139	O27	楕円形	50・36・20	○	−	○	−	○	−	土師器皿(139) 破片	−	ⅡＢ類。暗褐色土。南側0.8m地点で空風火輪(Ｂ1073・Ｂ1083)を採取。土師器皿(139)は15ｃ中葉頃に比定、それ以降の火葬土坑と推定。人骨ＳＸ218。
604	135	N28	瓢箪形	92・52・18	○	−	○	−	○	−	−	−	ⅡＡ類。茶褐色土。人骨ＳＸ226。時期不明火葬土坑。
605	136	N28	平行四辺形に近い	100・70・20	○	−	○	−	○	−	土師器皿(140)	−	ⅡＢ類。暗褐色土。463号墓（墳丘ｃ）より古い。土師器皿（140）は火を受ける、14ｃ末～15ｃ前葉頃に比定。その頃の火葬土坑と推測。人骨ＳＸ227。
606	149	O28	ﾑｻｻﾋﾞ形状(四隅突出形態)	190・85・21	◎	○	◎	−	○	−	−	−	ⅠＡ類。茶褐色土。掘形に焼土帯。相輪(Ｂ1138)・空風（火）輪（Ｂ1085）出土。南東側0.5m地点で空風輪（Ｂ052)・(水）地輪部（Ｂ1137）も出土。463号墓（墳丘ｃ）に先行する火葬土坑。Ａ地区のＳＫ558と類似形態の火葬施設。人骨ＳＸ235。
607	159	O28	不整楕円形	100・75・24	◎	−	○	−	○	−	−	−	ⅠＡ類。茶褐色土。掘形に焼土帯。463号墓（墳丘ｃ）に先行する火葬土坑。人骨ＳＸ236。

第16表　Ｂ地区　土坑群一覧　ＳＫ600～ＳＫ767・第23～27図

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
608	141	O28	不整形楕円	90・80・33	◎	○	○	—	○	—	—	—	Ⅰ A類。暗茶褐色土。掘形に焼土帯。463号墓（墳丘ｃ）に先行する火葬土坑。人骨ＳＸ237。東側0.4 ～ 0.6m地点で2箇所から人骨細片出土。熱残留磁化測定試料採取遺構：A.D.1370＋60年or－370年（Ⅶ附篇2参照）。
609	158	K29	楕円形	80・60・40	—	—	—	—	—	—	—	—	Ⅳ類。暗褐色土。
610	—	M29	円形（歪み）	96・88・45	—	—	—	—	—	古銭（銭22・銭23）「熙寧元寶」2枚	常滑産大甕（92）	—	Ⅲ類。462号墓（墳丘Ｂ）の大甕埋納土坑。地輪（Ｂ1069）空（風）輪（Ｂ1054）出土。古銭（銭22）は墳丘上表土の当該土坑付近で、古銭（銭23）は大甕（92）内出土。大甕（92）は15ｃ後半～ 16ｃ初頭頃に比定、それ以降に築造の主体部施設。16世紀代の納骨堂の可能性も。
611	150	N29	隅丸方形	80・70・31	—	—	—	—	—	—	—	—	Ⅳ類。暗褐色土。462号墓（墳丘Ｂ）より後出。
612	143	O29	円形	35・34・20	—	—	—	—	—	—	—	—	Ⅳ類。暗褐色土。空風（火）輪（Ｂ1097 ～ 1099）・（空風輪欠）火輪（Ｂ1100）、（空風）火水地輪（Ｂ1127）等が出土。
613	20	O29	隅丸長方形	75・40・22	—	—	○	—	○	—	須恵器杯蓋破片（15）	—	Ⅱ Ｂ類。暗褐色土。須恵器杯蓋（15）破片はＡ地区ＳＫ527から出土の破片と接合し、７ｃ末～８ｃ前半代に比定。人骨ＳＸ238。
614	23	O29	長楕円形	100・65・23	—	○	○	—	○	—	—	—	Ⅱ Ａ類。暗茶褐色土。人骨ＳＸ239。
615	21	P29	長楕円形	100・55・35	◎	○	○	—	○	—	—	—	Ⅰ Ａ類。暗茶褐色土。掘形に焼土帯。464号墓（墳丘Ｄ）に先行する火葬土坑。人骨ＳＸ244。
616	22	P29	楕円形	90・60・12	◎	○	○	—	—	—	—	—	Ⅰ Ａ類。暗茶褐色土。掘形に焼土帯。464号墓（墳丘Ｄ）に先行の火葬土坑。
617	145	P29	不整楕円形	80・75・30	◎	○	—	—	○	—	—	—	Ⅰ Ａ類。暗褐色土。掘形に焼土帯。464号墓（墳丘Ｄ）に先行する火葬土坑。人骨ＳＸ248。
618	144	P29	隅丸方形	75・55・29	○	○	○	—	○	—	—	—	Ⅱ Ａ類。暗茶褐色土。464号墓（墳丘Ｄ）に先行する火葬土坑と推定。人骨ＳＸ249。
619	160	L30	隅丸方形	70・60・18	—	—	—	—	—	—	土師器皿（144）、小皿（276 ～ 278）の小破片	—	Ⅲ類。暗黄褐色土。土師器皿・小皿破片は4枚分に相当。16ｃ前半代に比定。内部から宝篋印塔屋根部Ｂ1144出土。地輪Ｂ1070も近接出土。火気使用の形跡なし。16ｃ前半以降の火葬墓の可能性も考慮すべきか？
620	162	M30	隅丸三角形	60・40・23	—	—	—	—	—	—	—	—	Ⅳ類。暗黄褐色土。
621	163	M30	楕円形	60・38・20	—	—	—	—	—	—	—	—	Ⅳ類。暗黄褐色土。宝篋印塔屋根部Ｂ1142が近接して出土。
622	161	N30	Ｌ字変形	70・70・16	—	—	—	—	—	—	—	—	Ⅳ類。暗茶褐色土。
623	151	N30	円形	45・40・41	—	—	—	—	—	古銭「□宋元寶？」ほか2枚あり（銭208 ～ 209）	土師器細片	—	Ⅲ類。暗黄褐色土。火気の形跡はないが、出土銭貨（六文銭）は高熱で熔解付着していたので、一応火葬土坑としておく。銭貨観察表参照。
624	152	N30	隅丸方形	60・60・38	—	—	—	—	—	判読不能銭3枚（銭210 ～ 212）	常滑焼大甕（92）口縁部破片・経筒外容器小破片	—	Ⅲ類。暗褐色土。古銭は熔解付着で判読不能。大甕(92)口縁部破片は462号墓（墳丘Ｂ）のＳＫ610出土の大甕と接合可能。ＳＫ610破壊後に混入ならば、かなり後代の火葬土坑になる。経筒外容器小破片は12ｃ後葉～13ｃ初頭に比定（Ａ地区からの散逸遺物の一部）。
625	148	N30	隅丸方形	70・60・32	—	—	—	—	—	—	—	—	Ⅳ類。茶褐色土。内部から一石五輪塔の地輪部Ｂ1121・一石水地輪Ｂ1106・火水地輪部Ｂ1122 ～Ｂ1124など出土。
626	19	N30	楕円形	90・75・50	—	—	○	—	—	—	白磁碗小破片（参考13）	—	Ⅱ Ｂ類。橙褐色土。白磁碗（参考13）は15ｃ後半頃のものか。外南西側0.6m地点で土師器皿・古銭4枚出土。また北東側１ｍでも古銭2枚出土。
627	14	O30	楕円形	113・64・23	—	○	○	—	—	—	—	—	Ⅱ Ａ類。茶褐色土。時期不明の火葬土坑。
628	15	O30	長楕円形	135・60・22	○	—	○	—	○	—	—	—	Ⅱ Ａ類。茶褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨ＳＸ250。
629	18	O30	隅丸方形	74・72・19	○	—	○	—	○	—	—	—	Ⅱ Ａ類。暗茶褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨ＳＸ251。
630	16	O30	不整楕円形	93・57・24	○	—	○	—	○	—	—	—	Ⅱ Ａ類。暗茶褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨ＳＸ253。
631	17	O30	楕円形	73・67・22	○	○	○	—	○	—	—	—	Ⅱ Ａ類。茶褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨ＳＸ255。底部に0.3m大の川原石２個。（第42図）
632	146	P30	隅丸方形（歪み）	110・75・20	○	○	○	—	○	—	—	—	Ⅱ Ａ類。暗褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨ＳＸ256。
633	157	P30	隅丸台形	90・23・25	◎	—	—	—	○	—	—	—	Ⅰ Ａ類。暗褐色土。掘形に焼土帯。底部に小穴（0.45m×0.3m）あり。時期不明の火葬土坑。人骨ＳＸ257。

第16表　Ｂ地区　土坑群一覧　ＳＫ 600 ～ＳＫ 767・第23 ～ 27図

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
634	156	P30	隅丸長方形	90・70・25	－	－	－	－	○	－	－	－	ⅡA類。暗褐色土。464号墓（墳丘D）に先行の火葬土坑か。人骨SX258。
635	155	P30	長楕円形	100・40・23	－	－	○	－	○	－	－	－	ⅡA類。暗褐色土。人骨SX259。
636	154	P30	長楕円形（歪み）	110・45・21	－	－	○	－	○	－	－	－	ⅡA類。暗褐色土。人骨SX260。
637	164	M31	楕円形	70・40・10	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。暗黄褐色土。
638	1	M31	不整長楕円形	115・50・15	○	－	○	－	－	－	－	－	ⅡA類。暗黄褐色土。時期不明の火葬土坑。
639	2	N31	楕円形	100・75・25	◎	－	○	－	○	－	－	－	ⅠA類。橙褐色土。掘形に焼土帯。人骨SX261。外北東側1mで空風火輪B1077・空風（火）輪B1093～B1096などを採取。時期不明の火葬土坑と考える。
640	3	N31	隅丸方形	116・105・30	○	－	○	－	○	－	－	－	ⅡA類。黄褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨SX263。（個別遺構第42図）
641	4	O31	不整形楕円	102・64・25	－	○	○	－	○	－	土師器小碗（83）	－	ⅡB類。褐色土。人骨SX265。土師器小碗（83）は16c代に比定。ほぼ同時期頃の火葬土坑と推測。（個別遺構第40図）
642	5	O31	隅丸台形	73・77・30	○	○	○	－	－	－	－	－	ⅡA類。暗茶褐色土。時期不明の火葬土坑。
643	6	O31	隅丸長方形	76・56・22	－	○	○	－	○	－	－	－	ⅡA類。橙褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨SX266。
644	7	P31	略円形	80・72・33	◎	－	○	－	－	－	－	－	ⅠA類。暗褐色土。掘形に焼土帯。時期不明の火葬土坑。
645	8	P31	不整形楕円	84・75・25	○	－	○	－	○	－	－	－	ⅡA類。黒褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨SX268。（個別遺構第42図）
646	9	P31	楕円形	90・55・25	◎	○	－	－	○	－	－	－	ⅠA類。茶褐色土。掘形に焼土帯。時期不明の火葬土坑。人骨SX269。
647	153	P31	隅丸長方形	110・60・24	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。茶褐色土。
648	12	O32	隅丸方形	76・56・25	－	－	○	－	○	－	－	－	ⅡA類。茶褐色土。人骨SX270。
649	11	O32	不整楕円形	74・64・24	◎	－	○	－	○	－	ロクロ土師器皿破片（34）	－	ⅠB類。茶褐色土。掘形に焼土帯。混入のロクロ土師器皿（34）破片は11c代と推定。それよりは後代の火葬土坑。人骨SX271。
650	10	P32	不整三角形	70・50・13	○	○	○	－	○	－	－	－	ⅡA類。茶褐色土。土坑SK651より古い。時期不明の火葬土坑。人骨SX272。
651	10	P32	隅丸長方形	100・60・25	○	○	○	－	○	－	－	－	ⅡA類。茶褐色土。土坑SK650より新。時期不明の火葬土坑。人骨SX471（旧SX273を名称変更した）。
652	44	P32	楕円形	90・73・27	－	○	◎	－	－	－	－	－	ⅡA類。暗褐色土。時期不明の火葬土坑。（個別遺構第42図）
653	26	P32	隅丸方形（歪み）	80・63・30	○	○	○	－	－	－	－	－	ⅡA類。暗褐色土。時期不明の火葬土坑。
654	43	P32	不整楕円形	85・66・20	－	－	○	－	○	－	－	－	ⅡA類。暗褐色土。人骨SX274。
655	13	N33	楕円形	80・64・30	◎	－	○	－	○	－	－	鉄釘（参88）1点	ⅠB類。茶褐色土。掘形に焼土帯。時期不明の火葬土坑。人骨SX275。
656	25	O33	楕円形	80・65・25	○	－	○	－	○	－	－	－	ⅡA類。暗茶褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨SX276。
657	32	O33	不整楕円形	115・95・28	○	－	○	－	－	－	－	－	ⅡA類。暗褐色土。時期不明の火葬土坑。
658	24	O33	不整楕円形	90・66・30	◎	－	○	－	○	－	－	－	ⅠA類。茶褐色土。掘形に焼土帯。時期不明の火葬土坑。人骨SX277。
659	55	O33	不整楕円形	83・70・26	○	○	○	－	○	－	－	－	ⅡA類。暗褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨SX278。
660	42	P33	不整形隅丸方形	85・78・26	○	○	○	－	○	－	－	－	ⅡA類。褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨SX279。
661	27	P33	隅丸長方形（歪み）	98・78・28	○	－	◎	－	○	－	－	－	ⅡA類。黒褐色土。火葬土坑。人骨SX472（旧SX280を名称変更）。（個別遺構第42図）
662	28	P33	瓢箪形	142・80・22	○	－	○	－	○	古銭「景徳元寶」ほか3枚（銭61～63）	－	－	ⅡB類。朱塗小木片。銭貨観察表（銭61～63）。熔解付着の銭貨2枚（銭62～63）は判読不能。火葬土坑。人骨SX283。
663	29	P33	隅丸台形	64・58・17	－	○	○	－	○	－	－	－	ⅡA類。褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨SX284。
664	31	Q33	不整台形	90・70・30	○	－	○	－	－	－	－	－	ⅡA類。暗褐色土。時期不明の火葬土坑。
665	165	M34	不整楕円形	100・70・25	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅳ類。茶褐色土。
666	40	N34	不整形隅丸方形	100・88・30	◎	○	○	－	○	－	－	鉄釘（鉄56）1点	ⅠB類。茶褐色土。掘形に焼土帯。時期不明の火葬土坑。人骨SX285。
667	56	O34	隅丸方形	70・68・27	－	－	○	－	－	－	－	－	ⅡA類。暗褐色土。
668	33	P34	不整形楕円	95・78・25	◎	－	○	－	○	－	－	－	ⅠA類。暗褐色土。掘形に焼土帯。火葬用土坑。人骨SX288。（個別遺構第42図）。熱残留磁化測定試料採取遺構：AD1210年±140年（附篇2参照）。
669	133	P34	（楕円形）	（100）・76・20	○	－	○	－	○	－	－	－	ⅡA類。暗茶褐色土。SK670より古い。時期不明の火葬用土坑。人骨SX289。

第16表　B地区　土坑群一覧　SK 600～SK 767・第23～27図

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
670	132	P34	(略円形)	84・(80)・10	−	−	○	−	−	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ671よりも古く、ＳＫ669よりは新しい。時期不明の火葬土坑か。
671	30	P34	不整形隅丸長方形	122・102・17	◎	−	○	−	○	−	−	−	ⅠA類。暗褐色土。掘形に焼土帯。底部も一面に赤く焼ける。ＳＫ670より新しい。時期不明の火葬用土坑。人骨ＳＸ290。
672	131	P34	(隅丸方形)	(60)・60・19	−	−	○	−	−	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。
673	39	Q34	不整楕円形	240・140・25	−	○	○	−	○	−	−	鉄釘(鉄78) 1点	ⅡB類。黒褐色土。時期不明の火葬用土坑。人骨ＳＸ291。
674	70	Q34	不整形楕円	95・60・20	−	○	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。時期不明の火葬用土坑。人骨ＳＸ293。
675	52	Q34	楕円形	90・60・20	○	○	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。時期不明の火葬用土坑。人骨ＳＸ296。
676	41	O35	楕円形	112・95・30	○	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。茶褐色土。底部に石あり。時期不明の火葬用土坑。人骨ＳＸ297。
677	54	O35	不整形楕円	118・76・29	◎	−	○	−	○	−	−	−	ⅠA類。暗茶褐色土。掘形に焼土帯。底部に石あり。時期不明の火葬用土坑。人骨ＳＸ298。
678	57	P35	隅丸方形	90・85・20	−	○	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。二重土坑（内部土坑規模は0.38m×0.35m×0.1m）。底部に0.1m大の石５個、0.23m大の石１個。時期不明の火葬土坑。人骨ＳＸ299。
679	48	P35	略円形	55・48・20	−	○	○	−	−	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。底部に石。時期不明の火葬土坑。
680	47	P35	略円形	80・72・25	○	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。底部に石。時期不明の火葬土坑。人骨ＳＸ300。
681	36	P35	隅丸長方形	100・50・25	−	−	○	−	○	古銭2枚（銭199・200）「咸平元寶」「永楽通寶」	−	−	ⅡB類。黒褐色土。銭貨観察表（銭199～200）参照。焼土はないが、銭貨が熔解付着しており、火葬土坑と判断。人骨ＳＸ301。
682	34	P35	略円形	84・75・20	−	−	○	−	○	古銭5枚（銭55～59）「皇宋通寶」ほか	−	鉄釘3本（鉄69～70及び参考89）	ⅡB類。黒褐色土。銭貨観察表（銭55～59）。人骨ＳＸ302。南側0.3～0.4m地点で古銭17枚（銭24～40）が遺構外出土。（個別遺構第42図）
683	35	Q35	不整楕円形	80・60・20	−	−	○	−	○	−	−	鉄釘1本（参考91）	ⅡB類。黒褐色土。人骨ＳＸ303。
684	134	Q35	隅丸長方形	80・78・11	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。人骨ＳＸ304。
685	123	Q35	楕円形	90・80・20	−	○	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。底部に石(0.1～0.2m大)が4個並ぶ。時期不明の火葬土坑。人骨ＳＸ305。
686	53	Q35	楕円形	64・54・28	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。黒褐色土。人骨ＳＸ306。
687	142	O36	略円形	46・44・15	−	−	○	−	−	−	−	−	ⅡA類。茶褐色土。
688	116	P36	隅丸方形	76・75・25	−	○	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。底部に石（0.1～0.15m大）6個あり。時期不明の火葬土坑。人骨ＳＸ307。
689	49	P36	(隅丸方形)	74・(70)・28	−	−	○	−	−	−	−	−	ⅡA類。黒褐色土。底部に径0.15mの小穴。土坑ＳＫ690より古い。
690	50	P36	隅丸長方形	115・65・25	◎	−	○	−	○	−	−	−	ⅠA類。暗橙褐色土。掘形に焼土帯。底部も全面赤く焼ける。土坑ＳＫ689よりも新。時期不明の火葬土坑。人骨ＳＸ308。
691	117	P36	隅丸長方形	80・65・28	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。底部に石（0.1～0.15m大）2個あり。人骨ＳＸ309。
692	118	P36	不整楕円形	105・80・33	○	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。底部に石（0.25～0.3m大）あり。 時期不明の火葬土坑。人骨ＳＸ310。
693	129	P36	楕円形	110・95・25	−	○	○	−	○	−	−	鉄釘1本（鉄71）	ⅡB類。暗茶褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨ＳＸ311。
694	51	P36	不整楕円形	110・100・15	−	−	◎	−	○	−	−	鉄釘1本（参考90）	ⅡB類。黒褐色土。底部等に6個の石（0.15～0.2m大）。人骨ＳＸ312。火葬土坑
695	124	Q36	楕円形	60・50・20	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。人骨ＳＸ313。
696	125	Q36	隅丸方形	100・95・18	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。底部に石(0.25～0.3m大)。人骨ＳＸ314。
697	126	Q36	隅丸方形	82・76・40	−	○	◎	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨ＳＸ315。
698	127	Q36	(楕円形)	(66)・52・21	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ699より古。人骨ＳＸ316。
699	128	Q36	(楕円形)	(80)・72・20	−	○	○	−	○	古銭4枚（銭213～216）「皇宋通寶?」ほか	−	−	ⅡB類。暗茶褐色土。ＳＫ698よりも新。銭貨観察表（銭213～216）、1枚は判読不能。火葬土坑。人骨ＳＸ317。
700	69	P36	隅丸方形	88・82・21	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。底部に間隔を置き、石（0.2m大）が並ぶ。ＳＫ701より新。人骨ＳＸ318。

第16表　B地区　土坑群一覧　ＳＫ600～ＳＫ767・第23～27図

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
701	130	Q37	(不整楕円形)	(80)・65・11	−	○	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。黒褐色土。底部に間隔を置き、石(0.2m大)が並ぶ。SK700より古。火葬土坑。人骨SX319。
702	58	Q36	隅丸長方形	120・70・28	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。底部に0.3m大の川原石が2個据わる。人骨SX320。
703	68	O37	長楕円形	120・80・30	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。茶褐色土。人骨SX321。
704	114	P37	(楕円形)	85・65・18	−	−	○	−	○	古銭2枚(銭197・198)「元豊通寶」ほか	−	−	ⅡB類。暗茶褐色土。SK705より新。銭貨観察表(銭197～198)参照。人骨SX322。
705	115	P37	(楕円形)	120・85・35	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。SK704より古い。人骨SX323。
706	71	P37	不整形楕円	77・87・18	−	○	○	−	○	古銭12枚(銭107～118)「天聖元寶」ほか	−	−	ⅡB類。黒褐色土。SK707より新。火葬土坑。銭貨観察表(銭107～118):永楽通寶7枚、判読不能4枚ほか。熔解付着6枚。人骨SX324。(個別遺構第42図)
707	72	P37	(隅丸方形)	(88)・86・30	−	−	○	−	○	古銭7枚(銭119～125)「開通元寶」ほか	−	鉄釘12点(鉄57～68)、燧金(鉄30)	ⅡB類。茶褐色土。SK706より古。銭貨観察表(銭119～125)、熔解付着4枚。焼土や焼石はないが鉄釘などの遺物内容から火葬土坑と判断。人骨SX325。
708	113	P37	隅丸方形	105・100・25	−	○	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。底部に火を受けた石(約0.2m大)。火葬土坑。人骨SX326。(個別遺構第42図)
709	73	P37	長楕円形	112・42・14	−	○	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。黒褐色土。火葬土坑。人骨SX327。
710	119	P37	(隅丸方形)	76・62・15	−	−	◎	−	○	−	−	鉄釘1本(鉄73)	ⅡB類。黒褐色土。SK711・713より新。人骨SX328。底部に0.35m大の石あり。
711	120	P37	(不整楕円形)	(100)・68・14	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。SK710・712より古。人骨SX329。
712	121	P37	(不整楕円形)	(80)・(70)・12	−	○	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。SK711よりも新、SK714より古。火葬土坑。人骨SX330。
713	122	P37	(隅丸方形)	80・70・15	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。SK710・714より古、SK711より新。人骨SX331。
714	74	Q37	隅丸長方形	106・66・18	−	−	○	−	○	−	−	鉄釘1本(鉄72)	ⅡB類。黒褐色土。SK712・713・715よりも新。人骨SX332。底部に0.2m大の石あり。
715	75	Q37	(不整楕円形)	90・(70)・20	−	○	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。黒褐色土。SK714より古。火葬土坑。人骨SX333。
716	59	Q37	楕円形	105・85・15	−	○	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。底部に0.25m大の川原石が2個据わる。火葬土坑。人骨SX334。
717	60	Q37	隅丸方形	70・65・18	○	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。掘形南側は抜根で崩壊。火葬土坑。人骨SX335。
718	67	Q37	隅丸長方形	110・65・25	−	○	○	−	○	−	−	鉄釘1本(鉄79)	ⅡB類。暗褐色土。火葬土坑。人骨SX336。
719	64	O38	隅丸方形	100・90・32	○	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。底部に0.1～0.2m大の石4個遺る。径0.4mの小穴も。火葬土坑。人骨SX337。
720	61	P38	隅丸方形	95・80・30	−	○	○	−	−	−	−	鉄釘4点(鉄74～77)	ⅡB類。赤褐色土。底部に0.3m大の川原石3個据わる。火葬土坑。(個別遺構第42図)
721	77	P38	不整楕円形	90・50・25	−	○	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。茶褐色土。底部に0.2m大の川原石2個据わる。火葬土坑。人骨SX338。
722	45A	P38	(楕円形)	110・70・15	○	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。黒茶褐色土。SK723より古。火葬土坑。人骨SX339。
723	45B	P38	(不整多角形)	110・100・15	○	−	○	−	○	古銭2枚(銭53・54)「洪武通寶」ほか	−	−	ⅡB類。暗褐色土。SK722より新。底部に0.2m大の石。銭貨観察表(銭53～54)。火葬土坑。人骨SX340。
724	76	Q38	隅丸長方形	120・63・35	−	○	◎	−	○	−	−	−	ⅡA類。黒褐色土。底部に焼石(0.1m大)が3個据わる。火葬土坑。人骨SX341。
725	109	P38	隅丸方形	90・76・26	−	○	○	−	○	古銭6枚(銭127～132)「判読不能」	−	−	ⅡB類。暗茶褐色土。SK726より新。銭貨観察表(銭127～132)、熔解付着。火葬土坑。人骨SX342。
726	110	P38	(楕円形)	(90)・78・18	−	−	○	−	−	−	−	−	ⅡA類。暗黄褐色土。SK725・727より古。
727	46	P38	長楕円形	100・46・20	◎	○	○	−	○	古銭4枚(銭48～51)「皇宋通寶」ほか	−	−	ⅠB類。暗茶褐色土。SK726・729より新。掘形に焼土帯。銭貨観察表(銭48～51)。火葬土坑。人骨SX343。
728	104	Q38	(隅丸長方形)	90・70・20	−	○	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗橙褐色土。底部に0.1～0.15m大の石2個遺る。火葬土坑。人骨SX344。
729	112	Q38	略円形	80・76・22	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。SK727より古。人骨SX345。
730	111	Q38	長楕円形	94・50・23	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。底部に0.2m大の川原石2個据わる。人骨SX346。
731	38	Q38	隅丸長方形	92・58・20	○	○	○	−	○	古銭1枚(銭52)「永楽通寶」	−	−	ⅡB類。暗褐色土。SK732より新。底部に0.15～0.25m大の石2個据わる。銭貨観察表(銭52)。火葬土坑。人骨SX347。

第16表　B地区　土坑群一覧　SK 600～SK 767・第23～27図

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
732	105	Q39	(隅丸長方形)	92・(80)・21	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。SK731より古。人骨SX348。
733	37	Q38	隅丸平行四辺形	124・80・23	—	—	○	—	◎	古銭7枚(銭41～47)「開通元寶」ほか	—	—	ⅡB類。黒茶褐色土。SK734より新。SK734を含め底部に大小18個の石(0.1～0.3m大)が不規則に散在。銭貨観察表(銭41～47)。熔解付着、火葬土坑。人骨SX349。
734	63	Q38	隅丸台形	96・66・17	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗褐色土。SK733より古。人骨SX350。
735	108	R38	不整楕円形	124・84・14	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗褐色土。底部に間隔を置き一対の石(0.3～0.35m大)据わる。火葬土坑。人骨SX351。
736	65	P39	楕円形	105・85・20	—	—	○	—	—	古銭1枚(銭60)「皇宋通寶」	—	—	ⅡB類。暗黄褐色土。底部壁際3ヶ所に長径0.2m前後の半円形小穴を穿つ。銭貨観察表(銭60)。
737	62	P39	不整形楕円	130・110・50	○	—	○	—	○	古銭6枚(銭68～73)「景徳元寶」ほか	—	—	ⅡB類。暗褐色土。内側にも0.85×0.55m大の小土坑。銭貨観察表(銭68～73):熔解付着で判読不能3枚。火葬土坑。人骨SX352。(個別遺構第42図)
738	66	P39	不整形楕円	85・65・25	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗褐色土。底部に3個の石(0.15～0.2m大)。火葬土坑。人骨SX353。
739	102	P39	不整楕円形	118・80・20	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗褐色土。SK740より新。人骨SX354。
740	103	P39	隅丸方形	(90)・68・10	—		○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗褐色土。SK739より古。人骨SX355。
741	89	Q39	(隅丸方形)	70・(60)・23	—	○	○	—	—	—	—	—	ⅡA類。暗褐色土。SK742より古。火葬土坑。
742	90	Q39	不整楕円形	98・66・25	—	○	○	—	○	古銭2枚(銭105・106)「永楽通寶」	—	—	ⅡB類。黒褐色土。SK741より新。銭貨観察表(銭105～106)。人骨SX356。
743	106	Q39	不整形楕円	132・98・32	—	○	◎	—	○	古銭19枚(銭133～151)「開通元寶」ほか	土師器皿(143)及び小皿(279)の各破片	—	ⅡB類。黒褐色土。SK744より新。銭貨観察表(銭133～151)、「永楽通寶」9枚、「政和通寶」2枚、「熙寧元寶」1枚、判読不能6枚(熔解付着・歪曲7枚)。土師器皿(143・279)は15c後葉～16c初頭に比定。それ以降の火葬土坑と推定。人骨SX357。
744	107	Q39	(不整形楕円)	(180)・110・20	—	○	○	—	○	古銭25枚(銭160～184)「祥符元寶」ほか	—	鉄釘1本(鉄80)	ⅡB類。暗茶褐色土。SK743・751より古。銭貨観察表表(銭160～184)。「永楽通寶」12枚、「皇宋通寶」など北宋銭10枚、「至正通寶」1枚、判読不能2枚(熔解付着)。火葬土坑。人骨SX358。
745	99	Q39	隅丸長方形	102・72・20	—	○	◎	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗橙褐色土。火葬土坑。人骨SX359。
746	101	Q40	(隅丸台形)	82・(66)・18	—	—	◎	—	○	—	—	—	ⅡA類。黒褐色土。SK747より新。人骨SX360。
747	100	Q40	(隅丸方形)	104・(74)・20	○	—	◎	—	○	古銭5枚(銭185～189)「天禧通寶」ほか	—	—	ⅡB類。暗茶褐色土。SK746・748より古。銭貨観察表(銭185～189):判読不能銭1枚を含む。火葬土坑。人骨SX361。
748	98	Q39	不整形楕円	120・76・23	○	—	◎	—	○	古銭2枚(銭190～191)「永楽通寶」	土師器小皿(280)破片	—	ⅡB類。暗茶褐色土。SK749より古、SK747・750より新。銭貨観察表(銭190～191)。土師器小皿(280)は16c前半代に比定。それ以降の火葬土坑。人骨SX362。底部に溝(幅0.2m、長さ0.7m、深さ0.1m)あり。
749	88	Q40	隅丸長方形	145・110・30	—	○	○	—	○	古銭18枚(銭86～103)「天聖元寶」ほか	土師器小皿(281)小破片	—	ⅡB類。茶褐色土。土師器小皿(281)は16c前半代に比定、それ以降の火葬土坑。SK748より新。銭貨観察表(銭86～103)。人骨SX363。(個別遺構第42図)
750	97	Q39	(隅丸長方形)	(110)・72・15	○	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗橙褐色土。SK748・751より古。火葬土坑。人骨SX364。
751	96	Q39	隅丸長方形	106・78・20	—	○	◎	—	○	古銭8枚(銭152～159)「淳化元寶」ほか	—	—	ⅡB類。黒褐色土。SK744やSK750より新。銭貨観察表(銭152～159):熔解付着2枚。底部に5個の石(0.15～0.2m大)を方形に配置。火葬土坑。人骨SX365。
752	147	Q39	隅丸方形	84・76・16	—	—	—	—	—	古銭1枚(銭207)「永楽通寶」	—	—	Ⅲ類。黒茶褐色土。銭貨観察表(銭207)。
753	94	Q39	隅丸方形	88・86・22	○	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。茶褐色土。底部南側に7個の石(0.1～0.4m大)を集積。火葬土坑。人骨SX366。
754	95	R39	隅丸方形	102・82・20	○	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。茶褐色土。底部中央(1)と周囲(10)に計11個の石(0.1～0.2m大)を配置。火葬土坑。人骨SX367。
755	92	R39	(隅丸方形)	(100)・84・19	—	—	○	—	○	古銭1枚(銭196)「永楽通寶」	—	—	ⅡB類。暗茶褐色土。SK756より古。銭貨観察表(銭196):鋳造文字明瞭。人骨SX368。
756	93	R39	(隅丸台形)	(100)・78・15	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。茶褐色土。SK755より新。火葬土坑。底部に石2個(0.2～0.3m大)据わる。人骨SX369。

第16表　B地区　土坑群一覧　SK 600～SK 767・第23～27図

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
757	83	P40	隅丸方形	88・86・20	−	−	○	−	−	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。抜根。内部に更に土坑（0.72m、0.6m、0.1mと0.38m、0.32m、0.1m）あり。三重穴の土坑。
758	78	P40	長楕円形	146・72・25	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗茶褐色土。人骨ＳＸ370。
759	79	P40	不整形楕円	（130）・80・23	−	○	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。抜根。火葬土坑。人骨ＳＸ371。
760	80	Q40	隅丸方形	60・54・15	○	−	○	−	−	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。火葬土坑。
761	81	Q40	長楕円形	96・60・18	−	−	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。人骨ＳＸ372。
762	82	Q40	隅丸方形	60・50・15	−	−	○	−	○	古銭4枚（銭64～67）「永楽通寶」ほか	−	−	ⅡB類。暗褐色土。銭貨観察表（銭64～67）：熔解付着で判読不能3枚。火葬土坑。人骨ＳＸ373。
763	85	Q40	（隅丸方形）	（80）・76・20	−	−	○	−	−	古銭6枚（銭201～206）「永楽通寶」ほか	−	−	ⅡB類。暗褐色土。ＳＫ764より古。銭貨観察表（銭201～206）：残存度良好3枚。
764	86	Q40	（隅丸方形）	（80）・80・20	−	○	◎	−	○	−	−	−	ⅡA類。黒褐色土。底部に3個の石（0.1～0.15m）が遺る。ＳＫ763より新。北側0.4m地点でも古銭3枚（192～194）近接出土。火葬土坑。人骨ＳＸ374。
765	87	Q40	不整形楕円	125・70・20	−	○	○	−	○	−	−	−	ⅡA類。暗褐色土。火葬土坑。人骨ＳＸ375。
766	84	R40	略円形	100・95・25	○	−	○	−	○	古銭12枚（銭74～85）「永楽通寶」ほか	−	鉄釘1本（参考92）	ⅡB類。暗褐色土。銭貨観察表（銭74～85）：熔解付着2枚、判読不能1枚。底部に2個の石（0.2～0.3m大）が一対遺る。火葬土坑。人骨ＳＸ376。
767	91	R40	隅丸長方形	130・95・16	−	−	○	−	○	−	土師器皿（141～142）、小皿（244）破片	鉄釘7本（鉄81～87）	ⅡB類。暗黄褐色土。底部に0.5m、0.4m、0.13mの小穴。石（0.3m大）が1個遺る。土師器皿類（141・142・244）は15ｃ中葉～後葉に比定。それ以降の火葬土坑。鉄釘の残存度やや良好。人骨ＳＸ377。

		規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
B地区土坑総計168基	土坑平均規模	93.9・70.1・23.0	63	61	149	0	129	29基	14基	15基	平均値は（ ）内の推定数値を除外し算出した。掘形に焼土帯を持つもの：20基(12%)遺物等が一切ない不明土坑9基（5.4%）

第 16 表　B地区　土坑群一覧　ＳＫ 600～ＳＫ 767・第 23 ～ 27 図

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
768	欠番	O39	円形	60・60・17	—	—	—	—	—	—	—	—	Ⅳ類。暗茶褐色土。
769	242	O40	隅丸長方形	120・50・25	—	—	○	—	—	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。
770	241	O40	略円形	45・40・38	—	—	○	—	—	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。
771	297	O40	楕円形	115・80・15	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨ＳＸ378
772	305	P40	略隅丸方形	75・65・45	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。人骨ＳＸ379。
773	231	P～Q40	楕円形	90・65・20	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。黒茶褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨ＳＸ380。土坑底部に小穴。
774	252	M～N41	不整楕円形	75・60・45	—	—	—	—	—	—	—	—	Ⅳ類。暗黄褐色土。底部に0.2㎝大の川原石１個。
775	244	O41	略隅丸長方形	60・40・37	—	—	○	—	—	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。
776	243	O41	略楕円形	60・50・30	—	—	○	—	—	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。
777	301	O41	隅丸三角形	75・60・40	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。人骨ＳＸ381。
778	240	O41	不整楕円形	100・80・47	—	—	○	—	○	—	土師器小皿(245)破片,石鏃(5)	—	ⅡB類。暗茶褐色土。土師器小皿（245）は15ｃ前葉～中葉頃に比定、それ以降の火葬土坑。人骨ＳＸ382。（5）は平基無茎鏃（6表・43図）
779	234	P41	略隅丸方形	105・80・58	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。人骨ＳＸ383。
780	232	P41	長楕円形	180・100・47	—	○	○	—	○	—	縄文土器細破片混入	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ784より古い火葬土坑。人骨ＳＸ384。縄文土器片は混入。
781	233	P41	隅丸台形	85・80・42	—	—	○	—	—	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。
782	300	Q41	隅丸方形	50・50・15	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ783より古。人骨ＳＸ385。
783	208	Q41	略楕円形	120・110・50	—	○	○	—	◎	古銭2枚（銭237～238）	サヌカイト剥片混入	鉄釘１本（参考99）	ⅡB類。暗茶褐色土。銭貨観察表（銭237～238）。ＳＫ785より古、ＳＫ782より新。火葬土坑。人骨ＳＸ386。サヌカイト剥片は混入遺物。

第 17 表　C地区検出　土坑群一覧　ＳＫ 768～ＳＫ 873・第 28 ～ 33 図

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
784	204	Q41	不整楕円形	80・65・40	—	○	○	—	○	古銭1枚（銭247）	サヌカイト剥片混入	—	ⅡB類。暗茶褐色土。銭貨観察表（銭247）。ＳＫ780より新。火葬土坑。人骨ＳＸ387。サヌカイトは混入。
785	205	Q41	略隅丸方形	150・110・50	—	○	◎	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ783より新。火葬土坑。人骨ＳＸ388。
786	302	Q41	略円形	65・60・33	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨ＳＸ389
787	201	Q41	やや扇形	60・45・10	○	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨ＳＸ390
788	202	Q41～R41	長楕円形	175・100・18	○	○	◎	—	○	—	土師器小皿（283）破片	—	ⅡB類。暗茶褐色土。ＳＫ789より古。土師器小皿（283）は15ｃ後葉～16ｃ初頭頃に比定、それ以降の火葬土坑。人骨ＳＸ391。（写真第8図）
789	203	Q41	隅丸長方形	85・65・28	—	○	◎	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ788より新。火葬土坑。人骨ＳＸ392。
790	206	Q41	長楕円形	90・50・45	—	○	○	—	○	古銭4枚（銭257～260）	—	—	ⅡB類。暗茶褐色土。銭貨観察表（銭257～260）：熔解付着。火葬土坑。人骨ＳＸ393。
791	209	Q41～42	隅丸ひし形	140・80・37	—	○	○	—	○	古銭2枚（銭245～246）	—	—	ⅡB類。暗茶褐色土。銭貨観察表（銭245～246）判読不能1枚。火葬土坑。人骨ＳＸ394。
792	207	Q41	細長鉤形	145・50・30	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ793より古。火葬土坑。人骨ＳＸ395。
793	210	Q41	楕円形	(110)・50・25	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ794より古、ＳＫ792より新。人骨ＳＸ396。
794	211	Q41～42	不整楕円形	135・80・30	—	—	◎	—	○	—	サヌカイト剥片混入	—	ⅡA類。黒茶褐色土。ＳＫ793より新。底部に0.2m大の川原石据わる。人骨ＳＸ397。
795	212	Q～R41	隅丸三角形	85・60・25	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨ＳＸ398。
796	259	P42	略円形	110・90・35	◎	○	○	—	○	—	サヌカイト剥片混入	—	ⅠA類。暗茶褐色土。c地区で唯一の焼土帯。火葬土坑。人骨ＳＸ399。サヌカイト剥片は混入。
797	235	P42	ほぼ円形	70・65・40	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。人骨ＳＸ400。
798	236	P42	略円形	90・80・45	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ799より古。人骨ＳＸ401。
799	220	Q42	略円形	90・85・47	○	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ798より新。火葬土坑。人骨ＳＸ402。
800	215	Q42	隅丸三角形	165・120・40	○	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。黒茶褐色土。ＳＫ801～803より新。底部に0.3～0.4m大の川原石２個。火葬土坑。人骨ＳＸ403。
801	298	Q42	略円形	(75)・65・42	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ800より古。人骨ＳＸ404。
802	299	Q42	略円形	(85)・75・30	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ800より古。人骨ＳＸ405。
803	216	Q42	不整台形	(80)・75・27	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。黒茶褐色土。ＳＫ800より古。人骨ＳＸ406。
804	217	Q42	長楕円形	160・100・48	—	○	○	—	○	古銭5枚（銭224～228）	土師器小破片	—	ⅡB類。黒茶褐色土。銭貨観察表（銭224～228）。ＳＫ803・805・806より新。火葬土坑。人骨ＳＸ407。
805	218	Q42	隅丸長方形	(100)・75・30	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。黒茶褐色土。ＳＫ804より古。人骨ＳＸ408。
806	219	Q42	長楕円形か	(120)・60・25	○	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。黒茶褐色土。ＳＫ804・807より古、ＳＫ816より新。火葬土坑。人骨ＳＸ409。
807	227	Q42～43	隅丸長方形	100・70・30	—	—	◎	—	○	古銭8枚（銭229～236）	—	—	ⅡB類。黒茶褐色土。銭貨観察表（銭229～236）：判読不能1枚。ＳＫ806より新。人骨ＳＸ410。
808	214	Q42	隅丸長方形	105・80・25	—	○	○	—	○	古銭6枚（銭239～244）	—	—	ⅡB類。黒茶褐色土。銭貨観察表（銭239～244）：溶解付着。火葬土坑。人骨ＳＸ411。
809	289	Q42	楕円形	(90)・75・25	—	○	◎	—	○	—	土師器小破片	—	ⅡA類。黒茶褐色土。火葬土坑。人骨ＳＸ412。
810	213	R42	楕円形	80・50・30	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨ＳＸ413
811	295	O43	楕円形	110・70・23	○	○	○	—	—	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。
812	296	O43	隅丸方形	90・85・25	○	—	—	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨ＳＸ414
813	237	P43	不整楕円形	70・55・33	—	—	○	—	—	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ814より新。
814	238	P43	隅丸三角形	120・85・42	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ813より古。人骨ＳＸ415。
815	254	P43	略隅丸方形	80・85・40	—	—	○	—	—	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。
816	228	Q43	楕円形	(120)・(65)・32	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。黒茶褐色土。人骨ＳＸ416。
817	221	Q43	楕円形	120・75・45	○	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。黒茶褐色土。火葬土坑。人骨ＳＸ417

第17表　C地区検出　土抗群一覧　ＳＫ768～ＳＫ873・第28～33図

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
818	222	Q43	略隅丸方形	115・110・30	—	—	○	—	○	古銭13枚（銭269～281）	—	—	ⅡB類。黒茶褐色土。銭貨観察表（銭269～281）：溶解付着8枚、判読不能5枚。火葬土坑。人骨ＳＸ418。
819	226	Q43	不整台形？	100・(75)・45	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ820より古。人骨ＳＸ419。
820	249	Q43	（不整楕円）	(160)・(100)・33	—	—	◎	—	◎	—	—	—	ⅡA類。黒茶褐色土。ＳＫ821より古、ＳＫ819より新。人骨ＳＸ420。
821	250	Q43	（長楕円形）	(100)・(60)・45	—	—	◎	—	○	—	—	—	ⅡA類。黒茶褐色土。ＳＫ820より新。人骨ＳＸ421。
822	223	Q43	不整楕円形？	(150)・(110)・50	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ223との間で（銭254）「永楽通寶」出土。ＳＫ823～825より古。火葬土坑。人骨ＳＸ422。
823	224	Q43	不整楕円形	110・80・38	—	○	○	—	○	—	サヌカイト剥片混入	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ822より新。火葬土坑。人骨ＳＸ423。
824	225	Q43	（楕円形？）	(140)・(80)・40	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ822・826より新、ＳＫ825より古。火葬土坑。人骨ＳＸ424。
825	267	Q43	（長楕円形）	(165)・90・43	—	○	○	—	○	—	サヌカイト剥片混入	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ824より新。火葬土坑。人骨ＳＸ425。
826	266	Q43	（不整楕円形？）	(130)・(85)・22	—	—	○	—	○	古銭6枚（銭286～291）	—	—	ⅡB類。暗茶褐色土。銭貨観察表（銭286～291）：熔解付着2枚、判読不能1枚。ＳＫ824･829より古。底部に0.3m大の川原石。火葬土坑。人骨ＳＸ426。
827	264	O44	不整楕円形	100・75・32	—	○	○	—	—	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑と推定。
828	239	P44	楕円形	80・70・30	—	○	○	—	—	—	土師器皿（145～147）同小皿（282）破片	—	ⅡB類。暗茶褐色土。土師器皿（145～147と282）は15ｃ後葉～16ｃ初頭頃に比定。それ以降の火葬土坑と推定。（写真第8図）
829	265	Q43～44	円形	80・80・25	—	○	○	—	◎	古銭1枚（銭261）	土師器細片	—	ⅡB類。黒茶褐色土。銭貨観察表（銭261）。火葬土坑。人骨ＳＸ427。
830	229	Q44	隅丸半円形	100・70・38	—	○	○	—	○	—	土師器細片	—	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨ＳＸ428。
831	230	Q44	隅丸長方形	140・90・30	—	○	◎	—	◎	古銭6枚（銭248～253）	土師器細片	鉄釘1本（鉄98）	ⅡB類。暗茶褐色土。銭貨観察表（銭248～253）。ＳＫ832・833より新。火葬土坑。人骨ＳＸ429。
832	268	Q44	長楕円形？	(140)・50・18	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ831より古、ＳＫ833より新。火葬土坑。人骨ＳＸ430。
833	278	Q44	（不整楕円形？）	(130)・(70)・30	—	○	○	—	○	古銭2枚（銭284～285）	—	鉄釘１本（参考100）	ⅡB類。暗茶褐色土。銭貨観察表（銭284～285）：熔解付着。ＳＫ831・832より古、ＳＫ834より新。火葬土坑。人骨ＳＸ431。
834	275	Q44	（楕円形？）	(90)・(80)・25	—	○	○	—	○	古銭1枚（銭267）	—	—	ⅡB類。暗茶褐色土。銭貨観察表（銭267）。ＳＫ833より古、ＳＫ835より新。火葬土坑。人骨ＳＸ432。
835	274	Q44	（不整楕円形？）	(160)・(90)・17	—	○	○	—	○	古銭4枚（銭263～266）	土師器皿２枚（148～149）破片	刀子1本（鉄25）	ⅡB類。暗茶褐色土。皿（148・149）は15ｃ中葉～後葉頃に比定、それ以降の火葬土坑。銭貨観察表（銭263～266）。ＳＫ834より古。人骨ＳＸ433。
836	247	P～Q45	略円形	60・60・30	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。人骨ＳＸ434。
837	245	P45～46	不整形楕円	140・105・23	—	○	—	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨ＳＸ435
838	290	Q45	（長楕円？）	(80)・50・25	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ839より古。火葬土坑。人骨ＳＸ436。
839	277	Q45	ほぼ円形	60・50・30	○	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ838・840より新。火葬土坑。人骨ＳＸ437。
840	276	Q45	（不整楕円？）	(90)・45・28	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ839より古。火葬土坑。人骨ＳＸ438。
841	304	P46	隅丸長方形	85・60・30	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨ＳＸ439。
842	248	P46～Q46	不整台形	90・75・40	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。黒茶褐色土。人骨ＳＸ440。
843	285	Q46	（隅丸長方形？）	(85)・(55)・27	—	○	◎	—	◎	—	—	—	ⅡA類。黒茶褐色土。火葬土坑。人骨SX441
844	255	Q46	不整台形	120・80・32	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SX442
845	284	Q46	（隅丸長方形？）	(80)・(60)・20	○	—	○	—	—	—	土師器細片	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ846より新。火葬土坑。
846	286	Q46	（隅丸長方形？）	(90)・(60)・23	○	○	○	—	○	—	土師器細片	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ845より古。火葬土坑。人骨SX443。
847	261	P47	隅丸長方形	70・50・37	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SX444
848	294	P47	略隅丸方形	100・90・20	○	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SX445

第17表　C地区検出　土抗群一覧　ＳＫ 768～ＳＫ 873・第28～33図

報告土坑番号	検出番号	小地区名	平面形状	規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
849	270	Q47	(不整楕円形？)	(110)・(80)・23	—	○	○	—	○	—	土師器小皿2枚（284～285）	—	ⅡB類。暗茶褐色土。小皿（284～285）は15ｃ後葉頃に比定、それ以降の火葬土坑。ＳＫ850より古。人骨SX446。
850	271	Q47	(楕円形)	(130)・(90)・32	—	○	○	—	◎	—	サヌカイト石鏃1点（3）混入	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ849・851より新。火葬土坑。人骨SX447。
851	272	Q47	(楕円形か)	(100)・(65)・25	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。茶褐色土。ＳＫ850より古。人骨SX448。
852	256	O48	隅丸台形	190・160・25	—	○	◎	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗黄褐色土。火葬土坑。人骨SX449
853	262	P48	楕円形	80・65・20	—	—	○	—	○	古銭2枚（銭255～256）	—	—	ⅡB類。暗茶褐色土。銭貨観察表（銭255～256）：熔解付着。ＳＫ855より新。火葬土坑。人骨SX450。
854	257	P48	長楕円形	100・60・23	—	○	◎	—	○	—	—	鉄釘5本（鉄93～97）	ⅡB類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SX451
855	246	Q48	略楕円形	115・75・25	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。ＳＫ853より古。人骨SX452。
856	288	Q48	(楕円形か)	(100)・(60)・33	—	○	○	—	○	—	ロクロ土師器皿（32）底部破片、土師器小皿（164）破片	—	ⅡB類。暗茶褐色土。ロクロ土師器皿（32）は11ｃ代～のもの。小皿（164）は13ｃ後葉～14ｃ前葉頃に比定、それ以降の火葬土坑。人骨SX453。
857	283	Q49	(楕円形？)	(160)・(120)・20		○	○		◎		サヌカイト剥片混入	鉄釘１本（参考101）	ⅡB類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SX454
858	303	P49	楕円形	65・55・17	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。黒茶褐色土。人骨SX455。
859	273	Q49	(隅丸方形)	(145)・(100)・30		○	○		○				ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SX456
860	280	Q50	楕円形	120・(100)・37	—	—	○	—	○	—	サヌカイト剥片4点混入	—	ⅡA類。暗茶褐色土。人骨SX457。
861	279	Q50	隅丸三角形	120・(90)・45	○	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SX458
862	281	Q51	(隅丸方形)	(155)・(120)・50	—	—	○	—	○	—	縄文土器深鉢（11）破片混入	—	ⅡA類。暗茶褐色土。人骨SX459。
863	291	P52	隅丸台形	110・100・38	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。人骨SX460。
864	282	Q52	(楕円形)	(140)・(100)・32	—	—	○	—	—	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。
865	263	P～Q53	略円形	80・75・35	○	○	◎	—	○	—	—	—	ⅡA類。黒茶褐色土。火葬土坑。人骨SX461
866	293	O54	不整楕円形	120・85・25	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SX462
867	253	P54	釣鐘形	120・90・15	—	—	◎	—	○	—	—	—	ⅡA類。黒茶褐色土。底部の2/3に岩盤。人骨SX463。
868	292	P54	楕円形	100・80・18	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。掘形の肩に0.4m大の石。人骨SX464。
869	287	Q54	(略円形)	(85)・75・42	—	—	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。人骨SX465。
870	258	O57	隅丸長方形	130・95・20	○	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SX466
871	251	N59	楕円形	130・90・23	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。黒茶褐色土。火葬土坑。人骨SX467
872	260	O59	隅丸方形	120・105・25	—	○	○	—	○	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。掘形の肩に0.8m大の石。火葬土坑。人骨SX468。
873	269	P59	略円形	70・70・22	○	—	○	—	—	—	—	—	ⅡA類。暗茶褐色土。底部に0.4m大の石。火葬土坑

		規模 縦・横・深(cm)	焼土	焼石	炭化物	灰	人骨片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
C地区土坑総計106基	土坑平均規模	101.4・73.3・31.7	17	56	102	0	91	15基	24基	6基	(　)内の数値は除外して平均値を算出した。掘形に焼土帯を持つもの：１基（0.9%）遺物等が一切ない不明土坑：２基（1.9%）

第17表　C地区検出　土抗群一覧　ＳＫ768～ＳＫ873・第28～33図

報告番号	器種（名称）	地区名	出土遺構等	法　量（cm・g）				材　料	時　期	備　考　欄
				長径	短径	厚み	重さ			
1	石鏃	C地区	P41暗黄褐色土	1.8	1.4	0.5	0.375	サヌカイト	未確定	凹基無茎鏃。第43図、写真第9図。
2	石鏃	C地区	O42暗黄褐色土	1.7	1.6	0.4	0.395	サヌカイト	未確定	凹基無茎鏃。第43図、写真第9図。
3	石鏃	C地区	Q47ＳＫ850直上	2.5	1.8	0.5	0.595	サヌカイト	未確定	凹基無茎鏃。第43図、写真第9図。
4	石鏃	C地区	P41表土	3.4	2	0.5	1.46	サヌカイト	(後期か？)	凹基無茎鏃（五角形鏃）。第43図、写真第9図。
5	石鏃	C地区	P41ＳＫ778	2.9	2	0.6	0.855	サヌカイト	未確定	平基無茎鏃。第43図、写真第9図。
6	石鏃	C地区	P41暗黄褐色土	2.2	2	0.3	0.585	サヌカイト	未確定	未製品。第43図、写真第9図。
7	二次加工痕有剥片	C地区	Q49ＳＫ857	8.2	4.1	1.6	26.6	サヌカイト	(後期か？)	第43図。
10	磨石	C地区	N40表土	5.6※	8.2※	5.2	272.61	砂岩	未確定	残存部のみの計測数値。第43図、写真第9図。
11	敲石	C地区	Q43表土下層	7.2	5.6	3.1	170	砂岩	未確定	敲打痕あり。第43図、写真第9図。

報告番号	器種	地区名	出土遺構等	残存度	胎土	色調	成形技法等	時期	備考欄
8	深鉢	C地区	Q51ＳＫ862	体部破片 8×6cm	密～5mm 白色小石多含	鈍い赤褐色 2.5ＹＲ4/4	内面：ナデか（？） 外面：施文らしい痕跡あり	早期後葉	9の深鉢とよく似たタイプ。第43図。
9	深鉢	C地区	N40表土	体部破片 13×9cm	密～5mm 白色小石含 砂粒多	鈍い赤褐色 5ＹＲ4/4	内面：斜行沈線あり 外面：菱形文斜格子状に施文	早期後葉	高山寺式新タイプ。第43図、写真第9図。

第 18 表　出土遺物観察表　縄文時代の遺物（久保勝正・奥義次両氏の作成による。）（第 43 図）

報告番号	実測番号	器種名称	出土遺構新番号	形状遺存状態	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	胎土	焼成	色調	成形技法調整技法等	時期年代	出土状況	備　考
12	22－3048	須恵器 杯蓋	N16 92号墓及び N15 80号墓西側 及び東斜面	破片	約12.1	約5.5	—	やや密	並	暗灰色	ロクロ水挽きナデ 天井部外面ロクロヘラ削り	6ｃ前半頃	—	ＭＴ15号窯型式併行 紐（ツマミ）なし 第44図
13	22－3115	須恵器 杯蓋	N14～15 78号墓東斜面 N16東斜面他	天井部～口縁一部 破片接合	約14	約5.1	—	やや密（微砂粒）	並	暗灰色	ロクロ水挽きナデ 天井部外面ロクロヘラ削り	6ｃ前葉～中葉	—	第44図
14	22－3046	須恵器 杯蓋	K19 ＳＫ520隣接 のＳＸ158	紐付天井部分 小破片	不明	不明	—	精良	良	淡灰白色	ロクロ水挽き 天井部ロクロヘラ削り、紐貼付け	（7ｃ末）～8ｃ前半	(15)(16)共伴	第44図
15	22－3047	須恵器 杯蓋	J20ＳＫ527 Ｂ地区O29 ＳＫ613	破片接合約 1/3残存	約16.4	約3.9	—	やや精良	良	淡灰色	ロクロ水挽き 天井部ロクロヘラ削り、紐貼付け	（7ｃ末）～8ｃ前半	(14)(16)共伴	自然釉。 第44図
16	22－3045	須恵器 杯蓋	J20 ＳＫ527	紐部分小破片	不明	不明	—	やや密	並	灰色	ロクロ水挽き 天井部ロクロヘラ削り、紐貼付け	8ｃ前葉～中葉	(14)(15)共伴	第44図
17	22－3008	須恵器甕	K19 ＳＫ520隣接 のＳＸ158	大略完形 （口縁部約1/2欠失）	10.8	18	6.8	やや密	並	淡青灰色	ロクロ水挽き 体部下半ロクロヘラ削り	7ｃ末～8ｃ初頃	311～312号墓、316号墓に囲まれた墓間通路直下で検出。人骨ＳＸ158多量に収納	猿投産。岩崎41期併行。 第44図 写真第9図
18	22－3116	経筒外容器 筒身 （上半部）	K15～16 263号墓南	口縁部 約1/8弱残存	復元径 約16.5	不明	不明	やや密（微砂粒）	不良 脆弱	淡灰白色	口縁部横ナデ、 ほか不明	12ｃ後葉～13ｃ初 （～前葉）	—	胎土・色調・成形技法・法量等の比較から(19)と同一個体と推定。 第44図
19	22－3117	経筒外容器 筒身 （下半部）	L～M15 266号墓 北斜面	底部 約1/6残存	不明	不明	復元径 約11.2	やや密 3.0mm砂粒含	不良 脆弱	淡灰白色	体部下端ヘラ削り 他不明	12ｃ後葉～13ｃ初 （～前葉）	—	胎土・色調・成形技法・法量等の比較から(18)と同一個体と推定。第44図
20	22－3080	経筒外容器 筒身 （上半部）	J～K14 163号墓、 L16 182号墓下層 183号墓埋土、 Ｂ地区K25 ＳＫ600北側他	破片接合 口縁部～体部 約1/3残存 体部下半・底部欠失。	復元径 約16.6	不明	不明	やや密（微砂粒）	良	乳灰白色	内面横ナデ 粘土紐結合痕、 口縁部～体部 を横ナデ	12ｃ後葉～13ｃ初 （～前葉）	（複数地点出土の破片を接合）	胎土・成形技法・法量等から(21)と同一個体と推定。 第44図
21	22－3082	経筒外容器 筒身 （下半～底部）	K15 159号墓 埋土	破片接合 底部約１/4残存 口縁部欠失。	不明	不明	復元径 約13.0	やや密 3.0mm砂粒含	良	外面： 暗灰褐色 内面： 乳灰白色	内面横ナデ 粘土紐結合痕 指圧痕あり、 外面乱方向ナデ	12ｃ後葉～13ｃ初 （～前葉）	—	胎土・法量等の比較で(20)と同一個体。 第44図
22	028－01	経筒外容器 （上半部）	Ｂ地区 N30 ＳＫ624	口縁部 約1/8残存	約15.0	不詳	不詳	やや密	並	外面：灰色 7.5Ｙ5/1 内面：灰白 7.5Ｙ7/1	粘土紐巻上げ 痕跡あり	12ｃ後葉～13ｃ初 （～前葉）	—	口縁端部は（20）に類似し内側に曲げるタイプ。 第44図
23	22－3081	経筒外容器 筒身 （上半部・ 下半部欠失）	L16 185号墓 183号墓 182号墓 盛土下層	口縁部～体部 破片接合 約1/2残存 体部下半～底部欠失。	復元径 約14.8	不明	不明	やや粗（3～4mm大の小石含）	並	乳白灰色	内面横ナデ 口縁部～体部 横ナデ （他不明）。	12ｃ後葉～13ｃ初 （～前葉）	複数地点出土の破片を接合	口縁端部は蓋受け部の立上がりをもつ。 第44図
24	22－3040	白磁合子 （身）	M16地区 表土	約1/9残存	約8.2	約2.0	約8.2	良	良	乳灰白色 （釉薬）	ロクロナデ	12ｃ代	—	(25)より小振り。 第44図

第 19 表　出土遺物観察表　古墳～室町時代の遺物（第 44 ～ 49 図）

報告番号	実測番号	器種名称	出土遺構新番号	形状遺存状態	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	胎土	焼成	色調	成形技法調整技法等	時期年代	出土状況	備　考
25	026－05	白磁合子（身）	L16 194号墓 SX282	口縁部 約1/5残存	約9.2	約2.0	約8.8	密	並	淡灰白色（釉薬）	ロクロナデ	12ｃ代	人骨（SX282）	第44図
26	22－3052	陶器 蓋（紐付山茶碗）	L16 182号墓 盛土内	口縁～紐部（底部）約1/2弱残存。接合復元。	復元径約15.2	約7.3	約6.2 紐付き	やや密（微砂粒）	並	淡灰色	ロクロ水挽き 底部糸切り 紐貼付け。	12ｃ末葉～13ｃ前半代	外容器(27)の一部破片と共伴	山茶碗底部に紐を付けた形。外容器(27)の蓋と推定。 第44図 写真第9図
27	22－3051	経筒外容器 筒身	J～K17 282号墓、L16 182号墓 盛土内下層、N15地区 東斜面ほか	底部 約1/5弱残存 口縁端部約1/2弱残存他 破片接合完形復元	復元径約13.2	約22.8	復元径約13.0	やや密 3.0mm砂粒含	並	暗灰白色	内面指圧痕＋横位ナデ 口縁部横～体部横ナデ、下部に縦位ナデもあり。	12ｃ後葉～13ｃ初頃～（前半代）	蓋(26)共伴 複数地点出土の破片を接合	中世墓域の現状変更に伴い散逸したか。蓋(26)とセット関係を推定。 第44図 写真第9図
28	22－3054	陶器蓋	L16 182号墓 盛土内	紐付天井部の小破片接合約1/4残存	不明	不明	—	やや密（微砂粒）	不良	淡灰色	ロクロナデ 紐貼付け	12ｃ後半～13ｃ初頃（～前半代）	外容器(29)の一部破片と共伴	(29)経筒外容器の蓋。器壁面劣化。 第44図
29	22－3050	経筒外容器 筒身	L16 182号墓盛土部 183・266号墓、L17 208号墓 暗黄褐色土、M17 201号墓、N18 99号墓北隅他	破片接合 約4/5残存	復元径約13.7	約27.1	復元径約14.1	やや密	並	外面：黒褐色 内面：淡灰色	内面指圧痕＋横位ナデ 口縁部～体部横ナデ。	12ｃ後葉～13ｃ初頃（～前半代）	蓋(28)と共伴 複数地点出土の破片を接合	中世墓域の現状変更に伴う散逸破片。(28)蓋とセット関係。 第44図 写真第9図
30	004－03	土師質 円筒状 平底容器	M17 201号墓 埋土	底部小破片	不詳	不詳	約12.0	やや粗	並	明橙褐色	内外面ナデ（他不明）	12ｃ末～13ｃ初頃？	（31）共伴	伊勢市蓮台寺滝ノ口経塚群でも同類遺物出土。 第44図
31	004－04	土師質 円筒状 平底容器	M17 201号墓 埋土	底部小破片	不詳	不詳	約8.0	やや粗	並	鈍乳 灰橙色	内外面ナデ（他不明）	12ｃ末～13ｃ初頃？	（30）共伴	266号墓からも同類破片出土。 第44図
32	010－08	ロクロ 土師器皿	C地区 Q48 SK856埋土	底部破片	不詳	不詳	約3.2	やや粗	並	鈍黄橙色 10YR7/4	ロクロ成形 底部糸切り	11ｃ代～	土師器小皿（164）	経塚との関係も考慮。蓋などへの転用も可。 第44図
33	021－05	ロクロ 土師器皿	J18 292号墓埋土	底部破片	不詳	不詳	約4.0	やや粗	並	鈍・黄橙色	ロクロ成形 底部糸切り	11ｃ代～	—	同上。 第44図
34	004－09	ロクロ 土師器皿	B地区 O32 SK649	底部破片 1/4残存	—	—	約4.5	やや粗	並	橙色 7.5YR6/6	ロクロ成形 底部糸切り	11ｃ代～	—	同上。 第44図
35	追加3	ロクロ 土師器皿	N13 124号墓	底部破片	—	—	約4.2	精良	良	明赤褐色 5YR5/6	ロクロ成形 底部糸切り	11ｃ代～	—	器壁摩耗、ひび割れ 第44図
36	011－02	ロクロ 土師器皿	N20～21 221号墓 SK533周溝内	底部破片	不詳	不詳	約4.5	やや粗	並	浅黄橙色	ロクロ成形 底部糸切り	11ｃ～12ｃ代	(37)共伴	経塚との関係も考慮。蓋などへの転用も可。 第44図
37	011－01	ロクロ 土師器皿	N20～21 221号墓 SK533 周溝内	底部破片	不詳	不詳	約4.2	やや粗	並	鈍・黄橙色	ロクロ成形 底部糸切り	11ｃ～12ｃ代	(36)共伴	同上。 第44図
38	004－10	ロクロ 土師器皿	M16 SK495埋土	底部 約1/8弱残存	不詳	不詳	約7.0	やや粗	並	橙色	ロクロ成形 底部糸切り	11ｃ～12ｃ代	—	同上。 第44図
39	22－3006	陶器 常滑産 壺	N16 88号墓 SX76	約1/2強残存 口縁部欠失 接合完形復元	不詳（復元径約9.5）	残存部約22.5	約10.2	やや密	並	暗赤銅褐色	粘土紐巻上げナデ、ヘラ削り 外面ハケ目（底から胴部）	12ｃ中葉～（13ｃ前葉）	人骨小片（SX76） 天目茶碗破片(67)	頸部～肩部にヘラ描き沈線二条平行。 第45図・写真第9図
40	029－01	陶器 渥美産 壺	L21 220号墓（壺№3）	大略完形	約11.8	約23.9	約9.0	やや密 2mm砂粒含	並	暗灰褐色口縁端部～肩部に灰かぶり	ロクロナデ 体部外面ハケ状工具ナデ、下端ヘラ削り	12ｃ末～13ｃ初頃	山茶碗(56)を蓋にして人骨(SX176)を埋納。盛土内から土師器皿（136）	窯印（逆L字形ヘラ記号）、体部に穿孔一ヶ所。 第45図 写真第9図
41	22－3026	瓦器小碗	N24 443号墓 SX193	略完存に近い状態	約10.7	約4.9	約3.0	やや密	並	暗灰黒色	口縁部横ナデ 高台貼付け（径3.0cm）	12ｃ末葉～13ｃ前半代	常滑三筋壺(42)と人骨（SX193）共伴	蔵骨器蓋に転用。 第45図 写真第9図
42	22－3002	陶器 常滑産 三筋壺	N24 443号墓 SX193	口縁部欠失 他は完存	不明	残存約24.1	約8.6	粗7mm砂粒含	並	暗赤褐色肩部から自然釉垂流・火面明瞭。	三筋施文体部下半ヘラ削り（底部外面砂粒圧痕）	12ｃ後半代～	瓦器小碗（41）と人骨（SX193）共伴	瓦器小碗を蓋として蔵骨器に転用。 第45図 写真第9図
43	22－3001	陶器 渥美産 壺	O22 235号墓	略完形（口縁端部一部欠失完形復元）	約11.0	約27.0	約9.7	やや密	並	暗灰褐色 淡黄灰色 自然釉かぶりあり	ナデ 体部下端ヘラ削り	12ｃ後半代～	刀子(鉄参考36）を副葬。内部に人骨SX205が充満。	蔵骨器に転用（扁平な石を蓋に）。 第45図 写真第9図
44	22－3024	陶器 常滑産 三筋壺（？）	M15表土 M14 130号墓南側石列内及び M14～15、N14、O15区包含層	口縁部～体部約1/3強残存（底部欠失）	約10.9	不詳	不詳	やや密 3.0mm砂粒含	並	外面：褐色 内面：淡黄褐色	ロクロナデ 内面指圧痕、肩部に沈線	12ｃ代	複数箇所から出土の破片を接合	第45図 写真第9図
45	22－3013	陶器 常滑産 片口鉢	L16 182号墓 盛土内 L16 266号墓 183号墓他	接合 約3/5残存（完形復元）	約19.4	約8.3	約11.2	やや密（砂粒含）	良	赤褐色	ナデ 口縁部横ナデ 体部下半ヘラ削り	14ｃ後半代～	(20)(23)(26)(27)(28)(29)等と共伴 複数地点出土の破片を接合	歪みあり・底部内面に自然釉。底部外面砂粒圧痕。 第45図 写真第9図

第 19 表　出土遺物観察表　古墳～室町時代の遺物（第 44 ～ 49 図）

報告番号	実測番号	器種名称	出土遺構新番号	形状遺存状態	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	胎土	焼成	色調	成形技法調整技法等	時期年代	出土状況	備　考
46	22－3004	陶器 常滑産 壺	L 17 208号墓 S X 174（№1）	口縁部欠失 頸部一部復元、他完存	不明	残存部約20.0	約10.2	粗（4～7mm大小石含む）	不良	淡黄褐色（焼成不良による）	ナデ 体部下端ヘラ削り？	14ｃ代	小刀（鉄12）副葬。 常滑産壺(47)出土（人骨 S X 174）	蔵骨器に転用。器表面凍結等で剥離か？ 第45図・写真第10図
47	22－3003	陶器 常滑産 壺	L 17 208号墓 S X 175 （№2）	略完形 （口縁端部一部欠失）	9.8	22.4	9.7	やや粗（2～4mm大白色小石含む）	並	鈍灰橙茶褐色	横ナデ 体部下端ヘラ削り 肩部ヘラ描き沈線二条平行、窯印あり	14ｃ中葉頃～	刀子（鉄01）副葬。 常滑産壺(46)出土、（人骨 S X 175）	蔵骨器に転用。底部び割れ（壺としては二級品とのこと）。 第45図 写真第10図
48	22－3007	陶器 瀬戸産 広口壺	L 15 80号墓 東側斜面	約1/2欠失 破片接合完形復元	約10.4	復元約25.0	約10.9	やや密	並	暗緑黄褐色。口縁～底部に黒色鉄釉の垂れ	印花文施文（器壁全体に鉄釉付着し、成形技法観察は困難	14ｃ初頭（～前葉）	—	剣先（蓮弁）・菊花（径2.8cm印花）・蕨手文様 第45図 写真第10図
49	22－3022	陶器 渥美産 壺（？）	K 14東隅表土 K 15 157号墓 K 16表土 N 16東斜面他	口縁端部破損 接合口縁部約1/2弱残存	約15.4	不詳	不詳	やや密（微砂粒）	並	淡黄 灰褐色	ロクロナデ 内面指圧痕 肩部沈線風条痕一本あり 外面自然釉	（12ｃ代～）	複数箇所から出土の破片を接合。	第45図
50	22－3058	陶器 瀬戸産 灰釉花瓶	M 25 433号墓 埋土	口縁部～体部欠失 脚部破片接合	不詳	不詳	約7.9	やや密	並	鈍黄橙色 釉：緑灰色	ロクロナデ 脚部絞り 底部糸切り痕 （ロクロ時計回り）	14ｃ後半～	—	第45図
51	030－01	陶器 片口鉢	J～K 14 165号墓 N 14地区 北斜面表土 L 16 182号墓 盛土他	約1/2弱残存 （接合完形復元）	約30.0	現存約10.7	現存約14.5	やや密	並	暗灰 浅黄色	ナデ 口縁部横ナデ 体部下端ヘラ削り（高台欠失）	13ｃ後葉～14ｃ代	(20)(23)(26)(27)(28)(29)(45)などと共伴。複数地点出土の破片を接合	体部外面に一方向への撫上げ痕あり。 第45図 写真第10図
52	22－3039	山茶碗	K 16 265号墓 及びN 15 80号墓埋土	約1/5残存	約15.2	約5.0	約6.4	やや密	並	淡灰褐色	ロクナデ 高台貼付ほか不明	12ｃ中葉～	—	Ⅱ－4型式・内面自然釉付着。 第46図
53	22－3015	山茶碗	L 16 182号墓埋土	接合 約1/3残存	約15.4	約5.7	約6.3	やや密（微砂粒）	良	淡青 灰白色	ロクロナデ 底部糸切り痕 高台貼付	12ｃ中葉～後葉	(20)(23)(26)(27)(28)(29)(45)(51)などと共伴	高台砂粒痕籾殻痕僅少。 第46図 写真第10図
54	22－3020	山茶碗	K 17 S K 500埋土	接合 約1/3弱残存 高台一部剥離	約13.9	約5.1	約5.1	やや密	不良	淡黄 灰白色	ロクナデ 底部糸切り痕 高台貼付	13ｃ前葉～中葉	—	第46図
55	22－3014	山茶碗	N 19 107号墓東 石列外接	貼付け高台 約1/2剥離 接合大略完形復元	約14.6	約5.2	約6.8	やや密	並	灰白色	ロクロナデ 見込み一方向ナデ、底部糸切り痕・高台貼付	13ｃ中葉～	土師器小皿小破片(参考資料)	籾殻痕多い。隣接107号墓で和鏡（76）出土 第46図 写真第10図
56	22－3017	山茶碗	L 21 220号墓 S X 176	接合 大略完形復元	約13.7	約5.4	約5.6	やや粗0.4～1.3cm小石を含む	並	暗灰白色	ロクロナデ 底部糸切り痕 高台貼付	13ｃ前葉～中葉	渥美産壺（40） 人骨（S X 176） 共伴	器形歪み大。渥美産壺（40）の蓋に転用。 第46図
57	028－02	山茶碗	O 15 東斜面 再拡張区	口縁部約1/5残存 接合完形復元	約15.0	約5．0	約5.8	やや密	並	灰黄色	ロクロナデ 底部糸切り痕 高台貼付	13ｃ中葉～	—	高台籾殻圧痕少々・剥離顕著。 第46図
58	22－3018	山茶碗	L 20 S K 532	完形品（常滑産か）	14.8	5.5	5.2	やや密（微砂粒）	並	淡灰白色	ロクロナデ 見込み一方向ナデ・底部糸切り痕・高台貼付	13ｃ中葉～後葉	S K 532は348号墓と一体の墓。	潰れた高台に籾殻痕顕著（底部径より貼付け高台径の方が小さい）。 第46図
59	22－3019	山茶碗	M 15 82号墓 東斜面	口縁部約1/2以上欠失 底部残存	約13.4	約4.9	約5.6	粗2mm～5mm砂粒小石多含	並	淡黄 灰白色	ロクロナデ 見込み一方向ナデ・底部糸切り、高台無し 外面の調整雑	14ｃ前半代～	—	ロクロ逆時計回り、 参考4と類似。 第46図 写真第10図
60	22－3036	青磁碗	N 19地区 東斜面	口縁～体部 約1/7弱残存 底部欠失。	約10.8	（約4.4）	（約3.9）	精良	良	淡緑色	ロクロ水挽き 外面蓮弁文	13ｃ末～14ｃ初	—	(68)と同一個体の可能性も。 第46図
61	22－3038	青磁碗	N 22 234号墓 南西側隣接地	底部破片 約1/9残存 口縁～体部欠失。	不明	不明	約5.6	良	良	淡緑色	ロクロ水挽き 外面蓮弁文 見込み花文	13ｃ末～14ｃ初	—	第46図
62	22－3034	青磁碗	N 22 溝状遺構	口縁部 約1/13弱残存	約17.0	不明	不明	精良	良	淡緑色	ロクロ水挽き 外面蓮弁文	13ｃ末～14ｃ初	—	第46図
63	22－3002	青磁碗	M 18 100号墓 S K 514	完形品	17	6.9	6.3	精良	良	淡緑色	ロクロ水挽き	13ｃ～14ｃ代	—	元代のもの。 第46図 写真第10図
64	22－3037	青磁碗	M 18 101号墓 M 19 105号墓	体部約1/7残存 口縁・底部欠失。	不明	不明	（約5.2）	良	良	淡緑色	ロクロ水挽き 外面蓮弁文	13ｃ～14ｃ代	—	第46図
65	026－01	おろし皿	N 16地区 東斜面	口縁部 約1/3残存 底部欠失。	約18.0	約3.0	—	密	並	浅黄橙色	口縁部ロクロナデ、施釉	15ｃ前葉頃	—	第46図
66	026－02	片口 おろし皿	M 15 82号墓	口縁部 約1/8残存 底部欠失。	約18.0	約4.0	—	密	並	浅黄橙色	口縁部ロクロナデ、施釉	15ｃ前葉頃	—	第46図
67	22－3035	天目茶碗	N 16 88号墓 S X 76 L 16 196号墓埋土	接合口縁部 約1/3弱残存 底部欠失。	約11.8	不明	不明	良	良	明黄褐色 内外面鉄釉 淡茶褐＋黒褐色	ロクロ水挽き （鉄釉）	14ｃ後葉？	複数箇所で出土の破片を接合	(68)と同一個体の可能性も。 第46図

第 19 表　出土遺物観察表　古墳～室町時代の遺物（第 44 ～ 49 図）

報告番号	実測番号	器種名称	出土遺構新番号	形状遺存状態	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	胎土	焼成	色調	成形技法調整技法等	時期年代	出土状況	備　考
68	22－3043	天目茶碗	L16 196号墓埋土 N15 80号墓西 S13石組西外	接合 体部～底部約1/6残存	不明	不明	約3.6	良	良	乳黄褐色 内外面鉄釉黒褐色	ロクロ水挽き （鉄釉）	14ｃ後葉？	複数箇所で出土の破片を接合	(67)と同一個体の可能性もある？。 第46図
69	22－3110	陶器 常滑産 甕	L16 182号墓 盛土内	約1/2弱残存 （接合完形復元）	復元径約16.3	約23.0	約16.3	やや密	並	暗赤銅茶褐色	内面ナデ、指圧痕、外面ヘラ削り・ハケ目（底部から上へ）・ナデ～押印	14ｃ後葉～	(20)(23)(26)(27)(28)(29)(45)(51)(53)参(5)などと共伴。	N字口縁・肩部 菊花文スタンプの痕跡。 第46図 写真第10図
70	22－3010	陶器 常滑産 甕	M23 399号墓 S X194	口縁部接合 完形復元	19.2	16.4	11.6	やや粗 5mm大小石含	並	暗灰茶褐色	ロクロナデ 口縁部横ナデ	15ｃ前葉～後半代	人骨共伴（土抗S K568の底部全面に藁灰）	N字口縁やや退化、肩部ヘラ記号（窯印）。 底部外面砂粒圧痕。 第46図・写真第10図
71	22－3023	陶器 常滑産 甕	K14 151号墓埋土 153号墓東接 小区画 K16北半部 表土	接合 口縁部約1/3残存	約15.4	不詳	不詳	粗 7mm 砂粒含	並	赤紫褐色	ロクロナデ 内面に指圧痕残る・口縁折り曲げ帯状に	15ｃ後半～16ｃ初頃	複数箇所出土の破片を接合。	第46図
72	22－3029	陶器 常滑産 甕	L14北側 斜面表土 139号墓 埋土	接合 口縁部約1/6残	(約20.2)	不明	不明	やや密（微砂粒多）	並	黒茶褐色	ロクロ横ナデ 内面指圧痕、 外面肩部縦方向刷毛目調整後横ナデ	15ｃ前半代～	複数箇所出土の破片を接合。	N字口縁。 第46図
73	032－04	陶器 常滑産 甕	N～M13 125号墓 N14 130号墓 M15地区 南隅表土 L16 182号墓 盛土ほか	口縁部 約2/5欠失 破片接合約4/5残存	復元径約16.4	推定18.0～18.3内外	12.4	やや粗 3～5mm 白色小石含む	並	明黄 茶褐色	横ナデ＋指押圧痕（内面下端部指痕跡明瞭）体部外面底部～肩部へ縦位方向ナデ上げ	15ｃ前葉～	(20)(23)(26)(27)(28)(29)(45)(51)(53)参(5)(69)などと共伴。複数地点出土の破片を接合。	底部砂粒痕。 第46図
74	022－01	陶器 常滑産 甕	N16 88号墓 S X76近辺	接合 完形復元（口縁部1/4欠失）	16.4	16.1	13	やや密	並	鈍・赤褐色 底部は明黄褐色	ロクロナデ 口縁部横ナデ（肩部ヘラ描き沈線半周巡る）	15ｃ中葉～後半代	S X76は壺39を蔵骨器に出土。	N字口縁退化・底部外面に砂粒圧痕。 第46図 写真第10図
75	027－04	陶器 常滑産 甕	I15 S K476埋土	N字口縁部 小破片	約16.5	不明	不明	やや密 1.0mm微砂粒	並	灰褐色 5Y R5/2	ロクロナデ	15ｃ後半～	—	N字口縁。 第46図
76	032－04	和鏡	M～N19 107号墓	完形品	径11.3	縁厚0.7 厚み0.2	—	—	—	—	本来の鋳上がり良、腐蝕で表面浮上がり、剥離の危険性	14ｃ前半頃（鎌倉時代末期）	—	蓬莱鏡（蓬莱山に千鳥が二羽舞う）。 第47図 写真第11図
77	007－10	土師器 加工 模造銭	J20地区 表土採取	一部欠損 約4/5残存	径約2.5	厚0.2	—	密 （微砂粒）	並	鈍橙色 7.5Y R7/4	中央部に穿孔 径4.0mm	16ｃ代	—	多気北畠氏遺跡にも類例あり。 第47図
78	22－3044	砥石 （粘板岩）	K15 161号墓	破片	長辺5.8以上	短辺 (3.2)	厚さ0.4～0.8	密	—	淡茶褐色	上面滑らか。 幅0.4～0.8cm、深さ0.4cmの磨り込み跡。	16ｃ代？	—	第47図
79	022－03	土師器 台付碗？	B地区 N30 S K626	底部破片 約2/3残存	不詳	不詳	約11.5	やや密	並	浅黄橙 7.5Y R8/4	脚部ナデ	時期不詳（平安時代末頃？）	—	類例を知らず 第47図
80	022－04	土師器碗	N24 249号墓 埋土	底部 約1/4破片	不詳	不詳	約9.0	やや密	並	鈍い黄橙褐色	底部貼付け、横ナデ接合 底部指圧痕	15ｃ後半～16ｃ初頃	土師器小皿（235）	(81）と同系統の碗。 第47図
81	22－3021	土師器碗	L23 表土直下	口縁部 約1/2欠失 破片接合完形復元	約18.0	約9.1	約8.8	やや密	並	鈍い黄橙褐色	ナデ 体部、底部外面にハケ目10本/1cm貼付け高台	15ｃ後半～16ｃ初頃	—	底部が高台より突出し珍しい田舎風の碗。 第47図 写真第10図
82	22－3121	長方硯 （粘板岩製）	P13地区 東斜面下層	大略完形 （一部欠失完形復元）	頭幅8.3 尻幅8.7	長さ12.0	厚さ1.6～1.85	—	—	暗灰色	側面傾斜（A型） 裏面平坦（C式） 内面略長方形（I）の特徴 水野和雄論文参照	15ｃ初頭～前半代	—	台形状（14世紀的特徴）の名残。 第47図
83	22－3062	土師器 小碗	B地区 O31 S K641	大略完形	約9.0	約4.3	約3.8	密	並	淡橙 乳褐色	口縁部横ナデ 見込み指圧痕 高台貼付け	16ｃ代	—	口縁端部でやや外反する。 第47図 写真第10図
84	22－3025	土師器 小碗	J17 S K505	接合 大略完形復元	約10.0	約4.3	—	密 （微砂粒）	並	淡褐白色	ナデ 口縁部横ナデ 粘土紐巻上げ痕あり	15ｃ後半代	—	口縁端部下外面にヘラ状工具の当り。 第47図 写真第10図
85	026－03	土師器 小碗	P13 S X267 （70号墓東斜面）	口縁部小破片	約9.8	約4.0	—	やや密	並	鈍橙色 7.5Y R7/4	ナデ 頸部強く横ナデ	13ｃ～14ｃ代	人骨（S X267）。	厚手・体部指圧痕。 第47図
86	0038－01	陶器 常滑産 大甕	L16 182号墓 盛土内 石組下層、ほか20数カ所に破片散逸	口縁部1/12 底部11/12 体部破片多数 （完形復元）	復元口径約57.2	復元器高約73.2	約18.5	密 ～0.5mm大の砂粒を含む	良	鈍い褐色 7.5Y R5/3	口縁部横ナデ、体部内面ナデ・オサエ、外面工具ナデ・帯状押印文	12ｃ後半代第四・四半期頃	20数ヶ所に及ぶ複数地点から出土の破片を接合	口頸部菱縮タイプ。器壁は比較的に薄手、体部外面に帯状に押印文を五段に分けて施文。 第51図 写真第11図

第 19 表　出土遺物観察表　古墳～室町時代の遺物（第 44 ～ 49 図）

報告番号	実測番号	器種名称	出土遺構新番号	形状遺存状態	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	胎土	焼成	色調	成形技法調整技法等	時期年代	出土状況	備　考
87	032－03	陶器常滑産甕	K16 264号墓 SX56 L16 182号墓 盛土内部	N字口縁部 約1/10弱残存	復元径 約31.4	不明	不明	やや密	良	鈍い淡茶褐色 淡灰黄 自然釉	内外面横ナデ	14c後葉～15c初	複数地点出土の破片を接合	N字口縁。 第47図
88	032－01	陶器常滑産甕	J14 165号墓	N字口縁部 約1/10弱残存	復元径 約29.4	不明	不明	やや密	並	灰褐色 5YR5/2	口縁部横ナデ ほか不明	15c前半代～	常滑甕破片（90）共伴	N字口縁・甕(90)と同一個体の可能性？ 第47図
89	027－03	陶器常滑産甕	N15 斜面	N字口縁部 小破片	約22.0	不明	不明	やや密	並	外面灰褐 7.5YR5/2 内面灰黄 2.5Y6/2	口縁部横ナデ ほか不明	15c前葉頃	—	N字口縁。 第47図
90	027－02	陶器常滑産甕	J14 165号墓	口縁部 約1/10残存	約28.0	不明	不明	やや密	並	灰褐色 5YR5/2	口縁部横ナデ ほか不明	15c前半代～	常滑産甕の破片（88）	N字口縁。 第47図
91	22－3112（032－02）	陶器常滑産甕	N16区東斜面 L16区 196号墓埋土 L16区 182号墓盛土 K17区 282号墓南	口縁部～肩部 約1/16残存	復元径 約32.0	不明	不明	やや密	良	外：浅黄 2.5Y7/3 内：灰黄 2.5Y6/2	内外面横ナデ 内面指圧痕 特に顕著に	15c前葉～	複数地点出土の破片を接合。	N字口縁 第47図
92	22－3113	陶器常滑産大甕	B地区 462号墓 SK610 （墳丘B主体部）	底部（径45cm）欠失ほか概ね破片残存	約57.0	約69.0	—	やや密	並	外：暗灰色 淡青灰色 内：暗茶褐	内外面横ナデ タタキ（「大日」スタンプあり）	15c後半～16c初頃	空（風）輪B1054及び地輪B1069古銭（銭23）「熙寧元寶」人骨は皆無	N字帯状口縁、肩部張出体部下半に径20～25cmの円形に打ち欠き跡。 第47図・写真第11図
93	021－01	土師器羽釜	K17 284号墓 SX11	口縁部 約1/16残存	約25.0	不詳	—	粗2.5mm砂粒含	並	鈍黄橙色 10YR7/4	横ナデ （他不明）	16c代	—	第47図
94	22－3069	土師器羽釜	K17 282号墓 SX162	口縁部付近破片	約28.8	不詳	—	やや密 1～2mm砂粒含	並	乳灰黄色	横ナデ （他不明）	15c中葉頃	—	SX162は旧SX12を名称変更。 第47図
95	22－3074	土師器鍋	B地区 K25 SK600南	口縁端部 小破片	約20.1	不明	—	やや密	並	明黄褐色 10YR7/6	口縁端部小さく折曲げ丸く終焉	12c中葉頃～	—	第48図
96	012－01	土師器鍋	M22 SK556	口縁部 約1/3残存	約28.5	不明	—	やや粗 0.5mm砂粒多	並	明黄褐色 10YR7/6	口縁部横ナデ 内外面ナデ指圧痕（他不明）	13c後半代	—	外面煤付着。 第48図
97	22－3011	土師器鍋	K14 152号墓 SX156	口縁部 約1/8欠損	約22.7	約14.7	—	やや密	並	黄褐色	口縁部横ナデ 内面指圧痕 外面体部ハケ目 底部ヘラ削り	13c後半代	人骨（SX156）。	煤付着。隣接のSX157から土師器小皿（168)出土。 第48図
98	22－3098	土師器鍋	S11～12 20号墓 SX88	口縁・底部のみ約1/6残存	約25.0	不明	—	やや密 1mm砂粒含む	並	鈍黄橙色 10YR7/4	口縁部横ナデ 体部ハケ目9～10本/cm・底部削り	13c後半代	人骨（SX88）	第48図
99	012－04	土師器鍋	K15 160号墓 SX60	口縁部小破片	約18.0	不明	—	粗1.0mm砂粒多	並	鈍黄橙色 10YR6/4	口縁部横ナデ （他不明）	14c前半代～	人骨（SX60）	第48図
100	012－03	土師器鍋	K21 364号墓 SX20	口縁部小破片	約20.0	不明	—	粗～1mm大砂粒含む	並	鈍黄橙色 10YR7/4	口縁部横ナデ （他不明）	14c前半代～	—	第48図
101	021－03	土師器鍋	N15 81号墓 南側斜面	口縁部破片 約1/13残存	約21.0	不明	—	やや粗 1.0mm微砂多	並	鈍黄橙色 10YR7/4	口縁部横ナデ （他不明）	14c前半代～	—	第48図
102	22－3099	土師器鍋	J16 273号墓 SX8	口縁 約3/8残存	約23.8	不明	—	やや粗 1～2mm大砂粒含	並	外面：鈍黄橙色 10YR7/3 内面：灰黄色 2.5Y6/2	口縁部横ナデ 体部ハケ目 5本/cm 底部削り	14c前半代～	刀子（鉄27）、人骨（SX8）	第48図
103	012－02	土師器鍋	K21 364号墓 SX20	口縁部 約1/10残存	約26.0	不明	—	粗 1.0mm砂粒含	並	鈍黄橙色 10YR7/4	口縁部横ナデ 体部ハケ目 （他不明）	14c前半代～	人骨（SX20）	第48図
104	22－3053	土師器鍋	S11 13号墓 SX82	接合 大略完形復元	約38.2	約25.8	—	やや密	並	鈍黄橙色 10YR7/4	口縁部横ナデ 体部ハケ目 5～6本/cm 底部ヘラ削り	14c前半代～	人骨（SX82）	蔵骨器に転用。 第48図 写真第10図
105	22－3100	土師器鍋	M16～N17 93号墓 SX72	接合 口縁約1/4残存	約24.2	不明	—	やや粗 1.0mm微砂粒	並	浅黄橙色 10YR8/4	口縁部横ナデ 体部ハケ目6本/1cm底部削り	14c末葉～15c初	人骨小片（SX72）	第48図
106	013－02	土師器鍋	M24 412号墓 SX54	口縁部 約1/4強残存	約29.0	不明	—	粗 1.5mm砂粒多	並	鈍黄橙色 10YR7/4	口縁部横ナデ 頸部ナデ＋指圧痕あり	14c末葉～15c初	人骨（SX54）	第48図
107	013－03	土師器鍋	M23 408号墓 SX126	口縁部 約1/10残存	約28.0	不明	—	粗 1.0mm砂粒多	並	鈍黄橙色 10YR7/4	口縁部横ナデ （他不明）	14c末葉～15c初	人骨（SX126）	体部小破片多。 第48図
108	004－01	土師器鍋	L16 185号墓	口縁部 1/7残存	約24.0	不明	—	やや密	並	鈍黄橙色 10YR7/4	口縁部横ナデ （他不明）	14c末　～15c前葉	—	外面に煤多付着。 第48図
109	018－12	土師器鍋	K～L15 159号墓埋土	口縁部 約1/10残存	約26.0	不明	—	やや粗 1.0mm微砂粒	並	鈍黄橙色 10YR7/4	口縁端部折返し、強い横ナデ、稜線状に突起が巡る	14c末　～15c前葉	—	第48図

第19表　出土遺物観察表　古墳～室町時代の遺物（第44～49図）

報告番号	実測番号	器種名称	出土遺構新番号	形状遺存状態	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	胎土	焼成	色調	成形技法調整技法等	時期年代	出土状況	備　考
110	追加B	土師器鍋	L15 145号墓	口縁部 1/18残存	約28.0	不明	—	やや密	良	鈍い黄橙 ＨＹＲ6/3	口縁端部ツマミ上げ、横ナデ（他不明）	16ｃ前半代～	土師器鍋（参考14）、土師器小皿（255）	第48図
111	016－01	土師器鍋	L15 145号墓西下 K14～15 154号墓	口縁・底部 小破片接合	約39.1	不明	—	やや密 1～2mm大砂粒含	並	浅黄橙色 10ＹＲ8/3	口縁部横ナデ 体部ハケ目 5～6本/cm	16ｃ中葉～	土師器小皿（249）	煤付着顕著。 第48図
112	追加A	土師器皿	M16東斜面 190号墓西	口縁部 約1/9残存 底部欠失。	約14.0	約1.4	—	粗 2mm大白色小石	並	明黄褐色 10ＹＲ6/6	横ナデ	12ｃ後半代	—	第48図
113	021－02	土師器皿	M17 200号墓 ＳＸ75	小破片 口縁部約1/15 残存	約14.0	約2.4	—	やや粗 1.5mm砂粒含	並	鈍黄橙色 10ＹＲ7/4	口縁横ナデ 底部ナデ（口縁端部～底部間を強く横ナデ）	12ｃ後葉～13ｃ前葉	山皿（参考11） 人骨（ＳＸ75）	口縁端部やや内湾気味。 第48図
114	010－02	土師器皿	L17 ＳＫ504埋土	口縁～底部 小破片 約1/12残存	約16.0	約2.5	—	やや密	並	鈍い黄橙 10ＹＲ7/4	ナデ 口縁部横ナデ	12ｃ後半代	土師器皿（119）	器壁肉厚。 第48図
115	022－02	土師器皿	L16 182号墓下層	口縁部 約1/6残存	約18.6	約2.3	—	やや粗 1～2mm大砂粒含	並	鈍黄橙色 10ＹＲ7/4	口縁部横ナデ ほか不明	11ｃ末　～12ｃ前葉	(20)(23)(26)(27)(28)(29)(45)(51)(53)(69)(73)(参考5)などと共伴	口縁部肉厚・上端部に幅5mmの面を持つ。 第48図
116	22－3077	土師器皿	S12 21号墓南側 ＳＸ147	接合 口縁部約1/3 残存	約12.0	約2.5	—	やや密	並	淡黄褐色	口縁部横ナデ	①期 13ｃ末頃～14ｃ末葉	—	口縁部肥厚、略直立内湾。歪み少々。
117	007－05	土師器皿	Ｊ19 ＳＫ515 埋土	破片 約2/5残存	約13.0	約3.0	—	やや密	並	浅黄橙 10ＹＲ8/3	ナデ 外面指圧痕か 器壁摩滅顕著	①期 13ｃ末頃～14ｃ末葉	土師器小皿（150）	口縁部やや直に近く 内湾・歪みあり。 第49図
118	007－07	土師器皿	K20 ＳＫ521 南西側	接合 約1/7残存	約13.0	約2.2	—	やや密 1.0mm砂粒含	並	鈍黄橙 10ＹＲ7/4	ナデ 外面指圧痕	①期 13ｃ末頃～14ｃ末葉	土師器小皿（参考16）	口縁部やや肥厚しつつ 内湾・受火・煤付着。
119	010－01	土師器皿	L17 199号墓下層 ＳＫ504埋土	接合 口縁約4/5残存	約11.0	約2.3	—	やや密	並	浅黄橙 10ＹＲ8/4	ナデ・他不明	①期 13ｃ末頃～14ｃ末葉	土師器皿（114）	やや厚手・口縁部肥厚しつつ深く内湾。底部欠。 第49図
120	001－05	土師器皿	L19 表土～ 包含層	接合 口縁約1/2弱 残存	約11.5	約2.2	—	やや粗	並	鈍黄橙色 10ＹＲ7/4	ナデ 外面指圧痕	①期 13ｃ末頃～14ｃ末葉	—	全体にやや厚手。
121	019－09	土師器皿	L22 ＳＫ551埋土	接合 口縁約1/4弱 残存	約13.0	約1.2	—	粗 1.5mm砂粒多	並	浅黄橙色 10ＹＲ8/4	口縁部指ナデ	①期 13ｃ末頃～14ｃ末葉	—	薄手・口縁部やや肥厚、 直に立ち内湾。
122	22－3027	土師器皿	M16 191号墓下層 ＳＫ494	接合完形復元	約11.6	約2.5	—	やや密 2mm大白色石を含む	並	淡橙褐色	口縁部横ナデ 底部外面に 指圧痕あり	①期 13ｃ末頃～14ｃ末葉	人骨(ＳＸ219)	薄手化・口縁やや肥厚、直立内湾。内外面煤付着・口縁歪み。 第49図
123	009－03	土師器皿	M22 230号墓下層 ＳＫ555埋土	口縁部 1/2残存 底部欠失	約11.4	約2.65	—	やや密	並	灰白色	ナデ・他不明	①期 13ｃ末頃～14ｃ末葉	土師器皿(124)	第49図
124	009－02	土師器皿	M22 230号墓下層 ＳＫ555埋土	口縁部 1/3残存 底部欠失	約11.0	約2.6	—	やや密	並	灰白色	ナデ 口縁部横ナデ	①期 13ｃ末頃～14ｃ末葉	土師器皿（123）	第49図
125	001－03	土師器皿	N25 ＳＫ593埋土	接合 口縁部約1/2 残存	約12.0	約2.3	—	密	並	黄橙 乳白色	ナデ 外面指圧痕	①期 13ｃ末頃～14ｃ末葉	—	薄手・口縁部直に立上がり丸く内湾、先端尖る。 (137)と類似タイプ。
126	005－08	土師器皿	N26 ＳＫ599 ＳＸ231埋土	約1/4弱残存	約11.0	約2.4	—	やや密	並	外：鈍橙色 7.5ＹＲ7/4 内：浅黄橙 10ＹＲ7/4	ナデ 外面指圧痕	①期 13ｃ末頃～14ｃ末葉	土師器小皿（158・159）、人骨（ＳＸ231）	口縁部やや肥厚して内湾。 煤煙付着す。 第49図 写真第10図
127	22－3028	土師器皿	P14 48号墓	接合後 完形復元	約12.2	約2.3	—	やや密	並	淡黄褐色	口縁部横ナデ 底部外面指圧痕あり	①期 13ｃ末頃～14ｃ末葉	—	薄手化・口縁やや肥厚、略直立内湾。口縁歪み大。 第49図
128	001－04	土師器皿	Ｊ21 ＳＫ535	接合 口縁部約4/5 残存	約11.5	約2.3	—	やや密	並	黄橙 乳灰色	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器皿（129）	薄手・口縁部直に立上がり丸く内湾、先端尖る。 125・137等と類似タイプ。
129	001－10	土師器皿	Ｊ21 ＳＫ535	接合 口縁約4/5強 残存	約10.4	約2.2	—	やや密	並	淡黄色 2.5Ｙ8/4	ナデ 外面指押さえ	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器皿（128）	器壁薄手、口縁部はやや厚く直立気味に内湾。
130	008－05	土師器皿	K16 ＳＫ487 ＳＸ234	約4/5残存 （底部一部欠失す）	約10.5	約2.3	—	やや粗	並	浅黄橙色	ナデ 底部指圧痕 粘土紐巻上げ痕跡あり	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	ＳＫ487から土師器小皿8枚（171～178） 人骨（ＳＸ234）	口縁部内面に油煙付着す。 第49図
131	22－3096	土師器皿	L20 ＳＫ531	接合 大略完形復元	約11.7	約2.4	—	やや密	並	淡橙褐色	ナデ、底部外面に指圧痕。2箇所穿孔か。	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿 （187～191）	口縁やや肥厚、 僅かに開きつつ内湾。 第49図・写真第10図
132	008－04	土師器皿	L21 ＳＫ545	口縁 約1/8残存	約11.6	約2.0	—	密	並	灰黄白色	ナデ・他不明	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器皿 （133・134）	平面上370号墓に重複の土坑。 第49図
133	008－03	土師器皿	L21 ＳＫ545	破片 大略残存	約11.4	約2.5	—	やや密	並	浅黄橙色	ナデ 底部外面に指押え	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器皿 （132・134）	第49図
134	008－02	土師器皿	L21 ＳＫ545	2/5残存 底部欠失	約9.8	約2.7	—	やや密	並	浅黄橙色	ナデ他不明 粘土紐巻上げ痕跡	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器皿（132・133）	第49図
135	008－06	土師器皿	L23 ＳＫ562 埋土	4/5残存	約11.0	約2.8	—	密	並	灰白色	ナデ・他不明	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿（200）	器壁は薄い。

第19表　出土遺物観察表　古墳～室町時代の遺物（第44～49図）

報告番号	実測番号	器種名称	出土遺構新番号	形状遺存状態	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	成形技法調整技法等	時期年代	出土状況	備　考
136	017 －11	土師器皿	L20～M21 220号墓 墳丘盛土 表採	接合 口縁約1/4残存	約11.1	約2.25	—	やや密	並	外：鈍黄橙 内：浅黄橙	ナデ（他不明）	②期 14ｃ末頃～ 15ｃ後葉	渥美産壺（40）	口縁部やや肥厚、 緩やかに内湾、 口縁端部外周に沈線状の窪みあり。
137	001 －01	土師器皿	M24 411号墓 ＳＸ233	接合 約4/5残存	約12.0	約2.6	—	やや密 1mm以下の砂粒	並	鈍い 黄橙乳白	ナデ 外面指圧痕	②期 14ｃ末頃～ 15ｃ後葉	土師器小皿（224）、刀子（鉄09）、人骨（ＳＸ233）	薄手・口縁部直立、丸く内湾、先端尖る。 第49図
138	010 －09	土師器皿	M25 ＳＫ583	破片接合 約1/2残存	約11.5	約2.5	—	やや密	並	乳灰白色	ナデ 底部外面に 指圧痕あり	②期 14ｃ末頃～ 15ｃ後葉	山茶碗小破片（参考6）	薄手・口縁端部は尖り気味で、直に内湾する。
139	019 －07	土師器皿	Ｂ地区 Ｏ27 ＳＫ603埋土	接合 口縁約1/6残存	約12.0	約1.9	—	粗1.5mm 砂粒多	並	鈍黄橙色 10ＹＲ7/4	口縁部指ナデ 内面工具当り	②期 14ｃ末頃～ 15ｃ後葉	—	薄手・口縁部はやや肥厚し、直に立上がり内湾す。
140	22－ 3079	土師器皿	Ｂ地区 Ｎ28 ＳＫ605	接合 約4/5強残存	約11.8	約2.5	—	やや粗	並	淡灰褐色	口縁部横ナデ 内外面指圧痕	②期 14ｃ末頃～ 15ｃ後葉	—	器壁薄手化。口縁部直立、内湾す。歪みあり、受火痕跡。 第49図 写真第11図
141	22－ 3078	土師器皿	Ｂ地区 Ｒ40 ＳＫ767	接合 約1/2強残存	約13.6	約2.1	—	やや密	並	鈍黄橙 10ＹＲ7/3	口縁部横ナデ 口縁～底部間に僅かに段状屈曲	②期 14ｃ末頃～ 15ｃ後葉	土師器皿と小皿 （142・244）	薄手・口縁部開き気味に内湾。 第49図 写真第11図
142	006 －10	土師器皿	Ｂ地区 Ｒ40 ＳＫ767	接合 1/3残存	約13.6	約2.5	—	やや密	並	鈍黄橙 10ＹＲ7/3	口縁部横ナデ 口縁～底部間に僅かに段状屈曲	②期 14ｃ末頃～ 15ｃ後葉	土師器皿と小皿 （141・244）	受火痕跡。 口縁部開き気味内湾。 第49図
143	005 －10	土師器皿	Ｂ地区 Ｑ39 ＳＫ743	約1/8残存	約 （12.0）	約（2.8）	—	やや粗 1.5mm砂粒含	並	鈍黄橙 10ＹＲ7/3	ナデ 外面指圧痕	③期 15ｃ後葉～ 16ｃ末葉	土師器小皿（279）	器壁薄手・底部～口縁間で段状屈曲す。 第49図
144	010 －03	土師器皿	Ｂ地区 Ｌ30 墳丘Ｂ裾部 ＳＫ619	口縁部 約1/8残存	約13.0	約2.1	—	やや密	並	鈍黄橙色 10ＹＲ7/3	ナデ 外面指圧痕	③期 15ｃ後葉～ 16ｃ末葉	土師器小皿 （276～278）	薄手・底部～口縁部間で段状屈曲。 第49図
145	025 －06	土師器皿	Ｃ地区 Ｐ44 ＳＫ828	接合 約3/8残存	約11.0	約1.4	—	やや密	並	浅黄橙色 10ＹＲ8/4	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕	③期 15ｃ後葉～ 16ｃ末葉	土師器皿・小皿 （146・147）及び(282)	器壁極薄手・口縁部緩やかに内湾・端部歪み。 第49図
146	025 －07	土師器皿	Ｃ地区 Ｐ44 ＳＫ828	口縁部破片 約1/4残存	約11.0	約1.3	—	やや密	並	鈍黄橙色 10ＹＲ7/4	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕	③期 15ｃ後葉～ 16ｃ末葉	土師器皿・小皿 （145・147）及び (282)	器壁薄手・歪み・口縁部緩やかに内湾。 第49図
147	025 －08	土師器皿	Ｃ地区 Ｐ44 ＳＫ828	口縁部破片 約1/2残存	約11.0	約2.1	—	やや密	並	鈍黄橙色 10ＹＲ7/4	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕	③期 15ｃ後葉～ 16ｃ末葉	土師器皿・小皿 （145・146）及び (282)	器壁薄手・口縁部緩やかに内湾。 第49図
148	025 －01	土師器皿	Ｃ地区 ＳＫ835 (№1)	接合 口縁部約1/2残存	約12.0	約2.7	—	やや密	並	鈍黄橙色 10ＹＲ7/4	ナデ 外面指圧痕 体部外反し段が付く	③期 15ｃ後葉～ 16ｃ末葉	土師器皿（149）	薄手・体部に指押さえで窪み（段状に屈曲）。 第49図
149	025 －02	土師器皿	Ｃ地区 ＳＫ835 (№2)	接合 約3/4残存	約12.0	約2.5	—	やや密 2mm大砂粒含	並	鈍黄橙色 10ＹＲ7/4	ナデ 外面指圧痕 体部外反し段が付く	③期 15ｃ後葉～ 16ｃ末葉	土師器皿（148）	薄手・体部に指押さえで窪み（段状に屈曲）。 第49図
150	007 －04	土師器 小皿	Ｊ19 ＳＫ515埋土	破片 約3/4残存	約9.2	約2.2	—	やや密	並	浅黄橙 10ＹＲ8/3	ナデ 外面底部に指圧痕 内面は型当て成形か？	①期 13ｃ末頃～ 14ｃ末葉	土師器皿（117）	口縁部緩やかに内湾。底部の厚さ不均等。 第49図
151	018 －05	土師器 小皿	L～M16 186号墓 ＳＸ2埋土	約1/6残存	約6.0	約1.1	—	やや粗	並	鈍黄橙 7.5ＹＲ6/4	ナデ 外面指圧痕	①期 13ｃ末頃～ 14ｃ末葉	人骨（ＳＸ2）	扁平化・歪み・口縁部肥厚し僅かに立上がり気味。
152	019 －08	土師器 小皿	M14 132号墓下層 ＳＸ252埋土	接合 約1/6残存	約9.3	約1.3	—	やや粗 1.0mm 砂粒多	並	浅黄橙色 10ＹＲ8/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	①期 13ｃ末頃～ 14ｃ末葉	人骨（ＳＸ252）	扁平化･歪み･口縁部やや肥厚、僅かに内湾気味。 第49図
153	019 －10	土師器 小皿	Ｎ22 ＳＫ557内	破片接合 約1/2残存	約7.5	約1.0	—	粗 1.0mm 砂粒多	並	鈍黄橙色 10ＹＲ7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	①期 13ｃ末頃～ 14ｃ末葉	—	扁平・歪み・口縁端部不規則にやや内向気味。
154	011 －05	土師器 小皿	Ｎ23 243号墓 ＳＫ570	接合 約1/7残存	約9.0	約1.1	—	やや密	並	鈍黄橙 10ＹＲ7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	①期 13ｃ末頃～ 14ｃ末葉	土師器小皿（155～157）	薄手・口縁緩やかに内湾・歪みあり。 第49図
155	011 －06	土師器 小皿	Ｎ23 243号墓 ＳＫ570	接合 約1/8残存	約10.0	約1.2	—	やや密	並	青灰 乳白色	ナデ・他不明	①期 13ｃ末頃～ 14ｃ末葉	土師器小皿（154・156および157）	口縁部やや肥厚しつつ緩やかに内湾。 第49図
156	011 －07	土師器 小皿	Ｎ23 243号墓 ＳＫ570	接合 約1/8残存	約10.0	約2.0	—	やや密	並	青灰 乳白色	ナデ・他不明	①期 13ｃ末頃～ 14ｃ末葉	土師器小皿（154・155及び157）周溝からも土師器小皿破片出土。	口縁部やや肥厚し丸く内湾・端部に稜線。 第49図
157	023 －02	土師器 小皿	Ｎ23 243号墓 ＳＫ570周溝	約1/3強残存	約8.0	約1.3	—	やや密	並	灰白 10ＹＲ8/2	ナデ 底部外面に 指圧痕あり	①期 13ｃ末頃～ 14ｃ末葉	土師器小皿 （154～156）	薄手・扁平化・歪みあり。 口縁部やや肥厚、 僅かに内湾気味。 第49図
158	24 －06	土師器 小皿	Ｎ26 ＳＫ599 ＳＸ231	接合 大略完形復元	約7.8	約1.2	—	密	並	浅黄橙色 10ＹＲ8/4	外面ナデ＋指圧痕 内面ナデの他 型当て痕？ 成形工具痕か	①期 13ｃ末頃～ 14ｃ末葉	土師器皿と小皿 （126・159） 人骨（ＳＸ231）	扁平・歪み・口縁端部不規則に内湾気味。 油煙痕跡。 第49図
159	005 －07	土師器 小皿	Ｎ26 ＳＫ599 ＳＸ231埋土	接合 約1/3強残存	約7.5	約1.2	—	密	並	外：浅黄橙 10ＹＲ8/4 内：鈍橙色 7.5ＹＲ7/4	ナデ 底部外面に指圧痕	①期 13ｃ末頃～ 14ｃ末葉	土師器皿と小皿 （126・158） 人骨（ＳＸ231）	薄手・器形歪み・口縁部やや肥厚し緩やかに内湾・受火・底部外面に煤煙付着す。 第49図

第 19 表　出土遺物観察表　古墳～室町時代の遺物（第 44 ～ 49 図）

報告番号	実測番号	器種名称	出土遺構新番号	形状遺存状態	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	成形技法調整技法等	時期年代	出土状況	備　考
160	22－3090	土師器小皿	P13 SK467	完形品	7	1.1	—	やや密	並	灰白色 10YR8/2	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	①期 13c末頃～14c末葉	土師器小皿（161・162）	扁平化・歪み大・口縁部不規則に内湾気味。口縁端部内外面に油煙付着。 写真第11図
161	003－02	土師器小皿	P13 SK467	接合 約1/2強残存	約8.0	約1.0	—	やや密	並	灰白色 10YR8/2	ナデ 外面指圧痕	①期 13c末頃～14c末葉	土師器小皿（160・162）	薄手・扁平化して口縁部やや内湾・歪み大。
162	22－3091	土師器小皿	P13 SK467	接合 約6/7残存	約7.2	約1.1	—	やや粗	並	灰白色 10YR8/2	ナデ 外面指圧痕	①期 13c末頃～14c末葉	土師器小皿（160・161）	扁平、口縁不規則に内湾気味。歪みあり、 口縁端部油煙付着痕。 写真第11図
163	005－03	土師器小皿	S12 21号墓南側 SX147	約1/4弱残存	約7.4	約1.1	—	密	並	浅黄橙色 10YR8/4	ナデ 外面指圧痕	①期 13c末頃～14c末葉	人骨（SX147）。	やや厚味・口縁部緩やかに内湾気味。 歪み少々。
164	010－07	土師器小皿	C地区 Q48 SK856	約1/2弱残存	約7.4	約1.35	—	やや密	並	浅黄橙 10YR8/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	①期 13c末頃～14c末葉	ロクロ土師器皿破片（32）	薄手・口縁部やや肥厚し緩やかに内湾・器形歪み。
165	22－3107	土師器小皿	J17 SK498	ほぼ9割残存（口縁端一部欠）	約7.0	約0.8	—	やや密	並	外：明黄橙 10YR7/6 内：浅黄橙 10YR8/3	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14c末頃～15c後葉	—	扁平・器形歪み大・口縁部殆ど内湾せず。
166	024－01	土師器小皿	J18 SK507	ほぼ完形	約8.2	約1.0	—	やや密 1mm微砂粒含	並	浅黄橙色 10YR8/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14c末頃～15c後葉	—	薄手・扁平化・口縁部僅かに内湾気味。
167	019－01	土師器小皿	J20 SK528	接合 口縁部約1/2残存	約7.0	約1.1	—	やや密 1.0mm砂粒含	並	鈍黄橙色 10YR7/4	ナデ 外面指圧痕	②期1 4c末頃～15c後葉	—	薄手・扁平化・歪み大。 口縁部小さく内湾気味 油煙少々。
168	22－3094	土師器小皿	K14 152号墓 SX157	約4/5残存	約7.2	約1.2	—	やや密	良	外：赤褐色 内：赤黄褐	ナデ 外面指圧痕	②期 14c末頃～15c後葉	人骨（SX157）	薄手・歪み大・口縁部不規則に内湾気味。隣接出土：152号墓SX156から土師器鍋（96）出土。
169	018－09	土師器小皿	K14 149号墓	約1/8残存	約8.0	約1.4	—	やや粗	並	鈍黄橙色 10YR7/3	内外面ナデ	②期 14c末頃～15c後葉	土師器小皿（170）	薄手・歪み・口縁部やや内湾気味・受火・煤付着。
170	018－10	土師器小皿	K14 149号墓	口縁 約1/9残存	約9.0	約1.0	—	やや密	並	灰黄色 2.5Y7/2	ナデ 外面指圧痕か	②期 14c末頃～15c後葉	土師器小皿（169）	薄手・扁平化・口縁部やや内湾気味・受火痕跡、煤付着。
171	22－3071	土師器小皿	K16 SK487	完形品	8.3	1.5	—	やや密微砂粒含	並	淡橙白色	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14c末頃～15c後葉	土師器皿及び小皿（130）・(172～178)	口縁部やや肥厚しつつ深目に内湾。歪み少々。 第49図
172	22－3072	土師器小皿	K16 SK487	完形品	8.4	1.5	—	やや密微砂粒含	並	淡橙白色	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14c末頃～15c後葉	土師器皿及び小皿（130）・(171・173～178）	口縁部やや肥厚しつつ、緩やかに内湾、歪み少々。 第49図
173	22－3073	土師器小皿	K16 SK487	完形品	7.9	1.5	—	やや密微砂粒含	並	淡橙白色	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14c末頃～15c後葉	土師器皿及び小皿（130）・(171・172及び174～178)	口縁部やや肥厚、緩やかに内湾・歪み少々。口縁端部に油煙痕跡。 第49図
174	22－3083	土師器小皿	K16 SK487	接合 約9/10残存	約7.7	約1.5	—	やや密 1～2mm大砂粒含	並	外：黄白褐 内：淡白褐	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14c末頃～15c後葉	土師器皿及び小皿（130）・(171～173・175～178)	口縁部やや肥厚、緩やかに内湾・歪み少々。 第49図
175	22－3095	土師器小皿	K16 SK487	約3/5残存	約8.2	約1.8	—	やや密 0.5mm砂粒含	並	黄白褐色	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14c末頃～15c後葉	土師器皿及び小皿（130）・(171～174・176～178)	口縁部やや肥厚、緩やかに内湾・焼膨れあり。他に同類灯明皿破片三点。 第49図
176	020－01	土師器小皿	K16 SK487	口縁部 約1/5残存	約8.5	約1.7	—	粗1.0mm砂粒多	並	浅黄橙色 10YR8/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14c末頃～15c後葉	土師器小皿（171～175・177・178)及びSX234からは土師器皿（130）	口縁部僅かに肥厚、緩やかに内湾・口縁端部油煙痕跡。 第49図
177	020－02	土師器小皿	K16 SK487	口縁部 約1/9残存	約7.0	約1.0	—	やや密 0.5mm砂粒少	並	浅黄橙色 10YR8/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14c末頃～15c後葉	土師器小皿（171～176・178）及びSX234から土師器皿（130）	薄手・扁平・歪み・口縁部僅かに賄湾気味・口縁端部油煙痕跡。 第49図
178	020－03	土師器小皿	K16 SK487	口縁部 約1/10残存	約8.5	約1.3	—	粗 2.0mm砂粒多	並	浅黄橙色 10YR8/4	内外面ナデ	②期 14c末頃～15c後葉	土師器小皿（171～177）及びSX234から土師器皿（130）	薄手・歪み・口縁部緩やかに内湾・口縁端部油煙痕跡。 第49図
179	007－03	土師器小皿	L15～16 182号墓 盛土下層	接合 約2/5残存	約8.0	約1.1	—	やや密	並	鈍黄橙 10YR7/4	ナデ 外面指圧痕 内面型当て成形か？	②期 14c末頃～15c後葉	(20)(23)(26)(27)(28)(29)(45)(51)(53)(69)(73)(115)(参考5)等と共伴	口縁部つまみ上げ・焼膨れ・歪みあり。
180	006－08	土師器小皿	L16 182号墓 下層	約1/3弱残存	約7.8	約1.1	—	やや粗	並	鈍黄橙 10YR7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14c末頃～15c後葉	(20)(23)(26)(27)(28)(29)(45)(51)(53)(69)(73)(115)(参考5)等と共伴	口縁部僅かに内湾・歪み。
181	019－11	土師器小皿	L16 196号墓埋土	接合 約1/3残存	約7.5	約0.9	—	やや粗 1.0mm砂粒多	並	浅黄色 2.5Y7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14c末頃～15c後葉	土師器小皿（182～185)	薄手・扁平・口縁端部小さく内湾。
182	019－12	土師器小皿	L16 196号墓埋土	接合 口縁約1/3残存	約7.0	約1.0	—	やや粗 1.0mm砂粒多	並	明黄褐色 10YR6/6	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14c末頃～15c後葉	土師器小皿（181・183～185)	薄手・扁平・歪み・口縁部不規則に内湾気味。
183	019－13	土師器小皿	L16 196号墓埋土	約1/7残存	約7.5	約1.4	—	やや密 1.0mm砂粒少	並	鈍黄橙色 10YR7/4	ナデ 外面指圧痕	②期 14c末頃～15c後葉	土師器小皿（181・182・184・185)	薄手・扁平化・歪み・口縁部やや内湾気味。
184	019－14	土師器小皿	L16 196号墓埋土	接合口縁 約1/4弱残存	約8.5	約1.2	—	やや粗 1.0mm砂粒多	並	鈍黄橙色 10YR7/6	内外面ナデ	②期 14c末頃～15c後葉	土師器小皿(181～183及び185)	薄手・扁平化・歪み・口縁部緩やかに内湾気味・油煙付着。

第19表　出土遺物観察表　古墳～室町時代の遺物（第44～49図）

報告番号	実測番号	器種名称	出土遺構新番号	形状遺存状態	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	成形技法調整技法等	時期年代	出土状況	備　考
185	019−15	土師器小皿	L 16 196号墓埋土	約1/6残存	約7.0	約1.2	—	やや粗 1.5mm砂粒多	並	鈍黄橙色 10Y R7/6	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器小皿（181〜184）	薄手・扁平・歪み・口縁部僅かに内湾気味。
186	020−04	土師器小皿	L 17 ＳＫ503埋土	破片接合 約1/3弱残存	約7.5	約1.6	—	やや粗 1.0mm砂粒多	並	橙色 7.5Y R7/6	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	—	器形歪み・口縁部緩やかに内湾気味・受火痕跡。
187	22−3088	土師器小皿	L 20 ＳＫ531 №１	接合 大略完形復元	約7.6	約1.2	—	やや密0.5〜1.0mm大の砂粒含	並	外：淡茶褐 内：淡黄褐	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器皿及び小皿（131）・（188〜191）	扁平化・歪み・口縁部不規則に内湾気味。第49図
188	22−3063	土師器小皿	L 20 ＳＫ531 №２	完形品	7.9	1.2	—	やや密	並	淡茶褐色	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器皿及び小皿（131）・（187・189〜191）	扁平・歪み大・口縁不規則に立ち内湾気味・口縁端部油煙付着。第49図
189	004−05	土師器小皿	L 20 ＳＫ531	約1/4残存	約7.0	約1.0	—	やや密	並	鈍黄橙色 10Y R7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器皿及び小皿（131）・（187・188・190・191）	薄手・扁平化。口縁部やや肥厚し緩やかに内湾・歪みあり。第49図
190	004−06	土師器小皿	L 20 ＳＫ531	接合 約1/2弱残存	約7.5	約0.75	—	やや粗	並	鈍黄橙色 10Y R7/4	ナデ 外面指圧痕	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器皿及び小皿（131）・（187〜189・191）	薄手・扁平化し口縁部僅かに内湾気味・歪み。第49図
191	003−03	土師器小皿	L 20 ＳＫ531	接合 約1/4残存	約7.5	約1.1	—	やや粗	並	鈍黄橙色 10Y R7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器皿及び小皿（131）・（187〜190）	薄手・扁平化して口縁部やや内湾気味・受火痕跡・器壁剥離。第49図
192	018−07	土師器小皿	K〜L 22 372号墓 ＳＸ31埋土	破片接合 約1/7残存	約8.0	約1.2	—	やや粗 1.0mm微砂粒	並	鈍黄橙色 10Y R6/3	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期14ｃ末頃〜15ｃ後葉	人骨（ＳＸ31及びＳＸ160）	扁平化・歪み・口縁部やや肥厚、小さく立上がり気味・受火痕跡。
193	22−3089	土師器小皿	L 22 ＳＫ549 （№1）	口縁部一部接合 完形復元	約7.7	約1.2	—	やや密	並	外：淡茶褐 内：淡白褐	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器小皿（194〜196）	扁平化・歪み・口縁部不規則に内湾気味・口縁内外面に油煙。第49図・写真第11図
194	22−3067	土師器小皿	L 22 ＳＫ549 （№2）	接合 約4/5残存（ほぼ完形）	約7.6	約1.1	—	やや密	並	淡茶褐色	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器小皿（193・195〜196）	扁平・歪み・口縁やや肥厚、僅かに内湾気味・口縁煤多量。第49図・写真第11図
195	22−3064	土師器小皿	L 22 ＳＫ549	接合完形復元	約7.6	約1.25	—	やや密	並	外：淡黄褐 内：淡白褐	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕 内面型当て？痕跡	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器小皿（193・194及び196）	扁平化・口縁やや肥厚、僅かに内湾・歪み。第49図・写真第11図
196	006−07	土師器小皿	L 22〜23 ＳＫ549	接合 約4/5残存	約7.0	約1.3	—	やや密	並	灰白色 10Y R8/2	ナデ 底部外面に指圧痕 粗製濫造的	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器小皿（193〜195）	口縁部扁平、緩やかに内湾気味・歪み大。第49図・写真第11図
197	22−3085	土師器小皿	L 23 ＳＫ561 （№1）	完形品	7.6	1.3	—	やや密 5mm大小石1個含	並	乳白褐色	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり 布状圧痕も	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器小皿（198〜199）	扁平・口縁部やや肥厚、不規則に立ち内湾・歪み大。第49図
198	22−3086	土師器小皿	L 23 ＳＫ561 （№2）	完形品	7.5	1.2	—	やや密	並	乳白褐色	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕 布状圧痕も	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器小皿（197・199）	扁平・口縁部やや肥厚、不規則に立ち内湾・歪み大。第49図
199	22−3087	土師器小皿	L 23 ＳＫ561 （№3）	完形品	7.5	1.1	—	やや密 1mm長石砂粒含む	並	乳白褐色	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器小皿（197・198）	薄手・扁平・歪み・口縁部不規則に立ち内湾気味。第49図
200	009−01	土師器小皿	L 23 ＳＫ562 埋土	約1/10残存	約10.5	約1.8	—	密	並	灰黄白色	ナデ 底部指圧痕	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器皿（135）	反転復元・器壁薄い。
201	006−09	土師器小皿	L 23 401号墓	約1/6残存	約9.4	約1.6	—	密（微砂粒）	並	乳白褐色	ナデ 底部外面に指圧痕	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	—	口縁部小さく（浅目に）明瞭に内湾。
202	22−3065	土師器小皿	L 24 ＳＫ572	接合完形復元	約7.7	約0.9	—	やや密 1mm大砂粒含	並	外：黄褐色 内：淡黄褐	ナデ 底部外面に指圧痕	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器小皿（203〜207）	扁平・歪み・口縁やや肥厚、不規則に内湾気味。第49図
203	22−3068	土師器小皿	L 24 ＳＫ572	接合完形復元	約8.3	約1.2	—	やや密 1mm微砂粒含	並	外：淡茶褐 内：明茶褐	ナデ 外面指圧痕	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器小皿（202・204〜207）	扁平・歪み・口縁部やや肥厚、不規則に内湾気味・口縁に油煙付着痕。第49図
204	22−3092	土師器小皿	L 24 ＳＫ572	接合 約6/7残存	約7.6	約1.0	—	やや密 0.5mm砂粒含	並	淡黄褐色	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器小皿（202・203・205〜207）	扁平・歪み・口縁僅かに内湾・油煙付着あり。第49図
205	22−3093	土師器小皿	L 24 ＳＫ572	接合 大略完形復元	約7.3	約0.9	—	やや密	並	淡黄褐色	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器小皿（202〜204・206・207）	不整形・扁平・歪み大・口縁やや肥厚、内湾気味。第49図
206	017−04	土師器小皿	L 24 ＳＫ572	接合 約4/5残存	約7.8	約1.3	—	やや密	並	外：灰白色 2.5Y 8/2 内：浅黄色 2.5Y 7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器小皿（202〜205・207）	口縁部緩やかに内湾。第49図
207	017−05	土師器小皿	L 24 ＳＫ572	接合 約1/3残存	約8.2	約0.9	—	やや密	並	鈍黄橙 10Y R7/4	ナデ 外面指圧痕 底部中央穿孔か	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器小皿（202〜206）	扁平・歪み大・口縁僅かに内湾気味。第49図
208	006−04	土師器小皿	L 24 424号墓 ＳＸ118	約1/6残存	約9.2	約2.3	—	やや密	並	鈍黄橙 10Y R7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	人骨（ＳＸ118）。	薄手・口縁部やや深目に内湾。
209	22−3084	土師器小皿	L 24 ＳＫ563 （№1）	概ね完存に近い	約7.6	約0.9	—	やや密〜1mm砂粒少	並	乳白褐色	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器小皿（210・211）	薄手・扁平・口縁不規則に内湾気味・器壁剥離顕著。第49図
210	22−3066	土師器小皿	L 24 ＳＫ563 （№2）	接合 大略完形復元	約7.5	約1.3	—	やや密	並	淡白褐色	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃〜15ｃ後葉	土師器小皿（209・211）	扁平・歪み・口縁不規則に内湾。第49図

第 19 表　出土遺物観察表　古墳〜室町時代の遺物（第 44 〜 49 図）

報告番号	実測番号	器種名称	出土遺構新番号	形状遺存状態	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	胎土	焼成	色調	成形技法調整技法等	時期年代	出土状況	備　考
211	005－06	土師器小皿	L 24 S K 563 (№3)	接合 約4/5残存	約7.3	約1.0	—	やや密	並	鈍黄橙色 10Y R7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿 (209・210)	薄手・口縁緩やかに内湾・受火痕跡・器壁剥落顕著。第49図
212	002－02	土師器小皿	L 24 429号墓 S X 132	約1/5残存	約8.0	約1.4	—	やや粗 1.5mm小石含	並	鈍黄橙色 10Y R6/4	ナデほか不明 器壁の摩滅 剥離顕著	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿 (213～215) 人骨（S X 132）	薄手・口縁緩やかに内湾。
213	002－03	土師器小皿	L 24 429号墓 S X 132	約1/5残存	約9.0	約1.7	—	やや密 1.0mm砂粒含	並	鈍黄橙色 10Y R6/4	ナデほか不明	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿 (212・214・215) 人骨（S X 132）	薄手・口縁やや肥厚、直に立ち丸く内湾。
214	002－04	土師器小皿	L 24 429号墓 S X 132	約1/6残存	約8.0	約1.0	—	やや密	並	鈍黄橙色 10Y R6/4	ナデ 底部外面に指圧痕	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿 (212・213・215) 人骨（S X 132）	薄手・やや扁平化・口縁部緩やかに内湾気味。
215	002－05	土師器小皿	L 24 429号墓 S X 132	約1/3弱残存	約6.0	約1.2	—	やや密	並	鈍黄橙色 10Y R6/4	ナデ 外面指圧痕	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿 (212～214) 人骨（S X 132）	薄手・口縁部緩やかに内湾。
216	22－3070	土師器小皿	M14 131号墓下層 S X 254	接合 約4/5強残存	約8.0	約0.95	—	やや密	並	淡褐色	ナデ 外面指圧痕	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	人骨（S X 254）	扁平・歪み・口縁部やや肥厚、不規則に立ち内湾気味。
217	006－01	土師器小皿	M18 S X 181	約1/8残存	約7.9	約1.1	—	粗	並	灰白 10Y R8/2	ナデ 底部外面に指圧痕	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	人骨（S X 181） (100号墓西側1mの地点)	薄手・口縁部緩やかに内湾・受火痕跡。
218	003－04	土師器小皿	M22 228号墓 下層 S K 554	接合 約１/4弱残存	約8.0	約0.9	—	やや粗 1.5mm砂粒含	並	鈍黄橙色 10Y R7/3	ナデ 底部外面に指圧痕	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿 (219～221)、刀子（鉄15）	薄手・一層扁平化して口縁部はやや肥厚す。
219	003－05	土師器小皿	M22 228号墓 下層 S K 554	約1/6残存	約8.0	約1.4	—	やや粗	並	浅黄橙色 10Y R8/4	ナデ 外面指圧痕	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿 (218・220・221) 刀子（鉄15）	口縁緩やかに内湾・受火痕跡。
220	003－06	土師器小皿	M22 228号墓 下層 S K 554	接合 約1/4弱残存	約8.0	約0.85	—	やや密	並	鈍黄橙色 10Y R7/4	ナデ 底部外面に 指圧痕あり	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿(218～219及び221)、刀子（鉄15）	薄手・扁平化し口縁部やや肥厚しながら僅かに内湾気味。
221	003－07	土師器小皿	M22 228号墓 下層 S K 554	口縁 約1/8残存	約7.0	約0.9	—	やや密	良	鈍黄橙色 10Y R7/4	ナデ 外面指圧痕	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿（218～220)、刀子（鉄15）	薄手・扁平化して口縁部僅かに内湾気味。
222	018－04	土師器小皿	M22 229号墓 S X 62	接合 約3/4残存	約7.3	約1.2	—	やや密	並	鈍黄橙色 10Y R7/3	ナデ 外面指圧痕	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	人骨（S X 62）	薄手・歪み大・口縁部やや肥厚、小さく内湾。
223	023－04	土師器小皿	M24 416号墓 S X 141埋土	約1/2残存	約8.0	約1.6	—	やや粗 1～3mm大砂粒含	並	灰白色 10Y R8/2	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	人骨（S X 141）	薄手・口縁やや肥厚、緩やかに内湾。第49図
224	001－02	土師器小皿	M24 411号墓 S X 233	破片接合 完形復元	約7.5～7.8	約1.2	—	やや密	並	灰白色 10Y R8/2	ナデ 外面に指圧痕 内面型当て成形か	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器皿(137) 刀子（鉄09） 人骨（S X 233）	薄手・口縁部やや内湾気味・歪み大。
225	001－06	土師器小皿	M25 436号墓埋土	接合 約1/2弱残存	約8.5	約1.1	—	やや密	並	浅黄橙色 10Y R8/4	ナデ 外面指圧痕	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿 (226～231)	口縁緩やかに内湾・歪み・受火痕跡・煤付着。第49図
226	001－07	土師器小皿	M25 436号墓埋土	接合 約1/3残存	約8.0	約1.3	—	やや粗	並	鈍黄橙色 10Y R6/4	ナデ 外面指圧痕	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿 (225・227～231)	薄手・口縁緩やかに内湾・受火痕跡・煤付着。第49図
227	001－08	土師器小皿	M25 436号墓埋土	接合 口縁約1/2残存	約7.5	約1.3	—	やや密	並	鈍黄橙色 10Y R7/4	ナデ 底部外面に指圧痕 内面型当て成形？	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿 (225・226・228～231)	口縁やや肥厚し緩やかに内湾・歪み。第49図
228	001－09	土師器小皿	M25 436号墓埋土	接合 約1/4残存	約8.0	約1.4	—	やや密	並	鈍黄橙色 10Y R6/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿 (225～227・229～231)	口縁端部僅かに内湾・受火痕跡。第49図
229	002－01	土師器小皿	M25 436号墓埋土	約1/5残存	約7.0	約1.1	—	やや密	並	鈍黄橙色 10Y R6/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿 (225～228・230・231)	口縁 緩やかに内湾気味・煤付着。第49図
230	22－3060	土師器小皿	M25 436号墓埋土	破片接合 約1/4強残存	約7.5	約1.3	—	やや密	良	鈍い黄橙 10Y R7/4	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿 (225～229および231)	器壁薄手均一・口縁小さく内湾。第49図
231	22－3061	土師器小皿	M25 436号墓埋土	破片接合 約1/2弱残存	約7.4	約1.3	—	やや密	良	黄橙色	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕か（摩滅顕著）	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器小皿 (225～230)	薄手・口縁やや肥厚、小さく内湾。第49図
232	003－01	土師器小皿	M25 S K 585	接合 約1/2残存	約7.0	約0.9	—	やや粗	並	鈍黄橙色 10Y R7/4	ナデ 底部外面に 指圧痕あり	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	—	薄手・扁平化して口縁部やや内湾気味・歪み大。
233	006－06	土師器小皿	N16 S X 188 (84号墓 東接斜面)	約1/4弱残存	約8.0	約1.15	—	やや密	並	鈍黄橙 10Y R7/4	ナデ 底部外面に 指圧痕か 器壁摩滅顕著	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	人骨（S X 188）	口縁部扁平に近い・歪みあり。
234	23－09	土師器小皿	N23 409号墓	約3/4残存	約7.2	約0.9	—	やや密	並	鈍黄橙色 10Y R7/4	ナデ 横ナデ 指圧オサエ	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	—	やや薄手、口縁部やや肥厚しつつ僅かに内湾気味・反転復元。
235	019－05、06	土師器小皿	N24 249号墓埋土	接合 口縁約4/5残存	約7.6	約1.2	—	やや密 1.0mm砂粒含	並	鈍黄橙色 10Y R7/4	ナデ 底部外面に 指圧痕か	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器碗（80）	薄手・口縁部やや肥厚、内湾気味・歪み・油煙痕。
236	22－3102	土師器小皿	N25 S K 592	接合 完形復元	約7.8	約1.3	—	粗	並	灰白色 2.5Y 8/2	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	—	薄手・歪み・口縁部僅かに肥厚、緩やかに内湾・受火痕跡。

第 19 表　出土遺物観察表　古墳～室町時代の遺物（第 44 ～ 49 図）

報告番号	実測番号	器種名称	出土遺構新番号	形状遺存状態	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	成形技法調整技法等	時期年代	出土状況	備　考
237	24 －8	土師器 小皿	O～P14 49号墓	接合 大略完形復元	約7.3	約1.1	—	やや密	並	鈍黄橙色 10YR7/4	外面ナデと指圧痕 内面ナデと型当て痕（成形工具痕）	②期 14c末頃～ 15c後葉	—	扁平・歪み大・口縁部やや肥厚、端部不規則に立上がる。
238	005 －05	土師器 小皿	O22 236号墓 周溝内	約1/2弱残存	約7.3	約1.05	—	やや密	並	浅黄橙色	ナデ 外面指圧痕	②期 14c末頃～ 15c後葉	—	薄手・口縁部やや内湾気味・器形不均整歪み。
239	017 －06	土師器 小皿	R12 34号墓 SX80	接合 約1/3残存	約7.5	約0.9	—	やや密	並	浅黄色 2.5Y7/3	ナデ 外面指圧痕	②期 14c末頃～ 15c後葉	人骨（SX80）	扁平化・口縁部やや肥厚、僅かに内湾気味・受火痕跡・煤若干付着。
240	006 －02	土師器 小皿	S11 SX273 （16号墓 東側斜面下層）	接合 約4/5残存	約7.3	約1.35	—	やや密 1.5mm 砂粒含	並	鈍黄橙 10YR7/4	ナデ 外面指圧痕 （内面型当てか）	②期 14c末頃～ 15c後葉	人骨（SX273）	口縁部つまみ上げ 内湾・歪み大。
241	22－ 3059	土師器 小皿	B地区 N27～28 461号墓 墳丘A下層	破片 接合約1/2強 残存	約8.5	約1.4	—	粗 0.1mm 砂粒多	並	黄褐色	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14c末頃～ 15c後葉	—	薄手・口縁やや肥厚、緩やかに内湾・歪み少々。
242	006 －03	土師器 小皿	B地区 M29 462号墓 墳丘B盛土内	接合 約1/2強残存	約8.0	約1.55	—	粗 2.0mm大 砂粒小石含	並	淡黄色 2.5Y8/3	ナデ 外面指圧痕か 器壁摩滅顕著	②期 14c末頃～ 15c後葉	—	薄手・口縁部緩やかに内湾・受火痕跡。
243	007 －01	土師器 小皿	B地区 M29 462号墓 裾部	接合 約1/2残存	約7.8	約1.4	—	やや粗	並	浅黄色 2.5Y7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14c末頃～ 15c後葉	—	口縁部小さく （淺目に）内湾・歪みあり。 写真第11図
244	24 －3	土師器 小皿	B地区 R40 SK767	約1/2残存	約8.5	約2.2	—	やや密	並	鈍黄橙色 10YR7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14c末頃～ 15c後葉	土師器皿 （141・142）	薄手・口縁部直に湾曲。 第49図 写真第11図
245	023 －01	土師器 小皿	C地区 O～P41 SK778	接合 約3/4残存	約9.0	約2.8	—	やや粗 1～2mm 大砂粒含	並	鈍黄橙色 10YR7/4	ナデ 底部外面に 指圧痕あり	②期 14c末頃～ 15c後葉	—	薄手・歪み・口縁部大きく内湾して立上がる・接合完形復元。
246	017 －07	土師器 小皿	K14 153号墓 埋土	約1/7残存	約8.5	約1.0	—	やや祖	並	鈍黄橙色 10YR6/4	ナデ 底部外面に 指圧痕あり	③期 15c後葉～ 16c末葉	土師器小皿 （247・248）	薄手・口縁やや肥厚、小さく内湾・油煙付着。 第49図
247	017 －08	土師器 小皿	K14 153号墓 埋土	約1/6残存	約7.0	約0.9	—	やや粗 1.5mm砂 粒含	並	鈍黄橙色 10YR6/3	ナデ 外面指圧痕	③期 15c後葉～ 16c末葉	土師器小皿 （246・248）	薄手・扁平・口縁緩やかに内湾気味・器壁磨耗顕著。 第49図
248	017 －09	土師器 小皿	K14 153号墓 埋土	約1/9残存	約7.9	約0.9	—	やや密	並	外：浅黄 2.5Y7/3 内：灰白 2.5Y8/2	ナデ 外面指圧痕	③期 15c後葉～ 16c末葉	土師器小皿 （246・247）	薄手・扁平・口縁緩やかに内湾気味・口縁端部に油煙付着。 第49図
249	015 －02	土師器 小皿	K14～15 154号墓	接合 約1/2残存	約7.1	約1.0	—	やや密	並	鈍黄橙 10YR7/4	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～ 16c末葉	土師器鍋（111）	薄手・扁平化・口縁部肥厚、歪みながら立ち上がる。
250	011 －04	土師器 小皿	K16 SX280	約1/8破片残存	約7.5	約1.0	—	やや密	並	鈍黄橙 10YR7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～ 16c末葉	人骨（SX280） 192～193号墓と266号墓に挟まれた地点	薄手・口縁緩やかに内湾・口縁端部に油煙少量付着。
251	011 －03	土師器 小皿	K21 SK540	約1/8破片残存	約7.0	約0.8	—	やや密	並	外：灰白色 10YR8/2 内：鈍黄橙 10YR7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～ 16c末葉	—	薄手・扁平化・口縁部やや肥厚し内湾気味・器形歪み・
252	018 －01	土師器 小皿	K22 378号墓埋土	接合 約1/5残存	約7.0	約1.1	—	密	並	浅黄橙色 10YR8/4	ナデ 外面指圧痕	③期 15c後葉～ 16c末葉	土師器小皿 （253・254）	薄手・口縁部緩やかに内湾。
253	018 －02	土師器 小皿	K22 378号墓埋土	約1/8残存	約8.0	約0.8	—	やや密	並	浅黄橙色 10YR8/4	ナデ 外面指圧痕	③期 15c後葉～ 16c末葉	土師器小皿 （252・254）	薄手・扁平化・歪み・口縁部小さく（淺目に）内湾・煤付着。
254	018 －03	土師器 小皿	K22 378号墓埋土	約1/7残存	約9.0	約1.0	—	密	並	鈍黄橙 10YR7/4	ナデ 外面指圧痕	③期 15c後葉～ 16c末葉	土師器小皿 （252・253）	薄手・扁平化・歪み・口縁部僅かに内湾気味。
255	004 －08	土師器 小皿	K～L15 145号墓	口縁部 約1/4弱残存	約7.0	約0.7	—	やや密	並	鈍黄橙色 10YR7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～ 16c末葉	土師器鍋 （110・参考14）	薄手・扁平・口縁部内湾気味・受火痕跡。 第49図
256	023 －10	土師器 小皿	M23 398号墓	接合 約1/4残存	約6.8	約1.15	—	やや密	並	内：浅黄橙 10YR8/4 外：鈍黄橙 10YR7/4	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～ 16c末葉	—	非常に薄手均一・口縁部小さく（淺目に）内湾・油煙痕跡？。
257	018 －08	土師器 小皿	M23 406号墓と 419号墓の間 SX33	約1/8残存	約9.0	約1.2	—	やや密	並	鈍黄橙色 10YR6/4	内外面ナデ	③期 15c後葉～ 16c末葉	人骨（SX33）	口縁部緩やかに内湾気味・受火痕跡・器壁摩滅。
258	020 －05	土師器 小皿	M24 SX130 （417・413号墓 墓間通路直下）	口縁部小破片 1/7残存	約7.5	約0.6	—	やや粗 1.0mm 砂粒多	並	黄橙色 10YR8/6	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～ 16c末葉	人骨(SX130)	薄手・扁平・歪み大・口縁端部不規則に湾曲気味。
259	24 －7	土師器 小皿	M24 417号墓 SX42	完形品	6.8	1.2	—	やや密	並	鈍黄橙色 10YR7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～ 16c末葉	人骨（SX42）	薄手・歪み・口縁緩やか内湾気味・油煙付着痕。 写真第11図
260	023 －05	土師器 小皿	M25 437号墓	接合 約1/2残存	約7.3	約2.05	—	密 精良に 近い	良	浅黄橙色 10YR8/3	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～ 16c末葉	—	薄手・歪み・口縁部やや肥厚、緩やかに深く内湾・受火痕跡。
261	004 －07	土師器 小皿	M25 448号墓 SX138	口縁部 約1/8残存	約8.0	約1.5	—	やや密	並	鈍黄橙色 10YR7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～ 16c末葉	人骨（SX138）	薄手・口縁部直に内湾・口縁端部に油煙痕跡。

第19表　出土遺物観察表　古墳～室町時代の遺物（第44～49図）

報告番号	実測番号	器種名称	出土遺構新番号	形状遺存状態	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	成形技法調整技法等	時期年代	出土状況	備　考
262	002－06	土師器小皿	N25 447号墓埋土	約1/5残存	約7.0	約1.6	—	やや密	並	橙色 7.5YR7/6	ナデ 外面指圧痕	③期 15c後葉～16c末葉	—	薄手・口縁部緩やかに内湾・油煙付着。
263	017－01	土師器小皿	N14 130号墓埋土	口縁 約1/5残存	約8.0	約0.7	—	やや密	並	鈍黄橙 10YR7/4	ナデ（他不明）	③期 15c後葉～16c末葉	—	薄手・扁平・口縁殆ど内湾せず。第49図
264	005－04	土師器小皿	N16 SX473 (旧SX86の名称変更)	約1/5弱残存	約7.0	約1.1	—	やや密	並	鈍橙色 7.5YR7/4	ナデ 底部外面指圧痕か器壁摩滅顕著	③期 15c後葉～16c末葉	(17号墓SX86と重複したためSX86をSX473に変更した)	非常に薄手・口縁部やや内湾・受火痕跡。
265	22－3103	土師器小皿	N25 440号墓	完形品	7.3	0.8	—	やや粗 4.5mm小石含	並	浅黄色 2.5Y7/3	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～16c末葉	—	薄手・扁平・口縁端部不規則に湾曲気味。第49図
266	002－08	土師器小皿	O13 SX262 (73号墓東側斜面下)	接合 約1/2残存	約7.5	約1.0	—	やや密	並	浅黄橙色 10YR8/4	ナデ 外面指圧痕	③期 15c後葉～16c末葉	人骨（SX262）	薄手・器形扁平・口縁部の内湾形状は不規則不明瞭・歪み。
267	002－09	土師器小皿	Q13 37号墓	約1/4残存	約8.0	約1.0	—	やや粗	並	浅黄橙色 10YR8/3	ナデ 外面指圧痕	③期 15c後葉～16c末葉	—	薄手・扁平化・口縁部やや不規則に立上がり気味・歪み。
268	005－02	土師器小皿	R12 33号墓	約1/8弱残存	約7.6	約0.8	—	やや粗 1.5mm砂粒含	並	浅黄橙色 10YR8/4	ナデ 底部外面指圧痕か器壁摩滅顕著	③期 15c後葉～16c末葉	—	薄手・口縁部僅かに内湾気味。
269	019－02	土師器小皿	S11 12号墓埋土	接合 約1/4弱残存	約7.0	約1.2	—	やや密 1.0mm砂粒含	並	鈍黄橙色 10YR7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～16c末葉	土師器小皿 (270～272)	扁平化・歪み・口縁部やや肥厚、僅かに内湾気味・油煙付着。
270	019－03	土師器小皿	S11 12号墓埋土	接合 約1/4残存	約7.0	約1.3	—	やや密 1.0mm砂粒含	並	淡橙色 5YR8/4	ナデ 外面指圧痕	③期 15c後葉～16c末葉	土師器小皿 (269・271・272)	薄手・口縁部緩やかに内湾。
271	019－04	土師器小皿	S11 12号墓埋土	口縁部 約1/8残存	約7.0	約1.2	—	やや密 1.0mm砂粒含	並	鈍黄橙色 10YR7/4	内外面ナデ	③期 15c後葉～16c末葉	土師器小皿 (269・270・272)	薄手・口縁部小さく直に立上がる・受火痕跡・煤付着。
272	007－09	土師器小皿	S11 12号墓埋土	接合 約1/4残存	約7.6	約1.2	—	やや密（微砂粒）	並	鈍黄橙 10YR7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～16c末葉	土師器小皿 (269～271)	口縁緩やかに内湾。
273	018－06	土師器小皿	S11 13号墓 区画南西隅	約1/4残存	約8.0	約1.4	—	やや密	並	浅黄橙色 10YR8/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～16c末葉	土師器小皿 (274・275)	器形若干歪み・口縁部緩やかに内湾・受火痕跡・煤付着。
274	003－12	土師器小皿	S11 13号墓	約1/6弱残存	約8.0	約1.7	—	やや密	並	鈍黄橙色 10YR7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～16c末葉	土師器小皿 (273・275)	口縁部直に内湾。
275	003－13	土師器小皿	S11 13号墓	約1/8残存	約6.0	約1.1	—	やや密	並	鈍黄橙色 10YR7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～16c末葉	土師器小皿 (273・274)	薄手・口縁部緩やかに内湾。
276	010－04	土師器小皿	B地区 L30 墳丘B裾部 SK619	口縁～底部 約1/3残存	約9.0	約1.2	—	やや密	並	鈍黄橙 10YR7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～16c末葉	土師器皿及び小皿 (144)と(277・278)	器壁薄い・器形歪み有り、口縁部緩やかに内湾。
277	010－05	土師器小皿	B地区 L30 墳丘B裾部 SK619	口縁～底部 約1/4残存	約8.0	約1.6	—	やや密	並	鈍黄橙 10YR6/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～16c末葉	土師器皿及び小皿 (144)と(276・278)	口縁小さく（浅目）立ち上がる・器形歪み。第49図
278	010－06	土師器小皿	B地区 L30 墳丘B裾部 SK619	口縁～底部 約1/4残存	約8.0	約1.3	—	やや密	並	鈍橙色 7.5YR7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～16c末葉	土師器皿及び小皿 (144)・(276・277)	器壁薄い・口縁部緩やかに内湾・歪み。第49図
279	005－09	土師器小皿	B地区 Q39 SK743	接合 約1/2残存	約6.4	約1.2	—	やや密（微砂粒）	並	鈍黄橙 10YR7/4	ナデ 外面指圧痕	③期 15c後葉～16c末葉	土師器皿 (143)	薄手・口縁小さく（浅目に）内湾・受火痕跡。同類小皿三点あり。第49図
280	017－03	土師器小皿	B地区 Q39 SK748	約1/5残存	約9.0	約1.1	—	やや密	並	鈍黄橙 10YR7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～16c末葉	—	薄手・口縁部小さく（浅目に）内湾。
281	018－11	土師器小皿	B地区 Q40 SK749 埋土	口縁部小破片 約1/12残存	約9.0	約1.4	—	やや密	並	外：浅黄色 2.5Y7/4 内：暗灰黄 2.5Y5/2	口縁部指ナデ	③期 15c後葉～16c末葉	—	薄手・口縁部直に内湾・受火痕跡・内外面油煙多量付着。
282	025－05	土師器小皿	C地区 P44 SK828	破片接合 約4/5残存	約8.0	約2.0	—	やや密 2mm大砂粒含	並	鈍黄橙色 10YR7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～16c末葉	土師器皿 (145～147)	口縁直立内湾・歪み。第49図
283	024－04	土師器小皿	C地区 Q～R41 SK788	接合 口縁部約2/3残存	約8.5	約1.2	—	やや密 1.5mm砂粒含	並	鈍黄橙色 10YR6/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～16c末葉	—	薄手・口縁部直に内湾。
284	025－03	土師器小皿	C地区 SK849 (№2)	破片接合 約4/5残存	約8.85	約1.9	—	やや密	並	鈍黄橙色 10YR7/4	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～16c末葉	土師器小皿(285)	薄手・歪み少々・口縁直立内湾。写真第11図
285	025－04	土師器小皿	C地区 SK849 (№1)	破片接合 約4/5強残存	約8.15	約1.8	—	やや密	並	鈍黄橙色 10YR7/4	口縁部横ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15c後葉～16c末葉	土師器小皿 (284)	薄手・歪み少々・口縁直立内湾。写真第11図
参考(1)	22－3049	山茶碗	M14 128号墓南側	底部破片 約1/2残存	不詳	不詳	約7.0	やや密	並	淡青 灰白色	ロクナデ 底部糸切り痕 高台貼付	12c中葉～（後葉）	—	高台に砂粒痕・見込み部やや滑らかに摩耗。

第19表　出土遺物観察表　古墳～室町時代の遺物（第44～49図）

報告番号	実測番号	器種名称	出土遺構新番号	形状遺存状態	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	成形技法調整技法等	時期年代	出土状況	備　考
参考(2)	028－03	山茶碗	M16 190号墓 埋土下層	底部残存	不明	不明	7.6	やや密	並	青灰白色	見込みに一方向ナデ 高台貼付け（低台形状）	12ｃ中頃～（後葉）	—	高台砂粒痕・籾殻僅少（53と類似のタイプ）
参考(3)	22－3016	山茶碗	M16 186号墓 190号墓 東斜面	破片接合 約3/4残存	約14.9	約4.7	約6.8	やや粗	並	淡青灰色	ロクロナデ 見込み一方向ナデ 底部糸切り 高台貼付け	13ｃ中葉～	3ヶ所から出土の破片を接合	高台剥離気味・籾殻痕あり。内面に強い当りによる稜線。
参考(4)	22－3056	山茶碗	N25 449号墓 外北接	底部のみ破片	不明	不明	5.5cm	粗3mm～6mm大長石粒	並	灰白色	ロクロナデ 見込み一方向ナデ 底部糸切り 貼付け高台無	14ｃ前半代～	—	ロクロ回転逆時計回り、(59)と類似のタイプ。
参考(5)	—	山茶碗	L16 182号墓埋土	口縁部 約1/5残存	約16.0	不明	不明	やや粗	並	淡青 灰白色	ロクロナデ （他不明）	13ｃ前葉頃	(20・23・26～29・45・51・53)等と共伴	中野編年第5形式に相当するか。
参考(6)	—	山茶碗	M25 ＳＫ583	接合 底部小破片	不明	不明	約6.6	やや密	並	灰白色	ロクロナデ 底部糸切り 貼付け高台無	14ｃ前半代～	土師器皿（138）	参考4と同タイプ。
参考(7)	—	山茶碗	M24 ＳＸ131 （413・417号墓墓間通路で検出）	接合 体部～口縁部破片残存 底部欠失。	約13.0	不明	不明	粗 3～6mm 大長石粒	並	灰白色	ロクロナデ （他不明）	14ｃ前半代～	人骨（ＳＸ131）	参考4と同タイプ。
参考(8)	—	山茶碗	N15斜面 と80号墓	接合 体部～口縁部 約1/2強残存 底部欠失。	約13.4	不明	不明	粗 3～6mm 大長石粒	並	灰白色	ロクロナデ （他不明）	14ｃ前半代～	2ヶ所から出土の破片を接合	参考4と同タイプ。
参考(9)	22－3075	山皿	L15 146号墓埋土	接合完形復元	約8.0	約2.0	約4.2	密	良	暗灰白色	ロクロナデ 底部糸切り ロクロ回転は時計回り	12ｃ後葉～13ｃ初	—	—
参考(10)	—	山皿	M17 131号墓埋土	小破片	約8.2	約2.3	不詳	密	良	暗灰白色	ロクロナデ 底部糸切り	13ｃ中葉～	—	—
参考(11)	021－06	山皿	M17 200号墓 ＳＸ75埋土	口縁部 約1/5残存	約8.0	約2.2	（約4.0）	やや密	並	浅灰白色	ロクロナデ 底部糸切り	13ｃ前葉～	土師器皿小破片（113） 人骨（ＳＸ75）	—
参考(12)	22－3041	白磁碗	L16 182号墓 盛土内	口縁部 約1/6弱残存 底部欠失。	約10.0	不明	不明	やや密	並	乳灰白色	ロクロ水挽き （他不明）	14ｃ末頃～15ｃ後葉	(20・23・26～29・45・51・53・69・73・115・参考5)等と共伴	口縁端内側円周無釉帯幅約4mm。
参考(13)	22－3042	白磁碗	Ｂ地区 N30 ＳＫ626 上面表土	底部破片 約1/5弱残存 口縁～体部欠失。	不明	不明	薬6.8	密	良	白色 （釉薬）	ロクロ水挽き	15ｃ後葉～16ｃ末葉	—	器壁薄い。
参考(14)	004－08	土師器鍋	K～L15 145号墓	口縁部 約1/18残存	約28.6	不明	—	やや密	良	鈍黄橙色 10ＹＲ6/4	横ナデ 口縁端部つまみ上げ	15ｃ後葉～16ｃ初	土師器鍋（110） 土師器小皿（255）	口縁端部外面に太く沈線状窪み。
参考(15)	017－02	土師器 小皿	N19 107号墓東 石列外接	接合 約1/5残存	約7.0	約1.2	—	やや粗	並	鈍黄橙 10ＹＲ7/4	ナデ 外面指圧痕	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	山茶碗（55）	薄手・口縁部緩やかに内湾・歪み大。
参考(16)	007－06	土師器 小皿	K20 ＳＫ521南西	約1/8残存	約7.0	約1.1	—	やや密 1.0mm砂粒含	並	鈍橙色 7.5ＹＲ7/4	ナデ 底部外面に指圧痕あり	②期 14ｃ末頃～15ｃ後葉	土師器皿（118）	口縁部僅かに内湾味・受火・煤付着。
参考(17)	003－08	土師器 小皿	L23 395号墓 区画外北側	接合 約１/2残存	約7.0	約0.95	—	やや密	並	鈍黄橙色 10ＹＲ6/4	ナデ 外面指圧痕	③期 15ｃ後葉～16ｃ末葉	土師器小皿 （参考18～20）	薄手・口縁緩やかに内湾・受火・煤付着。
参考(18)	003－09	土師器 小皿	L23 395号墓 区画外北側	約１/4残存	約6.0	約1.3	—	やや密	並	鈍黄橙色 10ＹＲ7/4	ナデ 外面指圧痕	③期 15ｃ後葉～16ｃ末葉	土師器小皿 （参考17・19・20）	薄手・口縁部小さく浅目に内湾・油煙付着
参考(19)	003－11	土師器 小皿	L23 395号墓 区画外北側	接合 約1/8残存	約8.0	約1.1	—	やや密	並	鈍黄色 2.5ＹＲ6/3	ナデ 底部外面に指圧痕あり	③期 15ｃ後葉～16ｃ末葉	土師器小皿 （参考17・18・20）	薄手・口縁部小さく淺目に内湾。
参考(20)	003－10	土師器 小皿	L23 395号墓 区画外北側	接合 口縁約1/2弱残存	約7.0	約1.5	—	やや密	並	鈍黄橙色 10ＹＲ7/4	ナデ 外面指圧痕	③期 15ｃ後葉～16ｃ末葉	土師器小皿 （17～19）	薄手・口縁部やや直に内湾・歪み。
参考(21)	—	石英	Ａ地区 配石区画墓で出土顕著	概ね数cm大、1箇所数個ずつ	—	—	—	—	—	半透明 乳白色	—	—	—	地輪の裾などに数個ずつ置かれていた。本来は火打ち石か。
参考(22)	—	貝 （蛤・アサリ）	Ｐ41 地区杭傍 表土採取	蛤は破片 アサリ完存	—	—	—	—	—	—	—	—	—	遺構に伴うものではなく、参考までに記した。

第 19 表　出土遺物観察表　古墳～室町時代の遺物（第 44 ～ 49 図）

報告番号	実測番号	採取時の番号	出土地区	遺構名ほか	法量（cm）		備　考　欄	掲載図	掲載写真
					現存長	刃最大幅			
鉄01	12	6	A区L17	208号墓 SX175	32.8	2.7	鉄（12）と同じ208号墓出土。蔵骨器常滑産壺（47）に副葬。	第50図	第11図
鉄02	85	4	A区L17	207号墓 SX9	23.3	2.7	鋒・茎先一部欠失。棟区・刃区・目釘孔あり。	第50図	第11図
鉄03	14	11	A区J18	SK506 SX159	25.7	2.7	鋒に近い刃先･茎先欠失。棟区･刃区･目釘孔あり。鉄（11）と伴出。	第50図	
鉄04	15	14	A区N20	SK533	22.6	2.1	鋒の一部・茎を欠失するも、完存に近い。棟区・刃区・目釘孔あり。	第50図	第11図
鉄05	17	21	A区I18	SK505	30	2.9	鋒折れるもほぼ完存。棟区・刃区・目釘孔あり。	第50図	
鉄06	16	24	A区J19	SK519	28	3.2	茎先欠。棟部に約13cm木質片付着。棟区・刃区・目釘孔。	第50図	第11図
鉄07	19	25	A区J19	SK520	30	2.9	錆膨れあるも、ほぼ完存。棟区・刃区あり、目釘孔は見えず。 木質の鞘の一部が残存する。	第50図	第11図
鉄08	13	26	A区J17	SK499	31	2.9	木質鞘部僅かに残存。ほぼ完存に近い。棟区・刃区あり、錆膨れで目釘孔は見えず。下記の鉄（31）と伴出した。	第50図	第11図
鉄09	18	27	A区M24	411号墓 SX233	33.1	3	鋒付近の刃先一部欠、茎先欠。棟区・刃区・目釘孔あり。鉄（23）と同伴。ほぼ完存に近い。	第50図	第11図
鉄10	51	33	A区L19	SK524	27.3	2.8	鋒欠、刃区は錆と木質付着で見えず。棟区・目釘孔。	第50図	第11図
鉄11	24	12	A区J18	SK506 SX159	28.5	2.3	鉄（03）と伴出。刃先に一部欠失あるも略完存。棟区・刃区・目釘孔あり。	第50図	
鉄12	90	5	A区L17	208号墓 SX174	33.6	2.7	鉄（01）と同じ墓より出土。蔵骨器常滑産壺（46）に副葬。 弓なりに曲がる、ほぼ完存。	第50図	
鉄13	8	15	A区K18	SK510	31.3	2.8	略完存。茎先に近い刃方が一部欠失。棟区・刃区・目釘孔あり。	第50図	
鉄14	9	16	A区L15	SK481	28	2.8	ほぼ完存。棟区・刃区・目釘孔あり。鞘木質痕跡残存	第50図	
鉄15	3	20	A区M22	SK554	28.3	3.1	鋒･茎先ともに欠失す。全体にやや円弧状に反っている。棟区･刃区･目釘孔あり。	第50図	
鉄16	7	7	A区I～J17	275号墓 SX158	24.3	2.4	鋒欠失、茎部中央屈曲。棟区・刃区・目釘孔あり。 （SX158は旧SX10を名称変更したもの。）	第50図	
鉄17	25 - 1	8	A区O21	226号墓 東接地点	28.8	2.6	略完存、錆により目釘孔見えず。	第50図	
鉄18	22	13	A区K19	不明	26.8	2.5	棟部一部欠、刃区欠失。棟区・目釘孔あり。	第50図	
鉄19	6	22	A区J20	SK527	28.5	2.4	略完存、錆で刃区欠、目釘孔覆い隠し見えず。	第50図	
鉄20	4	23	A区K20	SX232 （340号墓の可能性）	21.4	2.1	欠失あり、棟区・刃区共に不明。やや小ぶり。	第50図	
鉄21	67	34	A区L16	SK493埋土	2.6	＊	燧金。鉄参考（42）に伴出。	第50図	
鉄22	66	＊	A区J17	SK497埋土	6.2	＊	燧金。鉄（21）と同類品か？木質片付着。	第50図	
鉄23	37	28	A区M24	411号墓 SX233	5.3	2.3	非刀子。不明銅製品。鉄（09）の刀子に伴出。	第50図	
鉄24	10	18	A区L17	SK511 SX167	15	2.3	刃先･茎部に欠失あり。鎬あり、目釘孔なし。鉄参考（32）と伴出。	第50図	
鉄25	84	28	C区Q44	SK835	13.4	1.2	やや小振りの鉄製品。刀子か？鉄（26）と類似。	第50図	
鉄26	86	31	A区K21	SK542	10	0.9	鉄（25）に類似するが、一層細く小振り。刀子かどうか不明。	第50図	
鉄27	20	2	A区J16	273号墓 SX8	24.1	2.8	渦巻状に湾曲するも、概ね完存。蔵骨器の鍋(102)に副葬。	第50図	
鉄28	28	＊	A区北端斜面	地山確認トレンチ	13.2	3.5	非刀子。恐らく鎌の一部と推定。	第50図	
鉄29	31	＊	A区K21	364号墓 SX20	18	0.4	非刀子。所謂「バンセン？」の感じもある。硬質。	第50図	
鉄30	32	＊	B区P37	SK707	7	3.1	燧金。	第50図	
鉄31	39	26	A区J17	SK499	9.1	3.1	燧金。鉄（08）刀子に伴出。	第50図	
鉄参考（32）	1	17	A区L17	SK511 SX167	22	2.5	茎部は目釘孔より尻辺を欠失。鉄（24）と伴出。		
鉄参考（33）	2	19	A区Q12	東斜面	17.7	3	刃部約4/5残存、他欠失。		
鉄参考（34）	23	ア	A区M17	区画西隅	20.8	2.9	鋒、茎を欠失。		
鉄参考（35）	68	10	A区M16	188号墓	18.5	2.7	鋒・区部～目釘孔付近欠失部分多い。		
鉄参考（36）	88	9	A区O22	235号墓	28	3	刃先・棟部分欠失、区付近欠失。腐蝕顕著。		
鉄参考（37）	11	32	A区L19	SK525	30.2	2.8	木質鞘部一部残存。		
鉄参考（38）	29	3	A区M18	101号墓	5.9	1.4	刀子茎の一部か鉄（25・26）等と同類遺物か。		
鉄参考（39）	53	29	A区L22	SK552	12	2.3	鋒に木質鞘残存。鉄参考（40）伴出。		
鉄参考（40）	52	30	A区L22	SK552	22.7	2	刃先欠、一部布目痕。鉄参考（39）伴出。		
鉄参考（41）	87	31	A区K21	SK542	8.6	1.8	刀子茎の破片か？		
鉄参考（42）	63	35	A区L16	SK493	3	0.6	鉄（21）と伴出。鉄(25)(26)と同類か？		
鉄参考（43）	無	無	A区M14	SX253	5.5	1.3	刀子の一部分か？		
鉄参考（44）	無	無	A区N16	東斜面 再拡張区	4.2	1.9	刀子の一部分か？錆膨れ大きい。		
鉄参考（45）	無	無	A区K17	区画南隅	16	3.2	非刀子。鉄（28）と同じ形状。鎌と推定。腐蝕著しい。		

◎各部位の名称等、拵えに関することは、佐藤寒山編『刀剣』(『日本の美術』№6、1966年10月、至文堂）に依拠した。

第 20 表　出土刀子類観察表（第 50 図）

報告番号	実測番号	出土地区名	出土遺構名等	法　量		備　　考（形状・伴出遺物等）	掲載図
				現長(cm)	断面部(mm)		
鉄46	49	A区J15	SK478　SX109	5.1	4.5×4.0	頭欠、断面方形。炭・骨出土。	第51図
鉄47	50	A区J15	SK478　SX109	3.7	-	断面方形。炭・骨出土。	第51図
鉄48	64	A区J17	SK497	4.7	5.5×4.0	頭欠、断面方形。	第51図
鉄49	65	A区J17	SK497	3.4	5.5×3.5	頭欠、断面方形。	第51図
鉄50	34	A区J21	SK535	2.3	6.5×5.0	断面方形。骨出土。	第51図
鉄51	35	A区J21	SK535	3.6	4.5×3.5	頭欠、断面方形。骨出土・屈曲。	第51図
鉄52	17(-12)	A区k16 D2	266号墓	1.6	4.0×3.0	断面方形。	第51図
鉄53	-	A区K21	364号墓SX20	7	3.5×2.5	頭欠、断面方形。土師器鍋、骨。	第51図
鉄54	36	A区M23	SK566	5.9	6.0×4.5	頭欠、断面方形。	第51図
鉄55	17(-10)	B区N30	SK626東側	4.6	5.0×4.0	断面方形。屈曲。	第51図
鉄56	41	B区N34 ～O34	SK666	4.8	-	頭欠、断面方形。	第51図
鉄57	73	B区P37	SK707	2.2	5.0×3.0	断面方形。骨出土。銭（119～125）伴出。	第51図
鉄58	72	B区P37	SK707	2.5	4.5×3.0	断面方形。骨出土。	第51図
鉄59	75	B区P37	SK707	1.9	4.0×2.5	断面方形。骨出土。	第51図
鉄60	74	B区P37	SK707	3.5	5.5×3.5	断面方形。骨出土。	第51図
鉄61	76	B区P37	SK707	3.2	4.0×4.0	頭欠、断面方形。骨出土。	第51図
鉄62	71	B区P37	SK707	2.7	5.0×4.0	頭欠、断面方形。骨出土。	第51図
鉄63	77	B区P37	SK707	2	5.0×4.5	頭欠、断面方形。骨出土。	第51図
鉄64	78	B区P37	SK707	1.9	4.0×3.0	頭欠、断面方形。骨出土。	第51図
鉄65	70	B区P37	SK707	3.7	4.5×4.0	頭欠、断面方形。骨出土。	第51図
鉄66	54	B区P37	SK707	4	4.5×4.0	断面方形。骨出土。	第51図
鉄67	55	B区P37	SK707	2.4	5.0×4.0	断面方形。骨出土。	第51図
鉄68	60	B区P37	SK707	4	5.0×3.5	頭欠、断面方形。骨出土。	第51図
鉄69	56	B区P35	SK682	2.9	5.5×4.0	断面方形。参考（89）伴出。銭（55～59）伴出。	第51図
鉄70	57	B区P35	SK682	2.9	4.7×3.5	断面方形。参考（89）と伴出。	第51図
鉄71	61	B区P36	SK693	5.5	4.0×3.0	断面方形。	第51図
鉄72	48	B区Q37	SK714	6.9	3.0×2.5	断面方形。ほぼ全長に近い。	第51図
鉄73	25（-2）	B区P37	SK710	6.1	4.0×3.0	断面方形。炭化物・骨出土。	第51図
鉄74	-	B区P38	SK720	7.5	5.0×4.5	頭欠、断面方形。	第51図
鉄75	-	B区P38	SK720	2.8	3.6×3.2	断面方形。	第51図
鉄76	58	B区P38	SK720	2.4	4.0×3.5	断面方形。	第51図
鉄77	59	B区P38	SK720	6.3	5.2×4.5	頭欠、断面方形。	第51図
鉄78	42	B区Q34	SK673	4.5	7.0×2.5	断面方形。	第51図
鉄79	26	B区Q37	SK718	4.7	4.3×4.0	断面方形。	第51図
鉄80	43	B区Q39	SK744	5	3.6×2.5	断面方形。先端屈曲。銭（160～184）伴出。	第51図
鉄81	47	B区R40	SK767	5.1	5.0×4.0	断面方形。	第51図
鉄82	-	B区R40	SK767	6	4.3×4.0	断面方形。	第51図
鉄83	46	B区R40	SK767	7.6	4.5×4.2	断面方形。	第51図
鉄84	-	B区R40	SK767	8.2	3.5×3.5	断面方形。ほぼ全長に近い。	第51図
鉄85	40	B区R40	SK767	8.3	6.0×3.0	断面方形。ほぼ全長に近い。	第51図
鉄86	44	B区R40	SK767	7.9	3.3×3.0	断面方形。ほぼ全長に近い。	第51図
鉄87	45	B区R40	SK767	7.5	4.5×3.6	断面方形。ほぼ全長に近い。	第51図
参考88	-	B区N33	SK655	-	-	断面方形。	
参考89	-	B区P35	SK682	-	-	断面方形。銭（55～59）と同一遺構から出土。	
参考90	-	B区P36	SK694	-	-	断面方形。	
参考91	-	B区Q35	SK683	-	-	断面方形。	
参考92	-	B区Q40	SK766	-	-	断面方形。銭（74～85）伴出。	
鉄93	79	C区P48	SK854	4.1	3.3×3.0	頭欠、断面方形。	第51図
鉄94	80	C区P48	SK854	3.2	6.0×4.0	頭欠、断面方形。	第51図
鉄95	81	C区P48	SK854	3.9	4.5×3.5	頭欠、断面方形。	第51図
鉄96	82	C区P48	SK854	3.4	5.5×4.5	頭欠、断面方形。	第51図
鉄97	83	C区P48	SK854	3	5.0×2.8	頭欠、断面方形。	第51図
鉄98	11（-08）	C区Q44	SK831	3.9	3.5×3.0	断面方形。銭（248～253）伴出。	第51図
参考99	69	C区Q41	SK783	-	-	断面方形。銭（237～238）伴出。	
参考100	-	C区Q44	SK833	-	-	断面方形。銭（284～285）伴出。	
参考101	-	C区Q49	SK857	-	-	断面方形。	

第 21 表　出土鉄釘観察表（第 51 図）

報告番号	採取番号	発掘区　地区名	出土遺構等	銭貨名称	初鋳造年	拓本	備　　考　　欄	掲載図
銭1	1	Ａ地区Ｋ16	183号墓	洪武通寶	明1368年		裏面文字は「一銭」か？	第52図
銭2	2	Ａ地区Ｌ15	262号墓	永楽通寶	明1408年		縁辺部破損。	
銭3	3	Ａ地区Ｎ15	80号墓	□□通寶？	―		縁辺部一部破損。	
銭4	4	Ａ地区Ｎ16	92号墓	天禧通寶	北宋1017年		破損あり。	第52図
銭5	5	Ａ地区Ｎ16	88号墓ＳＸ76南	熙寧元寶	北宋1068年		縁辺破損少々	
銭6	6	Ａ地区Ｍ15	82号墓	開□通寶？ （開通□寶）	（唐 621年）		約４割欠損、南宋1259年の開慶通寶より開通元寶（開元通寶）の可能性がある。	
銭7	7	Ａ地区Ｐ27	現道路東	政和通寶	北宋1111年		文字部分一部剥離	
銭8	8	Ａ地区Ｎ16	92号墓東下	景定元寶？	南宋1260年	不可	磨耗著しい	
銭9	9	Ａ地区Ｏ15	東側斜面	元祐通寶	北宋1086年		縁辺部若干欠損	第52図
銭10	10	Ａ地区Ｌ15	ＳＫ481	嘉祐元寶？	北宋1056年		ＳＫ481は146号墓と平面上は重複。	第52図
銭11	11	Ａ地区Ｌ16	182号墓盛土内	大観通寶？	北宋1107年		約半分欠損	
銭12	12	Ａ地区Ｌ16	182号墓盛土内	大観通寶	北宋1107年			
銭13	13	Ａ地区Ｌ16	182号墓盛土内	大観通寶	北宋1107年			第52図
銭14	14	Ａ地区Ｌ16	182号墓盛土内	大観通寶	北宋1107年		文字明瞭、約４割欠損	
銭15	欠番	Ａ地区Ｍ16	184号墓ＳＸ７	判読不能	―	不可	小破片。骨片・山茶碗小破片。	
銭16	1	Ｂ地区Ｎ30	ＳＫ626南外	聖宋元寶？	北宋1101年		銭(17)と熔解付着	第52図
銭17	2	Ｂ地区Ｎ30	ＳＫ626南外	元豊通寶？	北宋1078年		銭(16)と熔解付着	第52図
銭18	3	Ｂ地区Ｎ30	ＳＫ626南外	元□通寶	（？）		元祐通寶か？磨耗著しい。	
銭19	4	Ｂ地区Ｎ30	ＳＫ626南外	治平元寶	北宋1064年			第52図
銭20	5	Ｂ地区Ｎ30	ＳＫ626北東外	判読不能	―	不可	銭(21)と熔解付着	
銭21	6	Ｂ地区Ｎ30	ＳＫ626北東外	判読不能	―	不可	銭(20)と熔解付着	
銭22	193	Ｂ地区Ｍ29	462号墓墳頂部	熙寧元寶	北宋1068年		篆書体　（墳丘Ｂ表採）	
銭23	7	Ｂ地区Ｍ29	462号墓墳頂 ＳＫ610大甕内	熙寧元寶	北宋1068年		篆書体　（墳丘Ｂ・五輪塔伴出）	
銭24	8	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	元豊通寶？	北宋1078年			
銭25	9	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	宣徳通寶	明1426～33年			第52図
銭26	10	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	永楽通寶	明1408年		銭(27)と熔解付着	
銭27	11	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	皇宋通寶？	北宋1039年		銭(26)と熔解付着	
銭28	12	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	永楽通寶	明1408年		銭(29)と熔解付着	
銭29	13	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	永楽通寶	明1408年		銭(28)と熔解付着	
銭30	14	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	永楽通寶	明1408年		銭(31)と熔解付着	
銭31	15	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	判読不能	―	不可	銭(30)と熔解付着	
銭32	16	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	永楽通寶	明1408年		銭(33)と熔解付着	
銭33	17	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	判読不能	―	不可	銭(32)と熔解付着	
銭34	18	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	祥□通寶？	北宋1009年		磨耗著しい	
銭35	19	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	永楽通寶	明1408年			
銭36	20	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	永楽通寶	明1408年			
銭37	21	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	永楽通寶	明1408年			
銭38	22	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	永楽通寶	明1408年			
銭39	23	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	□宋□寶？	（？）		剥離欠損、磨耗著しい	
銭40	24	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682の南	熙寧元寶？	(北宋1068年？)		熔解付着	
銭41	25	Ｂ地区Ｑ38	ＳＫ733	永楽通寶	明1408年			
銭42	26	Ｂ地区Ｑ38	ＳＫ733	開通元寶 (開元通寶)	唐621年		一般には開通元寶といった（網野善彦氏）。	
銭43	27	Ｂ地区Ｑ38	ＳＫ733	永楽通寶	明 1408年			
銭44	28	Ｂ地区Ｑ38	ＳＫ733	元豊通寶？	北宋 1078年		銭(45)と付着磨耗著しい	
銭45	29	Ｂ地区Ｑ38	ＳＫ733	□□□寶？	―			
銭46	30	Ｂ地区Ｑ38	ＳＫ733	判読不能	―	不可	磨耗著しい	
銭47	31	Ｂ地区Ｑ38	ＳＫ733	元祐□寶？	（？）		磨耗著しい	
銭48	32	Ｂ地区Ｑ38	ＳＫ727	永楽通寶	明 1408年			
銭49	33	Ｂ地区Ｑ38	ＳＫ727	永楽通寶	明1408年			
銭50	34	Ｂ地区Ｑ38	ＳＫ727	皇宋通寶	北宋1039年			第52図
銭51	35	Ｂ地区Ｑ38	ＳＫ727	元□通寶？	（？）		磨耗著しい	
銭52	36	Ｂ地区Ｑ38	ＳＫ731	永楽通寶	明1408年			
銭53	37	Ｂ地区Ｑ38	ＳＫ723	洪武通寶	明1368年			
銭54	38	Ｂ地区Ｑ38	ＳＫ723	熙寧□寶？	（？）		歪曲・1/4欠損	
銭55	39	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682	熙寧元寶	北宋1068年			
銭56	40	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682	皇宋通寶	北宋1039年			
銭57	41	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682	至和元寶	北宋1054～55年			第52図
銭58	42	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682	永楽通寶	明1408年		銭(59)と熔解付着・磨耗著しい。	

第 22 表　出土銭貨観察表（第 52 図）

報告番号	採取番号	発掘区　地区名	出土遺構等	銭貨名称	初鋳造年	拓本	備　　考　　欄	掲載図
銭59	43	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ682	皇宋通寶	北宋1039年			
銭60	44	Ｂ地区Ｐ39	ＳＫ736	皇宋通寶	北宋1039年			第52図
銭61	45	Ｂ地区Ｐ33	ＳＫ662	景徳元寶	北宋1004年		磨耗著しい	
銭62	46	Ｂ地区Ｐ33	ＳＫ662	判読不能	―	不可	銭(61)と熔解付着	
銭63	172	Ｂ地区Ｐ33	ＳＫ662	判読不能	―	不可	腐食細片	
銭64	47	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ762	永楽通寶	明1408年		銭(65 ～ 67)と熔解付着	第52図
銭65	48	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ762	判読不能	―	不可	銭(64、66、67)と熔解付着	
銭66	49	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ762	判読不能	―	不可	銭(64、65、67)と付着	
銭67	50	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ762	判読不能	―	不可	銭(64、65、66)と熔解付着	
銭68	51	Ｂ地区Ｐ39	ＳＫ737	景徳元寶	北宋1004年		銭(69)と熔解付着	第52図
銭69	52	Ｂ地区Ｐ39	ＳＫ737	判読不能	―	不可	銭(68)と熔解付着	
銭70	53	Ｂ地区Ｐ39	ＳＫ737	紹聖元寶？	北宋1094年		銭(71)と熔解付着	
銭71	54	Ｂ地区Ｐ39	ＳＫ737	判読不能	―	不可	銭(70)と熔解付着	
銭72	55	Ｂ地区Ｐ39	ＳＫ737	熙寧元寶？	北宋1068年		銭(73)と熔解付着	
銭73	56	Ｂ地区Ｐ39	ＳＫ737	判読不能	―	不可	銭(72)と熔解付着	
銭74	57	Ｂ地区Ｒ40	ＳＫ766	永楽通寶	明1408年			
銭75	58	Ｂ地区Ｒ40	ＳＫ766	永楽通寶	明1408年			
銭76	59	Ｂ地区Ｒ40	ＳＫ766	永楽通寶	明1408年			
銭77	60	Ｂ地区Ｒ40	ＳＫ766	永楽通寶	明1408年			
銭78	61	Ｂ地区Ｒ40	ＳＫ766	永楽通寶	明1408年			
銭79	62	Ｂ地区Ｒ40	ＳＫ766	洪武通寶	明1368年			第52図
銭80	63	Ｂ地区Ｒ40	ＳＫ766	永楽通寶	明1408年			
銭81	63	Ｂ地区Ｒ40	ＳＫ766	永楽通寶	明1408年	不可	約８割欠損	
銭82	64	Ｂ地区Ｒ40	ＳＫ766	永楽通寶	明1408年		銭(83)と熔解付着	
銭83	65	Ｂ地区Ｒ40	ＳＫ766	判読不能	―	不可	銭(82)と熔解付着	
銭84	66	Ｂ地区Ｒ40	ＳＫ766	永楽通寶	明1408年			
銭85	67	Ｂ地区Ｒ40	ＳＫ766	永楽通寶	明1408年			
銭86	69	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	元豊通寶	北宋1078年			
銭87	70	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	永楽通寶	明1408年			
銭88	153	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	永楽通寶	明1408年		半壊　銭(88 ～ 91)熔解付着	
銭89	154	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	判読不能	―	不可	銭(88 ～ 91)熔解付着	
銭90	155	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	判読不能	―	不可	銭(88 ～ 91)熔解付着	
銭91	156	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	判読不能	―	不可	銭(88 ～ 91)熔解付着	
銭92	157	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	永楽通寶	明1408年			
銭93	158	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	元豊通寶	北宋1078年			
銭94	159	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	永楽通寶	明1408年			
銭95	160	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	洪武通寶	明1368年			
銭96	161	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	天聖元寶？	北宋1023年			
銭97	162	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	永楽通寶	明1408年			
銭98	163	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	□□元寶？	―			
銭99	164	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	元□通寶？	（？）		元和通寶の篆書体か	
銭100	165	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	至和通寶	北宋1054 ～ 55年			第52図
銭101	166	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	判読不能	―	不可	銭(102)と熔解付着	
銭102	167	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	判読不能	―	不可	銭(101)と熔解付着	
銭103	欠番	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ749	□元□？	―	不可	約８割熔解欠損。不可。	
銭104	71	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ751の東側	永楽通寶	明1408年			
銭105	72	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ742	永楽通寶	明1408年			
銭106	73	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ742	永楽通寶	明1408年		約1/2欠損	
銭107	74	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ706	永楽通寶	明1408年			
銭108	75	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ706	永楽通寶	明1408年			
銭109	76	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ706	永楽通寶	明1408年			
銭110	77	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ706	永楽通寶	明1408年			第52図
銭111	78	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ706	天聖元寶	北宋1023年		銭(112)と熔解付着	第52図
銭112	79	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ706	判読不能	―	不可	銭(111)と熔解付着	
銭113	80	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ706	永楽通寶	明1408年		銭(114)と熔解付着	
銭114	81	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ706	判読不能	―	不可	銭(113)と熔解付着	
銭115	82	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ706	永楽通寶	明1408年		銭(116)と熔解付着　表面摩滅	
銭116	83	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ706	判読不能	―	不可	銭(115)と熔解付着	
銭117	84	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ706	永楽通寶	明1408年			

第 22 表　出土銭貨観察表（第 52 図）

報告番号	採取番号	発掘区　地区名	出土遺構等	銭貨名称	初鋳造年	拓本	備　　考　　欄	掲載図
銭118	85	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ706	判読不能	―	不可	磨耗著しい	
銭119	86	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ707	天聖元寶	北宋1023年		銭(120)と熔解付着	
銭120	87	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ707	天（禧）通寶	北宋1017年		銭(119)と熔解付着　天祐通寶か	
銭121	88	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ707	元□通寶？	（？）		磨耗著し元祐通寶か	
銭122	91	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ707	熙寧元寶	北宋1068年		磨耗著しい。銭(123)と付着	
銭123	92	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ707	皇宋通寶	北宋1039年		銭(122)と付着	
銭124	欠番	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ707ｾｸｼｮﾝ内	永楽通寶	明1408年		約半分欠損、破片	
銭125	欠番	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ707ｾｸｼｮﾝ内	開通元寶 （開元通寶）	唐621年		「開元通寶」とも。磨耗著しい	
銭126	89	Ｂ地区	排土中採取	判読不能	―	不可	磨耗著しい	
銭127	92	Ｂ地区Ｐ38	ＳＫ725	判読不能	―	不可	銭(128 ～ 132)熔解付着	
銭128	93	Ｂ地区Ｐ38	ＳＫ725	判読不能	―	不可	熔解付着	
銭129	94	Ｂ地区Ｐ38	ＳＫ725	判読不能	―	不可	熔解付着	
銭130	95	Ｂ地区Ｐ38	ＳＫ725	判読不能	―	不可	熔解付着	
銭131	96	Ｂ地区Ｐ38	ＳＫ725	判読不能	―	不可	熔解付着　約半分欠損	
銭132	97	Ｂ地区Ｐ38	ＳＫ725	判読不能	―	不可	熔解付着	
銭133	98	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	永楽通寶	明1408年		縁辺一部磨耗	
銭134	99	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	判読不能	―	不可	銭(133)と熔解腐着	
銭135	100	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	政和通寶	北宋1111年		篆書体。磨耗顕著、縁辺部欠損	
銭136	101	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	政和通寶	北宋1111年		磨耗顕著、縁辺部欠損	
銭137	102	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	永楽通寶	明1408年		縁辺部摩滅	
銭138	103	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	永楽通寶	明1408年		縁辺部摩滅	
銭139	104	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	永楽通寶	明1408年		約２割欠損	
銭140	141	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	判読不能	―	不可	銭(141)と熔解付着	
銭141	142	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	判読不能	―	不可	銭(140)と熔解付着	
銭142	143	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	永楽通寶	明1408年		縁辺一部欠損	
銭143	144	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	永楽通寶	明1408年			
銭144	145	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	永楽通寶	明1408年		縁辺一部欠損	
銭145	146	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	判読不能	―	不可	銭(144・146・147)と熔解付着	
銭146	147	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	判読不能	―	不可	銭(144・145・147)と熔解付着	
銭147	148	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	判読不能	―	不可	銭(144・145・146)と熔解付着	
銭148	149	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	永楽通寶	明1408年		熔解歪曲7 ～ 8割欠損	
銭149	150	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	永楽通寶	明1408年		熔解歪曲7 ～ 8割欠損	
銭150	欠番	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	熙寧元寶	北宋1068年		約8割欠損	
銭151	欠番	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ743	開通元寶 （開元通寶）	唐621年		約3 ～ 4割欠損	
銭152	105	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ751	祥符通寶	北宋1009年			第52図
銭153	106	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ751	淳化元寶	北宋990年		銭(154)と熔解付着	第52図
銭154	107	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ751	□□□寶	―		銭(153)と熔解付着	
銭155	108	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ751	判読不能	―	不可		
銭156	109	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ751	判読不能	―	不可	約半分欠失	
銭157	140	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ751	永楽通寶	明1408年		約半分欠失	
銭158	152	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ751	永楽通寶	明1408年		腐食一部破損	
銭159	178	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ751ｾｸｼｮﾝ内	永楽通寶	明1408年		約３割欠損	
銭160	90	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	永楽通寶	明1408年		縁辺部破損	写真第12図
銭161	111	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	熙寧元寶？	北宋1068年		磨耗著しい	写真第12図
銭162	112	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	紹聖元寶？	北宋1094年		磨耗著しい	写真第12図
銭163	113	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	皇宋通寶？	北宋1039年		磨耗著しい	写真第12図
銭164	114	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	紹聖元寶	北宋1094年			第52図
銭165	115	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	聖宋元寶	北宋1101年			
銭166	116	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	祥符元寶	北宋1008年			
銭167	117	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	元豊通寶	北宋1078年			
銭168	118	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	至正通寶	元1341年			
銭169	119	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	永楽通寶	明1408年			写真第12図
銭170	120	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	永楽通寶	明1408年			写真第12図
銭171	121	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	紹聖元寶？	（？）		磨耗著しい	写真第12図
銭172	122	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	判読不能	―	不可	銭(173)と熔解付着	写真第12図
銭173	123	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	判読不能	―	不可	銭(172)と熔解付着	写真第12図
銭174	124	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	永楽通寶	明1408年			写真第12図
銭175	125	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	永楽通寶	明1408年			写真第12図

第 22 表　出土銭貨観察表（第 52 図）

報告番号	採取番号	発掘区　地区名	出土遺構等	銭貨名称	初鋳造年	拓本	備　　考　　欄	掲載図
銭176	126	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	永楽通寶	明1408年			写真第12図
銭177	127	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	永楽通寶	明1408年			写真第12図
銭178	128	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	永楽通寶	明1408年			写真第12図
銭179	129	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	皇宋通寶？	北宋1039年		磨耗著しい	写真第12図
銭180	130	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	永楽通寶	明1408年		「永」字の傍に径１mmの穿孔あり	写真第12図
銭181	131	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	至和元寶？	北宋1054～55年		磨耗著しい	写真第12図
銭182	132	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	永楽通寶	明1408年			写真第12図
銭183	133	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	永楽通寶	明1408年			写真第12図
銭184	134	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ744	永楽通寶	明1408年		縁辺部破損	写真第12図
銭185	137	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ747	永楽通寶	明1408年			
銭186	138	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ747	永楽通寶	明1408年			
銭187	139	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ747	天禧通寶	北宋1017年			
銭188	欠番	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ747	熙寧元寶	北宋1068年			
銭189	欠番	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ747	判読不能	―	不可		
銭190	151	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ748	永楽通寶	明1408年		約３割欠損	
銭191	179	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ748ｾｸｼｮﾝ	永楽通寶	明1408年		縁辺部欠損	
銭192	168	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ764の北側	永楽通寶	明1408年		磨耗著しい、一部欠損。	
銭193	169	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ764の北側	永楽通寶	明1408年		文字明瞭、銭194と付着。	
銭194	170	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ764の北側	判読不能	―	不可	銭193と熔解付着	
銭195	171	Ｂ地区不詳	排土中採取	永楽通寶	明1408年		約３割欠損	
銭196	173	Ｂ地区Ｒ39	ＳＫ755	永楽通寶	明1408年		文字明瞭	
銭197	178	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ704ｾｸｼｮﾝ内	元豊通寶	北宋1078年		縁辺部少々欠損	
銭198	179	Ｂ地区Ｐ37	ＳＫ704ｾｸｼｮﾝ内	□元□寶	（？）		約半分欠損	
銭199	180	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ681	永楽通寶	明1408年		熔解付着	
銭200	181	Ｂ地区Ｐ35	ＳＫ681	咸平元寶	北宋998年		熔解付着	第52図
銭201	182	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ763	永楽通寶	明1408年		遺存度良好	
銭202	183	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ763	永楽通寶	明1408年		遺存度良好	
銭203	184	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ763	永楽通寶	明1408年		遺存度良好	
銭204	185	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ763	永楽通寶	明1408年		約４割欠損	
銭205	186	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ763	永楽通寶	明1408年		約９割欠損	
銭206	187	Ｂ地区Ｑ40	ＳＫ763	嘉祐通寶？	北宋1056年		磨耗著しい	
銭207	187	Ｂ地区Ｑ39	ＳＫ752	永楽通寶	明1408年		縁辺一部欠損	
銭208	188	Ｂ地区Ｎ30	ＳＫ623	□宋元寶	（？）		銭209と熔解付着　磨耗著しい	
銭209	189	Ｂ地区Ｎ30	ＳＫ623	判読不能	―	不可	銭208と熔解付着	
銭210	190	Ｂ地区Ｎ30	ＳＫ624	判読不能	―	不可	熔解付着	
銭211	191	Ｂ地区Ｎ30	ＳＫ624	判読不能	―	不可	熔解付着	
銭212	192	Ｂ地区Ｎ30	ＳＫ624	判読不能	―	不可	熔解付着	
銭213	欠番	Ｂ地区Ｑ36	ＳＫ699	皇宋通寶？	北宋039年		摩滅著しい	
銭214	欠番	Ｂ地区Ｑ36	ＳＫ699	永楽通寶	明1408年		文字明瞭	
銭215	欠番	Ｂ地区Ｑ36	ＳＫ699	元豊通寶	北宋1078年		文字摩滅、付着	
銭216	欠番	Ｂ地区Ｑ36	ＳＫ699	判読不能	―	不可	熔解付着	
銭217	欠番	Ｂ地区	不明土壙	紹定通寶	南宋1228年			第52図
銭218	欠番	Ｂ地区	不明土壙	太平通寶	北宋976年			第52図
銭219	欠番	Ｂ地区	不明土壙	元豊通寶？	北宋1078年			
銭220	欠番	Ｂ地区	不明土壙	熙寧元寶？	北宋1068年		磨耗著しい	
銭221	欠番	Ｂ地区	不明土壙	判読不能	―	不可	熔解付着	
銭222	欠番	Ｂ地区	不明土壙	判読不能	―	不可	熔解付着	
銭223	欠番	Ｂ地区	不明土壙	判読不能	―	不可	熔解付着	
銭224	200	Ｃ地区Ｑ42	ＳＫ804	元符通寶	北宋1098年		篆書体	第52図
銭225	201	Ｃ地区Ｑ42	ＳＫ804	元符通寶	北宋1098年		篆書体（模造銭ではないか？）	
銭226	202	Ｃ地区Ｑ42	ＳＫ804	皇宋通寶	北宋1039年		文字潰れあり	
銭227	207	Ｃ地区Ｑ42	ＳＫ804	元豊□□	北宋1078年		約５割欠失（元豊通寶か）	
銭228	243	Ｃ地区Ｑ42	ＳＫ804	判読不能	―	不可	約８割欠失、砕片・磨耗著しい	
銭229	203	Ｃ地区Ｑ42	ＳＫ807	永楽通寶	明1408年			
銭230	204	Ｃ地区Ｑ42	ＳＫ807	景祐元寶	北宋1034年			
銭231	205	Ｃ地区Ｑ43	ＳＫ807	判読不能	―	不可	「□□通寶」か？	
銭232	206	Ｃ地区Ｑ43	ＳＫ807	永楽通寶	明1408年			
銭233	218	Ｃ地区Ｑ43	ＳＫ807	永楽通寶	明1408年			
銭234	219	Ｃ地区Ｑ43	ＳＫ807	永楽通寶	明1408年			

第 22 表　出土銭貨観察表（第 52 図）

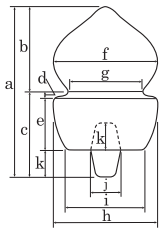
報告番号	採取番号	発掘区　地区名	出土遺構等	銭貨名称	初鋳造年	拓本	備　　考　　欄	掲載図
銭235	220	C地区Q43	SK807	政和通寶	北宋1111年			第52図
銭236	228	C地区Q43	SK807	天聖元寶	北宋1023年			
銭237	208	C地区Q41	SK783	永楽通寶	明1408年			
銭238	209	C地区Q41	SK783	永楽通寶	明1408年		（模造銭ではないか？）	
銭239	210	C地区Q42	SK808	判読不能	―	不可	銭(239～244)　6枚熔解付着	
銭240	211	C地区Q42	SK808	判読不能	―	不可	銭(239～244)　6枚熔解付着	
銭241	212	C地区Q42	SK808	判読不能	―	不可	銭(239～244)　6枚熔解付着	
銭242	213	C地区Q42	SK808	判読不能	―	不可	銭(239～244)　6枚熔解付着	
銭243	214	C地区Q42	SK808	判読不能	―	不可	銭(239～244)　6枚熔解付着	
銭244	215	C地区Q42	SK808	判読不能	―	不可	銭(239～244)　6枚熔解付着	
銭245	216	C地区Q41	SK791	判読不能	―	不可	約５割欠失	
銭246	236	C地区Q41	SK791	永楽通寶	明1408年		割れ、一部欠失	
銭247	217	C地区Q41	SK784	熙寧元寶	北宋1068年			第52図
銭248	221	C地区Q44	SK831	熙寧元寶	北宋1068年			
銭249	222	C地区Q44	SK831	元豊通寶	北宋1078年			
銭250	223	C地区Q44	SK831	紹聖元寶	北宋1094年		篆書体	
銭251	224	C地区Q44	SK831	紹聖元寶	北宋1094年		真書体	
銭252	225	C地区Q44	SK831	皇宋通寶	北宋1039年			
銭253	226	C地区Q44	SK831	祥符元寶	北宋1008年			第52図
銭254	227	C地区Q43	SK818・822間	永楽通寶	明1408年		約５割欠失	
銭255	229	C地区Q48	SK853	判読不能	―	不可	銭(256)と熔解腐着　約３割欠	
銭256	230	C地区Q48	SK853	判読不能	―	不可	銭(255)と熔解腐着　約3割欠	
銭257	231	C地区Q41	SK790	判読不能	―	不可	銭(257～260)　4枚熔解付着	
銭258	232	C地区Q41	SK790	判読不能	―	不可	銭(257～260)　4枚熔解付着	
銭259	233	C地区Q41	SK790	判読不能	―	不可	銭(257～260)　4枚熔解付着	
銭260	234	C地区Q41	SK790	判読不能	―	不可	銭(257～260)　4枚熔解付着	
銭261	235	C地区Q43	SK829	判読不能	―	不可	約５割欠失	
銭262	237	C地区Q41	不明	熙寧元寶	北宋1068年		磨耗著しい	
銭263	238	C地区Q41	SK835	開通元寶 （開元通寶）	唐621年		縁辺一部欠損	第52図
銭264	239	C地区Q41	SK835	永楽通寶	明1408年			
銭265	240	C地区Q41	SK835	治平元寶	北宋1064年		約６割欠失、文字配列から判読	
銭266	241	C地区Q41	SK835	元祐通寶？	北宋1086年		約８割欠失、元の字形から推測	
銭267	242	C地区Q41	SK834	元豊通寶	北宋1078年			
銭268	244	C地区N43	表土下層	永楽通寶	明1408年		加熱による歪み	
銭269	245	C地区Q42	SK818	永楽通寶	明1408年		銭(270)と熔解付着	
銭270	246	C地区Q42	SK818	永楽通寶	明1408年		銭(269)と熔解付着	
銭271	247	C地区Q42	SK818	永楽通寶	明1408年		約１割欠失	
銭272	248	C地区Q42	SK818	元祐通寶	北宋1086年		銭(273)と熔解付着	
銭273	249	C地区Q42	SK818	天聖元寶	北宋1023年		銭(272)と熔解付着	
銭274	250	C地区Q42	SK818	洪武通寶	明1368年			
銭275	251	C地区Q42	SK818	判読不能	―	不可	銭(276)と熔解付着	
銭276	252	C地区Q42	SK818	判読不能	―	不可	銭(275)と熔解付着	
銭277	253	C地区Q42	SK818	判読不能	―	不可	銭(278)と熔解付着	
銭278	254	C地区Q42	SK818	判読不能	―	不可	銭(277)と熔解付着	
銭279	265	C地区Q43	SK818	熙寧元寶	北宋1068年		割れ、一部欠	
銭280	266	C地区Q43	SK818	元符通寶	北宋1098年		割れ、約２割欠	
銭281	267	C地区Q43	SK818	判読不能	―	不可	破片、磨耗著しい	
銭282	255	C地区N41	淡黄褐色土	永楽通寶	明1408年		割れ、約２割欠失	
銭283	256	C地区N41	淡黄褐色土	永楽通寶	明1408年		約５割欠失	
銭284	257	C地区Q44	SK833	至和通寶	北宋1054～55年		銭(285)と熔解付着、一部欠	
銭285	258	C地区Q44	SK833	祥符元寶	北宋1008年		銭(284)と熔解付着	
銭286	259	C地区Q43	SK826	熙寧元寶？	宋1068年		銭(287)と熔解付着	
銭287	260	C地区Q43	SK826	判読不能	―	不可	銭(286)と熔解付着	
銭288	261	C地区Q43	SK826	永楽通寶	明1408年			
銭289	262	C地区Q43	SK826	熙寧元寶？	北宋1068年			
銭290	263	C地区Q43	SK826	永楽通寶	明1408年			
銭291	264	C地区Q43	SK826	景祐元寶	北宋1034年			第52図

注意：銭貨名称で判読できないものは□を、比較的可能性のあるものは「？」印を以て示した。全く判読出来ないものは「判読不能」とした。拓本の全てを図版に掲載したわけではないことをお断りしておく。

第 22 表　出土銭貨観察表（第 52 図）

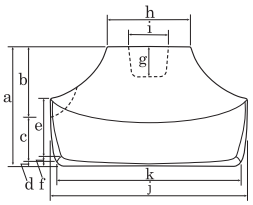
石塔凡例

空風輪



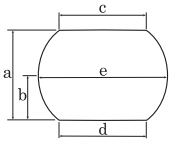
a 全高
b 空輪高
c 風輪高＋枘長
d 頸部高
e 風輪高－頸部高
f 空輪最大径
g 風輪上部径
h 風輪最大径
i 風輪底部径
j 枘部径
k 枘長

火輪



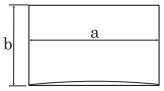
a 全高
b 全高一軒厚中央
c 軒厚中央
d 軒厚中央反り
e 軒厚隅部
f 軒部隅反り
g 枘穴深さ
h 笠上部幅
i 枘穴上部径
j 軒部上端径
k 軒部下端径

水輪



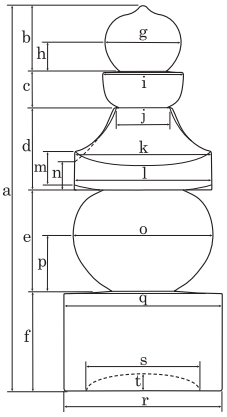
a 全高
b 最大径位
c 上部径
d 下部径
e 最大径

地輪



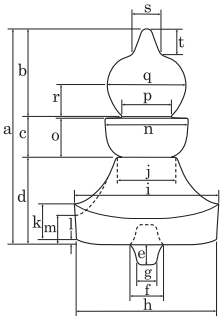
a 横幅
b 全高

一石五輪塔



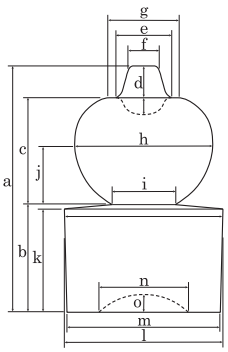
a 全高
b 空輪高
c 風輪高
d 火輪高
e 水輪高
f 地輪高
g 空輪最大径
h 空輪最大径位
i 風輪最大径
j 火輪上部径
k 火輪軒部上端径
l 火輪軒部下端径
m 火輪軒厚隅部
n 火輪軒厚中央
o 水輪最大径
p 水輪最大径位
q 地輪上部径
r 地輪下部径
s 抉り穴最大径
t 抉り穴深さ

空風火輪三輪一石



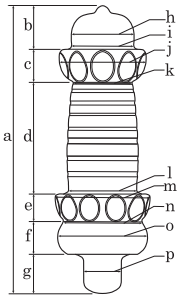
a 全高
b 空輪高
c 風輪高
d 火輪高
e 火輪枘（穴）高
f 火輪枘（穴）最大径
g 火輪枘（穴）最小径
h 火輪軒部下端径
i 火輪軒部上端径
j 火輪上部径
k 火輪軒厚隅部
l 火輪軒部隅反り
m 火輪軒厚中央
n 風輪最大径
o 風輪高－頸部高
p 風輪上部径
q 空輪最大径
r 空輪最大径位
s 空輪突起部最大径
t 空輪突起部高

水地二輪一石



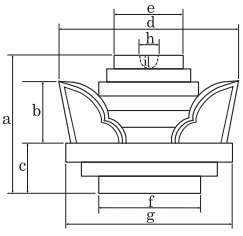
a 全高
b 地輪高
c 水輪高
d 水輪枘高
e 水輪枘（穴）最大径
f 水輪枘（穴）最小径
g 水輪上部径
h 水輪最大径
i 水輪下部径
j 水輪最大径位
k 地輪角部高
l 地輪上部径
m 地輪下部径
n 抉り穴最大径
o 抉り穴深さ

相輪



a 全高
b 宝珠高
c 上請花高
d 九輪高
e 下請花高
f 伏鉢高
g 枘長
h 宝珠最大径
i 宝珠下部径
j 上請花最大径
k 九輪上部径
l 九輪下部径
m 下請花最大径
n 伏鉢上部径
o 伏鉢最大径
p 枘部径

笠



a 全高
b 隅飾り高
c 軒厚＋下段形高
d 隅飾り先端間の幅
e 上段形上部幅
f 下段形下部幅
g 軒下幅
h 枘穴上部径
i 枘穴深さ

第 23 表　石塔計測部位凡例

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	l	j	k	
A0001	21	空輪	L13	—	(13.7)	—	—	—	13.3	10.4	—	—	—	—	表採、砂岩、空輪突起欠・風輪以下欠失。
A0002	104	空輪	L16 196号墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	磨耗顕著計測不可、空輪突起部も。
A0003	139	空輪	K21 365号墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	先端部のみ。欠損顕著。計測不可。
A0004	150	空輪	L16 196号墓	—	(11.2)	—	—	—	(10.2)	—	—	—	—	—	破片、縦方向に半截。
A0005	348	空(？)	N15 76号墓	—	(11.8)	—	—	—	(10.0)	—	—	—	—	—	損壊顕著。
A0006	467	空輪	M24	—	12.4	—	—	—	12.8	8.8	—	—	—	—	空輪を一石造、A0014風輪とセットか。第53図
A0007	472	空輪	M24 423号墓	—	(9.0)	—	—	—	(10.9)	(8.1)	—	—	—	—	
A0008	678	空輪	P13 67号墓	—	10.2	—	—	—	14.5	12.4	—	—	—	—	梵字入、連結突起。第53図
A0009	722	空輪	P11	—	(12.6)	—	—	—	(10.0)	(8.1)	—	—	—	—	縦損壊4分の1残。
A0010	722	空輪	P11	—	(10.4)	—	—	—	(10.0)	(5.3)	—	—	—	—	縦方向に半壊。
A0011	104	風輪	L16 196号墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	磨耗顕著、実測不可。第53図
A0012	150	風輪	L16 196号墓	—	(9.8)	—	—	—	(10.5)	—	—	—	—	—	破片、縦方向に半截。
A0013	369	風輪	K14 149号墓	—	—	4.1	—	—	—	—	9.0	7.3	—	—	
A0014	461	風輪	M24	—	—	12.2		8.1	—	—	14.7	10.7	6.3	4.1	風輪一石造、A0006空輪とセットか。第53図
A0015	471	風輪	M24	—	—	(8.5)	(0.7)	(5.9)	—	(7.7)	(10.9)	(7.4)	(5.2)	(1.9)	
A0016	5	空風輪	I14	(17.8)	(8.4)	9.4	0.9	6.7	11.2	8.2	12.3	8.6	5.2	2.6	表採。第53図
A0017	11	空風輪	J14	(20.1)	(9.1)	11.0	0.2	6.8	11.4	10.3	13.5	8.6	5.5	4.0	表採。
A0018	13	空風輪	J20	(21.7)	(10.7)	(11.0)	1.6	8.0	12.4	9.9	13.6	8.6	6.0	(1.4)	表採、突起欠、花崗閃緑岩。第53図
A0019	18	空風輪	J15	(15.5)	(8.0)	(8.6)	1.2	7.4	11.2	8.4	12.0	8.8	—	—	表採、風輪下部の連結突起欠損。
A0020	35	(空)風輪	M24	(9.3)	(2.6)	(6.8)	0.9	5.9	—	(8.5)	11.7	7.5	—	—	表採、空輪欠、風輪小欠。
A0021	38	空風輪	L16	(18.6)	(11.4)	(7.2)	(0.5)	(6.7)	(13.9)	(11.7)	(12.3)	(10.0)	—	—	半壊、突起欠。
A0022	42	空風輪	N16	19.5	9.8	9.7	0.5	5.8	11.3	9.6	12.9	8.1	5.2	3.4	斜面表採。
A0023	45	空風輪	L16	(12.9)	(5.5)	(7.4)	1.2	4.7	9.0	7.0	9.9	6.4	3.9	(1.5)	突起欠、下部欠。
A0024	47	空風輪	L13	(19.3)	(8.6)	10.7	0.2	6.7	11.8	9.2	13.6	8.3	5.2	3.8	半壊、突起欠。
A0025	59	空風輪	M16 186号墓	(14.8)	(8.3)	6.5	1.4	5.1	10.8	7.3	10.6	(6.3)	—	—	表採、突起欠、風輪半壊。
A0026	60	空風輪	L17	19.0	9.9	9.1	0.6	5.9	11.8	9.1	13.6	10.3	4.4	2.6	表採。第53図
A0027	63	空風輪	K17 195号墓	(19.4)	(9.8)	(9.6)	0.9	6.4	13.8	11.2	14.5	9.1	4.8	(2.3)	表採、空輪突起欠、風輪下部の連結用突起破損。
A0028	64	空風輪	K17 195号墓	(15.2)	(6.7)	(8.4)	0.7	5.9	9.8	8.6	11.7	7.6	4.1	(1.8)	表採、空輪突起欠、風輪下部の連結用突起磨耗。第53図
A0029	66	空風輪	O23 244号墓	21.4	10.5	10.9	0.7	6.5	12.3	9.4	12.9	7.8	5.3	3.7	塚下斜面転倒。
A0030	93	空風輪	K17	(15.4)	(7.1)	(8.3)	0.7	6.3	10.5	8.6	11.5	7.1	(4.3)	(1.3)	空輪突起欠、風輪下部連結突起欠損。
A0031	103	空風輪	L16 196号墓	(14.4)	(8.2)	(6.2)	(0.6)	(5.6)	(11.1)	(10.5)	(12.4)	(11.4)	—	—	2/3欠失。
A0032	107	空風輪	J18 293号墓	(17.9)	(8.9)	9.0	0.7	5.2	9.8	8.0	11.3	8.7	6.2	3.1	第53図
A0033	108	空風輪	I18	(12.9)	(7.6)	5.2	0.7	4.5	9.6	7.4	10.6	7.8	—	—	梵字入り、小欠。第53図
A0034	109	空風輪	J18 292号墓	(19.9)	(10.4)	(9.5)	2.0	(7.5)	(13.5)	10.7	(15.3)	(12.9)	—	—	空輪突起欠。
A0035	110	空風輪	J18 292号墓	(14.4)	(7.3)	(7.1)	0.8	3.9	9.9	8.6	11.1	7.0	4.4	(2.4)	第53図
A0036	112	空風輪	J19 306号墓	(15.8)	(7.0)	(8.8)	0.6	6.2	9.4	7.4	10.8	7.4	4.2	2.0	他に空輪突起部。第53図
A0037	116	空風輪	J19	(18.4)	(8.4)	10.0	1.1	5.4	11.4	9.9	13.1	8.4	4.7	3.5	空輪突起欠。第53図
A0038	118	空風輪	J19	(18.5)	(9.3)	9.2	0.8	5.5	11.4	10.0	13.4	8.2	3.4	2.9	空輪突起欠。第53図
A0039	119	空風輪	J19 320号墓	(18.1)	(8.1)	(10.0)	0.6	(5.6)	11.0	9.0	(12.0)	(7.9)	5.1	(3.8)	空輪突起欠。第53図
A0040	124	空風輪	J20 328号墓	(15.1)	(7.5)	(7.6)	1.0	(4.8)	(9.6)	(8.0)	(10.5)	(7.3)	(4.6)	(1.8)	空輪突起欠、風輪下部連結突起欠損。
A0041	125	空風輪	J20 340号墓	(17.9)	(7.5)	10.4	0.6	5.6	(9.2)	8.3	10.6	7.3	4.8	4.2	空輪突起欠。第53図
A0042	126	空風輪	J20 340号墓	(20.6)	(10.1)	10.5	0.7	6.1	12.1	9.9	(13.2)	8.8	5.7	3.7	空輪突起欠。第53図
A0043	127	空風輪	K20	(22.3)	(13.7)	(8.6)	(1.2)	(7.4)	(12.7)	(11.4)	(13.3)	(9.1)	—	—	空輪突起欠、全体1/3縦方向に半截。
A0044	128	空風輪	K20 341号墓	(17.9)	(8.1)	9.7	0.6	5.7	11.5	9.0	13.2	8.0	5.3	3.4	空輪突起欠。第53図
A0045	129	空風輪	K20 341号墓	(15.7)	(7.0)	(8.7)	(0.7)	(5.9)	(11.1)	(10.2)	(12.0)	(7.7)	(5.3)	(2.1)	空輪突起摩滅、風輪下部連結突起欠。
A0046	130	空風輪	K20	(13.7)	(6.7)	(7.0)	(0.9)	(4.3)	(9.1)	(8.1)	(10.2)	(7.3)	(4.5)	(1.8)	空・風輪突起欠。第53図

第 24 表　A地区組立式五輪塔計測値一覧表（第 52 ～ 56 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	
A0047	131	空風輪	K20	(13.3)	(6.9)	(6.4)	(0.7)	(4.5)	(10.3)	(9.0)	(11.1)	(8.3)	(4.4)	(1.1)	空・風輪突起欠。第53図
A0048	133	空風輪	K20	(17.4)	(8.1)	(9.2)	(0.4)	(6.0)	(11.4)	9.7	(12.3)	(7.6)	4.5	(2.8)	空・風輪突起欠。
A0049	134	空風輪	K20	(18.0)	(9.7)	(8.3)	1.2	(5.1)	(12.3)	9.5	(12.2)	10.5	4.4	(2.0)	空・風輪突起欠。第53図
A0050	135	空風輪	J20 339号墓	(16.3)	(9.0)	(7.3)	1.4	(5.9)	11.8	10.0	13.7	9.0	—	—	第53図
A0051	138	空風輪	J21 338号墓	(15.2)	(6.3)	(8.9)	1.0	(5.9)	(9.2)	7.2	(10.8)	(7.3)	(5.0)	2.0	空・風輪突起欠、空輪部縦1/4欠。
A0052	140	空風輪	K21	(18.5)	(7.7)	(10.8)	(0.7)	(6.5)	9.5	8.6	(12.2)	7.5	4.7	(3.6)	空・風輪突起欠。
A0053	142	空風輪	K22 365号墓	(17.8)	(9.1)	(8.7)	(1.4)	(6.0)	12.4	10.2	14.1	8.2	5.4	(1.3)	空・風輪突起欠。第53図
A0054	144	空風輪	K17	(15.1)	(8.0)	(7.1)	(1.4)	(5.7)	12.5	10.6	13.4	8.5	—	—	空・風輪突起欠。第53図
A0055	146	空風輪	J17	(15.5)	(6.8)	(8.7)	0.8	(5.8)	9.7	8.1	10.8	7.4	4.2	(2.1)	空・風突起欠。第53図
A0056	153	空風輪	K18	(20.6)	(10.1)	10.5	0.2	6.6	11.3	8.9	13.5	8.8	5.1	3.7	空輪突起欠。第53図
A0057	154	空風輪	18 295号墓	(20.5)	(9.9)	10.6	0.6	6.1	15.5	9.4	11.6	7.6	4.9	3.9	空輪突起欠。
A0058	164	空風輪(a)	N15	(25.1)	(11.8)	13.3	0.5	7.5	14.8	12.4	16.4	9.6	8.1	5.3	A0059とは別個体。第53図
A0059	164	空風輪(b)	N15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	A0058とは別個体、計測不可。
A0060	171	空風輪	N15	15.2	7.8	7.4	6.2	1.2	10.2	7.5	12.1	11.0	—	—	風輪下部欠損。
A0061	182	空風輪	O15 76号墓	(12.8)	(7.4)	(5.4)	0.6	(4.9)	—	—	—	—	—	—	縦方向に半截。
A0062	202	空風輪	O14 東斜面	(17.0)	(7.1)	(9.9)	1.0	6.4	10.8	8.0	12.0	8.4	5.4	2.5	第53図
A0063	226	空風輪	N16 87号墓	(17.8)	(8.4)	(9.4)	0.6	5.8	10.0	8.4	11.7	7.1	5.2	(3.0)	第53図
A0064	230	空風輪	N16 87号墓	(18.5)	(7.4)	(11.1)	1.0	6.3	(10.9)	8.3	11.3	7.3	4.9	(3.8)	空輪縦方向に半截。
A0065	249	空風輪	N16 92号墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	計測不可。
A0066	262	空風輪	N15 80号墓	(17.0)	(8.3)	(8.7)	0.9	(5.6)	10.7	8.7	11.7	7.5	(5.4)	(2.2)	
A0067	266	空風輪	N17	20.4	9.6	10.8	0.6	6.0	11.8	10.2	13.4	9.0	6.2	4.4	第53図
A0068	269	空風輪	N18	20.0	9.5	10.5	0.5	5.8	11.9	10.2	13.3	9.3	6.0	4.2	
A0069	273	空風輪	N18	(18.1)	(7.9)	(10.2)	0.7	5.5	10.7	9.4	12.5	8.0	5.1	4.0	第53図
A0070	281	空風輪	M18	20.3	9.9	10.5	0.4	6.2	12.1	10.6	13.4	7.9	5.8	3.9	第53図
A0071	283	空風輪	M18 201号墓	(17.6)	(9.1)	8.4	0.3	8.1	14.2	13.5	17.6	10.9	—	—	風輪底平坦。第53図
A0072	284	空風輪	M18 201号墓	(15.6)	(7.8)	(7.8)	0.1	(6.0)	9.6	7.9	(11.5)	(9.9)	(5.7)	(1.7)	空・風突起欠損。
A0073	287	空風輪	M17	21.7	12.7	9.0	0.9	8.1	15.0	12.4	17.7	12.5	—	—	第53図
A0074	288	空風輪	M17	19.7	8.9	10.8	1.1	7.9	11.8	9.8	16.3	13.7	8.1	1.8	第53図
A0075	289	空風輪	M17	18.0	9.7	8.3	1.0	7.3	11.8	8.1	12.8	8.6	—	—	第53図
A0076	298	空風輪	N15 80号墓	(13.9)	6.3	(7.6)	(0.7)	5.5	9.2	8.4	(10.5)	6.5	(3.8)	(1.4)	風輪の連結用突起欠損。第53図
A0077	301	空風輪	N16	(19.8)	(7.7)	12.1	0.5	7.0	11.4	10.5	14.7	8.5	7.2	4.6	第53図
A0078	308	空風輪	N16	(19.3)	(11.0)	8.4	0.2	8.2	13.1	10.7	14.5	11.8	2.3	2.3	第53図
A0079	311	空風輪	N19	19.9	9.5	10.4	1.1	5.6	12.0	10.1	13.0	8.6	4.7	3.7	第53図
A0080	312	空風輪	N19	(15.1)	(6.2)	8.8	0.5	6.5	8.6	7.0	10.5	7.3	5.3	1.8	第53図
A0081	313	空風輪	M16	(18.8)	(12.1)	6.7	0.5	6.2	(12.3)	10.0	15.2	11.5	—	—	空輪4分の3欠損。
A0082	320	空風輪	R12 33号墓	14.5	6.7	7.8	0.3	5.1	8.1	6.9	9.4	6.7	4.2	2.4	第53図
A0083	321	空風輪	R12 33号墓	18.1	8.5	9.6	0.6	6.0	12.1	10.3	12.6	7.9	5.3	3.0	第53図
A0084	339	空風輪	I15	(20.5)	(9.0)	11.5	1.2	6.9	11.9	9.1	13.6	8.9	5.5	3.4	空輪突起小欠。
A0085	341	空風輪	O14	(15.5)	(6.8)	(7.8)	1.0	5.6	10.0	8.1	11.0	6.3	4.2	2.1	
A0086	354	空風輪	M14 128号墓	(16.4)	(10.4)	(6.0)	0.1	(5.9)	12.7	(10.6)	(14.7)	(14.2)	—	—	風輪半壊。
A0087	362	空風輪	L14	(14.9)	(6.6)	(8.3)	0.2	(8.1)	(11.8)	10.2	(12.9)	(12.0)	—	—	空輪半壊。
A0088	363	空風輪	L14	(14.8)	(9.0)	(5.8)	0.8	(5.0)	10.8	9.9	(13.1)	(10.0)	—	—	第53図
A0089	367	空風輪	K14 153号墓	19.8	8.1	11.7	1.5	6.9	11.4	8.6	12.7	8.6	3.9	3.2	
A0090	372	空風輪	K14 148号墓	16.4	8.2	8.2	0.7	4.6	10.1	8.3	11.4	7.8	4.9	2.9	
A0091	373	空風輪(a)	J14 163号墓	20.9	9.3	11.5	0.5	7.4	11.7	8.8	13.1	7.7	6.1	3.6	A0092とは別個体。第53図
A0092	373	空風輪(b)	J14 163号墓	16.6	7.8	8.8	1.0	5.0	10.2	8.2	11.2	7.4	3.8	2.8	A0091とは別個体(連結部一部欠損)。
A0093	379	空風輪	J14 167号墓西	(15.5)	(7.0)	(8.5)	0.6	5.1	(9.3)	7.4	10.3	7.6	5.1	(2.8)	169号墓に近接して出土。
A0094	391	空風輪	I15 175号墓	17.2	9.2	8.0	0.4	5.2	10.4	8.4	11.2	6.6	4.4	2.4	第53図
A0095	397	空風輪	I15	(15.0)	(9.2)	(5.8)	(0.8)	(5.0)	(14.3)	(12.2)	(13.2)	(9.7)	—	—	縦方向に半截、一石造か。

第 24 表　A地区組立式五輪塔計測値一覧表（第 52 ～ 56 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	l	j	k	
A0096	409	空風輪	N25 446号墓	(14.1)	(7.6)	(6.5)	(0.4)	(5.5)	(10.3)	(9.3)	(11.8)	(8.1)	(5.3)	(0.6)	一部損壊。
A0097	410	空風輪	N25 446号墓	(11.8)	(6.6)	(5.2)	(0.4)	(4.8)	(10.8)	(9.6)	(11.5)	(10.1)	—	—	半壊。
A0098	412	空風輪	N25 449号墓	(23.1)	(11.3)	11.8	1.1	6.7	15.2	11.9	16.1	9.6	6.4	4.0	一部欠損。
A0099	416	空風輪	N25 454号墓	(14.3)	(7.8)	(6.5)	0.8	(5.7)	10.9	(8.3)	(11.6)	(7.3)	—	—	風輪縦方向に半截。
A0100	427	空風輪	N25 452号墓	(15.6)	(7.6)	(8.0)	0.6	(4.2)	(10.0)	(8.1)	(10.4)	(8.2)	5.1	(3.2)	
A0101	431	空風輪	O26 456号墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	計測不可。
A0102	434	空風輪	O26 456号墓	(16.1)	7.9	(8.2)	0.9	(5.6)	10.2	8.8	11.6	7.7	4.6	(1.7)	風輪底部の連結用突起欠。
A0103	451	空風輪	M24 416号墓	(20.1)	(8.8)	(11.3)	1.0	6.0	12.7	10.7	13.8	9.4	5.9	(4.3)	
A0104	452	空風輪	M24 416号墓	23.5	11.8	11.7	0.5	7.1	12.1	9.8	13.7	9.4	5.2	4.1	
A0105	453	空風輪	M24 416号墓	(16.0)	(7.8)	(8.2)	0.6	(5.5)	(9.5)	(7.4)	(10.9)	(7.3)	(4.5)	(2.1)	縦方向に半截。
A0106	454	空風輪	M24 415号墓	(13.1)	(7.5)	(5.6)	0.6	(5.0)	(7.8)	(6.5)	(9.3)	(6.4)	—	—	
A0107	455	(空)風輪	M24 415号墓近接	—	—	(6.1)	(0.5)	(4.8)	—	—	(8.9)	(6.7)	(3.9)	(0.8)	空輪欠、縦方向に半截。
A0108	456	空風輪	M24 415号墓	(13.5)	(6.2)	(7.3)	(1.3)	(5.3)	(9.6)	(7.7)	(10.6)	(6.6)	(4.2)	(0.7)	
A0109	458	空風輪	M24	(15.7)	(9.1)	(6.6)	0.3	5.9	10.9	8.5	11.8	8.1	(5.3)	(0.4)	
A0110	463	空風輪	M24	(16.8)	(8.1)	(8.7)	1.1	(6.0)	10.8	9.4	(12.3)	7.8	(4.5)	(1.6)	
A0111	464	空風輪	M24	(16.2)	(7.3)	(8.9)	1.0	6.4	(10.7)	8.3	12.0	7.7	(5.2)	(1.5)	縦方向に半截。
A0112	468	空風輪	M24	(16.6)	(8.5)	(8.1)	0.8	(5.4)	(11.1)	9.2	(11.9)	(7.5)	(4.4)	(1.9)	空輪突起欠損。
A0113	469	空風輪	M24 419号墓	(15.1)	(8.3)	(6.8)	0.4	(6.4)	(12.6)	11.8	(14.0)	(9.2)	—	—	突起欠損。
A0114	473	空風輪(a)	L24 411号墓	(14.6)	(7.8)	(6.8)	(0.5)	(5.4)	(10.6)	(8.6)	(11.1)	(7.0)	(4.2)	(0.9)	A0115とは別個体。
A0115	473	空風輪(b)	N24	(13.6)	(8.2)	(5.4)	1.2	(4.2)	(11.2)	(8.9)	(11.8)	(8.1)	—	—	A0114とは別個体。
A0116	474	空風輪(a)	L24 411号墓	(14.4)	(7.3)	(7.1)	0.9	(4.7)	9.9	(8.3)	(10.2)	(7.3)	(4.8)	(1.5)	A0117とは別個体。
A0117	474	空風輪(b)	N24	(18.2)	12.8	(5.4)	0.3	(5.1)	10.7	9.3	12.1	(11.2)	—	—	A0116とは別個体。
A0118	475	空風輪	N24 414号墓	(14.8)	(9.2)	(5.6)	1.7	3.9	(11.2)	(8.2)	(10.5)	(8.2)	—	—	A0622地輪と採取番号が重複、風輪半壊。
A0119	479	空風輪	N24	21.7	10.1	11.6	0.9	6.5	13.3	11.8	14.5	10.3	6.5	4.2	第53図
A0120	480	空風輪	N23 238号墓	(16.5)	(8.5)	8.0	0.6	7.4	13.1	10.9	14.7	10.3	2.6	2.7	梵字入り。第53図
A0121	481	空風輪	N23 240号墓	(16.2)	(10.0)	(6.2)	0.4	(5.8)	(12.0)	10.1	(13.6)	9.3	(5.7)	—	
A0122	484	空風輪	O23 246号墓	10.6	6.5	4.1	0.3	3.8	8.4	7.5	9.9	7.3	1.5	1.4	A0373火輪とセット。第53図
A0123	487	空風輪	N22	15.2	7.3	7.9	0.4	5.3	9.0	7.7	10.9	6.9	3.9	2.2	第53図
A0124	488	空風輪	N22	17.8	8.4	9.4	0.5	5.4	11.1	9.3	12.0	7.8	4.9	3.5	第53図
A0125	492	空風輪	M22	(14.5)	(6.2)	(8.3)	0.9	6.1	(10.0)	(9.0)	(11.9)	(7.4)	(4.2)	(1.3)	
A0126	497	空風輪	M22	(15.8)	(7.6)	(8.2)	1.1	(6.0)	(11.2)	(8.1)	(12.0)	(8.1)	(4.8)	(1.1)	縦方向に半截。
A0127	501	空風輪	M23	(12.9)	(6.2)	(6.7)	(0.6)	(6.1)	(10.3)	(9.1)	(11.9)	(8.0)	—	—	部分破損。
A0128	502	空風輪	M23	(15.1)	(7.4)	(7.7)	(0.7)	(6.2)	(9.8)	(8.9)	(11.1)	(7.1)	(4.5)	(0.8)	部分破損。
A0129	503	空風輪	M23 407号墓	(15.3)	(9.3)	6.0	1.3	4.7	11.3	8.6	11.6	(8.6)	—	—	空輪突起欠、風輪小欠。
A0130	504	空風輪	M23 406号墓	12.8	6.9	5.9	0.3	5.6	10.3	9.0	12.9	10.5	—	—	第53図
A0131	508	空風輪	M23 400号墓	(18.7)	(8.2)	(9.5)	1.0	(5.9)	(11.1)	(8.6)	(11.4)	(7.8)	(5.4)	(2.6)	突起小欠。
A0132	515	空風輪	L23 405号墓	(13.9)	(7.4)	(6.5)	1.2	(5.3)	(11.0)	(9.1)	(11.5)	(9.0)	—	—	部分欠損。
A0133	517	空風輪	L23 392号墓	12.5	7.3	5.2	1.0	4.2	10.0	7.5	11.5	9.8	—	—	第53図
A0134	518	空風輪	L23 391号墓	13.4	8.3	5.1	0.8	4.3	10.5	7.9	11.0	7.2	—	—	
A0135	522	空風輪	M22 230号墓	(13.7)	(7.4)	(6.3)	0.8	5.5	(10.1)	—	(11.1)	(8.3)	—	—	突起小欠。
A0136	525	空風輪	L21 222号墓	(17.0)	(7.6)	(9.4)	1.2	(6.7)	(11.7)	9.4	(13.2)	(8.2)	(4.9)	(1.3)	突起小欠。第53図
A0137	526	空風輪	L21	(15.5)	(6.6)	(8.9)	0.6	(6.5)	9.9	8.3	(11.7)	(8.1)	(4.4)	(1.8)	第53図
A0138	529	空風輪	K21	13.7	8.2	5.5	1.2	4.3	10.1	7.3	11.2	7.7	—	—	第53図
A0139	532	空風輪	J21	(15.8)	(8.7)	(7.1)	(1.4)	4.4	11.0	8.5	11.8	9.0	5.1	(1.3)	
A0140	533	空風輪	J21	(17.5)	(8.0)	(9.5)	0.9	6.2	10.8	8.0	11.8	8.1	4.8	(2.4)	第53図

第 24 表　A 地区組立式五輪塔計測値一覧表（第 52 ～ 56 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	l	j	k	
A0141	534	空風輪	J20 340号墓	(11.8)	(6.0)	5.8	0.3	5.5	10.6	10.4	13.8	11.9	—	—	第53図
A0142	536 538	(空)風輪 空(風)輪	L22 372号墓	(17.9)	(9.1)	(8.8)	(1.6)	(7.2)	11.2	(10.2)	11.2	10.2	—	—	半壊、採取番号538と536で一個体。 第53図
A0143	537	空風輪	L22 372号墓	(16.9)	(7.6)	(9.3)	0.7	5.3	10.2	8.8	12.6	8.9	4.9	(3.4)	第53図
A0144	540	空風輪	L22 384号墓	(17.2)	(7.9)	(9.3)	0.9	6.1	10.3	8.0	11.8	8.5	4.6	(2.3)	第53図
A0145	541	空風輪	L22 395号墓	(22.9)	(9.6)	(13.3)	1.2	7.1	15.0	12.0	16.2	10.2	6.6	(5.0)	第53図
A0146	547	空風輪	K20 340号墓	(12.9)	(8.0)	(4.9)	(0.5)	(4.4)	(9.6)	(7.5)	(10.5)	(7.6)	—	—	縦方向に半截。
A0147	552	空風輪	K19	(15.7)	(8.3)	(7.4)	1.3	(6.1)	12.2	8.9	13.5	8.5	(5.2)	—	空輪突起欠。第53図
A0148	553	空風輪	K19	(18.5)	(8.7)	(9.8)	1.1	6.0	11.5	8.7	12.6	8.6	5.4	(2.7)	空輪突起小欠。第53図
A0149	558	空風輪	K19	18.6	9.0	9.6	1.0	5.9	11.8	9.0	12.9	8.4	4.9	2.7	第53図
A0150	559	空風輪	K19 311号墓	(14.5)	(7.4)	(7.1)	0.3	5.1	(8.9)	8.1	(10.4)	(7.8)	(4.2)	(1.7)	空輪突起小欠。第53図
A0151	560	空風輪	K19	(13.9)	(8.6)	(5.3)	(0.6)	(4.7)	(9.4)	(8.7)	(10.3)	(8.9)	—	—	空輪半壊。
A0152	562	空風輪	J19	(14.1)	(7.7)	6.4	0.9	5.5	11.0	9.4	11.9	8.1	—	—	第53図
A0153	566	空風輪	J19	18.3	10.9	7.4	0.6	6.8	13.2	10.8	14.2	9.3	—	—	風輪下部欠損。第53図
A0154	570	空風輪	J19	20.9	10.7	10.2	0.4	5.7	12.6	10.7	14.1	9.1	5.3	4.1	第53図
A0155	576	空風輪	J19 318号墓	(16.1)	(7.8)	(8.3)	(0.8)	(6.0)	11.8	10.2	13.1	(8.1)	4.7	(1.5)	突起欠損あり。
A0156	577	空風輪	J19	(14.6)	7.4	(7.2)	0.7	4.5	8.7	8.0	9.5	(6.8)	4.3	(2.0)	
A0157	585	空風輪	J18 301号墓	(13.4)	(6.9)	(6.5)	0.5	(5.4)	(9.2)	(8.3)	(10.1)	(7.0)	(4.5)	(0.6)	縦方向に半壊。
A0158	592	空風輪	J18 294号墓	(20.1)	10.4	9.7	0.3	5.8	(12.0)	(9.4)	(13.2)	(10.2)	5.5	3.6	縦方向に半壊。
A0159	593	空風輪	L18	(17.5)	10.0	(7.5)	—	6.7	12.1	9.9	13.3	8.9	5.7	(0.8)	第53図
A0160	621	空風輪	J15	(13.1)	(7.6)	(5.5)	(1.1)	(4.4)	(8.4)	(7.1)	(9.0)	(7.6)	—	—	縦方向に半壊。
A0161	624	空風輪	J15	(15.6)	(9.5)	(6.1)	(0.8)	(5.3)	(12.2)	(10.0)	(12.1)	(11.2)	—	—	縦方向に半壊。
A0162	625	空風輪	J15	15.0	9.7	5.3	0.7	4.6	10.9	8.3	11.8	9.3	—	—	第53図
A0163	628	空風輪	J15	(16.9)	(9.4)	(7.5)	0.3	5.2	(10.6)	8.2	(11.4)	(7.8)	(4.5)	(2.0)	
A0164	629	空風輪	I15	(19.8)	(9.7)	(10.1)	0.4	6.3	10.8	9.5	12.4	7.7	5.0	3.4	第53図
A0165	639 638	空輪 空風輪	15 159号墓	(14.2)	(8.7)	(5.5)	(0.3)	(5.2)	(9.7)	(9.8)	—	—	—	—	採取番号638・639を併せて空風輪の一個体になる（風輪部欠損あり）。
A0166	641	空風輪	J14 167号墓	(14.6)	(6.6)	(8.0)	0.8	(5.3)	8.5	6.3	(9.7)	6.8	4.3	(1.9)	第53図
A0167	644	空風輪	J14 163号墓 西側	(17.8)	(10.2)	7.6	0.8	6.8	12.3	10.5	13.0	10.1	—	—	縦方向に半壊。第53図
A0168	657	空風輪	N13 124号墓東	12.5	7.9	5.3	0.7	4.6	8.8	6.1	9.5	7.1	—	—	風輪縦方向に半壊。
A0169	658	空風輪	N13 124号墓東	(14.8)	(7.0)	(7.8)	(0.4)	(5.7)	(8.5)	(7.6)	(10.5)	(6.7)	(4.0)	(1.7)	
A0170	659	空風輪	N13 124号墓東	(18.9)	(8.9)	10.0	0.5	6.5	12.0	10.3	12.9	8.4	5.0	3.0	
A0171	660	空風輪	N13 124号墓 東側	14.0	9.3	4.7	1.2	3.5	11.1	7.9	12.4	9.5	—	—	
A0172	664	空風輪	N13 121号墓	(18.5)	(9.6)	(8.9)	0.8	5.3	11.3	9.6	12.1	7.7	5.3	2.8	第53図
A0173	668	空風輪	O13 68号墓	(16.6)	(8.0)	(8.6)	0.5	(6.0)	10.5	8.5	10.9	7.4	4.7	(2.1)	空輪縦方向に半壊。
A0174	670	空風輪	O13 68号墓	(12.7)	(5.8)	(6.9)	1.0	(4.6)	(8.4)	6.6	(9.4)	(5.9)	3.7	(1.3)	第53図
A0175	672	空風輪	O13 68号墓	22.7	11.9	10.8	0.7	7.1	14.6	11.8	15.8	8.8	5.7	3.0	
A0176	673	空風輪	O13 68号墓 南側	(19.5)	(9.2)	(10.3)	0.5	6.0	11.4	9.0	13.7	9.1	5.6	3.8	損壊。
A0177	676	空風輪	O13	(19.1)	8.9	(10.2)	0.2	6.6	9.9	9.1	12.5	7.5	5.1	(3.4)	第53図
A0178	677	空風輪	P13 66号墓	15.2	10.0	5.2	0.7	4.5	10.9	8.6	12.8	10.4	—	—	第53図
A0179	680	空風輪	P13 67号墓	(19.9)	9.7	(10.2)	0.7	5.7	12.0	10.4	13.5	8.5	5.4	(3.8)	第53図
A0180	681	空風輪	P13 67号墓	(13.0)	(6.9)	(6.1)	0.7	(5.4)	11.4	9.9	12.3	8.6	—	—	風輪底部欠損。第53図
A0181	684	空風輪	P13 71号墓 南側	12.8	8.9	9.3	0.6	6.0	11.2	8.6	12.5	8.8	4.4	2.7	
A0182	686	空風輪	P13 71号墓 南側	15.6	7.0	8.6	0.7	5.5	9.7	7.4	11.5	7.5	4.4	2.4	第53図

第 24 表　A 地区組立式五輪塔計測値一覧表（第 52 ～ 56 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	l	j	k	
A0183	687	空風輪	P13 71号墓 側東	(18.4)	9.2	(9.2)	0.5	6.1	11.1	9.3	12.1	7.6	4.9	(2.6)	風輪底部の連結用突起破損。
A0184	692	空風輪	P13 64号墓 東斜面	(19.7)	(10.3)	(9.4)	0.2	(6.6)	(11.3)	9.5	(12.4)	(7.7)	(5.4)	(2.6)	空輪突起小欠。
A0185	703	空風輪	P12 65号墓	(18.5)	(10.2)	(8.3)	(1.1)	(4.5)	(10.8)	(9.5)	(11.8)	(8.3)	5.1	(2.7)	突起等一部欠損。第53図
A0186	704	空風輪	P12 65号墓	19.7	9.7	10.0	0.9	5.5	11.6	9.3	12.7	9.8	5.8	3.6	第53図
A0187	706	空風輪	P12 65号墓	(18.1)	(9.9)	(8.2)	(0.8)	(7.4)	(13.8)	(10.7)	(15.0)	(9.6)	—	—	縦方向に半壊。
A0188	710	空風輪	P12 62号墓	(13.7)	(8.0)	(5.7)	(0.1)	(5.6)	(9.8)	(7.2)	(9.8)	(4.6)	—	—	空輪縦方向に半壊。
A0189	711	空風輪	P12 62号墓	(13.7)	(8.1)	(5.6)	0.7	(4.9)	10.3	(8.0)	(9.3)	(5.7)	—	—	風輪損壊。
A0190	719	空風輪	P12 62号墓 東斜面下	(15.5)	(9.3)	6.2	0.6	5.6	12.4	10.5	13.6	8.7	(5.8)	—	損壊あり。第53図
A0191	724	(空)風輪	Q12 40号墓	(7.2)	(1.8)	(5.4)	(0.1)	(5.3)	—	(6.6)	(9.8)	(7.9)	—	—	空輪欠失、縦方向に半壊。
A0192	726	空風輪	Q12 40号墓	(21.6)	(8.9)	(12.7)	1.2	(7.5)	(14.4)	(11.3)	(16.3)	(10.4)	(5.5)	(4.0)	縦方向に半壊。
A0193	729	空風輪	Q12 38号墓 西側	16.5	7.3	9.2	0.4	6.0	9.1	8.2	10.8	7.3	4.4	2.8	縦方向に半壊。第53図
A0194	736	空風輪	R11 31号墓 西崖下	(15.9)	(7.4)	8.5	0.7	6.1	10.2	8.0	10.8	7.3	4.5	1.7	風輪底部に連結用突起（凸部）有り。第53図
A0195	737	空風輪	R11 31号墓 西崖下	(16.0)	(7.0)	(9.0)	0.9	5.6	9.6	7.1	10.9	8.3	4.6	(2.5)	風輪底部に連結用突起（凸部）有り。第53図
A0196	746	空風輪	R11 29号墓	20.4	9.8	10.6	0.3	6.1	12.2	10.2	13.8	9.0	5.9	4.2	風輪底部に連結部。第53図
A0197	748	空風輪	R11 29号墓	16.7	6.7	10.0	1.2	(5.8)	(9.6)	9.0	(12.5)	8.7	4.9	3.0	風輪底部に連結部。第53図
A0198	749	空風輪	R11 29号墓	16.2	9.9	6.3	0.7	5.6	12.5	10.2	13.8	9.8	—	—	風輪底部連結部無。第53図
A0199	750	空風輪	R11 29号墓	(18.5)	(12.8)	5.7	0.3	5.4	10.2	8.8	11.5	8.7	—	—	第53図
A0200	751	空風輪	R11 29号墓	18.5	9.0	9.5	0.7	6.1	10.6	7.9	12.2	7.3	4.8	2.7	風輪底部に連結部。
A0201	756	空風輪	Q13 37号墓	(19.0)	(8.5)	10.5	0.6	6.8	13.5	11.1	14.5	9.3	4.9	3.1	空輪縦方向に半壊。
A0202	757	空風輪	Q13 37号墓	(15.2)	(8.4)	(6.8)	0.5	5.1	10.5	8.2	11.3	6.5	4.3	(1.2)	風輪連結部。
A0203	760	空風輪(1)	Q13 37号墓	11.4	6.5	4.9	0.4	4.5	9.2	7.9	11.2	8.8	—	—	風輪連結部無。第53図
A0204	760	空風輪(2)	Q13 37号墓	(15.2)	(8.3)	(6.9)	(0.4)	(5.4)	(10.8)	8.9	(11.5)	(7.2)	(4.5)	(1.1)	空風突起欠損、風輪連結部欠損。
A0205	766	空風輪	S11 12号墓 西崖下	23.3	12.0	11.3	0.9	7.1	14.7	12.7	15.9	10.0	5.8	3.3	他破片1点計測不可。
A0206	767 768	(空)風輪	S11 13号墓 西崖下	22.5	13.6	8.9	0.7	8.2	15.5	11.0	16.3	12.5	—	—	採取番号767・768とで一体の空風輪。
A0207	773	空風輪	S11 20号墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	計測不可。
A0208	774	空風輪	S11 20号墓	(15.2)	(6.7)	(8.5)	0.9	6.1	9.2	7.1	(10.1)	6.9	(4.4)	(1.5)	風輪連結部有。第53図
A0209	775	空風輪	S12 22号墓 西側	(17.5)	(7.0)	10.5	0.8	5.5	(10.6)	8.9	12.1	7.7	5.4	4.2	縦1/3欠。
A0210	776	空風輪	S12 22号墓 西側	(16.2)	8.9	(7.3)	0.8	(6.5)	12.7	11.4	14.0	9.9	—	—	風輪連結部欠失。第53図
A0211	781	空風輪	S12 21号墓	(13.8)	(6.4)	(7.4)	0.7	5.5	9.3	6.8	9.8	6.5	4.4	(1.2)	風輪縦方向に半壊、A0661地輪と同伴出土。
A0212	782	空風輪	S12 21号墓	(12.0)	(6.7)	(5.3)	(0.4)	(4.7)	9.5	7.9	9.7	(6.6)	(3.9)	(0.2)	損壊あり。第53図
A0213	784	空風輪	L16 183号墓 北西石組	(13.6)	(8.1)	(5.5)	(0.3)	(5.2)	9.6	8.6	11.6	(8.8)	—	—	縦方向に半壊、突起等損壊。
A0214	796	空風輪	O12	(17.8)	(7.8)	(10.0)	0.5	6.3	9.3	8.0	11.2	7.0	5.1	(3.2)	
A0215	804	空風輪	P14	(17.8)	(8.9)	(8.9)	0.9	5.2	11.2	9.1	(12.1)	7.5	5.3	(2.8)	損壊有、連結部有。第53図
A0216	805	空風輪	P14 47号墓	(19.1)	(11.5)	(7.6)	0.8	5.7	12.9	10.5	13.8	8.6	5.7	(1.1)	連結部欠損。第53図
A0217	806	空風輪	P14 47号墓	(19.9)	10.1	(9.8)	1.1	5.9	12.7	10.8	13.0	8.2	5.4	(2.8)	連結部有。第53図

第 24 表　A 地区組立式五輪塔計測値一覧表（第 52 ～ 56 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	l	j	k	
A0218	807	空風輪	P14 47号墓	(17.4)	(8.7)	(8.7)	0.7	5.8	12.1	9.9	12.8	7.9	5.1	(2.2)	連結部損壊。
A0219	808	空風輪	P14 51号墓	(17.9)	(8.6)	9.3	0.7	5.8	10.8	8.5	12.3	7.7	4.7	2.8	連結部有。
A0220	813	空風輪	P14 46号墓	(15.3)	(7.5)	(7.8)	0.2	5.8	10.0	7.8	10.9	(6.4)	4.2	(1.8)	損壊有、連結部有。
A0221	817	空風輪	P14	(19.8)	(11.5)	(8.3)	0.7	(7.6)	(15.3)	(11.7)	(13.9)	(9.1)	—	—	縦方向に半壊。
A0222	822	空風輪	Q14	(30.9)	(17.0)	13.9	0.5	7.8	15.9	11.8	16.8	10.4	7.3	5.6	縦方向に半壊。
A0223	824	空風輪	Q14	19.8	(9.9)	9.9	0.6	5.6	12.4	10.8	14.7	9.4	4.9	3.7	風輪小欠、連結部有。第53図
A0224	825	空風輪	Q14	(18.6)	(9.6)	(9.0)	0.5	7.0	12.1	10.8	14.0	8.5	4.5	(1.5)	連結部有。
A0225	826	空風輪	Q14	20.1	9.7	10.4	0.4	6.4	11.1	9.2	12.9	7.7	5.2	3.6	連結部有。
A0226	828	空風輪	Q14	(18.1)	(9.5)	(8.6)	0.7	5.7	11.6	9.2	12.5	7.5	4.4	(2.2)	連結部小欠。
A0227	829	空風輪	P15	32.9	18.4	14.5	0.5	8.2	15.0	11.1	15.7	11.0	(7.2)	5.8	連結部有。第53図
A0228	830	空風輪	P15	16.9	8.4	8.5	0.4	5.0	10.5	9.6	13.0	8.5	5.4	3.1	連結部有。
A0229	837	空風輪	Q12 39号墓周辺	17.8	7.8	10.0	0.7	5.7	9.9	8.4	12.4	7.3	4.9	3.6	連結部有。第53図
A0230	842	空風輪	Q12 39号墓周辺	16.8	6.9	9.9	0.4	5.1	11.3	8.7	11.6	7.2	4.4	3.4	第53図
A0231	844	空風輪	R12 東斜面	(14.8)	(8.7)	6.1	1.1	5.0	(13.6)	12.0	15.4	12.6	—	—	
A0232	845	空風輪	R12 東斜面	(17.6)	(8.6)	(9.0)	0.3	5.9	11.5	10.1	12.4	9.2	5.4	(2.8)	
A0233	847	空風輪	R12 東斜面	20.3	9.6	10.7	0.7	6.3	12.3	10.0	13.3	8.3	5.1	(3.7)	第53図
A0234	851	空風輪	S14	(14.7)	(7.8)	(6.9)	0.4	(5.1)	9.9	7.9	(10.7)	6.7	(4.0)	(1.4)	第53図
A0235	852	空風輪	S14	20.4	8.5	11.9	0.4	6.8	12.4	10.3	14.0	9.0	6.3	4.7	A0236とは別物。第53図
A0236	852	空風輪	S14	(18.9)	9.4	(9.5)	0.2	6.2	11.7	10.5	13.6	9.2	5.5	(3.1)	A0235とは別物。第53図
A0237	854	空風輪	S14	(24.2)	13.7	(10.5)	0.5	6.7	13.3	11.0	14.7	9.5	6.9	(3.3)	第53図
A0238	855	空風輪	S14	(22.0)	(10.7)	(11.3)	0.5	(6.7)	12.3	9.7	13.8	8.8	5.5	(4.1)	第53図
A0239	856	空風輪	S14	(16.8)	(8.0)	(8.8)	0.6	6.2	9.3	8.0	11.5	7.6	(4.6)	(2.0)	
A0240	862	空風輪	S14	13.3	8.3	5.0	0.5	4.5	(10.5)	8.1	12.4	10.2	—	—	第53図
A0241	863	空風輪	R13	(16.3)	(9.3)	7.0	0.6	6.4	(13.0)	11.0	13.9	8.3	5.3	—	第53図
A0242	865	空風輪	T10	20.4	9.6	10.8	0.6	6.7	12.0	10.2	13.6	8.3	5.5	3.5	
A0243	869	空風輪	T10	(15.1)	(8.9)	(6.2)	0.7	(5.3)	11.9	9.8	13.7	8.7	5.6	(0.2)	第53図
A0244	881	空風輪	Q13 37号墓西崖下	(17.3)	(8.7)	(8.6)	0.6	(8.0)	13.1	10.5	(14.4)	(9.0)	—	—	凝灰角礫岩（粒子大、二上山に多い。搬入品か。蓮ダムでも少し産出するという。）
A0245	884	空風輪	N17	13.6	7.8	5.8	0.9	4.9	11.0	8.6	12.3	8.8	—	—	第53図
A0246	886	空風輪	K17	18.7	8.2	10.5	0.3	6.6	10.9	10.5	13.3	8.4	5.2	3.6	第53図
A0247	894	空風輪	M24	(13.7)	(7.0)	(6.7)	0.3	(6.4)	10.8	9.4	12.2	8.1	—	—	
A0248	902	空風輪	O26 460号墓	(14.5)	(6.7)	(7.8)	0.2	(6.0)	8.4	7.2	10.2	(6.2)	(3.8)	(1.6)	突起欠損。
A0249	910	空風輪	L17 196号墓南溝	18.3	8.9	9.4	0.7	5.7	11.7	9.4	12.5	7.3	4.3	3.0	第53図
A0250	911	空風輪	J19	(14.1)	7.2	(6.9)	(0.7)	(4.7)	9.7	7.8	10.3	7.0	(3.8)	(1.5)	一部欠損。第53図
A0251	914	（空）風輪	J18 296号墓	—	—	(10.7)	(0.3)	(10.4)	—	(8.1)	(13.6)	—	—	—	半壊、空輪欠失。
A0252	915	空風輪	K21 368号墓	(19.2)	(9.4)	(9.8)	0.3	6.7	11.5	9.5	12.5	8.7	5.2	(2.8)	損壊有り。第53図
A0253	926	空風輪	N24 411号墓	(15.5)	(8.5)	(7.0)	0.8	(5.2)	11.6	9.1	12.5	7.8	4.8	(1.0)	一部欠損。第53図
A0254	938	空風輪	K20 354号墓	15.0	9.6	5.4	1.0	4.4	10.6	7.8	11.2	6.6	0	0	A0451火輪・A0552水輪・A0698地輪とでセット関係。第51図
A0255	1027	空風輪	Q12 40号墓	22.6	11.2	11.4	0.2	7.8	13.7	11.0	15.5	11.2	5.3	3.4	
A0256	1041	空風輪	L16 183号墓	(18.5)	(9.8)	(8.7)	0.8	(6.4)	12.6	10.6	(13.9)	(8.8)	(6.0)	(1.5)	欠損有り。
A0257	1046	空風輪	L16 183号墓	(18.6)	(10.0)	(8.6)	0.7	6.5	12.5	10.3	13.6	8.2	5.2	(1.4)	一部損壊。第53図
A0258	1064	空風輪	H15 下層	16.1	7.6	8.5	0.3	5.2	8.9	8.3	11.1	7.4	4.3	3.0	風輪底部連結突起。第53図
A0259	1065	空風輪	K19 下層	12.7	7.0	5.7	0.8	4.9	9.2	—	10.6	7.3	—	—	第53図
空風輪各部位法量平均値				17.9	9.2	8.9	0.7	5.9	11.3	9.2	12.7	8.5	5.0	3.3	（ ）内数値及びA0001～A0015とA0260～A0302の58基は除外して計算した。

第 24 表　A地区組立式五輪塔計測値一覧表（第 52 ～ 56 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	l	j	k	
A0260	3	空(風)輪	M28	—	—	—	—	—	8.7	—	—	—	—	—	表採、突起他欠損。
A0261	6	空(風)輪	J 22	—	—	—	—	—	8.4	—	—	—	—	—	表採、欠損。
A0262	31	空(風)輪	L 17	—	(8.7)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	表採、空輪半壊・突起欠。
A0263	48	空(風)輪	L 16	—	(10.6)	—	—	—	(11.5)	(9.1)	—	—	—	—	突起欠、風輪欠失。
A0264	98	空(風)輪	K 16	—	(10.5)	—	—	—	(9.5)	(7.7)	—	—	—	—	破損。
A0265	105	空(風)輪	L 16 196号墓	—	(7.9)	—	—	—	(12.6)		—	—	—	—	空輪半壊。
A0266	106	空(風)輪	K 16 195号墓	—	(12.2)	—	—	—	(11.2)	(9.7)	—	—	—	—	空輪縦方向に半截。
A0267	114	空(風)輪	J 19 320号墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	頭部割れ/計測不可。
A0268	122	空(風)輪	J 19	—	(15.6)	—	—	—	(10.7)	(7.4)	—	—	—	—	空輪突起小欠、縦1/3損壊。
A0269	123	空(風)輪	J 19	—	(9.4)	—	—	—	10.2	(9.0)	—	—	—	—	風輪欠損。
A0270	123	空(風)輪	J 20 327号墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	著しく損壊し計測不可。
A0271	143	空(風)輪	L 22 372号墓	—	(11.3)	—	—	—	(10.0)	—	—	—	—	—	破損。
A0272	145	空(風)輪	K 17 284号墓	—	(8.5)	—	—	—	(9.9)	—	—	—	—	—	風輪欠失。
A0273	184	空(風)輪	O15	(16.5)	(13.8)	—	—	—	12.7	11.6	—	—	—	—	風輪欠失。
A0274	233	空(風)輪	N 16 87号墓	—	(10.2)	—	—	—	(10.3)	(6.6)	—	—	—	—	風輪欠失。
A0275	307	空(風)輪	N 16	—	(10.0)	—	—	—	9.8	(8.4)	—	—	—	—	風輪欠失。
A0276	353	空(風)輪	N 16 87号墓	—	(11.8)	—	—	—	(12.8)	(10.7)	—	—	—	—	風輪欠失。
A0277	376	空(風)輪	J 14 166号墓	—	(9.9)	—	—	—	11.6	7.2	—	—	—	—	風輪欠失。
A0278	387	空(風)輪	I 14 181号墓	—	7.7	—	—	—	9.2	6.7	—	—	—	—	相輪宝珠の可能性。
A0279	405	空(風)輪	M24	—	(14.8)	—	—	—	11.7	(8.4)	—	—	—	—	半壊、風輪欠失。
A0280	417	空(風)輪	25 454号墓	—	(14.9)	—	—	—	13.1	(10.8)	—	—	—	—	風輪欠失。
A0281	425	空(風)輪	N 25 454号墓	—	(12.0)	—	—	—	8.6	(7.2)	—	—	—	—	風輪欠失。
A0282	432	空(風)輪	O26 456号墓	—	(10.1)	—	—	—	9.9	(8.3)	—	—	—	—	風輪欠失。
A0283	443	空(風)輪	M25 437号墓	—	(8.0)	—	—	—	(10.3)	(7.9)	—	—	—	—	風輪欠失。
A0284	446	空(風)輪	M25 433号墓	—	(12.4)	—	—	—	11.4	(8.9)	—	—	—	—	風輪欠失。
A0285	448	空(風)輪	M25	—	(12.1)	—	—	—	(13.3)	(11.8)	—	—	—	—	
A0286	465	空(風)輪	M24 421号墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	計測不可。
A0287	531	空(風)輪	J 21 362号墓	—	12.3	—	—	—	8.6	(7.5)	—	—	—	—	風輪欠失。
A0288	591	空(風)輪	J 18	—	(10.7)	—	—	—	11.4	(8.0)	—	—	—	—	風輪欠失。
A0289	604	空(風)輪	K 17 282号墓	—	(15.3)	—	—	—	14.0	(12.3)	—	—	—	—	風輪欠失。
A0290	609	空(風)輪	I 17 288号墓	—	(9.1)	—	—	—	(8.9)	(6.4)	—	—	—	—	縦方向に半壊、風輪欠失。
A0291	631	空(風)輪	I 14 181号墓	—	(12.2) (9.7)	—	—	—	(11.7) (12.0	(10.1) (8.7)	—	—	—	—	縦方向に半壊、風輪欠失。
A0292	706	空(風)輪	P 12 65号墓	—	(10.4)	—	—	—	(10.4)	(7.1)	—	—	—	—	縦方向に半壊、風輪欠失。
A0293	760	空(風)輪	S11 12号墓 崖下	—	(6.0)	—	—	—	(10.7)	—	—	—	—	—	1/3残、風輪欠失。
A0294	760	空(風)輪	Q13 37号墓	(10.1)	(7.5)	(2.6)	—	—	(10.1)	(7.5)	—	—	—	—	風輪欠失。
A0295	785	空(風)輪	L 16 183号墓 北西石組	—	(10.3)	—	—	—	(11.2)	(10.0)	—	—	—	—	縦方向に半壊、風輪欠失。
A0296	792	空(風)輪	L 16	—	(8.4)	—	—	—	(11.3)	(8.8)	—	—	—	—	風輪欠失。
A0297	792	空(風)輪	L 16	—	(9.6)	—	—	—	(10.4)	(9.9)	—	—	—	—	
A0298	903	空(風)輪	O26 460号墓	—	(13.2)	—	—	—	(10.7)	(8.9)	—	—	—	—	風輪欠失。
A0299	907	空(風)輪	K 16	—	(14.6)	—	—	—	(12.4)	(9.9)	—	—	—	—	風輪欠失、縦方向に半壊。
A0300	913	空(風)輪	K 14 155号墓	—	(7.6)	—	—	—	(9.2)	(8.5)	—	—	—	—	風輪欠失、採取番号の同じ一石五輪塔A0948あり。
A0301	920	空(風)輪	N 25 450号墓	—	(13.7)	—	—	—	(14.3)	(7.3)	—	—	—	—	区画配石に転用、縦方向に半壊、風輪欠失。
A0302	1039	空(風)輪	L 16 183号墓	—	9.2	—	—	—	(11.7)	(6.9)	—	—	—	—	半壊、風輪欠失。

第 24 表　A地区組立式五輪塔計測値一覧表（第 52 ～ 56 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	
A0303	8	火輪	I 14	(15.0)	(9.6)	4.8	0.6	(7.7)	0.6	(3.7)	(11.0)	(4.8)	20.6	19.6	表採、上部欠損。第54図
A0304	10	火輪	K 20	9.0	5.3	3.4	0.3	3.9	0.8	3.1	6.4	4.6	15.0	13.8	表採。
A0305	20	火輪	I 14	10.2	6.0	3.7	0.5	4.5	1.3	3.4	6.7	5.0	16.5	16.0	表採、砂岩。
A0306	24	火輪	L 13	(13.9)	(6.6)	4.6	0.5	(7.3)	(2.2)	—	(7.7)	—	(19.3)	—	表採、半壊。連結孔無。
A0307	28	火輪	不明	(13.5)	(4.7)	(4.1)	(0.5)	(8.3)	(3.7)	2.8	9.0	5.2	18.5	(17.9)	一部欠損。
A0308	34	火輪	M24	10.5	(6.2)	2.5	0.5	(4.3)	(1.3)	4.8	7.6	5.3	17.5	16.7	表採。
A0309	36	火輪	L 10	(9.0)	(2.4)	(3.0)	(1.3)	(6.3)	(2.0)	—	(10.8)	—	17.5	(16.3)	表採、上部半壊。連結孔無。
A0310	40	火輪	N16	11.7	7.0	4.2	0.5	4.2	1.2	2.6	8.3	4.8	17.4	16.4	斜面表採。
A0311	41	火輪	N16	9.6	5.4	3.7	0.5	5.2	1.2	3.4	7.8	4.4	16.6	15.6	斜面表採。
A0312	43	火輪	N16	(9.9)	(5.0)	2.7	0.3	4.9	1.9	3.0	(7.9)	(5.1)	17.0	15.4	斜面表採、欠損あり。
A0313	58	火輪	L 17 197号墓	9.3	6.4	2.6	0.3	4.5	0.9	3.4	6.8	4.5	16.4	14.8	表採。
A0314	91	火輪	K 17	12.2	5.4	2.7	0.8	6.8	3.3	4.6	9.2	6.3	18.4	18.2	
A0315	92	火輪	K 17 195号墓	10.2	6.3	3.4	0.5	5.0	0.8	4.3	7.0	5.0	18.4	17.7	
A0316	98	火輪	K 16	(7.4)	(3.5)	(3.9)	—	—	—	—	(9.5)	—	(13.2)	—	破損。
A0317	101	火輪	K 17 206号墓	(8.4)	(3.7)	(1.9)	(0.5)	(4.9)	(2.3)	(3.2)	(6.4)	(5.5)	16.8	(15.4)	火輪半壊。
A0318	113	火輪	J 19 321号墓	8.9	4.5	3.0	0.4	4.4	1.0	3.8	6.8	4.9	14.5	13.4	縦方向に半截。
A0319	115	火輪	J 19 318号墓	(5.6)	(1.0)	(1.4)	(0.3)	(4.6)	(2.9)	—	(7.9)	—	(12.7)	(12.4)	上部半壊、水輪欠か。連結孔無。
A0320	117	火輪	J 19	(8.3)	(5.0)	(3.0)	(0.4)	(4.2)	(0.8)	(2.8)	(6.9)	(4.2)	(15.8)	(14.8)	全体摩耗欠損顕著。
A0321	120	火輪	J 19 306号墓	8.4	4.9	3.3	0.2	4.3	0.4	3.5	7.7	4.8	16.3	15.2	一部欠失。
A0322	132	火輪	K 20	8.2	4.8	2.8	0.6	(4.0)	(0.6)	3.0	6.5	4.8	15.9	(14.9)	小穴あり。第54図
A0323	149	火輪	J 16	(12.7)	(5.6)	(3.4)	(1.0)	(7.1)	(2.7)	—	—	—	(17.1)	(16.6)	破損。
A0324	151	火輪	J 18 293号墓	(8.9)	(3.8)	(2.4)	(0.6)	(5.1)	(2.1)	(3.8)	(7.1)	(5.1)	(16.6)	(16.0)	四隅突端部欠損。
A0325	158	火輪	N15	14.1	9.8	3.2	1.1	(3.7)	(3.6)	—	(12.0)	—	(23.6)	(21.4)	梵字入り、連結孔無。第54図
A0326	168	火輪	N15	12.3	7.0	5.0	0.3	(8.6)	0.2	5.8	9.3	7.4	(20.0)	16.6	第54図
A0327	169	火輪	N15	11.2	7.6	3.0	0.6	4.6	1.0	3.5	7.8	4.9	16.8	16.0	
A0328	170	火輪	N15	8.3	5.4	2.6	0.3	3.6	1.1	2.2	6.5	4.0	13.7	13.0	
A0329	175	火輪	N15	8.2	5.2	2.6	0.4	4.7	0.7	2.7	7.5	4.8	16.6	14.9	第54図
A0330	194	火輪	N16	(10.3)	(4.3)	(3.2)	(0.5)	(6.0)	(2.3)	(3.6)	(7.9)	(5.6)	15.7	14.3	上部欠損。
A0331	200	火輪	N14 75号墓	9.1	6.0	2.6	0.5	(4.6)	0.4	3.8	7.1	5.5	16.2	14.9	
A0332	212	火輪	N15 東斜面	11.2	5.4	2.4	0.8	5.8	2.6	3.4	6.8	4.9	17.7	16.8	
A0333	213	火輪	N15 東斜面	12.8	7.6	4.6	0.6	4.6	1.6	—	9.1	—	19.1	17.4	連結孔無し。第54図
A0334	215	火輪	N15 東斜面	11.8	7.6	3.6	0.6	(5.6)	1.2	4.3	7.9	5.0	19.0	17.0	第54図
A0335	216	火輪	N15 東斜面	11.2	7.4	3.5	0.3	(5.4)	0.6	4.2	8.1	4.9	18.7	17.7	第54図
A0336	227	火輪	N16 87号墓	9.7	6.0	3.3	0.4	5.4	0.6	3.8	6.8	4.9	16.8	15.2	
A0337	229	火輪	N16 87号墓	10.4	7.3	2.8	0.3	5.4	0.6	3.8	6.8	4.8	15.7	15.0	
A0338	237	火輪	N16	19.5	13.0	6.0	0.5	6.2	1.3	2.4	11.3	2.0	30.4	28.5	比較的大。底部に径18.0cm、深さ0.8cmの窪み。第54図
A0339	239	火輪	N16	12.2	8.2	3.5	0.5	4.2	1.2	3.4	8.2	4.2	17.8	16.9	第54図
A0340	244	火輪	N16 88号墓	12.0	5.6	4.0	2.4	(2.0)	(4.1)	1.0	14.2	1.4	(27.6)	(26.1)	扁平・歪。比較的大。第54図
A0341	253	火輪	N15 東斜面	12.3	5.3	4.1	0.3	7.0	2.6	4.0	8.7	5.9	20.3	18.7	
A0342	254	火輪	N15 東斜面	9.2	6.0	3.0	0.2	(4.6)	0.4	3.8	8.0	5.5	(16.8)	14.6	
A0343	266	火輪	N17	15.6	8.8	6.6	0.2	7.8	1.1	—	9.6	—	20.0	19.4	連結孔無。第54図
A0344	271	火輪	N18	9.5	5.4	3.8	0.3	3.8	0.4	4.4	7.4	5.6	18.0	17.4	
A0345	274	火輪	N18	11.4	7.4	3.6	0.4	6.2	0.6	4.3	9.0	6.4	20.2	18.0	第54図
A0346	282	火輪	M18 201号墓	14.4	8.6	5.3	0.5	6.2	1.2	—	14.2	—	25.4	24.6	やや大ぶり。第54図
A0347	286	火輪	M17	15.8	7.2	5.7	0.7	8.6	2.2	—	9.5	—	19.9	19.8	
A0348	294	火輪	N16 90号墓	(9.8)	(4.2)	3.2	0.2	5.6	(2.2)	(3.7)	(7.7)	(5.1)	17.3	16.2	
A0349	297	火輪	N15 80号墓	10.8	6.5	4.1	0.2	(4.6)	1.2	—	7.4	—	16.0	15.2	連結孔無。第54図
A0350	300	火輪	N16	9.6	4.3	2.6	(0.7)	(5.3)	(2.0)	(3.8)	(7.5)	(5.2)	(16.2)	(14.9)	
A0351	305	火輪	N16	(10.4)	(5.0)	(4.8)	(0.6)	(5.2)	(1.2)	(4.4)	(7.0)	85.5)	(16.0)	(14.7)	欠損あり。

第 24 表　A 地区組立式五輪塔計測値一覧表（第 54 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	l	j	k	
A0352	310	火輪	N17	11.2	7.6	3.2	0.4	4.4	1.4	3.8	7.5	4.6	17.8	16.9	一部欠損。
A0353	357	火輪	M14 134号墓	14.0	7.5	6.3	0.2	6.0	1.2	2.6	9.4	5.5	19.0	17.9	底部に幅約0.5cmの鑿痕数条。第54図
A0354	358	火輪	L14 141号墓	(7.0)	(4.0)	2.7	0.3	(4.4)	0.4	(2.6)	(7.4)	4.4	16.6	15.4	第54図
A0355	366	火輪	K14 155号墓	12.6	9.0	3.3	0.3	(10.2)	0.3	5.8	9.3	7.2	(23.0)	20.0	一部欠損。第54図
A0356	371	火輪	K14 151号墓	11.2	8.7	2.3	0.2	5.2	0.3	4.6	8.2	6.0	19.8	19.0	連結孔摩滅著しい。第54図
A0357	382	火輪	I14	12.6	8.0	4.2	0.4	4.6	1.4	2.2	8.8	5.6	22.2	21.4	底部穿孔径6.4cm、深さ0.7cm。形状良好で、花崗岩製。第54図
A0358	384	火輪	I14	10.7	5.8	4.7	0.2	5.4	0.6	—	(7.9)	—	17.4	16.8	一部欠損。第54図
A0359	389	火輪	I15 174号墓	12.4	7.4	4.6	0.4	9.4	0.4	6.0	8.4	7.7	20.2	17.7	第54図
A0360	396	火輪	I15	11.0	5.8	4.8	0.4	5.9	1.2	—	9.5	—	19.5	18.7	底部に径3.6cm・深さ0.3cmの窪み。第54図
A0361	420	火輪	N25 453号墓	10.2	7.0	2.8	0.4	3.6	0.8	2.8	6.7	4.5	15.2	14.4	第54図
A0362	435	火輪(a)	O26	(10.2)	(6.2)	3.6	0.4	3.6	0.7	(4.2)	(7.0)	5.6	18.5	17.4	
A0363	435	火輪(b)	O26	12.0	8.6	3.0	0.4	5.8	1.8	3.8	7.4	5.0	18.0	17.2	第54図
A0364	447	火輪	M25 438号墓	(9.9)	(4.7)	(2.6)	(0.5)	(5.2)	(2.1)	3.4	8.2	5.5	17.6	(17.3)	
A0365	454	火輪	M24 415号墓	8.4	4.2	3.8	0.4	4.8	0.6	3.4	8.5	5.6	16.8	16.0	一部欠損。
A0366	457	火輪	M24 417号墓	10.6	6.5	3.8	0.3	5.4	0.3	4.6	8.3	5.4	18.5	17.2	底部に幅1.5cm・深さ0.6cmの溝痕跡が径9.0cmの円形状に残る。第54図
A0367	459	火輪	M24	10.6	5.8	3.9	0.9	4.0	1.4	—	8.0	—	17.4	16.8	連結孔無。
A0368	470	火輪	M24 419号墓	9.7	5.6	3.8	0.3	4.0	1.3	—	9.0	—	17.6	16.8	連結孔無。
A0369	478	火輪	N24 247号墓	17.0	10.6	6.2	0.2	(7.6)	1.4	3.1	11.6	5.0	21.4	21.0	第54図
A0370	482	火輪	N23 241号墓	12.8	7.8	4.4	0.6	5.8	1.2	4.4	9.6	6.6	19.4	18.0	一部欠。同地点出土のA0623地輪あり。第54図
A0371	483	火輪(a)	O23	12.0	6.8	4.5	0.4	6.5	0.8	3.0	8.0	4.7	18.2	17.6	
A0372	483	火輪(b)	O23	—	—	(5.5)	(0.2)	(9.3)	(3.6)	—	—	—	(17.1)	(16.7)	1/4残、実測不可。第54図
A0373	484	火輪	O23	9.4	7.0	2.0	0.4	2.4	2.0	1.8	7.2	1.5	14.8	13.8	A0122空風輪とセット関係。
A0374	485	火輪	O23	—	—	(5.3)	(0.3)	(9.1)	(3.5)	—	—	—	(16.8)	(16.3)	半壊。
A0375	496	火輪	M22 228号墓	9.2	6.0	2.7	0.4	4.0	0.8	2.6	6.8	4.2	15.2	14.6	底面に幅0.2cmの鑿跡が渦巻状に残る。第54図
A0376	498	火輪	M22	(10.0)	(3.4)	1.7	0.6	(6.6)	(4.3)	—	—	—	(20.4)	(19.6)	縦1/3残。
A0377	505	火輪	M23 400号墓	10.0	5.6	4.0	0.4	4.3	1.4	—	7.0	—	16.9	16.3	連結孔無。
A0378	509	火輪	M23	(9.7)	(4.1)	3.3	0.2	5.6	2.1	(3.8)	(9.3)	(5.2)	19.0	18.4	
A0379	511	火輪	M23 407号墓	(11.8)	(6.1)	(2.5)	(1.0)	(5.7)	(2.2)	(2.8)	—	—	(18.6)	(17.5)	半壊。
A0380	513	火輪	M23 406号墓	10.2	6.1	3.6	0.6	4.0	1.0	—	8.0	—	17.0	16.3	連結孔無。
A0381	516	火輪	L23 401号墓	(13.5)	(3.8)	(3.9)	(0.3)	(9.7)	(5.5)	(6.9)	(10.5)	(7.7)	(22.7)	(19.7)	縦方向に半截。
A0382	519	火輪	L23 389号墓	(9.5)	(3.6)	(3.4)	(0.6)	(5.9)	(1.9)	(3.5)	—	—	(16.4)	—	縦方向に半截。
A0383	521	火輪	M21	15.4	9.4	5.6	0.4	7.2	1.3	2.8	8.9	5.2	18.8	18.2	第54図
A0384	523	火輪	L21	14.0	8.0	5.6	0.4	6.0	1.0	2.5	7.8	5.6	17.6	16.9	一部欠損。第54図
A0385	528	火輪	K21 355号墓	11.2	5.6	5.2	0.4	5.4	0.6	—	8.5	—	18.0	17.4	連結孔無。
A0386	535	火輪	L22 372号墓	(9.1)	(5.2)	1.7	0.3	(3.9)	(1.9)	(4.2)	—	—	16.1	15.6	上部欠。
A0387	539	火輪	L22 384号墓	12.0	8.5	2.9	0.6	(6.9)	1.5	4.1	7.2	5.0	18.6	17.9	一部欠損。第54図
A0388	542	火輪	L22 395号墓	(8.8)	(3.9)	(2.4)	0.3	(4.9)	(2.2)	(3.3)	7.5	5.3	16.9	17.0	
A0389	544	火輪	K22 379号墓	11.5	(4.8)	3.6	0.1	(6.7)	(3.0)	3.8	8.9	5.7	19.1	17.7	
A0390	546	火輪	K20 354号墓	15.7	12.4	2.7	0.6	3.8	1.2	—	10.2	—	23.2	22.2	やや大ぶり。笠部の反りなく特異な形状。連結孔無し。第54図
A0391	555	火輪	K19 317号墓	11.4	8.0	3.0	0.4	4.5	1.3	3.8	8.1	5.4	19.1	17.9	底部に鑿痕。
A0392	568	火輪	J19	8.6	5.2	3.0	0.4	5.3	0.4	4.2	7.8	5.2	16.5	15.3	
A0393	572	火輪	J19	8.7	6.0	2.4	0.3	3.8	0.3	4.2	7.2	5.3	17.4	15.6	
A0394	573	火輪	J19	9.6	6.1	3.1	0.4	4.4	0.7	3.5	(8.0)	5.0	17.8	16.1	一部欠損。
A0395	584	火輪	I19 324号墓	11.1	7.2	3.6	0.3	4.9	0.4	4.2	7.8	4.7	17.8	16.0	第54図
A0396	586	火輪	J18 300号墓	10.2	6.0	3.8	0.4	4.0	2.0	3.7	8.5	5.4	17.0	16.6	第54図

第24表　A地区組立式五輪塔計測値一覧表（第54図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	l	j	k	
A0397	590	火輪	J18	12.0	7.3	4.3	0.4	5.3	1.6	2.7	8.5	4.5	17.2	16.2	第54図
A0398	611	火輪	J16	13.0	7.5	5.0	0.5	4.8	1.8	2.8	7.7	4.7	19.7	19.2	風化による摩滅顕著。
A0399	612	火輪	J16	12.2	8.0	3.4	0.8	5.8	1.4	3.3	8.9	4.9	20.8	19.7	一部欠損。
A0400	614	火輪	J16	(9.2)	(5.3)	3.6	0.3	(5.5)	0.3	4.2	7.7	4.2	(16.9)	15.5	一部欠損。
A0401	619	火輪	J15 173号墓	(10.7)	(4.6)	(4.4)	(0.3)	(6.1)	(1.4)	—	—	—	(17.5)	(17.9)	損壊。
A0402	622	火輪	J15	12.1	8.3	3.4	0.4	6.0	0.6	3.8	7.9	5.1	18.0	17.5	A0532水輪と同一地点伴出。
A0403	630	火輪	I14	10.2	6.8	3.2	0.2	4.8	0.8	4.4	8.2	5.2	18.0	15.8	一部欠損。連結孔の底部中央に更に径2.0cm、深さ0.6cmの窪みあり。
A0404	633	火輪	I16	8.8	6.0	2.4	0.4	(3.8)	(0.6)	3.8	6.8	5.0	(15.2)	(14.4)	一部欠損。
A0405	638	火輪	K15	(8.0)	(3.5)	(1.9)	(0.3)	(4.5)	(2.3)	(1.9)	—	(4.1)	(15.7)	(15.4)	半壊上部欠。
A0406	642	火輪	J14 167号墓	11.7	5.6	3.6	0.9	6.1	1.6	2.0	7.8	5.0	(16.8)	(16.5)	
A0407	655	火輪	M14 128号墓	12.3	7.5	4.6	0.2	5.6	0.6	3.6	8.9	5.4	17.5	16.2	第54図
A0408	656	火輪	M13 北斜面	10.9	6.0	4.5	0.4	6.0	1.0	—	8.7	—	18.2	17.6	一部欠損。連結孔無し。
A0409	661	火輪	N13 124号墓 東側	9.7	4.9	4.5	0.3	4.6	0.8	—	9.4	—	16.7	15.6	連結孔無。
A0410	665	火輪	N13 122号墓	10.7	7.3	3.1	0.3	5.1	0.9	2.3	8.0	4.6	16.0	15.2	一部欠損。第54図
A0411	666	火輪	N14 130号墓	10.0	7.0	2.7	0.3	4.9	0.3	3.9	8.4	5.5	18.1	15.6	
A0412	667	火輪	N14 130号墓	11.5	6.4	4.8	0.3	5.0	0.5	4.6	8.3	5.5	19.5	18.3	一部欠損。
A0413	671	火輪	O13 68号墓	11.7	7.5	3.8	0.4	4.8	0.8	5.0	8.8	6.0	19.8	18.4	
A0414	674	火輪	O13 68号墓南	(12.0)	(4.3)	(3.6)	(0.1)	(7.7)	(4.0)	(3.6)	(13.2)	(6.0)	21.4	19.2	半壊。
A0415	682	火輪	P13 71号墓	10.9	5.4	5.2	0.3	5.1	0.8	3.4	8.3	5.4	18.2	16.4	一部欠損。
A0416	685	火輪	P13 71号墓南	9.8	5.0	2.6	0.7	4.8	1.5	4.5	7.3	4.9	16.7	16.0	
A0417	694	火輪	P13 64号墓 東斜面	9.1	5.9	2.9	0.3	4.2	0.5	2.9	8.0	4.7	16.4	14.6	
A0418	695	火輪	P～Q13 42号墓西	8.6	5.0	3.3	0.3	4.0	0.7	3.2	6.0	4.3	14.4	12.9	第54図
A0419	697	火輪	P13 64号墓 東斜面	(10.0)	(6.6)	3.1	0.3	(4.5)	0.5	(3.8)	(9.3)	4.9	(19.3)	(18.2)	欠損あり。
A0420	699	火輪	P13 64号墓 東斜面	8.8	5.5	2.9	0.4	3.9	0.4	4.2	7.0	5.3	16.2	15.4	欠損あり。
A0421	701	火輪	P13 64号墓 東斜面下	8.7	6.1	2.3	0.3	4.2	0.4	3.5	8.0	5.3	16.2	15.0	一部欠損。第54図
A0422	709	火輪	P12 62号墓	10.8	7.4	2.8	0.6	4.5	0.9	3.6	7.1	4.6	17.8	17.0	欠損あり。
A0423	718	火輪	P12 62号墓 東斜面下	10.8	6.8	3.6	0.4	4.3	1.7	—	8.4	—	17.6	16.9	連結孔無し。第54図
A0424	723	火輪	P11	9.0	5.8	3.0	0.2	(5.4)	(0.7)	3.9	7.1	5.0	(17.4)	(16.4)	損壊あり。第54図
A0425	727	火輪	Q12 40号墓	10.1	4.3	2.9	0.2	5.8	2.7	(3.9)	(7.6)	(4.7)	17.4	16.2	上部小欠。
A0426	732	火輪	Q11 38号墓北	15.4	8.2	6.5	0.7	7.5	2.0	—	10.6	—	20.5	19.1	一部欠損。第54図
A0427	765	火輪	S11 １２号墓	(12.8)	(4.2)	(5.0)	—	(8.6)	(3.6)	(6.5)	—	—	(21.4)	(20.0)	損壊。
A0428	793	火輪	L16 196号墓 東石組	—	—	—	—	—	—	3.4	7.2	4.8	15.6	15.2	縦方向に半壊。
A0429	795	火輪	L１６ 196号墓と199号墓との中間	(13.2)	(5.8)	(1.3)	(0.3)	(7.4)	(5.8)	—	(11.9)	—	(19.7)	(18.5)	上部損壊。
A0430	797	火輪	O12	10.7	6.8	3.5	0.2	(4.7)	(0.5)	4.2	8.5	5.5	(18.6)	(17.4)	損壊あり。第54図
A0431	801	火輪	O12	10.8	7.6	2.8	0.4	3.8	1.0	4.4	6.8	5.3	16.3	15.8	一部欠損。第54図
A0432	809	火輪	P14 50号墓	12.0	7.9	3.7	0.4	4.9	1.7	3.8	8.3	5.3	17.4	16.8	一部欠損。第54図
A0433	810	火輪	P14	10.6	7.0	3.2	0.4	5.1	0.5	3.0	7.9	4.4	18.2	16.7	一部欠損。第54図
A0434	811	火輪	P14 46号墓	10.8	7.2	3.0	0.6	(4.6)	1.0	3.4	7.5	5.0	(16.7)	(16.2)	一部欠損。第54図
A0435	820	火輪	P14	13.1	9.9	2.8	0.4	(7.3)	0.8	4.1	9.0	6.5	(20.4)	(19.1)	損壊。第54図

第 24 表　A 地区組立式五輪塔計測値一覧表（第 54 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	l	j	k	
A0436	846	火輪	R12 東斜面	7.6	5.2	2.1	0.3	(3.3)	0.4	3.3	6.4	5.1	(15.7)	(15.0)	
A0437	850	火輪	S14	11.9	7.9	3.4	0.6	(3.7)	(1.1)	3.2	8.9	5.2	(18.5)	(17.9)	一部欠損。第54図
A0438	853	火輪	S14	(9.5)	(2.5)	4.0	—	(7.0)	(3.0)	—	(16.1)	—	(23.0)	21.2	上部半壊。
A0439	860	火輪	S14	11.6	8.3	2.9	0.4	5.8	0.4	2.9	6.2	4.7	16.4	15.6	第54図
A0440	866	火輪	T10 2号墓	10.8	6.6	3.8	0.4	(5.7)	0.6	4.2	7.2	5.2	17.4	15.5	第54図
A0441	870	火輪	T10 2号墓	(10.1)	(7.0)	2.8	0.3	4.3	0.3	(3.4)	(7.0)	4.7	16.4	14.8	一部欠損。第54図
A0442	871	火輪	T10 2号墓	10.0	5.8	3.8	0.4	6.2	3.0	3.6	8.2	5.6	16.8	15.3	全体に鑿痕跡明瞭。
A0443	872	火輪	T10 2号墓	11.8	7.3	4.3	0.2	6.0	0.4	3.8	8.4	6.7	19.9	18.0	一部欠損。
A0444	878	火輪	T12	12.5	8.1	4.0	0.4	6.3	0.3	4.2	8.2	6.7	18.9	16.8	一部欠損。
A0445	888	火輪	L14	12.4	7.6	3.8	1.0	(5.6)	1.5	4.9	9.8	6.5	19.7	18.8	
A0446	896	火輪	M24 429号墓	(12.0)	(8.2)	3.5	0.3	(5.0)	0.4	(4.2)	(8.5)	5.4	(18.7)	17.0	第54図
A0447	899	火輪	O26 460号墓	10.4	6.7	3.4	0.3	5.0	0.7	3.1	7.5	5.1	16.1	15.0	風化顕著、罅割れ多。第54図
A0448	901	火輪	O26 460号墓	9.6	5.7	3.3	0.6	(5.0)	0.7	3.4	6.5	4.3	16.2	15.6	一部欠損。
A0449	904	火輪	K22	11.0	7.0	3.5	0.5	5.5	0.3	5.0	10.0	5.7	19.5	17.9	上部小欠。
A0450	909	火輪	O23 243号墓北	11.9	8.5	3.0	0.4	5.3	1.4	4.1	8.1	5.1	17.1	16.9	一部欠損あり。第54図
A0451	938	火輪	K20 354号墓	11.7	7.5	3.9	0.3	5.2	0.6	0	8.2	0	(15.6)	18.2	A0254空風輪・A0552水輪・A0698地輪とそれぞれセット関係にある。第51図
A0452	940	火輪	J20 328号墓	(11.2)	(2.5)	3.3	0.3	(8.7)	(5.1)	(4.9)	(12.3)	(6.8)	(18.9)	17.7	区画配石に転用、半壊。
A0453	950	火輪	I18 290号墓	8.0	4.4	3.2	0.4	5.5	0.4	3.3	8.8	6.2	16.9	15.4	一部欠損。第54図
A0454	979	火輪	N14 130号墓	13.3	9.4	3.5	0.4	(8.0)	0.6	5.0	9.4	6.8	21.6	19.4	一部欠損。底部中央に径5.6cm、深さ0.4cmの窪みあり。第54図
A0455	1013	火輪	S10	10.7	6.6	3.6	0.5	6.3	0.9	3.2	7.5	5.2	16.9	16.0	一部欠損。
A0456	1016	火輪	T10 1号墓	9.7	7.1	2.2	0.4	(4.5)	0.4	3.2	7.8	5.1	(17.4)	15.8	欠損有り。
A0457	1020	火輪	S13	11.7	7.1	3.6	1.0	5.4	0.8	5.3	8.1	6.0	20.4	20.0	
A0458	1022	火輪	M16 184号墓	10.9	7.9	2.6	0.4	5.1	0.4	4.5	7.5	5.3	17.3	16.4	
A0459	1031	火輪	L16 183号墓	12.9	8.4	4.0	0.5	5.8	1.0	2.6	7.7	5.2	18.3	17.6	第54図
A0460	1032	火輪	L16 183号墓	(10.4)	(6.8)	3.2	0.4	(4.7)	0.7	(3.3)	(7.7)	4.9	17.1	16.4	上部欠損。
A0461	1045	火輪？	L16 183号墓	9.5	7.2	2.0	0.3	(4.2)	0.4	(3.8)	(7.8)	5.9	(16.5)	(15.0)	損壊あり。
A0462	1048	火輪	L16 183号墓	10.3	6.6	3.4	0.3	5.0	0.6	2.9	7.9	5.0	16.4	14.4	欠損あり。
A0463	1049	火輪	L16 183号墓	17.7	13.4	3.9	0.4	5.1	1.0	2.0	11.0	7.2	26.9	25.3	大形製品。第54図
A0464	1051	火輪	L16 183号墓	12.7	8.4	4.0	0.3	4.5	1.4	—	9.8	—	22.4	18.6	連結孔無し。
A0465	1052	火輪	L16 183号墓	12.4	8.4	3.6	0.4	6.4	1.0	3.0	8.9	5.0	17.6	17.1	第54図
A0466	1053	火輪	L16 183号墓	12.5	7.3	4.6	0.6	5.8	1.4	3.2	7.6	3.0	18.0	17.3	微欠損。第54図
A0467	1057	火輪	L16 183号墓	8.9	(3.1)	(2.0)	0.6	(5.8)	(3.2)	3.4	8.0	5.7	19.4	18.5	欠損有り。
A0468	1062	火輪	N25下層 SK593	—	—	3.0	0.4	4.5	(0.4)	—	—	—	(16.2)	(15.4)	損壊著し。
A0469	1063	火輪	J20 下層	8.9	5.0	3.3	0.6	(4.6)	1.0	3.4	7.0	4.8	(16.6)	(15.0)	欠損あり。
火輪各部位法量平均値				11.2	6.9	3.6	0.4	5.2	1.0	3.6	8.2	5.1	18.1	17.0	（ ）内数値は除外して計算した。

第 24 表　A 地区組立式五輪塔計測値一覧表（第 54 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	l	j	k	
A0470	30	水輪	L18	(11.1)	(5.6)	(11.0)	(12.9)	(15.9)							表採、欠損あり。
A0471	46	水輪	L16	13.0	6.1	9.9	11.2	16.6							上部小欠。
A0472	49	水輪	N16	11.9	5.0	11.4	11.7	18.3							斜面表採。
A0473	61	水輪	K17	13.1	6.5	9.7	9.6	16.1							
A0474	62	水輪	K17 195号墓	14.3	7.5	11.6	10.9	18.6							第54図
A0475	65	水輪	O23 244号墓	13.6	7.9	11.2	11.8	18.5							塚下斜面転倒。第54図
A0476	90	水輪	L18 209号墓	—	—	—	—	—							計測不可。
A0477	94	水輪	K17	12.4	7.5	11.3	10.6	17.0							
A0478	148	水輪	J17 279号墓	(12.2)	(7.0)	11.0	—	18.0							下部3分の1欠失。
A0479	152	水輪	K18	15.0	6.3	12.5	11.5	19.4							第54図
A0480	155	水輪	K19 310号墓	11.8	8.0	8.6	7.9	15.2							第54図
A0481	163	水輪	N15	14.6	7.3	15.8	15.4	21.7							第54図
A0482	166	水輪	N15	13.8	6.8	12.3	12.8	19.6							第54図
A0483	197	水輪	N16	12.5	7.3	11.4	11.4	18.9							
A0484	199	水輪	N16	11.9	5.5	10.3	11.7	16.4							第54図
A0485	211	水輪	N15	15.6	8.2	14.2	14.1	21.7							東斜面。第54図
A0486	214	水輪	N15	13.0	7.4	12.6	12.6	19.8							東斜面。第54図
A0487	242	水輪	N16 88号墓	12.6	6.2	10.9	11.3	18.0							第54図
A0488	245	水輪	N16	15.0	7.3	16.6	16.7	22.8							梵字入り。第54図
A0489	248	水輪	N16 89号墓	12.4	8.0	11.3	9.3	16.6							第54図
A0490	251	水輪	N16 92号墓	11.3	5.8	10.2	11.6	17.2							第54図
A0491	258	水輪	N15 東斜面	12.7	6.2	9.8	10.1	16.9							
A0492	259	水輪	N15 東斜面	10.6	5.4	14.2	13.5	19.2							第54図
A0493	260	水輪	N15 東斜面	12.7	6.1	9.2	10.1	17.2							
A0494	270	水輪	N18	13.0	6.7	10.4	9.7	17.6							
A0495	285	水輪	M17	(14.8)	(7.1)	16.2	—	23.0							3分の1欠失。
A0496	291	水輪	N16 92号墓	12.8	6.0	10.5	10.1	17.3							A0600地輪と同一地点伴出。第54図
A0497	306	水輪	N16	12.8	7.7	10.3	10.3	16.5							第54図
A0498	312	水輪	N19	13.0	6.6	12.0	12.1	20.0							
A0499	328	水輪	N16	23.7	12.2	14.5	14.6	29.3							斜面。第54図
A0500	337	水輪	O14 東斜面	14.7	7.9	14.1	13.9	21.2							鑿打痕。第54図
A0501	338	水輪	O14	13.6	5.5	10.6	10.8	18.8							第54図
A0502	342	水輪	O14	(10.6)	—	—	—	(15.3)							半壊。
A0503	347	水輪	N15 76号墓	11.1	5.5	9.3	10.8	15.8							第54図
A0504	355	水輪	M17 131号墓	(13.7)	(7.6)	—	11.2	(18.2)							
A0505	356	水輪	M14 134号墓	11.5	6.2	11.3	10.5	16.9							第54図
A0506	364	水輪	L14 142号墓	16.4	8.8	11.9	12.0	20.8							第54図
A0507	377	水輪	J14 166号墓	12.4	6.4	10.7	10.5	17.4							
A0508	392	水輪	I15 175号墓	11.3	6.4	9.6	9.6	15.2							
A0509	414	水輪	N25 454号墓	11.1	6.2	6.9	7.9	15.0							
A0510	437	水輪	M25 448号墓	(13.5)	(9.3)	(9.9)	(11.2)	(17.2)							縦方向に半截。
A0511	450	水輪	M24 416号墓	10.8	6.4	10.5	9.9	16.0							第54図
A0512	460	水輪	M24	10.3	5.6	10.2	10.2	14.8							
A0513	486	水輪	N22 234号墓	22.8	11.0	19.0	17.2	30.3							梵字入り。第54図
A0514	489	水輪	N22	10.8	6.3	9.8	9.2	16.2							第54図
A0515	506	水輪	M23 400号墓	13.9	7.3	15.4	15.7	22.2							第54図
A0516	507	水輪	M23 400号墓	15.3	8.2	11.8	11.9	20.0							第54図
A0517	512	水輪	M23	11.6	6.4	9.1	9.7	16.3							第54図
A0518	514	水輪	M23 408号墓	7.8	4.7	9.4	7.6	12.4							
A0519	520	水輪	M21	14.9	7.6	13.8	13.2	21.4							第54図
A0520	543	水輪	L23 395号墓	(12.0)	—	(8.8)	—	(14.9)							縦方向に半截。
A0521	554	水輪	K19	15.3	8.3	11.7	12.2	22.0							第54図

第 24 表　A 地区組立式五輪塔計測値一覧表（第 54 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	l	j	k	
A0522	557	水輪	K19	12.2	6.5	9.5	9.2	17.0							第54図
A0523	564	水輪	J19	16.0	9.1	10.7	10.4	19.4							第54図
A0524	583	水輪	I19 324号墓	(12.3)	(6.9)	(9.7)	(8.5)	(15.3)							縦方向に半壊。
A0525	587	水輪	J18	11.9	5.8	11.2	10.9	17.5							第54図
A0526	588 589	水輪	J18	(16.2)	(8.8)	(14.7)	(14.0)	(22.9)							半壊、採取番号589・588とで一個体。
A0527	594	水輪	L18	12.2	6.2	12.4	11.6	17.7							第54図
A0528	595	水輪	L18 209号墓	16.1	8.1	11.8	12.3	19.7							第54図
A0529	603	水輪	K17 282号墓	12.5	5.9	10.1	10.0	16.6							第54図
A0530	606	水輪	I17 275号墓	11.6	5.7	(10.0)	11.0	(16.7)							第54図
A0531	608	水輪	I17	10.6	6.3	8.4	8.0	15.0							
A0532	623	水輪	J15	—	—	—	—	—							A0402火輪と同一地点伴出。
A0533	626	水輪	J15	15.7	8.1	12.6	13.3	22.5							第54図
A0534	698	水輪	P13 64号墓 東斜面	12.1	5.8	9.2	9.7	15.2							
A0535	700	水輪	P13 64号墓 東斜面	13.6	6.2	10.2	10.3	17.5							第54図
A0536	712	水輪	P12 62号墓	13.1	7.0	11.6	11.9	18.5							第54図
A0537	716	水輪	P12 62号墓 東斜面下	16.6	8.6	12.6	12.7	20.4							上下面鑿削痕。第54図
A0538	717	水輪	P12 62号墓 東斜面下	14.3	6.5	10.2	10.7	18.7							全面に鑿削痕。第54図
A0539	744	水輪	R11 29号墓	13.0	7.2	10.4	9.4	16.4							
A0540	745	水輪	R11 29号墓	10.2	6.0	8.9	9.1	14.6							第54図
A0541	747	水輪	R11 29号墓	10.3	5.2	10.0	8.6	15.2							第54図
A0542	772	水輪	S11 18号墓	12.5	6.7	9.6	10.3	16.4							損壊。
A0543	780	水輪	S12 21号墓南	(13.8)	(7.4)	(8.7)	(11.6)	(17.9)							縦方向に半壊。
A0544	783	水輪	S12	(5.5)	—	—	(10.5)	(15.1)							横方向に半壊。
A0545	800	水輪	O12	13.4	7.6	11.1	10.1	16.9							第54図
A0546	802	水輪	O12	11.8	6.3	10.6	10.8	16.6							第54図
A0547	861	水輪	S14	14.8	9.2	11.2	11.4	19.3							第54図
A0548	867	水輪	T10 2号墓	14.9	8.0	11.3	10.3	18.4							第54図
A0549	887	水輪	K17	13.7	6.3	10.2	10.9	17.6							第54図
A0550	900	水輪	O26 460号墓	11.9	5.1	10.3	10.8	17.3							第54図
A0551	906	水輪	H17	14.3	8.1	12.4	11.1	19.0							
A0552	938	水輪	K20 354号墓	12.4	6.5	9.4	9.6	18.3							A0259空風輪・A0451火輪・A0698地輪とでそれぞれセット関係にある。第51図
A0553	996	水輪	P14 52号墓	12.8	6.8	10.0	10.0	17.0							第54図
A0554	1028	水輪	L17 207号墓	15.5	8.6	13.2	12.6	20.4							第54図
A0555	1029	水輪	L17 205号墓	14.7	7.4	11.0	19.5	19.4							径9.0、深さ2.2cmの窪みあり。第54図
A0556	1033	水輪	L16 183号墓	11.2	4.6	9.0	11.4	15.9							第54図
A0557	1035	水輪	L16 183号墓	12.1	5.9	12.0	11.8	18.1							
A0558	1036	水輪	L16 183号墓	12.8	5.8	9.9	10.8	17.8							
A0559	1038	水輪	L16 183号墓	14.1	6.7	10.6	10.4	18.5							第54図
A0560	1040	水輪	L16 183号墓	12.8	5.6	10.5	10.9	17.5							
A0561	1044	水輪	L16 183号墓	12.3	5.8	13.4	13.1	18.1							
A0562	1047	水輪	L16 183号墓	14.1	7.3	(14.8)	14.9	(20.3)							縦方向に半壊。
A0563	1054	水輪	L16 183号墓	12.3	6.6	10.8	11.7	18.4							
A0564	1056	水輪	L16 183号墓	13.3	6.4	10.5	10.6	17.5							
A0565	1058	水輪	M18 100号墓 西側下層	(12.0)	(6.4)	9.6	(11.9)	15.2							破損。
水輪各部位法量平均値				13.2	6.8	11.2	11.3	18.3	注意：（ ）内の不確定数値は除外して計算した。						

第 24 表　A地区組立式五輪塔計測値一覧表（第 54 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量 a	b	c	d	e	f	g	h	l	j	k	備考欄
A0566	9	地輪	I 14	16.8	11.3										表採。第55図
A0567	19	地輪か	I 14	18.5	12.9										表採、砂岩、上部欠損（水地輪かも）。
A0568	26	地輪	L 16	18.8	14.5										表採。
A0569	32	地輪	L 17	17.4	12.2										表採。第55図
A0570	71	地輪	L 16 183号墓	17.6	13.7										区画配石に転用。
A0571	72	地輪	L 16 183号墓	—	—										計測不可。
A0572	74	地輪	L 16 183号墓	—	—										計測不可。
A0573	75	地輪	L 16 183号墓	18.9	15.3										第55図
A0574	77	地輪	M16 184号墓	—	—										計測不可。
A0575	82	地輪	L 17 207号墓	18.7	11.4										片麻岩製。
A0576	83	地輪	L 17 203号墓	—	—										磨耗著し計測不可。
A0577	86	地輪	L 17 203号墓	—	—										計測不可。
A0578	88	地輪	L 17 197号墓	22.3	17.0										第55図
A0579	89	地輪	L 17 198号墓	—	—										計測不可。
A0580	101	地輪	K 17 206号墓	(20.0)	(9.0)										地輪上部欠損。
A0581	111	地輪	J 18 304号墓	16.9	11.0										第55図
A0582	147	地輪	K 16 193号墓	(15.9)	(10.8)										
A0583	159	地輪か	N 16	27.2	(16.4)										梵字入り。第55図
A0584	186	地輪	N 15 76号墓	20.1	16.5										第55図
A0585	187	地輪	N 15 76号墓	19.6	15.9										第55図
A0586	208	地輪	N 15 東斜面	21.1	17.2										第55図
A0587	209	地輪	N 15 東斜面	20.6	16.2										第55図
A0588	218	地輪	N 15 東斜面	17.2	12.4										
A0589	219	地輪	N 15 東斜面	20.0	17.2										第55図
A0590	238	地輪	N 16	18.0	17.9										第55図
A0591	250	地輪	N 16 92号墓	19.1	14.0										第55図
A0592	252	地輪	N 15 東斜面	32.1	13.6										大型品。第55図
A0593	255	地輪	N 15 東斜面	20.0	17.5										第55図
A0594	256	地輪	N 15 東斜面	19.4	12.0										第55図
A0595	263	地輪	N 15 80号墓	(30.4)	(11.5)										大型品。第55図
A0596	264	地輪	N 15 東斜面	17.4	11.7										第55図
A0597	272	地輪	N 18	17.5	9.7										第55図
A0598	277	地輪	N 18	(18.2)	(13.7)										3分の1欠。
A0599	278	地輪	N 18	(15.8)	(13.8)										半壊。
A0600	292	地輪	N 16 92号墓	17.8	11.2										A0496水輪と同一地点伴出。
A0601	302	地輪	N 16	16.6	10.1										第55図
A0602	303	地輪	N 16	17.0	13.0										
A0603	322	地輪	R 12 33号墓	18.4	(12.1)										第55図
A0604	323	地輪	R 12 33号墓	15.7	(9.1)										第55図
A0605	324	地輪	R 12 33号墓	19.7	(12.9)										第55図
A0606	325	地輪	R 12 33号墓	(19.4)	—										半壊。
A0607	326	地輪	R 12 33号墓	20.3	12.8										縦方向に半截。
A0608	332	地輪	O 14	(27.8)	(12.1)										大型品。第55図
A0609	333 336	地輪	O 14	(19.4)	(16.1)										採取番号333と336とで併せ一個体。

第 24 表　A 地区組立式五輪塔計測値一覧表（第 55 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	l	j	k	
A0610	335	地輪	O14	14.9	(17.1)										上部欠。
A0611	339	地輪	O14	(21.4)	(15.9)										上部半壊。
A0612	346	地輪	N15 76号墓	16.4	12.0										第55図
A0613	352	地輪	N16 86号墓	16.5	11.0										第55図
A0614	383	地輪	I 14	19.1	14.5										第55図
A0615	388	地輪	H14	18.4	13.0										
A0616	394	地輪	I 15 175号墓	14.3	9.6										第55図
A0617	401	地輪	N25 445号墓	(13.6)	(6.0)										1/3残。
A0618	407	地輪か	N25	17.2	10.5										第55図
A0619	421	地輪	N25 447号墓	16.3	(11.9)										半壊。
A0620	428	地輪	N25 451号墓	18.4	12.0										第55図
A0621	442	地輪	M25 437号墓	18.4	12.7										第55図
A0622	475	地輪	L 24 425号墓	—	—										計測不可、A0118空風輪と採取№重複。
A0623	482	地輪	N23 241号墓	(19.1)	(8.4)										1/3残、 A0370火輪と同地点出土。
A0624	494	地輪	M22	16.1	10.9										半壊。
A0625	524	地輪	L 21	17.0	11.9										第55図
A0626	548	地輪	K 20 341号墓	(13.9)	(9.7)										縦方向に半壊。
A0627	551	地輪	K 19 316号墓	14.0	9.6										半壊。
A0628	556	地輪	K 19	17.0	11.9										第55図
A0629	563	地輪	J 19	15.7	9.8										第55図
A0630	565	地輪	J 19	16.8	11.1										第55図
A0631	567	地輪	J 19	—	—										半壊、計測不可。
A0632	579	地輪	J 20 329号墓	15.9	(10.6)										第55図
A0633	580	地輪	J 20 329号墓	14.6	(8.9)										第55図
A0634	597	地輪	L 17 204号墓	(18.3)	(12.0)										片麻岩製。
A0635	598	地輪	L 17 204号墓	(17.2)	(11.0)										凝灰角礫岩製。
A0636	600	地輪	K 17	18.3	13.4										第55図
A0637	601	地輪	K 17	—	—										計測不可。
A0638	610	地輪	I 18 290号墓	15.8	9.9										
A0639	613	地輪	J 16 272号墓	—	—										計測不可。
A0640	632	地輪	I 14 181号墓	—	—										計測不可。
A0641	637	地輪	K 15 160号墓	18.0	(13.1)										
A0642	645	地輪	J 14 164号墓	17.8	13.2										
A0643	646	地輪	K 15 157号墓	18.1	12.3										
A0644	675	地輪	O13	17.8	13.0										
A0645	679	地輪	P 13 67号墓	(20.5)	(16.1)										
A0646	688	地輪	P 13 64号墓 東斜面	20.8	(17.2)										上部欠損。
A0647	689	地輪	P 13 64号墓 東斜面	15.8	(11.4)										
A0648	690	地輪	P 13 64号墓 東斜面	16.2	9.1										第55図
A0649	691	地輪	P 13 64号墓 東斜面	17.2	(10.6)										第55図
A0650	702	地輪	P 12 65号墓西	17.0	13.6										
A0651	720	地輪	P 12 62号墓 東斜面下	18.4	13.4										第55図

第 24 表　A地区組立式五輪塔計測値一覧表（第 55 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	l	j	k	
A0652	728	地輪	Q12 38号墓西	15.8	12.3										損壊有。
A0653	730	地輪	Q12 38号墓	15.7	11.1										第55図
A0654	731	地輪	Q12 38号墓南	16.9	12.7										第55図
A0655	735	地輪	R11 31号墓 崖下	15.8	10.4										第55図
A0656	739	地輪	R11 31号墓 崖下	(17.4)	(13.0)										縦方向に半壊。
A0657	740	地輪	R11 31号墓 崖下	(13.8)	(12.3)										縦方向に半壊。
A0658	754	地輪	R12 34号墓	20.1	16.3										第55図
A0659	763	地輪	S10 12号墓	17.0	11.3										第55図
A0660	764	地輪	S10 12号墓	(16.5)	(12.6)										損壊あり。
A0661	781	地輪	S12 21号墓	17.0	13.1										A0211空風輪と同伴出土。
A0662	788	地輪	L16 182号墓	(16.2)	(9.8)										破片を合わせて計測。
A0663	789	地輪	L16 182号墓	17.5	10.6										斜め縦方向に半壊。
A0664	798	地輪	O12	16.5	11.1										第55図
A0665	799	地輪	O12	17.8	13.2										第55図
A0666	812	地輪	P14 46号墓	17.4	11.2										第55図
A0667	814	地輪	P14 46号墓	19.9	16.1										第55図
A0668	815	地輪	P14 46号墓	22.0	14.8										第55図
A0669	823	地輪	Q14	(13.5)	(11.2)										斜め縦方向に半壊。
A0670	857	地輪	S14	17.3	11.7										第55図
A0671	873	地輪	T11 2号墓	17.0	11.4										A0793空風火輪と同地点出土。第55図
A0672	880	地輪	T12	13.9	10.1										
A0673	882	地輪	N18	18.6	12.6										第55図
A0674	885	地輪	K17 206号墓	19.0	13.2										第55図
A0675	891	地輪	O22 235号墓	16.0	10.4										第55図
A0676	892	地輪	M24 422号墓	16.4	13.0										
A0677	893	地輪	M24 416号墓	17.5	11.5										第55図
A0678	895	地輪	N24 414号墓	18.9	13.7										
A0679	905	地輪	K22 373号墓	18.4	8.3										第55図
A0680	912	地輪	J19 320号墓	18.0	12.2										第55図
A0681	914	地輪	O25 250号墓	18.5	11.8										
A0682	915	地輪	N25 451号墓	19.1	16.2										第55図
A0683	916	地輪	N25 450号墓	19.5	12.0										区画の配石に転用。第55図
A0684	923	地輪	N25 450号墓	15.9	11.7										区画の配石に転用。
A0685	924	地輪	N25 455号墓	15.2	(5.8)										区画の配石に転用、半壊。
A0686	925	地輪	N24 414号墓	17.6	11.2										第55図
A0687	927	地輪	M24 413号墓	18.5	13.5										第55図
A0688	928	地輪	M23 408号墓	18.4	14.0										
A0689	929	地輪	M23 407号墓	19.9	13.8										
A0690	930	地輪か	M23 406号墓	—	—										摩耗顕著計測不可。空風輪の可能性も。
A0691	931	地輪	L22 372号墓 SX160	18.1	13.2										元位置を保つと判断。

第 24 表　A 地区組立式五輪塔計測値一覧表（第 55 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	l	j	k	
A0692	931	地輪	L22 372号墓	25.6	16.5										
A0693	932	地輪	K22 375号墓	18.3	12.2										区画の配石に転用。第55図
A0694	933	地輪	K21 360号墓	26.2	10.2										大型品。第55図
A0695	934	地輪	K21 366号墓	18.8	(11.1)										一部欠損。第55図
A0696	935	地輪	K21 358号墓	20.1	14.6										
A0697	936	地輪	K21 355号墓	19.0	16.1										第55図
A0698	938	地輪	K20 354号墓	18.0	14.2										A0254空風輪・A0451火輪・A0552水輪とでそれぞれセット関係にある。第51図
A0699	942	地輪	J19 323号墓	16.1	10.1										第55図
A0700	943	地輪	J19 306号墓	16.3	10.2										第55図
A0701	944	地輪	J19 306号墓	16.4	10.1										第55図
A0702	945	地輪	J19 306号墓	15.4	10.0										第55図
A0703	946	地輪	J19 306号墓	13.8	9.3										第55図
A0704	947	地輪	J19 306号墓	17.5	11.9										第55図
A0705	948	地輪	J19 318号墓	20.3	12.2										第55図
A0706	949	地輪	K19 310号墓	(21.2)	(13.1)										
A0707	953	地輪	I15 174号墓	19.2	13.1										第55図
A0708	954	地輪	I14	21.9	16.0										第55図
A0709	955	地輪	I14	18.5	13.3										
A0710	956	地輪	I14	18.5	14.2										
A0711	958	地輪	J14 170号墓	17.4	13.2										
A0712	958	地輪	J14 170号墓	17.2	12.2										
A0713	959	地輪	J14 163号墓	22.2	17.5										第55図
A0714	961	地輪	K14 155号墓	18.8	12.6										第55図
A0715	963	地輪	K15 158号墓 SX58	15.5	11.0										直下に人骨片混在土を検出。第55図
A0716	964	地輪	L14 140号墓	22.7	18.0										やや大型品。第55図
A0717	966	地輪	L14 143号墓	29.7	15.1										大型品。第55図
A0718	967	地輪	L14 143号墓	27.8	14.8										大型品。第55図
A0719	968	地輪	L14 143号墓	19.7	13.5										
A0720	969	地輪	L14 143号墓	19.9	13.3										第55図
A0721	970	地輪	L14 141号墓	24.0	15.6										やや大型品。第55図
A0722	971	地輪	M14 132号墓	25.3	16.1										やや大型品。第55図
A0723	972	地輪	M14 132号墓	28.4	15.4										大型品。第55図
A0724	973	地輪	M13 125号墓	16.2	10.6										第55図
A0725	974	地輪	M13 125号墓	16.0	10.4										第55図
A0726	975	地輪	M13 125号墓	19.5	15.2										第55図
A0727	976	地輪	M13 125号墓	18.9	12.3										
A0728	977	地輪	M13 125号墓	19.0	13.4										
A0729	978	地輪	M13 125号墓	15.6	10.2										第55図
A0730	980	地輪	N14 130号墓	17.0	11.4										第55図
A0731	981	地輪	N13 122号墓	18.0	11.1										第55図

第24表　A地区組立式五輪塔計測値一覧表（第55図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量 a	b	c	d	e	f	g	h	l	j	k	備考欄
A0732	982	地輪	N13 122号墓	17.7	12.6										
A0733	983	地輪	N13 122号墓	17.7	11.0										第55図
A0734	984	地輪	N13 122号墓	19.0	7.6										第55図
A0735	985	地輪	O14 73号墓	19.7	14.5										区画の配石に転用。
A0736	986	地輪	O13 68号墓	21.2	16.1										区画配石に転用か、やや大型。第55図
A0737	987	地輪	P12 65号墓	17.9	11.6										半壊。
A0738	991	地輪	Q12	18.5	11.8										第55図
A0739	992	地輪	Q12	24.2	21.4										大型品。第55図
A0740	995	地輪	O～P14 52号墓	18.3	12.8										区画の配石に転用。第55図
A0741	998	地輪	O15 53号墓	—	—										計測不可。第55図
A0742	999	地輪	O15 53号墓	—	—										計測不可。第55図
A0743	1000	地輪	P14	—	—										区画の配石に転用。第55図
A0744	1005	地輪	N15 85号墓 東斜面	20.1	17.6										第55図
A0745	1006	地輪	N15 85号墓 東斜面	17.5	11.5										第55図
A0746	1007	地輪	N16 86号墓	19.0	12.5										第55図
A0747	1008	地輪	N16 87号墓	18.1	12.3										
A0748	1009	地輪	N16 91号墓	17.9	11.0										区画の配石に転用。第55図
A0749	1010	地輪	N16 91号墓	16.0	12.7										区画配石に転用、半壊。
A0750	1011	地輪	N16	17.5	12.3										
A0751	1012	地輪	N16 89号墓 SX153	17.6	(11.6)										元位置を保持か、人骨伴出。
A0752	1014	地輪	R～S12 19号墓	17.9	11.9										第55図
A0753	1015	地輪	T10 1号墓	17.3	13.8										
A0754	1017	地輪	T10 1号墓	17.5	10.3										欠損有り。第55図
A0755	1019	地輪	R～S13 10号墓	20.0	13.9										
A0756	1021	地輪	K16 195号墓	(29.0)	(18.9)										
A0757	1023	地輪	M16 184号墓	18.2	13.6										
A0758	1030	地輪	L16 183号墓	17.7	10.3										第55図
A0759	1034	地輪	L16 183号墓	15.8	11.8										
A0760	1037	地輪	L16 183号墓	17.6	13.2										第55図
A0761	1042	地輪	L16 183号墓	18.6	13.6										第55図
A0762	1043	地輪	L16 183号墓	20.5	17.7										やや大型。第55図
A0763	1045	地輪	L16 183号墓	20.2	16.9										第55図
A0764	1055	地輪	L16 183号墓	18.6	12.6										微欠損。第55図
A0765	1060	地輪	L16 182号墓	15.8	9.6										第55図
A0766	1061	地輪	L16 SK491	16.8	11.4										同地点でA0871空風(火）輪も伴出。
地輪各部位法量平均値				18.5	12.8	注意：（ ）内の不確定数値は除外して計算した。									

注意：括弧内の数字は欠失等による不確定数値。－は計測不要・不可能な場合を示す。＊印は柄穴及び抉り穴の数値である。

第 24 表　A地区組立式五輪塔計測値一覧表（第 55 図）

報告番号	採取番号	三輪一石出土部位	出土場所	各部位法量（凡例参照） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	備考
A0767	97	空風火輪	K17	30.3	14.3	7.4	8.6	(1.9)	6.8	5.8	(14.8)	—	15.0	—	—	—	16.7	6.6	13.2	13.8	3.9	6.3	3.6	空風・火輪周囲欠損。
A0768	204	空風火輪	N15 東斜面	33.0	16.1	5.9	11.0	2.9	7.5	4.4	17.6	—	11.0	—	—	(2.2)	13.9	5.2	10.6	13.0	5.9	—	—	火輪四隅破損。
A0769	207	(空)風火輪	N15 東斜面	(18.0)	—	8.0	10.0	0	0	0	(18.0)	(15.6)	10.8	(5.5)	1.8	(0.5)	15.2	7.2	—	—	—	—	—	空輪欠失。火輪四隅小欠。
A0770	235	空風火輪	N16	32.0	13.9	7.7	10.4	0	0	0	20.4	19.1	11.8	6.9	0.7	2.6	16.7	7.1	11.7	14.1	5.9	—	—	空輪・火輪部一部欠失。第56図
A0771	257	空風火輪	N15 東斜面	29.2	11.2	6.9	11.1	0	0	0	(18.9)	—	(10.1)	—	0.3	4.5	(14.0)	6.6	9.3	12.0	4.6	—	—	風・火輪部欠損あり。
A0772	261	空風火輪	N15 東斜面	26.6	11.1	6.0	9.5	0	0	0	17.7	18.6	9.8	7.6	0.3	3.6	14.3	5.8	8.9	11.9	4.5	—	—	空輪先端に欠あり。第56図
A0773	279	空風火輪	N18 99号墓	28.7	13.1	5.4	10.2	0	0	0	17.3	16.1	10.5	5.8	1.1	3.4	15.3	5.1	12.0	13.6	4.2	—	—	A0877水地輪と一体。
A0774	317	空風火輪	L17	(17.3)	8.3	4.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11.1	4.8	8.4	9.3	3.4	—	—	火輪部略欠損。
A0775	349	空風火輪	O15	(19.6)	7.3	4.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	13.3	3.8	11.0	12.4	2.8	—	—	火輪部欠損顕著。
A0776	351	空風火輪	N15 東斜面	(36.6)	(19.4)	6.2	11.0	*4.0	*9.4	5.8	19.5	17.5	15.3	5.6	0.7	2.5	17.2	5.1	14.2	14.9	5.4	8.6	9.8	空輪先端・火輪笠部損壊。第56図
A0777	359	空風火輪	L14 141号墓	(32.0)	(13.5)	5.3	9.8	3.4	6.4	4.7	16.2	14.0	10.4	5.5	0.7	1.5	13.5	4.8	10.7	12.7	6.3	7.0	(5.3)	空輪先端欠損。第56図
A0778	380	空風火輪	I14	31.8	13.6	4.9	13.3	0	0	0	(16.2)	—	12.0	7.1	0.1	1.3	14.5	4.0	11.1	(13.4)	6.5	6.6	(4.6)	空輪先端小欠、火輪笠部損壊。169号墓、178号墓に近接出土。第56図
A0779	390	空風火輪	I15 175号墓	31.3	15.8	5.9	9.6	*4.3	*7.2	—	17.2	15.0	12.7	6.4	0.2	2.3	14.2	4.9	11.6	13.8	7.0	—	—	縦方向に半壊。
A0780	395	(空)風火輪	I15	(15.5)	—	4.8	10.7	0	0	0	(16.7)	—	(10.6)	—	—	—	12.9	4.1	(10.0)	—	—	—	—	空輪欠・縦方向に損壊。
A0781	399	空風火輪	I15	(27.3)	(11.4)	5.0	10.9	0	0	0	17.1	—	11.1	5.4	0.3	2.3	12.8	3.7	(9.5)	12.3	6.5	—	—	空風・火輪縦方向に半壊。空輪欠損あり。
A0782	407	空風火輪	N25 445号墓	(31.1)	(14.1)	5.7	11.3	0	0	0	(17.2)	—	(11.0)	(6.1)	(2.0)	(0.5)	(14.4)	5.0	12.1	(14.5)	4.9	—	—	空風・火輪縦方向に半壊。
A0783	413	(空)風火輪	N25 454号墓	(17.5)	—	6.5	11.0	0	0	0	17.0	14.8	(10.0)	6.7	0.3	2.0	—	(4.8)	—	—	—	—	—	空輪欠・風火輪縦方向に半壊。
A0784	419	(空)風火輪	N25 454号墓	(15.3)	—	6.1	9.2	*3.4	*8.0	—	(17.6)	—	(12.6)	—	(0.4)	(2.0)	13.9	5.4	(11.8)	—	—	—	—	空輪欠、火輪半壊。
A0785	490	空風火輪	N22 233号墓	32.4	15.6	6.9	9.9	0	0	0	17.6	17.9	9.5	4.9	0.4	2.3	14.7	6.6	9.7	13.0	4.9	4.4	5.2	第56図
A0786	571	空風火輪	J19	28.3	(9.9)	8.8	9.6	0	0	0	(14.9)	—	13.0	—	—	(2.5)	16.1	7.8	12.8	13.9	6.3	—	—	空輪先端欠。風・火輪半壊。
A0787	607	空風火輪	I17	(17.3)	(5.9)	4.4	(7.0)	0	0	0	(11.5)	—	(7.8)	—	—	—	9.4	3.9	7.5	(8.3)	2.9	—	—	空風輪縦方向に半壊。火輪1/3残存。
A0788	621	空風火輪	J15 172号墓	30.4	13.2	6.5	10.7	(0.8)	—	—	18.4	—	12.4	6.6	0.2	2.9	14.3	5.5	11.1	12.6	4.7	—	—	空風火輪縦方向に半壊。
A0789	627	空風火輪	J15	(25.6)	(7.4)	5.9	12.3	(0.4)	7.6	—	20.1	—	12.6	—	—	—	14.4	5.0	10.9	(9.2)	—	—	—	縦方向に半壊、空輪欠損。
A0790	651	空風火輪	L13 138号墓	(31.0)	14.4	5.2	11.4	*3.3	*8.6	—	17.0	14.9	10.5	7.8	0.2	2.1	12.6	4.5	9.7	11.4	4.1	—	—	空輪と風火輪を合わせて実測。欠損多い。
A0791	831	空風火輪	O15 56号墓	20.0	7.3	6.7	6.0	0	0	0	13.2	—	7.9	—	0.1	2.3	10.7	5.4	7.8	9.0	2.7	—	—	空輪突起部・火輪部四周欠損あり。第56図
A0792	841	空風火輪	Q12 39号墓周辺	(26.8)	(12.5)	5.3	9.0	0	0	0	15.1	13.9	9.8	5.9	0.2	1.5	11.6	4.5	9.3	11.3	4.6	4.8	(2.8)	空輪先端・火輪笠部一部欠損。第56図
A0793	874	(空)風火輪	T11 2号墓	(15.9)	—	5.0	(10.9)	0	0	0	(18.6)	(16.4)	(12.6)	(6.2)	(0.3)	(2.5)	14.6	4.5	11.0	—	—	—	—	空輪欠失。風火輪縦方向半壊。A0671地輪と同地点出土。
A0794	875	空風火輪	T11	28.9	11.6	6.3	11.0	0	0	0	19.2	17.3	10.2	8.2	—	4.0	15.2	5.9	11.0	12.9	4.9	—	—	第56図
A0795	917	空風火輪	N25 450号墓	30.2	12.4	8.9	8.9	0	0	0	(19.2)	—	(13.3)	—	0.1	(1.5)	15.0	8.3	11.7	13.4	6.0	—	—	区画配石に転用、風・火輪縦方向に半壊。
A0796	919	空風火輪	N25 450号墓	(22.2)	—	5.2	11.5	0	0	0	(17.5)	—	11.8	(5.4)	0.3	1.6	(13.9)	4.7	(10.8)	(12.3)	—	—	—	区画配石に転用、空風輪損壊,縦方向に半壊。
A0797	922	空風火輪	N25 450号墓	(29.8)	(13.3)	5.5	11.0	*4.6	*8.2	—	19.7	—	13.6	—	0.5	2.8	15.9	4.7	12.5	14.6	5.0	7.4	(3.0)	区画配石に転用。空輪先端・火輪笠部に欠損。第56図
A0798	1025	空風火輪	M21 223号墓	29.2	15.1	5.4	8.7	*8.2	*7.4	—	18.4	—	11.7	—	0.3	2.2	16.0	5.8	11.7	13.7	4.9	—	—	区画石に転用、縦方向に半壊。
三輪一石の法量平均値				29.5	12.6	6.0	10.3	3.2 *4.6	7.1 *8.1	5.2	17.7	16.3	11.5	6.5	0.4	2.5	14.1	5.4	10.8	12.7	4.9	6.4	6.2	（ ）内数値除外。＊印は枘穴数値を示す。

第 25 表　A 地区三輪一石・二輪一石五輪塔計測値一覧（第 56 図）

報告番号	採取番号	三輪一石出土部位	出土場所	各部位法量（凡例参照） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	備考
A0799	2	空風(火)輪	M19表採	(15.2)	(9.0)	(6.2)	0.3	(5.9)	9.0	7.4	10.0	7.2	—	—										空輪先端欠、火輪欠（一石五輪塔かも）。
A0800	4	空風(火)輪	L24表採	—	—	(4.4)	0.5	3.9	9.4	8.1	9.2	6.7	—	—										空輪先端・火輪欠（一石五輪塔かも）。
A0801	7	空風(火)輪	M22表採	(16.2)	(10.6)	(5.6)	0.5	(5.1)	10.2	9.0	11.9	8.4	—	—										空輪先端・火輪欠（一石五輪塔かも）。
A0802	12	空風(火)輪	N15表採	(15.8)	(11.7)	(4.1)	0.2	(3.9)	9.3	8.6	10.0	8.2	—	—										一石五輪かも。火輪欠損。
A0803	15	空風(火)輪	M20表採	(15.0)	(7.9)	(7.1)	0.7	(5.7)	(11.2)	8.8	12.8	8.7	—	—										空輪先端欠損、火輪欠。一石五輪塔かも。
A0804	23	空風(火)輪	L16表採	(16.2)	(8.7)	(7.5)	(0.7)	(6.8)	11.0	9.2	12.3	7.8	—	—										空輪先端欠。火輪欠。一石五輪塔かも。
A0805	95	空風(火)輪	K18 295号墓	(15.7)	(9.6)	(6.1)	0.5	(5.6)	10.2	9.4	11.6	(9.9)	—	—										空輪先端欠、火輪欠。
A0806	102	空風(火)輪	L16 193号墓	(15.9)	(8.1)	(7.8)	1.4	(6.4)	(13.2)	(12.1)	(13.5)	(11.3)	—	—										空輪先端・火輪欠失、縦方向に半截。
A0807	141	(空)風(火)輪	K21 360号墓	(8.3)	(3.2)	(5.1)	(0.7)	(4.4)	—	(8.3)	(10.4)	6.4	—	—										空輪一部残、火輪欠失
A0808	172	空風(火)輪	N15 78号墓	(16.7)	(8.7)	(8.0)	0.9	7.1	9.8	7.8	(11.0)	(8.6)	—	—										一石五輪？（火輪以下欠失）。空輪先端欠。風輪小欠。
A0809	173	空風(火)輪	N15 78号墓	(17.9)	(12.1)	(5.8)	0.8	(5.0)	10.6	8.4	11.6	7.9	—	—										一石五輪か（火輪以下欠失）、空輪先端欠。
A0810	174	空風(火)輪	N15 78号墓	(13.7)	8.4	(5.3)	0.2	5.1	9.7	6.9	10.4	6.9	—	—										一石五輪？（火輪以下欠失）
A0811	191	空風(火)輪	N15 80号墓	(12.7)	(7.1)	(5.6)	0.9	4.7	(10.9)	(8.9)	(12.4)	(10.1)	—	—										縦方向に半壊、火輪欠失。
A0812	217	空風(火)輪	N15 東斜面	(15.3)	(8.2)	(7.1)	0.5	(6.6)	11.6	9.5	12.9	(9.4)	—	—										火輪欠。空輪先端欠。
A0813	223	(空)風(火)輪	M16 189号墓	—	—	8.9	—	—	—	—	(20.0)	(12.8)	—	—										空・火輪欠、比較的大きい。
A0814	232	空風(火)輪	N16	(12.7)	(7.7)	(5.0)	0.2	(4.8)	(10.3)	8.7	(10.7)	(8.0)	—	—										空輪先端・火輪欠。
A0815	236	空風(火)輪	N16	(19.5)	(11.7)	(7.8)	0.6	(7.2)	12.9	11.7	14.6	(12.0)	—	—										空輪先端・火輪欠。
A0816	246	空風(火)輪	N16	(16.4)	10.1	6.3	0.3	6.0	11.2	9.0	12.9	8.9	—	—										火輪欠。
A0817	247	空風(火)輪	N16	(13.4)	(7.1)	(6.3)	0.1	(6.2)	(10.2)	8.8	(12.6)	(8.7)	—	—										空輪先端・火輪欠。
A0818	275	空風(火)輪	N18	(17.5)	12.3	(5.2)	0.9	(4.3)	10.8	8.9	11.2	9.0	—	—										火輪欠。
A0819	276	空風(火)輪	N18	(14.4)	(8.7)	(5.7)	0.6	(5.1)	(12.1)	11.8	(14.0)	(11.8)	—	—										空輪先端・火輪欠。
A0820	304	空風(火)輪	N16	(14.0)	(8.8)	(5.2)	(0.6)	(4.6)	10.3	9.7	(11.3)	7.2	—	—										火輪欠。
A0821	309	空風(火)輪	N17	(13.7)	(6.0)	(7.9)	0.9	(7.0)	10.3	9.2	11.1	(7.5)	—	—										空・火輪欠。
A0822	360	空風(火)輪	L14 142号墓	(14.7)	(7.0)	(7.7)	1.4	(6.3)	10.1	7.9	(11.0)	(7.5)	—	—										空輪先端・火輪欠。
A0823	361	空風(火)輪	L14 142号墓	(13.6)	(8.8)	(4.8)	0.5	(4.3)	(9.3)	8.2	11.0	(8.7)	—	—										火輪欠。
A0824	370	空風(火)輪	K14 151号墓	(12.1)	7.6	(4.5)	0.1	(4.9)	10.4	7.8	11.5	7.9	—	—										火輪以下欠失。
A0825	374	空風(火)輪	J14	(13.6)	(8.6)	(5.0)	(0.5)	(4.5)	(14.7)	(13.6)	(16.0)	(12.6)	—	—										火輪欠。
A0826	405	空風(火)輪	N25 445号墓	(13.1)	(7.9)	(4.7)	0.5	(4.2)	(10.5)	(9.2)	(11.5)	(9.8)	—	—										縦方向に半截,火輪欠。
A0827	418	空風(火)輪	N25 454号墓	(14.7)	(10.5)	(4.2)	0.5	(3.7)	8.9	(8.4)	(9.4)	(8.7)	—	—										火輪欠。縦方向に半壊。
A0828	423	空風(火)輪	N25 454号墓	(14.7)	(9.9)	(4.8)	0.6	(4.2)	10.8	9.1	11.5	8.4	—	—										空輪先端・火輪欠。
A0829	426	空風(火)輪	N25	(16.1)	(10.0)	(6.1)	0.5	(5.6)	12.1	10.1	13.3	9.7	—	—										火輪欠。
A0830	429	空風(火)輪	O26 456号墓	(16.8)	(12.0)	(4.8)	0.6	(4.2)	11.5	10.3	(11.9)	(10.3)	—	—										火輪欠。
A0831	430	空風(火)輪	O26 456号墓	(16.4)	(11.2)	(5.2)	0.7	(4.5)	10.7	9.6	11.0	9.0	—	—										火輪欠。
A0832	433	空風(火)輪	O26 456号墓	(16.8)	(11.3)	(5.5)	0.4	(5.1)	10.1	8.6	11.5	(7.9)	—	—										火輪欠。
A0833	438	空風(火)輪	M25 448号墓	(14.9)	(10.1)	(4.8)	0.9	(4.0)	(10.7)	(9.6)	(11.0)	(9.3)	—	—										風輪半壊。空輪先端・火輪欠。
A0834	439	空風(火)輪	M25 448号墓	(16.1)	12.3	(3.8)	0.4	(3.4)	10.9	(9.8)	12.1	10.7	—	—										火輪欠、縦方向に半壊。
A0835	440	空風(火)輪	M25 448号墓	(19.2)	(12.4)	(6.8)	(0.9)	(5.9)	(10.5)	(10.1)	(12.5)	(10.0)	—	—										空輪先端・火輪欠。
A0836	444	空風(火)輪	M25 435号墓	(12.5)	(9.5)	(3.0)	0.6	(2.4)	8.8	7.6	9.6	8.0	—	—										空輪先端・火輪欠。
A0837	449	空風(火)輪	M25 433号墓	(13.4)	(6.6)	(6.8)	0.7	(6.1)	(9.0)	7.7	11.3	(7.8)	—	—										空輪半壊、火輪欠失。

第 25 表　A 地区三輪一石・二輪一石五輪塔計測値一覧

報告番号	採取番号	三輪一石出土部位	出土場所	各部位法量（凡例参照） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	備考
A0838	462	空風(火)輪	M24 418号墓	(14.2)	(8.8)	(5.4)	0.8	(4.6)	9.8	9.2	12.6	(9.3)	−	−										空輪先端・火輪欠。
A0839	466	空風(火)輪	M24 421号墓	(13.2)	(8.9)	(4.8)	(0.6)	(4.2)	(10.1)	(9.0)	(11.0)	(9.1)	−	−										火輪欠。
A0840	477	空風(火)輪	N24 247号墓	(15.7)	(8.5)	(7.2)	1.4	(5.8)	12.6	9.2	13.3	(9.0)	−	−										空輪先端・火輪欠。
A0841	493	空風(火)輪	M22 228号墓	(15.4)	(7.8)	(7.6)	(1.1)	(6.5)	(11.0)	(9.1)	(13.7)	(9.4)	−	−										縦方向に半截、火輪欠失（一石五輪塔かも）。
A0842	495	空風(火)輪	M22 228号墓	(21.1)	(13.8)	(7.3)	0.5	(6.8)	11.9	9.4	12.9	(9.8)	−	−										半壊、火輪欠（一石五輪？）。
A0843	499	(空)風(火)輪	M22	−	−	(5.3)	(0.8)	(4.5)	−	(11.4)	(13.5)	(12.6)	−	−										空・火輪欠失、風輪縦方向に半截。
A0844	527	空風(火)輪	L21 369号墓	(13.9)	(8.7)	(5.2)	0.7	(4.5)	(11.9)	(10.8)	(12.5)	(10.6)	−	−										縦方向に半截、空輪先端欠、火輪欠失。
A0845	530	空風(火)輪	K21 363号墓	(17.3)	12.8	(4.5)	0.5	4.0	8.7	7.3	9.1	6.4	−	−										火輪欠失（一石五輪かも）。
A0846	549	空風(火)輪	K20 316号墓	(12.7)	(6.9)	(5.8)	(0.4)	(5.4)	(7.8)	(7.3)	(9.3)	(6.3)	−	−										火輪欠失、縦方向に半壊。
A0847	550	空風(火)輪	K20 316号墓	(13.5)	(8.8)	(4.7)	(0.6)	(4.1)	(9.6)	(7.4)	(10.5)	(8.1)	−	−										火輪欠失、縦方向に半壊。
A0848	569	空風(火)輪	J19	(16.5)	9.9	(6.6)	0.4	(6.2)	10.1	8.2	10.6	9.0	−	−										流紋岩質溶結凝灰岩、火輪欠失。
A0849	578	空風(火)輪	J20 329号墓	(12.0)	(6.9)	(5.1)	0.3	(4.8)	9.0	8.0	10.4	(7.8)	−	−										空輪先端・火輪欠。
A0850	602	空風(火)輪	K17	(15.6)	(10.4)	(5.2)	(0.6)	(4.6)	(11.7)	(10.2)	(12.5)	(10.9)	−	−										縦方向に半壊、火輪欠。空輪先端欠。
A0851	605	空風(火)輪	K17 282号墓	(12.6)	(8.3)	(4.3)	(0.9)	(3.4)	10.4	(9.2)	(11.4)	(9.5)	−	−										火輪欠。
A0852	617	空風(火)輪	J15	(13.2)	6.4	(6.8)	0.3	(6.5)	10.7	10.1	13.2	(10.4)	−	−										風輪半壊、火輪欠。
A0853	647	空風(火)輪	L13 136号墓	(13.9)	(9.4)	(4.5)	−	(4.5)	9.7	8.7	11.0	(8.3)	−	−										空輪先端・火輪欠。
A0854	648	空風(火)輪	L13 136号墓	(13.6)	(7.8)	(5.8)	0.5	(5.3)	10.2	9.1	11.8	(9.3)	−	−										空輪先端・火輪欠。
A0855	663	空風(火)輪	N13 121号墓	(16.2)	(8.9)	(7.3)	0.9	(6.4)	11.0	9.2	14.0	11.6	−	−										火輪欠。
A0856	669	(空)風(火)輪	O13 68号墓	−	(2.1)	(8.9)	(0.4)	(6.2)	−	(9.5)	(12.7)	(8.5)	−	−										風輪縦方向に半壊、空・火輪欠。
A0857	714	空風(火)輪	P12 62号墓	(13.3)	(8.3)	(5.0)	0.3	(4.7)	9.5	8.1	10.7	(8.1)	−	−										空輪先端・火輪欠。
A0858	715	空風(火)輪	P12 62号墓	(14.3)	(8.4)	(5.9)	0.3	(5.6)	11.8	9.6	13.3	(9.2)	−	−										空輪先端・火輪欠。
A0859	721	空風(火)輪	P11	13.9	9.0	4.9	0.8	4.1	9.9	8.9	11.7	9.5	−	−										空輪先端・火輪欠。
A0860	759	空風(火)輪	Q13 37号墓	(13.6)	(7.3)	(6.3)	0.8	(5.5)	9.5	7.8	10.8	(7.8)	−	−										縦方向に半壊、火輪欠失。
A0861	821	空風(火)輪	Q14	(15.5)	(8.8)	(6.7)	0.3	(6.4)	11.3	9.2	12.7	8.9	−	−										風輪縦方向に半壊。空輪先端及び火輪欠。
A0862	827	空風(火)輪	Q14	(14.2)	(7.5)	(6.7)	(0.1)	(6.6)	(10.4)	(9.2)	(12.8)	(9.2)	−	−										縦方向に半壊、火輪欠。
A0863	835	空風(火)輪	Q13 43号墓	(17.4)	12.0	(5.4)	0.6	(4.8)	10.4	8.8	12.0	(9.9)	−	−										火輪欠。
A0864	843	空風(火)輪	Q12 39号墓周辺	(12.8)	(7.1)	(5.7)	0.5	(5.2)	9.3	8.1	10.5	8.0	−	−										空輪先端・火輪欠。
A0865	848	空風(火)輪	S14	(16.4)	(9.2)	(7.2)	0.4	(6.8)	11.2	9.6	12.7	10.2	−	−										空輪縦方向半壊。空輪先端及び火輪欠。
A0866	849	空風(火)輪	S14	(13.2)	(9.0)	(4.2)	0.7	(3.5)	(12.9)	(12.0)	(13.9)	(12.3)	−	−										縦方向に半壊。空輪先端及び火輪欠。
A0867	897	空風(火)輪	N26	(14.6)	(8.6)	(6.0)	0.4	(5.6)	9.7	8.1	11.2	(7.0)	−	−										空輪先端半壊、火輪欠失。
A0868	898	空風(火)輪	N26	(13.2)	(8.0)	(5.2)	0.3	(4.9)	11.1	9.6	12.6	(9.9)	−	−										空輪先端・火輪欠。空輪縦方向に半壊。
A0869	930	空風(火)輪	M23 406号墓	(20.3)	(11.7)	(8.6)	0.3	(8.3)	(13.5)	(12.4)	(15.2)	(12.8)	−	−										空輪先端・火輪欠失。空風輪縦方向に半壊。
A0870	1059	空風(火)輪	K17 下層	(14.5)	10.0	(4.5)	0.7	(3.8)	11.4	9.4	11.9	8.9	−	−										火輪欠失。
A0871	1061	空風(火)輪	L16	(11.0)	8.2	(2.8)	0.2	(2.6)	7.5	6.0	7.6	(6.1)	−	−										火輪欠失、一石五輪か。同地点でA0766地輪も伴出。
空風(火)輪一石法量平均値				13.9	9.9	6.7	0.6	5.0	10.4	8.8	11.6	8.4	−	−	以上A0799からA0871までの73基は火輪欠失のため、空風輪と同等に計測した。									

第 25 表　A 地区三輪一石・二輪一石五輪塔計測値一覧

報告番号	採取番号	二輪一石出土部位	出土場所	各部位法量（凡例参照） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	備考
A0872	17	水地輪	J16 表採	(21.4)	12.5	(8.9)	—	—	—	—	(16.3)	15.1	—	11.8	19.0	18.6	14.0	2.4						水輪上部欠損。
A0873	96	水地輪	K17 284号墓	23.3	13.7	9.6	4.6	6.9	3.7	15.2	18.3	15.9	6.1	12.8	20.0	19.1	13.5	4.0						第56図
A0874	183	水地輪	O15	22.2	13.1	9.1	0	0	0	10.2	11.4	9.1	4.7	12.2	12.1	12.4	0	0						水輪部縦1/3欠。
A0875	188	水地輪	N15 76号墓	22.7	13.0	9.7	2.3	6.6	3.2	12.4	16.6	13.0	4.8	11.8	17.0	(18.1)	14.0	1.1						地輪底部欠損あり。第56図
A0876	231	水地輪	N16 87号墓	(23.7)	11.1	(12.6)	—	—	—	(14.0)	(15.1)	13.3	7.3	10.2	16.0	15.8	0	0						半壊。
A0877	279	水地輪	N18 99号墓	29.2	15.9	13.3	*2.5	*11.3	*3.1	12.6	18.9	14.4	6.6	15.3	19.0	18.7	14.9	2.6						A0773空風火輪一石造とセット関係。第56図
A0878	375	水地輪	J14 166号墓	23.4	12.1	11.3	*3.4	*8.1	*4.8	12.2	17.9	13.5	6.1	11.2	17.8	17.3	13.2	1.4						水輪部欠損あり。第56図
A0879	381	水地輪	I14	30.7	16.5	14.2	0	0	0	15.8	21.6	16.6	9.7	15.3	24.7	23.9	19.1	3.9						半壊,水輪欠損あり
A0880	402	水地輪	N25 445号墓	28.1	15.0	13.1	*0.5	*12.0	*8.8	13.0	17.1	13.3	6.5	14.0	18.0	17.3	10.6	1.9						鑿痕跡顕著。第56図
A0881	491	水地輪	N21	26.9	15.0	11.9	*0.6	*12.2	*8.0	14.0	19.4	14.5	5.5	13.6	19.9	19.6	16.9	2.1						第56図
A0882	713	水地輪	O14 73号墓	(18.0)	10.8	(7.2)	—	—	—	—	(16.2)	15.4	(3.6)	9.9	17.4	17.0	11.8	1.6						縦方向に半壊、水輪欠損あり。
A0883	734	水地輪	Q10 110号墓	(12.8)	7.9	—	—	—	—	—	—	10.2	—	6.8	13.0	12.6	9.1	0.8						水輪大半欠失。地輪縦方向に半壊。
A0884	791	水地輪	K16 263号墓 南西石組外側	(13.4)	7.7	—	—	—	—	—	(12.6)	11.2	(5.7)	7.1	13.9	13.5	9.6	0.7						水輪部上半分欠失、地輪縦方向に半壊。
A0885	836	水地輪	Q13 43号墓	28.3	14.5	13.8	*1.4	*13.7	*(8.0)	15.5	21.7	15.6	8.3	14.0	20.8	20.3	16.7	1.6						第56図
A0886	939	水地輪	J20 328号墓	(14.8)	13.1	—	—	—	—	—	—	11.2	—	12.2	14.9	14.3	11.5	1.8						区画石に転用。半壊、水輪欠失。
A0887	951	水地輪	I15 175号墓	25.4	13.2	12.2	(0.5)	7.1	—	(11.3)	(17.4)	15.8	6.4	12.0	20.1	20.1	16.4	3.3						第56図
A0888	952	水地輪	I15 174号墓	21.1	11.9	9.2	*3.5	*9.0	*5.6	11.7	16.4	13.8	4.2	10.3	17.6	17.2	13.3	1.5						第56図
A0889	988	水地輪	P11 111号墓	(21.2)	13.0	—	—	—	—	—	—	(13.2)	—	12.6	(17.2)	(17.0)	—	(1.7)						縦方向に損壊、残存状態不良。
A0890	989	水地輪	P11 111号墓	(23.0)	13.2	(9.8)	—	—	—	(13.6)	15.0	12.6	4.0	11.5	16.3	16.2	12.4	2.3						水輪上部欠損。（一石五輪塔か？）
A0891	993	水地輪	Q14	27.9	14.6	13.3	(*0.6)	(*10.0)	—	(14.1)	19.0	15.2	8.6	13.8	21.0	20.3	0	0						水輪一部欠失。第56図
A0892	1024	水地輪	M21 225号墓	27.8	13.8	14.0	0	0	0	13.8	(18.9)	14.8	7.5	13.2	19.5	20.1	15.7	1.9						区画石に転用。縦方向に半壊。
A0893	1026	水地輪	N15 76号墓	(10.3)	8.0	—	—	—	—	—	—	11.4	—	(7.2)	15.7	(15.3)	—	—						水輪欠失、地輪下部半壊。
二輪一石の法量平均値				25.9	12.7	11.9	3.6 *2.0	6.9 *11.1	3.5 *6.1	13.3	17.8	13.6	6.4	12.0	17.8	17.6	13.7	2.1						（ ）内不確定数値は除外。＊印は☒・☒穴の数値を示す。

報告番号	採取番号	二輪一石出土部位	出土場所	各部位法量（凡例参照） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	備考
A0894	22	水地輪	L13 表採	(16.0)	(8.5)	(12.4)	—																	半壊（地輪も欠損）。
A0895(L)	33	(水)地輪	L17 表採	13.3	15.4	0	0																	水輪部欠失。
A0895(N)	198	(水)地輪	N16	15.0	17.4	10.3	0.5																	
A0896	318	(水)地輪	L17	11.6	12.1	0	0																	水輪欠失。
A0897	327	(水)地輪	R11	15.7	(19.6)	11.1	0.8																	水輪欠失。
A0898	334	(水)地輪	O14	(15.5)	(14.9)	9.7	1.1																	水輪欠、縦方向に半截。
A0899	398	(水)地輪？	I15	(17.7)	(13.3)	12.1	2.8																	水輪欠か。
A0900	561	(水)地輪	K19	(14.2)	(10.6)	10.0	2.4																	水輪欠失。
A0901	575	水地輪	J19	(14.9)	(11.0)	—	—																	水地輪半壊。
A0902	615	(水)地輪	J16	(20.0)	(14.4)	14.8	2.5																	水輪欠失。
A0903	616	(水)地輪	J16 268号墓	(13.8)	(9.1)	(8.9)	(1.2)																	水輪欠失。
A0904	752	(水)地輪	R11 31号墓 東崖	(12.0)	(8.1)	(8.6)	(1.4)																	半壊、水輪欠失。
A0905	753	(水)地輪	R12 34号墓	15.3	(12.3)	(11.7)	(1.5)																	水輪欠失（一石五輪塔か？）。
A0906	788	(水)地輪	L16 182号墓	14.2	(10.9)	10.6	0.9																	水輪欠失。
A0907	803	(水)地輪	O12	15.7	10.9	13.1	2.1																	水輪欠失（一石五輪塔か？）。
A0908	949	(水)地輪	K19 310号墓	(21.2)	(13.1)	(13.7)	(2.6)																	水輪欠失。
A0909	957	(水)地輪	I14	18.6	(12.9)	(10.3)	(1.6)																	縦方向に2/3欠損、水輪欠失。
A0910	960	(水)地輪	J15	19.5	(13.2)	(15.1)	(2.1)																	地輪半壊、水輪欠失。
A0911	990	(水)地輪	P11 111号墓	14.2	(11.2)	—	—																	半壊・水輪欠失。
(水)地輪一石法量平均値				15.3	14.0	11.5	1.6	以上A0894からA0911までの19基は、水輪を欠失するので地輪と同様に計測し、平均値を出した。																

第 25 表　A地区三輪一石・二輪一石五輪塔計測値一覧（第 56 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量（凡例参照） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	備考
A1014	14	相輪	K27 表採	(16.3)	—	—	—	4.4	8.2	3.7	—	—	—	—	10.0	12.6	8.7	11.5	6.1					宝篋印塔相輪上部3/4欠失。
A1015	50	相輪	L17 C−2中央	(30.4)	(4.4)	4.4	14.1	3.4	(4.1)	—	(6.8)	8.0	11.0	7.6	8.7	12.2	9.9	11.3	—					表採、相輪宝珠部・伏鉢部⊠欠損。第52図
A1016	51	相輪	N18 斜面 表土	(15.9)	8.6	4.2	(3.1)	—	—	—	10.1	8.1	11.4	7.8	—	—	—	—	—					相輪九輪以下欠失。
A1017	55	相輪	K16 266号墓	(17.6)	—	—	(12.5)	(5.1)	—	—	—	—	—	—	10.6	(12.9)	(9.8)	—	—					相輪。九輪下部・下請花のみ残存。
A1018	100	相輪	K16 268号墓	(10.4)	—	—	—	—	10.4	5.2	—	—	—	—	—	—	7.3	11.2	6.2					伏鉢部のみ残存。宝珠から下請花部まで欠失。
A1019	136	相輪	J20 335号墓	(34.7)	(7.6)	5.0	(11.5)	3.6	4.0	(3.0)	8.9	7.1	9.8	7.2	8.2	10.4	8.0	9.7	6.2					九輪上部欠失。宝珠・⊠部欠損。
A1020	137	相輪	J21 338号墓	(9.9)	—	—	(5.7)	(4.2)	—	—	—	—	—	—	9.0	11.2	—	—	—					相輪九輪一部と下請花部のみ。
A1021	137	相輪	J21	(28.4)	7.0	5.0	12.0	4.4	—	—	9.0	7.2	10.7	7.9	9.3	12.2	—	—	—					相輪伏鉢部欠失。宝珠一部欠損。
A1022	192	相輪	N16	42.2	7.4	5.4	14.4	4.2	11.0	6.8	9.4	8.3	—	9.0	10.0	13.7	8.9	13,3	6.0					相輪。上請花部と九輪上部で破損。第52図
A1023	240	相輪	N16 斜面 88号墓	(38.5)	(8.6)	5.2	15.9	4.2	(4.6)	—	10.8	8.8	12.9	9.3	10.7	13.9	8.0	—	—					相輪宝珠・伏鉢部破損。第52図
A1024	243	相輪	N16 88号墓	(36.1)	—	—	27.7	8.4	—	—	—	—	—	9.9	15.2	18.1	—	—	—					九輪・下請花部のみ残存、縦方向に半壊。
A1025	296	相輪	N15 80号墓	(30.2)	—	—	(16.2)	4.0	10.0	6.1	—	—	—	8.6	9.6	12.8	9.7	12.7	6.5					相輪。宝珠・上請花部欠失。
A1026	314	相輪	L17	(18.3)	4.2	4.0	(10.1)	—	—	—	7.5	7.6	9.9	7.7	—	—	—	—	—					相輪。九輪下部以下欠失。
A1027	315	相輪	L17 202号墓	(29.6)	(1.8)	3.9	13.5	(3.6)	(6.8)	(1.9)	—	(7.4)	10.2	7.8	9.7	11.9	9.5	(11.2)	5.4					相輪。宝珠・伏鉢部損壊。
A1028	316	相輪	L17 202号墓	(20.2)	—	—	(7.0)	3.9	(9.3)	(5.2)	—	—	—	—	8.5	12.3	9.9	12.1	5.5					相輪。九輪下部以下のみ残存。
A1029	319	相輪	L16	(30.2)	(8.5)	4.1	8.7	4.1	(4.8)	—	10.2	9.2	12.5	10.4	10.7	12.7	9.7	(10.8)	—					相輪。宝珠・伏鉢部欠損あり。第52図
A1030	340	相輪	O14 東斜面	(14.5)	—	—	(3.0)	3.6	7.9	(3.5)	—	—	—	—	9.4	12.1	9.0	11.4	7.3					相輪。下請花・伏鉢のみ残存。
A1031	378	相輪	J14 166号墓	(12.3)	—	—	(0.9)	4.2	7.2	4.3	—	—	—	—	(10.1)	11.4	9.0	10.5	6.4					相輪か。下請花・伏鉢部のみ残存。
A1032	400	相輪	I15	(15.4)	—	(3.8)	11.6	—	—	—	—	—	(7.3)	6.0	8.6	—	—	—	—					宝珠・下請花・伏鉢欠失。上請花及び九輪に欠損あり。第52図
A1033	408	相輪	N25	(35.4)	(6.3)	4.7	13.3	4.0	7.1	(3.4)	10.1	9.0	11.9	9.7	9.7	12.0	8.9	11.0	6.6					宝珠・伏鉢枘部一部欠損。第52図
A1034	445	相輪	M25 433号墓	(14.2)	—	—	(10.6)	(3.6)	—	—	—	—	—	—	7.8	9.3	—	—	—					九輪の一部と下請花の一部のみ残存。
A1035	622	相輪	J15	(20.8)	—	—	(7.7)	(4.1)	9.0	4.5	—	—	—	—	9.1	(11.9)	10.1	12.3	6.0					九輪下部〜伏鉢部のみ残存。請花部欠損あり。
A1036	640	相輪	L15 145号墓	(15.1)	(7.9)	4.8	(2.4)	—	—	—	10.4	8.2	12.0	8.0	—	—	—	—	—					宝珠・上請花のみ残存。
A1037	707	相輪	P12 65号墓	(20.2)	8.9	6.0	—	—	—	—	13.1	11.4	14.1	(5.5)	—	—	—	—	—					宝珠・上請花部のみ。請花部に5.3×5.3cmの枘あり。
A1038	738 741	相輪	R11 31号墓 西崖下	37.1	10.3	4.2	10.5	3.7	8.4	4.0	8.9	7.5	9.8	7.7	9.0	10.7	8.2	10.1	6.1					接合復元計測。第52図
A1039	769	相輪	S11 15号墓	(33.3)	(15.6)	6.9	(10.8)	—	—	—	12.1	9.7	12.6	9.1	—	—	—	—	—					宝珠（先端一部欠）・上請花部及び九輪部（下半分以下欠失）のみ残存。第52図
A1040	777	相輪	S12 21号墓西側	(10.3)	—	—	—	(1.2)	9.1	5.2	—	—	—	—	—	—	8.4	12.4	7.6					下請花部・枘のみ残存。
A1041	787	相輪	L16 183号墓	(16.7)	—	—	(8.6)	3.4	(4.7)	(0.3	—	—	—	—	8.8	10.9	9.7	11.4	(5.8)					九輪（上部欠）・下請花・伏鉢（枘欠）のみ残存。
A1042	876	相輪	T11 2号墓	(10.6)	(6.6)	3.3	(0.7)	—	—	—	8.9	6.0	9.0	(5.7)	—	—	—	—	—					宝珠（先端欠）・上請花のみ、九輪部以下は欠。第52図
A1043	908	相輪	K17 284号墓	(19.3)	—	—	(14.4)	(4.9)	—	—	—	—	—	(8.1)	9.1	11.7	—	—	—					九輪（上部欠）・下請花（下部欠損）のみ残存。
相輪部法量の平均値				39.7	7.7	4.7	14.2	4.2	8.4	5.0	9.9	8.3	11.3	8.4	9.6	12.1	9.0	11.4	6.3	（ ）内不確定数値は除外して算出した。				

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量（凡例参照） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	備考
A1044	54	屋根部	L17 C−2	22.2	(8.2)	8.2	(20.8)	9.8	13.6	21.4	6.0	6.6												宝篋印塔笠部。隅飾先端欠失復元して実測。第52図
A1045	241	屋根部	N16 88号墓	19.5	10.7	6.8	28.2	9.8	18.0	24.0	7.6	8.6												隅飾及び上段形一部欠。第52図
A1046	618	屋根部	J15	(18.2)	(11.4)	7.2	(29.2)	—	20.2	27.0	—	—												上段形欠失・隅飾欠損。
屋根部法量の平均値				23.0	12.5	7.4	28.9	11.4	19.0	25.9	6.8	7.2	（ ）内の不確定数値は除外して算出した。											

第 25 表　A地区相輪ほか計測値一覧（第 52 図）

報告番号	採取番号	出土部位名称	出土場所	各部位法量（凡例参照） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	備考
A1047	234	基礎部	N16 斜面 86号墓	26.0	26.8	19.0	23.0	2.0	2.2	21.7														宝篋印塔基礎。底部に径6.6、深さ7.2cmの堀り窪みあり。第52図
A1048	1018	基壇	T11 2号墓	9.4	27.2																			宝篋印塔の基壇。第52図
A1049	1	石仏	O25 ～ 26 458号墓																					阿弥陀仏か。閃緑岩、拓本。第52図
A1050	—	石仏	B地区 表採																					阿弥陀仏か。第52図

注意：括弧内の数字は欠失等による不確定数値。—は計測不可能な場合を示す。＊印は柄穴及び抉り穴の数値である。

第 25 表　A地区相輪ほか計測値一覧（第 52 図）

報告番号	採取番号	出土場所	各部位の法量（cm）（別掲凡例参照　） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	備考欄
A0912	25	L13	45.6	(12.5)	5.4	7.4	8.6	11.7	11.5	4.2	11.8	9.5	(12.1)	14.7	5.6	1.4	13.8	5.8	14.7	14.7	12.6	2.9	空輪先端復元・笠部軒欠損。第56図
A0913	156	I17 斜面	45.0	12.5	4.8	7.6	9.0	11.1	12.0	3.9	12.5	9.0	14.3	13.9	5.4	2.1	13.9	5.0	14.3	14.4	12.2	1.0	空輪先端復元。第56図
A0914	157	N16	52.9	10.9	4.9	9.1	12.0	16.0	12.0	2.4	12.8	11.0	16.6	16.2	7.6	2.4	16.2	6.5	16.7	16.0	10.6	1.7	略完形品。第56図
A0915	161	N15	(44.6)	(9.6)	5.0	7.8	11.2	11.0	11.6	4.2	12.6	10.9	(16.0)	16.9	4.7	2.0	13.0	4.6	15.2	15.0	11.3	1.7	空輪先端・火輪笠軒一部欠。第56図
A0916	165	N15	(49.7)	(14.2)	5.2	8.2	9.9	12.2	10.0	4.2	11.0	8.8	14.9	15.0	5.3	2.6	14.2	5.5	15.0	14.8	0	0	縦半切（幅6.2 ～ 9.8cm）、空輪先端部復元幅6cm、高7cm。第56図
A0917	167	N15	(34.8)	(5.9)	(4.4)	7.0	8.1	9.4	—	—	—	10.4	12.5	14.8	4.8	2.1	13.2	5.4	15.0	(14.2)	0	0	空風輪損壊。地輪欠損あり。
A0918	176	N15	(28.0)	—	5.0	6.4	7.6	9.0	—	(4.9)	10.0	8.6	11.4	13.2	(3.3)	(1.6)	11.5	4.5	14.1	14.0	0	0	空輪損壊。火輪軒一部欠損。
A0919	177	N14 77号墓	(42.6)	(10.7)	3.6	8.6	10.2	9.5	9.2	3.2	9.6	8.2	13.4	13.8	4.2	1.9	12.8	5.4	13.0	12.2	11.2	1.4	空輪先端部復元幅5.5cm、高4.1cm。第56図
A0920	180	N～O15 76号墓	(46.2)	(8.6)	4.5	10.4	9.6	13.1	11.0	3.8	11.7	8.0	14.8	14.8	4.2	3.3	17.0	7.0	14.0	14.0	9.2	1.4	空輪先端・火輪笠軒一部欠。第56図
A0921	181	N～O15 76号墓	(42.5)	(10.0)	4.3	6.2	8.6	13.4	9.6	3.7	11.0	8.7	12.8	13.1	4.0	2.5	13.0	4.6	13.5	13.0	10.0	1.2	空輪先端欠。第56図
A0922	189	N15 80号墓	36.0	9.5	4.4	5.4	6.5	10.2	8.8	3.2	9.8	8.6	13.6	13.4	4.8	2.2	12.2	4.6	12.8	10.0	—	0.6	第56図
A0923	203	N15 東斜面	(46.6)	(10.2)	4.6	7.8	9.4	14.6	11.0	2.6	12.2	10.0	(13.8)	(14.6)	5.8	1.8	16.1	5.0	16.2	16.4	12.0	2.0	空輪先端・火輪笠軒一部欠。
A0924	267	N17	(40.0)	(9.1)	5.9	(7.1)	7.7	(10.2)	9.4	3.4	10.6	(8.3)	11.2	13.7	3.8	2.1	12.6	4.6	13.4	12.9	0	0	火輪欠あり、地輪半壊。
A0925	290	N16 92号墓	(39.7)	(7.4)	4.4	6.0	9.6	12.3	7.7	2.9	10.0	7.6	(12.6)	(13.0)	(3.8)	(3.2)	12.8	5.8	13.0	12.0	0	0	空輪先端・火輪笠軒一部欠。第56図
A0926	295	N15 80号墓	54.6	11.0	7.2	8.2	11.6	16.6	11.0	3.9	12.8	8.2	(14.8)	14.6	7.0	4.0	14.8	6.4	(14.8)	14.8	0	0	火・地輪一部欠。第56図
A0927	331	O14 東斜面	(38.0)	(9.2)	5.3	7.1	8.8	7.6	10.0	3.4	11.4	8.2	(12.8)	(13.6)	4.8	2.0	13.0	5.5	13.6	12.8	10.0	1.1	空輪先端・火輪笠軒一部欠。第56図
A0928	393	I15 175号墓	(44.9)	(8.9)	5.7	7.8	13.0	(9.5)	11.9	4.7	12.4	11.6	—	(16.4)	—	(2.0)	(15.7)	7.2	15.2	(14.0)	0	0	縦方向に半壊。空・火・水輪及び地輪部に各々一部欠損あり。
A0929	415	N25 454号墓	(40.4)	(10.0)	5.2	7.0	9.2	9.0	9.8	4.0	10.8	8.0	(13.2)	(13.4)	3.4	1.4	13.0	5.1	13.8	13.6	7.8	0.6	空輪先端・火輪笠軒一部欠。第56図
A0930	574	J19	(49.4)	(15.8)	5.2	8.8	11.5	(8.1)	(12.8)	5.3	14.4	11.2	(17.1)	(17.7)	4.6	2.0	16.4	6.0	17.4	16.6	0	0	空・火輪欠損あり。地輪部不整形。第56図
A0931	582	J19 ～ 20 325号墓	(39.6)	(7.6)	5.4	7.2	8.8	(10.6)	10.3	3.4	11.7	9.2	—	(14.2)	—	(2.5)	13.5	5.3	14.4	—	—	—	空風火輪縦方向に半壊地輪下部欠失。
A0932	643	J14 167号墓	(44.2)	(12.9)	5.2	5.5	(8.9)	(11.7)	11.6	3.9	12.6	9.7	—	(14.5)	—	1.4	13.0	5.3	(14.5)	(14.0)	0	0	水・地割れ分離。
A0933	650	L13 137号墓	(38.4)	(7.9)	4.0	(6.5)	9.3	10.7	10.2	3.3	11.7	9.2	—	14.6	(3.5)	1.7	13.5	5.0	(13.3)	(12.3)	0	0	火輪半壊状態。
A0934	696	P13 43号墓	(33.9)	(9.4)	3.8	5.9	6.4	8.4	10.4	3.1	(11.0)	8.0	(12.4)	(12.6)	4.0	(1.2)	11.0	3.8	12.4	11.1	7.0	1.5	空輪先端・火輪笠軒一部欠。
A0935	708	P12 65号墓	(40.2)	(8.0)	4.8	6.1	8.2	13.1	8.0	3.6	8.8	6.4	11.2	10.2	3.6	1.4	11.0	6.1	12.0	12.4	0	0	空・地輪一部欠損。第56図
A0936	742	R11 31号墓 西崖下	(43.2)	(9.8)	4.6	7.0	8.8	13.0	9.8	2.9	11.8	9.0	(12.6)	(12.8)	(2.8)	(1.0)	13.0	6.8	(15.0)	14.4	10.6	0.8	空・火・水・地輪一部欠損。第56図
A0937	755	Q13 37号墓 北西側 崖下	(52.8)	(10.2)	6.6	9.0	10.0	17.0	10.7	3.8	13.0	9.2	(16.5)	15.8	(6.4)	3.8	16.2	5.4	16.3	16.6	0	0	空・火輪一部欠損あり。第56図
A0938	758	Q13 37号墓 北西側 崖下	(44.6)	(13.4)	4.8	6.8	11.4	8.2	9.6	3.6	11.2	9.4	(13.8)	14.2	4.4	2.0	12.8	5.8	14.0	13.6	0	0	空輪先端復元高6.6cm。火輪の一部分を欠失。第56図
A0939	770	S11 15号墓	41.8	11.8	4.8	6.0	7.6	11.6	8.3	3.8	10.5	8.6	(13.4)	(13.2)	(3.6)	1.5	12.0	4.4	13.0	12.2	0	0	火輪一部欠損。鑿痕明瞭。第56図
A0940	816	P14	(34.1)	(6.7)	4.2	4.9	8.3	10.0	(6.7)	(2.0)	(8.1)	7.5	10.0	11.6	3.5	1.2	11.8	4.0	12.4	(13.2)	0	0	空風火・地輪損壊。

第 26 表　A地区一石五輪塔計測値一覧（第 56 図）

報告番号	採取番号	出土場所	各部位の法量（cm）（別掲凡例参照 ）																			備考欄
			a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	
A0941	818	P14	(36.0)	(9.6)	3.8	6.8	7.0	8.8	9.6	3.6	10.6	8.2	11.4	12.2	4.6	1.2	10.5	4.0	(12.6)	12.4	0	0	空・地輪一部欠損。第56図
A0942	819	P14	(44.3)	(13.2)	5.0	7.1	8.2	10.8	12.4	4.6	13.6	9.8	(15.4)	15.2	4.8	1.8	14.0	5.6	15.7	15.0	13.0	2.0	空・火輪一部欠あり。鑿痕顕著。第56図
A0943	834	Q13 43号墓	(40.1)	(6.8)	5.2	7.2	9.7	11.2	—	—	—	8.8	(14.0)	(14.4)	(4.2)	1.9	13.8	3.2	14.4	13.4	12.2	1.4	空風輪欠損著し。鑿痕顕著。第56図
A0944	838	Q12 39号墓周辺	(43.5)	(10.3)	5.8	8.0	8.6	10.8	9.2	5.0	11.8	9.4	(15.6)	15.2	(4.6)	2.2	13.2	5.8	15.4	15.4	0	0	空・火輪一部欠損あり。第56図
A0945	858	S13	(44.6)	(11.4)	5.2	7.4	8.6	12.0	13.6	4.8	14.6	10.6	(15.0)	14.6	5.3	3.0	15.4	4.8	16.2	15.4	12.0	2.6	空・火輪一部欠損あり。第56図
A0946	868	T10 2号墓	(44.8)	(8.6)	5.8	7.2	9.0	14.2	9.8	2.7	11.4	9.2	13.9	13.6	4.4	2.6	13.3	4.6	12.8	12.8	0	0	空・地輪一部欠。第56図
A0947	883	東斜面南側トレンチ	55.8	13.2	6.2	9.8	13.2	13.4	12.2	4.3	14.2	11.0	(16.8)	17.4	6.2	2.5	14.8	7.5	16.0	14.5	0	0	火輪一部欠。略完形品。
A0948	913	O25	(35.3)	(6.6)	4.3	6.2	7.6	10.6	(11.8)	3.4	(12.6)	10.0	(14.0)	14.2	(4.0)	1.4	13.0	4.6	(13.8)	(13.2)	0	0	空風・火・地輪欠損あり。第56図
A0949	918	N25 450号墓	(42.2)	(8.3)	5.2	7.4	10.1	(11.2)	9.8	3.6	11.1	7.9	—	(13.9)	(3.7)	(2.1)	14.5	5.1	13.7	(12.3)	0	0	空風・地輪縦方向に半壊。火輪の軒三方に欠損あり。第56図
A0950	962	L15 145号墓	(59.6)	(17.0)	5.8	9.4	12.2	15.2	12.6	5.6	14.6	10.8	18.8	18.6	5.8	2.0	17.0	8.0	18.6	16.4	13.0	3.6	空輪欠損あり。地輪部のみ区画用配石として転用。第56図
A0951	965	L13 138号墓	(42.4)	(8.0)	5.0	7.0	7.6	14.8	9.6	2.6	11.2	9.4	(12.6)	(12.2)	4.4	2.6	13.0	4.4	12.6	12.8	0	0	空・火輪に欠損あり。第56図
A0952	403	N25 445号墓	(33.9)	(8.5)	6.5	7.7	11.2	—	11.9	5.8	13.4	10.1	14.9	16.7	5.6	1.8	14.7	7.4	—	—	—	—	空風火水輪。地輪欠失。
A0953	404	N25 445号墓	(26.2)	(6.5)	3.9	5.1	10.7	—	(9.4)	(2.7)	(10.4)	9.9	—	13.4	—	—	13.1	6.1	—	—	—	—	空風火水輪縦方向に半壊。地輪欠失。
A0954	581	J20	(29.8)	(8.9)	4.2	5.2	11.5	—	10.3	3.3	10.6	8.1	9.9	12.6	3.2	1.7	13.2	6.6	—	—	—	—	空風火水輪。地輪欠失。
A0955	654	L13 138号墓	(31.4)	(9.1)	4.7	7.4	10.2	—	9.9	3.3	(11.3)	7.4	(12.0)	12.9	(4.8)	2.5	13.4	5.2	—	—	—	—	空風火水輪。地輪欠失。
A0956	743	R11	(28.2)	(5.5)	5.6	7.1	10.0	—	(8.0)	—	(10.3)	(8.3)	—	(12.4)	—	3.1	(12.1)	6.3	—	—	—	—	空風火水輪縦方向に半損壊。地輪欠失。
A0957	265	N17	(32.5)	(2.1)	(4.4)	7.8	8.5	9.7	—	—	(6.4)	(8.8)	—	(13.8)	(4.4)	(2.6)	(11.5)	5.2	(9.9)	(7.2)	0	0	風火水地輪縦方向に半壊。空輪略欠失。
A0958	365	K14 155号墓	(27.2)	—	(3.9)	6.5	7.1	9.7	—	—	(8.6)	8.2	11.1	12.5	3.7	2.6	12.9	3.8	13.0	12.5	0	0	風火水地輪。空輪欠失しかつ風輪半壊。
A0959	733	Q10 110号墓	(30.6)	—	(4.8)	6.1	11.1	8.6	—	—	(10.8)	(10.4)	12.6	14.2	3.9	1.0	(12.2)	5.9	12.8	11.8	8.6	1.1	風火水地輪縦方向に半壊。空輪欠失。
A0960	761	Q13 37号墓南側	(42.0)	(2.5)	7.2	8.7	13.2	10.4	—	—	14.4	13.0	—	17.8	(5.3)	(2.5)	16.5	8.5	16.6	16.4	10.7	1.8	風火水地輪縦方向に半壊。空輪欠失。
A0961	840	Q12 39号墓周辺	(37.1)	(2.6)	(5.4)	8.0	8.6	12.5	—	—	—	10.2	(16.0)	(16.0)	5.6	1.8	16.0	6.0	17.3	16.6	12.2	2.0	風火水地輪。空輪欠失・風輪欠損及び火輪一部欠失す。鑿痕明瞭。第56図
A0962	1002	O15 57号墓	(34.4)	(2.2)	5.2	6.6	9.4	11.0	—	—	11.2	9.2	(14.6)	(15.4)	(4.0)	1.6	13.4	5.2	13.8	12.8	10.8	1.4	風火水地輪。空輪欠失、火輪一部に欠損あり。鑿痕顕著。
A0963	1003	O15 57号墓	(34.0)	—	(5.4)	9.2	7.4	12.0	—	—	—	9.8	(16.5)	(15.6)	(5.2)	(2.6)	13.8	5.4	15.8	14.6	11.0	2.4	風火水地輪。空輪欠失。風輪及び火輪部に損壊あり。歪みあり。鑿痕明瞭。第56図
A0964	1004	O15	(39.8)	—	(8.4)	9.0	9.4	13.0	—	—	—	10.4	18.2	18.4	6.0	2.2	16.6	5.4	17.6	16.0	0	0	風火水地輪。空輪欠失。風輪部に欠損あり。第56図
A0965	27	（不明）	(20.9)	—	—	6.5	7.7	6.7	—	—	—	(6.2)	9.4	11.0	3.6	—	10.2	4.4	10.7	9.2	—	0.5	火水地輪のみ。
A0966	37	N23	(27.1)	—	—	8.0	10.5	8.6	—	—	—	—	—	(9.4)	—	1.2	(11.7)	—	(12.4)	(10.5)	—	1.4	火水地輪のみ。
A0967	99	K16	(34.6)	—	—	7.1	11.7	15.8	—	—	—	(7.9)	11.3	12.9	3.9	2.4	13.7	6.7	15.7	14.5	0	0	火水地輪のみ。
A0968	190	N15 80号墓	(27.0)	—	—	(7.3)	10.0	9.7	—	—	—	—	(13.0)	15.2	3.6	2.0	13.9	6.2	15.3	15.1	10.7	0.9	火水地輪。空風輪欠失、火輪欠損あり。
A0969	193	N16	(37.0)	—	—	(9.2)	12.4	15.4	—	—	—	—	—	—	—	—	16.8	7.6	16.0	16.6	13.4	1.8	火水地輪のみ。火輪欠損あり。第56図
A0970	201	N14 74号墓	(32.3)	—	—	(7.8)	10.8	(13.7)	—	—	—	—	—	(16.0)	(5.5)	(3.3)	16.1	6.0	(15.7)	(12.5)	0	0	火水地輪。火輪上半分欠失、地輪部は半壊。
A0971	205	N15 東斜面	(38.6)	—	—	(7.6)	12.6	18.4	—	—	—	—	(14.8)	15.3	5.4	3.2	15.8	8.0	15.2	15.0	0	0	火水地輪のみ。火輪欠損あり。第56図
A0972	206	N15 東斜面	(33.5)	—	—	(8.6)	9.6	15.3	—	—	—	(7.6)	—	(14.2)	(3.0)	(2.6)	16.3	6.4	14.3	13.9	0	0	火水地輪。空風輪欠、火輪軒部に欠損あり。
A0973	210	N15 東斜面	(31.4)	—	—	(6.8)	10.2	14.4	—	—	—	—	11.1	13.2	2.9	2.3	12.6	5.6	13.4	12.6	9.4	2.0	火水地輪。空風輪欠、火輪の一部を欠損。
A0974	220	N15 東斜面	(29.6)	—	—	(7.8)	9.8	12.0	—	—	—	—	(11.3)	14.4	(5.1)	—	14.0	6.5	16.2	16.0	0	0	火水地輪縦方向に半壊。火輪に損壊あり。
A0975	221	M16 182号墓	(29.3)	—	—	(5.6)	10.3	13.4	—	—	—	—	—	(13.2)	—	(1.9)	12.4	6.9	13.1	12.9	0	0	火水地輪。火輪半壊。
A0976	225	N16 87号墓	(23.3)	—	—	(6.7)	6.5	(10.1)	—	—	—	(8.4)	—	12.9	(3.8)	2.1	11.9	3.8	12.2	(12.1)	6.8	1.9	火水地輪。火輪・地輪一部欠損。
A0977	228	N16 87号墓	(28.1)	—	—	8.0	10.2	9.9	—	—	—	8.2	—	12.5	—	(1.6)	12.3	5.3	13.2	12.0	0	0	火水地輪。火輪損壊。
A0978	280	N18	(18.9)	—	—	(5.0)	5.8	(8.1)	—	—	—	—	—	11.7	(4.1)	1.7	10.4	3.6	(12.2)	(11.6)	0	0	火水地輪。火輪・地輪一部欠損。
A0979	293	N16 90号墓	(23.1)	—	—	(5.8)	8.3	9.0	—	—	—	—	—	(15.4)	—	—	15.1	4.9	16.6	(16.4)	0	0	火水地輪。火輪・地輪損壊あり。

第 26 表　A 地区一石五輪塔計測値一覧（第 56 図）

報告番号	採取番号	出土場所	各部位の法量（cm）（別掲凡例参照　）																			備考欄
			a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	
A 0980	299	N15 80号墓	(27.1)	−	−	(8.9)	10.2	(8.0)	−	−	−	−	−	(12.4)	−	−	12.3	7.2	(12.8)	(12.3)	8.8	1.1	火水地輪。火輪・地輪損壊。
A 0981	329	O14	(33.8)	−	−	(9.1)	11.6	13.1	−	−	−	−	−	(18.0)	−	(2.4)	17.2	5.5	18.6	18.4	13.5	2.2	火水地輪。火輪損壊。
A 0982	330	O14 東斜面	(32.8)	−	−	(7.8)	9.6	15.4	−	−	−	(6.0)	−	(13.0)	(5.0)	(2.3)	13.8	5.6	13.6	14.6	0	0	火水地輪のみ残存。火輪欠損。第56図
A 0983	350	O15	(32.8)	−	−	(7.7)	10.9	14.2	−	−	−	−	15.5	18.1	3.6	2.2	16.9	6.7	17.5	17.5	0	0	火水地輪のみ残存。火輪一部に欠損あり。
A 0984	411	N25 445号墓	(27.1)	−	−	(8.3)	9.1	9.7	−	−	−	(9.5)	−	(15.1)	−	(1.8)	13.5	5.4	14.0	14.0	11.2	1.1	火水地輪。空風輪欠失。火輪部に損壊あり。
A 0985	422	N25 454号墓	(28.8)	−	−	(7.5)	9.3	12.0	−	−	−	−	(13.3)	15.0	(5.1)	2.5	13.2	5.2	15.1	14.9	10.9	1.7	火水地輪。空風輪欠失。火輪部に損壊あり。
A 0986	441	M25	(35.0)	−	−	(8.8)	11.9	(14.3)	−	−	−	−	12.8	14.9	4.2	1.7	14.2	7.4	13.7	12.2	0	0	火水地輪。火輪・地輪の一部に欠損あり。
A 0987	500	M23	(29.5)	−	−	(6.6)	10.4	(12.5)	−	−	−	−	−	(14.1)	(3.0)	(2.0)	14.4	6.1	(15.4)	(15.5)	11.6	2.2	火水地輪。火・水輪及び地輪に欠損あり。
A 0988	545	K21 365号墓	(22.6)	−	−	(6.1)	8.9	(7.6)	−	−	−	−	(11.1)	12.7	(3.3)	1.7	12.6	4.8	12.7	(11.6)	7.2	0.7	火水地輪。火・地輪一部欠損。
A 0989	596	L17 208号墓	(34.3)	−	−	(6.3)	12.0	16.0	−	−	−	−	(12.5)	14.3	(3.6)	2.8	13.9	6.3	14.0	14.6	9.5	2.2	火水地輪のみ残存。火輪部に欠損あり。
A 0990	599	K17 285号墓	(34.1)	−	−	(9.0)	15.4	9.7	−	−	−	−	−	−	−	−	(15.3)	(9.1)	(12.4)	(11.9)	0	0	火水地輪のみ。火・水・地輪に大略欠損あり。
A 0991	652 653	L13 138号墓	(27.4)	−	−	(5.5)	8.1	13.8	−	−	−	−	−	(12.1)	(4.3)	1.7	12.3	4.2	12.6	12.4	0	0	652火水輪・653地輪でセット関係。空風輪欠失・火輪に損壊。
A 0992	693	P13 64号墓 東斜面	(24.9)	−	−	(4.6)	11.5	8.8	−	−	−	−	−	−	−	−	(14.8)	7.6	15.6	(15.2)	11.8	1.3	(火)水地輪。空風輪欠・火輪大半損壊・水輪一部欠損。
A 0993	725	Q12 40号墓	(21.7)	−	−	(6.8)	5.3	(9.6)	−	−	−	−	−	11.9	(3.6)	(1.7)	(11.8)	2.7	(11.9)	(11.2)	0	0	火水地輪。空風輪欠。火・水輪及び地輪に損壊あり。
A 0994	794	L16 196号墓と199号墓の間	(27.8)	−	−	7.8	9.2	(10.8)	−	−	−	9.6	−	(15.0)	−	(1.9)	13.0	4.9	(14.8)	(14.4)	0	0	火水地輪。火・地輪欠損あり。
A 0995	832 833	O15 59号墓	(24.0)	−	−	(6.2)	7.4	10.4	−	−	−	−	(12.2)	12.4	4.2	2.2	11.6	4.8	13.2	12.2	9.6	1.4	832火水輪・833地輪でセット。空風輪欠。火輪一部欠損。
A 0996	839	Q12 39号墓 周辺	(21.7)	−	−	(6.5)	7.2	8.0	−	−	−	−	11.4	11.2	2.6	1.6	11.6	4.2	13.0	11.8	0	0	火水地輪。火輪一部欠。
A 0997	859	S13	(27.0)	−	−	(7.0)	11.2	8.8	−	−	−	−	(12.0)	(12.0)	(3.2)	(1.6)	11.2	6.3	(10.9)	10.8	9.2	1.2	火水地輪。火輪地輪一部欠。
A 0998	897	N26	(28.4)	−	−	(7.4)	9.4	11.6	−	−	−	−	(13.6)	(13.4)	(4.5)	(1.6)	12.9	4.9	(12.4)	(13.4)	0	0	火水地輪。空風輪欠失。火輪及び地輪に欠損あり。第56図
A 0999	903	O26 460号墓	(25.9)	−	−	(7.3)	8.8	9.8	−	−	−	(8.0)	(14.2)	(14.0)	(3.9)	2.0	12.3	5.6	14.4	14.4	0	0	火水地輪。火輪一部欠。
A 1000	941	J20 328号墓	(35.6)	−	−	(10.8)	9.6	15.2	−	−	−	−	13.5	13.5	(2.6)	−	14.2	4.2	13.4	12.8	0	0	板状一石五輪。厚9.2 ～ 9.6cm。空風輪欠失。火輪欠損。区画配石に転用さる。第56図
A 1001	994	Q14	(32.0)	−	−	(7.6)	9.4	15.0	−	−	−	−	(14.6)	(14.6)	−	−	15.6	6.0	15.2	15.0	0	0	火水地輪。火・地輪欠損あり。第56図
A 1002	997	O15 53号墓	(28.6)	−	−	(7.2)	12.0	9.4	−	−	−	−	−	(13.8)	−	−	13.2	5.0	13.2	12.0	0	0	火水地輪。火・地輪欠損あり。
A 1003	1001	O15 57号墓	(31.8)	−	−	(7.8)	9.8	14.2	−	−	−	−	(13.2)	(13.8)	(4.4)	(1.6)	13.0	6.0	14.6	15.4	0	0	火水地輪。空風輪欠失、火輪欠損あり。第56図
A 1004	178	N14 78号墓	(20.9)	−	5.1	7.7	(8.1)	−	−	−	11.7	8.9	(12.7)	(14.1)	(4.3)	(1.9)	12.5	−	−	−	−	−	風火水輪。空・地輪欠。風・火輪及び水輪欠損あり。
A 1005	224	M15	(20.8)	−	(5.6)	6.2	(9.0)	−	−	−	−	9.0	(16.0)	(16.4)	(4.1)	(3.5)	12.6	−	−	−	−	−	風火水輪残存、風・水輪欠損。第56図
A 1006	705	P12 65号墓	(20.2)	−	(4.5)	5.8	9.9	−	−	−	(10.7)	7.9	−	(12.9)	−	(1.5)	(11.6)	6.3	−	−	−	−	風火水輪。空・地輪欠。風・火輪及び水輪に欠損あり。
A 1007	790	K16 263号墓 南西側 石組の外側	(18.5)	−	(5.5)	6.6	(6.4)	−	−	−	(10.3)	(10.9)	−	15.5	(3.6)	2.2	(13.7)	−	−	−	−	−	風火水輪縦方向に半壊。風輪及び水輪部に損壊顕著。空輪と地輪部を欠失す。
A 1008	889	M15	(19.7)	−	3.9	5.4	(10.1)	−	−	−	10.7	9.8	13.0	14.9	3.4	1.2	14.3	4.0	−	−	−	−	風火水輪縦方向に半壊。空輪と地輪を欠。水輪底部欠失。
A 1009	368	K14 149号墓	(16.6)	−	−	(7.4)	9.2	−	−	−	−	(7.8)	−	(12.3)	(3.1)	(2.5)	12.6	4.8	−	−	−	−	火水輪のみ残存。欠損あり。
A 1010	406	N25 445号墓	(17.3)	−	−	(5.9)	11.4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	14.0	6.0	−	−	−	−	火水輪のみ残存、縦方向に半壊。
A 1011	424	N25 454号墓	(16.2)	−	−	8.6	(7.6)	−	−	−	−	7.5	−	15.9	(5.0)	(2.9)	15.1	−	−	−	−	−	火水輪のみ残存。水輪半壊。
A 1012	722	P11 111号墓	(14.8)	−	−	(5.8)	9.0	−	−	−	−	−	−	(15.1)	−	(1.4)	13.3	5.6	−	−	−	−	火水輪のみ残存。欠損あり。
A 1013	890	M16	(12.9)	−	−	−	(4.3)	8.6	−	−	−	−	−	−	−	−	(9.8)	−	12.1	(12.2)	8.5	0.4	水地輪のみ残存。
一石五輪塔平均値			47.4	11.5	5.1	7.3	9.6	11.8	10.4	3.8	11.8	9.2	13.1	14.2	4.6	2.1	13.7	5.5	14.5	14	10.6	1.5	（　）内数値は除外し算出。

注意：括弧内の数字は欠失等による不確定数値。−は計測不可能な場合を示す。＊印は柄穴及び抉り穴の数値である。

第 26 表　A 地区一石五輪塔計測値一覧（第 56 図）

報告番号	採取番号	遺物名称	出土地区	各部位計測法量（cm） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	部位名称は凡例模式図参照 l	m	n	o	p	q	r	s	t	備考
B1051	B62	空輪？	N29	—	(8.9)	—	—	—	(9.8)	—	—	—	—	—										損壊磨耗顕著、天地不詳。
B1052	B13	空風輪	O28	(15.9)	(12.1)	(3.8)	(0.4)	(3.4)	(11.3)	(9.5)	(7.2)	—	—	—										縦方向に半壊、風輪下部欠損。
B1053	B14	空風輪	O28	(34.4)	(19.3)	(15.1)	(1.3)	(10.3)	(19.4)	(16.1)	(21.6)	(16.7)	(9.1)	(3.5)										縦方向に半壊、欠損あり。
B1054	B40	空(風)輪	M29 462号墓 SK610	—	(10.0)	—	—	—	10.3	8.1	—	—	—	—										墳丘B大甕内出土。風輪部欠失。
B1055	B43	空(風)輪	N30	(12.2)	—	—	—	—	(12.7)	(11.2)	—	—	—	—										風輪欠失、縦方向に半壊。
B1056	B43	(空)風輪	N30	(12.3)	(3.5)	8.8	—	—	(14.1)	(14.6)	16.5	(12.2)	7.1	4.2										空輪欠失、縦方向に半壊。
B1057	B60	空風輪	Q31	23.9	11.9	12.0	0.5	6.6	14.2	11.3	15.8	9.4	6.7	4.9										風輪部に枘あり。
B1058	B63	空(風)輪	J25	—	(7.8)	—	—	—	(9.8)	(8.2)	—	—	—	—										風輪欠、縦方向に2/3欠。
B1059	B75	空風輪	M28	(18.2)	(12.3)	(5.9)	0.4	(5.5)	13.8	12.1	17.6	(15.6)	—	—										空輪先端欠・風輪の下部は半壊状態。
B1060	B77	空風輪	M28	22.9	10.8	12.1	0.3	6.5	13.3	10.9	15.8	10.7	6.4	5.3										風輪部に枘あり。
B1061	B89	空風輪	M26 461号墓周溝内	(13.1)	(6.8)	(6.3)	(0.8)	(5.5)	(9.9)	(8.7)	(11.4)	(9.4)	—	—										墳丘A周溝内出土。縦方向に半壊
空風輪各部位法量の平均値				23.4	11.4	11.0	0.4	6.6	12.9	10.6	16.4	10.1	6.7	4.8	注意）かっこ内の数値は除外して計算（以下同じ）。									

報告番号	採取番号	遺物名称	出土地区	各部位計測法量（cm） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	部位名称は凡例模式図参照 l	m	n	o	p	q	r	s	t	備考
B1062	B17	火輪	N28	—	—	5.2	0.4	6.0	0.6	—	—	—	20.0	17.9										上部欠損。
B1063	B69	火輪	N27	11.4	7.8	3.1	0.5	(6.0)	0.7	—	10.3	—	(20.0)	(19.2)										欠損あり。
火輪各部位法量の平均値				11.4	7.8	4.2	0.5	6.0	0.7	—	10.3	—	20.0	17.9	上記に同じ。									

報告番号	採取番号	遺物名称	出土地区	各部位計測法量（cm） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	部位名称は凡例模式図参照 l	m	n	o	p	q	r	s	t	備考
B1064	B 1	水輪	N27	17.2	9.4	14.6	15.3	21.2	—	—	—	—	—	—										
B1065	B37	水輪	K25	14.8	8.5	16.1	14.1	20.8	—	—	—	—	—	—										
B1066	B80	水輪	M28	(13.3)	—	—	—	(14.5)	—	—	—	—	—	—										半壊実測不可。
水輪各部位法量の平均値				16.0	9.0	15.4	14.7	21.0	—	—	—	—	—	—	上記に同じ。									

報告番号	採取番号	遺物名称	出土地区	各部位計測法量（cm） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	部位名称は凡例模式図参照 l	m	n	o	p	q	r	s	t	備考
B1067	B21	地輪	M28	16.2	(9.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	—										縦方向に半壊、上部欠損。
B1068	B29	地輪	M28	(17.1)	(8.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	—										半壊
B1069	B39	地輪	M29 462号墓 SK610	(19.0)	(7.5)	—	—	—	—	—	—	—	—	—										墳丘B大甕内出土。縦方向に半壊
B1070	B41	地輪	L30	(24.0)	(8.5)	—	—	—	—	—	—	—	—	—										半壊。
B1071	B66	地輪	N27	19.0	(9.7)	—	—	—	—	—	—	—	—	—										上部欠損。
B1072	B80	地輪	M28	(17.3)	(10.3)	—	—	—	—	—	—	—	—	—										半壊。
地輪各部位法量の平均値				17.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	部位（b）に確定値なく算出不可。カッコ内数値の平均値は（9.0）cmになる。									

報告番号	採取番号	遺物名称	出土地区	各部位計測法量（cm） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	部位名称は凡例模式図参照 l	m	n	o	p	q	r	s	t	備考
B1073	B6	空風火輪	O27	(30.6)	(14.2)	7.0	9.4	4.8	6.0	3.3	18.4	—	11.7	—	0.3	2.2	16.0	5.7	12.0	14.0	5.0	5.6	(5.0)	空輪、火輪笠部欠損。枘あり。
B1074	B7	空風火輪	N28	(25.4)	(8.8)	5.6	11.0	(3.4)	8.0	(3.6)	(17.5)	—	11.5	6.6	0.3	1.7	14.4	3.6	11.5	(12.5)	4.6	—	—	空輪上部・火輪笠部欠損、火輪の底部に枘あり。
B1075	B9	空風火輪	N28	34.9	18.5	5.5	10.9	*4.6	*8.4	*5.0	19.4	(19.2)	13.2	7.1	0.2	2.7	14.9	5.1	12.2	15.0	5.9	7.6	7.2	火輪縦方向に半壊一部欠損、底部枘穴あり。
B1076	B38	(空)風火輪	K25	(17.6)	(0.8)	6.4	10.4	0	0	0	17.2	18.4	10.6	6.6	0.4	3.0	14.4	5.3	10.0	—	—	—	—	空輪欠失、火輪底部に枘なし。
B1077	B48	空風火輪	N31	(32.7)	(15.4)	5.8	11.5	0	0	0	19.2	20.2	11.0	7.0	0.4	2.4	14.2	4.8	12.0	13.8	4.6	(6.2)	(6.8)	空輪先端欠失。
B1078	B65	空風火輪	N27	(31.8)	(12.4)	5.8	13.6	0	0	0	18.0	—	12.8	8.2	0.6	3.0	16.8	4.4	14.2	15.6	5.0	—	—	空輪上部欠、火輪笠部欠損。
B1079	B72	空風火輪	M28	(34.1)	(14.6)	5.3	14.2	4.1	6.8	4.9	17.2	17.0	11.2	7.8	0.3	2.4	13.6	4.2	11.0	13.2	6.8	(6.0)	(3.6)	空輪欠、火輪の底部に枘
B1080	B75	(空風)火輪	M28	(15.8)	—	—	13.4	0	0	0	20.7	(20.0)	12.0	(7.6)	(0.8)	3.6	—	—	—	—	—	—	—	空風輪欠失。
B1081	B81	(空)風火輪	M28	(17.7)	—	7.5	10.2	0	0	0	(10.8)	—	11.8	6.2	0.3	2.0	(14.2)	6.5	(10.0)	—	—	—	—	空輪部欠失。風・火輪に欠損。
空風火輪一石法量の平均値				34.9	18.5	6.1	11.6	4.5	6.9	4.1	18.6	18.5	11.8	7.1	0.4	2.6	16.3	5.0	11.8	14.3	5.3	6.6	7.2	

第 27 表　B地区石塔計測値一覧

報告番号	採取番号	遺物名称	出土地区	各部位計測法量（cm） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	部位名称は凡例模式図参照 l	m	n	o	p	q	r	s	t	備考
B1082	B3	空風(火)輪	N27	(15.0)	(9.9)	(5.1)	0.7	(4.4)	11.0	9.8	11.9	10.5	—	—										火輪欠失。
B1083	B5	空風(火)輪	O27	(17.8)	(11.5)	(6.3)	0.5	(5.8)	14.6	12.5	(16.3)	(12.8)	—	—										縦半壊、火輪欠失。
B1084	B8	空風(火)輪	N28	(22.8)	14.7	(8.1)	0.7	(7.4)	12.8	(11.2)	(11.6)	(7.5)	—	—										縦半壊、火輪欠失、他破片1点計測不可。
B1085	B12	空風(火)輪	O28 SK606	(16.5)	(9.1)	(7.4)	(0.6)	(6.8)	(12.4)	(11.1)	(14.2)	(12.9)	—	—										縦半壊、火輪欠失。
B1086	B19	空風(火)輪	M27	(17.1)	(10.9)	(5.0)	0.4	(4.6)	12.4	10.4	13.5	(12.1)	—	—										三輪一石、火輪欠失。
B1087	B25	空風(火)輪	M28	(14.8)	(11.0)	(3.8)	(0.8)	(3.0)	10.8	(10.6)	(11.7)	(10.0)	—	—										縦半壊、火輪は欠失か。
B1088	B26	空風(火)輪	M28	(15.1)	(10.0)	(5.1)	(0.6)	(4.5)	12.8	10.8	(12.8)	(9.0)	—	—										縦破損、火輪は欠失か、他破片２点計測不可。
B1089	B27	空風(火)輪	M28	(17.3)	11.5	4.5	0.4	4.1	9.5	8.0	10.5	7.4	—	—										火輪欠失、一石五輪の可能性も
B1090	B28	空風(火)輪	M28	(15.3)	(9.2)	(6.1)	0.4	(5.7)	10.8	8.9	12.5	8.6	—	—										火輪欠、一石造りか一石五輪塔かは不詳。
B1091	B30	空風(火)輪	M28	(15.2)	(8.5)	(6.7)	(0.4)	(6.3)	(9.5)	(8.7)	(10.9)	(7.6)	—	—										半壊、火輪欠失。
B1092	B34	(空)風(火)輪	L26	—	—	(9.0)	(0.2)	(8.8)	—	—	(14.3)	(10.1)	—	—										空・火輪欠失。
B1093	B49	空風(火)輪	N31	(16.1)	(9.4)	(6.7)	0.8	(5.9)	(12.3)	11.0	13.0	(11.4)	—	—										火輪欠失。
B1094	B50	空風(火)輪	N31	(15.3)	(9.6)	(4.5)	0.6	(3.9)	11.2	9.5	11.9	(9.2)	—	—										火輪欠失。
B1095	B51	空風(火)輪	N31	(15.8)	(8.8)	(7.0)	0.7	(6.3)	10.5	9.5	11.4	(10.4)	—	—										火輪欠失。
B1096	B52	空風(火)輪	N31	(13.8)	(8.5)	(5.3)	0.7	(4.6)	(10.6)	9.9	12.0	(11.6)	—	—										火輪欠失。
B1097	B53	空風(火)輪	O29 SK612	(22.7)	14.7	(8.0)	0.7	(7.3)	13.6	11.9	15.1	13.1	—	—										火輪欠失。
B1098	B55	空風(火)輪	O29 SK612	(14.8)	(9.1)	(5.7)	0.5	(5.2)	11.3	9.6	11.8	(9.8)	—	—										火輪欠失。
B1099	B56	空風(火)輪	O29 SK612	(15.7)	(7.9)	(6.5)	1.0	(5.5)	(13.1)	(11.7)	(14.2)	(10.8)	—	—										火輪欠、縦方向に半壊。
B1100	B57	(空風)火輪	O29 SK612	(8.4)	(2.5)	(1.0)	0.2	(5.9)	(4.7)	—	(13.2)	—	(19.4)	—										空風輪欠失。
B1101	B59	空風(火)輪	P28	(16.3)	(9.7)	(5.8)	0.6	(5.2)	11.1	9.7	12.3	(10.0)	—	—										火輪欠失。
B1102	B70	空風(火)輪	N27	(17.4)	(9.9)	5.1	0.5	4.6	11.3	10.0	12.4	9.3	—	—										火輪欠失。
空風(火)輪一石の平均値				—	13.6	4.8	0.6	4.4	11.7	10.1	12.4	9.8	—	—	部位（a）に確定値なく算出不可。カッコ内数値の平均は（16.2）cmになる。									

報告番号	採取番号	遺物名称	出土地区	各部位計測法量（cm） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	部位名称は凡例模式図参照 l	m	n	o	p	q	r	s	t	備考
B1103	B15	水地輪	N28	(20.9	9.7	11.2	—	—	—	—	(13.7)	12.1	5.4	8.8	15.1	(13.5)	—	—						損壊顕著、一石五輪塔の可能性も？
B1104	B20	水地輪	M28	(12.7)	10.6	(2.1)	—	—	—	—	—	12.9	—	9.7	15.9	15.4	12.6	1.7						水輪大半欠損。
B1105	B23	水地輪	M28	28.2	14.0	14.2	3.8	7.4	4.6	15.0	19.4	14.2	8.3	12.8	19.0	18.8	14.3	3.8						水輪上部に枘造り出し。
B1106	B44	水地輪	N30 SK625	26.0	13.8	12.2	3.5	7.6	4.6	14.0	18.4	14.4	6.8	12.2	18.0	17.0	14.0	2.0						水輪上部枘あり。
B1107	B61	水地輪	O33	27.7	15.2	12.5	0	0	0	14.2	19.6	14.0	6.8	12.9	19.3	18.7	13.4	1.7						水輪上部に11.3×1.3の浅い窪みあり。
B1108	B71	水地輪	N27	27.9	15.3	12.6	*5.0	*9.2	*5.2	13.2	18.8	15.2	7.3	14.1	20.2	20.0	—	5.0						磨耗顕著、水輪上部に枘穴。
B1109	B73	水地輪	M28	24.2	12.3	11.8	2.4	7.2	3.8	13.0	18.6	15.0	6.4	11.1	19.0	18.4	12.8	2.5						水輪上部枘あり。
B1110	B84	水地輪	N30	(24.5)	13.0	11.5	*4.0	*8.2	?	(12.5)	(16.4)	14.2	6.7	12.1	17.4	17.1	12.0	2.9						縦斜め方向に半壊。
水地輪一石法量の平均値				26.8	13.0	12.3	3.2 *4.5	7.4 *8.7	4.3 *5.2	13.9	19.0	14.0	6.8	11.7	18.0	17.9	13.2	2.8	＊印の数値は枘穴及び抉り穴の平均値である。					

第 27 表　B 地区石塔計測値一覧

報告番号	採取番号	遺物名称	出土地区	各部位計測法量 （cm）										部位名称は凡例模式図参照									備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	
B1111	B 4	一石五輪塔	N27	(28.6)	—	—	7.6	9.0	12.0	—	—	—	(10.8)	(16.4)	(16.0)	5.2	1.6	15.2	5.4	16.4	(16.0)	(12.0)	2.0	火水地輪のみ,空風輪は欠失す。火・地輪の一部に欠損あり。
B1112	B10	一石五輪塔	N28	(42.6)	(9.4)	5.2	8.2	8.2	11.6	12.1	4.4	13.3	10.8	(16.8)	16.8	5.8	2.8	15.3	5.3	16.2	(15.4)	0	0	空輪上端・地輪一部欠損あり。
B1113	B16	一石五輪塔	N28	(46.7)	(13.0)	5.2	7.7	7.8	13.0	11.0	3.8	12.4	10.0	(16.4)	15.6	5.7	3.6	13.5	5.2	16.0	15.0	12.0	1.4	空輪上端（復元5.2×5.0）及び火輪笠部一部欠損あり。
B1114	B18	一石五輪塔	M28	(24.4)	—	—	(5.6)	8.4	9.8	—	—	—	(6.4)	(11.2)	(11.8)	3.8	1.6	11.4	4.9	11.6	10.3	6.0	0.8	火・水・地輪のみ、空風輪欠失。
B1115	B22	一石五輪塔	M28	(27.3)	—	—	(7.6)	11.4	8.3	—	—	—	—	(12.4)	15.0	(3.6)	1.0	13.4	6.9	13.6	13.6	8.2	1.7	火・水・地輪のみ、空風輪欠失。
B1116	B24	一石五輪塔	M28	(25.5)	—	5.1	6.1	14.3	—	—	—	(10.5)	11.4	(14.6)	17.4	(3.4)	2.1	(16.0)	8.8	—	—	—	—	空・地輪欠失。風・火・水輪のみ、一部損壊あり。
B1117	B27	一石五輪塔	M28	(17.6)	11.8	4.7	(1.1)	—	—	9.6	3.7	10.5	(7.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空風・火輪のみ、火輪の一部・水・地輪欠。空輪先端4.3×5.4cm残
B1118	B32	一石五輪塔	M26	(23.1)	—	—	(6.6)	8.5	8.0	—	—	—	—	—	—	—	—	10.4	5.0	11.5	11.8	0	0	空風輪欠、火・水・地輪のみ（火輪損壊）。磨耗いちじるしい。
B1119	B34	一石五輪塔	L26	(40.3)	(8.2)	4.6	8.3	10.3	8.9	(10.9)	3.1	(11.6)	(9.0)	(12.8)	(15.1)	(4.2)	(1.l5)	13.7	4.7	14.0	13.7	10.0	0.9	全体縦方向に半壊。空輪の先端欠失・風火輪一部欠損。
B1120	B36	一石五輪塔	K25	(22.9)	—	4.5	6.0	(12.4)	—	—	—	11.0	9.9	—	15.0	(2.9)	1.6	(14.5)	(7.1)	—	—	—	—	縦方向に半壊。風・火・水輪のみ、空・地輪を欠、火・水輪損壊
B1121	B43	一石五輪塔	N30 SK625	(11.0)	—	—	—	—	9.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	13.0	12.0	9.6	1.8	空〜水輪欠、水・地輪のみ残存。
B1122	B45	一石五輪塔	N30 SK625	(26.9)	—	—	(6.5)	11.4	9.0	—	—	—	(10.8)	—	(15.6)	(3.4)	(1.6)	14.8	7.2	14.3	13.4	9.4	1.8	空風輪欠失、火・水・地輪のみ、但し欠損多し。
B1123	B46	一石五輪塔	N30 SK625	(27.0)	—	—	(7.0)	7.6	12.4	—	—	—	—	(13.8)	(14.6)	(5.0)	(1.4)	13.4	4.6	15.8	15.2	10.5	2.7	空風輪欠、火・水・地輪のみ。火輪損壊。
B1124	B47	一石五輪塔	N30 SK625	(27.0)	—	—	(6.0)	11.6	9.4	—	—	—	(11.0)	—	(16.6)	3.8	2.6	15.0	7.5	15.2	15.4	11.6	2.2	空風輪欠、火・水・地輪のみ。火輪一部欠損。
B1125	B54	一石五輪塔	O29	(13.0)	8.6	4.4	—	—	—	8.7	2.2	9.6	(6.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空風・火輪のみ。但し火輪一部を欠失す。
B1126	B55	一石五輪塔	O29	(14.0)	—	—	(5.9)	(8.1)	—	—	—	—	(6.5)	—	(12.1)	(3.9)	(2.1)	14.2	3.7	—	—	—	—	火・水輪のみ、空風・地輪欠。火・水輪半壊。
B1127	B58	一石五輪塔	O29 SK612	(26.2)	—	—	(7.6)	8.0	10.6	—	—	—	—	(16.8)	(16.2)	4.5	1.8	13.8	5.2	14.4	13.4	9.8	2.0	空風輪欠、火・水・地輪のみ。火輪に一部欠損あり。地輪直下に根石あり。
B1128	B63	一石五輪塔	J25	(15.0)	(10.6)	4.4	—	—	—	9.6	2.5	10.4	(8.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空風・火輪のみ、火〜地輪欠。空輪上端欠失。
B1129	B64	一石五輪塔	N27	(30.4)	—	—	(8.6)	12.8	9.0	—	—	—	—	—	(15.8)	(4.4)	(1.0)	14.9	7.5	15.7	14.4	11.2	1.0	空風輪欠、火・水・地輪のみ。火輪欠損あり。
B1130	B67	一石五輪塔	N27	(29.2)	—	—	(8.0)	9.2	12.0	—	—	—	—	(15.2)	15.0	6.2	2.0	14.0	5.4	14.8	14.4	11.2	2.6	空風輪欠、火・水・地輪のみ。火輪欠損あり。
B1131	B76	一石五輪塔	M28	(34.8)	(11.6)	3.8	7.6	10.2	(1.6)	10.6	3.0	11.0	8.8	(12.4)	(13.0)	3.6	1.3	13.0	6.0	—	—	—	—	空風・火・水輪のみ、地輪欠。空輪・水輪に一部欠損あり。
B1132	B78	一石五輪塔	M28	(41.2)	(9.79	4.5	7.0	10.0	10.0	8.3	2.6	10.3	8.0	(12.8)	12.7	4.0	2.8	11.6	5.2	12.7	13.2	—	(1.0)	空・火輪一部欠損。略完存。第56図
B1133	B79	一石五輪塔	M28	(13.2)	(9.4)	3.8	—	—	—	9.4	2.0	10.7	(7.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空風・火輪のみ、火輪以下欠。空輪欠損あり。
B1134	B83	一石五輪塔	N30	(45.8)	(10.9)	5.1	7.2	9.0	13.6	9.6	3.1	11.2	7.7	(13.2)	(12.7)	(3.8)	2.2	12.9	5.0	13.2	13.4	0	0	略完存。空・火輪一部欠損あり。第56図
B1135	B85	一石五輪塔	N30	(31.8)	—	—	(10.2)	13.0	8.6	—	—	—	—	(15.8)	17.0	5.8	1.7	16.0	7.3	15.4	14.4	0	0	空風輪欠失。火輪欠損あり。地輪はやや薄く、板状に。
B1136	B86	一石五輪塔	N30	(27.0)	—	(7.3)	8.6	11.1	(5.2)	—	—	(12.0)	(11.0)	—	(16.0)	—	—	(16.8)	—	—	—	—	—	空・地輪欠失。全体に破損著しい。
B1137	B87	一石五輪塔	O28 463号墓	(9.6)	—	—	—	(2.0)	7.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	12.9	11.4	8.6	2.2	墳丘C上面出土。空風〜水輪欠、水・地輪のみ磨耗顕著。
一石五輪塔各法量の平均値				—	10.2	4.6	7.4	10.1	10.2	9.9	3.0	12.0	9.5	—	15.6	4.8	1.8	13.7	5.8	14.3	13.4	9.8	1.8	

第 27 表　B 地区石塔計測値一覧（第 56 図）

報告番号	採取番号	遺物名称	出土地区	各部位計測法量（cm）											部位名称は凡例模式図参照									備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	
B1138	B11	相輪	O28 SK606	(10.2)	—	—	(1.7)	3.0	(5.5)	(0.6)	—	—	—	—	9.7	10.6	8.7	10.7	7.3					大半損壊欠失。
B1139	B68	相輪	N27	(34.7)	—	—	(21.2)	4.0	(6.7)	(2.8)	—	—	—	—	10.4	12.3	8.8	(11.4)	5.4					九輪（上部欠）・請花・伏鉢（一部欠）のみ残存。第52図
B1140	B88	相輪	M26 461号墓周溝内	(24.4)	(8.4)	4.4	(11.6)	—	—	—	9.8	8.4	11.9	9.0	—	—	—	—	—					墳丘A周溝底部出土。下部に損壊あり欠失。第52図
相輪各部位法量の平均値				39.7	7.7	4.7	14.2	4.2	8.4	5.0	9.9	8.3	11.3	8.4	9.6	12.2	9.0	11.4	6.3	A地区の相輪も入れた平均値を算出。				

報告番号	採取番号	遺物名称	出土地区	各部位計測法量（cm）											部位名称は凡例模式図参照									備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	
B1141	B33	屋根部	M26	(16.9)	—	3.0	(23.2)	—	14.8	17.8	(6.6)	(3.4)												上段形・隅飾損壊、磨耗顕著。
B1142	B42	屋根部	M30	25.5	(13.7)	8.8	(38.4)	(13.0)	26.0	35.0	(10.4)	(11.8)												大型品。全体に欠損多し復元計測。底部に径20.8、深さ4.4cmの堀り窪みあり。第52図
B1143	B74	屋根部	M28	24.6	8.0	9.6	29.6	14.6	21.4	29.9	6.8	6.4												大型。欠損・剥離あり。第52図
B1144	B90	屋根部	L30 SK619	(27.0)	18.8	8.2	—	—	—	—	—	—												体部分欠失。隅飾り残存。
屋根部各部位法量の平均値				23.0	12.5	7.4	28.9	11.4	19.0	25.9	6.8	7.2	A地区の屋根部も入れた平均値である。											

注意：　括弧内は欠失等による不確定数値。ーは計測・算出不可を示す。また、＊印数値は柄穴及び抉り穴の平均値。

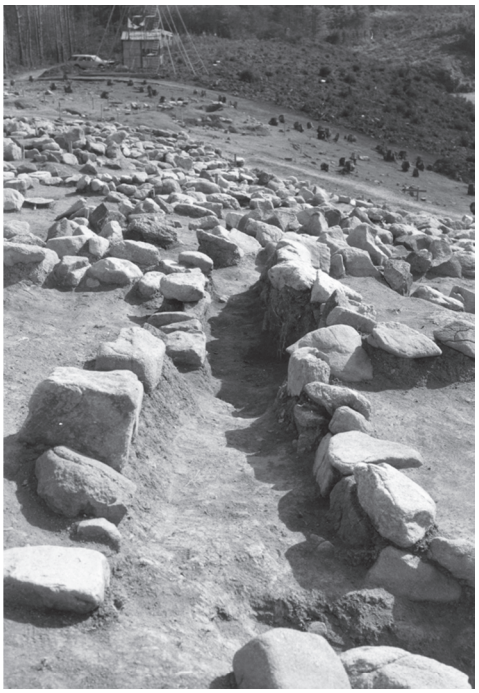
第 27 表　B 地区石塔計測値一覧第（第 52 図）

写真 第１図　Ａ地区・Ｂ地区の全体航空写真（昭和 60 年 11 月 段階）

写真 第２図 （上）Ａ地区調査前全景（南から）、（下）Ａ・Ｂ地区全景斜め写真

写真 第３図 （上）Ａ地区上層遺構全景（南東から）、（下）Ａ地区北尾根テラス状墓域

墓道（75号墓から62号墓方向）



墓道（283号墓から313号墓方向）

A地区山頂部（182号墓をのぞむ）

右183号墓、左182号墓

183号墓（南から）

13号墓

写真 第４図　A地区残存墓道の一部、山頂部 182 号墓付近、13 号墓ほか

58号墓

109号墓

129〜130号墓

208号墓（東から）

220号墓

351号墓（南から）

358号墓

405号墓

写真 第５図　Ａ地区 58 号墓、220 号墓、351 号墓ほか各種配石区画墓など

406号墓

411号墓

413号墓（東から）

414号墓

423号墓（南から）

425号墓

243号墓（西から）

243号墓（南から）

写真 第６図　A地区 406 号墓、413 号墓、423 号墓、243 号墓ほか

243号墓（方形周溝墓 南から）

SK531

SK532

SK558（南から）

SK568

461号墓（手前墳丘Ａ）と462号墓（墳丘Ｂ）

461号墓完掘後（東から）

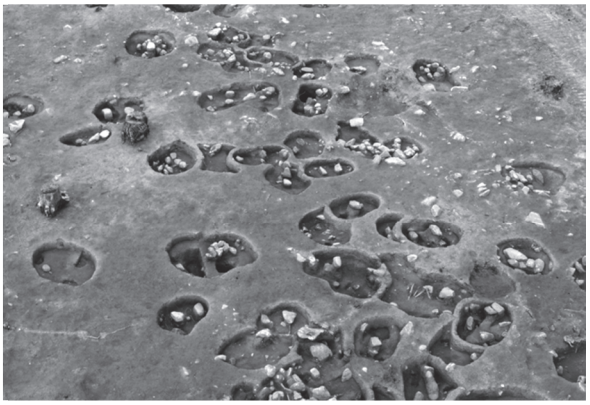
462号墓セクション（南東から）

写真 第７図　Ａ地区土壙 SK531、火葬施設 SK558、Ｂ地区墳丘Ａ・墳丘Ｂなど

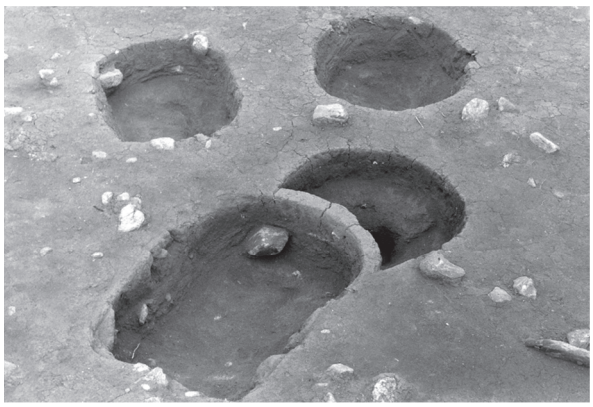
462号墓完掘後

463号墓（墳丘Ｃ）

463号墓完掘後



Ｂ地区土坑群



Ｂ地区 SK688～SK691

Ｂ地区からＣ地区をのぞむ

Ｃ地区 SK788

Ｃ地区 SK828

写真 第８図　Ｂ地区墳丘Ｃ、土坑群、Ｃ地区土坑 SK788、SK828 など

写真 第９図　Ｂ・Ｃ地区出土縄文遺物、Ａ地区出土転用蔵骨器など

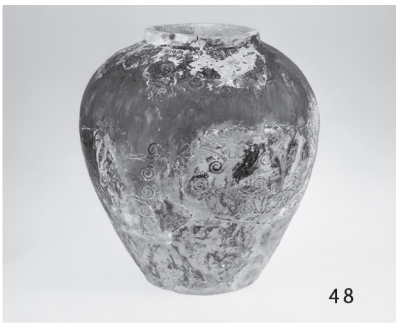
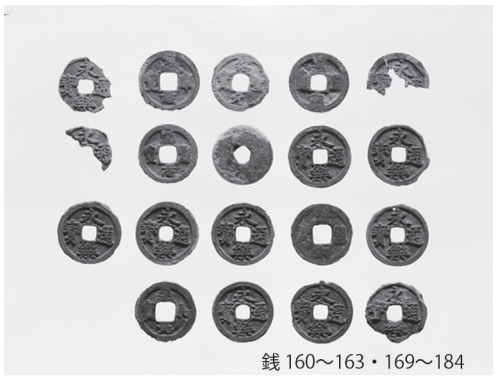
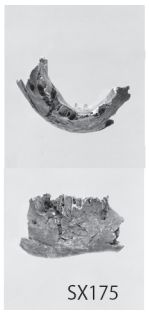


写真 第 10 図　A 地区出土山茶碗、常滑産甕、土師器鍋、皿類など

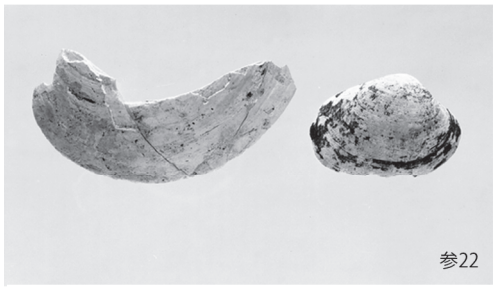
写真 第 11 図　A地区出土土師器皿類、和鏡、常滑大甕、刀子など


銭 160～163・169～184

SX193


SX175

参21


参22

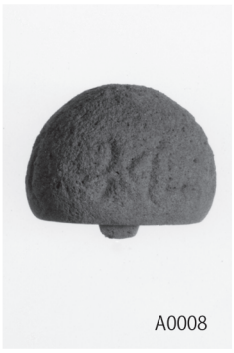
A0174

A0182

A0137

A0144

A0056


A0008

A0153

A0172

A0145

A0130

A0071

A0038

A0037

A0178

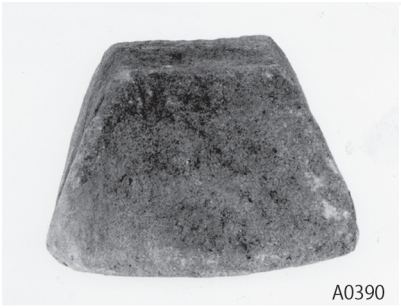
A0164

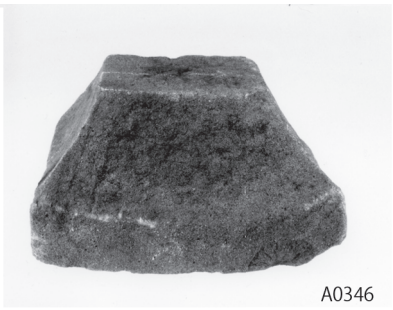
A0041

A0167

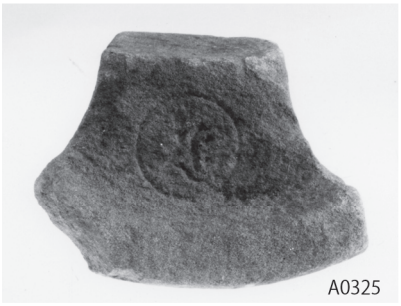
A0142

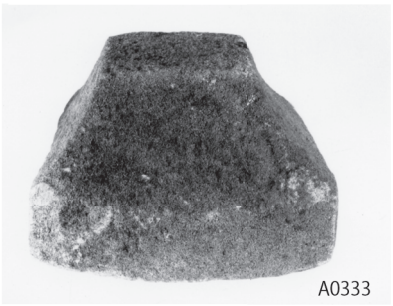
写真 第 12 図　古銭、人骨、石英、貝がら及び組立式五輪塔の空風輪各種

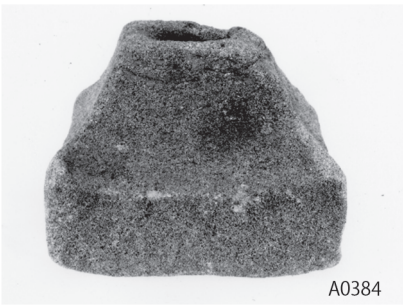

A0390

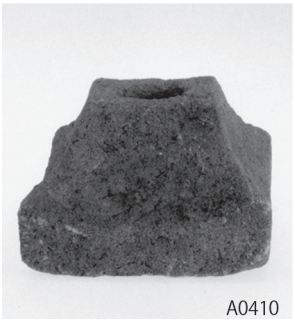

A0346

A0383


A0325


A0333

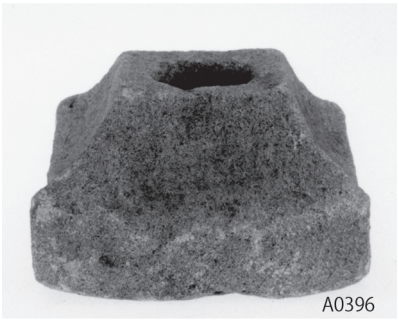

A0384

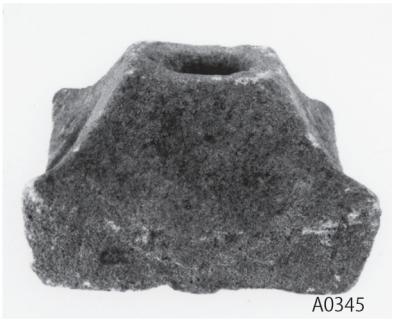

A0410

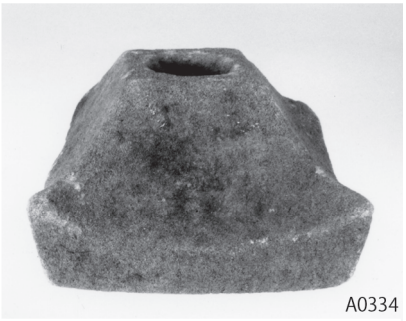
A0339

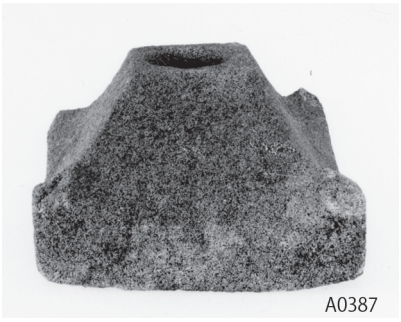
A0395

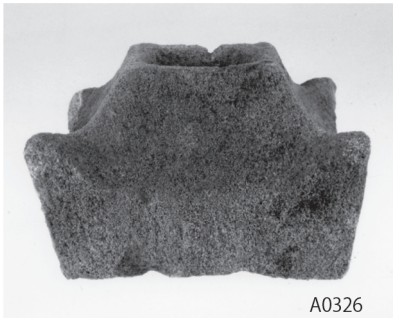
A0335


A0396


A0345


A0334


A0387


A0326

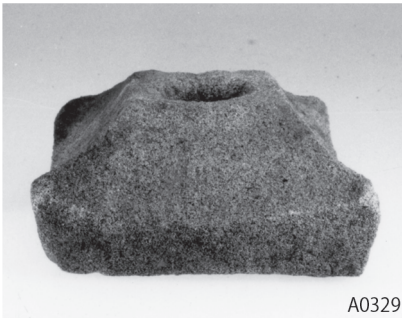
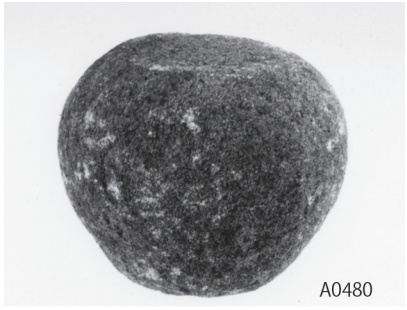

A0329

写真 第 13 図　組立式五輪塔の各種火輪

A0521

A0479


A0480

A0475

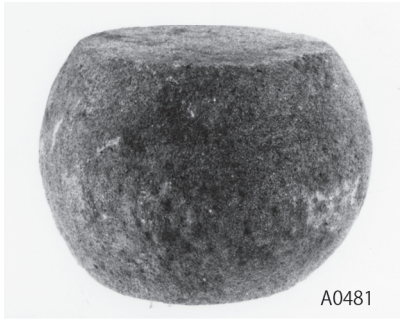
A0519

A0525

A0474

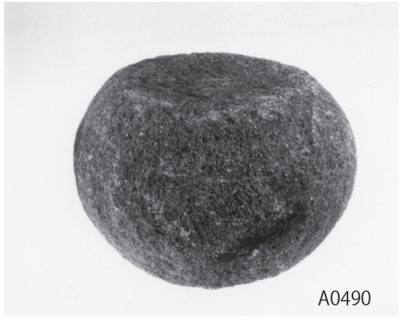
A0506

A0516


A0481

A0488

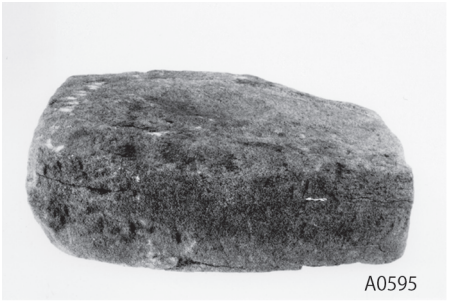
A0515


A0490

A0511

A0527

写真 第 14 図　組立式五輪塔の各種水輪


A0595

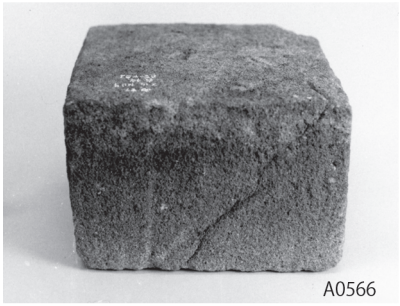
A0594

A0569

A0581

A0625

A0628

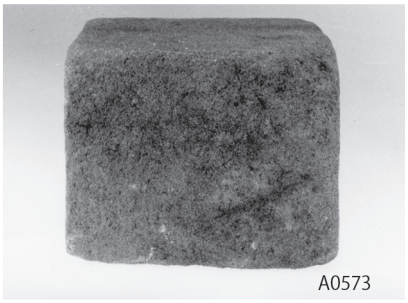

A0566

A0629

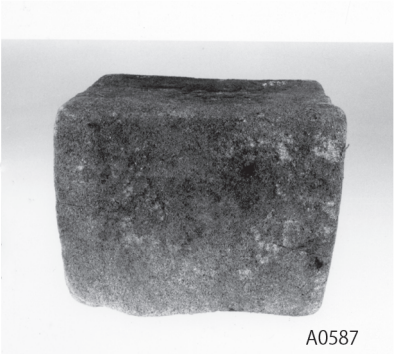
A0630

A0636

A0591


A0573

A0585


A0587

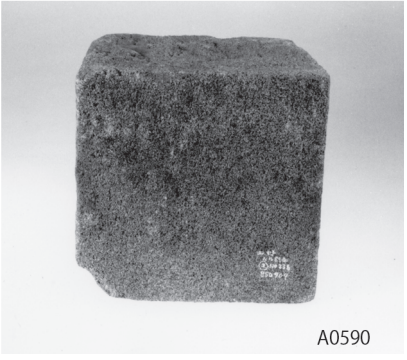

A0590

写真 第 15 図　組立式五輪塔の各種地輪

A0772

A0777

A0875

A0880

A0920

A0913

A0939

A0922

A0912

A0942

A0921

A0919

写真 第 16 図　三輪一石・二輪一石及び各種一石五輪塔

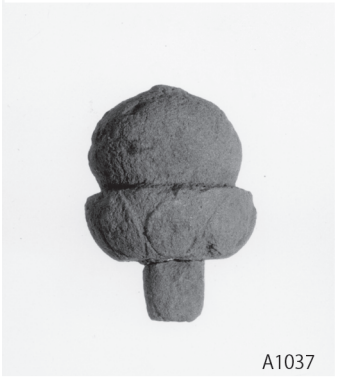
A1022

A1027

A1023

A1019

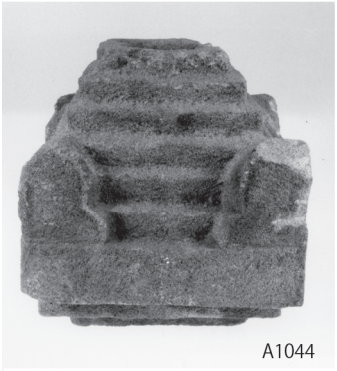
A1038


A1037

A1029

A1039

A1049


A1044

A1028

A1026

現地説明会風景（昭和60年11月16日午後）

発掘作業関係者の皆さん（昭和61年2月6日）

写真 第 17 図　宝篋印塔相輪部及び笠部、石仏、現地説明会風景ほか

報 告 書 抄 録

ふ り が な	よこおふんぼぐん（ちゅう・きんせいぼ）はっくつちょうさほうこく
書　　名	横尾墳墓群（中・近世墓）発掘調査報告
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	研究紀要
シリーズ番号	第18－2号
編 著 者	久保勝正、奥　義次、宮田勝功、田阪　仁
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター（河北 秀実、中川 明、大川 操、角正 淳子、楠 純子）
所 在 地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL：0596-52-1732
発 行 年 月 日	西暦　２００９年３月３１日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	市町村コード	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
横尾墳墓群（よこおふんぼぐん）（中・近世墓）	三重県（みえけん）松阪市（まつさかし）伊勢寺町（いせでらちょう）横尾（よこお）	24204 遺跡番号 a690	34° 33′ 26″	136° 28′ 23″	1985（昭和60）年 7月8日～ 1986（昭和61）年 2月27日	5,600㎡	近畿自動車道 久居-勢和間 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横尾墳墓群 （中・近世墓）	主に 中世墳墓群	鎌倉時代～ 室町時代	配石区画墓　460基 土坑　409基 墳丘　7基	経筒外容器 転用蔵骨器 土師器皿類 銭貨・刀子・釘 五輪塔各種 火葬人骨	縄文時代早期の深鉢のほか、石鏃なども出土。

要旨	12世紀後半以降に経塚が営まれ、遅くとも13世紀代には立派な火葬施設と方形周溝墓を含む火葬墓がＡ地区に造られた。14 ～ 15世紀代に墓域が拡大すると、火葬土坑は徐々にＢ・Ｃ地区へと移行し、火葬場と墓地が分離して範囲が広がると共に、16世紀代には石塔も林立するようになる。その間に納骨堂も出現、その劃期の一つは15世紀後半代と16世紀後半代にあった。ある時期には多数の遺体を一斉に荼毘に付した可能性も考えられる。最終的に、一部は近世初頭～前葉にまで続いた痕跡があり、納骨をするだけの霊山と化した可能性も一概には排除できない。

横尾墳墓群（中・近世墓）発掘調査報告

研究紀要第18－２号

2009（平成21）年３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　光出版印刷株式会社